下野郷館跡

－五間堀川河川改修事業に伴う発掘調査報告書－

例　言

1　本書は宮城県岩沼市下野郷地内に所在する下野郷館跡の調査報告書である。

2　本調査は、宮城県が計画する五間堀川河川改修事業に先立ち、記録保存を目的として実施されたものである。

3　現地調査は、仙台土木事務所からの委託を受けて、岩沼市教育委員会生涯学習課が 2012 年（平成 24）12 月3日～ 2017 年（平成 29）5月 19 日にかけて実施した。調査は岩沼市教育委員会生涯学習課が担当した。

4　出土品整理及び報告書作成については、2017 年（平成 29）7月4日～ 2018 年（平成 30）9月 21 日まで、岩沼市文化財整理室にて行った。

5　本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又隆央・永井三郎・武田裕光・太田昭夫が担当した。執筆担当については以下の通りである。

第Ⅰ章：武田　第Ⅱ章～第Ⅷ章：川又・永井・太田

第Ⅹ章　2：川又・永井・太田　第Ⅹ章　1、3～6：川又

また第Ⅸ章自然科学分析については、古代の森研究舎が分析・執筆した。

6　石製品の石材鑑定については、東北大学名誉教授　蟹澤 聰史氏に御協力・御教示を賜った。

7　発掘調査及び整理に際し、次の諸氏･諸機関より御協力･御教示を賜った。記して感謝申し上げます。（五十音順・敬称略）

秋本　雅彦、浅野　晴樹、飯村　均、石黒　伸一朗、石橋　宏、岡田　清一、押木　弘己、菅野　崇之、菅野　智則、熊谷　満、後藤　光亀、小山　美紀、今野　賀章、佐々木　健策、佐藤　洋、斎木　秀雄、斎野　裕彦、柴田　恵子、白鳥　良一、高桑　登、田中　則和、千葉　孝弥、千葉　宗久、豊村　幸宏、藤沢　敦、松本　秀明、八重樫　忠郎、吉井　宏、宮城県教育庁文化財課、株式会社パスコ

8　本報告書における遺構・遺構挿図等の指示は次の通りである。

（1）遺構の用語及び略称については、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき』に準拠した。

（2）遺構実測図の水糸高は海抜を示す。

（3）縮尺は図に示す通りである。

（4）土層及び土器の色調は「新版標準土色帳」（小川・竹原：1973）による。

9　遺跡の調査成果については、これまでに平成 28 年宮城県遺跡調査成果発表会で内容の一部を報告しているが、これと本書の内容が異なる場合は本書が優先する。

調査要項

所 在 地　岩沼市下野郷字舘内ほか

調査原因　五間堀川河川改修事業

調査主体　岩沼市教育委員会

【平成 24 年度】

調査期間：平成 25 年 1 月 8 日～平成 25 年 1 月 31 日

調査面積：242 ㎡

調査担当:川又　隆央、熊谷　篤　　現場調査参加者:伊藤　和雄、加藤　哲男、佐藤　トシ子、菅原　孝子、髙橋　正人、早坂　富美子

【平成 25 年度】

調査期間：平成 25 年 11 月 7 日～平成 25 年 12 月 25 日

調査面積：244 ㎡

調査担当：川又　隆央

現場調査参加者：伊藤　和雄、齋藤 新彌、佐藤　トシ子、南城　美代子、渡辺 幹雄

【平成 26 年度】

調査期間：平成 26 年 9 月 1 日～平成 27 年 3 月 14 日

調査面積：600 ㎡

調査担当:川又　隆央　　現場調査参加者:伊藤　和雄、塩谷 信行、小林　国子、郷内　妙子、齋藤 新彌、佐藤　トシ子、佐藤　麗香、菅原　孝子、長田　孝子、永浜　盛明、南城　美代子、蓮沼　秀夫、早坂　富美子、松田　崇志、渡辺 幹雄

【平成 27 年度】

調査期間：平成 27 年 8 月 1 日～平成 27 年 12 月 26 日

調査面積：833 ㎡

調査担当：川又　隆央、川島　秀義　　現場調査参加者：伊藤　和雄、塩谷 信行、大友　和男、草薙　敏宏、小林　国子、齋藤 新彌、佐藤　悦子、佐藤　トシ子、佐藤　光善、高橋　紀美子、永浜　盛明、南城　美代子、蓮沼　秀夫、蓮沼　秀子、宮城　富子、渡辺　純子、渡辺 幹雄

【平成 28 年度】

調査期間：平成 28 年 5 月 9 日～平成 28 年 9 月 30 日

調査面積：1,757 ㎡

調査担当:川又　隆央　　現場調査参加者:伊藤　和雄、塩谷 信行、大友　和男、草薙　敏宏、小林　国子、齋藤 新彌、佐藤　悦子、佐藤　トシ子、佐藤　光善、高橋　紀美子、南城　美代子、蓮沼　秀夫、蓮沼　秀子、宮城　富子、吉田　妘絽子、渡辺　純子

【平成 29 年度】

調査期間：平成 29 年 4 月 4 日～平成 29 年 5 月 19 日

調査面積：310 ㎡

調査担当:永井　三郎、太田　昭夫　　現場調査参加者:塩谷 信行、大友　和男、草薙　敏宏、小林　国子、齋藤 新彌、佐藤　悦子、佐藤　トシ子、佐藤　光善、斎藤　正人、高橋　紀美子、南城　美代子、蓮沼　秀子、渡辺　純子、渡辺 幹雄

目　次

例　言
調査要項
第Ⅰ章　遺跡の概要 …… 1
1．位置と地理的環境 …… 1
2．岩沼市の遺跡と歴史的環境 …… 2
第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査方法 …… 8
1．調査に至る経緯 …… 8
2．調査経過 …… 8
3．基本土層 …… 9
第Ⅲ章　平成 24 年度の調査成果 …… 10
1．東区の調査 …… 10
2．西区の調査 …… 13
3．平成 24 年度調査のまとめ …… 13
写真図版 …… 14
第Ⅳ章　平成 25 年度の調査成果 …… 17
1．土坑 …… 17
2．溝跡 …… 19
3．流路跡 …… 38
4．その他の出土遺物 …… 39
5．平成 25 年度調査のまとめ …… 39
写真図版 …… 40
第Ⅴ章　平成 26 年度の調査成果 …… 49
1．掘立柱建物跡 …… 49
2．井戸跡 …… 61
3．竪穴遺構 …… 64
4．土坑 …… 65
5．溝跡 …… 66
6．ピット …… 70
7．サブトレンチ出土遺物 …… 70
8．その他の出土遺物 …… 71
9．平成 26 年度調査のまとめ …… 76
写真図版 …… 77
第Ⅵ章　平成 27 年度の調査成果 …… 81
1．掘立柱建物跡 …… 81
2．井戸跡 …… 90
3．竪穴遺構 …… 93

4．性格不明遺構 ……93
5．土坑 ……93
6．溝跡 ……96
7．ピット……102
8．トレンチ調査 ……102
9．その他の出土遺物 ……103
10．平成 27 年度調査のまとめ ……104
写真図版 ……105
第Ⅶ章　平成 28 年度の調査成果 ……112
1．掘立柱建物跡 ……112
2．井戸跡 ……133
3．護岸施設 ……153
4．性格不明遺構 ……163
5．土坑 ……163
6．溝跡 ……168
7．ピット……196
8．その他の出土遺物 ……197
9．平成 28 年度調査のまとめ ……202
写真図版 ……203
第Ⅷ章　平成 29 年度の調査成果 ……215
1．A 区の調査 ……215
2．B 区の調査 ……225
3．平成 29 年度調査のまとめ ……229
写真図版 ……239
第Ⅸ章　自然科学分析－出土材の樹種 ……244
はじめに ……244
1．平成 27 年度の調査 ……244
2．平成 28 年度の調査 ……244
3．平成 27 年度及び平成 28 年度で同定された樹種の細胞構造学的記載 ……246
写真図版 ……249
第Ⅹ章　総　括 ……254
1．遺跡の概要……254
2．出土遺物について ……257
3．遺構の変遷と年代……261
4．SX01 護岸施設について……264
5．井戸跡について ……268
6．まとめ ……270
引用・参考文献 ……271

挿 図 目 次

第1図　岩沼市の地形分類 …… 1
第2図　岩沼市遺跡地図 …… 4
第3図　下野郷館跡調査区位置図 …… 8
第4図　平成 24 年度調査 トレンチ配置図 …… 10
第5図　E2Tr SD02 土層断面図…… 11
第6図　E8Tr SK01 土層断面図…… 12
第7図　E9Tr SD01 土層断面図…… 12
第8図　平成 25 年度遺構全体図 …… 17
第9図　西壁土層断面図 …… 18
第 10 図　SD 01、SK 01・SD 02 土層断面図 …… 19
第 11 図　SK01 出土遺物 …… 19
第 12 図　SD 01 出土遺物1 …… 20
第 13 図　SD 01 出土遺物2 …… 21
第 14 図　SD 01 出土遺物3 …… 22
第 15 図　SD 01 出土遺物4 …… 23
第 16 図　SD 01 出土遺物5 …… 24
第 17 図　SD 01 出土遺物6 …… 25
第 18 図　SD 01 出土遺物7 …… 26
第 19 図　SD 01 出土遺物8 …… 28
第 20 図　SD 01 出土遺物9 …… 29
第 21 図　SD 01 出土遺物 10…… 30
第 22 図　SD 01 出土遺物 11…… 31
第 23 図　SD 01 出土遺物 12…… 32
第 24 図　SD 01 出土遺物 13…… 33
第 25 図　SD 01 出土遺物 14…… 34
第 26 図　SD 01 出土遺物 15…… 35
第 27 図　SD 01 出土遺物 16…… 35
第 28 図　SD 01 出土遺物 17…… 36
第 29 図　SD 01 出土遺物 18…… 37
第 30 図　SD 01 出土遺物 19…… 37
第 31 図　SD 01 出土石製品 …… 38
第 32 図　その他の出土遺物 …… 39
第 33 図　平成 26 年度グリッド配置図 …… 49
第 34 図　SB 01 …… 50
第 35 図　SB 01 土層断面図 …… 50
第 36 図　平成 26 年度調査遺構全体図 …… 51
第 37 図　SB 02 ～ 04 …… 53
第 38 図　SB 02 土層断面図 …… 53
第 39 図　SB 03・04 土層断面図 …… 54
第 40 図　SB 05・06 …… 55
第 41 図　SB 05 土層断面図 …… 55
第 42 図　SB 06 土層断面図 …… 56
第 43 図　SB 07 …… 57
第 44 図　SB 07 土層断面図 …… 57
第 45 図　SB 08 …… 58
第 46 図　SB 08 土層断面図 …… 58
第 47 図　SB 09 ～ 11、SA 01 …… 59
第 48 図　SB 09 ～ 11、SA 01 土層断面図 …… 60
第 49 図　SE 01・02、土層断面図 …… 62
第 50 図　SE 02 出土遺物 …… 63
第 51 図　SE 03 土層断面図 …… 63
第 52 図　SX 02、土層断面図 …… 64
第 53 図　SX 02 出土遺物 …… 65
第 54 図　SK 01・02・07 土層断面図 …… 65
第 55 図　SK 02 出土遺物 …… 66
第 56 図　SD 01 ～ 07・10・11・13・15
土層断面図 …… 67
第 57 図　SD 02 出土遺物 …… 68
第 58 図　SD 02 出土石製品 …… 68
第 59 図　SD 12 出土遺物 …… 68
第 60 図　SD 15 出土遺物 …… 69
第 61 図　SD 15 出土石製品 …… 69
第 62 図　SD 16 出土遺物 …… 70
第 63 図　ピット出土遺物 …… 71
第 64 図　サブトレンチ出土遺物 …… 71
第 65 図　精査出土遺物 …… 72
第 66 図　精査出土金属製品 …… 72
第 67 図　掘り下げ出土遺物1 …… 73
第 68 図　掘り下げ出土遺物2 …… 74
第 69 図　掘り下げ出土石製品 …… 74
第 70 図　その他の出土遺物 …… 75
第 71 図　その他の出土金属製品 …… 76

第 72 図　平成 27 年度グリッド配置図 ・・・・・・・・・・・・ 81
第 73 図　15 A区遺構全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
第 74 図　15 C区遺構全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
第 75 図　SB 01、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
第 76 図　SB 02、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
第 77 図　SB 03・04、SB 03 土層断面図・・・・・・・・ 86
第 78 図　SB 04　土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
第 79 図　SB 05・05、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・ 88
第 80 図　SB 07・08、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・ 89
第 81 図　SE 01 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90
第 82 図　SE 01 ～ 03　土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・ 91
第 83 図　SE 02 出土木製品 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第 84 図　SX 01・02　土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・ 94
第 85 図　SX 01 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
第 86 図　SX 02 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
第 87 図　SK 02・03 土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・ 95
第 88 図　SD 01・02・04・05　土層断面図 ・・・・・・ 97
第 89 図　SD 03 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
第 90 図　SD 03 出土木製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
第 91 図　SD 04 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
第 92 図　SD 04 出土石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
第 93 図　SD 04 出土金属製品・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101
第 94 図　SD 05 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101
第 95 図　ピット出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102
第 96 図　平成 27 年度調査区・トレンチ配置図 ・・ 102
第 97 図　カクラン出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
第 98 図　カクラン出土石製品 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
第 99 図　平成 28 年度グリッド配置図 ・・・・・・・・・・・ 112
第 100 図　平成 28 年度遺構全体図・・・・・・・・・・・・・ 113
第 101 図　SB 01・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 115
第 102 図　SB 01　土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 117
第 103 図　SB 02、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
第 104 図　SB 03 ～ 05、SA 01 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 121
第 105 図　SB 03・04　土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・ 123
第 106 図　SB 05、SA 01 土層断面図・・・・・・・・・・・ 124
第 107 図　SB 06・07、土層断面図・・・・・・・・・・・・・ 125
第 108 図　SB 08・09　土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・ 126
第 109 図　SB 08 ～ 11・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 127
第 110 図　SB 10・11　土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・ 129
第 111 図　SB 12・13　土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・ 130
第 112 図　SB 12・13・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
第 113 図　SE・SX・SK配置図 ・・・・・・・・・・・・・・・ 134
第 114 図　SE 01、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 134
第 115 図　SE 01 出土遺物 1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135
第 116 図　SE 01 出土遺物 2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136
第 117 図　SE 01 出土遺物 3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 137
第 118 図　SE 01 出土遺物 4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
第 119 図　SE 01 出土遺物 5・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
第 120 図　SE 01 出土木製品 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
第 121 図　SE 02 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
第 122 図　SE 03、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
第 123 図　SE 03 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
第 124 図　SE 04、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142
第 125 図　SE 04 出土遺物1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143
第 126 図　SE 04 出土遺物2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 144
第 127 図　SE 05、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
第 128 図　SE 06 出土木製品 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147
第 129 図　SE 07、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147
第 130 図　SE 07 出土木製品 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 148
第 131 図　SE 09、土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149
第 132 図　SE 09 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149
第 133 図　SE 02・06・08・10・11・12
土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 150
第 134 図　SE 11 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 152
第 135 図　SE 12 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153
第 136 図　SX 01 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 154
第 137 図　SX 01 出土遺物1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 155
第 138 図　SX 01 出土遺物2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 156
第 139 図　SX 01 出土遺物3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 157
第 140 図　SX 01 出土木製品1・・・・・・・・・・・・・・・・・ 158
第 141 図　SX 01 出土木製品2・・・・・・・・・・・・・・・・・ 159
第 142 図　SX 01 出土木製品3・・・・・・・・・・・・・・・・・ 160
第 143 図　SX 01 出土木製品4・・・・・・・・・・・・・・・・・ 161
第 144 図　SX 01 出土木製品5・・・・・・・・・・・・・・・・・ 162
第 145 図　SX 02、土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 164
第 146 図　SX 02 出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 164

第 147 図　SK 04・06・11・12・20 土層断面図・・ 165
第 148 図　SK 01・03・07 ～ 10・13 ～ 15
土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
第 149 図　SK 16 ～ 19 土層断面図・・・・・・・・・・・・・ 167
第 150 図　SK 11 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 167
第 151 図　SK 12 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 167
第 152 図　SK 19 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 168
第 153 図　SD配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 169
第 154 図　SD 01　土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 169
第 155 図　SD 01 出土遺物1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170
第 156 図　SD 01 出土遺物2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 171
第 157 図　SD 01 出土遺物3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 172
第 158 図　SD 01 出土遺物4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 173
第 159 図　SD 01 出土遺物5・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 174
第 160 図　SD 01 出土遺物6・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 175
第 161 図　SD 01 出土遺物7・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 176
第 162 図　SD 01 出土遺物8・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 177
第 163 図　SD 01 出土遺物9・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 178
第 164 図　SD 01 出土遺物 10 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 179
第 165 図　SD 01 出土遺物 11 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 180
第 166 図　SD 01 出土遺物 12 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 181
第 167 図　SD 01 出土石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 182
第 168 図　SD 03　土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・ 183
第 169 図　SD 03 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 184
第 170 図　SD 04 出土金属製品・・・・・・・・・・・・・・・・・ 184
第 171 図　SD 06 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
第 172 図　SD 07・09　土層断面図・・・・・・・・・・・・・・ 185
第 173 図　SD 07 出土遺物1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 186
第 174 図　SD 07 出土遺物2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 187
第 175 図　SD 09 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 189
第 176 図　SD 10 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 190
第 177 図　SD 11 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 190
第 178 図　SD 18・19　土層断面図・・・・・・・・・・・・・・ 191
第 179 図　SD 18 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 192
第 180 図　SD 18 出土木製品1・・・・・・・・・・・・・・・・・ 193
第 181 図　SD 18 出土木製品2・・・・・・・・・・・・・・・・・ 193
第 182 図　SD 19 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 194
第 183 図　SD 19 出土石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 195
第 184 図　ピット出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 196
第 185 図　ピット出土金属製品 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 197
第 186 図　精査出土石製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 197
第 187 図　精査出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 198
第 188 図　表土出土遺物1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 199
第 189 図　表土出土遺物2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 200
第 190 図　表土出土鉄製品・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201
第 191 図　その他の出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 201
第 192 図　平成 29 年度調査区配置図・・・・・・・・・・・ 215
第 193 図　調査区全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 216
第 194 図　A 区全体図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 217
第 195 図　A 区　SA34、土層断面図 ・・・・・・・・・・・・ 218
第 196 図　A 区　SK03・09・10・12・13
土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 219
第 197 図　A 区　SK03 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 220
第 198 図　A 区　SK10 出土石製品・・・・・・・・・・・・・・ 220
第 199 図　A 区　SD、土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・ 221
第 200 図　A 区　SD01 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 222
第 201 図　A 区　SD01 出土石製品・・・・・・・・・・・・・・ 223
第 202 図　A 区　SD02 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 223
第 203 図　A 区　SD02 と SD04 の合流点
出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 223
第 204 図　A 区　SD05 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 224
第 205 図　A 区　SD15 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 224
第 206 図　B 区全体図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 226
第 207 図　B 区　SB35、ピット土層断面図 ・・・・・・・・ 227
第 208 図　B 区　SK、土層断面図 ・・・・・・・・・・・・・・ 228
第 209 図　B 区　SK25 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 229
第 210 図　B 区　SD23・24、土層断面図 ・・・・・・・・ 230
第 211 図　B 区　SD23 出土遺物1・・・・・・・・・・・・・・・ 231
第 212 図　B 区　SD23 出土遺物2・・・・・・・・・・・・・・・ 232
第 213 図　B 区　SD23 出土遺物3・・・・・・・・・・・・・・・ 233
第 214 図　B 区　SD23 出土石製品・・・・・・・・・・・・・・ 234
第 215 図　B 区　SD24 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 235
第 216 図　B 区　SD22・30・31、
土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 236
第 217 図　B 区　SD30 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・ 236
第 218 図　B 区　その他の出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・ 237

第 219 図　下野郷館跡第1～3地点合成図 ・・・・256
第 220 図　クサビの形状 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・260
第 221 図　クサビの先端部角度 ・・・・・・・・・・・・・・・260
第 222 図　クサビの長さと幅、厚さの分布状況・・261
第 223 図　平成 28 年度調査区遺構相関図 ・・・・262
第 224 図　平成 28 年度調査区遺構変遷図 ・・・・263
第 225 図　SX01 護岸施設模式図 ・・・・・・・・・・・・265
第 226 図　SX01 各部位の計測値 ・・・・・・・・・・・・266
第 227 図　SX01 と志賀沢川旧流路推定図・・・・・267

表 目 次

第1表　岩沼市内遺跡一覧 …… 5
第2表　SK01 出土遺物観察表 …… 19
第3表　SD01 出土遺物観察表1 …… 20
第4表　SD01 出土遺物観察表2 …… 21
第5表　SD01 出土遺物観察表3 …… 22
第6表　SD01 出土遺物観察表4 …… 24
第7表　SD01 出土遺物観察表5 …… 24
第8表　SD01 出土遺物観察表6 …… 25
第9表　SD01 出土遺物観察表7 …… 27
第 10 表　SD01 出土遺物観察表8 …… 29
第 11 表　SD01 出土遺物観察表9 …… 29
第 12 表　SD01 出土遺物観察表 10 …… 30
第 13 表　SD01 出土遺物観察表 11 …… 31
第 14 表　SD01 出土遺物観察表 12 …… 32
第 15 表　SD01 出土遺物観察表 13 …… 33
第 16 表　SD01 出土遺物観察表 14 …… 34
第 17 表　SD01 出土遺物観察表 15 …… 35
第 18 表　SD01 出土遺物観察表 16 …… 35
第 19 表　SD01 出土遺物観察表 17 …… 36
第 20 表　SD01 出土遺物観察表 18 …… 37
第 21 表　SD01 出土遺物観察表 19 …… 37
第 22 表　SD01 出土石製品観察表 …… 38
第 23 表　その他の出土遺物観察表 …… 39
第 24 表　平成 26 年度調査　掘立柱建物跡属性表 …… 61
第 25 表　SE02 出土遺物観察表 …… 63
第 26 表　平成 26 年度調査　井戸跡属性表 …… 63
第 27 表　SX02 出土遺物観察表 …… 65
第 28 表　SK02 出土遺物観察表 …… 66
第 29 表　平成 26 年度調査　竪穴遺構・土坑属性表 …… 66
第 30 表　SD02 出土遺物観察表 …… 68
第 31 表　SD02 出土石製品観察表 …… 68
第 32 表　SD12 出土遺物観察表 …… 68
第 33 表　SD15 出土遺物観察表 …… 69
第 34 表　SD15 出土石製品観察表 …… 69
第 35 表　SD16 出土遺物観察表 …… 70
第 36 表　平成 26 年度調査　溝跡属性表 …… 70
第 37 表　ピット出土遺物観察表 …… 71
第 38 表　サブトレンチ出土遺物観察表 …… 71
第 39 表　精査出土遺物観察表 …… 72
第 40 表　精査出土金属製品観察表 …… 72
第 41 表　掘り下げ出土遺物観察表1 …… 73
第 42 表　掘り下げ出土遺物観察表2 …… 74
第 43 表　掘り下げ出土石製品観察表 …… 74
第 44 表　その他の出土遺物観察表 …… 75
第 45 表　その他の出土金属製品観察表 …… 76
第 46 表　平成 27 年度調査　掘立柱建物跡属性表 …… 90
第 47 表　SE01 出土遺物観察表 …… 90
第 48 表　SE02 出土木製品観察表 …… 92
第 49 表　平成 27 年度調査　井戸跡属性表 …… 93
第 50 表　平成 27 年度調査竪穴遺構・性格不明遺構・土坑属性表 …… 94
第 51 表　SX01 出土遺物観察表 …… 95
第 52 表　SX02 出土遺物観察表 …… 95
第 53 表　SD03 出土遺物観察表 …… 98
第 54 表　SD03 出土木製品観察表 …… 99
第 55 表　平成 27 年度調査　溝跡属性表 …… 99
第 56 表　SD04 出土遺物観察表 …… 100
第 57 表　SD04 出土石製品観察表 …… 100
第 58 表　SD04 出土金属製品観察表 …… 101
第 59 表　SD05 出土遺物観察表 …… 101
第 60 表　ピット出土遺物観察表 …… 102
第 61 表　カクラン出土遺物観察表 …… 103
第 62 表　カクラン出土石製品観察表 …… 103
第 63 表　平成 28 年度調査 掘立柱建物跡属性表 …… 133
第 64 表　SE01 出土遺物観察表1 …… 135
第 65 表　SE01 出土遺物観察表2 …… 136
第 66 表　SE01 出土遺物観察表3 …… 137
第 67 表　SE01 出土遺物観察表4 …… 138
第 68 表　SE01 出土遺物観察表5 …… 139
第 69 表　SE01 出土木製品観察表 …… 140
第 70 表　SE02 出土遺物観察表 …… 140

第 71 表　SE03 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 141
第 72 表　SE04 出土遺物観察表1 ・・・・・・・・・・・・・・ 145
第 73 表　SE04 出土遺物観察表2 ・・・・・・・・・・・・・・ 145
第 74 表　SE06 出土木製品観察表 ・・・・・・・・・・・・・ 147
第 75 表　SE07 出土木製品観察表 ・・・・・・・・・・・・・ 148
第 76 表　SE09 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 150
第 77 表　SE11 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 152
第 78 表　平成 28 年度調査 井戸跡属性表 ・・・・・・ 152
第 79 表　SE12 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 153
第 80 表　SX01 出土遺物観察表1 ・・・・・・・・・・・・・・ 155
第 81 表　SX01 出土遺物観察表2 ・・・・・・・・・・・・・・ 156
第 82 表　SX01 出土遺物観察表3 ・・・・・・・・・・・・・・ 157
第 83 表　SX01 出土木製品観察表1 ・・・・・・・・・・・・ 158
第 84 表　SX01 出土木製品観察表2 ・・・・・・・・・・・・ 159
第 85 表　SX01 出土木製品観察表3 ・・・・・・・・・・・・ 160
第 86 表　SX01 出土木製品観察表4 ・・・・・・・・・・・・ 161
第 87 表　SX01 出土木製品観察表5 ・・・・・・・・・・・・ 162
第 88 表　SX02 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 164
第 89 表　SK11 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 167
第 90 表　SK12 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 167
第 91 表　SK19 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 168
第 92 表　平成 28 年度調査　護岸施設・
性格不明遺構・土坑属性表 ・・・・・・・・・・ 168
第 93 表　SD01 出土遺物観察表1 ・・・・・・・・・・・・・・ 170
第 94 表　SD01 出土遺物観察表2 ・・・・・・・・・・・・・・ 171
第 95 表　SD01 出土遺物観察表3 ・・・・・・・・・・・・・・ 172
第 96 表　SD01 出土遺物観察表4 ・・・・・・・・・・・・・・ 173
第 97 表　SD01 出土遺物観察表5 ・・・・・・・・・・・・・・ 174
第 98 表　SD01 出土遺物観察表6 ・・・・・・・・・・・・・・ 175
第 99 表　SD01 出土遺物観察表7 ・・・・・・・・・・・・・・ 176
第 100 表　SD01 出土遺物観察表8 ・・・・・・・・・・・・・・ 177
第 101 表　SD01 出土遺物観察表9 ・・・・・・・・・・・・・・ 178
第 102 表　SD01 出土遺物観察表 10 ・・・・・・・・・・・・ 179
第 103 表　SD01 出土遺物観察表 11 ・・・・・・・・・・・・ 180
第 104 表　SD01 出土遺物観察表 12 ・・・・・・・・・・・・ 181
第 105 表　SD01 出土石製品観察表 ・・・・・・・・・・・・・ 182
第 106 表　SD03 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 184
第 107 表　SD04 出土金属製品観察表 ・・・・・・・・・・・ 184
第 108 表　SD06 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 185
第 109 表　SD07 出土遺物観察表1 ・・・・・・・・・・・・・・ 188
第 110 表　SD07 出土遺物観察表2 ・・・・・・・・・・・・・・ 188
第 111 表　SD09 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 189
第 112 表　SD10 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 190
第 113 表　SD11 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 190
第 114 表　SD18 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 192
第 115 表　SD18 出土木製品観察表1 ・・・・・・・・・・・・ 193
第 116 表　SD18 出土木製品観察表2 ・・・・・・・・・・・・ 193
第 117 表　SD19 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 194
第 118 表　SD19 出土石製品観察表 ・・・・・・・・・・・・・ 195
第 119 表　平成 28 年度調査　溝跡属性表 ・・・・・・・ 195
第 120 表　ピット出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 196
第 121 表　ピット出土金属製品観察表 ・・・・・・・・・・・ 197
第 122 表　精査出土石製品観察表 ・・・・・・・・・・・・・・ 197
第 123 表　精査出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 198
第 124 表　表土出土遺物観察表1 ・・・・・・・・・・・・・・・ 199
第 125 表　表土出土遺物観察表2 ・・・・・・・・・・・・・・・ 201
第 126 表　表土出土金属製品観察表 ・・・・・・・・・・・・ 201
第 127 表　その他の出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・ 201
第 128 表　A 区　SK03 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・ 220
第 129 表　A 区　SK10 出土石製品観察表 ・・・・・・・・ 220
第 130 表　A 区　SD01 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・ 222
第 131 表　A 区　SD01 出土石製品観察表 ・・・・・・・・ 223
第 132 表　A 区　SD02 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・ 223
第 133 表　A 区　SD02 と SD04 の
合流点付近出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・ 223
第 134 表　A 区　SD05 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・ 224
第 135 表　A 区　SD15 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・ 224
第 136 表　B 区　SK25 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・ 229
第 137 表　B 区　SD23 出土遺物観察表1 ・・・・・・・・・ 231
第 138 表　B 区　SD23 出土遺物観察表2 ・・・・・・・・・ 232
第 139 表　B 区　SD23 出土遺物観察表3 ・・・・・・・・・ 233
第 140 表　B 区　SD23 出土石製品観察表 ・・・・・・・・ 234
第 141 表　B 区　SD24 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・ 235
第 142 表　B 区　SD30 出土遺物観察表 ・・・・・・・・・・ 236
第 143 表　B 区　その他の出土遺物観察表 ・・・・・・・ 237
第 144 表　A 区・B 区遺構属性表 ・・・・・・・・・・・・・・ 238

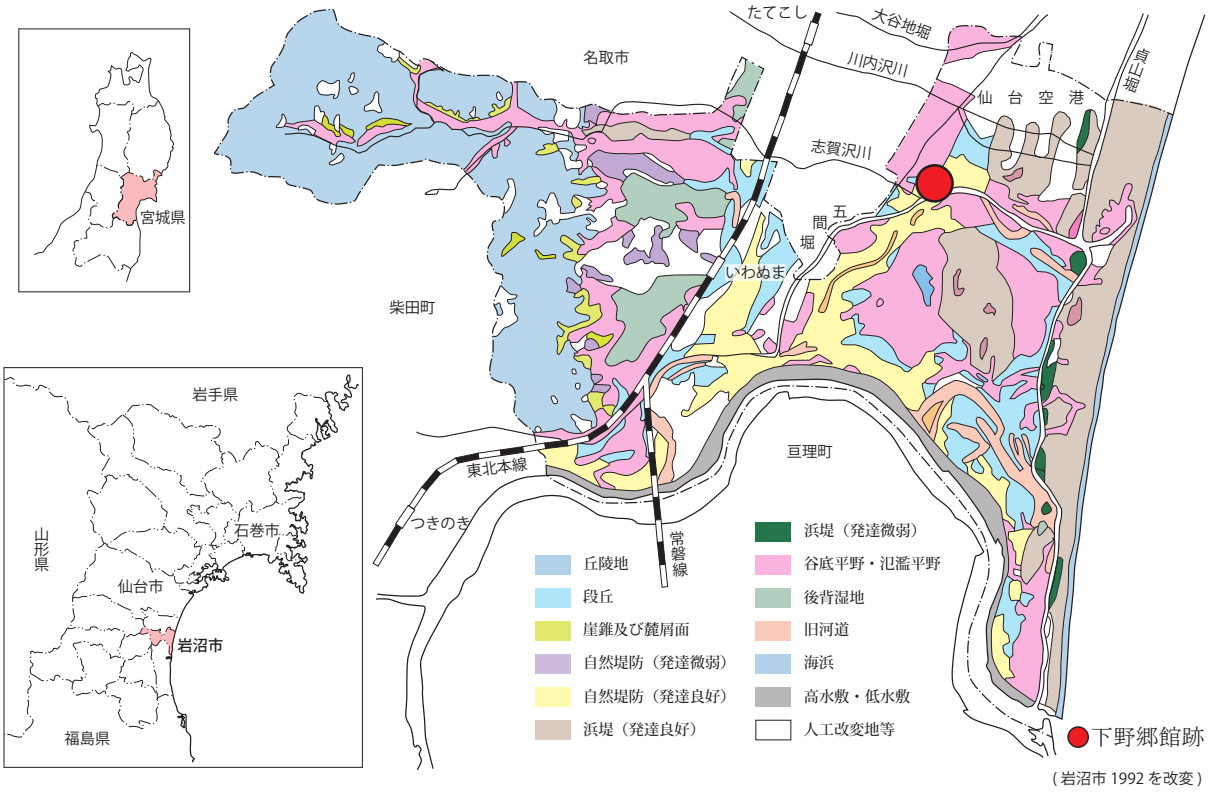
第 145 表　平成 27 年度下野郷館跡
出土木製品の樹種 ･････････････････ 244
第 146 表　平成 28 年度下野郷館跡
出土木製品の樹種 ･････････････････ 245
第 147 表　器種別樹種集計表（平成 28 年度）････ 246

第Ⅰ章　遺跡の概観

1．位置と地理的環境（第1図）

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は、福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の 239km、流域面積は 5,400 ㎢を測る。本市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また本市は古代では東山道と、東海道から延びる連絡路が合する地点であったが、現在でも国道4号と同6号、JR 東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる岩沼西部丘陵（標高 100 ～ 300m）と高館丘陵（標高 200 ～ 300m）、これらの丘陵から東へ舌状に張り出す標高 10 ～ 30 mほどの長岡丘陵、二木・朝日丘陵と呼称している小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は仙台平野南部域に相当する。岩沼西部丘陵の東縁から太平洋まで7～8km の幅をもち，3 列の浜堤列が発達している。この沖積平野は阿武隈川のほか，中小河川の堆積作用によって形成され、沿岸では自然堤防の発達が顕著である。本報告対象となる下野郷館跡は，阿武隈川左岸から旧河道に沿って北に延びる標高 0.3 ～ 1.8 mほどの自然堤防および第Ⅱ浜堤列上に立地し，東流する五間堀川と志賀沢川の合流点に位置している。



（岩沼市 1992 を改変）

第1図　岩沼市の地形分類

2．岩沼市の遺跡と歴史的環境（第2図、第1表）

岩沼市域では、現在のところ、縄文時代から近現代にかけての遺跡が 66 箇所確認されている。近年、東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査や、平成 23 年（2011）から平成 26 年（2014）にかけて行われた、岩沼市史編纂編集専門委員会考古部会における学術調査（以下、市史編纂事業）により、地域の歴史を解明するための新たな成果が報告されている。以下にこれまでの発掘調査などによって得られた知見について、時代順にその概略を記す。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、市域西側の丘陵部に点在し、晩期の遺物が多量に発見された下塩ノ入遺跡【15】など、特に志賀沢川流域の志賀・小川地区にまとまって分布している。また、沖積地を臨む丘陵上に立地する山畑南貝塚【10】や畑堤上貝塚【35】では、汽水域に生息するヤマトシジミを主体とした貝層の形成もみられる。北原遺跡【8】では、平成4年（1992）の県道改良工事に伴う発掘調査の際、中期後葉の土坑が 50 基近く検出され、曲線的な磨消縄文を特徴とする土器のほか、石錐や石棒などが発見された。鵜ヶ崎城跡【23】では、平成 16 年（2004）の宅地造成に伴う第4地点の発掘調査において、土塁下に埋没した遺物包含層から、鵜ヶ島台式や梨木畑式に比定される早期末の土器群が見つかっている（岩沼市教育委員会 2005、岩沼市史編纂委員会 2015）。

写真1　山畑南貝塚の貝層

弥生時代

弥生時代の遺跡は、縄文時代と同様、市域西側の丘陵部に多く分布している。しかしながら、上根崎遺跡【29】や朝日山古墳群【36】、平野部に位置するかめ塚西遺跡【3】でも土器の散布が認められるなど、人間の営みが徐々に太平洋側へ拡大する様子をうかがい知ることができる。鵜ヶ崎城跡【23】では、平成 16 年（2004）の発掘調査において、中期後葉と考えられる竪穴住居跡や、十三塚式に比定される土器および石包丁などの石器が発見されている。北原遺跡【8】では、平成 23 年（2011）の市史編纂事業に伴う試掘調査において、竪穴住居跡から表面に特殊な撚糸文を施した土器が見つかっている。この土器は北関東を中心に分布する十王台式に平行するものとみられ、年代は後期後半と推量されている。また、杉の内遺跡【7】でも同様に試掘調査が行われ、ここでは中期中葉から後期にかけての土器が複数出土している。過去に籾痕のある土器も採集されている。岩沼市域における弥生時代の考古資料は近年徐々に蓄積されつつあるが、墓壙や水田跡といった、葬送や生産に関わる遺構は現在も発見されていない（岩沼市教育委員会 2005、岩沼市史編纂委員会 2015）。

写真2　北原遺跡出土土器

古墳時代

古墳時代の遺跡は、高塚古墳、横穴墓、集落跡などが市内各所にみられ、市域東側の玉浦地区でも遺跡の分布が認められる。高塚古墳のうち、県指定史跡のかめ塚古墳【2】では、平成 24 年（2012）の市史編纂事業に伴う古墳周溝の発掘調査において、土師器や須恵器といった遺物のほか、底面から一木二

又鋤が出土した。また、地表に顕在する全長約 39 mの墳丘は後世に削られたものであり、本来は全長約 48 mを測る前方後円墳であったと推定されている。造成時期はこれまで中期と考えられてきたが、遺物の年代などから前期にさかのぼる可能性がある。横穴墓は、岩沼西部丘陵から派生する低位丘陵の斜面に多く造られ、これまでに 10 箇所の横穴墓群が確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。このうち、長谷寺【11】、丸山【4】、二木【9】、土ケ崎【22】、引込【30】などの横穴墓群は過去に発掘調査が行われ、造営時期はいずれも7世紀前半から8世紀前半と考えられている。北原遺跡【8】をはじめとする長岡丘陵遺跡群は前期の集落跡として知られるが、そこから南へ約 500m の位置に所在する熊野遺跡【16】でも、平成 25 年（2013）の駐車場整備工事に伴う発掘調査において、同時期の竪穴住居跡群が発見された。また、孫兵衛谷地遺跡【13】では、平成 24 年（2012）の河川改修工事に伴う確認調査の際、前期の塩釜式に位置付けられる土師器を含む遺物包含層の存在が明らかとなった。なお、これまで古墳と考えられていた東平王塚古墳、白山古墳、にら塚古墳については、平成 26 年（2014）末までに行った市史編纂事業に伴う調査の結果、墳丘積土が確認されず古墳と認められなかった。そのため、現在はそれぞれ、白山塚【39】、にら塚遺跡【41】と遺跡名称を変更し、東平王塚古墳は岩沼市遺跡地図（第 3 図）ならびに市内遺跡一覧（表 1）に非掲載としている（岩沼市教育委員会 2013c、岩沼市史編纂委員会 2015）。

写真3　かめ塚古墳出土木製品

写真4　引込横穴墓群の調査

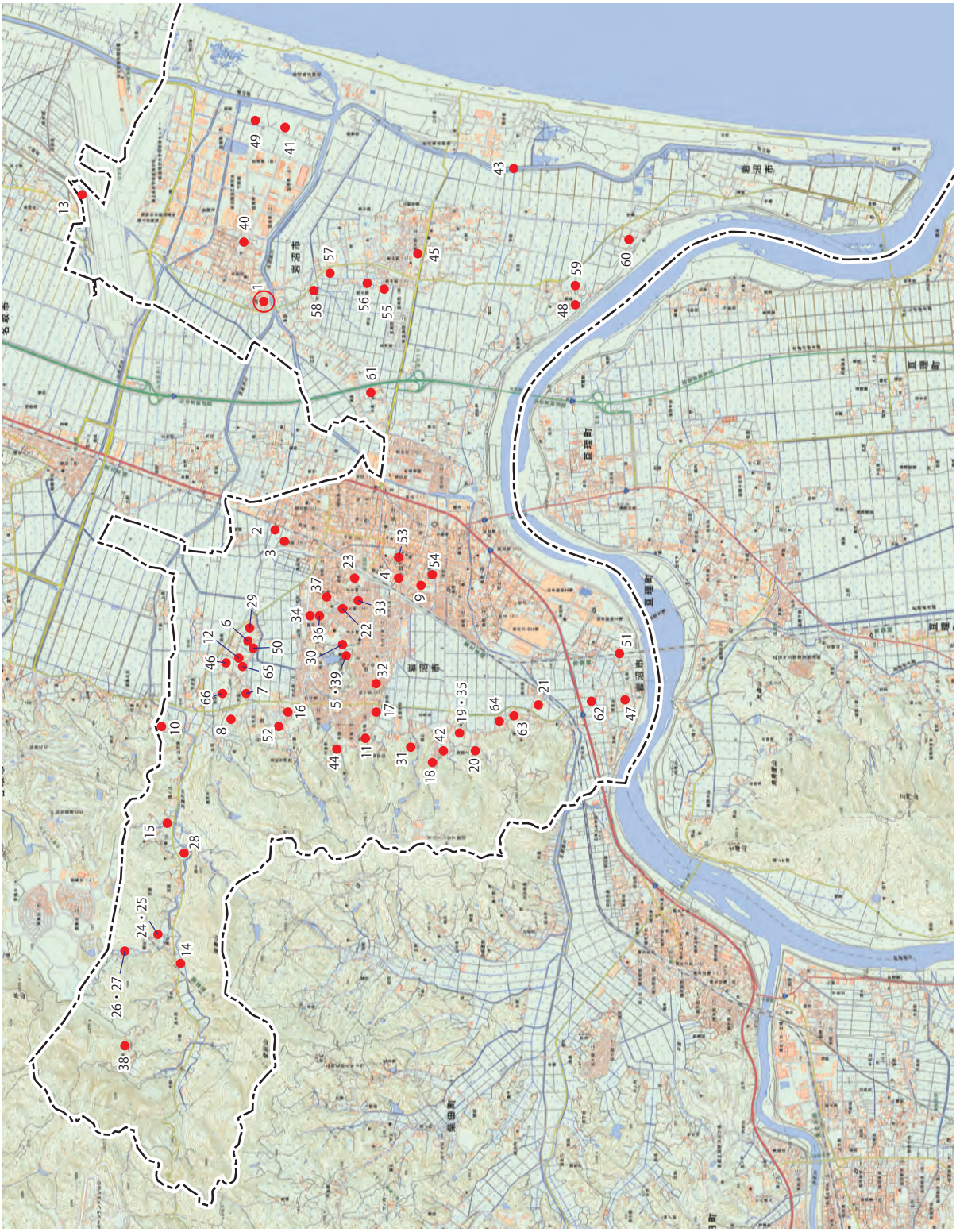
写真5　熊野遺跡で出土した土器

古　代

古代の遺跡については、近年、震災復興事業や市史編纂事業による発掘調査が増加傾向にあり、なかでも高大瀬遺跡と原遺跡については、学術的に注目される調査事例として特筆される。高大瀬遺跡では、本書の内容のほか平成 26 年（2014）のいわぬま臨空メガソーラー事業に伴う発掘調査では、東日本大震災の津波堆積物を詳細に観察した結果、津波における砂泥の堆積構造は地形的要因などによって一様でないことを明らかにしている。原遺跡【51】では、平成 28 年（2016）～平成 30 年（2018）の調査によって、新旧 2 時期の重複がある梁行 3 間（約 7 m）×桁行 10 間（約 20 m）の長大な掘立柱建物跡が検出され、その柱穴跡は方形で，一辺約1mを測る。また，材木塀跡や 3 時期の作り替えを確認できる南北方向の大溝跡などが検出されている。さらに、東海地方で生産されたと考えられる円面硯や、福島県会津地方で生産された長頸壺、古代瓦片などが見つかっ

写真6　原遺跡円面硯出土状況

写真7　原遺跡で発見された柱列跡


1
2
3
4
5・39
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19・35
20
21
22
23
24・25
26・27
28
29
30
31
32
33
34
36
37
38
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
岩沼市
亘理町
名取市

第２図　岩沼市遺跡地図

第1表　岩沼市内遺跡一覧

図中番号	登録番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　代
2	15001	かめ塚古墳	字亀塚	古墳	古墳
3	15002	かめ塚西遺跡	字亀塚	遺物散布地	弥生・古代・近世
4	15003	丸山横穴墓群	二木二丁目	横穴墓	古墳
5	15004	白山横穴墓群	土ヶ崎四丁目ほか	横穴墓	古墳
6	15005	新明塚古墳	長岡字塚腰	古墳	古墳
7	15006	杉の内遺跡	三色吉字杉の内ほか	集落跡	弥生・古墳・古代
8	15007	北原遺跡	長岡字北原ほか	集落跡・貝塚	縄文・弥生・古墳・古代
9	15008	二木横穴墓群	二木二丁目	横穴墓	古墳
10	15009	山畑南貝塚	小川字山畑南ほか	集落跡・貝塚	縄文・古代
11	15010	長谷寺横穴墓群	北長谷字畑向山	横穴墓	古墳・古代
12	15011	長塚古墳	長岡字台	古墳	古墳
13	15012	孫兵衛谷地遺跡	下野郷字小谷地	遺物散布地	古墳
14	15013	大日遺跡	志賀字新大日	集落跡	縄文
15	15014	下塩ノ入遺跡	志賀字下塩ノ入ほか	集落跡	縄文
16	15015	熊野遺跡	三色吉字熊野ほか	集落跡	古墳・古代
17	15016	平等山横穴墓群	三色吉字畑松崎	横穴墓	古墳
18	15017	新館跡	北長谷字舘下	城館跡	中世
19	15018	畑提上横穴墓群	北長谷字畑提上	横穴墓	古墳
20	15019	根方泉遺跡	南長谷字泉	遺物散布地	弥生・近世
21	15020	長谷小館跡	南長谷字姪	城館跡	中世
22	15022	土ヶ崎横穴墓群	土ヶ崎二丁目	横穴墓	古墳・古代
23	15023	鵜ヶ崎城跡	栄町一丁目ほか	城館跡	縄文・弥生・中世・近世
24	15025	八森A遺跡	志賀字新八森	集落跡	縄文
25	15026	八森B遺跡	志賀字八森	集落跡	縄文
26	15027	銅谷A遺跡	志賀字銅谷	集落跡・製鉄跡	縄文・近世
27	15028	銅谷B遺跡	志賀字銅谷	集落跡・製鉄跡	縄文・近世
28	15029	新宮下遺跡	志賀字新宮下	集落跡	縄文
29	15030	上根崎遺跡	長岡字上根崎ほか	集落跡	縄文・弥生・古代・中世
30	15031	引込横穴墓群	土ヶ崎四丁目	横穴墓	古墳
31	15032	古閑山遺跡	北長谷字古閑山	遺物散布地	弥生・古墳・古代
32	15033	新田遺跡	北長谷字新田ほか	遺物散布地	縄文・古代
33	15034	石垣山横穴墓群	朝日一丁目	横穴墓	古墳
34	15035	鷲崎横穴墓群	朝日二丁目	横穴墓	古墳
35	15036	畑提上貝塚	北長谷字畑提上	集落跡・貝塚	縄文・弥生・古墳・古代
36	15037	朝日山古墳群	朝日一丁目	古墳・墓・遺物散布地	弥生・古墳・中世・近世
37	15038	朝日遺跡	朝日一丁目	遺物散布地	古墳・古代・中世
38	15039	岩蔵寺遺跡	志賀字薬師	集落跡・寺院跡	縄文・古代・中世
1	15040	下野郷館跡	下野郷字舘内・舘外ほか	城館跡	古代・中世・近世
39	15041	白山塚	字朝日	塚	近世？
40	15042	舘外遺跡	下野郷字舘外	遺物散布地	古代・近世
41	15043	にら塚遺跡	下野郷字潮入ほか	遺物散布地	古代
42	15044	新館跡前遺跡	北長谷字畑提上	遺物散布地	縄文・古代
43	15045	貞山堀（小曳堀）	相の釜～納屋	運河	近世
44	15046	竹倉部遺跡	三色吉朝字竹倉部	遺物散布地	弥生・古墳・古代
45	15047	新田東遺跡	押分字新田東	遺物散布地	古代・近世
46	15048	長塚北遺跡	長岡字上根崎	遺物散布地	縄文・古墳・古代
47	15049	南玉崎遺跡	南長谷字北上ほか	遺物散布地	古代・近世
48	15050	西須賀原遺跡	早股字西須賀原ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
49	15051	高大瀬遺跡	下野郷字高大瀬ほか	遺物散布地	古代・近世
50	15052	長徳寺前遺跡	長岡字塚越	経塚	近世
51	15053	原遺跡	南長谷字中原ほか	遺物散布地	古墳・古代
52	15054	中ノ原遺跡	三色吉字中ノ原ほか	墓	中世
53	15055	丸山遺跡	二木二丁目ほか	集落跡	中世・近世
54	15056	竹駒神社境内遺跡	稲荷町	社寺跡	中世・近世
55	15057	新筒下遺跡	押分字新筒下ほか	遺物散布地	古代・近世
56	15058	沼前遺跡	押分字沼前ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
57	15059	西土手遺跡	押分字西土手ほか	遺物散布地	中世・近世
58	15060	前條遺跡	下野郷字前條	遺物散布地	古代・近世
59	15061	刈原遺跡	早股字刈原ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
60	15062	高原遺跡	寺島字高原	遺物散布地	中世・近世
61	15063	上中筋遺跡	下野郷字上中筋ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
62	15064	樋遺跡	南長谷字樋ほか	遺物散布地	縄文・古墳・古代・中世・近世
63	15065	柳遺跡	南長谷字柳	遺物散布地	古墳・古代・近世
64	15066	台遺跡	南長谷字台	遺物散布地	縄文・弥生・古墳・古代
65	15067	長塚遺跡	長岡字台	遺物散布地	縄文・古墳
66	15068	上小渕遺跡	長岡字上小渕ほか	集落跡	弥生・古墳・古代

たほか、土師器や須恵器が大量に出土するなど、遺構や遺物の特徴から官衙的な施設の存在が示唆される。10 世紀に成立した『延喜式』に東山道の駅家として記載された「玉前駅家」や、多賀城跡より出土した9世紀代と考えられる過所木簡でその名が知られる「玉前剗（関）」は、本市南長谷地区の玉崎に存在が比定されており、原遺跡ではこれらの中核的な施設が営まれていた可能性がある。上記の遺跡以外では、熊野遺跡【16】で実施された平成 27 年（2015）の駐車場整備（拡張）工事に伴う発掘調査において、10 世紀前半のものと思われる住居跡が発見された。また、市史編纂事業の一環で行われた試掘調査により、樋遺跡【62】、柳遺跡【63】、台遺跡【64】が古代の遺跡として新たに登録された。ところで、にら塚遺跡【41】では、過去に土師器、須恵器、製塩土器が採取されており、古代の製塩関連遺跡であった可能性がある。しかしながら、平成 26 年（2014）に行ったいわぬま臨空メガソーラー事業に伴う発掘調査では、当該地の地形は過去に大きく改変され、従来の姿を留めていないことが確認された。原因は昭和 50 年代に行われた土砂採取事業によるものと考えられるが、このことは、埋蔵文化財の記録保存を適切に行わない開発行為が、後世へどれほどの文化的損失を与えうるのかを如実に示している（岩沼市教育委員会 2016b・2017b・2018、岩沼市史編纂委員会 2015、宮城県多賀城跡調査研究所 1985）。

中　世

中世の遺跡は、過去に朝日山古墳群【36】、朝日遺跡【37】、鵜ヶ崎城跡【23】、丸山遺跡【53】、竹駒神社境内遺跡【54】、下野郷館跡【1】、西須賀原遺跡【48】、中ノ原遺跡【52】などで発掘調査が行われている。近年の調査事例としては、上根崎遺跡【29】で平成 23 年（2011）に県道自歩道整備事業に伴う発掘調査が実施され、屋敷地を区画したとみられる溝跡、土壙墓や地下室（ムロ）状の土坑、掘立柱建物や堀の可能性のある小穴群などの遺構が検出された。土壙墓の年代は出土した陶器から中世の可能性があり、そのほかの遺構も中世以降のものと思われる。岩蔵寺遺跡【38】では、平成 25 年（2013）に市史編纂事業に伴う発掘調査を実施している。この調査では、薬師堂の裏手に所在する板碑、および集石遺構付近から、火葬骨片が入ったピットを確認したことから、当該地が葬送や供養の場として機能していたと推量されている。刈原遺跡【59】では、平成 26 年（2014）に実施した農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴う発掘調査において、農業用の水溜施設と考えられる遺構の覆土中より白石古窯跡群のものと考えられる甕片が出土している。熊野遺跡【16】では、平成 27 年（2015）の発掘調査において長軸 3.9m、短軸 2.4m を測る方形竪穴遺構が確認された。これは倉庫的な性格を持つ遺構と推定されるが、底面からは龍泉窯系の鎬蓮弁文青磁碗片が出土していることから当該地周辺の中ノ原遺跡で発見された板碑を伴う蔵骨器に納められた被葬者と関わりを持つ在地富裕層などが存在した可能性がある（岩沼市教育委員会 2013c・2016a、岩沼市史編纂室 2015・2018a）。

写真 8　熊野遺跡の方形竪穴遺構

写真 9　岩蔵寺遺跡の集石遺構

近　世

本市は近世において城下町、宿場町として発展し、竹駒神社の門前町としても賑わいを見せたといわれ、調査実績もほかの時代に比べて近世遺跡が多い傾向にある。過去には、鵜ヶ崎城跡【23】、丸山遺跡【53】、

竹駒神社境内遺跡【54】、下野郷館跡【1】、西須賀原遺跡【48】などで発掘調査が行われ、仙台藩政期の社会を研究する上で貴重な成果が得られている。近年では、平成 26 年（2014）に西土手遺跡【57】、新筒下遺跡【55】、刈原遺跡【59】、高原遺跡【60】などで農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴う発掘調査を行い、それぞれの遺跡で近世遺物や同時期の遺構を確認している。鵜ヶ崎城跡【23】の第 1 地点では、東北福祉大学吉井ゼミナールが発掘調査を行い、南北方向の溝跡やそれと併走する石積み遺構、根石群と柱穴、碗埋納遺構（完形の陶器碗にかわらけをかぶせ、意図的に正位の状態で埋めたと推測される）などが検出された。遺物の大半は肥前や瀬戸・美濃の磁器、相馬焼の陶器など 18 世紀後半～ 19 世紀前半の陶磁器が多い。第 4 地点では岩沼市教育委員会が土塁の発掘調査を行い，土塁の構築時期が中世まで遡ることや 4 時期の補・改修痕跡を確認している。中・近世の遺物の出土量は多くはないが、15 世紀前半頃の龍泉窯系青磁盤や天目釉を施した瀬戸産小壺、13 ～ 15 世紀頃の常滑産陶器甕、16 世紀末～ 17 世紀前半頃の志野焼染付風陶器などが出土している（岩沼市教育委員会 2005、岩沼市史編纂委員会 2015）。また、竹駒神社境内遺跡【54】では市指定有形文化財である竹駒神社向唐門の解体修復及び耐震補強工事に伴う発掘調査が行われ，宝永 7 年（1710）に伊達吉村によって本殿が修造された際に行われたと考えられる整地面で、幅 2.2 mほどの旧参道跡や区画施設の柱列跡、アワビ貝が埋納された神事関連遺構等が検出された。大堀相馬や肥前等の陶磁器が出土しており、近世の遺物が大半を占めている。特に瓦やかわらけの出土量が多く、江戸期の竹駒神社では小規模な建物や塀などの区画施設の一部に瓦を用いていた可能性がある。また、かわらけの出土量の多さは神社境内で行われる神事と密接に繋がった結果であると考えられる（岩沼市教育委員会 2009）。

写真 10　鵜ヶ崎城跡の土塁

写真 11　竹駒神社境内遺跡の旧参道

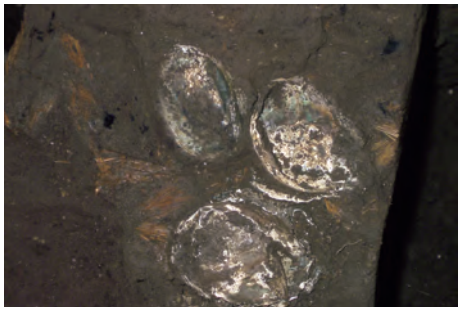


写真 12　竹駒神社境内遺跡のアワビ

近現代

貞山堀【43】では、平成 24 年（2012）から平成 27 年（2015）にかけて、排水機場の復旧事業、および護岸施設等の復旧事業に際して調査が実施されている。これらの調査では、昭和 42 年（1967）以降に築堤された堤防に先行する時期の堤防積土が、左岸を中心に残されていることを確認している。また蒲崎橋より南側の東岸の一部では、市内で唯一の石積みによる護岸施設が確認されているが、断面観察の結果から残存する堤防としては最古段階の護岸施設であることが判明している（岩沼市教育委員会 2017）。

写真 13　貞山堀の石積護岸施設

第Ⅱ章　調査に至る経緯と調査方法

1．調査に至る経緯

平成 23 年 2 月に五間堀川河川改修事業についての照会が仙台土木事務所からあり、岩沼市教育委員会では五間堀川の左岸一帯が下野郷館跡の範囲に含まれている旨を回答した。その後仙台土木事務所より平成 23 年 2 月 16 日付けで「五間堀川河川改修計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が提出された。協議書の提出後に宮城県教育庁文化財保護課と宮城県仙台土木事務所、そして岩沼市教育委員会の三者による現地協議が2月下旬に行われ、工事対象地が遺跡範囲内に多く含まれていることから事前に確認調査を実施して、遺構・遺物の有無、遺構密度及び遺構分布範囲などを把握する必要性があるとの指摘を宮城県教育庁文化財保護課より受けた。

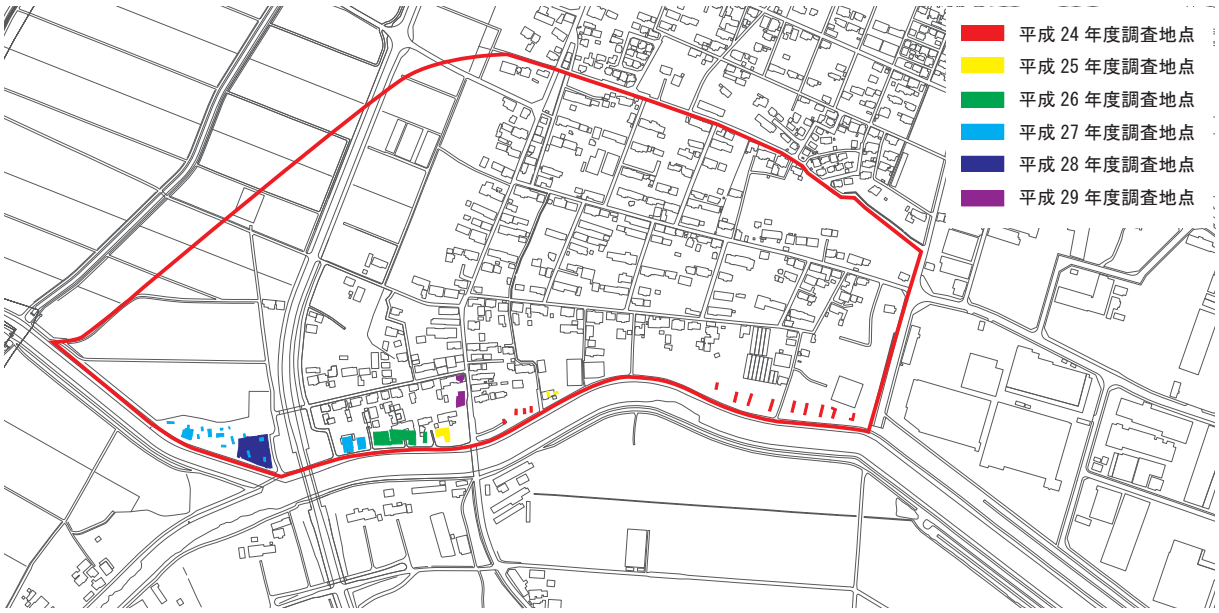
ついで文化財保護法第 94 条に基づく発掘通知を準備している段階の 3 月 11 日、東日本大震災の発生により、関係各機関とも震災対応に追われることとなってしまった。その後発掘通知は 4 月 11 日付で提出されたが、当然ながら復旧工事を最優先に行った結果、調査環境が整うまでに若干の時間を要することになった。

2．調査経過（第3図）

現地調査は宮城県仙台土木事務所の計画的な用地取得に合わせ、対象地区の東側から着手した。

平成 24 年度の調査は、平成 24 年 11 月に宮城県仙台土木事務所から岩沼市へ埋蔵文化財確認調査についての依頼が寄せられ、その後 11 月 27 日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されことを受け、12 月下旬に調査対象地点の草木の伐採を行い、平成 25 年 1 月8日から1月 31 日にかけて実施した。調査面積は 242 ㎡である。調査対象地はこれまで近隣で実施した確認調査などの結果から遺構・遺物が希薄である可能性が高く、トレンチによる確認調査に留まっている。

平成 25 年度の調査は、平成 25 年 8 月 23 日に「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されたことを受け、平成 25 年 11 月7日から平成 26 年1月 27 日にかけて実施した。調査面積は 244 ㎡である。調査地は昭和 61 年8月5日の水害時に五間堀川堤防が被害を受けたことから、応



第3図　下野郷館跡調査区位置図

急処置のために設置する大型土のうの採土地となっており、南側では遺構・遺物はすでに失われていたことから、北側部分の調査である。

平成 26 年度の調査は、平成 26 年9月1日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されたことを受け、平成 26 年9月2日から平成 27 年3月 10 日にかけて実施した。調査面積は 600 ㎡である。残土の関係上、調査区は3分割（15 A～ 15 C区）と設定したが、本報告ではA・B区については一括して記述する。なお、C区については遺構・遺物とも未発見であったことから記述については割愛した。

平成 27 年度の調査は、平成 27 年7月 14 日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されたことを受け、平成 27 年8月1日から平成 28 年1月 31 日にかけて実施した。調査面積は 833 ㎡である。調査は五間堀川沿いのA・B区、さらに志賀沢川沿いに設置したトレンチ調査の結果を受けて新たに設定したC区で本調査を実施しており、本報告書では各遺構位置等を記す場合には調査区名も 15 A、15 B、15 C区と呼称している。

平成 28 年度の調査は、平成 28 年3月 31 日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されたことを受け、平成 28 年5月9日から9月 30 日にかけて実施した。調査面積は 1,757 ㎡である。調査は平成 27 年度に志賀沢川沿いで実施したトレンチ調査の結果から、遺構・遺物が濃密に確認できた範囲に設定したものである。

平成 29 年度の調査は、平成 28 年2月 24 日付で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」が仙台土木事務所と岩沼市によって締結されたことを受け、平成 29 年4月6日から5月 19 日にかけて実施した。調査面積は 310 ㎡である。なお、生活道路の関係からA・Bの2区に分割しているため、それぞれの調査区名称で報告する。

3．基本土層

第Ⅰ章で述べたように、本遺跡地は阿武隈川・五間堀川・志賀沢川によって形成された自然堤防、さらには仙台平野沿岸部で顕著に発達する浜堤上から後背湿地にかけて展開している。また土地利用のあり方についても宅地、畑地、水田などとして利用されており、上層部分については地点ごとの相違が著しい。しかしながら、今回の調査対象地については五間堀川・志賀沢川に面した地点であることから、大半の調査区での遺構確認面は海抜 0.8 m前後で検出される自然堤防を形成するにぶい黄褐色シルト層（第Ⅳ層）上面であり、また調査地の東側及び北側では浜堤形成砂の褐色微粒砂（第Ⅵ層）が確認面となる。

第Ⅰ層：現代表土。宅地、畑地、水田として利用されており、層厚は 20 ～ 30 ㎝ほどである。

第Ⅱ層：Ⅰ層直下で見られる客土。宅地化に伴う盛土と考えられ、層厚は 20 ㎝ほどである。

第Ⅲ層：畑地の耕作土とみられる黒褐色、または暗褐色の砂質シルト層。ほぼ全域で確認されており、微量の炭化物がみとめられる。層厚は 20 ～ 50 ㎝ほどである。

第Ⅳ層：調査範囲の大部分で確認されたにぶい黄褐色シルト層。水成堆積とみられる。北から南へかけて傾斜し、北側では層厚5㎝ほどと薄くなるが、南側では 20 ～ 40 ㎝ほどの厚みが確認できる。中世以降の遺構・遺物の確認面。

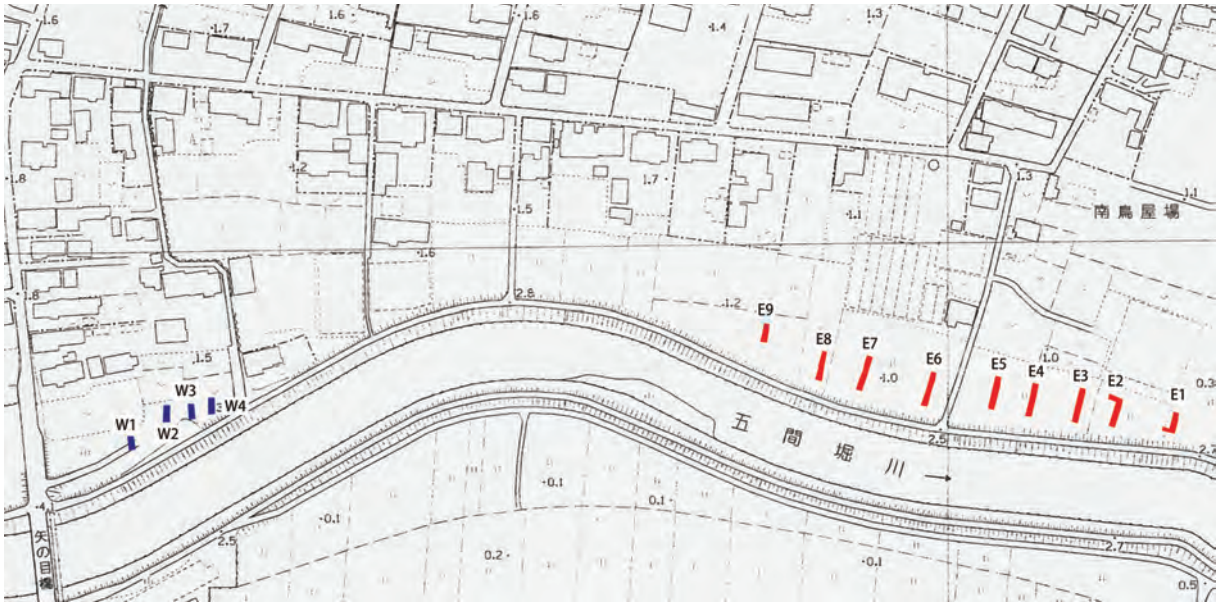
第Ⅴ層：平成 29 年度の調査で確認されたにぶい黄褐色砂質シルト層。層厚は 10 ㎝ほどであるが、層中より古墳時代中期の南小泉式の坏が出土しており、堆積時期としては古墳時代中期頃と考えられる。

第Ⅵ層：調査範囲の北側のみの確認。仙台平野沿岸部で形成される第Ⅱ浜堤列形成砂とみられる。平成 24 年度の調査では自然堤防形成土によって切られていることが確認されている。中世以降の遺構・遺物の確認面。

第Ⅲ章 平成 24 年度の調査成果

平成 24 年度の調査は、対象面積は広大であるものの、近隣の調査で遺構・遺物の分布がまばらであることから、遺構・遺物の有無を判断するため五間堀川直交するトレンチを設定し、調査を実施した。なお、五間堀川が北に張り出す地点で調査区が大きく分断されることから、調査時にはこの地点より東側の調査区を「東区」、西側の調査区を「西区」と呼称している。また東区では計9本、西区では4本のトレンチを設定しているが、各トレンチの名称は東区では東からE1～9、西区では西からW1～4と附している。

調査はまず対象地内の刈り払いを平成 24 年 12 月 27・28 日、平成 25 年1月4日にかけて実施し、その後1月7日にトレンチの設定を行った。重機を用いた掘削は1月8日からであり、表土を除去したのちに人力で壁面及び確認面の精査を行った。また必要に応じて遺構の性格把握や、確認面以下での遺構面の有無を掴むことを目的として堆積土層の掘り下げを部分的に行った。さらに随時記録のために写真撮影を行い、各トレンチの図面を作成している。なお調査期間は厳冬期であり、1月 14 日に大雪に見舞われたことをはじめとして、毎日のように地面が凍てついたことから作業は困難を極めたが、1月 29 日に現地作業を終了し、1月 31 日に埋戻しを完了している。以下に各トレンチの調査内容を記す。



第4図 平成 24 年度調査 トレンチ配置図

1. 東区の調査

E1トレンチ

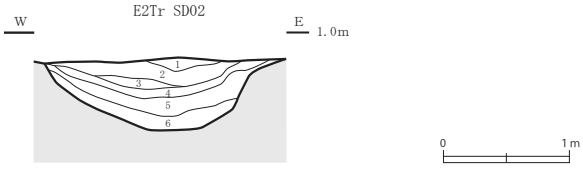
当初は東西3m、南北 11 mで設定していたが、その後調査区を南北に縦走する溝跡が確認されたことから、その立ち上がりを掴むために南側において 3.5 mほど部分的に拡張した。

トレンチ内の東側では浜堤形成層の一種である青灰色砂層が確認され、西側では黄褐色粘土ブロックを多量に含む黒褐色粘質土を覆土とする溝跡が確認されている。溝内からは丸太材の先端を加工している杭が出土している。南壁際で土層確認を行う予定であったが、湧水が激しく、また壁面が崩落したことにより断念している。なお、このトレンチの確認面より上層の土層堆積は湿地性の堆積を示していた。

E2トレンチ（第5図）

E2トレンチも当初は東西3m、南北 15.5 mで設定していたが、その後調査区を南北に縦走する溝跡が確認されたことから、その立ち上がりを掴むために北側において 4.5 mほど部分的に拡張した。

耕作土下で検出したにぶい黄褐色シルト層を確認面として遺構精査を行い、灰黄褐色粘質シルトを覆土とする溝跡が存在していたことを確認した。しかしながら土層観察の結果、この溝跡は耕作土を掘り込んでつくられていることが判明した。遺物の出土は無い。



E2Tr SD02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	褐色	10YR4/6	粘質シルト	しまりやや弱い。マンガンを少量含む。
2	褐色	10YR4/4	粘質シルト	しまりやや弱い。マンガンをやや多く含む。
3	褐色	10YR4/6	シルト	しまり弱い。暗褐色土ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまりやや弱い。マンガンを多量含む。
5	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	しまりやや弱い。マンガンを多量含む。
6	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	しまりやや強い。マンガンを多量、灰黄褐色土ブロックを少量含む。

第5図　E2TrSD02 土層断面図

E3トレンチ

東西3m、南北 18 mで設定した。耕作土下の自然堆積層を確認面としているが、南側ではにぶい黄褐色シルト層、中央から北側にかけては黄褐色砂層となっている。検出遺構は中央付近を東西に走る溝跡1条のほかは、畑耕作時の天地返しと思われる溝状遺構のみである。溝跡の覆土は灰黄褐色粘土ブロックを含む褐灰色砂であり、幅 60cm、確認面からの深さは約 10 ㎝である。遺物の出土は無い。

E4トレンチ

東西3m、南北 17.5 mで設定した。耕作土下の自然堆積層を確認面としており、E3トレンチ同様に南側ではにぶい黄褐色シルト層であり、中央から北側にかけては褐灰色砂層となっている。このトレンチでも畑耕作時の天地返しと思われる溝状遺構が多数見られるが、中央付近には耕作土直下から掘り込まれている、東西方向に走る溝跡が検出されている。両隣に設定しているE3・E5トレンチでも、この延長線上に同様の規模の溝跡があることから、一連の遺構である可能性が高い。溝跡の覆土は黄褐色粘質シルトとマンガンをやや多く含む褐灰色砂であり、幅 60cm、確認面からの深さは約 10 ㎝である。遺物の出土は無い。

E5トレンチ

東西3m、南北 17.5 mで設定した。耕作土下の自然堆積層を確認面としており、E4トレンチ同様に南側ではにぶい黄褐色シルト層、中央から北側にかけては褐灰色砂層となっている。中央より北側では黒褐色粘土が集中して分布していたが、これらは以前に行われた耕地整理時の重機による掘削痕であった。またE3・E4トレンチ同様に中央付近には耕作土直下から掘り込まれている、東西方向に走る溝跡が検出されている。遺物の出土は無い。

E6トレンチ

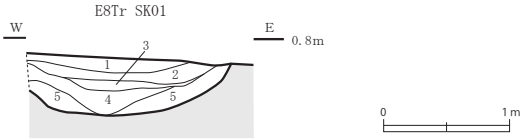
東西3m、南北 18 mで設定した。耕作土下の自然堆積層を確認面としており、南側ではにぶい黄褐色シルト、黒褐色粘土、中央から北側にかけては褐灰色砂層となっている。遺構・遺物は発見されなかった。

E7トレンチ

東西3m、南北 17.5 mで設定した。耕作土下の自然堆積層を確認面としており、南側では黄灰色シルト、暗褐色粘土、灰黄褐色粘土、中央から北側にかけては褐灰色砂層となっている。中央付近にはE5トレンチと共通する黒褐色粘土が分布するが、現代攪乱と考えられる。南側の粘質土の部分では畑耕作時の天地返しと思われる溝状遺構がみられる。遺物の出土は無い。

E8トレンチ（第6図）

東西3m、南北 15 mで設定した。耕作土下の褐色砂を確認面としている。他のトレンチで認められた南側のシルト層は確認されていない。遺構は北側で土坑を1基確認している。上層には人頭大の礫が露頭しており、当初は石組井戸の可能性を考慮したが、掘り下げた結果では確認面より約 50cm で底面が確認できたことから土坑であると判断した。直径は 1.8 mほどで円形を呈し、覆土はにぶい黄褐色、灰黄褐色粘土で構成されている。このほかには遺構は検出されていない。遺物は土坑内より堤焼の鉢の小片が 1 点出土している。



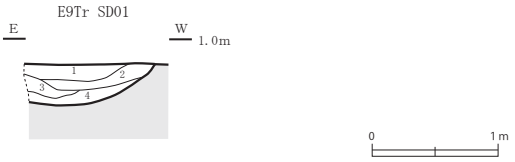
E8Tr SK01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	しまりやや弱い。耕作土を少量混入。
2	灰黄褐色	10YR5/2	粘質シルト	しまりやや弱い。マンガンを多量含む。
3	灰黄褐色	10YR5/2	粘質シルト	しまり・粘性強い。マンガンを多量含む。
4	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	しまりやや弱い。マンガンを少量含む。
5	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	しまり強い。マンガンを微量含む。

第6図　E8TrSK01 土層断面図

E9トレンチ（第7図）

東西 3.5 m、南北 9.5 mで設定した。耕作土下の褐色砂を確認面としている。他のトレンチで認められた南側のシルト層は確認されていない。遺構は調査区東壁に沿う形で溝跡が南北方向に存在しているが、東肩は調査区外へ展開するために規模は不明である。覆土はマンガンをやや多く含んでいる灰黄褐色粘土粒である。このほかには遺構は検出されていない。遺物は溝跡内より砥石小片が 1 点出土している。



E9Tr SD01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまりやや弱い。耕作土を少量混入。
2	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト	しまりやや弱い。マンガンをやや多く含む。
3	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	しまり強い。マンガンをやや多く含む。
4	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	しまりやや強い。マンガンを多量、炭化物を微量含む。

第7図　E9TrSD01 土層断面図

2．西区の調査

W1トレンチ

東西3m、南北7mで設定した。現代表土の下に旧建造物に伴う盛土が存在し、その下には約 50cm の厚みを持つ近世耕作土が存在する。この耕作土中には近世陶磁器や鼈甲製櫛片が含まれている。確認面はこの近世耕作土下で検出した自然堆積層上面としており、南側では黒褐色粘質土、北側は褐灰色砂層となっている。南側では耕作土を掘り込む土坑が 1 基検出されているが、土坑内からの遺物の出土は無い。

W2トレンチ

東西3m、南北8mで設定した。現代表土の下には厚く耕作土が存在する。調査区中央及び南側の一部は攪乱によって大きく失われている。確認面は耕作土下で検出したにぶい黄褐色シルト層としており、人力による精査を行ったが遺構・遺物は確認できなかった。

W3トレンチ

東西 2.5 m、南北 7.5 mで設定した。現代表土の下には厚く耕作土が存在する。確認面は耕作土下で検出した褐色砂である。精査を行ったところ、当初は東西方向の溝状遺構の可能性を考えていたプランが存在していたが、サブトレンチの結果から耕作痕と判断した。なお、自然堆積土層は南から北側へかけて緩やかな傾斜を示していることから、本トレンチの北側付近に落込みが存在していることが推定できる。遺物は表土及び耕作土掘削時に近世～近代陶磁器小片が出土している。

W4トレンチ

東西 2.5 m、南北8mで設定した。現代表土の下には厚く耕作土が存在するが、耕作土は厚さ3～5㎜程度の炭化物層を間層として挟んでいる。確認面は耕作土下で検出した褐色砂である。W3トレンチ同様、当初は東西方向の溝状遺構の可能性を考えていたプランが存在していたが、サブトレンチの結果から耕作痕と判断した。なお、サブトレンチで確認した自然堆積土層は、中央部では南から北へかけて緩やかな傾斜を示しているが、北側では北から南への傾斜となっており、両者ともに立ち上がりと考えられることから本トレンチとW3トレンチ間に落込みが存在していることが推定できる。遺物は表土、及び耕作土掘削時に近世～近代陶磁器小片が出土している。

3．平成 24 年度調査のまとめ

・東区では大半のトレンチで現在の耕作土直下より浜堤形成砂が確認された。この中ではE6トレンチなどで設定したサブトレンチにおいて、粘土層が南へ向かって傾斜している状況も確認されている。

・東区で確認された遺存状況が良好な遺構はE8トレンチの土坑1基、E9トレンチの溝跡1条である。E3～E5トレンチで確認した溝跡は、確認面から底面まで約 10 ～ 20cm ほどであり、著しく削平を受けていることが確認された。

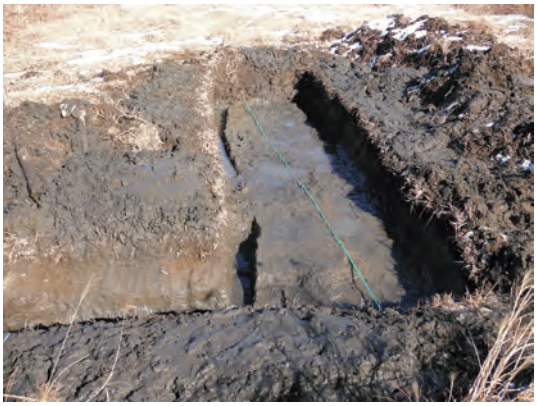
・西区では、W2トレンチにおいて大規模な攪乱が存在していることが明らかとなった。またすべてのトレンチで

近世耕作土が厚く存在していることが判明した。

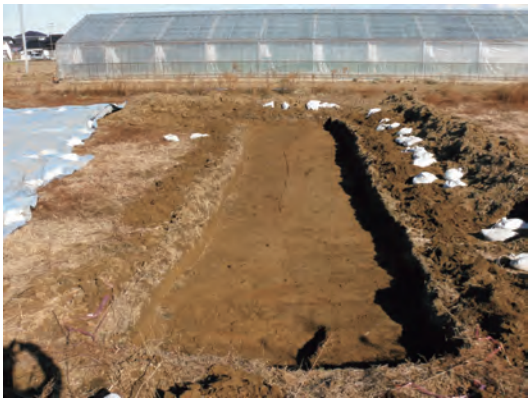
・確認調査を行った東区・西区とも、遺物の出土量は少なく、また遺構は極めて希薄であることから、今回の対象地は生産域、あるいは荒蕪地のような土地利用状況であったと推察される。

調査地点周辺の状況（南側上空から）

下野郷館跡の全景（東側上空から）



E1トレンチ全景（南から）



E2トレンチ全景（南から）

E3トレンチ全景（南から）

E4トレンチ全景（南西から）

E5トレンチ全景（南から）

E6トレンチ全景（南から）

E6トレンチ南側の土層堆積状況（南東から）

Ｅ７トレンチ南側の土層堆積状況（北東から）

Ｅ７トレンチ全景（南から）

Ｅ８トレンチ全景（南から）

Ｅ９トレンチ全景（南から）

Ｗ１トレンチ全景（北から）

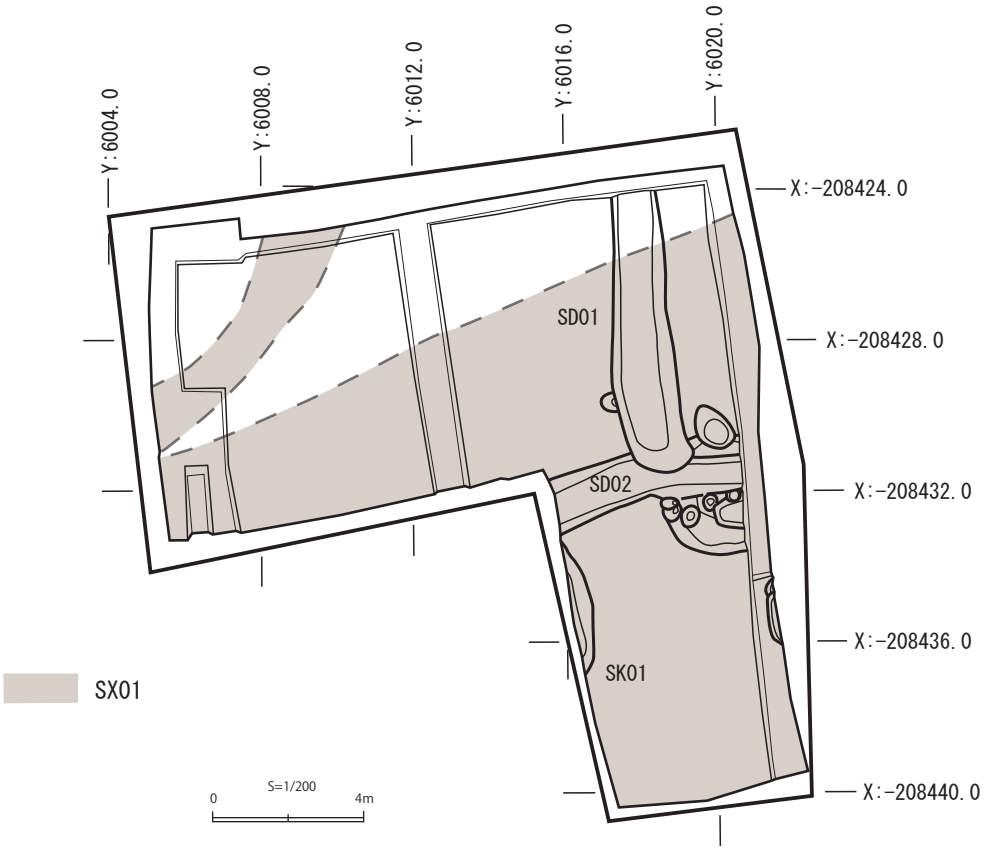
Ｗ２トレンチ全景（北から）

Ｗ３トレンチ全景（北から）

第Ⅳ章　平成 25 年度の調査成果

平成 25 年度の調査地点は、矢の目橋の西側で本調査（13 A区）、東側の住宅移転が完了した箇所でトレンチによる確認調査（13 B区）を実施した。調査面積は計 244 ㎡である。

13 A区での調査では溝跡2条、土坑3基、柱穴3口が発見されたほか、旧河道と考えられる落ち込みを検出し、近世陶磁器、近代陶磁器、金属製品、石製品などの遺物が発見されている。



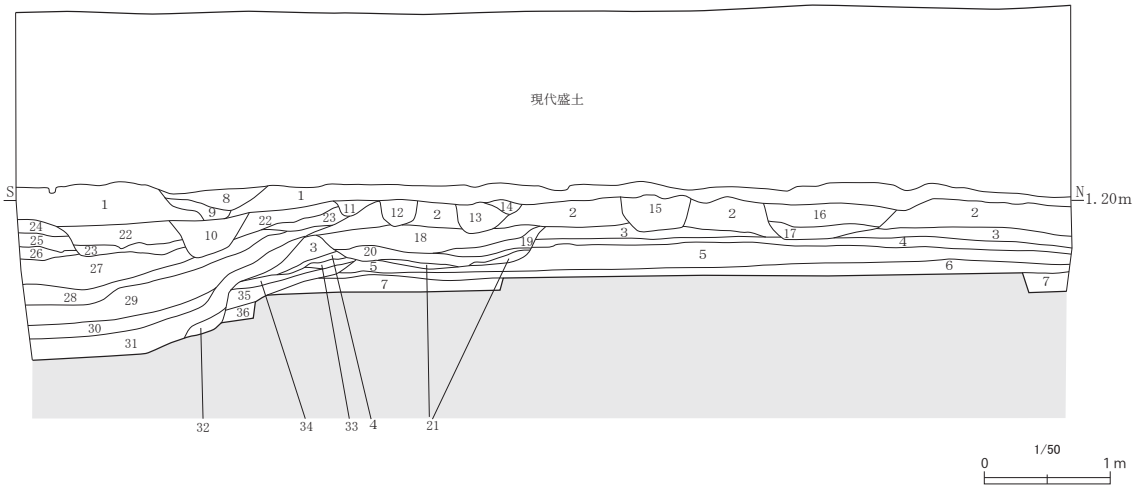
第8図　平成 25 年度遺構全体図

1．土坑

SK01土坑（第8・10・11 図、第2表）

南側調査区の西壁付近に位置する。調査区外へ展開するため、平面形状・規模については不明であるが、検出した範囲での確認面からの深さは約 50cm であり、断面形状は皿形を呈する。堆積上は概ね4層に分層でき、すべて人為的埋上である。

第 11 図は SK01 から出土した磁器碗の蓋で、外面瑠璃釉に赤の色絵を描く。19 世紀末以降。

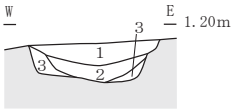


西壁土層断面図　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまりやや弱い。炭化物少量含む。近代陶磁器を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまり強い。炭化物・砂利・近代陶磁器片を微量含む。
3	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	シルト	しまり弱い。暗灰黄色土をブロック状に少量含む。
4	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト	しまり強い。マンガンをやや多く含む。
5	黒褐色	2.5Y3/2	砂質シルト	しまりやや弱い。微粒砂主体。層中に南へ傾斜するラミナあり。
6	灰オリーブ	5Y5/2	砂質シルト	しまりやや強い。マンガンを多量含む。
7	黒褐色	10YR3/1	砂	しまリ弱い。微粒砂主体。黄橙色微粒砂をラミナ状に含む。
8	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまり弱い。炭化物を微量含む。
9	黒褐色	2.5Y3/2	砂質シルト	しまりやや弱い。黒褐色土をブロック状に少量含む。
10	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	シルト	しまりやや弱い。暗黄褐色粘土ブロックをやや多く含む。
11	黒褐色	2.5Y3/2	砂質シルト	しまりやや弱い。炭化物を微量含む。
12	黒褐色	2.5Y3/2	砂質シルト	しまりやや弱い。炭化物を微量含む。
13	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	シルト	しまりやや弱い。炭化物を微量含む。
14	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまりやや強い。炭化物を少量含む。
15	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	シルト	しまり弱い。黒褐色土をブロック状に少量、炭化物を微量含む。
16	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト	しまり弱い。炭化物を微量含む。
17	オリーブ褐色	2.5Y4/3	シルト	しまりやや強い。暗灰黄色粘土ブロックを多量含む。
18	黒褐色	10YR3/1	砂	しまり弱い。褐灰色土ブロックを少量含む。細粒砂主体。
19	黒褐色	2.5Y3/2	砂質シルト	しまりやや弱い。微粒砂主体。黒色砂を帯状に含む。
20	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	しまりやや強い。黒色微粒砂・マンガンをやや多く含む。
21	黒色	10YR2/1	砂	しまりやや弱い。細粒砂主体。褐色砂とラミナ状となる。
22	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト	しまりやや強い。炭化物を微量含む。
23	オリーブ褐色	2.5Y4/3	シルト	しまりやや強い。灰黄褐色土ブロックを少量、炭化物を微量含む。
24	黄灰色	2.5Y4/1	シルト	しまりやや強い。マンガンを極めて多量含む。
25	暗褐色	10YR3/3	砂	しまりやや弱い。細粒砂主体。にぶい黄褐色土ブロックを下位にやや多く含む。
26	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	しまりやや強い。暗褐色砂を帯状に含む。
27	灰黄褐色	10YR5/2	粘質シルト	しまり極めて強い。中位から下位にかけてマンガンを多量含む。
28	黒褐色	2.5Y3/1	砂	しまり極めて弱い。微粒砂主体。灰黄褐色粘土を帯状に含む。
29	灰黄褐色	10YR5/2	粘質シルト	しまり強い。暗灰黄色粘土を帯状に含む。
30	黒褐色	10YR3/1	砂	しまりやや弱い。細粒砂主体。暗灰黄色粘土とラミナ状となる。
31	黒褐色	10YR3/1	砂	しまりやや弱い。やや粗めの細粒砂主体。暗灰黄色粘土ブロックを少量含む。
32	黒褐色	10YR3/1	砂	しまりやや弱い。中粒砂主体。暗灰黄色粘土ブロックを少量含む。
33	黒色	10YR2/1	砂	しまりやや弱い。細粒砂主体。灰白色粘土ブロックをやや多く含む。
34	暗灰黄色	2.5Y4/2	粘質シルト	しまり強い。中位にマンガンを少量含む。
35	黒褐色	2.5Y3/1	砂	しまりやや強い。微粒砂主体。暗灰黄色粘土の薄層を含む。
36	暗灰黄色	2.5Y4/2	粘質シルト	しまり強い。上位にマンガンをやや多く、下位に黒色砂の薄層を含む。

第 9 図　西壁土層断面図

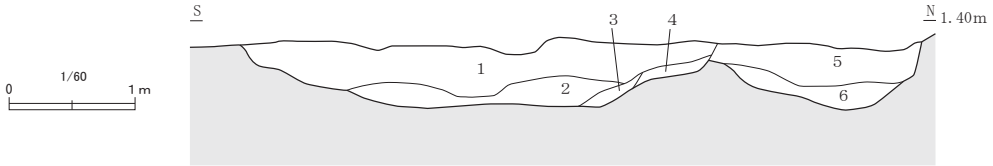
SD01 東西セク



SD01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト	シジミを主体とする貝殻を極めて多量、近世～近代陶磁器を多量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまりやや弱い。近世陶磁器・炭化物を少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまりやや弱い。オリーブ黒色土を少量含む。

SK01・SD02 南北セク



SK01・SD02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	オリーブ黒色	5Y3/1	粘質シルト	しまりやや弱い。炭化物をやや多く、暗褐色土粒を少量含む。
2	暗灰黄色	2.5Y4/2	粘質シルト	しまりやや弱い。炭化物を少量含む。
3	オリーブ黒色	5Y3/1	砂	しまり弱い。暗灰黄色粘土ブロックを少量含む。
4	黒褐色	2.5Y3/2	シルト	しまりやや強い。黒褐色砂を少量、炭化物を微量含む。
5	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物を少量含む。近世・近代陶磁器を含む。
6	オリーブ黒色	5Y3/2	粘質シルト	しまりやや弱い。炭化物を少量含む。近世・近代陶磁器を含む。

第 10 図　SD01、SK01・SD02 土層断面図

第 11 図　SK01 出土遺物

第2表　SK01 出土遺物観察表

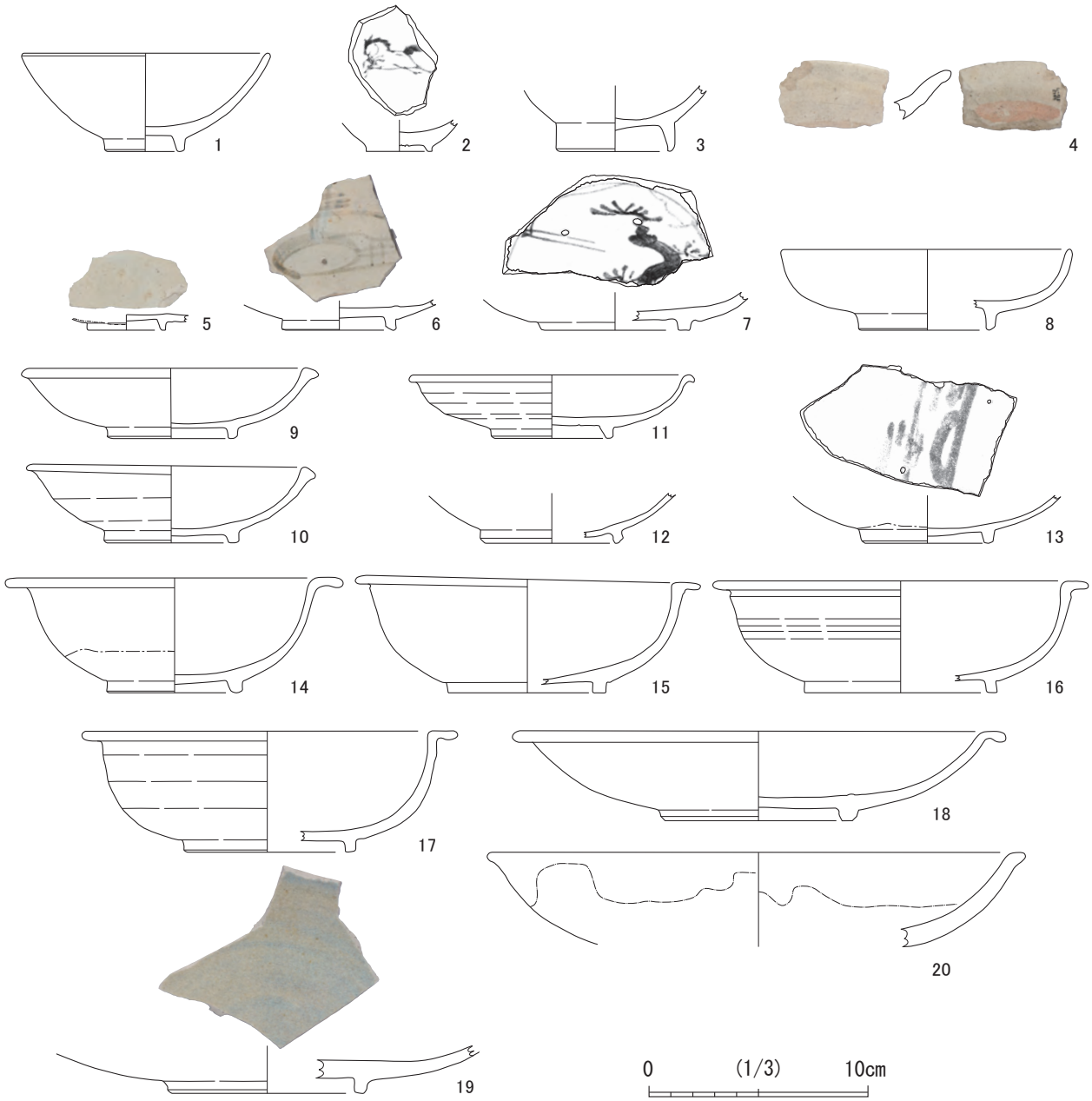
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)		
						口径	つまみ径	器高
1	SK01	染付磁器	蓋	瀬戸美濃	蓋付碗の蓋。外面瑠璃釉。魚文。19 世紀末以降。	10.6	4.2	2.7

2．溝跡

SD01溝跡（第8・10・12 ～ 31 図、第3～ 22 表）

調査区北側から南側にかけて直線的にのびる溝跡である。北側では調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 9.4m にわたって検出している。主軸方位は真北である。検出面での規模は上幅 2.2m、下幅 1.3m、確認面よりの深さは約 30cmを測る。断面形状は箱形を呈し、南側から北側へ緩やかに傾斜している。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋土である。なお、1層では大量のシジミの貝殻が北側を中心として確認され、2層では全面に渡って近現代陶磁器が大量に出土しているが、多量の炭化木材や焼けた壁土、焼土塊なども含まれていることから、火災後に溝内に投棄された可能性が考えられる。

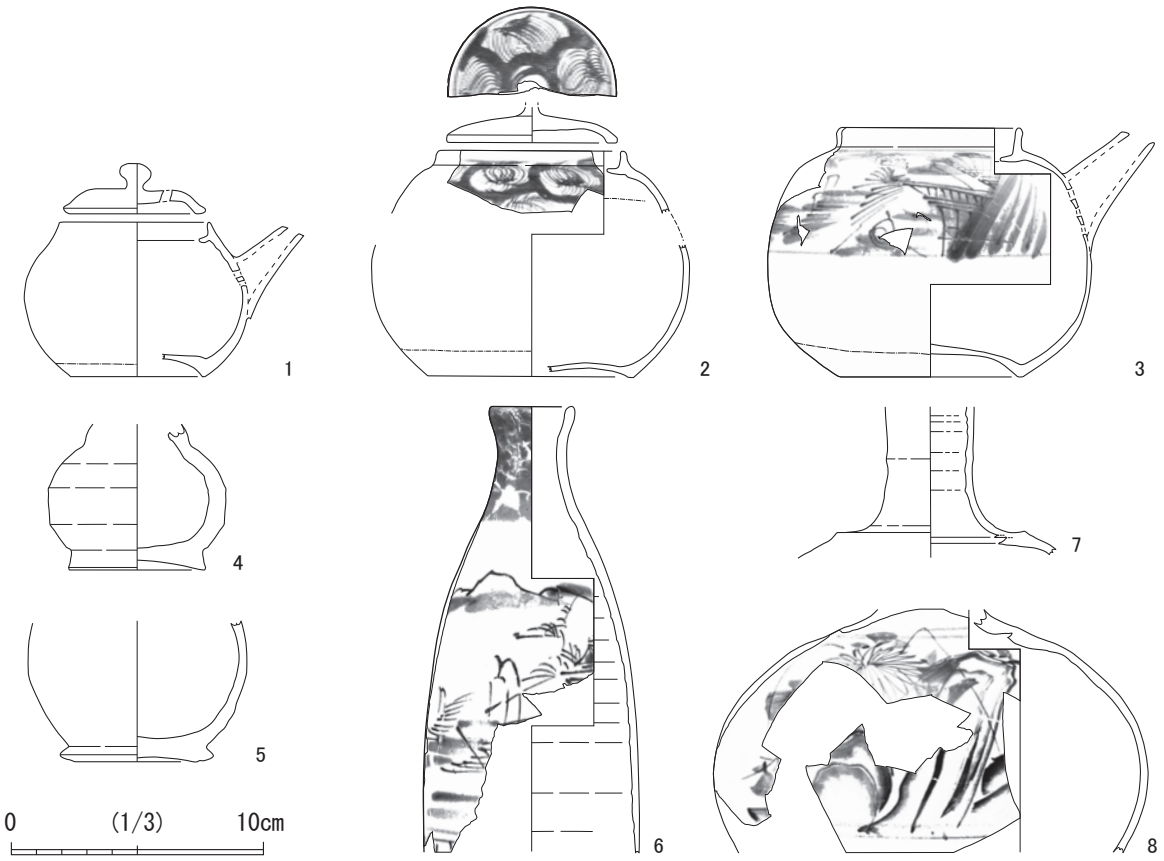
第 12 ～ 31 図はすべて SD01 からの出土である。第 12 図は陶器の碗および皿で、大堀相馬焼の灰釉碗、鉄絵皿と、見込みに駒絵を描いた碗がある。3は肥前陶器の呉器手碗で 17 世紀後半、4は瀬戸美濃産輪禿皿で 17 世紀後半である。9～ 18 は産地不明であるが、軟質で精良な胎土で薄く焼き上げられ、柔らかい質感を有する。口縁部を摘まんで三角形に仕上げたり、折り曲げて長く伸ばすところに特徴がある。19 は磁器質に焼きしまった皿、20 は小野相馬焼の皿である。第 13 図は大堀相馬焼の土瓶と徳利、産地不明の壺あるいは徳利である。大堀相馬焼の土瓶は、肩が張り落とし蓋であることから 19 世紀中葉である。第 14・15 図は陶器の擂鉢である。第 14 図と第 15 図1～9は堤焼で 18 世紀末以降、10・11 は胎土は堤焼に近似するが口縁部の形態に違いがみられる。12 は口唇部下一条の隆帯が巡る。同様の特徴は堤焼の古い段階にみられるとされる。13 は還元焔焼成された丹波産擂鉢で 17 世紀後葉。16 図は陶器の捏鉢および甕である。胎土の特徴から1は小野相馬焼、2・6は堤焼であろう。図 17 は灯火具である。1は餌皿とも考



第 12 図 SD01 出土遺物1

第3表 SD01 出土遺物観察表1

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	陶器	碗	大堀相馬	19 世紀末～。	(11.4)	(3.6)	4.5
2	SD01	陶器	碗	大堀相馬か	見込に馬絵染付。高台内に渦巻き状削り。		3.0	(2.45)
3	SD01	陶器	碗	肥前か	呉器手碗か。内外面に灰釉。底部外面に墨書。		(5.2)	(3.0)
4	SD01	陶器	皿	瀬戸美濃	輪禿皿。志野。登窯第 3 小期～第 5 小期。17 世紀後半。			(2.2)
5	SD01	陶器	皿	不明	内外面灰釉（糠白釉）。見込に鉄絵。底部外面に墨書。19 世紀前葉～中葉。		3.6	(1.8)
6	SD01	陶器	皿	不明	見込に鉄絵。底部外面に不明墨書。18 世紀末～ 19 世紀中葉。		5.2	(1.4)
7	SD01	陶器	皿	大堀相馬	鉄絵皿。見込に鉄絵。19 世紀前葉～中葉。		(6.8)	(1.8)
8	SD01	陶器	皿	不明	内外面に灰釉。見込に鉄絵。18 世紀末～ 19 世紀初。	(13.4)	(6.2)	3.7
9	SD01	陶器	皿	不明	内外面に緑釉。底部外面に不明墨書。時期不明。	13.6	5.6	3.3
10	SD01	陶器	皿	不明	内外面に灰釉。見込に線状の鉄絵。時期不明。	13.2	6.0	3.6
11	SD01	陶器	皿	不明	内外面に灰釉。見込に線状の鉄絵。底部外面に不明墨書。時期不明。	13.0	5.4	2.9
12	SD01	陶器	碗	不明	内外面に緑釉。底部外面に墨書。時期不明。		(6.6)	(2.3)
13	SD01	陶器	皿	不明	内外面にやや青みがかった灰釉。見込に呉須絵。底部外面に墨書「長」。足付ハマ痕跡。19 世紀中葉～。		6.0	2.25
14	SD01	陶器	鉢	不明	内外面に灰釉。底部外面に墨書。時期不明。	15.4	6.2	5.3
15	SD01	陶器	鉢	不明	内面に呉須絵山水文。底部外面に墨書。時期不明。	(15.8)	(7.2)	5.4
16	SD01	陶器	鉢	不明	内面に呉須絵山水文。時期不明。	(17.2)	(8.8)	5.05
17	SD01	陶器	鉢	不明	内面に呉須絵山水文。時期不明。	(17.0)	7.6	5.5
18	SD01	陶器	皿	不明		22.6	9.0	4.15
19	SD01	陶器	皿	不明	焼き締まりが良く，磁器質。		(4.6)	(2.15)
20	SD01	陶器	皿	小野相馬	蛇ノ目釉剥ぎ折縁大皿。18 世紀中葉～後葉。	24.6		(4.3)

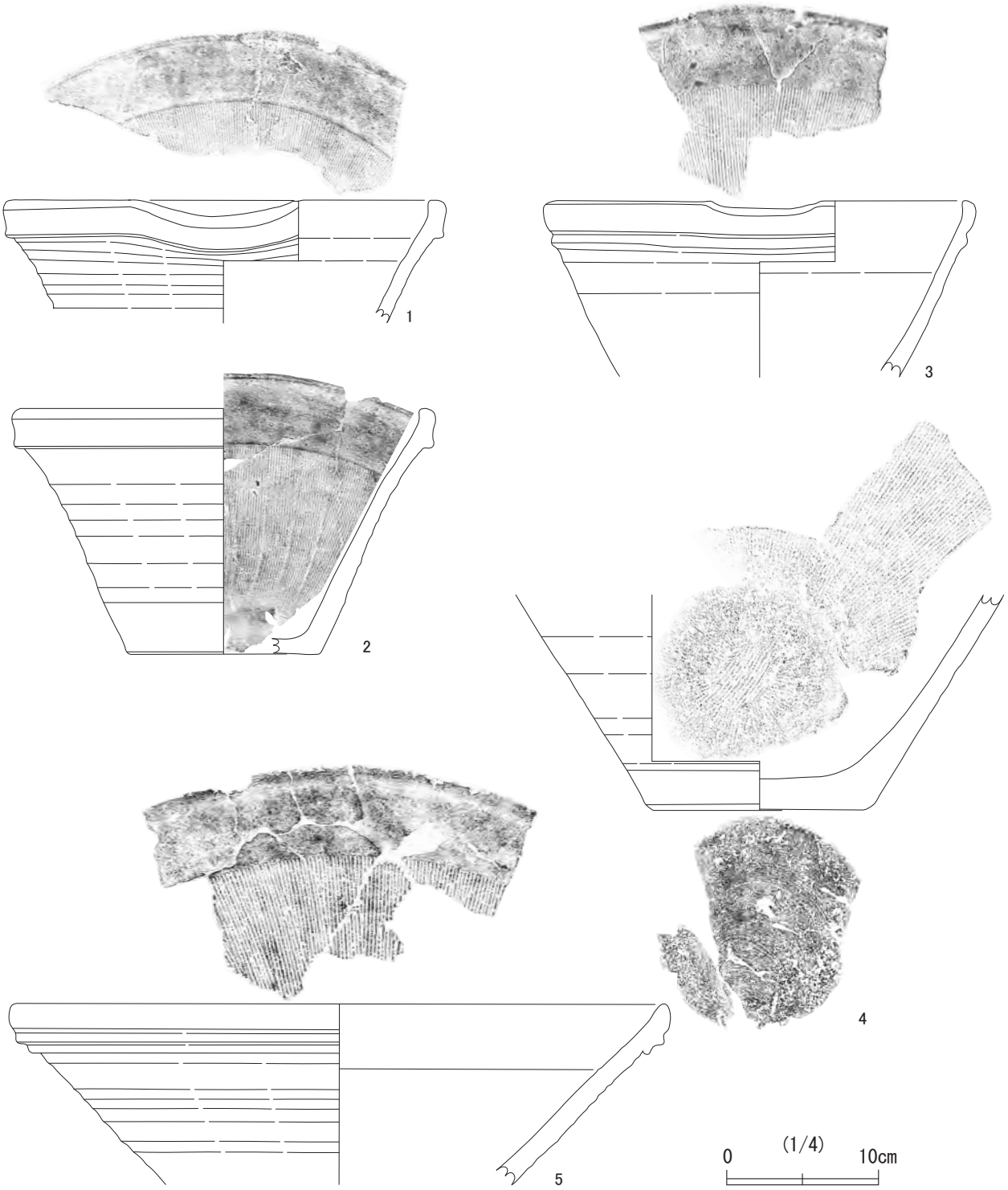


第 13 図　SD01 出土遺物2

第4表　SD01 出土遺物観察表2

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	陶器	土瓶	大堀相馬	19 世紀中葉。	6.1	5.3	6.15
2	SD01	陶器	土瓶	大堀相馬か	外面呉須絵。	7.3	8.2	(9.0)
3	SD01	陶器	土瓶	大堀相馬	19 世紀中葉。	7.4	7.1	9.5
4	SD01	陶器	壺	不明			5.4	(5.8)
5	SD01	陶器	壺	不明	胎土精良。焼き締まり良い。磁器質。底部外面を除き，内外面に灰釉。		6.1	(5.6)
6	SD01	陶器	燗徳利	大堀相馬	19 世紀中葉。	2.3		(17.8)
7	SD01	陶器	徳利	大堀相馬	飛鉋。19 世紀中葉。			(6.2)
8	SD01	陶器	徳利	大堀相馬	19 世紀中葉。			(9.2)

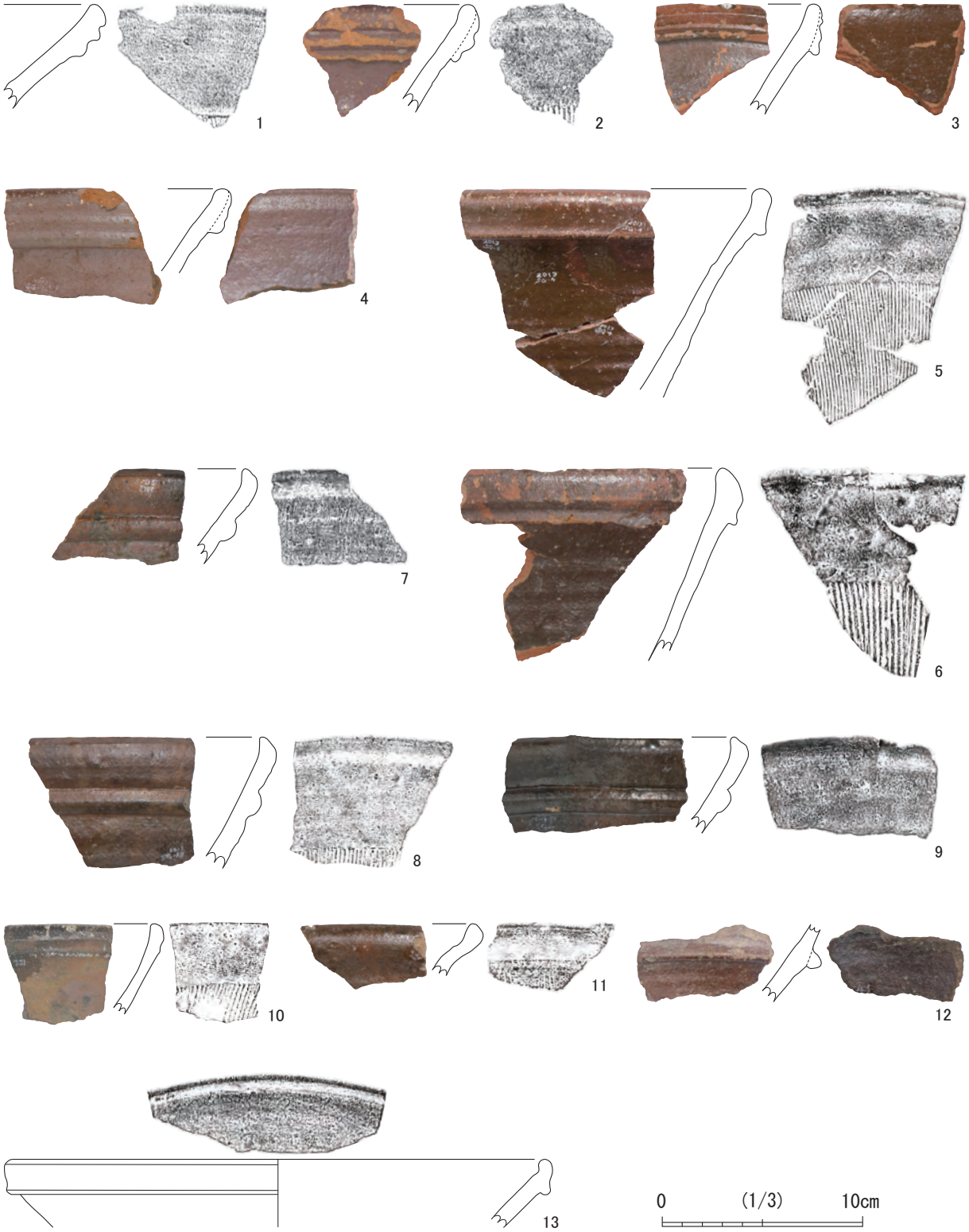
えられるが炭化物の付着と油煙痕がみられる。第 18・19 図は磁器碗である。第 18 図はすべて端反碗で、1は外面瑠璃釉の蓋である。文様は手描きのものと型紙摺りのものがある。第 19 図1～ 15 は丸碗、16 ～ 24 は平碗である。1 と 20 は銅板転写、それ以外は型紙摺、21 と 22 は酸化クロムを用いた青磁に白盛で文様を描く。25 は色絵の子供茶碗である。第 20 図は磁器小碗、第 21 図は磁器小坏である。第 21 図2、4は兵隊盃、同じく3は宣伝盃。11・12 は酸化クロム青磁に白盛で草花文を描く。第 22 ～ 25 図は、磁器皿である。第 22 図はいずれも肥前産で 17 世紀後半～ 18 世紀前半である。第 23 図は瀬戸美濃産と切込かと思われる皿である。第 24 図は瀬戸美濃産の大皿で型紙摺りである。第 25 図は小皿と手塩皿である。3は型押し成型の切込の輪花皿、11 ～ 15 は切込の手塩皿である。第 26 図は瀬戸美濃産の磁器鉢である。第 27 図は磁器段重である。1と2は三段の組み合わせが確認できた。1は銅板転写、2は型紙摺りである。3は胎土・釉とも精良で素描のみで文様を描く精製品である。段重最下段であろう。第 28 図は磁器急須・徳利・瓶類である。4は龍泉窯系青磁で瓶の肩部である。第 29 図は磁器戸車、第 30 図はその他の土製品等である。第 30 図1は胎土黄橙色、薄手の陶器底部で、外面に瘤状の粘土を張り付けている。6は内面に布目痕がみられ、型作りの人形である。7・8も同様な特徴がみられ、人形あるいは機材型の土製



第 14 図 SD01 出土遺物3

第5表 SD01 出土遺物観察表3

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	内外面に鉄釉。胎土は明褐色で砂粒を微量含む。18 世紀末～ 19 世紀。	(28.8)		(8.1)
2	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	内外面・底部外面に鉄釉。卸目 32 条。底部内面周縁部磨滅。底部外面磨滅。胎土は明褐色で砂粒を微量含む。18 世紀末～ 19 世紀。	(28.0)		16.2
3	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	内外面に鉄釉。胎土は灰黄褐色。18 世紀末～ 19 世紀。	(27.0)		(11.6)
4	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	内外面，底部外面に鉄釉。体部下端に回転ヘラケズリ。底部外面回転糸切り。底部内面周縁部磨滅。卸目 32 条，底部内面に 1 条。胎土は明褐色で砂粒を少量含む。18 世紀末～ 19 世紀。		15.0	(14.2)
5	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	内外面に鉄釉。胎土は明褐色で砂粒を微量含む。18 世紀末～ 19 世紀。	(43.6)		(11.9)

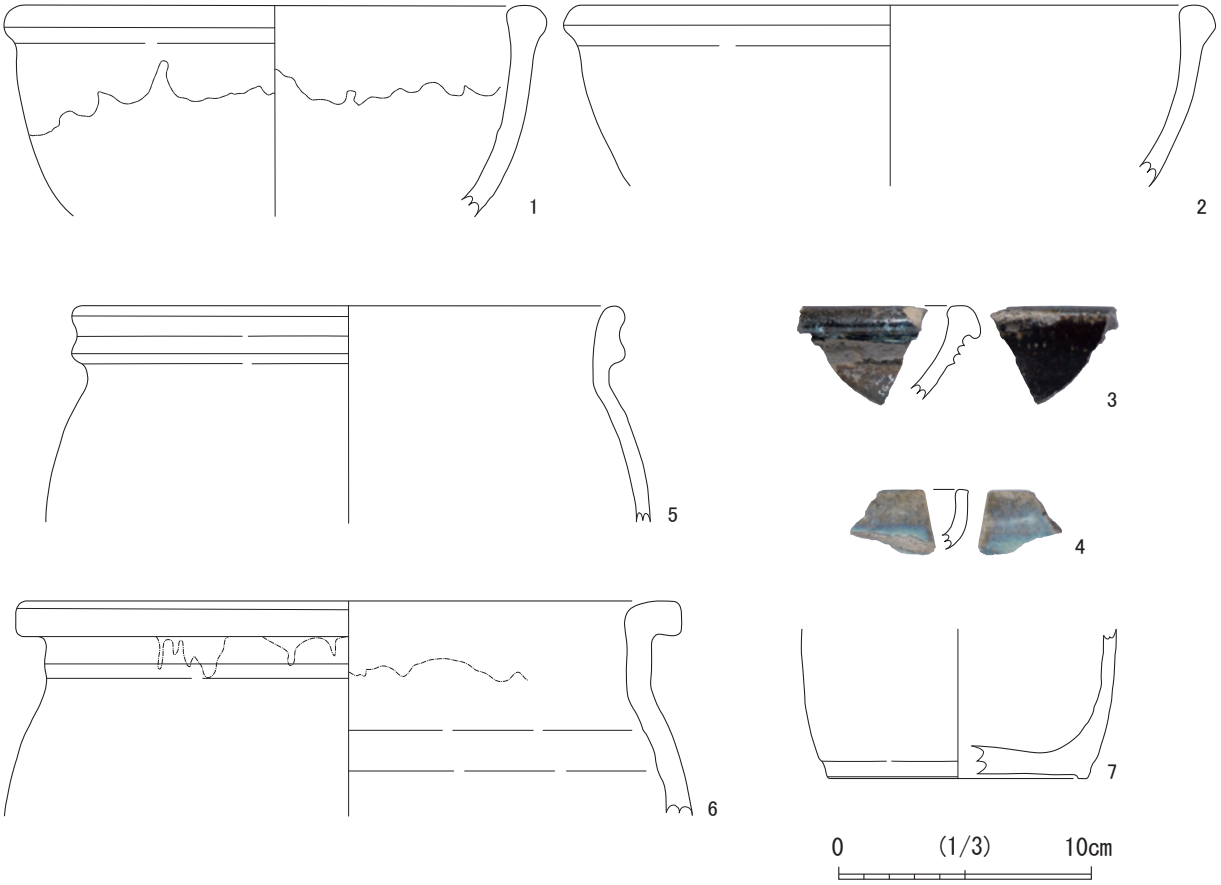


第 15 図　SD01 出土遺物4

品の一部と考えられる。第 31 図は石製品である。堆積土3層中から石硯が2点　と砥石が2点出土している。石硯はともに形態が長方硯で、硯側は一段高い縁が巡る。1は陸の中央が使用により摩耗し、凹んでいる。いずれも石材は粘板岩で、雄勝産の玄昌石とみられる。砥石は2点とも中砥とみられ、石材は凝灰岩である。3は自然礫を多面的に利用し、複数の砥磨面をもつ。4はやや扁平な角柱状に整形し、1面が主な砥磨面

第6表 SD01 出土遺物観察表 4

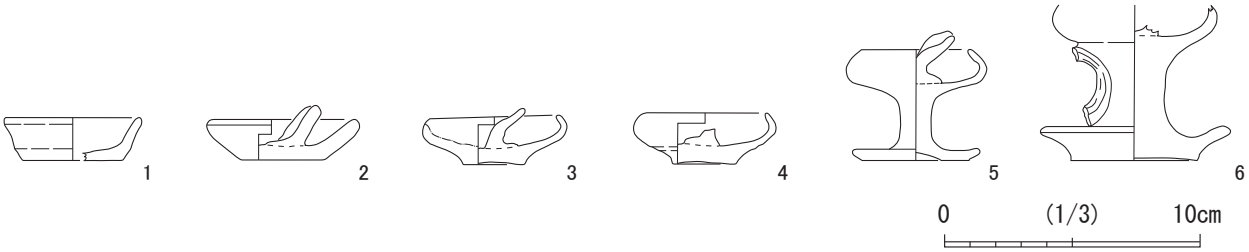
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	胎土は明褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄釉。18 世紀末～ 19 世紀。			(5.2)
2	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	胎土は明褐色で砂粒を少量含む。内外面に鉄釉，ムラがある。18 世紀末～ 19 世紀。			(6.5)
3	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	胎土は明褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄釉。18 世紀末～ 19 世紀。			(5.5)
4	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	胎土は明褐色～褐灰色。内外面に鉄釉。18 世紀末～ 19 世紀。			(5.3)
5	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	胎土は明褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄釉，ムラがある。18 世紀末～ 19 世紀。			(10.4)
6	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	胎土は明褐色で砂粒を少量含む。内外面に鉄釉，ムラがある。18 世紀末～ 19 世紀。			(9.6)
7	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	胎土は黄橙色で砂粒を少量含む。内外面に鉄釉，ムラがある。18 世紀末～ 19 世紀。			(4.7)
8	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	胎土は明褐色で砂粒を微量含む。内外面に鉄釉。18 世紀末～ 19 世紀。			(6.5)
9	SD01	陶器	擂鉢	堤焼	胎土は黄橙色で砂粒を少量含む。内外面に鉄釉。18 世紀末～ 19 世紀。			(4.8)
10	SD01	陶器	擂鉢	不明	胎土は黄灰色。内外面に鉄釉。			(4.5)
11	SD01	陶器	擂鉢	不明	胎土はにぶい橙色で砂粒を含む。内外面に鉄釉。			
12	SD01	陶器	擂鉢	不明	胎土は黄灰色で粗く，砂礫多い。内外面に鉄釉。口唇部外面下部に貼り付け隆帯。17 世紀末～ 18 世紀初。			(4.2)
13	SD01	陶器	擂鉢	丹波	内外面に鉄釉。断面は灰色を呈し，還元焔焼成される。丹波D類。17 世紀後葉。	(27.4)		



第 16 図 SD01 出土遺物5

第7表 SD01 出土遺物観察表5

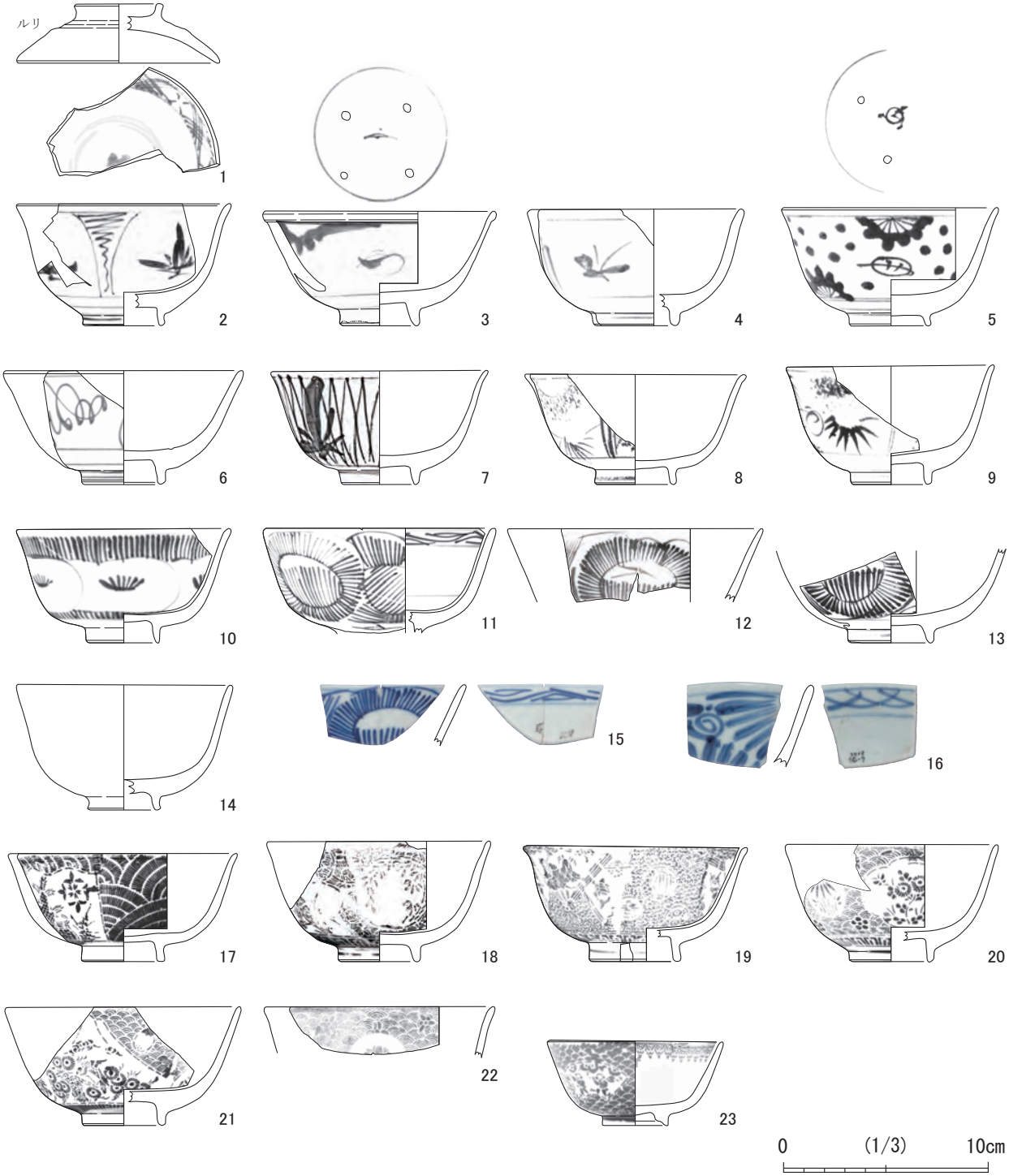
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)			写真番号
						口径	底径	器高	
1	SD01	陶器	捏鉢	小野相馬	胎土は灰色で砂粒多い。口縁部に白色海鼠釉。19 世紀～。	21.4		8.35	
2	SD01	陶器	捏鉢	堤焼	胎土は赤褐色で砂粒多い。口唇部内面と外面全体に白色海鼠釉。19 世紀末～。	(25.8)		7.2	
3	SD01	陶器	捏鉢	不明	胎土は灰色。内外面に鉄釉。口縁部外面に青色釉。			(4.0)	
4	SD01	陶器	片口鉢	不明	注口部破片。胎土は灰黄色で粗い。内外面に灰釉，青色釉。			(1.5)	
5	SD01	陶器	甕	不明	胎土は灰色で砂粒を少量含む。内外面に黒色鉄釉。口縁部外面に青色釉。	(22.0)		(8.6)	
6	SD01	陶器	甕	堤焼	胎土は黄橙色で砂礫を微量に含む。内外面に鉄釉。口縁部に白色海鼠釉。19 世紀末～。	(26.4)		(8.5)	
7	SD01	陶器	甕	不明	胎土精良。焼き締まり良い。磁器質。		10.4	(6.95)	



第 17 図　SD01 出土遺物6

第8表　SD01 出土遺物観察表6

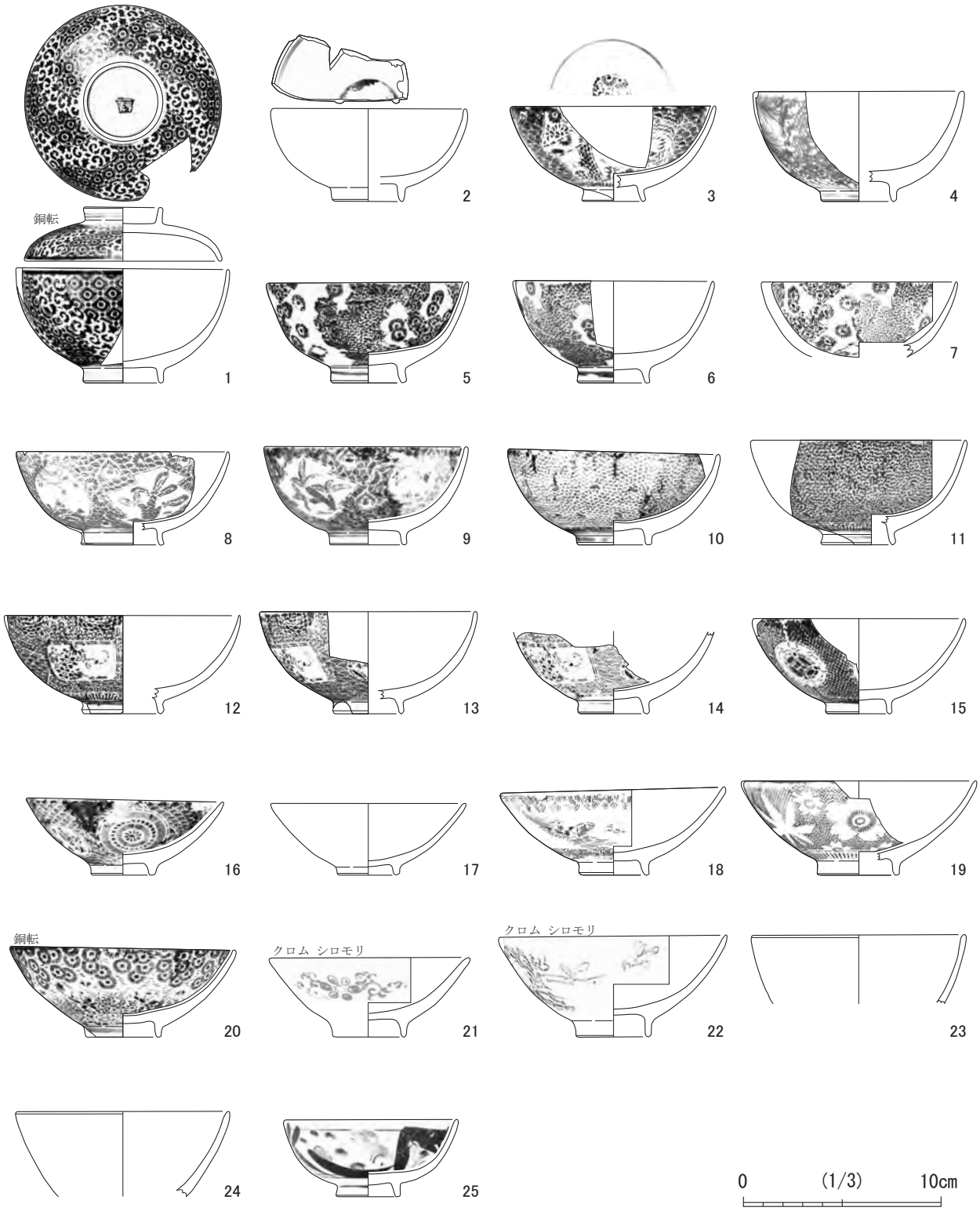
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	陶器	小皿	岸窯か	胎土，釉は茶褐色。内外面に油煙痕。	(5.4)	(4.0)	2.7
2	SD01	陶器	灯火具	不明	内外面に鉄釉。	6.0	3.1	2.1
3	SD01	陶器	灯火具	大堀相馬か	内面と口縁部外面に鉄釉。時期不明。	5.2	2.5	2.2
4	SD01	陶器	灯火具	大堀相馬か	内外面に灰釉。	5.0	2.5	2.0
5	SD01	陶器	灯火具	大堀相馬か		(4.2)	4.2	4.35
6	SD01	陶器	灯火具	不明	胎土はオリーブ黒色で砂粒を含む。底部外面を除く内外面に褐釉。		5.0	(6.1)



第 18 図 SD01 出土遺物7

第9表　SD01 出土遺物観察表7

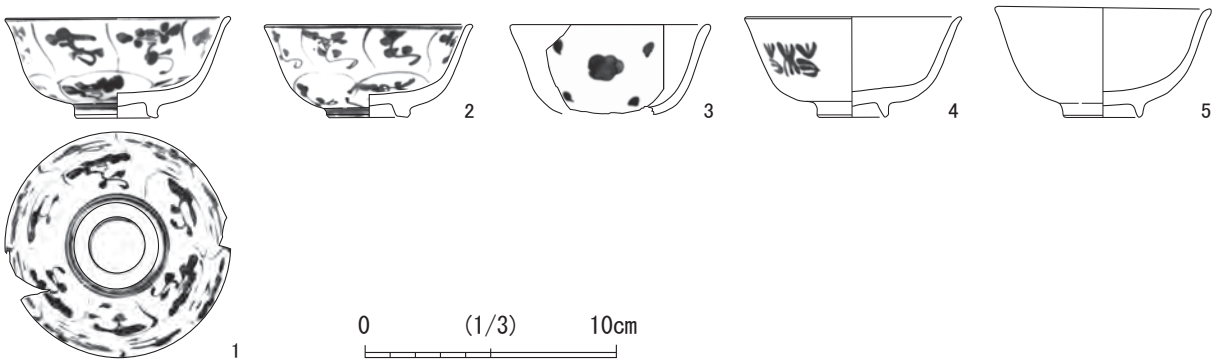
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量（cm）		
						口径	底径	器高
1	SD01	青磁染付	蓋　付　碗（蓋のみ）	肥前	外面青磁。内面に染付五弁花文。18 世紀中葉～末葉。	(10.0)	(4.3)	2.9
2	SD01	染付磁器	碗	不明	端反碗。18 世紀末～ 19 世紀末。	(10.5)	4.0	6.0
3	SD01	染付磁器	碗	切込か	瑞反碗。外面に蝙蝠文。全体に被熱している。18 世紀末～ 19 世紀前半。	11.4	5.65	3.9
4	SD01	染付磁器	碗	切込	端反碗。外面に蝶と源氏杏文。内面に足付ハマ痕跡。18 世紀末～ 19 世紀前半。	(10.6)	(4.0)	5.7
5	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。外面は松に木の葉。18 世紀末～ 19 世紀前半。	(10.6)	4.0	5.8
6	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。外面に波と渦巻文。18 世紀末～ 19 世紀前半。	(11.8)	(4.0)	5.6
7	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。外面に竹葉文。18 世紀末～ 19 世紀前半。	10.7	3.8	5.7
8	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。外面に竹葉文。18 世紀末～ 19 世紀前半。	(10.8)	4.0	5.4
9	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。外面に竹葉文。18 世紀末～ 19 世紀前半。	(10.1)	4.0	5.8
10	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。外面に松葉文。瀬戸かみた窯跡に類似品。19 世紀前葉～中葉。	10.5	3.5	5.6
11	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。外面に牡丹文。美濃中 2 号窯に類似品。18 世紀末～ 19 世紀前半。	(11.4)		(5.1)
12	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。外面に牡丹文。美濃中 2 号窯に類似品。18 世紀末～ 19 世紀前半。	(12.6)		(3.6)
13	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。外面に牡丹文。美濃中 2 号窯に類似品。18 世紀末～ 19 世紀前半。		4.2	(4.6)
14	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。18 世紀末～ 19 世紀前半。	(10.6)	3.6	6.15
15	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。外面に牡丹文。美濃中 2 号窯に類似品。18 世紀末～ 19 世紀前半。			(3.0)
16	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。18 世紀末～ 19 世紀前半。			(4.0)
17	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。型紙摺り。外面に松葉文。見込に松竹梅円形文。19 世紀末～ 20 世紀初。	11.2	4.0	5.8
18	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。型紙摺り。見込に松竹梅円形文。被熱。19 世紀末～ 20 世紀初頭。	(11.0)	4.0	5.8
19	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。型紙摺り。外面にみじん唐草に扇文。見込に松竹梅円形文。18 世紀末～ 19 世紀前半。	11.0	4.5	5.7
20	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。型紙摺り。外面に草花文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。胎土褐色。19 世紀末～ 20 世紀初頭。	(10.4)	(4.2)	5.75
21	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。型紙摺り。外面に富士と松文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。コバルト。19 世紀末～ 20 世紀初頭。	(11.5)	(4.1)	5.8
22	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。型紙摺り。外面は青海波に桜花文。内面に宝珠文。コバルト。19 世紀末～ 20 世紀初。	(11.3)		(2.5)
23	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	小型の端反碗。型紙摺り。外面に青海波文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。コバルト。19 世紀以降。	8.6	3.2	4.2



第 19 図 SD01 出土遺物8

第 10 表　SD01 出土遺物観察表8

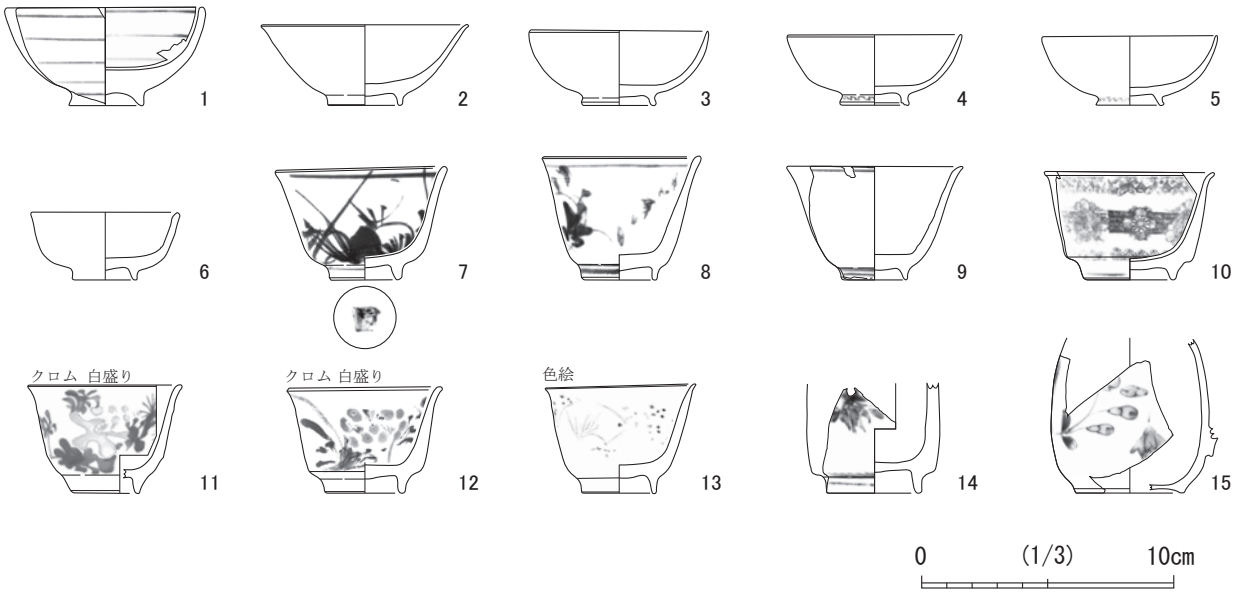
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	銅板転写。蓋付碗の碗。丸碗。外面に線状菊菱文と唐草文。内面に宝珠文と松竹梅円形文。コバルト。19 世紀末～ 20 世紀初。	10.9	4.1	5.85
1	SD01	染付磁器	蓋	瀬戸美濃	銅板転写。蓋付碗の蓋。つまみ内に「青」文。コバルト。19 世紀末～ 20 世紀初。	10.1	つまみ径 4.0	2.75
2	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。外面は酸化クロム青磁。見込に松竹梅円形文。19 世紀末～。	(10.0)	3.6	4.7
3	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面に青海波と山水文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。19 世紀末～ 20 世紀初。	(10.4)	(3.2)	4.8
4	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。外面に草花文。コバルト。内面に斜格子文。19 世紀末～ 20 世紀初。	(10.7)	(3.7)	5.6
5	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面にみじん唐草と菱形文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。19 世紀末～ 20 世紀初。	(10.3)	(3.9)	5.1
6	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面にみじん唐草と菱形文。内面に宝珠文。見込に松円形文。19 世紀末～ 20 世紀初。	(10.2)	3.6	5.2
7	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面に松と菱形文。内面に宝珠文。19 世紀末～ 20 世紀初。	(10.0)		(3.8)
8	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面に青海波と宝珠文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。19 世紀末～ 20 世紀初。	10.8	4.2	4.75
9	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面に青海波と菱形文。内面に宝珠文と松竹梅円形文。19 世紀末～ 20 世紀初。	10.4	3.9	5.0
10	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面にみじん唐草。内面に宝珠文と松竹梅円形文。19 世紀末～ 20 世紀初。	10.8	3.9	4.85
11	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面にみじん唐草文。内面に宝珠文。19 世紀末～ 20 世紀初。	(11.0)	(3.5)	5.3
12	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面に青海波唐草文。内面に宝珠文。19 世紀末～ 20 世紀初。	(10.0)	4.2	5.0
13	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面に青海波とみじん唐草文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。19 世紀末～ 20 世紀初。	(11.1)	3.6	5.2
14	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面に青海波と唐松文。見込に松竹梅円形文。19 世紀末～ 20 世紀初。		3.6	(4.15)
15	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺り。外面七宝文。内面に宝珠文。見込に松竹梅円形文。19 世紀末～ 20 世紀初。	(10.8)	3.4	4.85
16	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	平碗。型紙摺り。外面に青海波と傘文。内面に宝珠文。19 世紀末～ 20 世紀初。	10.0	1.65	3.95
17	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	平碗。外面に菊花文。19 世紀末～ 20 世紀初。	(10.0)	3.1	3.6
18	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	平碗。型紙摺り。外面に宝珠文と鳳凰文。内面に宝珠文。19 世紀末～ 20 世紀初。	11.6	3.6	4.4
19	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	平碗。型紙摺り。外面に桜と楓文。内面に六弁花文。19 世紀末～ 20 世紀初。	(12.0)	4.1	4.8
20	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	平碗。銅板転写。外面に草花人物文。口縁部内面に宝珠文。19 世紀末～ 20 世紀初。	11.5	3.8	4.6
21	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	平碗。外面は酸化クロム青磁。イッチン技法白盛色絵付。内面に梅と椿文（手描き輪郭にダミ）。高台に銘款。19 世紀末以降。	(10.2)	3.7	4.0
22	SD01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	平碗。外面は酸化クロム青磁。イッチン技法白盛。高台に銘款「青」か。19 世紀末～ 20 世紀初。	11.7	3.8	5.1
23	SD01	染付磁器	碗	肥前か	丸碗。外面に笹文。	(11.0)		(3.5)
24	SD01	染付磁器	碗	肥前か	丸碗。外面に笹文。	(11.0)		(4.3)
25	SD01	染付磁器	碗	不明	丸碗。子供茶碗。色絵。	8.9	3.2	3.9



第 20 図　SD01 出土遺物9

第 11 表　SD01 出土遺物観察表9

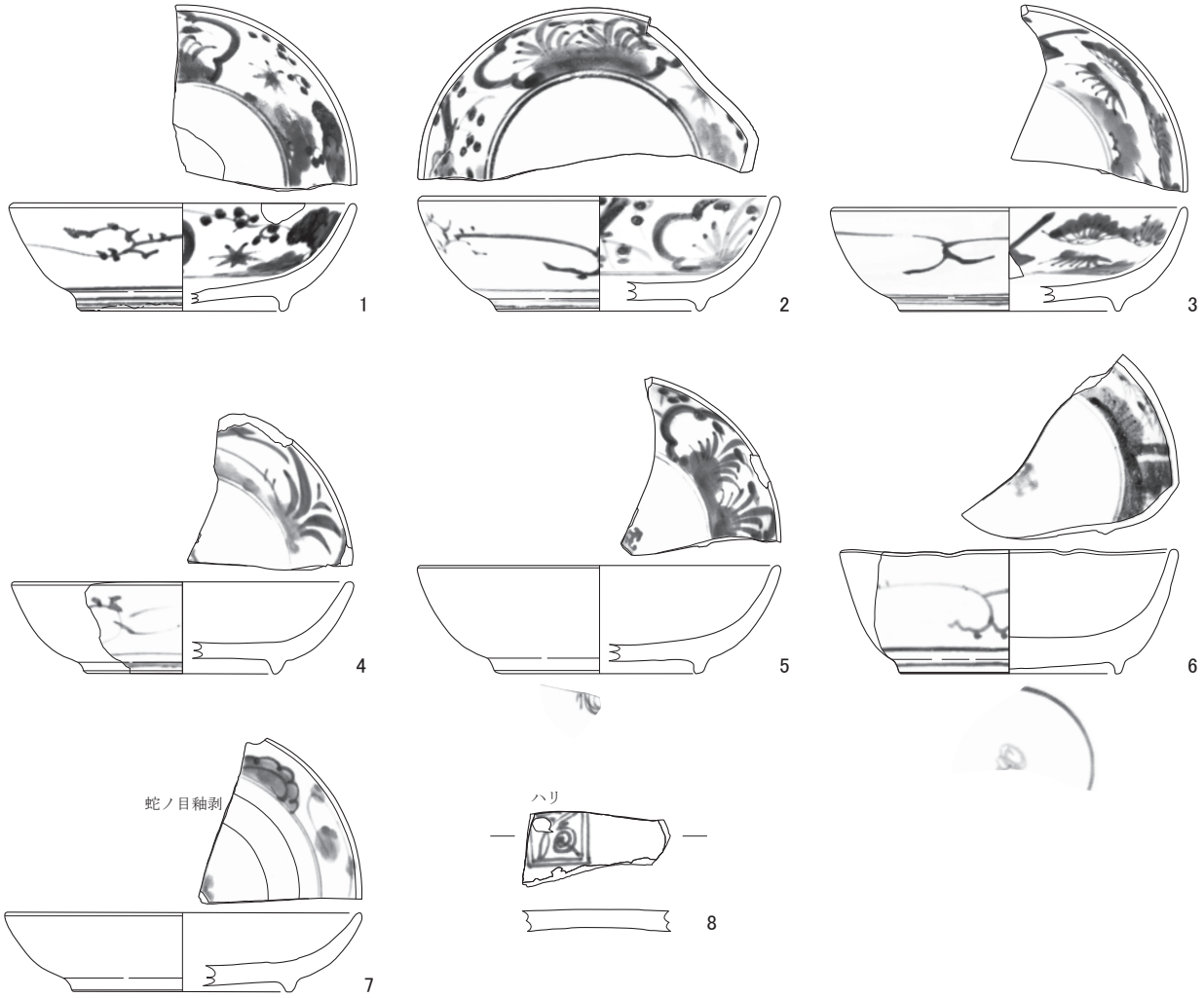
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	染付磁器	小碗	瀬戸美濃か	内外面に仙花文。	9.0	3.1	4.0
2	SD01	染付磁器	小碗	瀬戸美濃か	内外面に仙花文。	8.4	3.4	3.7
3	SD01	染付磁器	小碗	瀬戸美濃	外面に雲文（手描き輪郭にダミ）。19 世紀末以降。	(8.0)		(3.6)
4	SD01	染付磁器	小碗	瀬戸美濃	口紅。18 世紀末以降。	8.7	2.7	4.0
5	SD01	染付磁器	小碗	瀬戸美濃	外面に源氏香文。口紅。18 世紀末以降	8.6	3.1	4.4



第 21 図 SD01 出土遺物 10

第 12 表 SD01 出土遺物観察表 10

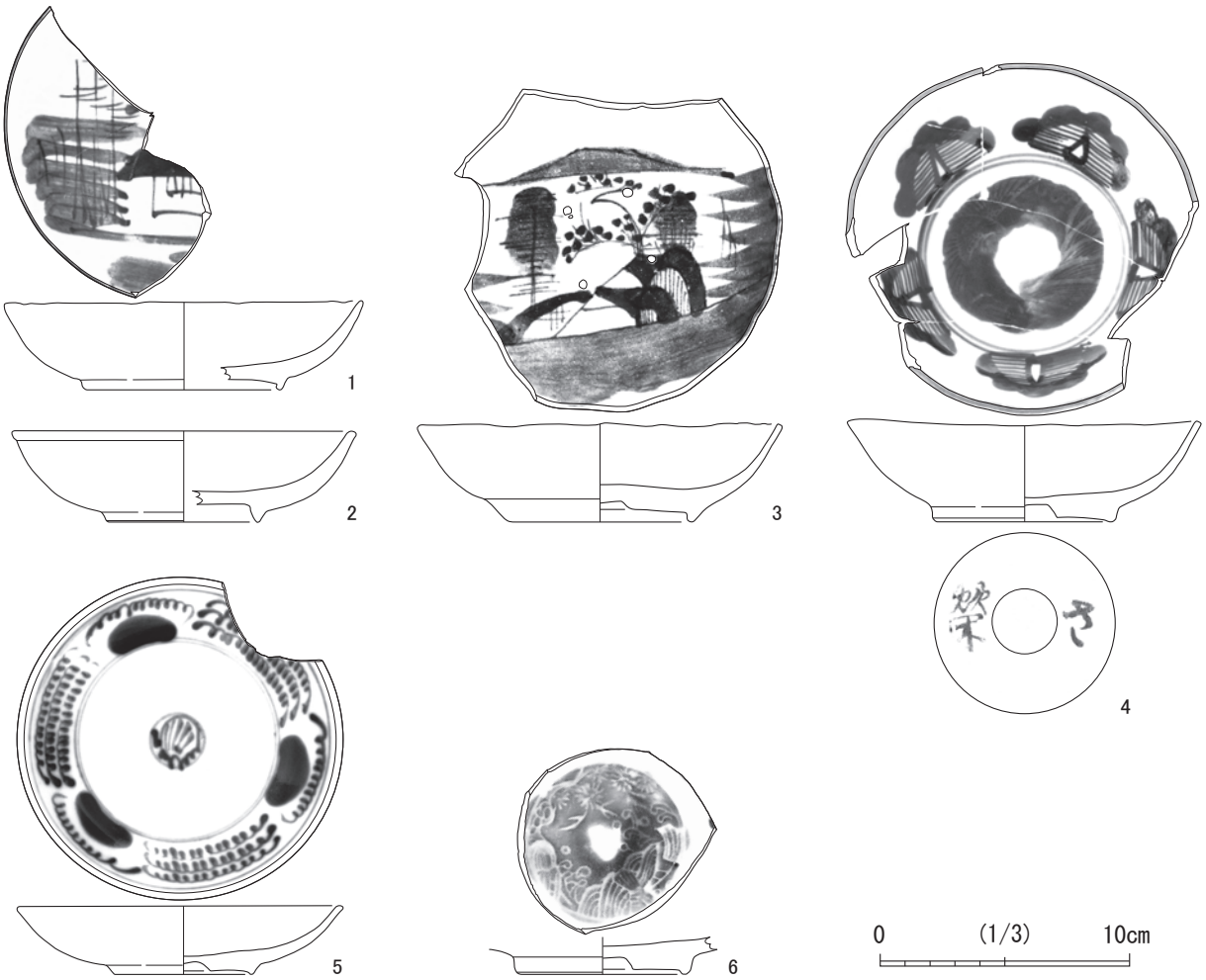
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	染付磁器	小坏	瀬戸美濃	内外面横線文。コバルト。19 世紀末以降。	(7.9)	(3.0)	3.9
2	SD01	磁器	小坏	瀬戸美濃	兵隊盃。「祝勝軍」「日本帝国万歳」。20 世紀前半。	8.3	3.0	3.2
3	SD01	磁器	小坏	瀬戸美濃	印物。宣伝盃。	(7.2)	3.0	3.0
4	SD01	染付磁器	小坏	瀬戸美濃	兵隊盃。日章旗，菊文を描く。「眞臺」。高台に「○」。	7.0	2.8	2.8
5	SD01	染付磁器	小坏	岩波窯か	内面に天狗絵。金口紅。高台に窯印。山形市岩波窯か。	7.0	2.7	2.75
6	SD01	染付磁器	小坏	瀬戸美濃	見込に富士山。	6.0	2.5	2.7
7	SD01	染付磁器	小坏	会津本郷	外面に草花文。コバルト。19 世紀。『会津若松市史 文化編 1 陶磁器 会津のやきもの』	6.9	2.9	4.5
8	SD01	染付磁器	小坏	岩波窯か	外面に草花文と不明文字列，底部外面に窯印。山形市岩波窯か。胎土やや暗い。釉は薄く，透明度高い。19 世紀後半。『東北の近世陶磁』	6.3	2.9	4.9
9	SD01	染付磁器	小坏	瀬戸美濃	コバルト。19 世紀末以降。	(7.0)	(2.6)	4.5
10	SD01	染付磁器	小坏	瀬戸美濃	型紙摺り。外面に花蝶文。19 世紀末以降。	(7.8)	3.5	4.3
11	SD01	磁器	小坏	瀬戸美濃	外面は酸化クロム青磁。草花文をイッチン技法による白盛で描く。色絵。19 世紀末以降。	(6.2)	(2.7)	4.3
12	SD01	磁器	小坏	瀬戸美濃	外面は酸化クロム青磁。草花文をイッチン技法による白盛で描く。色絵。19 世紀末以降。	6.2	3.1	4.2
13	SD01	磁器	小坏	瀬戸美濃	外面に扇と梅文。色絵。	6.0	3.0	4.35
14	SD01	染付磁器	小坏	岩波窯か	外面に笹文。高台に窯印。岩波窯か。19 世紀後半。		3.8	(4.4)
15	SD01	染付磁器	コーヒーカップ	瀬戸美濃	外面に草花文（手描き輪郭にダミ）。19 世紀末以降。		4.3	(6.1)



第 22 図　SD01 出土遺物 11

第 13 表　SD01 出土遺物観察表 11

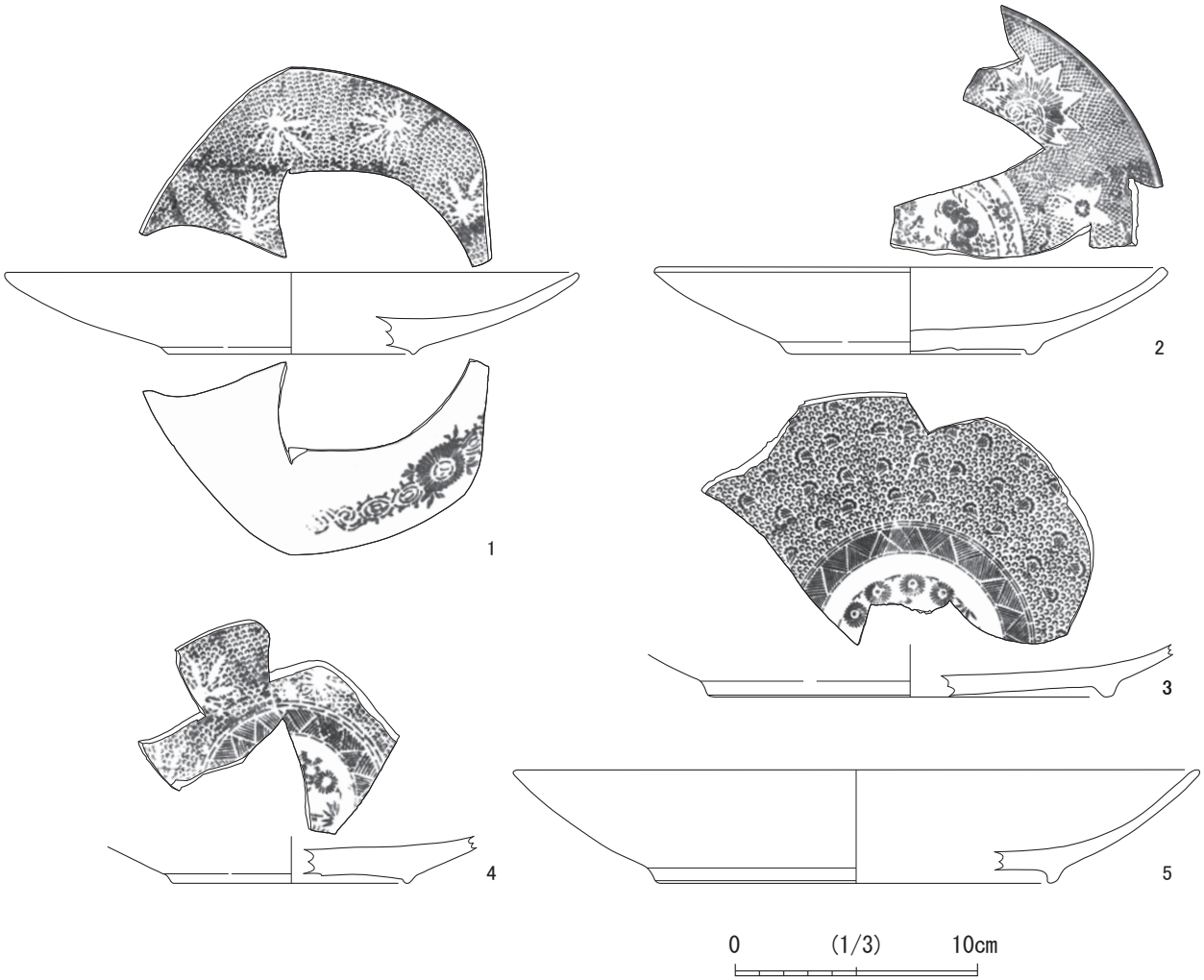
番　号	遺構・層位	種　別	器種	産　地	特　徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	染付磁器	皿	肥前	外面に唐草文。内面に草花文。17 世紀後半。	(14.2)	2.4	8.6
2	SD01	染付磁器	皿	肥前	外面に唐草文。内面に草花文。17 世紀後半。	14.8	8.4	4.7
3	SD01	染付磁器	皿	肥前	外面に唐草文。内面に草花文。17 世紀後半。	(14.6)	4.25	9.0
4	SD01	染付磁器	皿	肥前	外面に唐草文。内面に草花文と五弁花文。高台に「渦福」。17 世紀末～ 18 世紀前半。	(14.0)	(8.0)	3.8
5	SD01	染付磁器	皿	肥前	外面に唐草文。内面に草花文と五弁花文。高台に「渦福」。17 世紀末～ 18 世紀前半。	(14.8)	(8.4)	4.4
6	SD01	染付磁器	輪花皿	肥前	外面に唐草文。内面に草花文と五弁花文。高台に「渦福」。17 世紀末～ 18 世紀前半。	(13.8)	(9.0)	5.05
7	SD01	染付磁器	皿	肥前	見込みは蛇ノ目釉剥。18 世紀中葉～末葉。	(14.6)	9.0	3.25
8	SD01	染付磁器	皿	肥前	底部破片。「渦福」。ハリ痕跡。17 世紀末～ 18 世紀前半。			(0.9)



第 23 図 SD01 出土遺物 12

第 14 表 SD01 出土遺物観察表 12

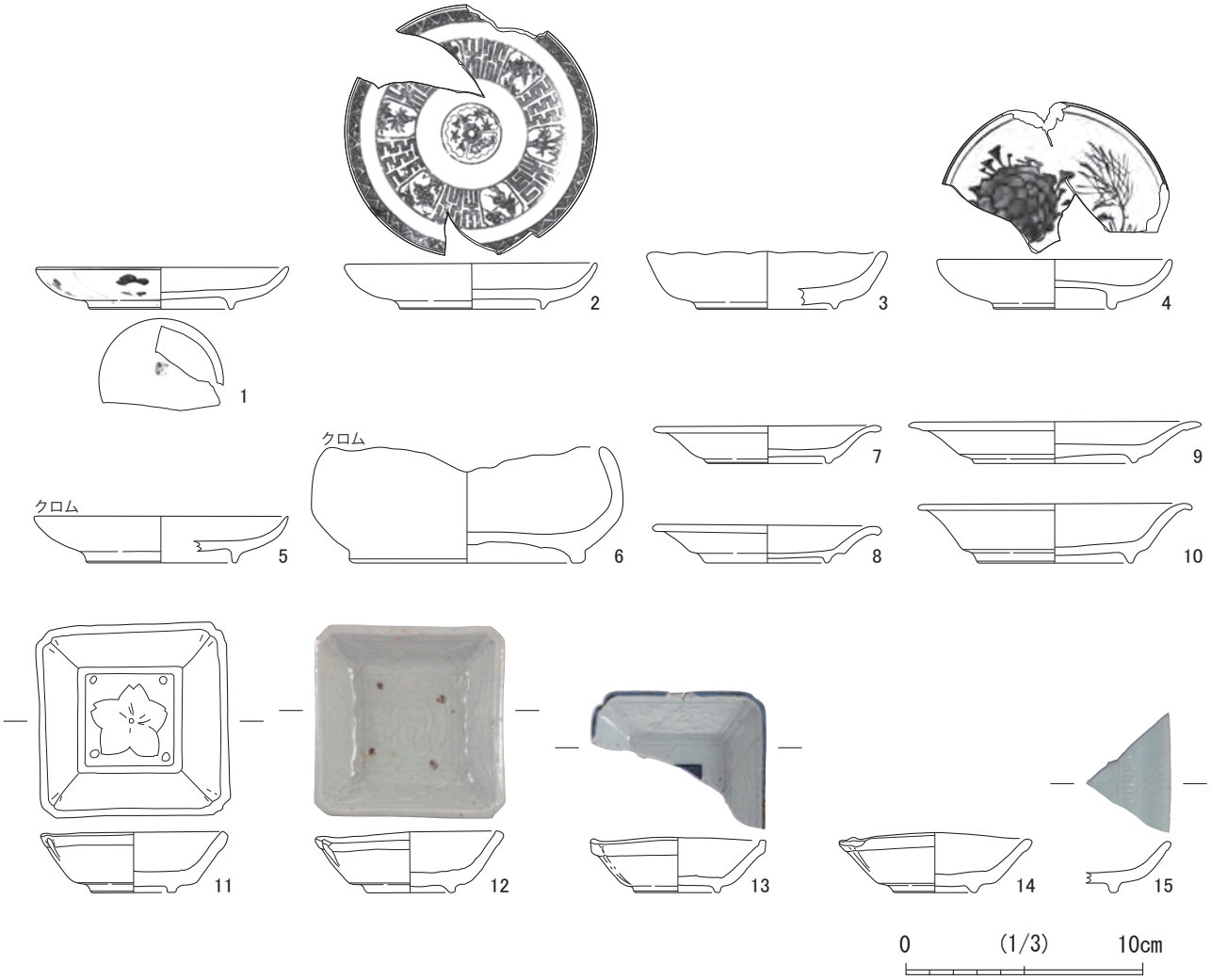
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	染付磁器	皿	切込か	内面に山水文。口紅。足付ハマ痕跡。19 世紀末～ 20 世紀末。	(14.4)	(8.0)	3.5
2	SD01	染付磁器	皿	不明	内面に草花文。	(13.8)	(6.2)	3.65
3	SD01	染付磁器	皿	切込か	八弁輪花皿。内面に山水文。足付ハマ痕跡。蛇目凹形高台。18 世紀末～ 19 世紀末。	(14.7)	7.3	3.9
4	SD01	染付磁器	皿	瀬戸美濃	内面に陽刻文とダミで風景を描く。口紅。蛇目凹形高台。底部外面に墨書「さ榮」。	14.2	7.4	4.15
5	SD01	染付磁器	皿	瀬戸美濃	内外面に手描きで螺旋文。蛇目凹形高台。19 世紀中葉～末葉。	13.1	6.7	2.75
6	SD01	染付磁器	皿	瀬戸美濃	内面に陽刻文とダミで風景を描く。蛇目凹形高台。		7.0	(1.5)



第 24 図　SD01 出土遺物 13

第 15 表　SD01 出土遺物観察表 13

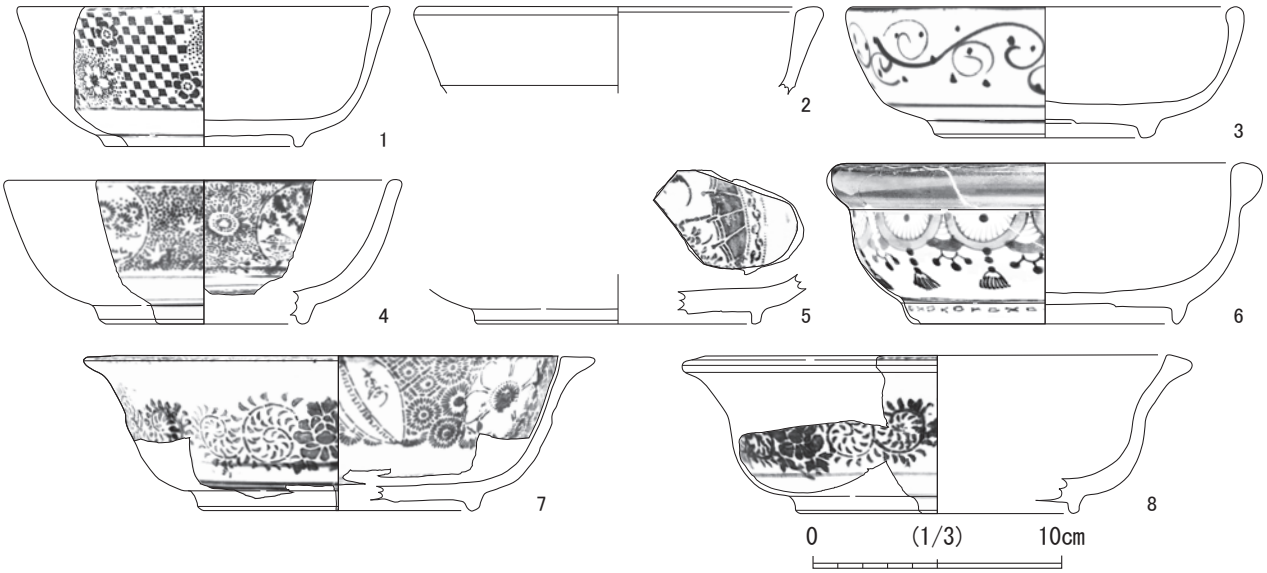
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	染付磁器	皿	瀬戸美濃	型紙摺り。外面に牡丹唐草文。内面にみじん唐草文。蛇目凹形高台。胎土は暗い灰白色。19 世紀末以降。	(23.7)	(10.2)	(3.4)
2	SD01	染付磁器	皿	瀬戸美濃	型紙摺り。外面に菊と唐草文。内面にもみじ文。見込に菊文。胎土は暗い灰白色。蛇目凹形高台。19 世紀末以降。	(20.9)	(10.0)	(3.6)
3	SD01	染付磁器	皿	瀬戸美濃	型紙摺り。内面にみじん唐草に松文。見込に松竹梅円形文。底部外面にハリ跡。胎土は暗い灰白色。19 世紀末以降。		(16.8)	(2.2)
4	SD01	染付磁器	皿	瀬戸美濃	型紙摺り。外面に牡丹唐草文。内面にみじん唐草文。蛇目凹形高台。胎土は暗い灰白色。19 世紀末以降。		10.0	(1.95)
5	SD01	染付磁器	皿	瀬戸美濃	型紙摺り。外面に唐草と軍配文。内面はみじん唐草に松文。見込に松竹梅円形文。胎土は暗い灰白色。19 世紀末以降。	(28.2)	(16.2)	5.7



第 25 図 SD01 出土遺物 14

第 16 表 SD01 出土遺物観察表 14

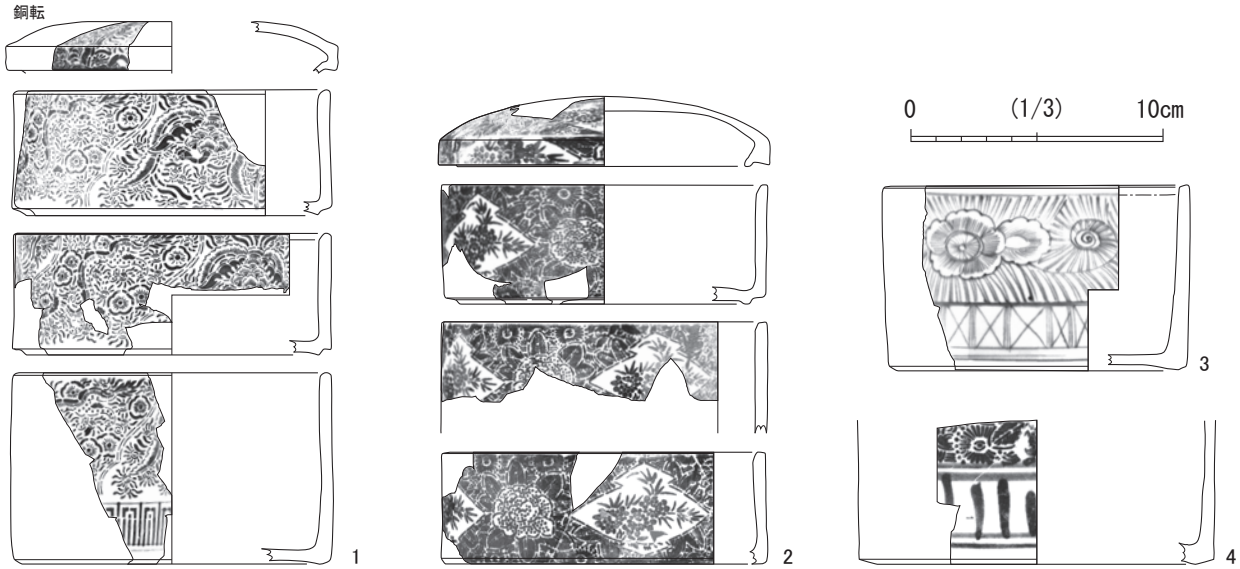
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	染付磁器	小皿	岩波窯	内外綿にの仙花文。底部外面に窯印。山形市岩波窯か。胎土精製。白色で釉は薄く透明度が高い。呉須は鮮やか。19 世紀後半。『東北の近世陶磁』	10.7	6.0	1.8
2	SD01	染付磁器	小皿	瀬戸美濃	銅版転写。コバルト。19 世紀末以降。	10.8	6.1	1.9
3	SD01	染付磁器	小皿	切込か	輪花小皿。型押成形。内面に陽刻の唐草とダミ。18 世紀末～ 19 世紀末。	(10.2)	(6.0)	2.4
4	SD01	染付磁器	小皿	不明	口紅。19 世紀以降。	(10.0)	(5.2)	2.1
5	SD01	青磁	小皿	瀬戸美濃	酸化クロム青磁。型紙摺り。内面に白盛りによる絵付け。19 世紀末～ 20 世紀初。	10.8	6.4	2.0
6	SD01	青磁	小皿	瀬戸美濃	酸化クロム青磁。19 世紀末以降。	(13.1)	(10.0)	(5.9)
7	SD01	白磁	小皿	不明	見込みに印刻による寿文。	9.6	5.3	1.55
8	SD01	白磁	小皿	不明	見込みに印刻による寿文。	9.7	5.3	1.6
9	SD01	白磁	小皿	不明	見込みに印刻による寿文。	(12.4)	7.0	1.75
10	SD01	白磁	小皿	不明	見込みに印刻による寿文。	11.6	6.6	2.5
11	SD01	白磁	手塩皿	切込	内面に五弁桜花文。18 世紀末～ 19 世紀末。	8.0	3.6	2.6
12	SD01	白磁	手塩皿	切込	内面にふくら雀文。18 世紀末～ 19 世紀末。	8.0	3.7	2.6
13	SD01	白磁	手塩皿	切込	体部内面に鳳凰文と牡丹文。口縁端部と見込中央に瑠璃釉。18 世紀末～ 19 世紀末。	7.5	3.6	2.35
14	SD01	白磁	手塩皿	切込	内面にふくら雀文。18 世紀末～ 19 世紀末。		3.6	(2.55)
15	SD01	白磁	手塩皿	切込	18 世紀末～ 19 世紀末。			(2.2)



第 26 図　SD01 出土遺物 15

第 17 表　SD01 出土遺物観察表 15

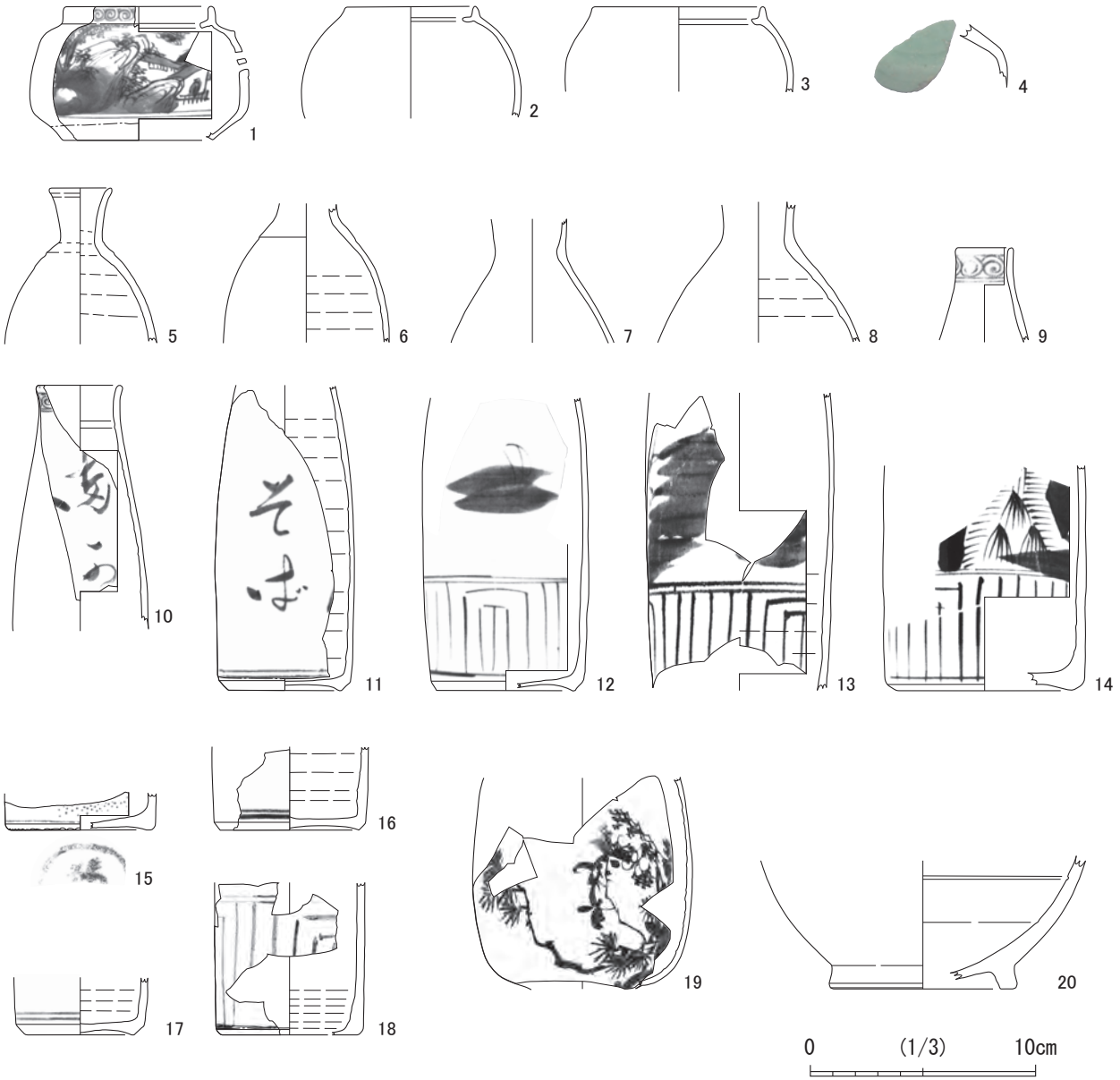
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	染付磁器	鉢	瀬戸美濃	型紙摺り。外面は格子に桜花文。内面に草花文（手描き）。19 世紀末以降。	(15.0)	8.0	5.6
2	SD01	染付磁器	鉢	瀬戸美濃	型紙摺り。内外面に青海波文。19 世紀末以降。	(16.4)		(3.5)
3	SD01	染付磁器	鉢	瀬戸美濃	型紙摺り。体部外面に唐草文（手描き）。体部内面は斜格子に菊文（手描き）。見込に獅子文（型紙摺）。蛇目凹形高台。19 世紀末以降。	16.0	8.8	5.25
4	SD01	染付磁器	鉢	瀬戸美濃	型紙摺り。体部外面にもみじと菊文。見込に青海波文。体部内面に木瓜と牡丹文。19 世紀末以降。	(16.0)	(8.0)	5.8
5	SD01	染付磁器	鉢	瀬戸美濃	型紙摺り。内面に傘文。胎土は暗い灰白色。19 世紀末～ 20 世紀初頭。		11.6	(2.0)
6	SD01	染付磁器	鉢	瀬戸美濃	体部外面に輪宝繋文（手描き）。内面に斜格子と唐草文（手描き）。酸化クロム釉使用。蛇目凹形高台。19 世紀末以降。	17.6	10.8	6.5
7	SD01	染付磁器	鉢	瀬戸美濃	型紙摺り。体部外面に牡丹唐草文。体部内面に菊に桜と盃文。見込に傘文。蛇目凹形高台。胎土は暗い灰白色。19 世紀末以降。	20.6	11.4	6.25
8	SD01	染付磁器	鉢	瀬戸美濃	型紙摺り。体部外面に牡丹唐草文。体部内面に菊に桜と盃文。見込に傘文。蛇目凹形高台。胎土は暗い灰白色。19 世紀末以降。	(20.6)	(11.4)	6.35



第 27 図　SD01 出土遺物 16

第 18 表　SD01 出土遺物観察表 16

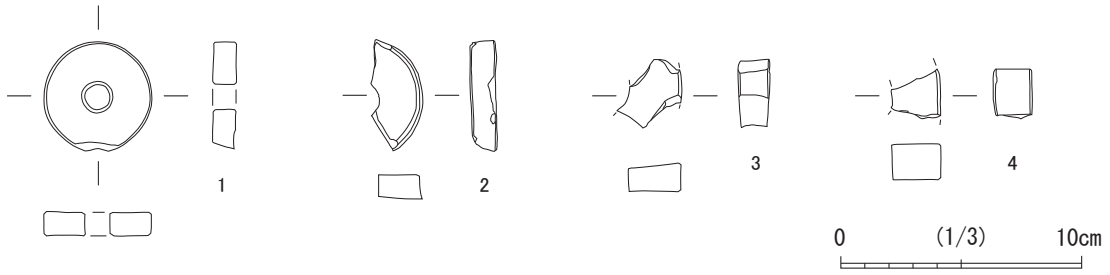
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	染付磁器	段重	瀬戸美濃	三重蓋付。銅板転写。外面に鳳凰文。コバルト。20 世紀以降	12.2	11.8	18.9
2	SD01	染付磁器	段重	瀬戸美濃	三重蓋付。型紙摺り。外面に松川菱と牡丹文。19 世紀末以降。	12.8	12.6	(16.2)
3	SD01	染付磁器	段重	瀬戸美濃	段重最下段。外面に牡丹唐草（素描）。19 世紀。	(12.2)	(11.2)	7.4
4	SD01	染付磁器	段重	瀬戸美濃	段重最下段。型紙摺り。外面に牡丹と菊文。19 世紀末以降。		(12.7)	(5.7)



第 28 図 SD01 出土遺物 17

第 19 表 SD01 出土遺物観察表 17

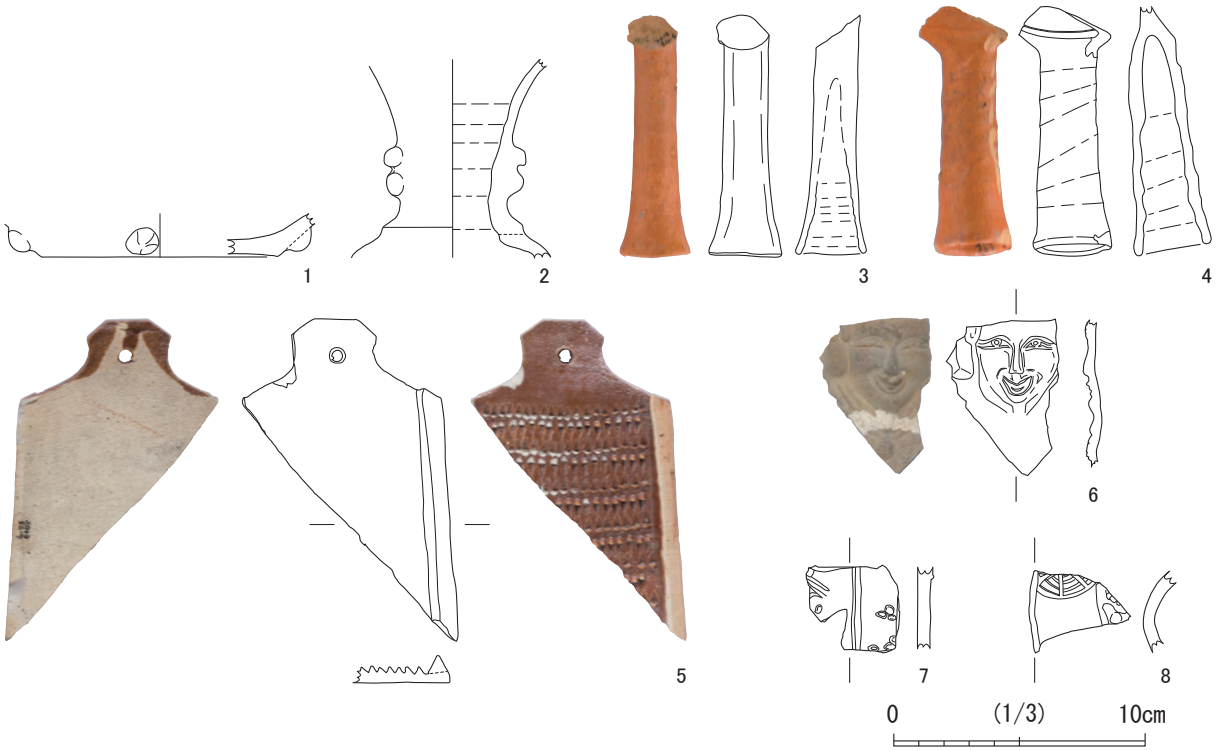
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	染付磁器	急須	瀬戸美濃	コバルト。19 世紀末以降。	(6.6)		(5.9)
2	SD01	染付磁器	急須	瀬戸美濃	コバルト。19 世紀末以降。	6.0		(4.9)
3	SD01	染付磁器	急須	瀬戸美濃	コバルト。19 世紀末以降。	(7.8)		(3.8)
4	SD01	青磁	瓶類	龍泉窯				(2.8)
5	SD01	染付磁器	燗徳利	切込か	渦巻帯文。18 世紀末～ 19 世紀末。	2.8		(6.9)
6	SD01	染付磁器	瓶子	瀬戸美濃	外面に山水文。渦巻帯文。			(6.2)
7	SD01	染付磁器	燗徳利	切込か	18 世紀末～ 19 世紀末。			(5.5)
8	SD01	染付磁器	燗徳利	切込か	18 世紀末～ 19 世紀末。			(6.25)
9	SD01	染付磁器	燗徳利	不明		2.6		(4.2)
10	SD01	染付磁器	燗徳利	瀬戸美濃		(3.8)		(11.0)
11	SD01	染付磁器	燗徳利	瀬戸美濃			5.8	(13.65)
12	SD01	染付磁器	燗徳利	瀬戸美濃	外面に山水文。		6.2	(13.1)
13	SD01	染付磁器	燗徳利	瀬戸美濃	外面に山水文。			(13.2)
14	SD01	染付磁器	燗徳利	瀬戸美濃	外面に山水文。		(7.8)	(3.9)
15	SD01	染付磁器	燗徳利	瀬戸美濃	底部外面に墨書及び剥離痕。		(6.4)	(1.7)
16	SD01	染付磁器	燗徳利	瀬戸美濃			4.8	(2.55)
17	SD01	染付磁器	燗徳利	瀬戸美濃			6.2	(3.7)
18	SD01	染付磁器	燗徳利	瀬戸美濃			(6.0)	(6.8)
19	SD01	染付磁器	燗徳利	不明	胎土精製。グレーがかった白色釉は薄く，透明度高い。			(9.1)
20	SD01	磁器	徳利	不明			(8.4)	(5.95)



第 29 図　SD01 出土遺物 18

第 20 表　SD01 出土遺物観察表 18

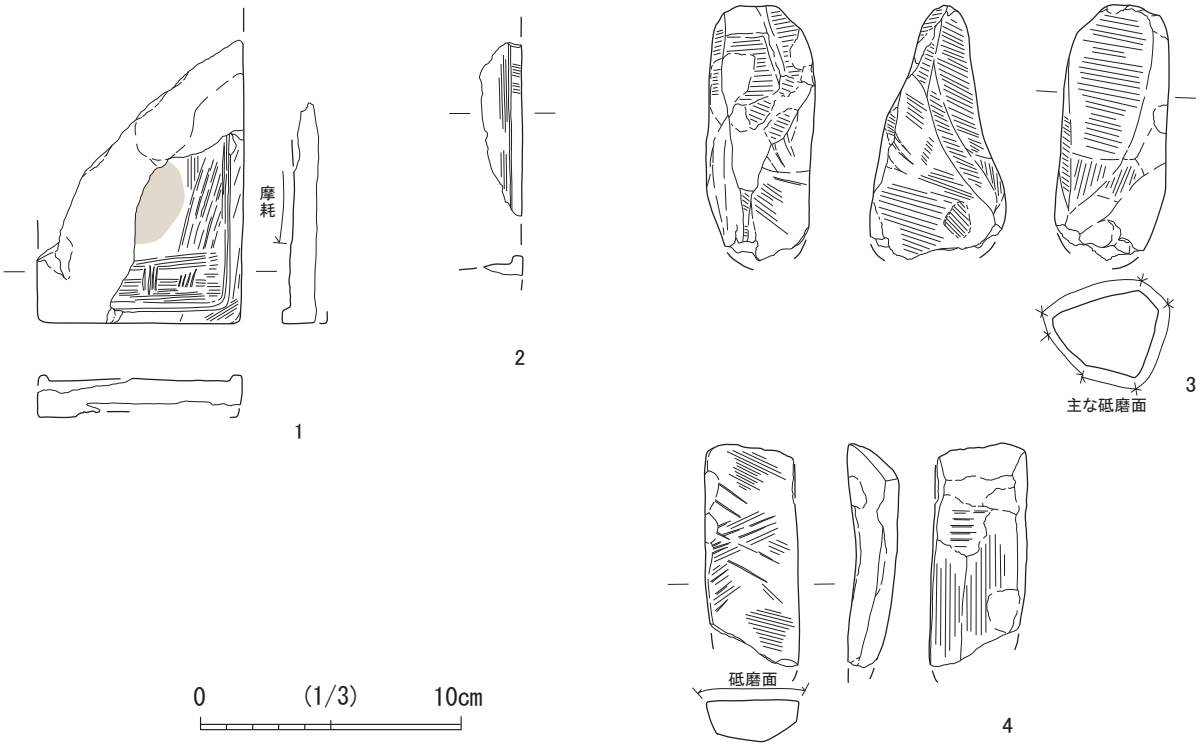
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	磁器	戸車	瀬戸美濃か		最大幅 (4.5)	最大厚 (9.5)	9.5
2	SD01	磁器	戸車	瀬戸美濃か		最大幅 (1.8)	最大厚 (1.0)	(4.65)
3	SD01	磁器	戸車	瀬戸美濃か		最大幅 (2.7)	最大厚 (1.2)	(2.8)
4	SD01	磁器	戸車	瀬戸美濃か		最大幅 (2.1)	最大厚 (1.5)	(2.05)



第 30 図　SD01 出土遺物 19

第 21 表　SD01 出土遺物観察表 19

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	陶器	不明	不明	胎土は黄橙色。内面鉄釉。体部下端に瘤状の粘土を貼付。外面比熱、炭化物付着。		(9.4)	(1.7)
2	SD01	陶器	仏花器	不明	胎土は灰色。内外面に鉄釉。			(7.9)
3	SD01	陶器	炮烙	堤焼	把手部分	長さ (9.6)		(5.5)
4	SD01	陶器	炮烙	堤焼	把手部分	長さ (10.0)		6.0
5	SD01	陶器	おろし器	不明	裏面に布目痕。	最大幅 (8.0)	最大厚 (1.1)	(12.85)
6	SD01	陶器	人形	不明	型作り。裏面に布目痕。	最大幅 (4.5)	最大厚 (4.5)	(6.25)
7	SD01	陶器	人形か	不明	型作り。裏面に布目痕。	最大幅 (3.75)	最大厚 (6.5)	(3.3)
8	SD01	陶器	人形か	不明	型作り。裏面に布目痕。	最大幅 (3.8)	最大厚 (5.5)	(3.25)



第 31 図 SD01 出土石製品

第 22 表 SD01 出土石製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	特 徴	残 存	法 量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	SD01-3 層	石製品	石硯	長方硯。陸の中央は摩耗により凹んでいる。硯縁には整形時のノミ痕が残る。石材は粘板岩(スレート)。	陸部一部	(10.9)	7.8		(127.5)
2	SD01-3 層	石製品	石硯	長方硯。硯縁には整形時の擦痕が残る。硯面には墨痕が所々に残る。石材は粘板岩(スレート)。	陸部一部	(6.6)	(1.6)	(0.8)	(6.5)
3	SD01-3 層	石製品	砥石	自然礫を多面的に利用。主な砥磨面は2面。中砥とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	一端欠損	(9.8)	(3.9)	(5.2)	(175.0)
4	SD01-3 層	石製品	砥石	角柱状に整形した1面が主砥磨面。中砥とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	一端欠損	(8.5)	3.6	2.0	(70.5)

である。SD01 の時期は肥前皿の 17 世紀後半～ 18 世紀前半頃、磁器端反碗・大堀相馬の 18 世紀末～ 19 世紀中葉頃、磁器丸碗と平碗、堤焼等の 19 世紀末～ 20 世紀初頭頃の遺物がみられる。肥前皿については伝世の可能性も考えられ、量的には 19 世紀末以降のものが多い。19 世紀末～ 20 世紀初頭を中心とする、18 世紀末～ 20 世紀初頭が SD01 の機能した期間と考えられる。

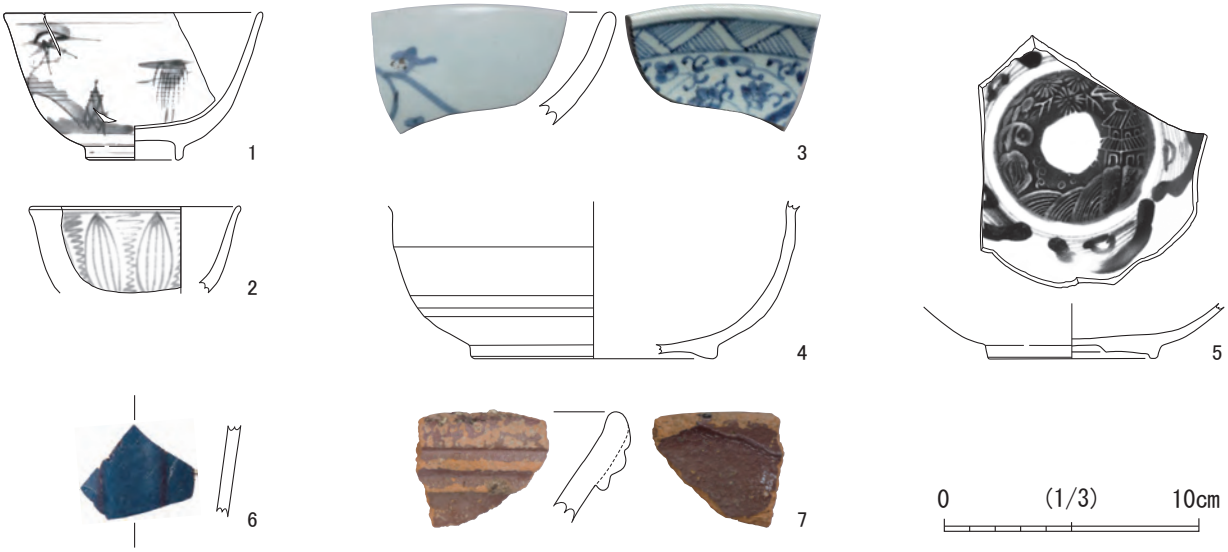
SD02溝跡（第8・10 図）

調査区東側から西側にかけて直線的にのびる溝跡である。東西とも調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 1.3m にわたって検出している。SD01・SK01と重複し、両者より古い。主軸方位は N-70° -E。検出面での規模は上幅 1.3m、下幅 1.0m、確認面よりの深さは約 20cm を測る。断面形状は皿形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層に分層でき、すべて人為的埋土である。

3. 流路跡

SX01流路跡（第8・9図）

表土掘削後の遺構精査時において、調査区内では基盤層が北側と南側では大きく異なることを確認した。この基盤層の差異の成立原因、及び下位での遺構面存在の有無を把握することを目的としてサブトレンチを



第 32 図　その他の出土遺物

第 23 表　その他の出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	精査	染付磁器	碗	瀬戸美濃	端反碗。外面に山水文。見込に青文。18 世紀末～ 19 世紀前半。	(10.2)	3.8	5.8
2	残土	染付磁器	小碗	切込か	18 世紀末～ 19 世紀末。	(8.4)		(3.4)
3	精査	染付磁器	小皿	肥前	外面に唐草文。内面に牡丹唐草文。17 世紀後半～ 18 世紀前半。			(4.4)
4	残土	陶器	鉢	大堀相馬か	内外面灰釉。		(9.8)	(6.2)
5	精査	染付磁器	皿	瀬戸美濃	内面に陽刻文とダミで風景を描く。蛇目凹形高台。		6.6	(2.15)
6	精査	磁器	徳利	不明	多角形徳利か。外面瑠璃釉。			(3.6)
7	掘り下げ	陶器	擂鉢	堤焼	胎土は明褐色で砂粒を少量含む。内外面に鉄釉。18 世紀末～ 19 世紀。			(5.0)

設定し、掘り下げを行った。その結果、サブトレンチ西側壁面の土層観察により調査区内における土層堆積様相の差異は、ある時期に河道が調査敷地内を東流していたことに起因していることが判明した。なお、これらの層序からは遺物は出土していないため、河道埋没の明確な時期は特定できなかった。

4．その他の出土遺物（第 32 図、第 23 表）

遺構精査、表土掘削時において遺物が出土している。

第 32 図は遺構外から出土した遺物である。1は瀬戸美濃産磁器碗、2は切込かと思われる磁器小碗、3は肥前かと思われる磁器皿、4は大堀相馬焼と考えられえる薄手の陶器鉢、5は内面陽刻文の磁器皿である。6は外面に濃い藍色の瑠璃釉を施す型押し成型の徳利である。7は堤焼の擂鉢口縁部である。

5．平成 25 年度調査のまとめ

・SD01溝跡からは大量の近世から近代にかけて生産された陶磁器をはじめとした遺物が出土した。

・SD01溝跡の覆土中には炭化木材、焼けた壁土、焼土塊を含み、遺物にも被熱した痕跡が認められることから、焼失家屋の後片付けの際に廃棄されたものと思われる。

・出土した遺物には文様や形状が揃ったものが多く、「組物」を購入していたと考えられる。

・出土遺物のうち、染付は瀬戸美濃産が主体を占めている。また白磁小皿は山形県平清水焼に代表される在地産の可能性がある。

・平面的に確認された土層の差異は、サブトレンチでの結果からC区内にはかつて河道が存在していたことが判明した。

調査区全景（東から）

調査区南側の落ち込みの土層断面（南東から）

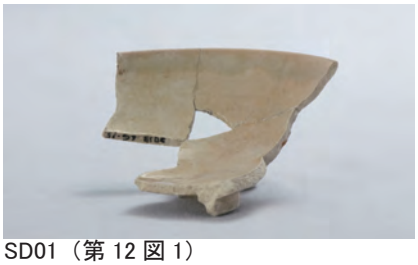
SD01 溝跡の検出状況（南から）

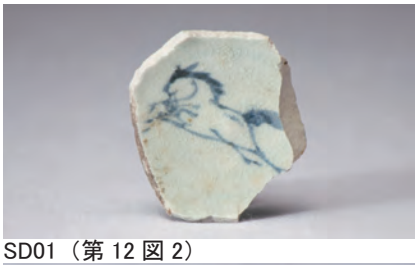
SD01 溝跡の遺物出土状況①（東から）

SD01 溝跡の遺物出土状況②（南から）

SD01 溝跡の遺物出土状況③（東から）

SD01 溝跡完掘状況（南西から）

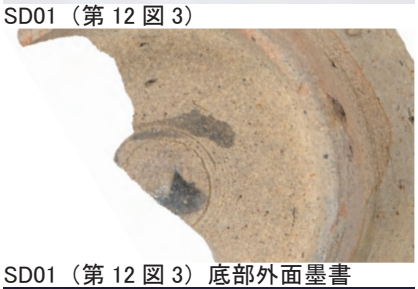

SD01（第 12 図 1）


SD01（第 12 図 2）

SD01（第 12 図 3）

SD01（第 12 図 5）底部外面墨書

SD01（第 12 図 2）底部外面


SD01（第 12 図 3）底部外面墨書

SD01（第 12 図 8）

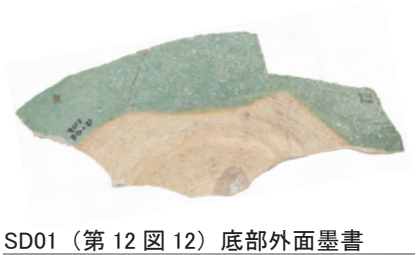
SD01（第 12 図 9）

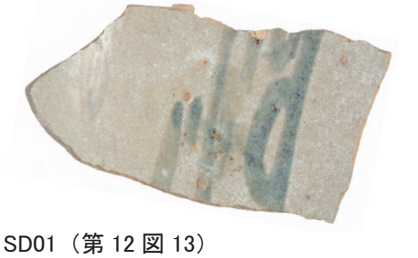
SD01（第 12 図 11）

SD01（第 12 図 10）

SD01（第 12 図 9）

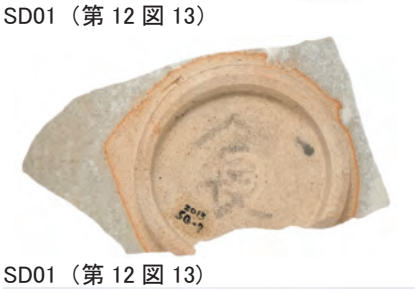
SD01（第 12 図 11）底部外面墨書


SD01（第 12 図 12）底部外面墨書


SD01（第 12 図 13）

SD01（第 12 図 14）

SD01（第 12 図 15）


SD01（第 12 図 13）

SD01（第 12 図 14）

SD01（第 12 図 15）底部外面墨書

SD01（第 12 図 18）

SD01（第 12 図 20）

SD01（第 13 図 1）

SD01（第 13 図 2）

SD01（第 13 図 3）

SD01（第 13 図 4）

SD01（第 13 図 5）

SD01（第 13 図 6）

SD01（第 13 図 7）

SD01（第 13 図 8）

SD01（第 15 図 13）

SD01（第 15 図 13）

SD01（第 15 図 10）内面

SD01（第 15 図 11）内面

SD01（第 16 図 1）内面

SD01（第 17 図 1）

SD01（第 17 図 2）

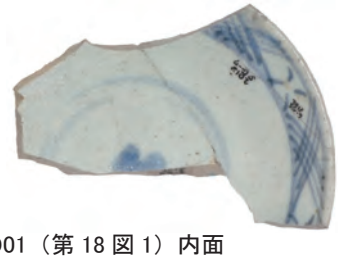
SD01（第 17 図 3）

SD01（第 17 図 5）

SD01（第 18 図 1）外面

SD01（第 18 図 2）

SD01（第 18 図 3）


SD01（第 18 図 1）内面

SD01（第 18 図 4）

SD01（第 18 図 5）

SD01（第 18 図 6）

SD01（第 18 図 7）

SD01（第 18 図 8）

SD01（第 18 図 10）

SD01（第 18 図 9）

SD01（第 18 図 11）

SD01（第 18 図 10）

SD01（第 18 図 17）

SD01（第 18 図 19）

SD01（第 18 図 20）

SD01（第 18 図 21）

SD01（第 18 図 23）

SD01（第 19 図 1）

SD01（第 19 図 5）

SD01（第 19 図 10）

SD01（第 19 図 16）

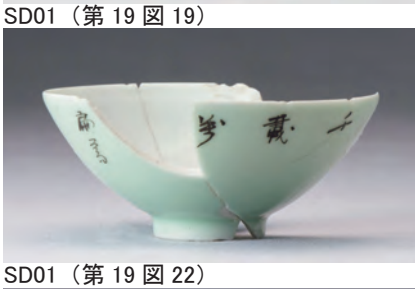
SD01（第 19 図 17）

SD01（第 19 図 18）

SD01（第 19 図 19）

SD01（第 19 図 20）

SD01（第 19 図 21）外面


SD01（第 19 図 22）

SD01（第 19 図 22）

SD01（第 19 図 24）

SD01（第 19 図 25）

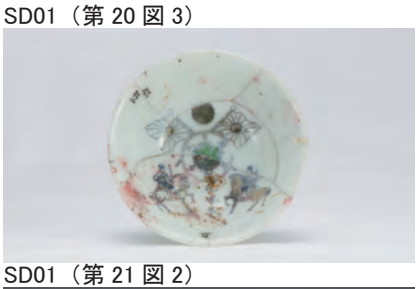
SD01（第 20 図 1）

SD01（第 20 図 2）

SD01（第 20 図 3）

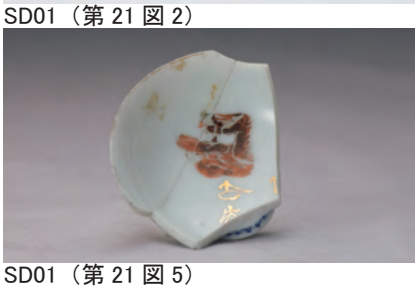
SD01（第 20 図 4）

SD01（第 20 図 5）


SD01（第 21 図 2）

SD01（第 21 図 3）

SD01（第 21 図 4）


SD01（第 21 図 5）

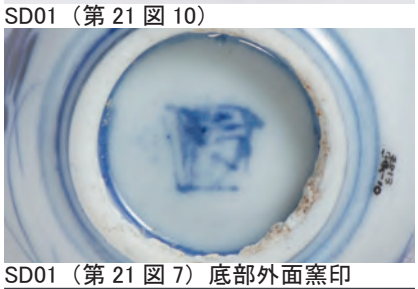
SD01（第 21 図 8）

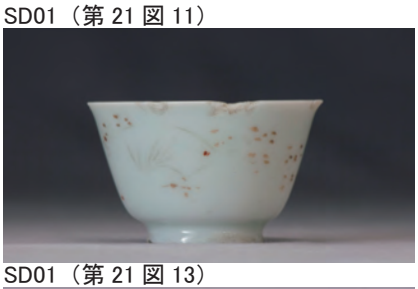
SD01（第 21 図 7）

SD01（第 21 図 10）

SD01（第 21 図 11）

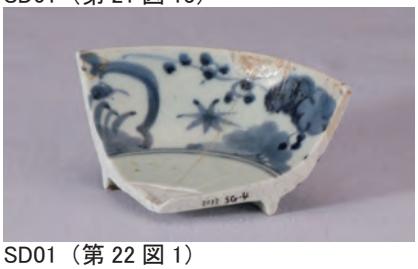
SD01（第 21 図 12）


SD01（第 21 図 7）底部外面窯印


SD01（第 21 図 13）

SD01（第 21 図 14）

SD01（第 21 図 15）


SD01（第 22 図 1）

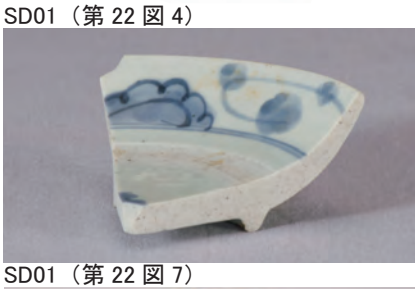
SD01（第 22 図 2）

SD01（第 22 図 3）

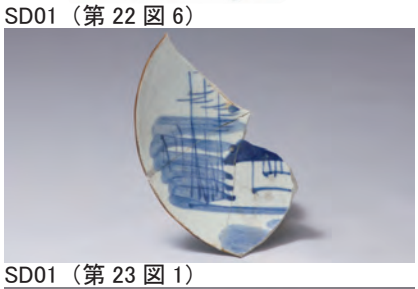
SD01（第 22 図 4）

SD01（第 22 図 5）

SD01（第 22 図 6）


SD01（第 22 図 7）

SD01（第 22 図 8）


SD01（第 23 図 1）

SD01（第 23 図 4）

SD01（第 23 図 2）

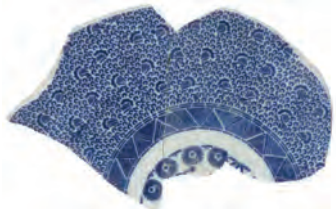
SD01（第 23 図 3）

SD01（第 23 図 5）

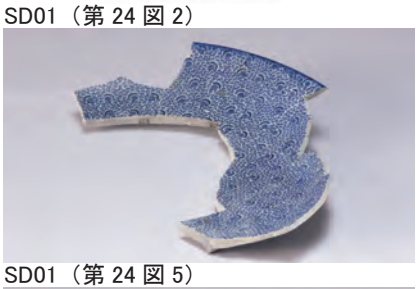
SD01（第 23 図 4）底部外面墨書

SD01（第 24 図 1）

SD01（第 24 図 2）

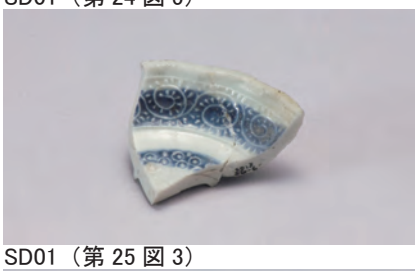

SD01（第 24 図 3）

SD01（第 24 図 4）

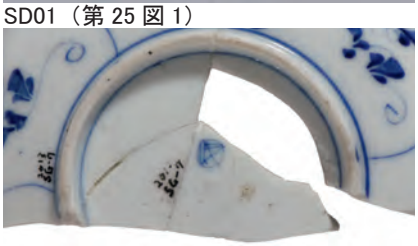

SD01（第 24 図 5）

SD01（第 25 図 2）

SD01（第 25 図 1）


SD01（第 25 図 3）

SD01（第 25 図 4）


SD01（第 25 図 1）底部外面窯印

SD01（第 25 図 5）

SD01（第 25 図 6）

SD01（第 25 図 7）

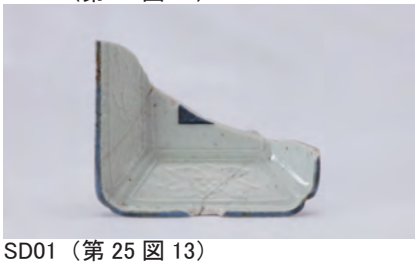
SD01（第 25 図 8）

SD01（第 25 図 9）

SD01（第 25 図 10）

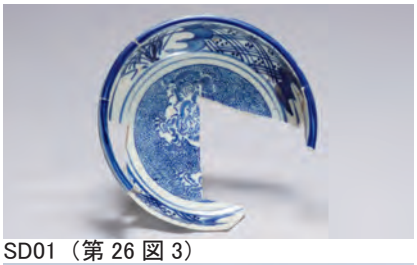
SD01（第 25 図 11）

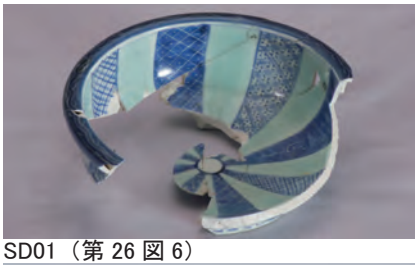
SD01（第 25 図 12）

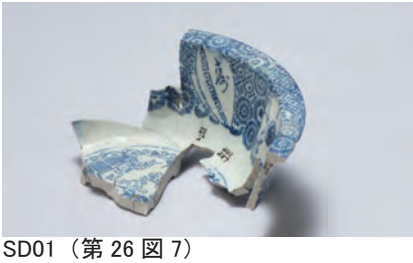

SD01（第 25 図 13）

SD01（第 25 図 14）

SD01（第 26 図 1）


SD01（第 26 図 3）

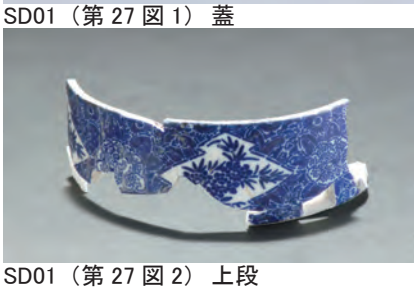

SD01（第 26 図 6）


SD01（第 26 図 7）

SD01（第 27 図 1） 蓋

SD01（第 27 図 1） 上段

SD01（第 27 図 1） 下段


SD01（第 27 図 2） 上段

SD01（第 27 図 3）

SD01（第 28 図 1）

SD01（第 28 図 4）

SD01（第 30 図 1） 底部外面

SD01（第 30 図 6）

SD01（第 30 図 7）

SD01（第 30 図 8）

SD01（第 31 図 1）

SD01（第 31 図 3）

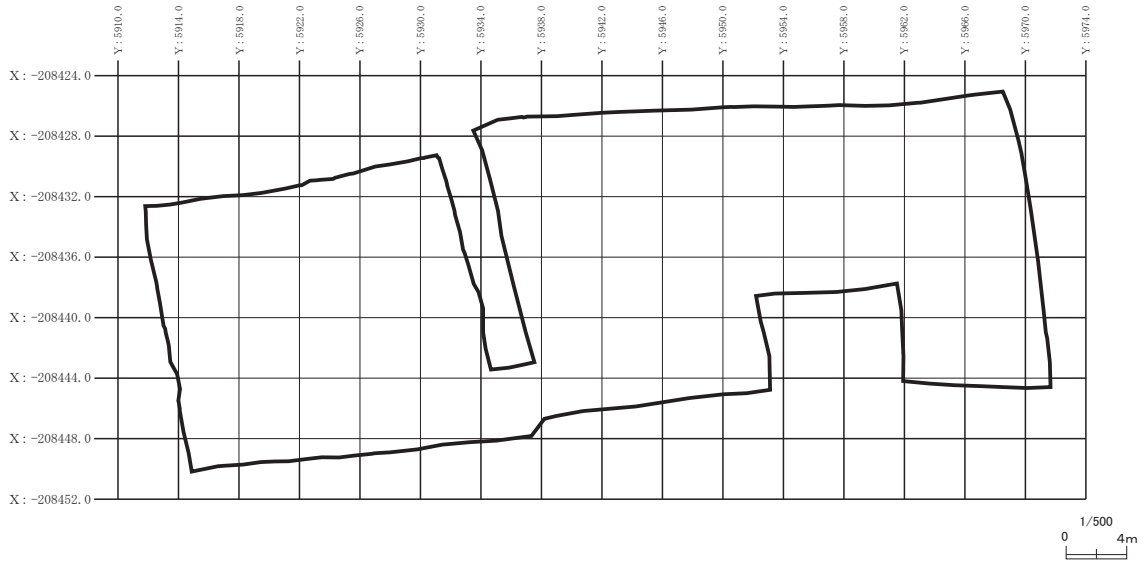
SD01（第 31 図 4）

SK01（第 11 図 1）

第Ⅴ章　平成 26 年度の調査成果

平成 26 年度の調査区は、五間堀川に面した地区に設定した。調査面積は 600 ㎡である。調査時には残土処理の関係からA・B区と分割していたが、ここでは一括して述べる。

調査では掘立柱建物跡 11 棟、柱列跡1列、井戸跡3基、竪穴遺構1基、土坑 17 基、溝跡 20 条をはじめとする遺構を検出し、中世陶器、近世陶磁器、金属製品、石製品などの遺物が発見されている。以下に主要な調査成果について記す。



第 33 図　平成 26 年度グリッド配置図

1．掘立柱建物跡

SB01（第 34・35 図）

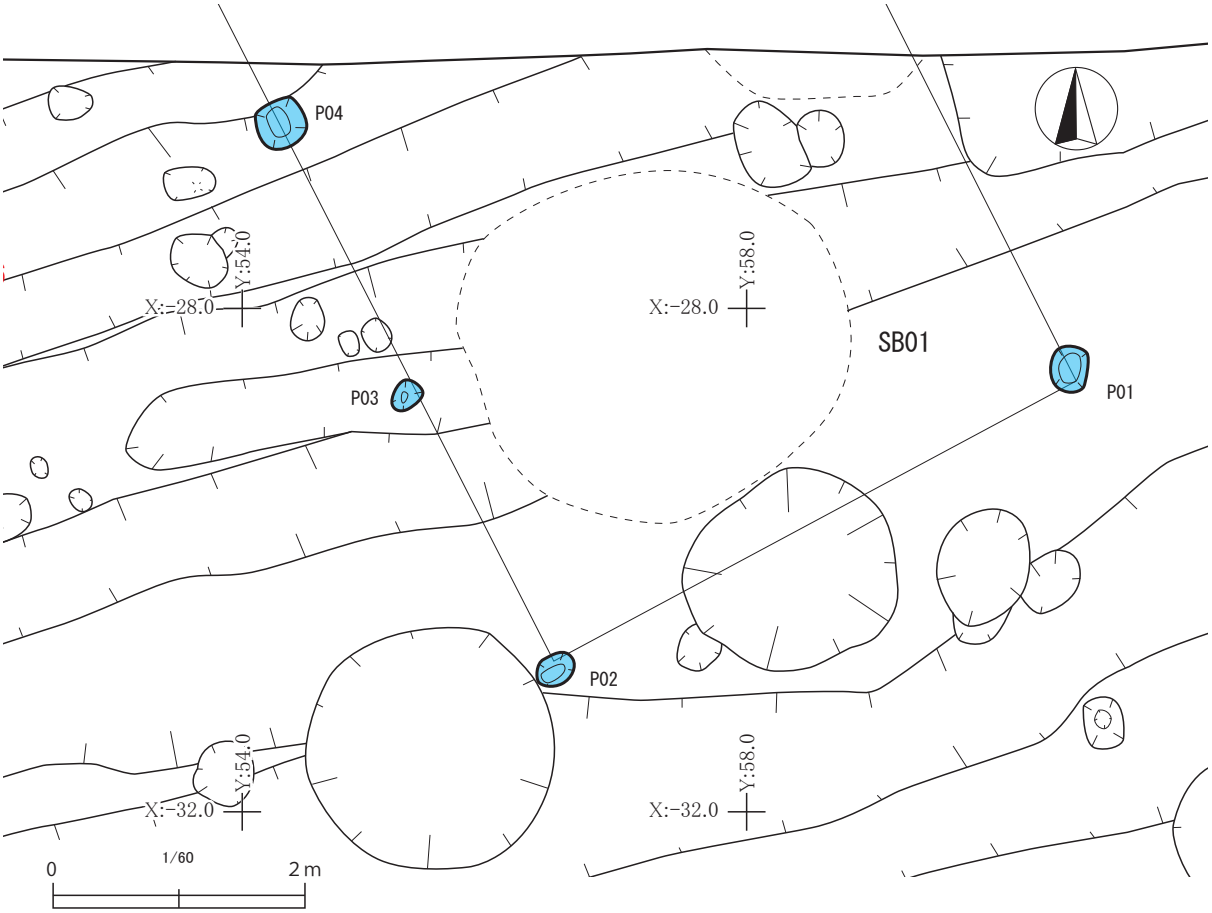
東西1間、南北2間以上の南北棟である。SB02、SD09と重複し、SB02より新しく、SD09より古い。柱穴は4口検出し、1口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 4.8 m以上で、柱間は各 2.4 m、梁行は約 4.7 mである。建物の主軸は西列で計測するとN−27°−W である。柱穴の掘方の形状は隅丸方形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 12 ㎝の円形である。

SB02（第 37・38 図）

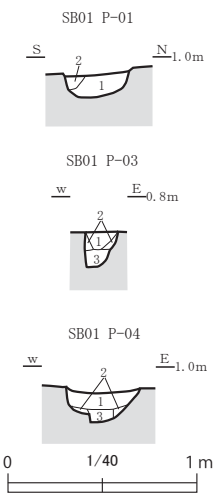
東西4間、南北2間以上の東西棟と考えられる。SD01・02・03と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は7口検出し、1口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 6.8 mで、柱間は 1.5 ～ 1.8 m、梁行は総長 3.8 m以上で、確認できた範囲での柱間は 1.8 ～ 2.0 mである。建物の主軸は南列で計測するとN−64°E である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。

SB03（第 37・39 図）

東西2間、南北1間の東西棟である。SD02・04と重複し、両者より新しい。柱穴は4口検出し、1口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 4.8 mで、柱間は各 2.4 m、梁行は 2.6 mである。建物の主軸は南列で計測するとN−49°−E である。柱穴の掘方の形状は隅丸方形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。



第 34 図 SB01



SB01 P-01 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト	しまりやや弱い。
2	暗褐色	10YR4/3	粘質シルト	しまり強い。マンガンを少量含む。

SB01 P-03 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物・焼土粒微量、マンガン多量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり弱い。褐灰色土・マンガンを少量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまり弱い。マンガンを少量含む。

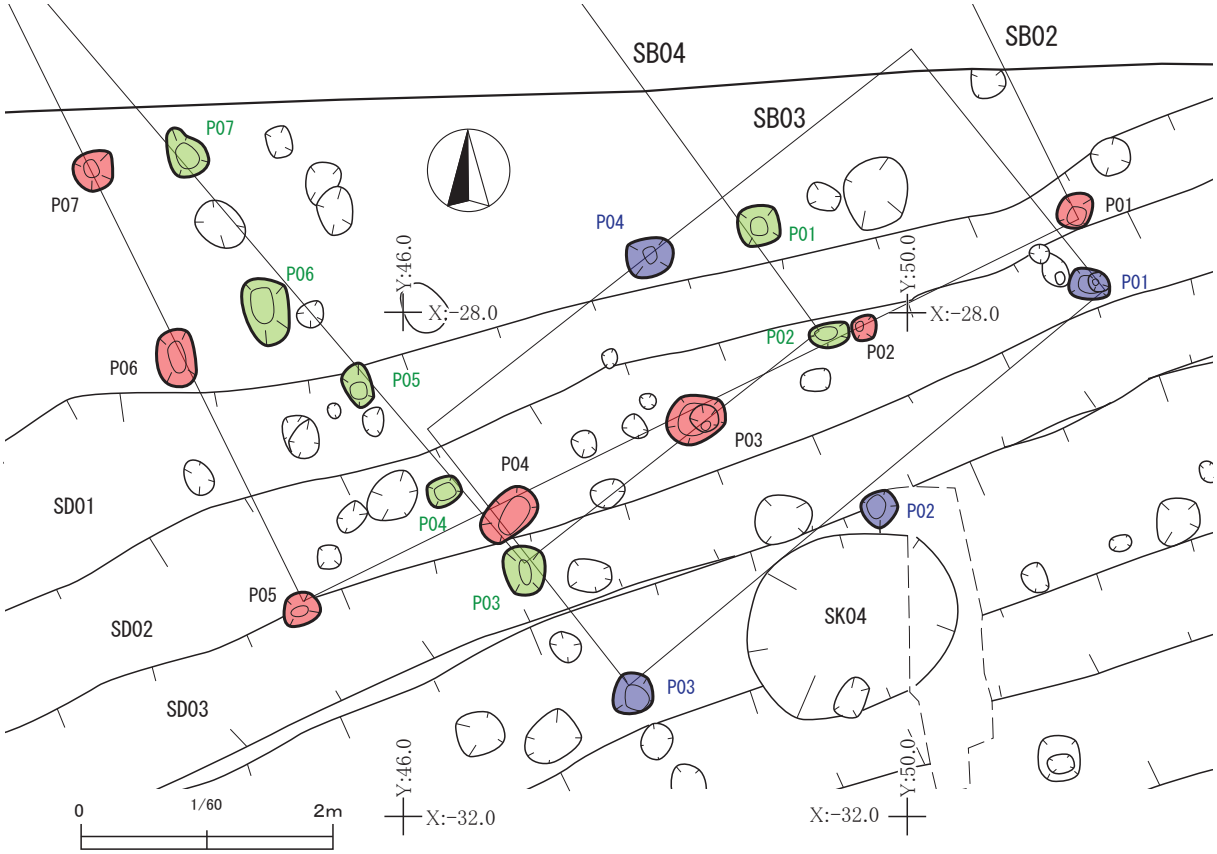
SB01 P-04 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや強い。にぶい黄褐色砂質シルト粒をやや多く含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまりやや強い。にぶい黄褐色砂質シルト粒を少量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまり弱い。柱痕跡。

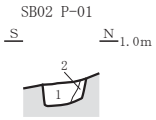
第 35 図 SB01 土層断面図

SB04（第 37・39 図）

東西1間、南北4間の南北棟である。SD01・02・03と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は7口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 4.2 mで、柱間は 0.9 ～ 1.2 m、梁行は約 2.9 mである。建物の主軸は西列で計測するとN-40° Wである。柱穴の掘方の形状は楕円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 10 cmの円形である。

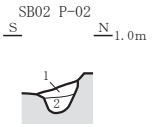


第 37 図　SB02 ～ 04



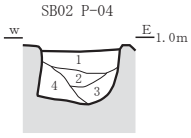
SB02 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/1	シルト	しまり強い。炭化物・焼土粒を微量、マンガンを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまりやや弱い。マンガンを少量含む。



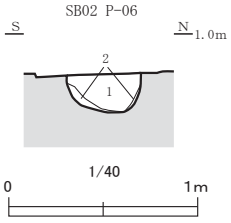
SB02 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまり強い。炭化物・焼土粒を微量、マンガンを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや強い。炭化物微量、マンガンを少量含む。



SB02 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色粘土粒を少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	シルト	黄褐色粘土ブロックを微量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまりやや弱い。暗褐色粘土粒を少量含む。
4	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや弱い。暗褐色粘土ブロックを微量含む。

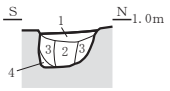


SB02 P-06　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。灰黄褐色砂質シルト粒をやや多く含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	しまり弱い。黒褐色粘土粒をやや多く含む。

第 38 図　SB02 土層断面図

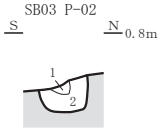
SB03 P-01



SB03 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物微量、マンガン多量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや弱い。マンガン少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまりやや弱い。マンガン少量含む。

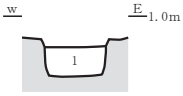
SB03 P-02



SB03 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや弱い。炭化物・焼土粒・マンガンを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。炭化物・焼土粒を微量、マンガンを多量含む。

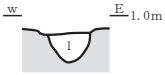
SB03 P-03



SB03 P-03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト	しまり弱い。炭化物・焼土粒微量、褐色粘土ブロックを少量含む。

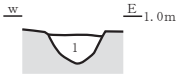
SB03 P-04



SB03 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物を微量含む。

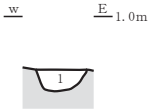
SB04 P-01



SB04 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや強い。にぶい黄褐色砂質シルト粒を多量含む。

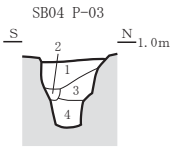
SB04 P-02



SB04 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/1	シルト	しまり強い。炭化物を微量、マンガンを多量含む。

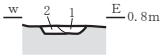
SB04 P-03



SB04 P-03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまり強い。褐色粘土ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物微量、マンガン多量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや弱い。マンガン少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまりやや弱い。マンガン少量含む。

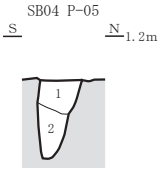
SB04 P-04



SB04 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや強い。炭化物・焼土粒・マンガンを少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	マンガンを多量含む。

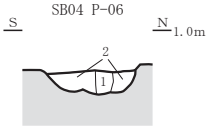
SB04 P-05



SB04 P-05　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色粘土ブロックを多量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄褐色粘土粒を少量含む。

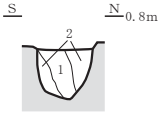
SB04 P-06



SB04 P-06　土層注記

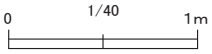
層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり弱い。にぶい黄褐色粘土粒を微量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	しまり弱い。黒褐色粘土粒・灰黄褐色砂質シルトブロックを少量含む。

SB04 P-07

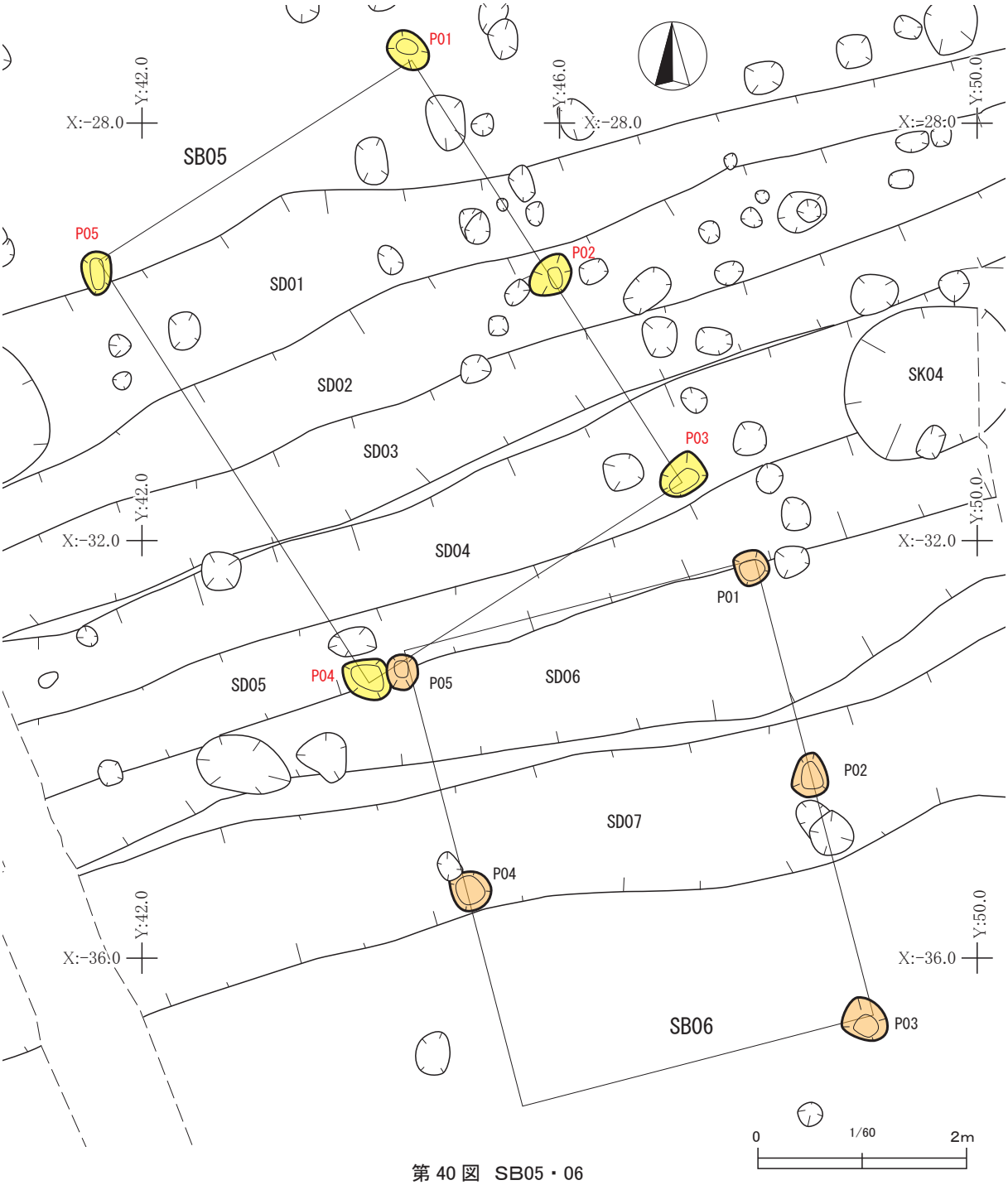


SB04 P-07　土層注記

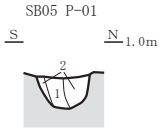
層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり弱い。炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまりやや弱い。にぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む。



第 39 図　SB03・04 土層断面図

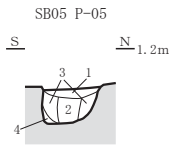


第 40 図　SB05・06



SB05 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり弱い。灰黄褐色粘土粒を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや弱い。灰黄褐色粘土ブロックをやや多く含む。



SB05 P-05　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	にぶい黄褐色粘土ブロックをやや多く含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黒褐色粘土・黄褐色粘土粒を少量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや弱い。にぶい黄褐色粘土粒を少量含む。
4	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	しまりやや弱い。黒褐色粘土粒を微量含む。

1/40　0　1m

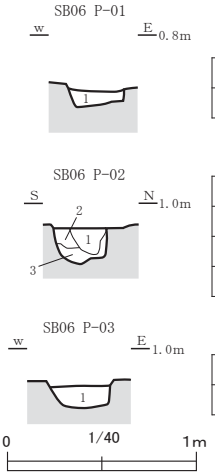
第 41 図　SB05 土層断面図

SB05（第 40・41 図）

東西1間、南北2間の南北棟である。SB06、SD01・02・04～06と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は5口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 4.8 mで、柱間は各 2.4 m、梁行は約 3.6 mである。建物の主軸は東列で計測するとN-52° -W である。柱穴の掘方の形状は楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。

SB06（第 40・42 図）

東西1間、南北2間の南北棟である。SB05、SD05～07と重複し、SB05より古く、SD05～07より新しい。柱穴は5口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 4.5 mで、柱間は 2.2 ～ 2.3 m、梁行は約 3.4 mである。建物の主軸は東列で計測するとN-15° -W である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。



SB06 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや弱い。にぶい黄褐色粘土粒を多量含む。

SB06 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト	しまり強い。炭化物・焼土粒を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。炭化物・焼土粒・褐灰色シルトブロックを微量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや弱い。褐灰色シルトブロック・マンガンを多量含む。

SB06 P-03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまり強い。マンガン多量含む。

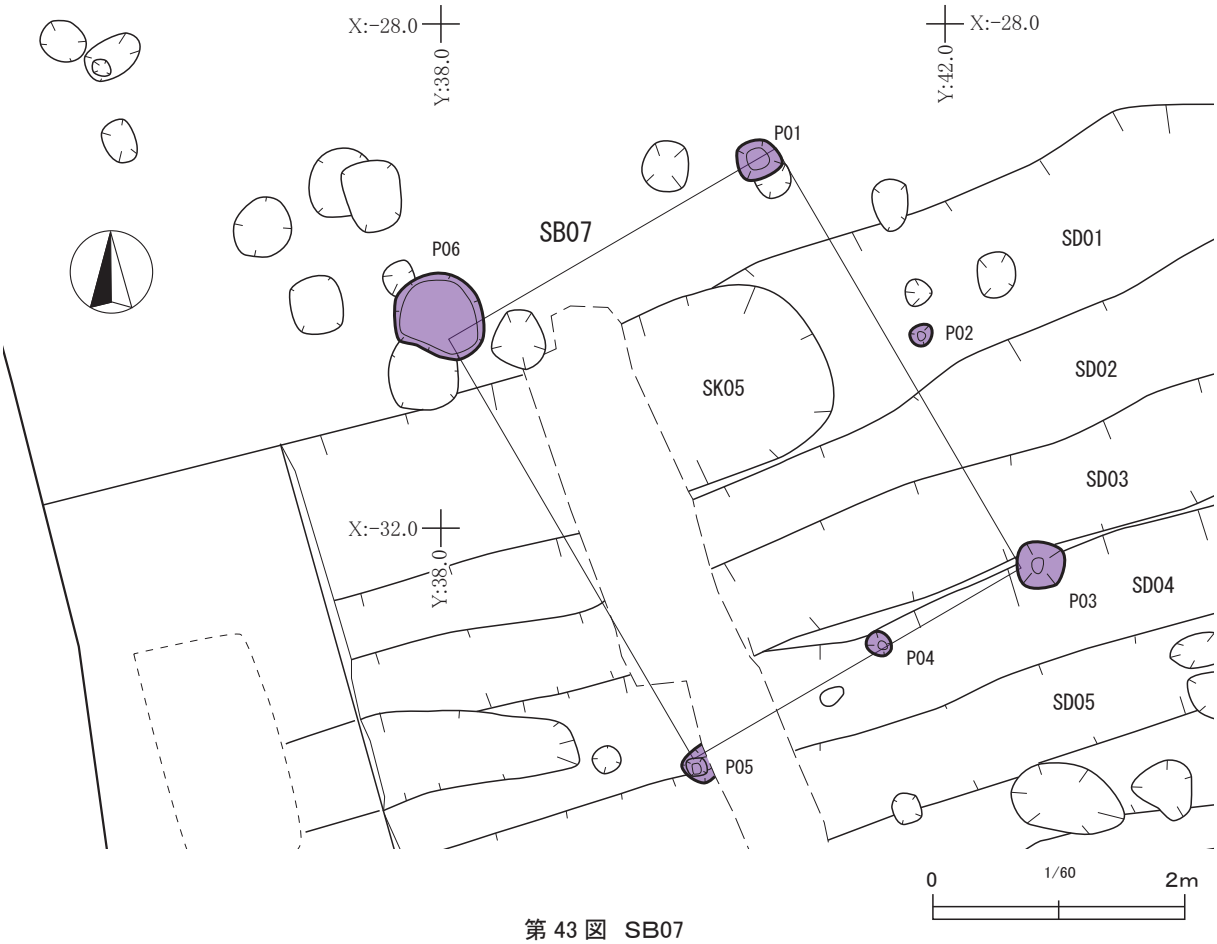
第 42 図　SB06 土層断面図

SB07（第 43・44 図）

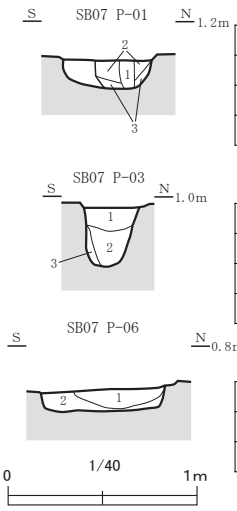
東西2間、南北2間の南北棟である。SD01・03～05と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は6口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 3.8 mで、柱間は 1.8 ～ 2.0 m、梁行は総長 3.0 mで、柱間は 1.3 ～ 1.7 mである。建物の主軸は東列で計測するとN-30° -W である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 12 ㎝の円形である。

SB08（第 45・46 図）

東西1間、南北2間以上の南北棟である。柱穴は4口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は確認できた範囲での桁行が総長 2.2 m以上で、梁行は約 3.6 mである。建物の主軸は東列で計測するとN-20° -W である。柱穴の掘方の形状は円形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。



第 43 図　SB07



SB07 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	しまり弱い。灰黄褐色シルト粒を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。灰黄褐色シルトブロックを多量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや強い。にぶい黄褐色粘土粒を微量含む。

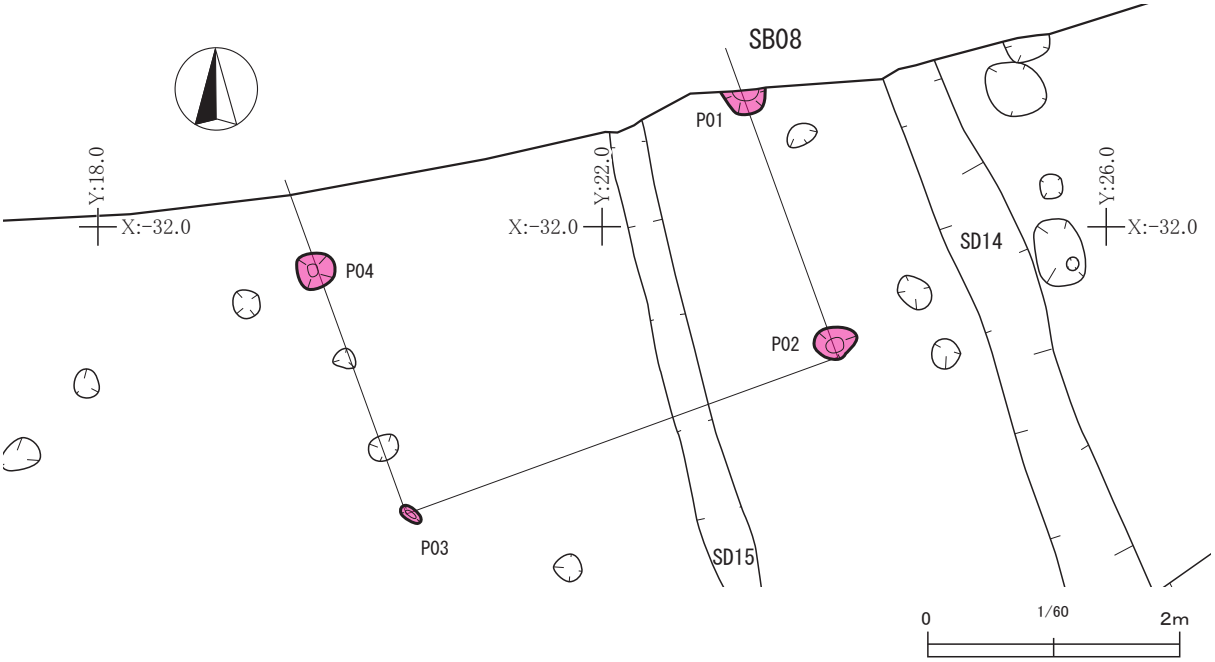
SB07 P-03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物・暗褐色粘土ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり強い。炭化物少量、暗褐色・褐色粘土ブロックを多量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや強い。暗褐色粘土ブロックを少量含む。

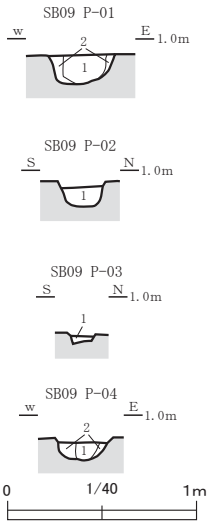
SB07 P-06　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや弱い。灰黄褐色シルト粒をやや多く含む。
2	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまり弱い。褐色粘土ブロックを少量含む。

第 44 図　SB07 土層断面図



第 45 図 SB08



SB09 P-01 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト	しまりやや強い。炭化物・焼土粒・褐色粘土粒を少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。灰褐色粘土ブロックを少量含む。

SB09 P-02 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまり強い。炭化物・焼土粒を微量含む。

SB09 P-03 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物・マンガンを少量含む。

SB09 P-04 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	しまりやや弱い。炭化物・マンガンを少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。マンガンを少量含む。

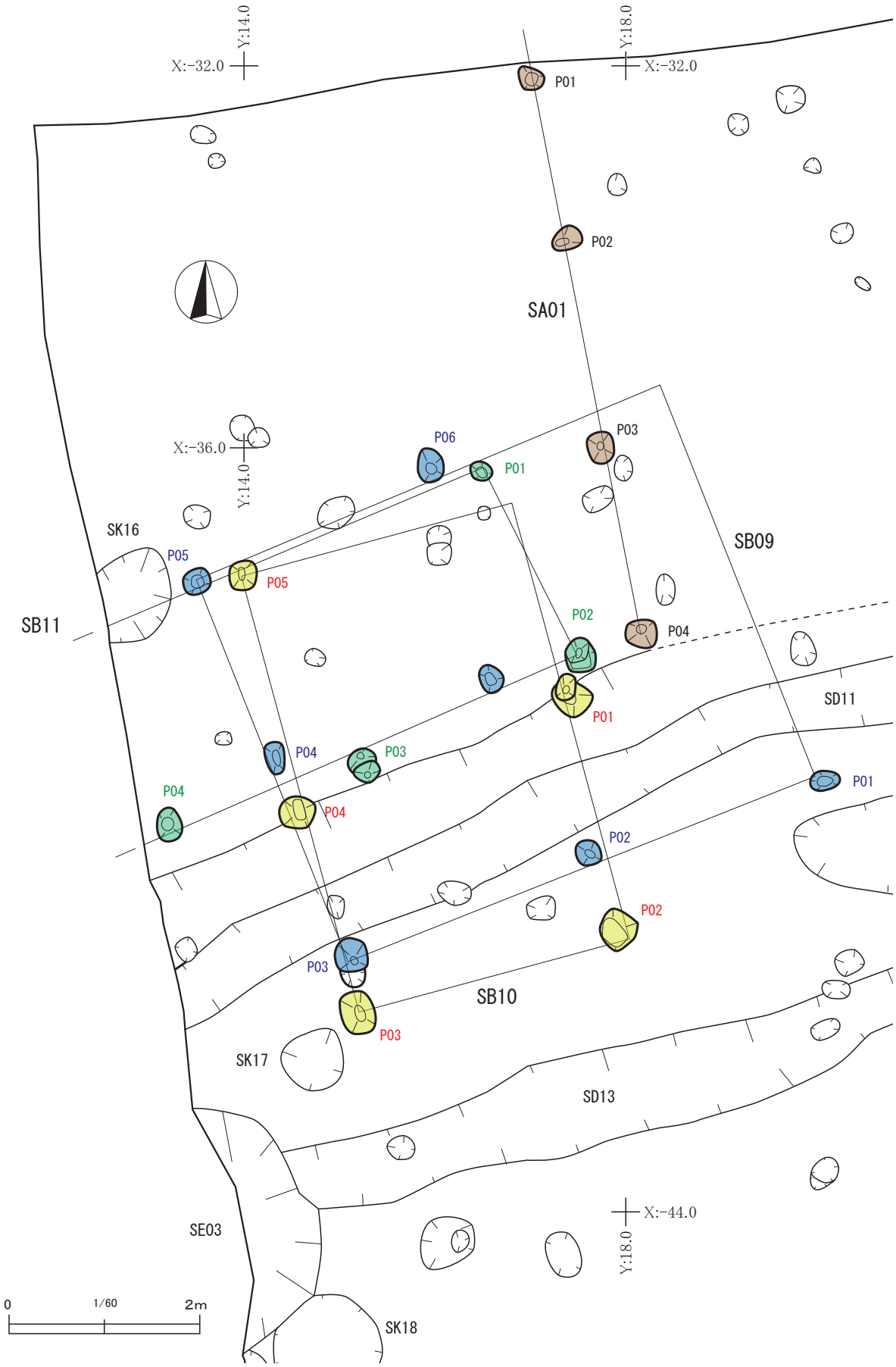
第 46 図 SB08 土層断面図

SB09（第 47・48 図）

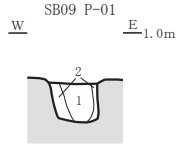
東西2間、南北2間の東西棟である。柱穴は6口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.3 mで、柱間は 2.6 ～ 2.7 m、梁行は総長 4.3 mで、柱間は 2.1 ～ 2.2 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-68° Eである。柱穴の掘方の形状は円形、楕円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 12 ㎝の円形である。

SB10（第 47・48 図）

東西1間、南北2間の南北棟である。SD11と重複し、これより新しい。柱穴は5口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 4.7 mで、柱間は 2.2 ～ 2.5 m、梁行は約 2.9 mである。建物の主軸は西列で計測するとN-15° -Wである。柱穴の掘方の形状は長方形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 12 ㎝の円形である。

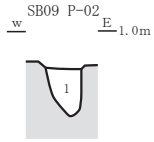


第 47 図　SB09 ～ 11、SA01



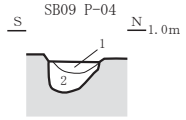
SB09 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト	しまりやや弱い。炭化物・焼土粒を微量、マンガンを少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや強い。マンガンを少量含む。



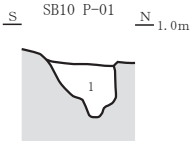
SB09 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまり強い。炭化物・焼土粒を微量、褐色粘土ブロックを少量含む。



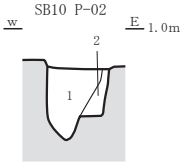
SB09 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト	しまりやや弱い。炭化物・焼土粒を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。マンガンを少量含む。



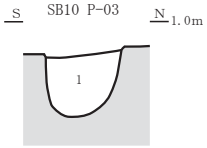
SB10 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり強い。炭化物・焼土粒を微量、褐色粘土ブロックを少量含む。



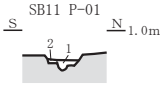
SB10 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。焼土粒を微量、炭化物を少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまりやや弱い。炭化物を微量、褐色粘土ブロックを少量含む。



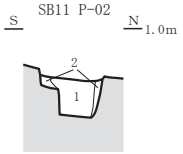
SB10 P-03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	しまりやや強い。焼土粒を微量、炭化物・褐色粘土粒を少量含む。



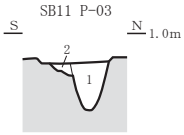
SB11 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト	しまり弱い。炭化物を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。炭化物を微量、褐色粘土ブロックを少量含む。



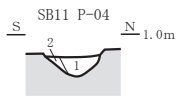
SB11 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。炭化物を微量、褐色粘土ブロックを少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまり弱い。マンガンを少量含む。



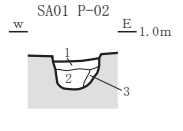
SB11 P-03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	しまり強い。炭化物・焼土粒を微量、褐色粘土ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまり強い。褐色粘土ブロックを少量含む。



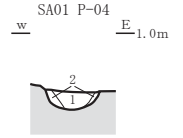
SB11 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	しまりやや弱い。炭化物を微量、褐色粘土ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまり弱い。マンガンを微量、黒色粘土ブロックを少量含む。



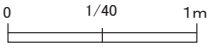
SA01 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト	しまり弱い。炭化物・焼土粒を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト	しまりやや弱い。炭化物を微量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや強い。焼土粒を微量含む。



SA01 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまり強い。黒色粘土ブロックを少量含む。



第 48 図　SB09 ～ 11、SA01 土層断面図

SB11（第 47・48 図）

東西2間以上、南北1間の東西棟と考えられる。柱穴は4口検出し、すべてで柱痕跡を確認した。平面規模は確認できた範囲での桁行が総長 4.6 m以上で、柱間は 2.1 ～ 2.5 m、梁行は約 2.2 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-64°-E である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。

第 24 表　平成 26 年度調査　掘立柱建物跡属性表

建物名	間数	棟方向	桁行総長（m）	柱間寸法（m）	測定柱列	梁行総長（m）	柱間寸法（m）	測定柱列	方向	柱痕跡径（㎝）	柱穴規模（㎝）	平面形	備　考
SB01	1×2以上	南北	4.8以上	2.4,2.4	西列	4.7	4.7	南列	N-27°-W	12	30 ～ 42	隅丸方形，楕円形	SB02 より新，SD09 より古
SB02	2×4	東西	6.8	1.8,1.7,1.5,1.8	南列	3.8	1.8,2.0	西列	N-64°-E	10	15 ～ 50	楕円形，円形	SD01・02・03 より新
SB03	1×2	東西	4.8	2.4,2.4	南列	2.6	2.6		N-49°-E	10	32 ～ 40	隅丸方形，楕円形	SD02・04 より新
SB04	1×4	南北	4.2	1.2,1.1,1.0,0.9	西列	2.9	2.9	南列	N-40°-W	10	28 ～ 55	楕円形，隅丸方形	SD01・02・03 より新
SB05	1×2	南北	4.8	2.4,2.4	東列	3.6	3.6	南列	N-32°-W	10	40 ～ 50	楕円形	SB06,SD01・02・04・05・06 より新
SB06	1×2	南北	4.5	2.2,2.3	東列	3.4	3.4	北列	N-15°-W	10	35 ～ 45	楕円形，隅丸方形	SB05 より古，SD05・06・07 より新
SB07	2×2	南北	3.8	1.8,2.0	東列	3.0	1.7,1.3	南列	N-30°-W	12	20 ～ 70	楕円形，隅丸方形	SD01・03・04・05 より新
SB08	1×2以上	南北	2.2以上	2.2	東列	3.6	3.6	南列	N-20°-W	10	20 ～ 35	円形，楕円形	
SB09	2×2	東西	5.3	2.7,2.6	南列	4.3	2.1,2.2	西列	N-68°-E	12	25 ～ 35	円形，楕円形，隅丸方形	
SB10	1×2	南北	4.7	2.5,2.2	西列	2.9	2.9	南列	N-15°-W	12	32 ～ 45	長方形，隅丸方形	SD11 より新
SB11	1×2以上	東西	4.6以上	2.5,2.1	南列	2.2	2.2	東列	N-67°-E	10	25 ～ 40	楕円形	
SA01	3	南北	5.8	1.7,2.1,2.0					N-11°-W	10	25 ～ 30	楕円形	

2．井戸跡

SE01（第 49 図）

素掘りの井戸で平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸 1.7 m、短軸は 1.4m を測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より 1.9 m 下で底面を検出している。堆積土は 12 層に分層でき、1～8層は人為的埋土、9～ 12 層は自然堆積土と考えられる。

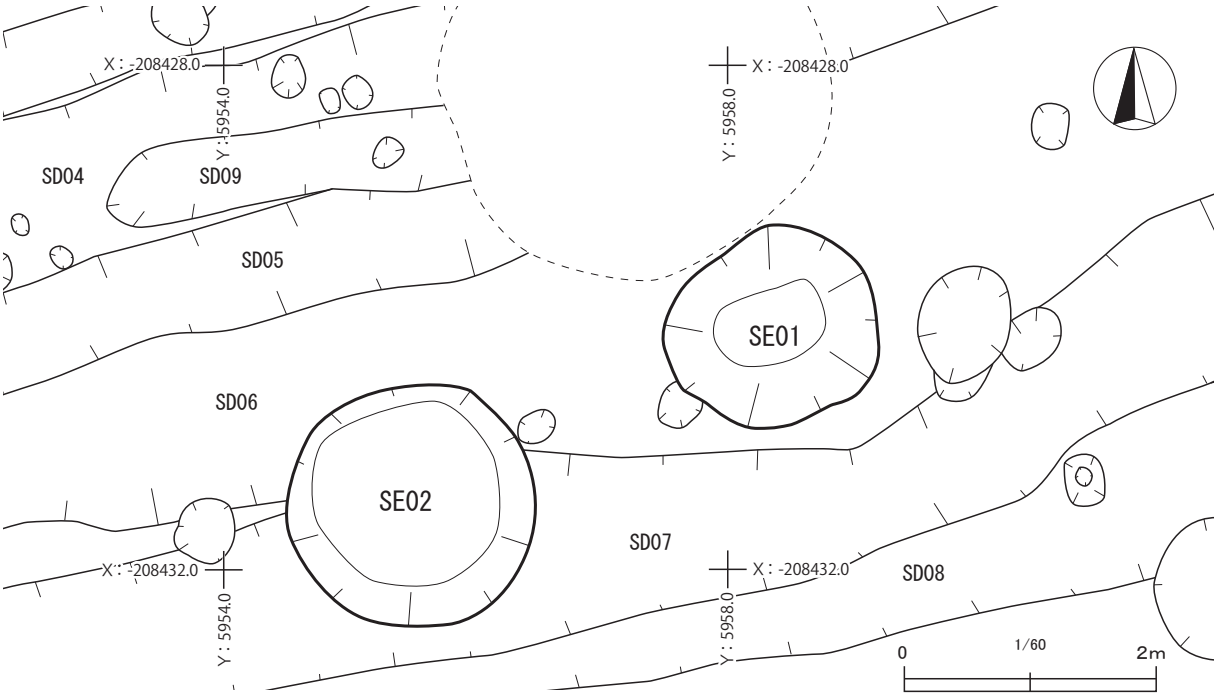
SE02（第 49・50 図、第 25 表）

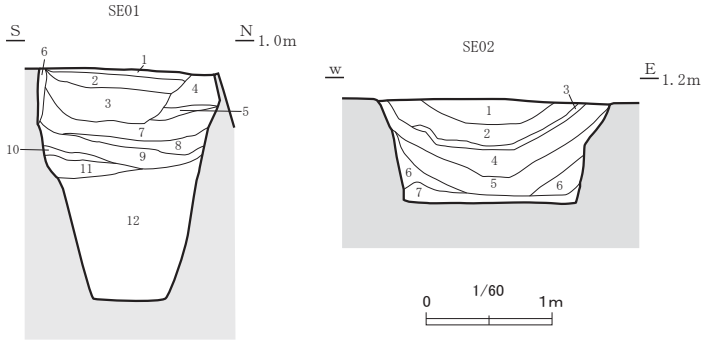
SD06・07と重複し、これより新しい。素掘りの井戸で平面形状は円形を呈し、規模は長軸 2.0 m、短軸は 1.4m を測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より 0.9 m 下で底面を検出している。堆積土は7層に分層でき、1層は人為的埋土、2～7層は自然堆積土と考えられる。

第 50 図は SE02 から出土した白石産陶器である。甕胴部であるが、断面一辺と内面の 2/3 ほどを研磨に使用している。13 世紀後半～ 14 世紀前半。

SE03（第 36・51 図）

SK07、SD13と重複し、これより新しい。西壁際での確認のため平面形状は不明であるが、素掘りの井戸と考えられる。規模は確認できた範囲で長軸 2.6 mを測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より 1.1 m 下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。確認できた堆積土は 11 層に分層でき、すべて人為的埋土と考えられる。





SE01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや強い。炭化物・にぶい黄褐色粘土粒を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや強い。マンガン・褐灰色シルトブロックを多量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまりやや弱い。マンガン・褐灰色シルトブロックを多量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまりやや弱い。マンガン・褐灰色シルトブロックを多量含む。
5	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまりやや強い。マンガン・褐色粘土ブロックを少量含む。
6	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまり強い。マンガン微量、褐色粘土粒を少量含む。
7	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり強い。マンガン・暗褐色粘土ブロックを多量含む。
8	黒褐色	10YR2/2	粘質土	しまりやや強い。マンガン・褐色粘土ブロックを少量含む。
9	黒褐色	10YR2/2	粘質土	しまり強い。マンガンを少量含む。
10	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや強い。マンガンを少量含む。
11	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	しまりやや弱い。マンガンを多量、黒褐色粘土粒を少量含む。
12	黒褐色	10YR2/2	粘質土	しまり弱く、粘性強い。植物遺体を少量含む。

SE02　土層注記

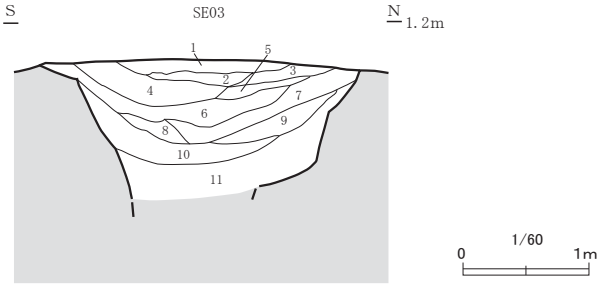
層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや弱い。にぶい黄褐色粘土ブロックを多量含む。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト	しまりやや弱い。にぶい黄褐色粘土粒を多量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	しまりやや弱い。黒褐色粘土粒を少量含む。
4	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや弱い。炭化物・にぶい黄褐色粘土粒を微量含む。
5	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや弱い。褐色粘土粒を微量含む。
6	褐色	10YR4/4	粘質シルト	しまり弱い。黒褐色粘土粒をやや多く含む。
7	黒褐色	10YR2/1	粘土	しまり弱い。褐色粘土・にぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む。

第 49 図　SE01・02、土層断面図

第 50 図　SE02 出土遺物

第 25 表　SE02 出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)			写真番号
						口径	底径	器高	
1	SE02	陶器	甕	白石	胎土は灰色で砂粒（特に白色粒）を多く含む。内面は灰黄褐色で外面は褐灰色。13 世紀後半～ 14 世紀後半。研磨土器に転用。			(9.2)	



SE03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	粘土	しまり弱い。炭化物を少量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	しまりやや強い。焼土粒を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	粘土	しまりやや強い。焼土粒・炭化物を少量含む。
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	しまりやや強い。地山ブロックを極めて多量含む。
5	褐灰色	10YR4/1	粘土	しまりやや弱い。地山ブロックを少量、炭化物を微量含む。
6	黒褐色	10YR3/2	粘土	しまりやや弱い。地山粒・炭化物を少量、焼土粒を微量含む。
7	黒褐色	10YR3/1	粘土	しまりやや強い。炭化物をやや多く、焼土粒を微量含む。
8	褐灰色	10YR4/1	粘土	しまり強い。灰白色粘土を少量、黒褐色粘土粒を微量含む。
9	黒褐色	10YR2/2	粘土	しまりやや強い。地山ブロックを多量、焼土粒・炭化物を少量含む。
10	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	しまりやや強い。黒褐色粘土ブロックを少量含む。
11	黒褐色	10YR2/2	粘土	しまりやや弱い。地山ブロックを少量含む。

第 51 図　SE03 土層断面図

第 26 表　平成 26 年度調査　井戸跡属性表

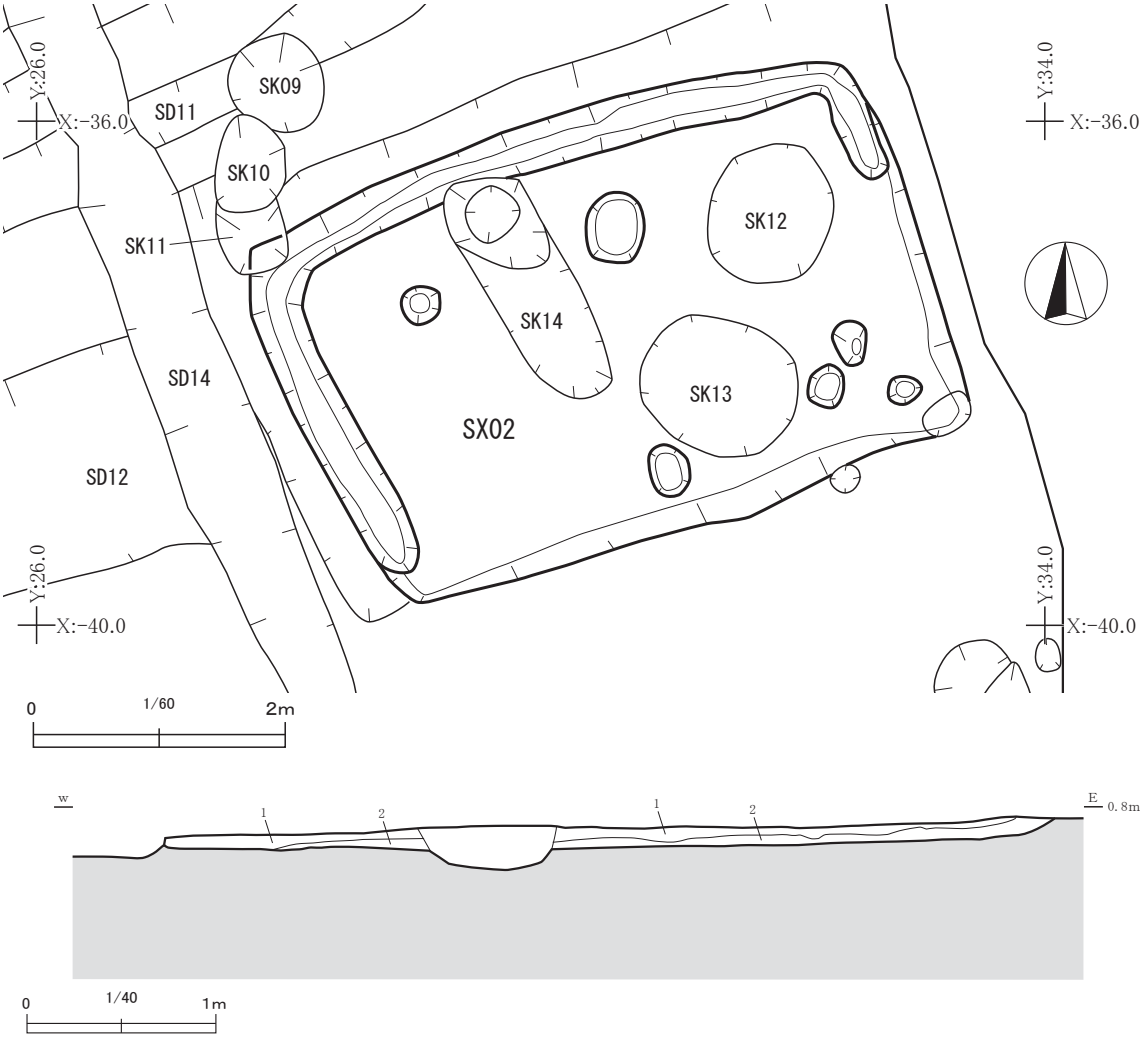
遺構名	構造	平面形	断面形	規模（m）	深さ（m）	堆積土	遺物	備　　考	平面図	断面図
SE01	素掘	楕円形	円筒	1.7 × 1.4	1.9	自然→人為			49	49
SE02	素掘	円形	漏斗	2.0 × 1.9	0.9	自然→人為	白石	SD06・07 より新	49	49
SE03	素掘	―	漏斗	2.6 ×―	1.1 以上	自然→人為		SD13・SK17 より新	36	51

3. 竪穴遺構

SX02（第 52・53 図、第 27 表）

SK15、SD16と重複し、SK15より古く、SD16より新しい。平面形状は長方形であり、規模は長軸 5.7 m、短軸は 3.5m を測る。確認面からの深さは約 20 ㎝ である。主軸方位は南辺で N-18° -E を測る。北側・西側及び東側の北寄りでは周溝がめぐる。底面では貼床などの痕跡は見られないが、ピット6口がみとめられる。堆積土は2層に分層でき、すべて人為的埋土である。

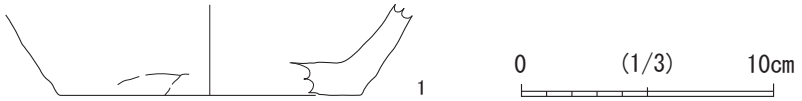
第 53 図は SX02 から出土した白石産陶器である。小型の片口鉢の底部片と考えられる。13 世紀後半～14 世紀前半。



SI02 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	黒褐色	10YR3/1	シルト	しまり強い。炭化物・焼土粒を微量、マンガンを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまりやや弱い。マンガンを少量含む。

第 52 図 SX02、土層断面図



第 53 図　SX02 出土遺物

第 27 表　SX02 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SX02	陶器	片口鉢	白石	内面は灰黄褐色。外面はにぶい褐色。胎土は暗灰黄色で砂粒を含む。13 世紀後半～14 世紀前半。		(12.0)	(3.6)

4．土坑

調査では 17 基の土坑を確認し、このうちSK01・02・07については詳述する。その他の土坑については第 29 表にまとめている。

SK01（第 36・54 図）

平面形状は楕円形であり、規模は長軸 1.3m、短軸 1.1m を測る。確認面からの深さは約 80cm であるが、壁面中位下部よりオーバーハングして底面へと至る袋状を呈する。堆積上は4層に分層でき、1 ～3層は人為的埋土、4層は自然堆積土と考えられる。

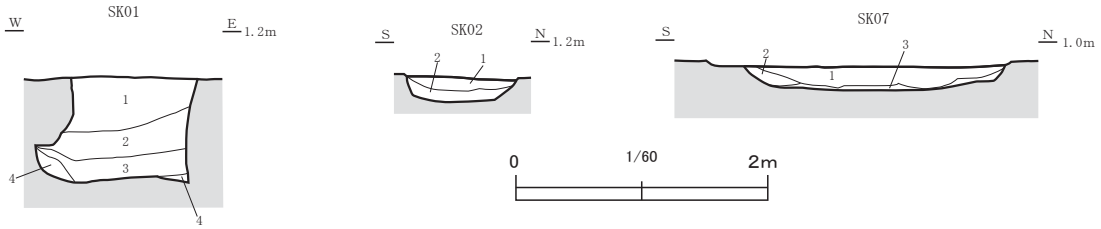
SK02（第 36・54・55 図、第 28 表）

平面形状は台形であり、規模は長軸 0.7 m、短軸 0.6 mを測る。確認面からの深さは約 20cm であり、断面形状は逆台形を呈する。堆積上は2層に分層でき、すべて人為的埋上である。

第 55 図は SK02 の出土遺物である。1は汽車土瓶である。型押し成型で、一対の耳と外面に「お茶」の型押し文字がみられる。2は瀬戸美濃産と考えられる陶器碗で、外面鉄釉、内面灰釉を施す。

SK07（第 36・54 図）

平面形状は楕円形であり、規模は長軸 2.6 m、短軸 2.5 mを測る。確認面からの深さは約 20cm であり、断面形状は皿形を呈する。堆積上は3層に分層でき、すべて人為的埋上である。



SK01　土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	しまりやや弱い。炭化物をやや多く、灰黄褐色シルトブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまり弱い。炭化物を微量、マンガンを少量含む。
3	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり弱い。灰黄褐色粘土ブロックを微量含む。
4	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	しまりやや弱い。灰黄褐色粘土粒をやや多く含む。

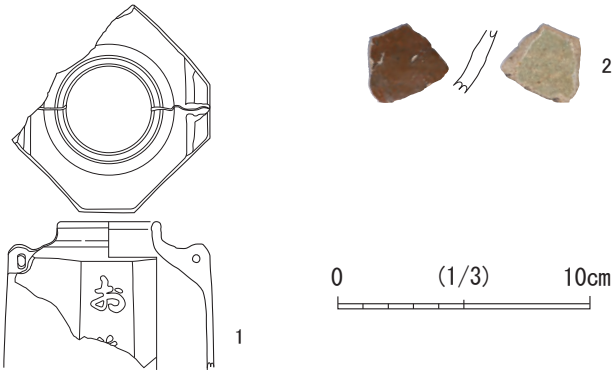
SK02　土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまり弱い。にぶい黄褐色砂質シルトブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	にぶい黄褐色粘質シルト粒を多量含む。

SK07　土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	炭化物微量、にぶい黄褐色粘質土ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	にぶい黄褐色粘質シルト粒を多量、炭化物を少量含む。

第 54 図　SK01・02・07 土層断面図



第 55 図 SK02 出土遺物

第 28 表 SK02 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SK02	陶器	汽車土瓶	不明	型成形。胎土は淡黄色。	4.1		(5.9)
2	SK02	陶器	碗	瀬戸美濃か	内面に灰釉，外面に鉄釉。胎土は粗く，にぶい黄橙色。			(2.8)

第 29 表 平成 26 年度調査 竪穴遺構・土坑属性表

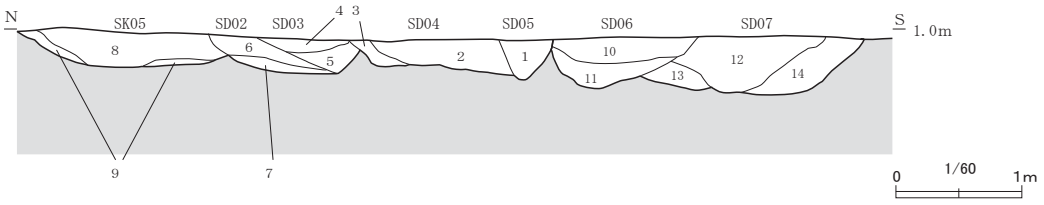
遺構名	平面形	断面形	規模（m）	深さ(m)	堆積土	出土遺物	備 考	平面図	断面図
SX02	長方形	皿形	5.7 × 3.5	0.2	人為		SK14・SD16 より古	52	52
SK01	楕円形	袋状	1.3 × 1.1	0.8	自然→人為	白石	SD08 より新	36	54
SK02	台形	逆台形	0.7 × 0.6	0.2	人為	瀬戸美濃	SD04・05 より新	36	54
SK03	円形	皿形	1.1 × 1.1	0.1	人為		SD01 より新	36	
SK04	楕円形	逆台形	1.8 × 1.4	0.4	人為			36	
SK05	方形？	皿形	—× 1.5	0.3	人為			36	
SK06	長方形	逆台形	0.8 × 0.6	0.2	人為			36	
SK07	楕円形	皿形	2.6 × 2.5	0.2	自然			36	54
SK08	楕円形	皿形	1.1 × 0.8	0.2	人為		SD01・10・11 より新	36	
SK09	楕円形	皿形	0.7 ×—	0.1	人為		SK10 より古 ,SD10 より新	36	
SK10	楕円形	U字	0.7 × 0.5	0.2	人為		SK09,SD16 より古 ,SK11 より新	36	
SK11	楕円形？	U字	—× 0.5	0.3	人為		SK10 より古 ,SD16・SX02 より新	36	
SK12	楕円形	皿形	1.1 × 1.0	0.1	人為			36	
SK13	楕円形	皿形	1.3 × 1.0	0.2	人為			36	
SK14	長方形？	U字	—× 0.7	0.2	人為		SD16 より古 ,SX02 より新	36	
SK15	楕円形？	逆台形	—×—	0.3	人為			36	
SK16	台形	逆台形	0.6 × 0.6	0.4	人為			36	
SK17	円形	箱形	1.1 × 1.1	0.1	人為		SE03 より古	36	

5. 溝跡

調査では 16 条の溝跡を確認している。このうち調査区中央から北側にかけての範囲では多数の東西溝が重複して確認されている。これらの東西溝の詳細は第 36 表にまとめているが、いずれも主軸方位は N-70° ～ 75° -E という極めて近い数値を示しており、すべてが人為的に埋め戻されていることを特徴とする。またこれらの溝跡の中にはSD02・12・16などのように中世陶器のみが出土し、近世以降の遺物は一切みられないことから、いずれも中世の段階に機能していたと考えられる。さらにこれら東西溝跡の南側での遺構密度は極めて低いことを併せ考えると、これらの溝跡の性格としては中世集落の南限とする区画溝の可能性も考えられる。

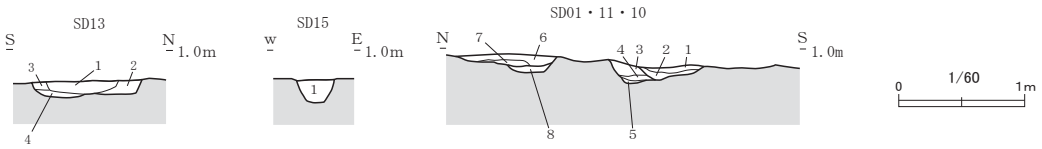
なお、調査区西側で確認した2条の南北溝であるSD14・15はいずれも主軸方位が N-16° ～ 22° -W を示しており、東西溝とほぼ直交関係にあることから、屋敷地内を細分する区画溝である可能性が考えられる。

SK05、SD02 ～ 07



SK05、SD02～07　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。マンガンを少量、炭化物・褐色粘土ブロックを微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	しまりやや弱い。炭化物を多量、焼土粒・褐色粘土ブロックを微量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	砂質シルト	しまり弱い。炭化物・焼土粒を少量含む。
4	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	しまりやや強い。褐色粘土ブロックを多量、炭化物を微量含む。
5	暗褐色	10YR3/4	シルト	しまり強い。マンガン・褐灰色土ブロックを少量、炭化物を微量含む。
6	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや強い。褐色粘土ブロックを少量含む。
7	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや強い。マンガンを帯状に含む。
8	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	しまりやや弱い。炭化物・焼土粒を少量含む。
9	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	しまり強い。マンガンを少量、炭化物を微量含む。
10	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり強い。マンガンを少量、焼土粒を微量含む。
11	黒褐色	10YR2/2	シルト	しまりやや強い。炭化物・焼土粒を微量、マンガンを少量含む。
12	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物を少量、褐色粘土ブロックを微量含む。
13	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。炭化物を微量、マンガンを少量含む。
14	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまりやや強い。褐色粘土ブロックを少量含む。



SD13　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	褐色粘土ブロックを少量、炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	褐色粘土粒・炭化物を少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	炭化物・焼土粒を少量含む。
4	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	炭化物を微量含む。

SD15　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまりやや弱い。炭化物・褐色粘土ブロックを少量含む。

SD01・10・11　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまり強い。炭化物・褐色粘土ブロックを少量含む。SD11覆土。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	しまりやや強い。褐色粘土粒を多量、マンガンを少量含む。SD11覆土。
3	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	しまりやや強い。褐色粘土ブロック・炭化物を少量、焼土粒を微量含む。SD11覆土。
4	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	しまり強い。炭化物を少量、焼土粒を微量含む。SD11覆土。
5	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	しまり極めて強い。マンガン・褐灰色土ブロックを少量含む。SD11覆土。
6	黒褐色	10YR2/3	シルト	しまり強い。炭化物・褐色粘土ブロックを少量含む。SD01覆土。
7	黒褐色	10YR2/2	シルト	しまりやや強い。マンガンを多量、炭化物を微量含む。SD01覆土。
8	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	しまり弱い。褐色粘土ブロックを少量、炭化物を微量含む。SD10覆土。

第 56 図　SD01 ～ 07・10・11・13・15 土層断面図

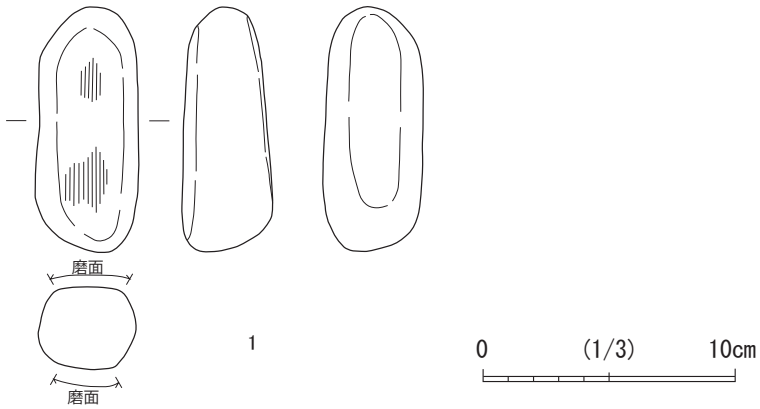
第 57・58 図は SD02 の出土遺物である。第 57 図1は白石産陶器の甕で、外面全体を研磨に使用している。13 世紀後半～ 14 世紀前半。第 58 図1は2面に磨面をもつ礫である。砥石の可能性が考えられ、石材の石質が粗粒であることから、荒砥として使用されたものと推測される。

第 60 図は SD12 から出土した白石産陶器である。13 世紀後半～ 14 世紀前半。

第 57 図 SD02 出土遺物

第 30 表 SD02 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD02	陶器	甕	白石	胎土表面は橙色で胎土内は灰色。砂粒を含む。良く焼き締まる。内外面ともに，にぶい褐色。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(7.5)



第 58 図 SD02 出土石製品

第 31 表 SD02 出土石製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	特 徴	残 存	法 量			
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	SD02	石製品	磨面をもつ礫（砥石？）	角張った礫の2面に磨面がある。石材はデイサイトか安山岩。	完存	9.8	4.1	3.2	233.0

第 59 図 SD12 出土遺物

第 32 表 SD12 出土遺物観察表

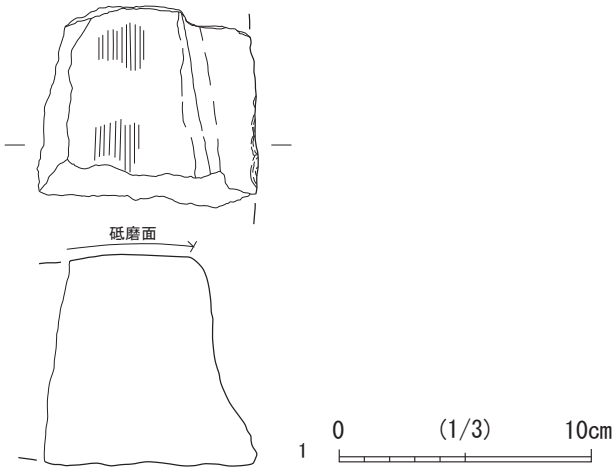
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD12	陶器	甕	白石	内面はにぶい黄褐色。外面は黒褐色に自然釉付着。胎土は黄灰色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.2)

第 60・61 図は SD15 から出土した輸入磁器、かわらけ、石製品である。第 60 図1は龍泉窯系の青磁皿で太宰府編年では 12 世紀中葉～後半である。2はかわらけ底部辺でロクロ成型、外面に回転糸切り痕がみられる。第 61 図1は砥石の一部で、大きな安山岩製の角礫の1面が砥磨面で、荒砥の置き砥石として使用されたものと考えられる。

第 60 図　SD15 出土遺物

第 33 表　SD15 出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地		法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD15	青磁	皿	龍泉窯系	底部外面は無釉。底部内面は無文。太宰府編年Ⅰ-1a。12 世紀中葉～後半。		(4.6)	(1.2)
2	SD15		かわらけ		ロクロ整形。底部外面に回転糸切り痕。底部内面一方向ナデ。胎土は橙色で赤色粒を多く含む。		(10.4)	(1.55)



第 61 図　SD15 出土石製品

第 34 表　SD15 出土石製品観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	特　徴	残　存	法　量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
2	SD15 東側	石製品	砥石	大きな角礫の1面が砥磨面。　荒砥の置き砥石とみられる。石材は安山岩。	一部	(7.9)	(8.8)	(8.3)	(797.0)

第 62 図は SD16 から出土した白石産陶器である。片口鉢の注ぎ口を含む口縁部破片で、粘土紐の接合痕が明瞭にみられる。13 世紀後半～ 14 世紀前半。

第 62 図 SD16 出土遺物

第 35 表 SD16 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD16	陶器	片口鉢	白石	内面はにぶい橙色。外面は灰褐色。胎土は褐灰色で砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(9.5)

第 36 表 平成 26 年度調査 溝跡属性表

遺構名	検出長 (m)	断面形	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	方向	堆積土	出土遺物	備 考	平面図	断面図
SD01	20.0	皿形	―	―	0.1	N-71° -E	人為		SK05・SD02 より古	36	56
SD02	22.3	皿形	―	―	0.3	N-70° -E	自然	白石、石製品	SD03 より古 ,SD01 より新	36	56
SD03	22.6	V字	0.9	0.4 ～ 0.5	0.3	N-71° -E	人為		SD04・16 より古 ,SD02 より新	36	56
SD04	21.3	箱形	―	―	0.2	N-71° -E	人為		SK04・SD05 より古 , SD03 より新	36	56
SD05	21.4	V字	0.9	0.7	0.3	N-71° -E	人為		SD04・06 より新	36	56
SD06	22.0	U字	―	―	0.4	N-73° -E	人為		SD05・SK02 より古 , SD07 より新	36	56
SD07	30.8	皿形	1.6	1.0	0.5	N-75° -E	自然→人為		SE02 より古 ,SD08 より新	36	56
SD08	18.6	皿形	1.1	0.7	0.2	N-72° -E	人為		SD07 より古	36	
SD09	14.1	皿形	1.0	0.5	0.1	N-72° -E	人為		SX01 より古 ,SD04・05 より新	36	
SD10	9.3	U字	0.7	0.4	0.2	N-60° -E	人為		SK08・09・SD01・14 より古 , SD11 より新	36	56
SD11	19.3	皿形	0.8	0.2 ～ 0.4	0.2	屈曲	人為		SD10・14・15 より古 , SD01 より新	36	56
SD12	7.4	皿形	1.6	0.6 ～ 1.1	0.2	N-75° -E	人為	白石	SD14 より古	36	
SD13	5.3	箱形	1.1	0.2 ～ 0.5	0.2	N-72° -E	人為		SE03 より古	36	56
SD14	12.4	U字	0.8	0.2 ～ 0.4	0.3	N-22° -W	人為		SD01・10・11・12 より新	36	
SD15	7.3	U字	0.4	0.1 ～ 0.2	0.2	N-16° -W	人為	かわらけ、石製品	SD01・10・11 より新	36	56
SD16	15.4	皿形	1.4	0.8	0.2	L字	人為	白石	SD14 より古 , SX02・SD03・04 より新	36	

6. ピット（第 63 図、第 37 表）

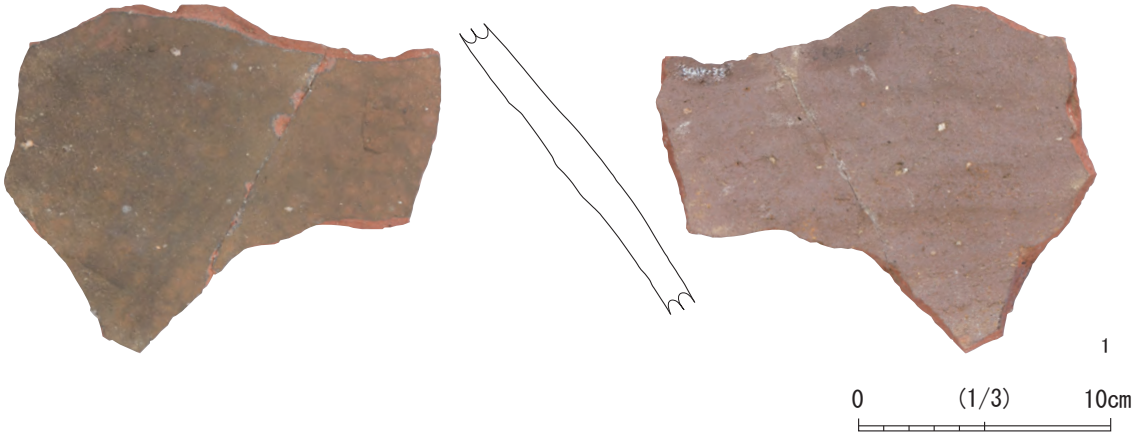
調査区の北半部では柱穴が多数確認されている。これらの中には柱痕跡をとどめているものも見受けられたが、限られた範囲での検出であるため建物などの復元には至っていない。大部分のピットは長軸 0.2 ～ 0.6 m、短軸は 0.1 ～ 0.4 mの範囲に収まるものであり、形状は楕円形が多く、ほかに円形、隅丸方形などがみられる。

第 63 図は P63 から出土した白石産陶器の甕である。13 世紀後半～ 14 世紀前半。

7. サブトレンチ出土遺物（第 64 図、第 38 表）

SK05・SD02～07の重複関係の把握を目的として設定したサブトレンチ掘削中に出土した遺物である。

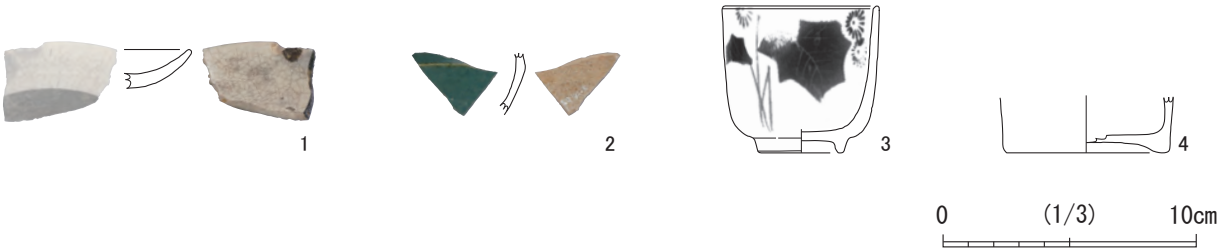
第 64 図はサブトレンチ出土遺物である。1は瀬戸美濃産輪禿皿で 17 世紀後半から 18 世紀前半。2は外面に濃緑色の瑠璃釉を施す徳利か。3は薄く軽量な陶器の小坏で色絵で草花文を描く。4は磁器燗徳利の底部である。



第 63 図　ピット出土遺物

第 37 表　ピット出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
4	P63	陶器	甕	白石	胎土は褐色で砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(13.0)



第 64 図　サブトレンチ出土遺物

第 38 表　サブトレンチ出土遺物観察表

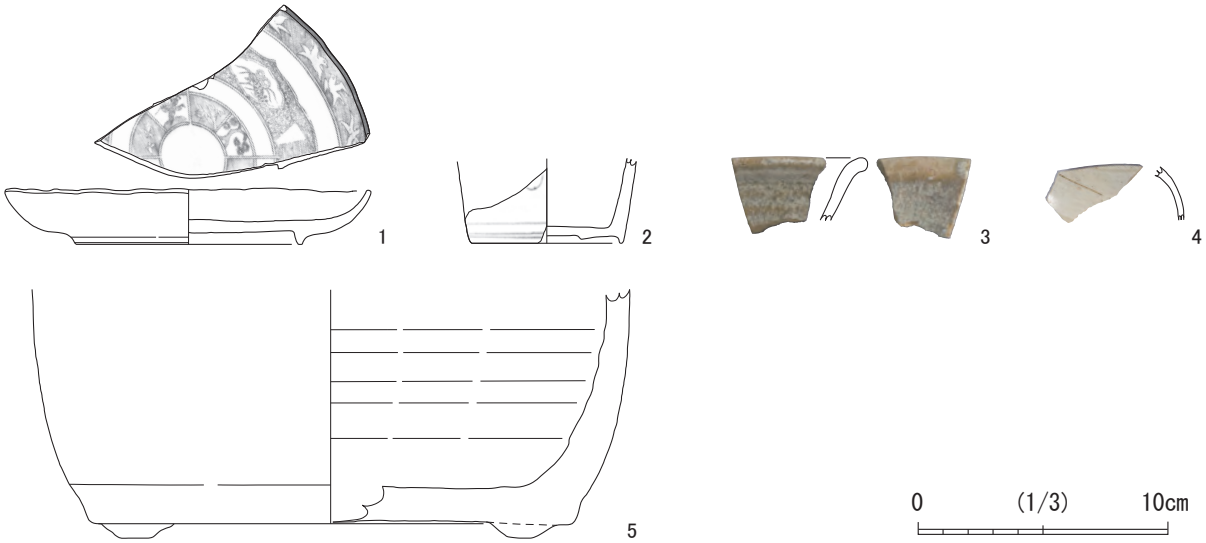
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	4 トレンチ	陶器	皿	瀬戸美濃	輪禿皿か。17 世紀後半～ 18 世紀前半。			(1.6)
2	3 トレンチ	磁器	徳利か	切込か	肩部破片。外面に瑠璃釉。			(2.25)
3	3 トレンチ	陶器	小坏	不明	胎土は浅黄橙色で軟質。色絵。	6.2	3.4	5.8
4	3 トレンチ	磁器	燗徳利	不明			6.6	(2.25)

8．その他の出土遺物（第 65 ～ 71 図、第 39 ～ 45 表））

遺構精査、表土掘削時において遺物が出土している。

第 65 ～ 71 図は遺構外の出土遺物である。第 65 図1は銅板転写の色絵皿。3・4は大堀相馬焼の鉢および土瓶である。5は瓦質土器火鉢である。第 66 図1は精査時に出土した銭種不明の銭貨。

第 67 図1は磁器碗で、体部が大きくハの字に開く。外面はゴム印によって装飾する。底部外面にスタンプによる記号がみられ、「岐 57」と読める。太平洋戦争中に用いられた生産者標示記号と考えられる。生産者標示記号は統制番号とも言い、1941 ～ 1945 年の統制経済下で用いられたものである。器形的には 1910 ～ 1950 年の年代が与えうるが、生産者標示記号から 1941 ～ 1945 年の生産と限定できる。2は磁器碗で、体部が大きくハの字に開くのに加えて、高台が高く伸びることから 1960 ～ 1980 年頃と考えられる。6は型押し成型の輪花小鉢。13 は型押し成型の皿。14・15 は大堀相馬焼の土瓶。16 は切込の徳利。18 は鉢型の瓦質土器の口縁部である。第 68 図1・5・6・7は堤焼擂鉢。2は白石産陶器。3は常滑産陶器片口鉢。4は土製品で、左右に穴があけられており指人形である。外面の一部に赤色塗料が残存している。胎土は堤焼のものに近似する。第 69 図は掘り下げ時に出土した砥石である。角柱状の一面が扁平化し、主に2面が砥磨面となっている。頭部全面に敲打痕があり、ハンマーとしても使用されている。第 70 図3は白石産陶器。8・9は内外面鉄釉を施す鉢型の土器で、9は断面の3辺と外面を研磨に使用し、内面には



第 65 図 精査出土遺物

第 39 表 精査出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	西側精査	磁器	皿	瀬戸美濃	銅版転写。色絵。19 世紀末以降。	(14.7)	(9.0)	2.2
2	西側精査	染付磁器	猪口	切込か	18 世紀末～ 19 世紀末。		(6.0)	(3.4)
3	精査	陶器	鉢	大堀相馬	口縁部破片。胎土は淡黄色。内外面に灰釉。			(2.5)
4	精査	陶器	土瓶	大堀相馬	肩部破片。胎土は灰白色。19 世紀中葉。			(2.15)
5	精査	瓦質土器	火鉢	不明	胎土表面は明黄褐色で胎土内は褐灰色。砂粒を多く含む。底部外面にボタン状の脚。		(19.4)	(10.0)

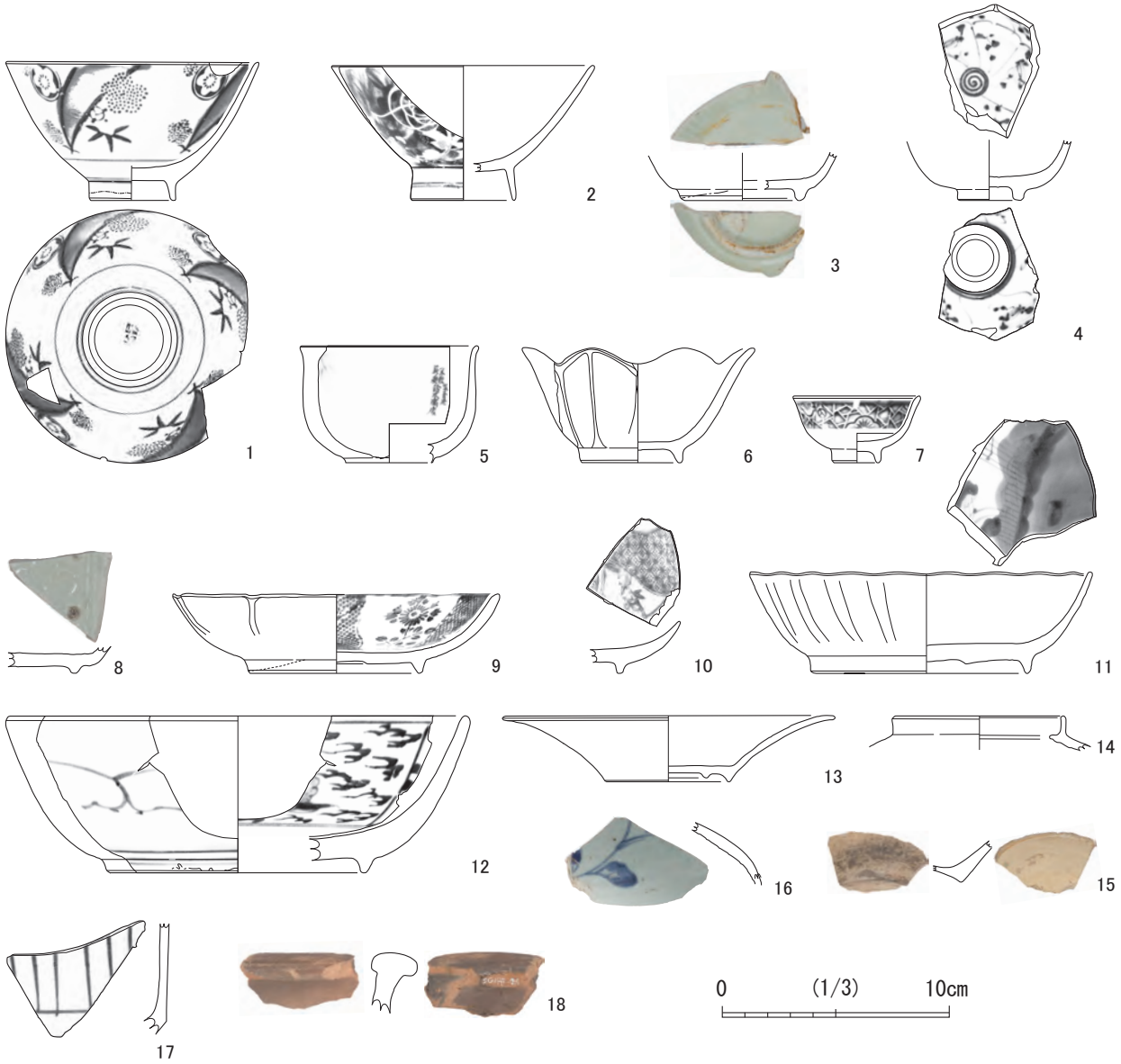
1 原寸

第 66 図 精査出土金属製品

第 40 表 精査出土金属製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	特 徴	法 量		
					径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
1	精査	金属製品	銭貨	銭種不明	23.60	1.40	1.94

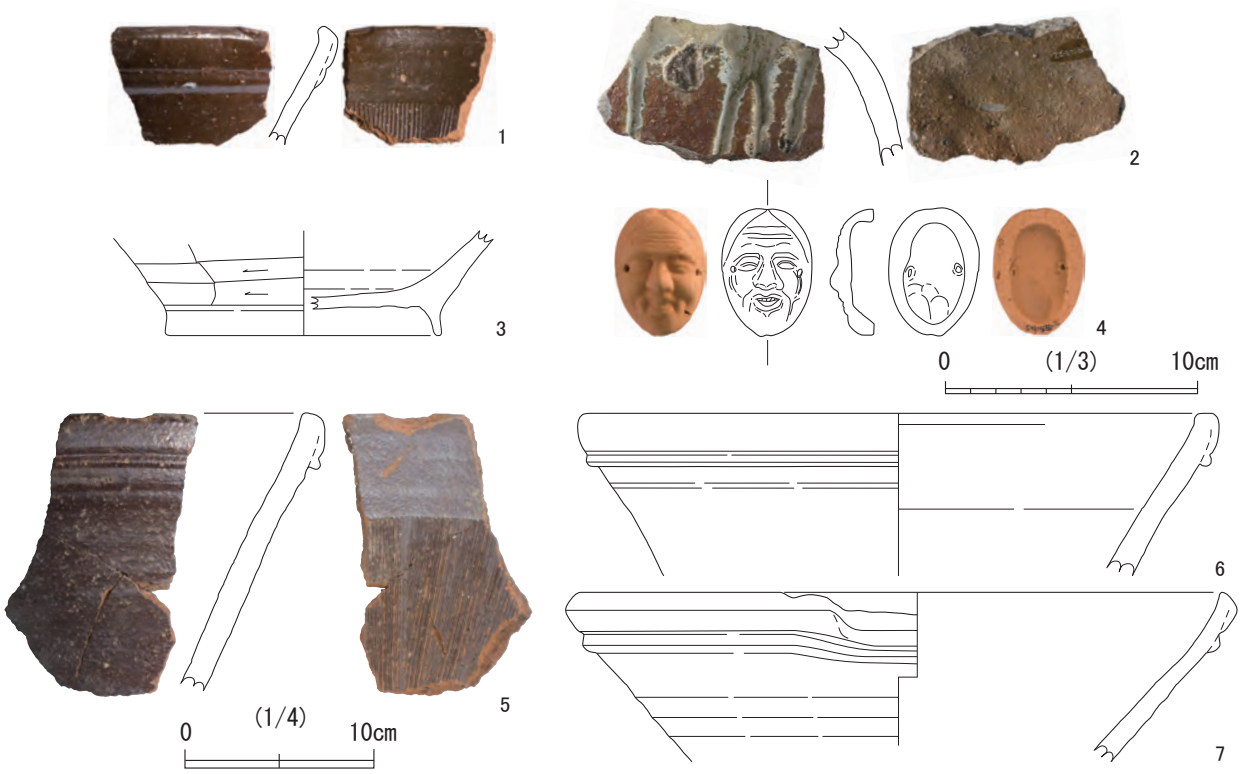
叩打痕を残す。10・11 は堤焼の擂鉢。12 は磁器小杯で岐阜県多治見市酒井ヶ峯 1・2 号窯で生産されたものと類似している。20 世紀前半。13 は切込の手塩皿。14 は肥前産猪口で 17 世紀後半から 18 世紀初頭か。第 71 図は崩落した調査区壁から出土した銭貨で寛永通宝の四文銭である。



第 67 図　掘り下げ出土遺物1

第 41 表　掘り下げ出土遺物観察表1

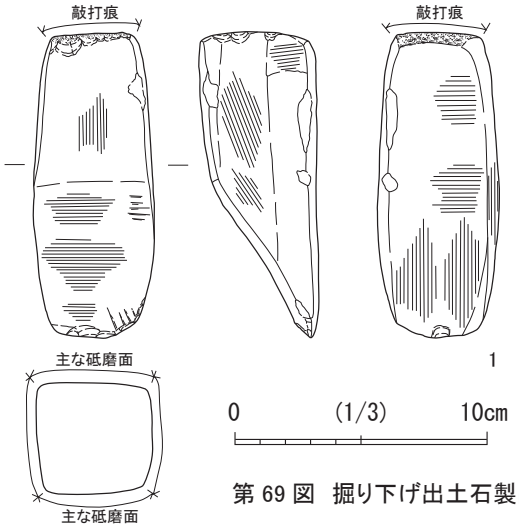
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	掘り下げ	磁器	碗	美濃	深型平碗。胎土は灰白色でやや軟質。体部外面にゴム印技法。コバルト。底部外面に生産者標示記号「岐 57」。器形から 1910 年～ 1950 年。生産者記号から 1941 年～ 1945 年。	11.1	3.8	6.1
2	掘り下げ	磁器	碗	瀬戸美濃	逆ハ字平碗。コバルト。金絵。1960 年～ 1980 年。	(11.6)	4.6	(5.95)
3	北壁	磁器	碗	不明	黄色味を帯びた緑色釉。		(5.0)	(2.1)
4	掘り下げ	染付磁器	小碗	瀬戸美濃か	内外面に仙芝文。		2.8	(2.6)
5	掘り下げ	磁器	小坏	不明	印物。「塩釜港」「米穀薪炭」「鈴木商店」	(6.4)		(5.15)
6	掘り下げ	陶器	小鉢	不明	六葉の小鉢。胎土は灰黄色で軟質。型成形。		3.9	5.05
7	掘り下げ	磁器	盃	不明	体部外面に氷裂梅花文。	5.5	2.0	2.9
8	掘り下げ	磁器	手塩皿	切込	内面に桜花文。18 世紀末～ 19 世紀末。			(1.2)
9	掘り下げ	磁器	皿	瀬戸美濃	輪花皿。型紙摺り。蛇目凹形高台。19 世紀末以降。	14.4	7.7	3.5
10	掘り下げ	磁器	小皿	瀬戸美濃	銅版転写。コバルト。19 世紀末以降。			2.3
11	掘り下げ	染付磁器	皿	肥前	輪花皿。内面に山水文。蛇目凹形高台。19 世紀。	(14.6)	(9.2)	4.45
12	掘り下げ	染付磁器	皿	肥前	17 世紀後半。	(20.4)	(11.6)	6.9
13	掘り下げ	陶器	皿	不明	胎土は淡黄色で軟質。型成形。ゴム印技法。色絵。底部外面，高台内に環状のツマミ。1910 年～ 1950 年	14.7	5.5	2.9
14	掘り下げ	陶器	土瓶	大堀相馬	胎土は灰白色。19 世紀中葉。	(7.3)		(1.5)
15	掘り下げ北壁	陶器	土瓶	大堀相馬	底部破片。胎土は浅黄色。19 世紀前葉～中葉。			(1.8)
16	掘り下げ	磁器	徳利	切込か	18 世紀末～ 19 世紀末。			(3.9)
17	掘り下げ	磁器	徳利	瀬戸美濃				(4.9)
18	掘り下げ北壁	瓦質土器	鉢	不明	胎土表面は橙色で胎土内は黄灰色。土師質で焼き締まり弱い。炭素吸着の弱い瓦質土器か。口縁部上面及び外端面は使用により磨かれている。			(2.6)



第 68 図 掘り下げ出土遺物2

第 42 表 掘り下げ出土遺物観察表2

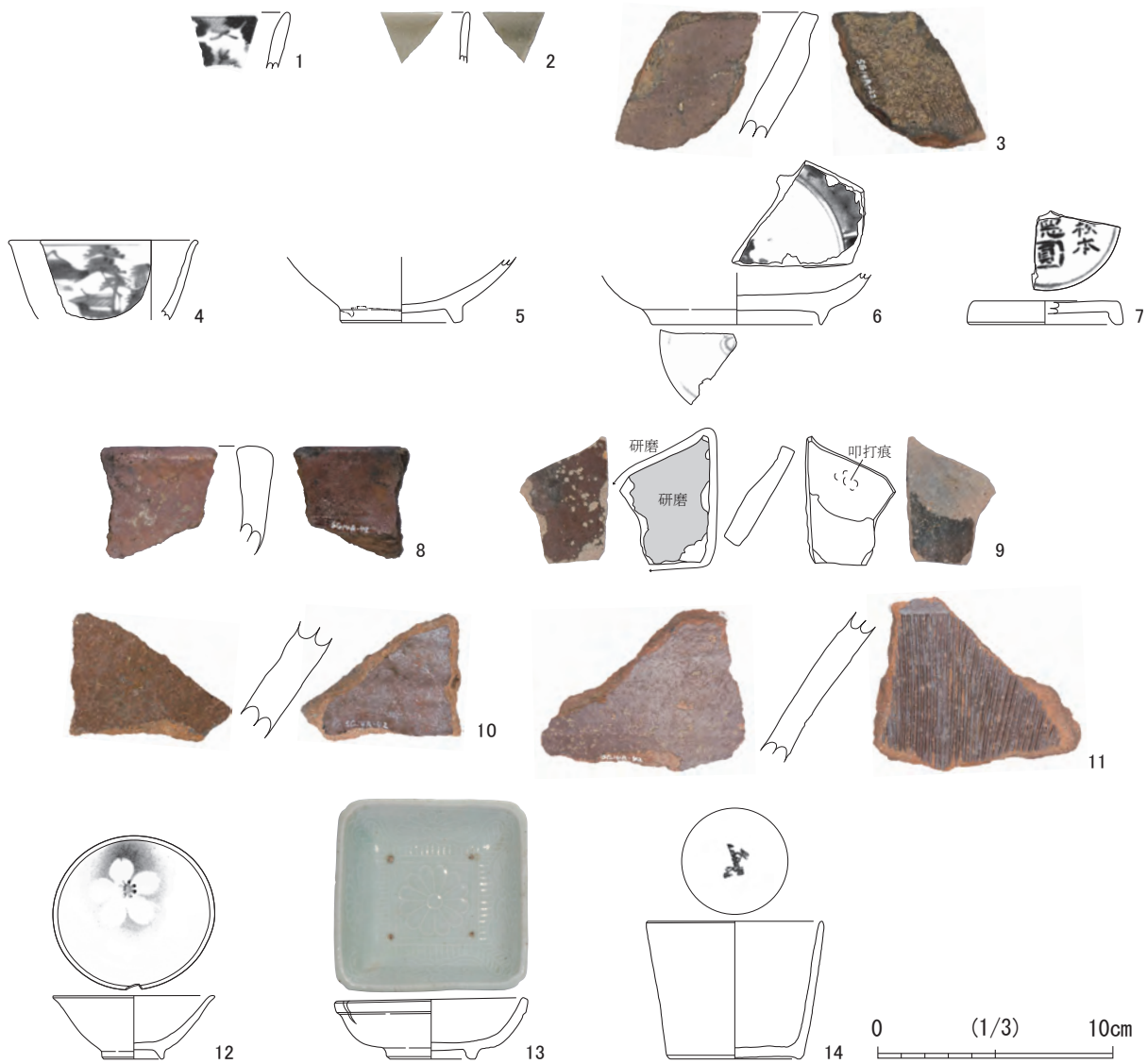
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	掘り下げ	陶器	擂鉢	堤焼	内外面に鉄釉。胎土は明褐色で砂粒を少量含む。18 世紀末～ 19 世紀。			(6.3)
2	北壁 2	陶器	甕	白石	内面はにぶい褐色で外面は褐色。胎土はオリーブ黒色で砂粒（特に透明粒）を多く含む。13 世紀前半～ 14 世紀後半。			(5.5)
3	掘り下げ	陶器	片口鉢	常滑	片口鉢Ⅰ類第 2 段階 6a。13 世紀後半。		14.8	(5.55)
4	掘り下げ	土製品	泥面子	堤焼か	泥めんこまたは指人形。胎土は橙色。外面に赤色塗料。近世。	最大幅 3.6	最大厚 0.8	5.0
5	掘り下げ	陶器	擂鉢	堤焼	内外面に鉄釉。胎土は明褐色で砂粒を多く含む。18 世紀末～ 19 世紀。			(14.9)
6	掘り下げ	陶器	擂鉢	堤焼	内外面に鉄釉。胎土は明褐色で砂粒を多く含む。18 世紀末～ 19 世紀	(34.0)		(8.6)
7	掘り下げ	陶器	擂鉢	堤焼	内外面に鉄釉。胎土はオリーブ黒色で砂粒を多く含む。焼き締まり良好。18 世紀末～ 19 世紀。	(34.1)		(10.0)



第 69 図 掘り下げ出土石製品

第 43 表 掘り下げ出土石製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	特 徴	残 存	法 量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	掘り下げ	石製品	砥石	角柱状の形態で、主に2面に砥磨面がある。頭部全面に敲打痕あり、ハンマーとしても使用されている。中砥とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	完存	12.1	4.8	4.7	385.5



第 70 図　その他の出土遺物

第 44 表　その他の出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	カクラン	磁器	猪口	瀬戸美濃				(2.4)
2	カクラン	陶器	碗	大堀相馬か	内外面に灰釉。胎土は灰白色。			(2.15)
3	カクラン	陶器	擂鉢	白石	胎土表面はにぶい橙色で，胎土内は黒褐色。砂粒を多く含む。内外面とも灰褐色。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.0)
4	残土	磁器	小碗	不明		(8.0)		(3.4)
5	残土	陶器	碗	大堀相馬	灰釉平碗。胎土は浅黄橙色～灰白色。18 世紀。		5.2	(2.8)
6	残土	陶器	皿	肥前	17 世紀後半。		(7.2)	(2.2)
7	残土	磁器	蓋	瀬戸美濃	型紙摺。コバルト。19 世紀末以降。	6.6	天井径 6.3	1.0
8	残土	陶器	捏鉢	不明	胎土表面は褐灰色で胎土内はにぶい褐色。粗く，砂粒を含む。内外面に鉄釉。			(4.2)
9	残土	陶器	鉢	不明	内外面に鉄釉。胎土は灰黄褐色で良く焼き締まる。研磨土器に転用。内面に叩打痕。	最大長 (5.4)	最大幅 (3.8)	最大厚 (9.5)
10	残土	陶器	擂鉢	堤焼	内外面に鉄釉。胎土は明褐色。18 世紀末～ 19 世紀。			(5.0)
11	残土	陶器	擂鉢	堤焼	内外面に鉄釉。胎土は明褐色で砂粒を多く含む。18 世紀末～ 19 世紀。			(6.5)
12	復旧	磁器	盃	美濃	多治見市酒井ヶ峯 1・2 号窯。20 世紀前半。	6.9	2.6	2.7
13	復旧	磁器	手塩皿	切込	見込みに菊花文。18 世紀末～ 19 世紀末。	8.2	3.8	2.6
14	復旧	磁器	猪口	肥前	見込に手描き五弁花文。17 世紀後半～ 18 世紀初頭。	(7.6)	5.8	5.85

1　原寸

第 71 図　その他の出土金属製品

第 45 表　その他の出土金属製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	特 徴	法 量		
					径（㎜）	厚さ(㎜)	重さ(g)
1	復旧	金属製品	銭貨	寛永通宝　四文銭	28.30	1.15	3.52

9．平成 26 年度調査のまとめ

・調査区全域にわたって確認された東西溝跡は、地域内で居住域の限界範囲を示すために掘られた可能性がある。

・出土した遺物は中世陶器を中心として出土していることから、周辺一帯で中世（鎌倉時代）に集落が営まれた可能性が考えられる。

・調査区北側で多数発見された溝跡と掘立柱建物跡の重複は、すべて掘立柱建物跡が新しいことから、溝跡が中世、建物跡が近世の所産と考えられる。

・調査区北半部と南半部では、地山の様相が大きく異なる。この状況は、平成 25 年度の調査で確認された流路跡に関係するとみられ、やや強度が弱い地盤を避けて中世・近世の集落が営まれた可能性がある。

Ａ区全景（南側上空から）

Ｂ区全景（南側上空から）

調査開始前の状況（東から）

平成 25 年 10 月の台風 19 号被害状況（北東から）

SB02 ～ 04 掘立柱建物跡（西から）

SE01 井戸跡土層断面（東から）

SE02 井戸跡土層断面（南から）

SE01 井戸跡完掘状況（東から）

SE03 井戸跡土層断面（東から）

SX02 竪穴遺構（南から）

SD01 ～ 07 溝跡（西から）

SD07 ～ 09 溝跡（東から）

SD07 溝跡　馬の歯出土状況（南から）

SD01・11・16 溝跡　土層断面（西から）

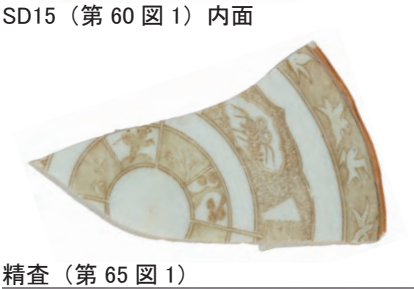
SD16 溝跡　遺物出土状況（西から）

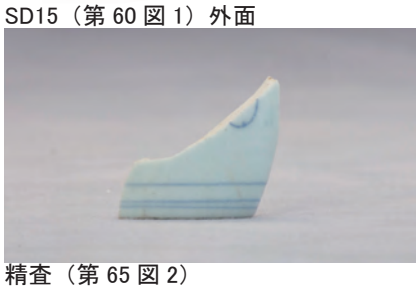
SK02（第 55 図 1）

SD15（第 60 図 1）内面

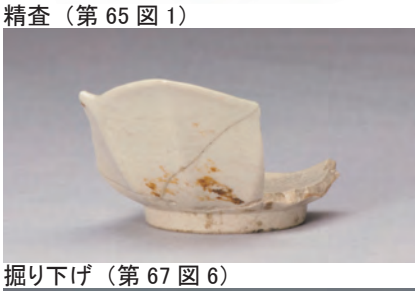
SD15（第 60 図 1）外面

3 トレンチ（第 64 図 3）

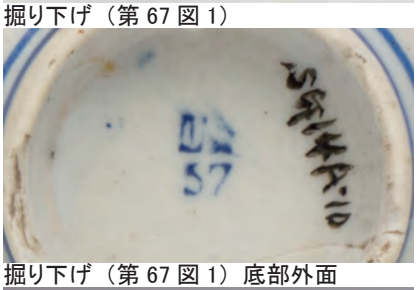

精査（第 65 図 1）

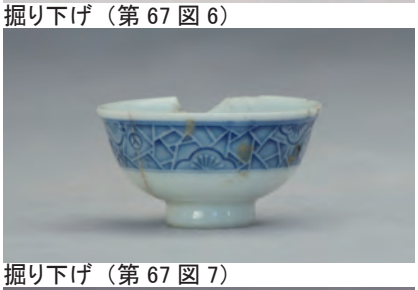

精査（第 65 図 2）

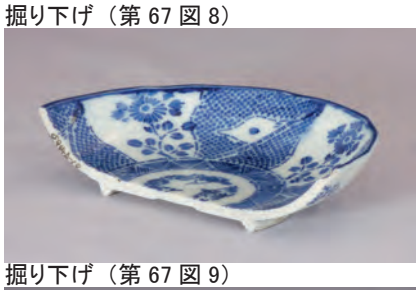
掘り下げ（第 67 図 1）

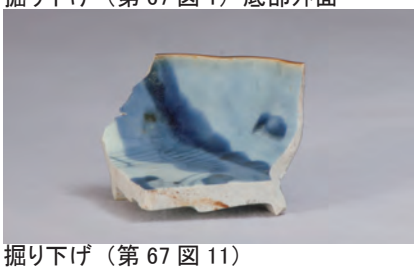

掘り下げ（第 67 図 6）

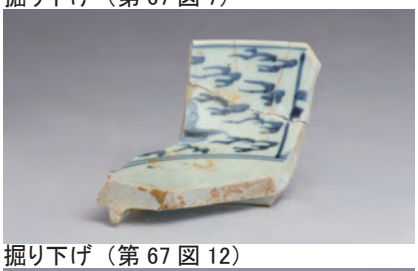
掘り下げ（第 67 図 8）


掘り下げ（第 67 図 1）底部外面


掘り下げ（第 67 図 7）


掘り下げ（第 67 図 9）


掘り下げ（第 67 図 11）


掘り下げ（第 67 図 12）

掘り下げ（第 67 図 13）

掘り下げ（第 67 図 16）

掘り下げ（第 68 図 3）

復旧（第 70 図 12）

復旧（第 70 図 12）

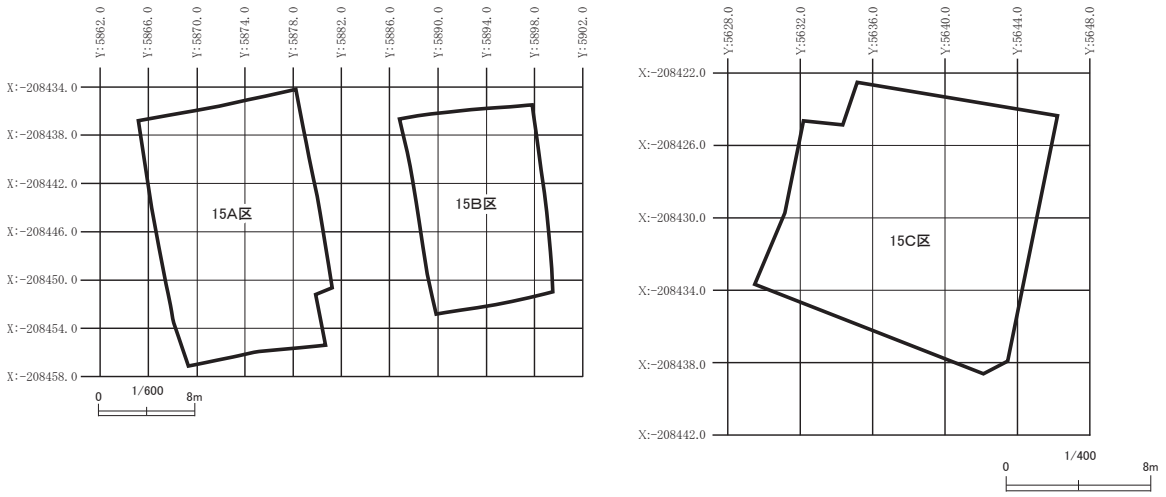
復旧（第 70 図 13）

復旧（第 70 図 14）

第Ⅵ章　平成 27 年度の調査成果

平成 27 年度の調査区は、五間堀川に面した 15 A・15 B区、志賀沢川に面した地区で実施したトレンチ調査の結果を受けて 15 C区を設定した。調査面積は 833 ㎡である。15 B区は平成 26 年度調査区に西隣し、15 A区は平成 14 年度に県道亘理塩釜線改良事業に際して設定したD区に東隣する。

調査では掘立柱建物跡8棟、井戸跡3基、竪穴遺構1基、土坑8基、溝跡5条をはじめとする遺構を検出し、中世陶器、近世陶磁器、近現代陶磁器、金属製品、石製品、木製品などの遺物が発見されている。以下に主要な調査成果について記す。



第 72 図　平成 27 年度グリッド配置図

1．掘立柱建物跡

SB01（第 75 図）

15 A区に存在する東西1間、南北2間の南北棟である。SD02と重複し、これより新しい。柱穴は5口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 3.1 mで、柱間は 1.5 ～ 1.6 m、梁行は約 1.9 mである。建物の主軸は西列で計測するとN-27°　-W である。柱穴の掘方の形状は楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。

SB02（第 76 図）

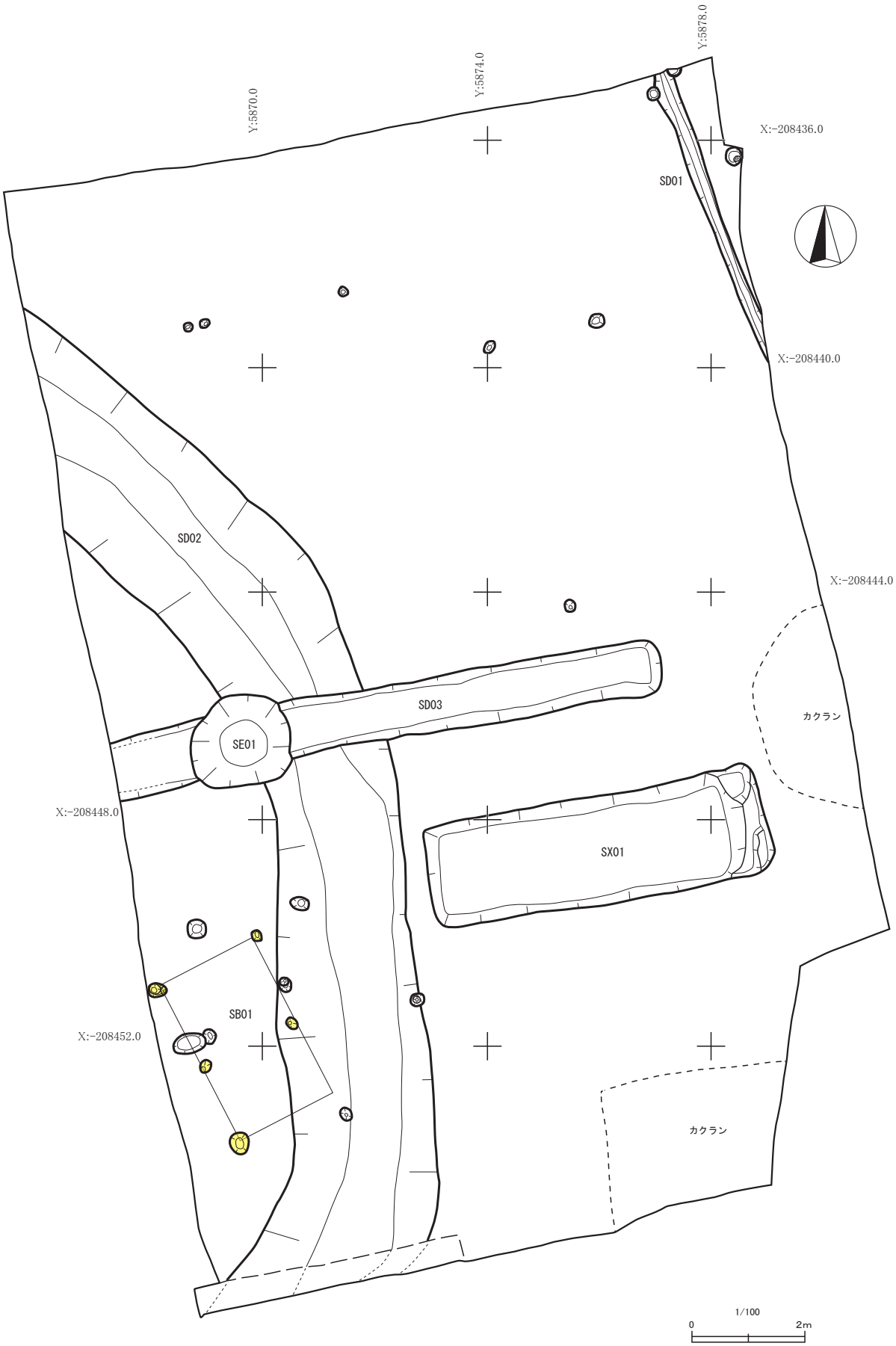
15 B区に存在する東西4間、南北2間の東西棟である。柱穴は5口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 3.1 mで、柱間は 1.5 ～ 1.6 m、梁行は約 1.9 mである。建物の主軸は西列で計測するとN-27°　-W である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び方形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。

SB03（第 77 図）

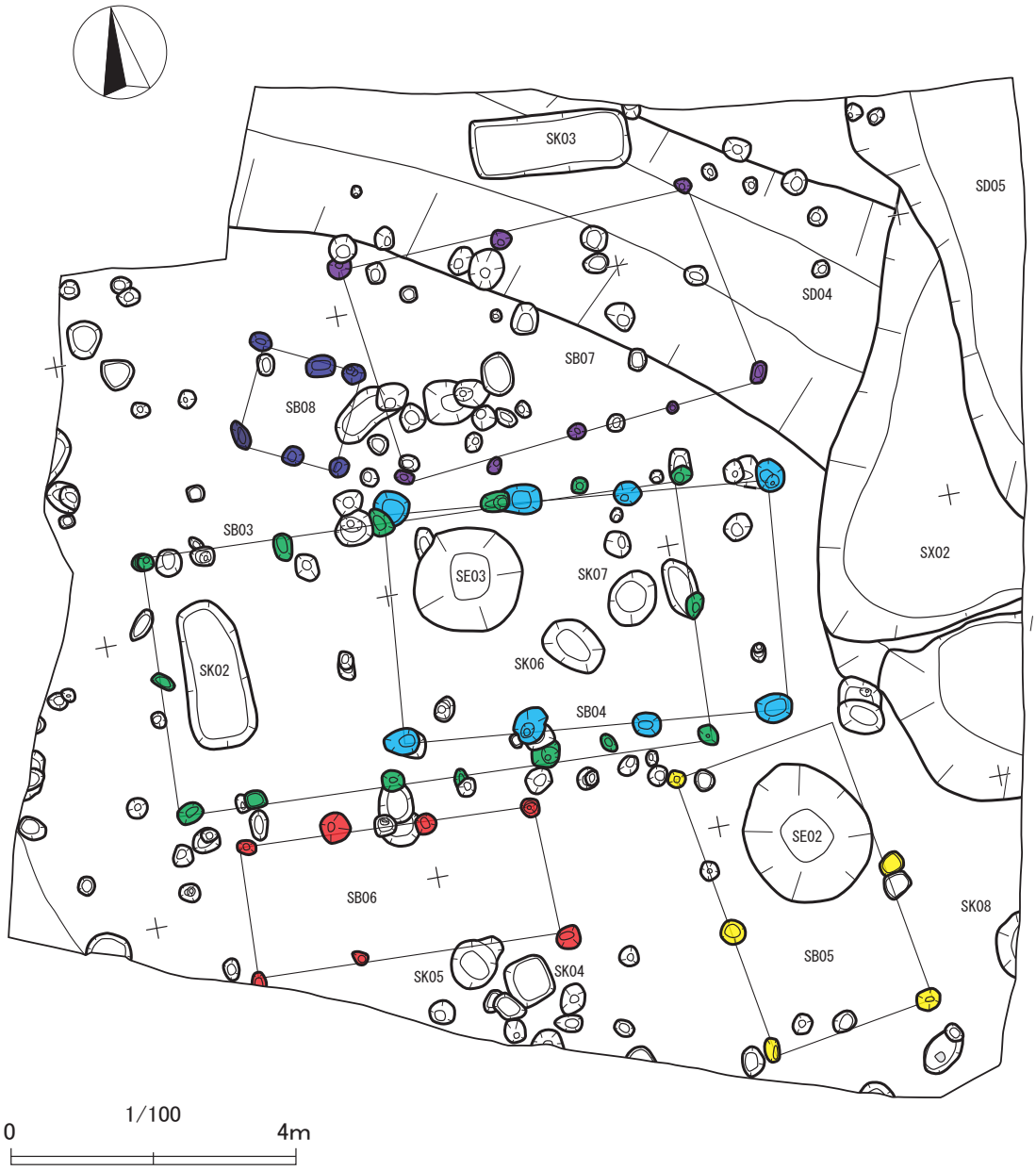
15 C区に存在する東西6間、南北2間の東西棟である。SB04と重複し、これより新しい。柱穴は 16 口検出し、5口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 7.4 mで、柱間は 0.9 ～ 2.0 m、梁行は総長 3.7 mで柱間は 1.8 ～ 1.9 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-88°　-W である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び円形で、柱痕跡の直径は 12 ㎝の円形である。

SB04掘立柱建物跡（第 77・78 図）

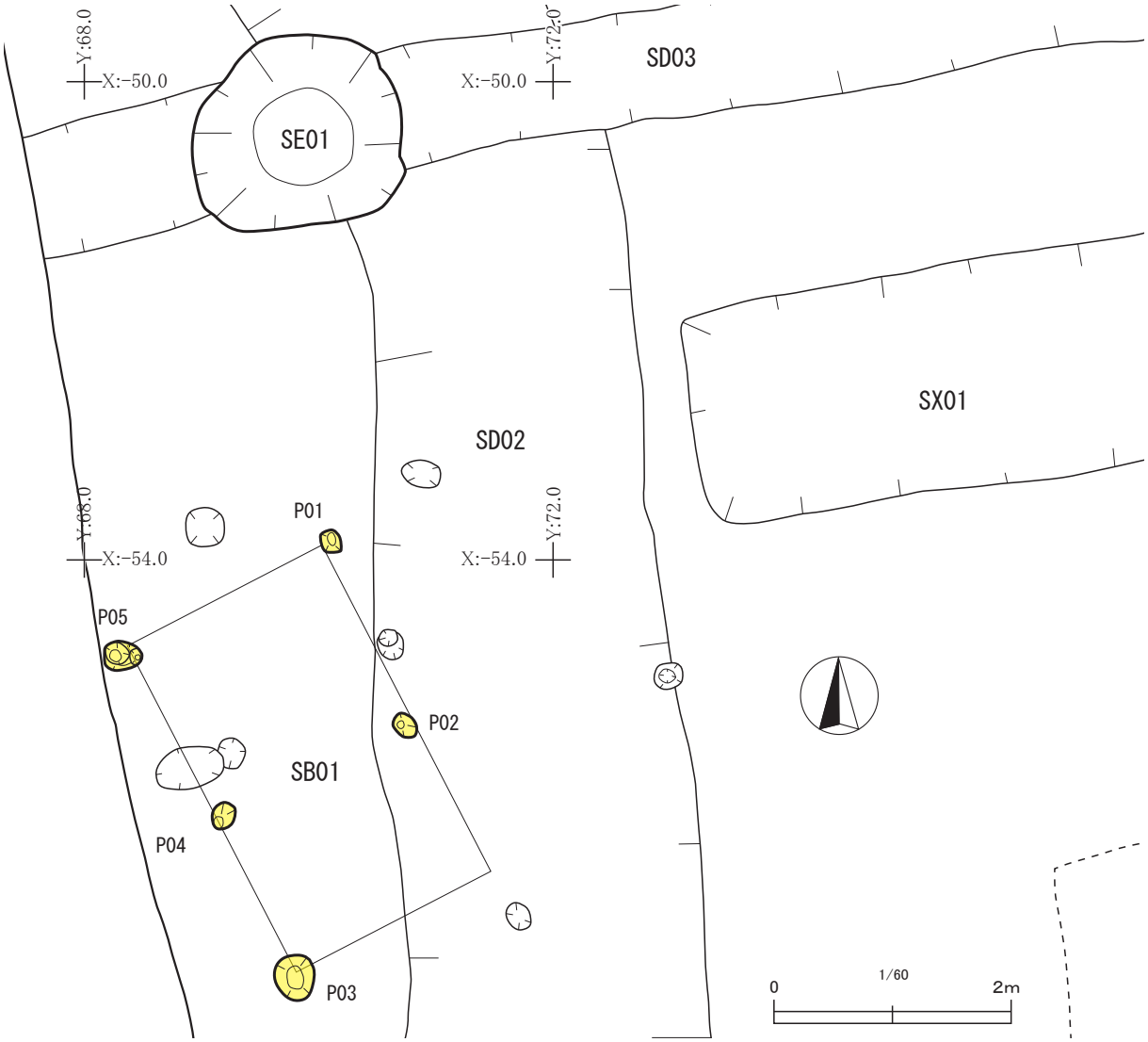
15 C区に存在する東西3間、南北1間の東西棟である。SB03と重複し、これより古い。柱穴は8口検出し、

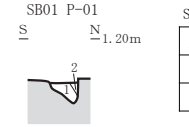


第 73 図 15 A区遺構全体図



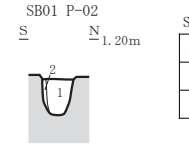
第 74 図　15C 区遺構全体図





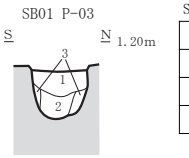
SB01 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルトブロックをやや多く含む。
2	暗褐色	10YR4/3	粘質シルト	しまり強い。マンガンを少量含む。



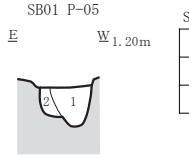
SB01 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	黄褐色粘土粒を少量含む。礫を混入。
2	褐色	10YR4/4	粘質シルト	暗褐色粘土粒をやや多く含む。



SB01 P-03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	黄褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	黄褐色シルト粒を微量含む。
3	褐色	10YR4/4	粘質シルト	黄橙色シルト粒・黒褐色粘土粒をやや多く含む。

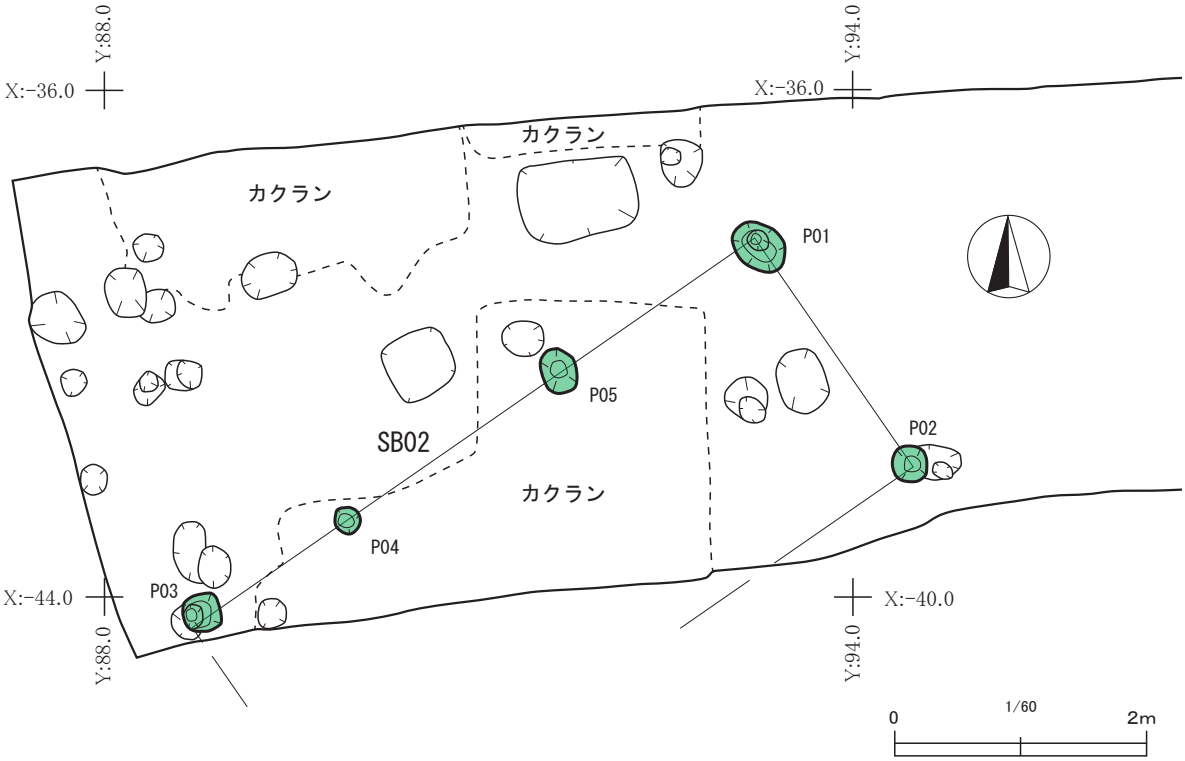


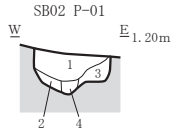
SB01 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	マンガン・黄褐色シルト粒を微量含む。

0　1/40　1m

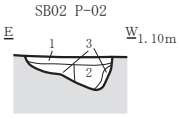
第 75 図　SB01、土層断面図





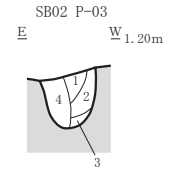
SB02 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト粒をやや多く、炭化物・焼土粒を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルトブロックをやや多く含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルトブロックをやや多く含む。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト粒を微量含む。



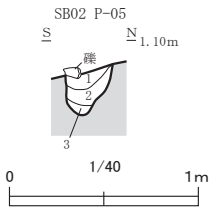
SB02 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/1	砂質シルト	炭化物を微量含む。
2	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	灰黄褐色シルトブロックを少量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	黒褐色粘土ブロックをやや多く含む。



SB02 P-03　土層注記

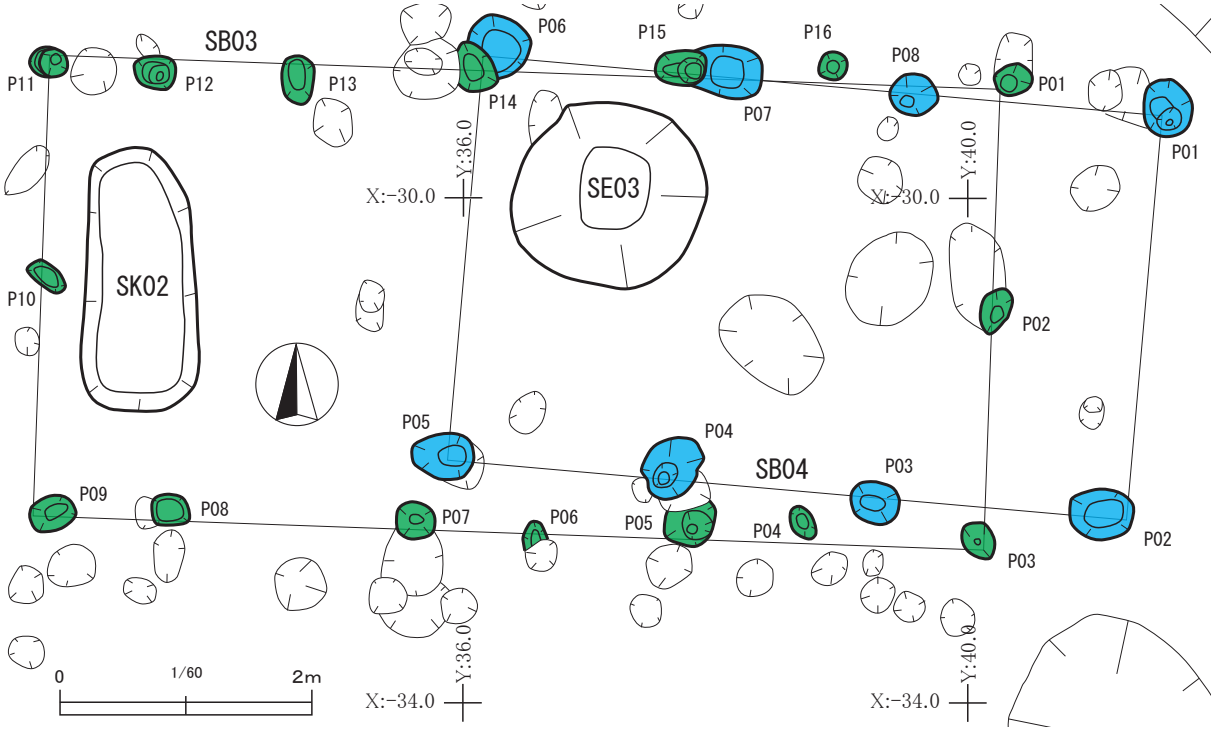
層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	褐色シルト粒をやや多く、炭化物を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/4	シルト	黄褐色シルトブロックを少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルトブロック・炭化物を微量含む。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト	褐色粘土ブロックを微量含む。

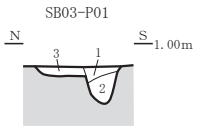


SB02 P-05　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	マンガンを少量含む。
2	褐灰色	10YR4/1	シルト	黄褐色シルトブロックをやや多く含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	黄褐色シルトブロックを少量含む。

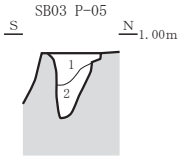
第 76 図　SB02、土層断面図





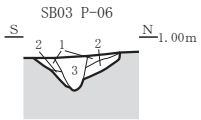
SB03 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	褐色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	褐色シルト粒をやや多く、黄褐色シルトブロックを少量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	炭化物を微量含む。



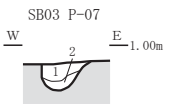
SB03 P-05　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト粒・炭化物を微量含む。



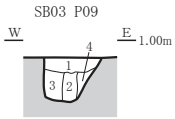
SB03 P-06　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト粒をやや多く、炭化物を微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト中ブロックをやや多く、炭化物を微量含む。



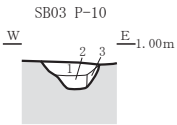
SB03 P-07　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	灰白色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルトブロックを微量含む。



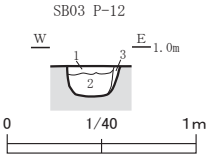
SB03 P-09　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄褐色・灰白色シルトブロックを少量、炭化物を微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色・灰白色シルトブロックを微量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色・灰白色シルト粒を微量含む。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。



SB03 P-010　土層注記

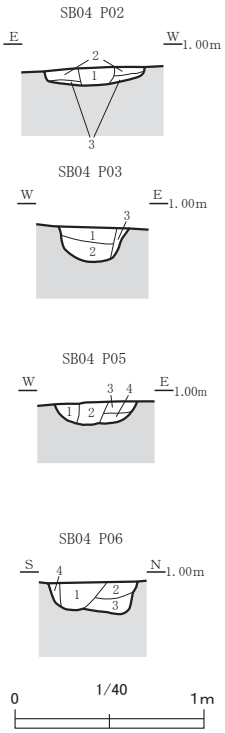
層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
2	褐色	10YR4/4	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	褐色シルト粒を少量含む。



SB03 P-012　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト粒をやや多く、炭化物を微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。

第 77 図　SB03・04、SB03 土層断面図



SB04 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄橙色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
2	褐色	10YR4/4	シルト	炭化物を少量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	炭化物を微量含む。

SB04 P-03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	褐色シルト粒をやや多く、炭化物を微量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	マンガンをやや多く、炭化物を微量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	黒褐色シルト粒・炭化物を微量含む。

SB04 P-05　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	灰黄褐色シルト小ブロック・炭化物をやや多く含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト小ブロック・炭化物を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物を少量含む。
4	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	灰黄褐色シルト粒を微量含む。

SB04 P-06　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト小ブロック・炭化物を少量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	褐色シルト粒をやや多く、炭化物を微量含む。
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	炭化物を微量含む。

第 78 図　SB04 土層断面図

4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.4 mで、柱間は 1.7 ～ 2.0 m、梁行は約 3.2 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-85°　-W である。柱穴の掘方の形状は楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。

SB05（第 79 図）

15 C区に存在する東西1間、南北2間の南北棟である。柱穴は5口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 4.1 mで、柱間は 1.9 ～ 2.2 m、梁行は約 2.3 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-10°　-W である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。

SB06（第 79 図）

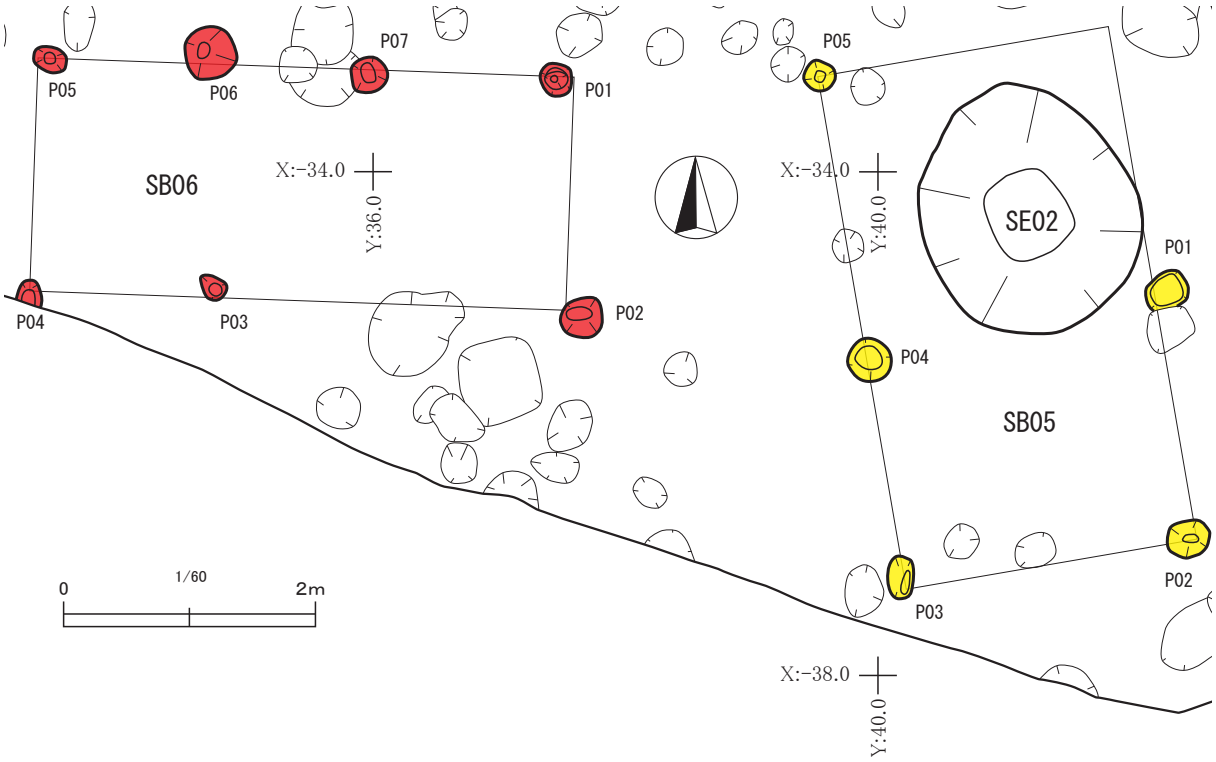
15 C区に存在する東西3間、南北1間の東西棟である。柱穴は7口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 4.2 mで、柱間は 1.3 ～ 1.6 m、梁行は約 1.8 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-88°　-W である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 12 ㎝の円形である。

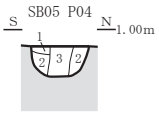
SB07（第 80 図）

15 C区に存在する東西4間、南北1間の東西棟である。柱穴は8口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.0 mで、柱間は 1.2 ～ 1.3 m、梁行は約 3.1 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-84°　-E である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。

SB08（第 80 図）

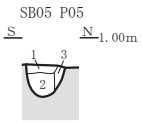
15 C区に存在する東西2間、南北1間の東西棟である。柱穴は6口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 1.4 mで、柱間は 0.6 ～ 0.8 m、梁行は約 1.4 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-65°　-W である。柱穴の掘方の形状は楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝の円形である。





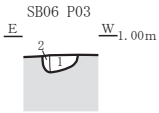
SB05 P-04 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	褐色	10YR4/4	シルト	暗褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	暗褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。



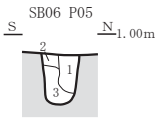
SB05 P-05 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	暗褐色シルト小ブロックを微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色・黄橙色シルト小ブロックを多量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄褐色シルト中ブロックを少量含む。



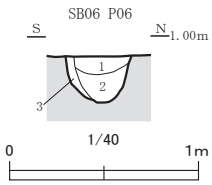
SB06 P-03 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。



SB06 P-05 土層注記

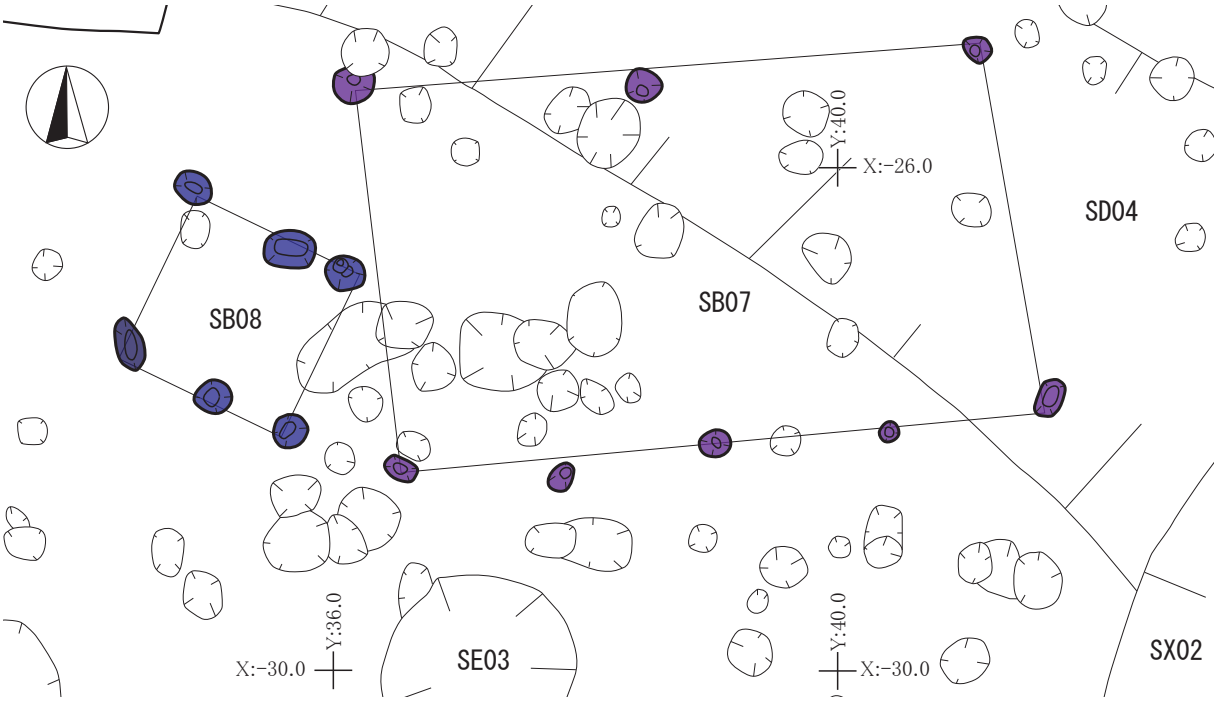
層No.	土色		土質	特徴
1	褐色	10YR4/4	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色・灰黄褐色シルト小ブロックを多量含む。
4	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	灰白色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。



SB06 P-06 土層注記

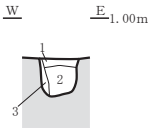
層No.	土色		土質	特徴
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックを微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

第 79 図 SB05・06、土層断面図



0　1/60　2m

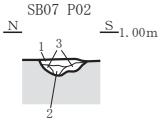
SB07 P01



SB07 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	褐色シルト粒を少量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	褐色シルト粒を微量含む。

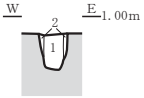
SB07 P02



SB07 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	褐色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄橙色・褐色シルト粒を微量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	褐色シルト粒を微量含む。

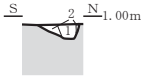
SB07 P04



SB07 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	褐色シルト粒・炭化物を少量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄橙色・褐色シルト粒を少量含む。

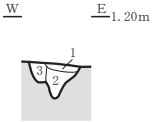
SB07 P05



SB07 P-05　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	炭化物を微量含む。

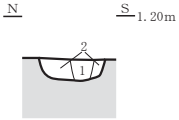
SB08 P01



SB08 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト粒・炭化物をやや多く含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト粒を少量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	褐色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。

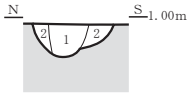
SB08 P04



SB08 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

SB08 P06



SB08 P-06　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
2	褐色	10YR4/4	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。

0　1/40　1m

第 80 図　SB07・08、土層断面図

第 46 表 平成 27 年度調査 掘立柱建物跡属性表

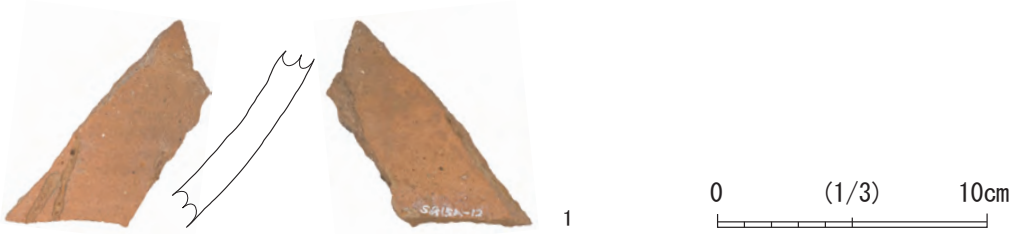
建物名	間数	棟方向	桁行総長(m)	柱間寸法(m)	測定柱列	梁行総長(m)	柱間寸法(m)	測定柱列	方向	柱痕跡径(cm)	柱穴規模(cm)	平面形	備考
SB01	1×2	南北	3.1	1.6,1.5	西列	1.9	1.9	北列	N-27° -W	10	20～40	楕円形	SD02 より新
SB02	2×4	東西	6.8	1.8,1.7,1.5,1.8	南列	3.8	1.8,2.0	西列	N-64° -E	10	15～50	楕円形，円形	
SB03	2×6	東西	7.4	1.0,2.0,0.9,1.0,1.4	南列	3.7	1.8,1.9	東列	N-88° -W	12	30～40	楕円形，円形	SB04 より新
SB04	1×3	東西	5.4	1.7,1.7,2.0	南列	3.2	3.2	東列	N-85° -W	10	40～60	楕円形	SB03 より古
SB05	1×2	南北	4.1	2.2,1.9	西列	2.3	2.3	南列	N-10° -W	10	20～40	楕円形，円形	
SB06	1×3	東西	4.2	1.3,1.3,1.6	北列	1.8	1.8	西列	N-88° -W	12	30～40	楕円形，隅丸方形	
SB07	1×4	東西	5.0	1.2,1.2,1.3,1.3	南列	3.1	3.1	西列	N-84° -E	10	18～32	楕円形，円形	SD04 より新
SB08	1×2	東西	1.4	0.8,0.6	南列	1.4	1.4	東列	N-65° -E	10	25～42	楕円形	
SB09	1×1以上	南北	―	2.1	東列	2.0	2.0	南列	N-34° -W	12	22～38	円形，楕円形	

2. 井戸跡

SE01（第 73・81・82 図、第 47 表）

15 A区に存在する素掘りの井戸で、平面形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸 1.7 m、短軸は 1.6m を測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より 2.1 m 下で底面を検出している。堆積土は8層に分層でき、1～7層は人為的埋土、8層は自然堆積土と考えられる。

第 81 図は SE01 から出土した白石産陶器の片口鉢である。13 世紀後半～ 14 世紀前半。



第 81 図 SE01 出土遺物

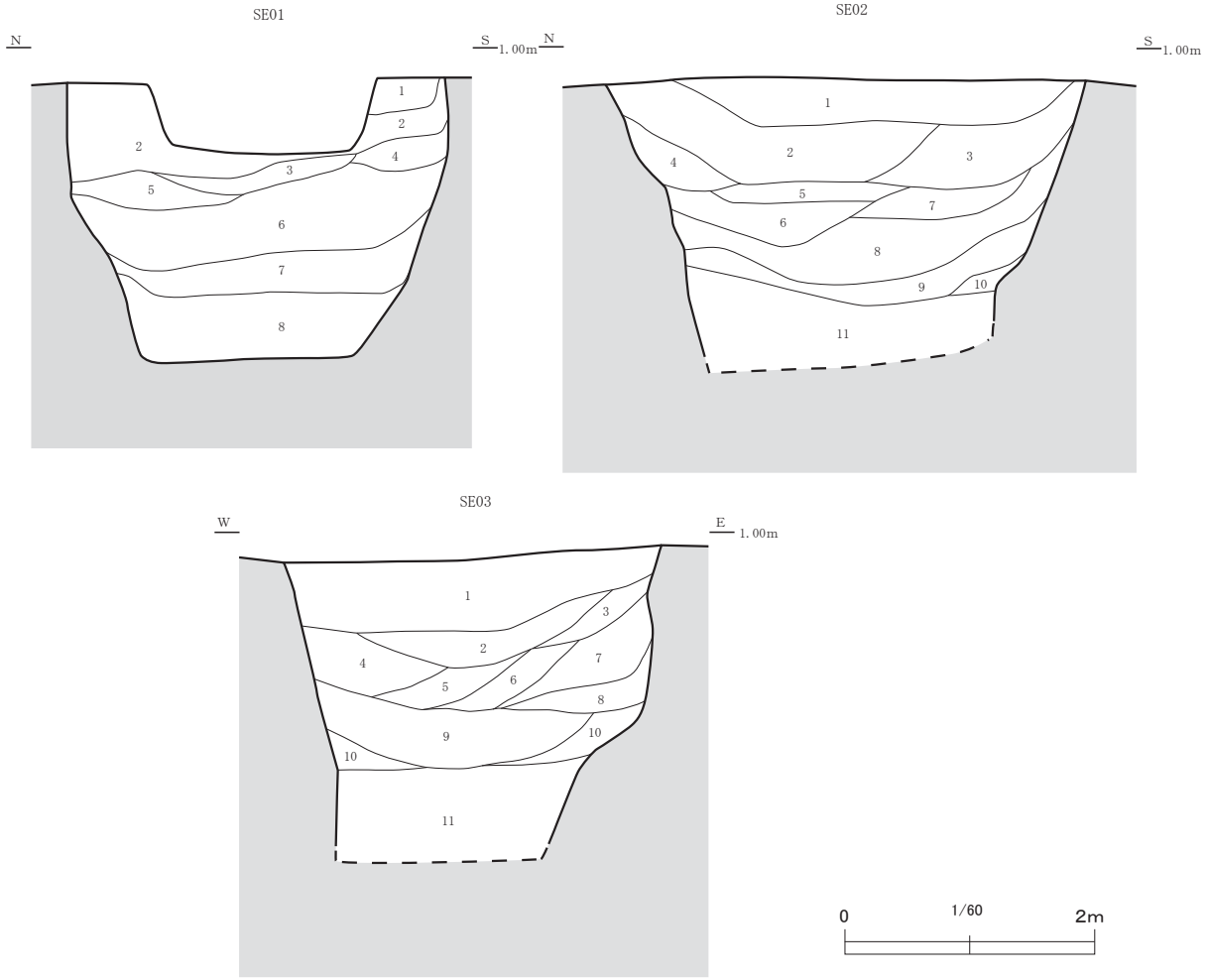
第 47 表 SE01 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SE01	陶器	片口鉢	白石	内外面はにぶい橙色。胎土は褐灰色で砂粒含む。内面下半磨滅。			(7.4)

SE02（第 74・82・83 図、第 48 表）

15 C区に存在する素掘りの井戸で、平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸 1.9 m、短軸は 1.7m を測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より 2.2 m 下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。堆積土は 11 層に分層でき、1～9層は人為的埋土、10 ～ 11 層は自然堆積土と考えられる。

第 83 図は SE02 から出土した木製品である。差歯下駄が1点、柄杓が1点、蓋が1点、木錘が1点出土している。差歯下駄は露卯下駄で、台部と2枚の歯部からなり、木取りはいずれも板目材である。柄杓は杓の部分のみで、側板は曲物を樹皮で縫っている。上部には柄を差し込む孔も確認される。蓋は栓の穴があり、樽の上蓋と考えられる。木取りは柾目材である。木錘は丸太材を切断してくびれ部を作り出したこけし状のものである。



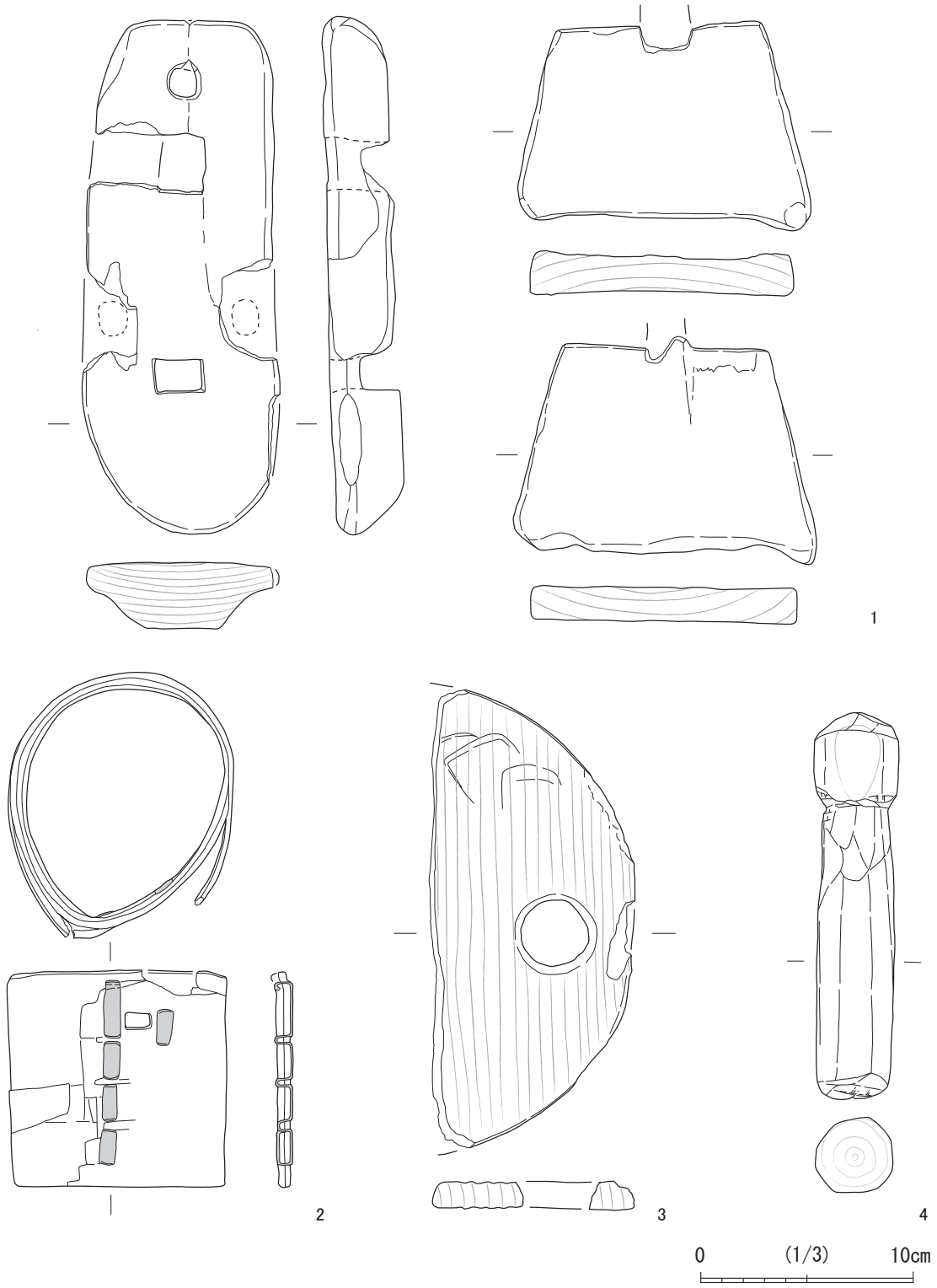
SE01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	炭化物を微量含む。褐色粘土粒を下位に集積する。
2	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	黄褐色砂質シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	黄橙色シルトブロックをやや多く含む。
4	褐色	10YR4/4	粘質シルト	黄褐色シルト粒をやや多く、炭化物を微量含む。
5	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	マンガンを多量含む。
6	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	黄褐色シルト粒を多量、炭化物を微量含む。
7	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	黒褐色粘土ブロックをやや多く、マンガンを少量含む。中世陶器出土層。
8	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	中位にマンガンを帯状に集積。下位には褐灰色粘土ブロックを少量含む。

SE02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く、黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックを多量、炭化物・焼土粒を微量含む。
3	暗褐色	10YR3/4	シルト	黄橙色シルト中ブロックを多量含む。
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄褐色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
5	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量、焼土粒を微量含む。
6	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックを多量含む。
7	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	シルト	黄褐色シルト中ブロックを多量含む。
8	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙・黄褐色粘土中ブロックを多量含む。マンガンを帯状に集積する。
9	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	黄橙色粘土小ブロックを少量含む。
10	黒褐色	2.5Y3/2	砂質シルト	炭化物を微量含む。
11	黒褐色	2.5Y3/1	粘質シルト	オリーブ黒色粘土大ブロックを少量含む。

第 82 図　SE01 ～ 03 土層断面図



第 83 図 SE02 出土木製品

第 48 表 SE02 出土木製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	特 徴	残 存	法 量(cm)			樹 種
						長さ	幅	厚さ	
1	SE02	木製品	差歯下駄	露卯下駄。台部、差歯とも板目材。	台部	24.2	9.3	3.1	ヤナギ属
					差歯	13.7 14.2	9.8 10.2	2.0 1.6	タカノツメ
2	SE02	木製品	柄杓	側板は曲物を樹皮で縫っている。柄を差し込む孔あり。	杓の部分	(11.0)	10.1	0.8	アスナロ属
3	SE02	木製品	蓋	樽の上蓋。栓の穴が残存。柾目材。	上 蓋 の 1/2 弱	(21.5)		1.2	アスナロ属
4	SE02	木製品	木錘	芯持ち材。表面加工により、樹皮、樹肌とも残っていない。	完存	18.2	4.0	3.5	ケヤキ

SE03（第 74・82 図）

15 C区に存在する素掘りの井戸で、平面形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸 1.5 m、短軸は 1.4m を測る。断面形状は円筒形状を呈するが、東側壁面の一部には小規模の平坦面がみとめられる。確認面より 2.4 m 下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。堆積土は 11 層に分層でき、1～7層は人為的埋土、8～ 11 層は自然堆積土と考えられる。

第 49 表　平成 27 年度調査　井戸跡属性表

遺構名	構造	平面形	断面形	規模（m）	深さ（m）	堆積土	遺物	備　　考	平面図	断面図
SE01	素掘	隅丸方形	円筒	1.7 × 1.6	2.1	自然→人為	白石	SD03 より古， SD02 より新	82	82
SE02	素掘	楕円形	漏斗	1.9 × 1.7	2.2 以上	自然→人為	木製品		74	82
SE03	素掘	隅丸方形	円筒	1.5 × 1.4	2.4 以上	自然→人為			74	82

3．竪穴遺構

SX01（第 73・84・85 図、第 51 表）

15 A区に存在する。平面形状は長方形であり、規模は長軸 6.0 m、短軸は 1.9m を測る。確認面からの深さは約 1.1 ㎝ である。主軸方位は南辺で N-81°　-E を測る。東壁際では南側から下る階段状の施設が掘り残されている。底面は平坦であるが、貼床や根太木などの痕跡は見られない。堆積土は 10 層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第 85 図は SX01 から出土した磁器碗である。1は切込かと思われる端反碗、2は内外面茶褐色釉の丸碗。3は瀬戸美濃産丸碗で型紙摺り。

4．性格不明遺構

SX02（第 74・84・86 図、第 52 表）

15 C区に存在する。SD04・05と重複し、SD05より古く、SD04より新しい。調査区東側へさらに展開するため平面形状は不明であるが、確認できた範囲での断面形状は皿形を呈する。確認面からの深さは約 1.0 ㎝ である。底面には凹凸がみられるが、土層観察では遺構の重複とはみとめられない。堆積土は5層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第 86 図は SX02 出土遺物である。1・2は白石産陶器で 13 世紀後半～ 14 世紀前半。3は外面に斜格子文のある瓦質土器火鉢である。

5．土坑

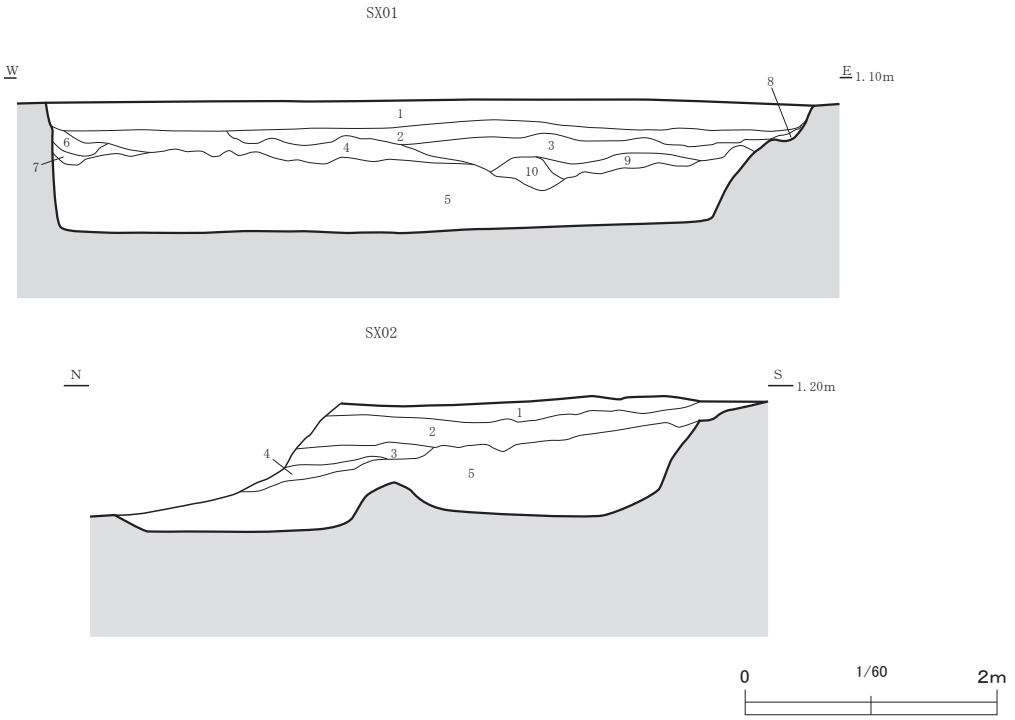
調査では8基の土坑を確認し、このうちSK02・03については詳述する。その他の土坑については第 50 表にまとめている。

SK02（第 74・87 図）

15 C区に存在する。平面形状は長方形であり、規模は長軸 2.1m、短軸 0.8m を測る。確認面からの深さは約 20cm であり、断面形状は皿形を呈する。堆積上は2層に分層でき、すべて人為的埋上である。

SK03（第 74・87 図）

15 C区に存在する。平面形状は長方形であり、規模は長軸 2.3 m、短軸 0.8 mを測る。確認面からの深さは約 20cm であり、断面形状は箱形を呈する。堆積上は4層に分層でき、すべて人為的埋上である。



SX01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	マンガンを多量、炭化物を微量含む。
2	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	灰白色粘土ブロックをやや多く含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	マンガンをやや多く、褐灰色粘土ブロックを少量含む。
4	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	灰白色シルトブロック・マンガンを少量含む。
5	オリーブ黒色	5Y3/2	粘質シルト	灰白色シルトブロックを少量含む。
6	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	砂	黄褐色粘土ブロックをやや多く含む。
7	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	マンガンをやや多く含む。
8	褐色	10YR4/4	粘質シルト	黄褐色シルト粒を少量含む。
9	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	マンガンを多量、オリーブ褐色シルトブロックを少量含む。
10	黄灰色	2.5Y4/1	粘質シルト	灰白色粘土・オリーブ褐色シルトブロックをやや多く含む。

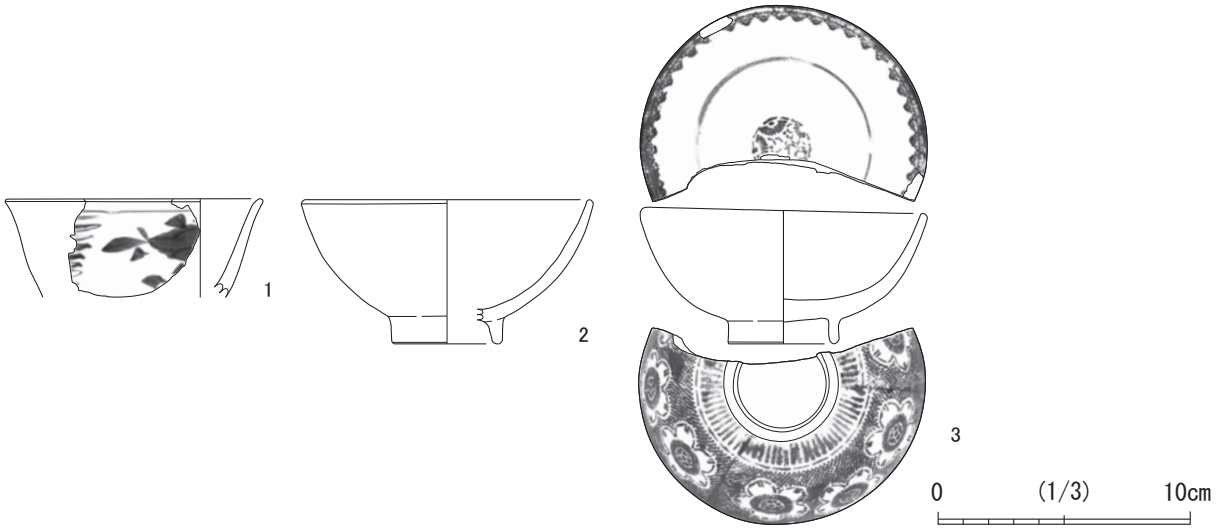
SX02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト粒を少量、炭化物をごく微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルトブロックを少量含む。
3	褐色	10YR4/4	シルト	黄橙色シルト粒を少量、炭化物をごく微量含む。
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄橙色シルトブロックをやや多く、褐色シルトブロックを微量含む。
5	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	褐灰色粘土・黄褐色粘土・黒褐色中粒砂ブロックを多量含む。

第 84 図　SX01・02 土層断面図

第 50 表　平成 27 年度調査　竪穴遺構・性格不明遺構・土坑属性表

遺構名	平面形	断面形	規模（m）	深さ（m）	堆積土	出土遺物	備　　考	平面図	断面図
SX01	長方形	箱形	6.0 × 1.9	1.1	人為	近現代陶磁器、瓦	東側に階段状の施設	73	84
SX02	ー	皿形	ー	1.0	人為	白石、瓦質土器	SD15 より古 ,SD04 より新	74	86
SK01	長方形	箱形	0.9 × 0.6	0.1	人為				
SK02	長方形	皿形	2.1 × 0.8	0.2	人為	近代陶磁器		74	87
SK03	長方形	箱形	2.3 × 0.8	0.2	人為		SD04 より新	74	87
SK04	方形	箱形	0.7 × 0.7	0.2	人為			74	
SK05	楕円形	逆台形	0.7 × 0.7	0.2	人為			74	
SK06	長円形	皿形	0.9 × 0.6	0.2	人為			74	
SK07	楕円形	皿形	0.8 × 0.6	0.2	人為			74	
SK08	ー	U字	ー	0.9	自然→人為			74	



第 85 図　SX01 出土遺物

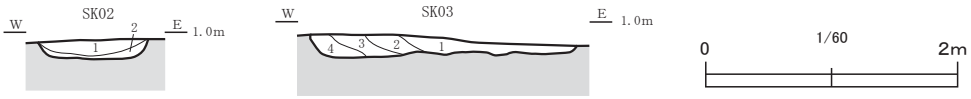
第 51 表　SX01 出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SX01	染付磁器	碗	切込か	18 世紀末～ 19 世紀末。	(10.2)		(3.9)
2	SX01	磁器	碗	不明	内外面に茶褐色釉。胎土は灰黄色。19 世紀末以降。	11.6	4.4	5.7
3	SX01	染付磁器	碗	瀬戸美濃	丸碗。型紙摺。19 世紀末以降。	11.3	4.3	5.4

第 86 図　SX02 出土遺物

第 52 表　SX02 出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SX02	陶器	甕	白石	内面はにぶい橙色で外面は灰赤色。外面に鉄釉。胎土はにぶい橙色で砂粒（特に白色粒）を多く含む。13 世紀「後半～ 14 世紀前半。			(7.25)
2	SX02	陶器	甕	白石	内外面ともに黄灰色。胎土は黄灰色で粗く，砂粒を多く含む。13 世紀「後半～ 14 世紀前半。			(6.0)
3	SX02	瓦質土器	火鉢	不明	内外面は褐灰色。外面に斜格子文。胎土は灰黄色で白色微粒を多く含む。			(3.8)



SK02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	褐色	10YR4/4	シルト	黒褐色シルト粒をやや多く、炭化物を微量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

SK03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト小ブロックをやや多く、褐色シルト粒を少量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト粒・褐色シルト粒を少量含む。
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	褐色シルト小ブロックを微量含む。

第 87 図　SK02・03 土層断面図

6. 溝跡

SD01（第 73・88 図）

15 A区に存在する。調査区北壁から東壁にかけて直線的にのびる溝跡である。北・南とも調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 5.2m にわたって検出している。主軸方位は N-26° -W。検出面での規模は上幅 0.3m、下幅 0.1 ～ 0.2m、確認面よりの深さは 30cm を測る。断面形状は大部分でV字状を呈し、南側から北側へ緩やかに傾斜している。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋上である。

SD02（第 73・88 図）

15 A区に存在する。調査区西壁北寄りから南壁にかけて弧状にのびる溝跡である。北・南とも調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 17.5m にわたって検出している。検出面での規模は上幅 2.2 ～ 2.7m、下幅 0.7 ～ 1.1m、確認面よりの深さは 30cm を測る。断面形状は皿形を呈し、北側から南側へ緩やかに傾斜している。堆積土は5層に分層でき、すべて自然堆積土である。

SD03（第 73・89・90 図、第 53・54 表）

15 A区に存在する。調査区西壁から東側へ直線的にのびる溝跡である。西側は調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 9.9m にわたって検出している。主軸方位は N-78° -E。検出面での規模は上幅 1.1m、下幅 0.8m、確認面よりの深さは 30cm を測る。断面形状は箱形を呈し、東側から西側へ緩やかに傾斜している。堆積土は1層であり、近現代陶磁器・金属製品などを大量に含む人為的埋上である。

第 89・90 図は SD03 の出土遺物である。第 89 図1は磁器のこども茶碗。2・3は兵隊盃。第 90 図は木製品である。連歯下駄が2点と容器の蓋が1点出土している。連歯下駄は2点とも板目材で、台部が小判型をなし、2は大きさから子供用とみられる。1の台部には山や川、道を描いたとみられる文様が線刻されている。蓋は板目材で、曲物の底部の可能性もある。

SD04（第 74・88・91 ～ 93 図、第 56 ～ 58 表）

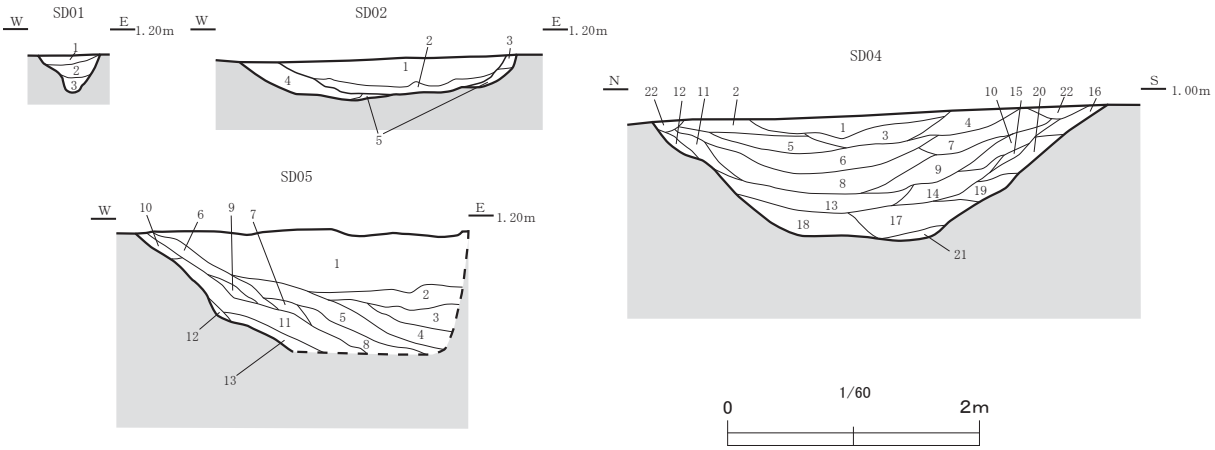
15 C区に存在する。調査区西壁北寄りから東にかけて緩やかな弧状にのびる溝跡である。西側は調査区外へ展開し、東側はSX02と重複し、これに切られるため全長は不明であるが、総長約 9.3m にわたって検出している。主軸方位は N-57° -W。検出面での規模は上幅 3.1m、下幅 1.0m、確認面よりの深さは 100cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、西側から東側へ緩やかに傾斜している。堆積土は22 層に分層でき、自然堆積層分ある 17 ～ 19・21 層以外はすべて自然堆積土である。なお、8層中からはウマの上顎骨が出土している。

第 91 ～ 93 図は SD04 出土遺物である。第 91 図1～3は白石産陶器で、1は断面3辺と内外面を研磨に使用する。特に内面はよく使い込まれている。4は土師質の鉢型土器の底部である。産地不明で在地産と考えられる。第 92 図は不明石製品である。円盤状に整形された1面に線刻状の凹みが認められるが、人為によるものか不明である。第 93 図は銭貨である。1は天禧通宝、2は大観通宝、3は銭種不明、4は元豊通宝である。

SD05（第 74・88・94 図、第 59 表）

15 C区に存在する。調査区北東部のみの検出であることから、全長、規模などについては不明な点が多いが、北壁及び西壁での土層観察の結果からSX02より新しい。主軸方位は N-8° -E と推定され、確認面よりの深さは 100cm を測る。堆積土は 13 層に分層でき、1～9層は人為的埋土、10 ～ 13 層は自然堆積土と考えられる。

第 94 図は SD05 出土の白石産陶器である。



SD01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルトブロックをやや多く含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色締めとブロックを多量含む。

SD02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂	細粒砂主体。上位に暗褐色粘土を帯状に、下位に黄橙色粘土ブロックを少量含む。
2	灰オリーブ色	5Y4/2	粘質シルト	灰白色火山灰を厚さ2・3㎝の帯状に含む。
3	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂	黒褐色粘土・灰黄褐色シルトブロックをやや多く含む。
4	褐色	10YR4/4	粘質シルト	黄橙色粘土小ブロックを多量、黒褐色粘土粒を少量含む。
5	黄褐色	10YR5/6	粘質シルト	黄橙色粘土小ブロックをやや多く、黒褐色粘土粒を微量含む。

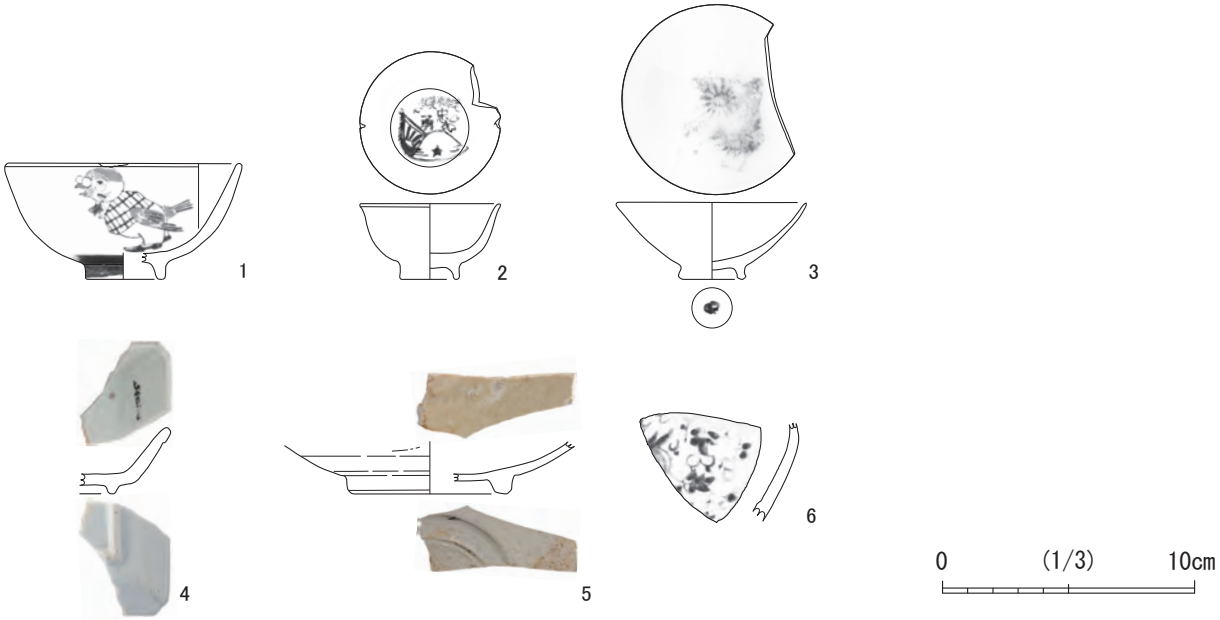
SD04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	層中に厚さ3㎝ほどの炭化物層を含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	マンガンを少量、炭化物を微量含む。
3	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト	マンガンを少量、炭化物を微量含む。
4	灰黄褐色	10YR5/2	砂質シルト	マンガンをやや多く、黄褐色シルト小ブロック・炭化物を微量含む。
5	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	マンガンをやや多く、細粒砂を比較的多く含む。
6	黄褐色	2.5Y5/3	砂	灰黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。細粒砂主体。
7	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂質シルト	黄橙色粘土中ブロックをやや多く、マンガンを少量含む。
8	オリーブ褐色	2.5Y4/4	砂	細粒砂主体。下位には厚さ1～3㎜の炭化物層を含む。動物骨を混入。
9	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	マンガンを多量、黄橙色シルト小ブロックをやや多く含む。
10	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	黄橙色シルト小ブロックを多量含む。
11	オリーブ褐色	2.5Y4/3	砂質シルト	灰黄褐色シルト中ブロックを少量含む。
12	黄褐色	2.5Y5/3	砂質シルト	下位に灰白色粘土ブロックを少量含む。
13	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂	微粒砂主体。層中に厚さ２㎜程度の灰黄褐色粘土薄層が互層状となる。
14	暗灰黄色	2.5Y5/2	砂質シルト	灰黄褐色粘土中ブロックをやや多く、マンガンを少量含む。
15	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	黄褐色シルト粒を少量含む。
16	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	黄褐色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
17	暗灰黄色	2.5Y4/2	砂	微粒砂主体。灰黄褐色粘土中ブロックを少量含む。
18	黒褐色	10YR3/2	砂	厚さ8～15㎜の灰黄褐色粘土との互層。植物遺体を少量含む。
19	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	黄褐色シルト中ブロックを少量含む。
20	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	暗灰黄色シルト粒を少量含む。
21	灰色	5YR4/1	粘質シルト	未分解の植物遺体を少量含む。
22	褐色	10YR4/4	砂質シルト	黄橙色シルト粒を少量含む。

第 88 図　SD01・02・04・05 土層断面図

SD05　土層注記

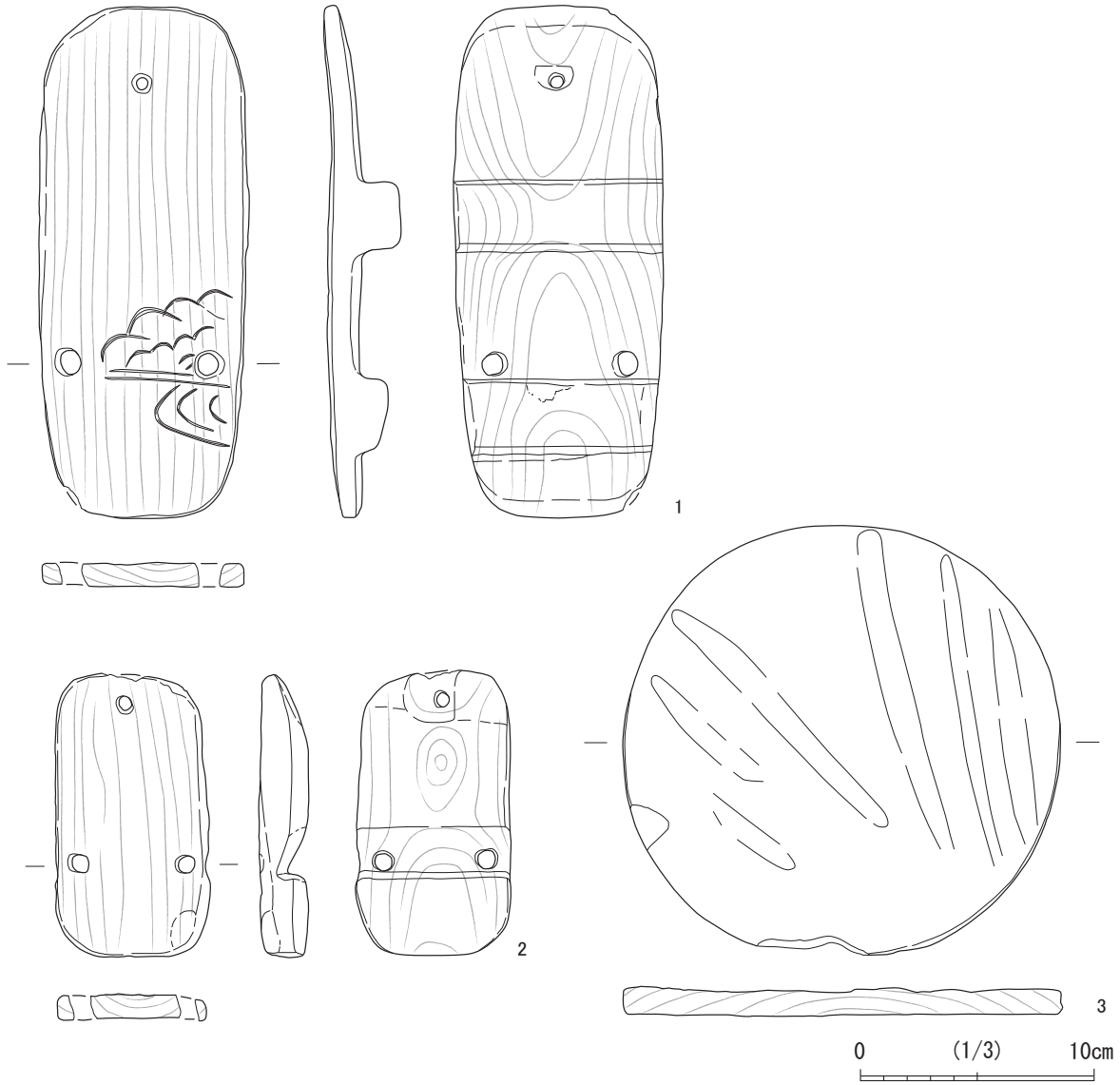
層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄橙色シルトブロックを微量、炭化物を極めて微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト粒・褐色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黒褐色シルトブロックを少量、黄橙・褐色シルト粒を微量含む。
4	褐色	10YR4/4	シルト	黄褐色シルト粒・黒褐色シルトブロックをやや多く含む。
5	褐色	10YR4/4	粘質シルト	黒褐色シルト中ブロックを少量含む。
6	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト中ブロック・黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
7	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物を微量含む。
8	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物・褐色シルト粒を少量含む。
9	褐色	10YR4/4	シルト	炭化物を微量含む。
10	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	褐色シルト粒を少量、炭化物・黄橙色シルト小ブロックを微量含む。
11	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
12	褐色	10YR4/4	粘質シルト	黄橙色シルト粒を微量含む
13	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	褐色シルト・黄橙色シルト粒をやや多く含む。



第 89 図　SD03 出土遺物

第 53 表　SD03 出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD03	磁器	碗	瀬戸美濃か	丸碗。子ども茶碗。ゴム印上絵。20 世紀前半か。	9.4	(3.3)	4.6
2	SD03	磁器	盃	不明	兵隊盃。胎土は明緑灰色。透明釉。見込に「支那事変記念」「忠勇」銘ゴム印。20 世紀前半。	5.6	2.3	3.0
3	SD03	磁器	盃	瀬戸美濃	兵隊盃。20 世紀前半。		2.7	(3.05)
4	SD03	磁器	手塩皿	切込	見込みに菊花文。18 世紀末～ 19 世紀末。			2.6
5	SD03	陶器	皿	大堀相馬	内外面に灰釉。胎土は灰色で焼き締まり良好。19 世紀。		(6.6)	(2.1)
6	SD03	磁器	徳利か	切込か	18 世紀末～ 19 世紀末。			(3.9)



第 90 図　SD03 出土木製品

第 54 表　SD03 出土木製品観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	樹種
1	SD03	木製品	連歯下駄	表面に文様(山と道と川か)が線刻されている。板目材。	完存	21.9	8.9	3.1	針葉樹
2	SD03	木製品	連歯下駄	子供用とみられる。板目材。	完存	12.1	6.6	2.1	スギ又はヒノキ科
3	SD03	木製品	蓋	容器の蓋。曲物の底部の可能性もある。板目材。	ほぼ完存	18.8		1.0	クリ

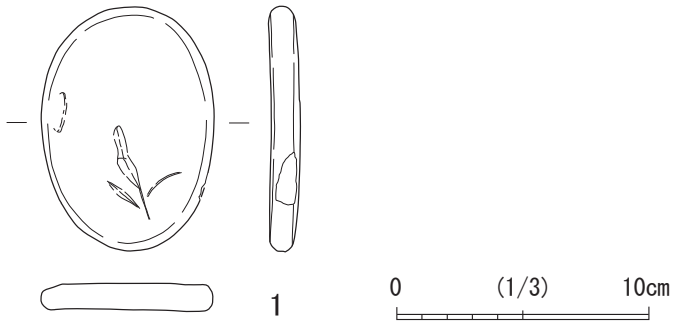
第 55 表　平成 27 年度調査　溝跡属性表

遺構名	検出長(m)	断面形	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	方向	堆積土	出土遺物	備考	平面図	断面図
SD01	5.2	V字	0.3	0.1～0.2	0.3	N-26°-W	人為			73	88
SD02	17.5	皿形	2.2～2.7	0.7～1.1	0.3	弧状	自然		SB01・SE01・SD03より古	73	88
SD03	9.9	箱形	1.1	0.8	0.3	N-78°-E	人為	近世陶器、近現代陶磁器、瓦質土器、瓦、金属製品、石製品、木製品、ガラス製品、種子	SE01・SD02より新	73	
SD04	9.3	逆台形	3.1	1.0	1.0	N-57°-W	自然	白石、銭貨、石製品、自然遺物	SB07・SX02・SK03より古	74	88
SD05	4.5	―	―	―	1.0以上	(N-8°-E)	自然→人為	白石、自然遺物	SX02より新	74	88

第 91 図 SD04 出土遺物

第 56 表 SD04 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD04	陶器	甕	白石	内外面ともに灰黄褐色。胎土は黄灰色。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(4.0)
2	SD04	陶器	甕	白石	内面は橙色で外面はにぶい橙色。胎土表面は橙色で胎土内は灰黄色。砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(3.9)
3	SD04	陶器	片口鉢	白石	内面は橙色で外面は褐灰色。胎土表面は橙色で胎土内は暗灰黄色。砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.9)
4	SD04	陶器	片口鉢	在地産か	内外面ともに褐灰色。胎土は黄灰色で砂粒を含む。内外面ともにヨコナデ。		14.2	(3.15)



第 92 図 SD04 出土石製品

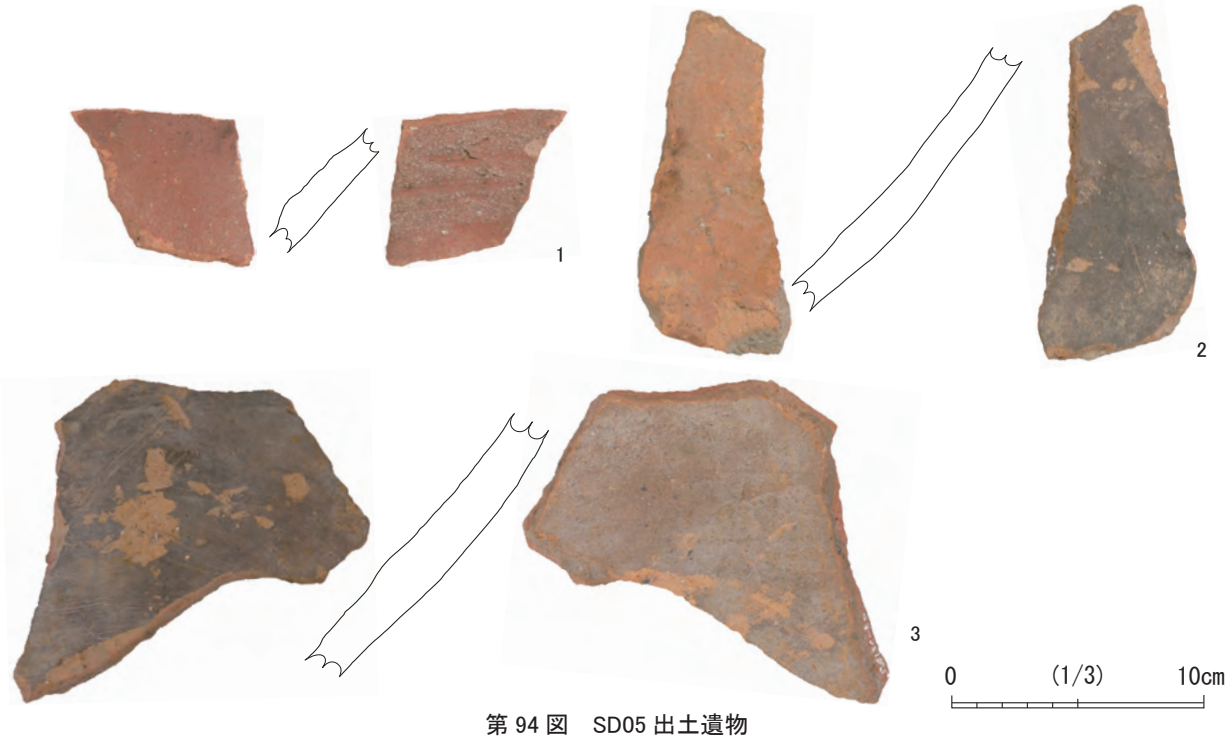
第 57 表 SD04 出土石製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	特 徴	残 存	法 量			
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	SD04	石製品	不明石製品	円盤状に整形されている。1面に線刻状の凹みがみられるが、人為的なものか不明。石材は凝灰質泥岩。	ほぼ完存	9.7	6.9	1.05	63.5

第 93 図　SD04 出土金属製品

第 58 表　SD04 出土金属製品観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	特　　徴	法　量		
					径（㎜）	厚さ（㎜）	重さ（g）
1	SD04 下層	金属製品	銭貨	天禧通宝	24.50	1.35	2.77
2	SD04 下層	金属製品	銭貨	大観通宝	24.84	1.28	2.21
3	SD04 下層	金属製品	銭貨		24.37	1.56	3.34
4	SD04 下層	金属製品	銭貨	元豊通宝	23.24	1.32	2.26



第 94 図　SD05 出土遺物

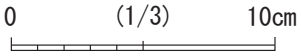
第 59 表　SD05 出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量（cm）		
						口径	底径	器高
1	SD05	陶器	甕	白石	内外面ともににぶい赤褐色。胎土は橙色で砂粒（特に黒色ガラス質粒）を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.9)
2	SD05	陶器	甕	白石	内面は橙色で外面は褐灰色。胎土表面は橙色で胎土内は灰白色。砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(12.2)
3	SD05	陶器	甕	白石	内面は灰褐色で外面は褐灰色。胎土表面はにぶい橙色で胎土内は褐灰色。砂粒（特に黒色ガラス質粒）を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(12.5)

7. ピット（第 95 図、第 60 表）

調査では 15 C区を中心に柱穴が多数確認されている。これらの中には柱痕跡をとどめているものも見受けられたが、限られた範囲での検出であるため建物などの復元には至っていない。15 A区・15 B区で発見された大部分のピットは長軸 0.3 ～ 0.5 m、短軸は 0.1 ～ 0.3 mの範囲に収まるものであり、形状は楕円形が多く、ほかに円形、隅丸方形などがみられる。15 C区で発見されたピットも長軸 0.3 ～ 0.5 m、短軸は 0.2 ～ 0.4 mの範囲に収まるものが大勢を占め、形状は楕円形が多く、ほかに円形、隅丸方形などがみられる。

第 95 図は 15 C区の P120 から出土した白石産陶器の片口鉢である。13 世紀後半～ 14 世紀前半。



第 95 図 ピット出土遺物

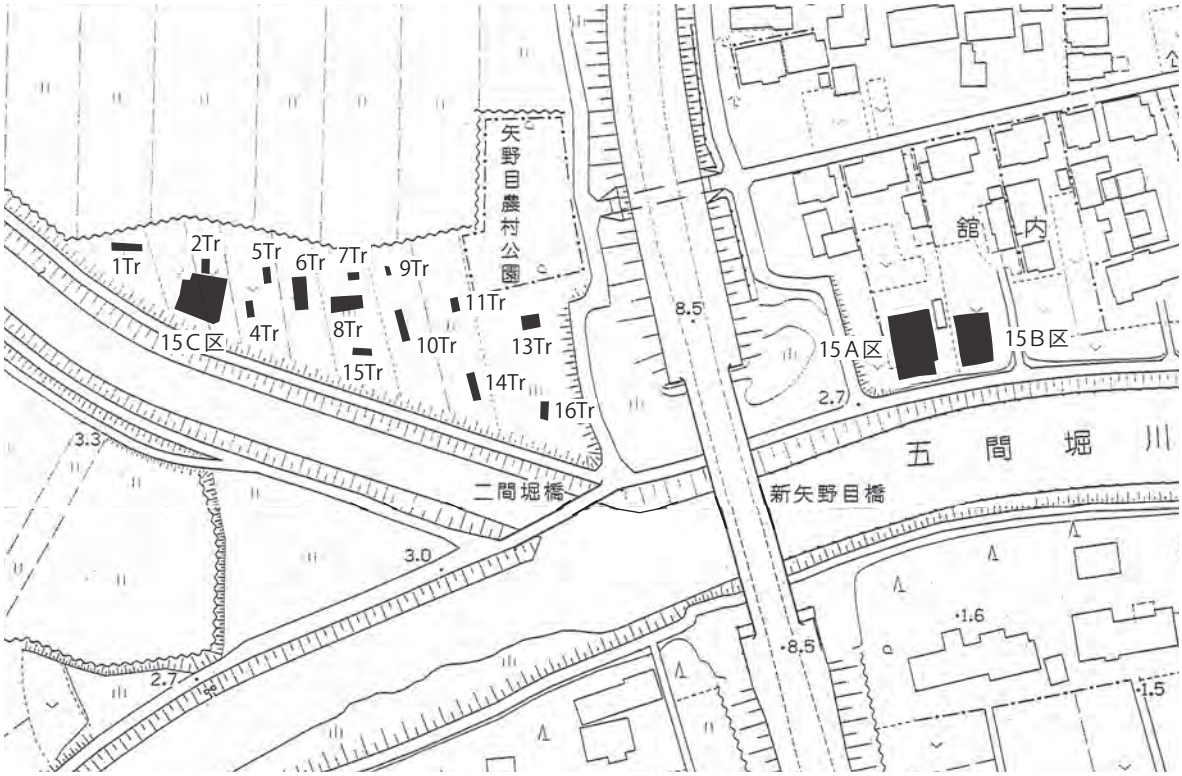
第 60 表 ピット出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	P120	陶器	片口鉢	白石	内面はにぶい褐色で外面は灰黄褐色。胎土表面はにぶい褐色で胎土内は褐灰色。砂粒を少量含む。内面磨滅。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.3)

8. トレンチ調査（第 96 図）

県道亘理・塩釜線の西側で、志賀沢川に面する範囲は今回の五間堀川河川改修事業にあわせて河川幅の拡幅、さらには二間堀橋の付け替えが予定されていることから、本発掘調査対象範囲を絞り込むためにトレンチ調査を実施した。トレンチは当初 16 箇所設定したが、12 トレンチについては 14 トレンチと最終的に繋げたことから、14 トレンチに含めている。

トレンチ調査の結果、3・13・14・16 トレンチでは遺構・遺物が濃密に確認できた。このうち3トレンチについては 15 C区として平成 26 年度に調査を実施し、13・14・16 トレンチについては一体的に遺構・遺物が分布することが予想されたことから、平成 28 年度に調査を実施することとした。14 トレンチで発見された溝



第 96 図 平成 27 年度調査区・トレンチ配置図

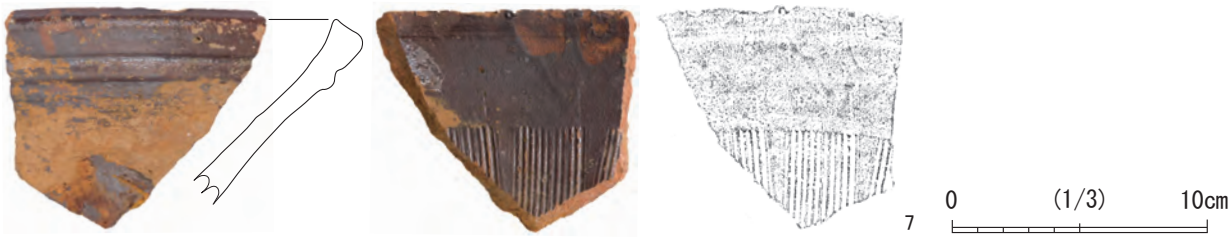
跡は、後述する平成28年度調査のSD01である。

なお、2トレンチ北側、5トレンチ、6トレンチ北側、7トレンチ、8トレンチ東側、9トレンチ、10トレンチ南側、15トレンチでは自然堤防、あるいは浜堤を形成する土壌は検出されず、湿地状の土層堆積が確認されている。以前に対象地の北側で実施した鉄塔建設に係る確認調査では、広範囲にわたって浜堤砂の分布が確認されており、トレンチ調査で確認された湿地状の土層については志賀沢川の旧河道と考えられる。

9．その他の出土遺物（第97・98図、第61・62表）

遺構精査、表土掘削時、及び攪乱内において、少量の遺物が出土している。

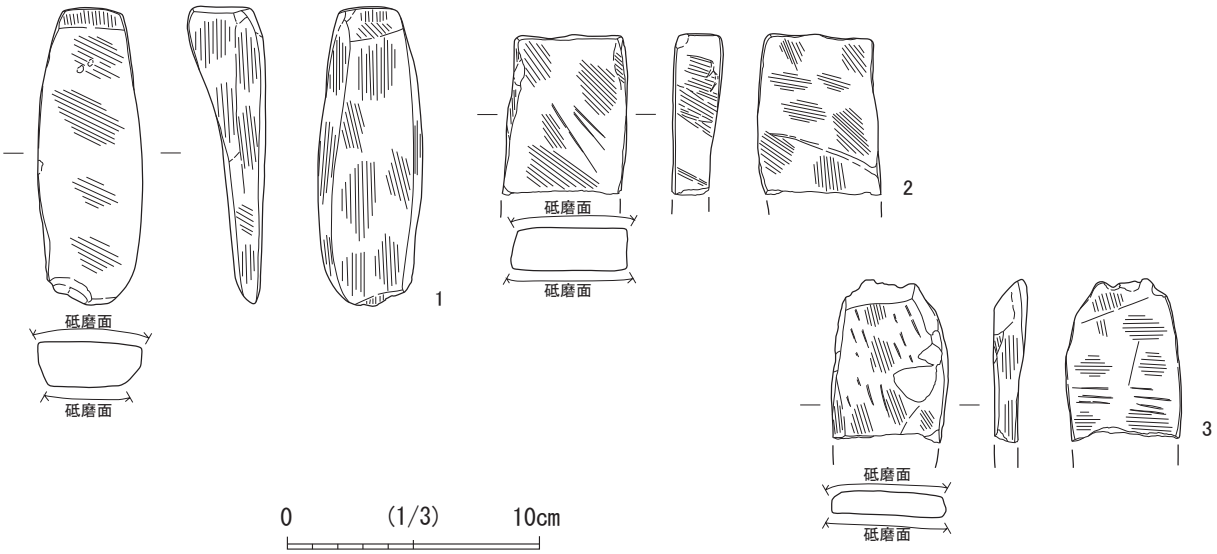
第97・98図はカクラン出土遺物である。第97図は堤焼擂鉢、第98図は石製品の砥石である。砥石は角柱状か板状に整形された2面が主な砥磨面である。いずれも石質が細粒の凝灰岩であり、仕上げ砥として使用されたものと考えられる。



第97図　カクラン出土遺物

第61表　カクラン出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
7	カクラン	陶器	擂鉢	堤焼	内外面鉄釉。胎土は明褐色で砂粒を含む。18世紀末～19世紀。			(8.3)



第98図　カクラン出土石製品

第62表　カクラン出土石製品観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	カクラン	石製品	砥石	角柱状の形態で、使用により扁平化している。砥磨面は2面。仕上げ砥とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	完存	11.9	4.1	3	160.0
2	カクラン	石製品	砥石	板状に整形された2面が砥磨面。側面にはノミ痕が認められる。仕上げ砥とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	半欠	(6.3)	(4.7)	2.0	(103.5)
3	カクラン	石製品	砥石	形態は板状で、2面が砥磨面。全面にスス状の付着物あり、被熱を受けている可能性あり。仕上げ砥とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	半欠	(6.4)	(4.6)	(0.9)	(53.5)

10. 平成 27 年度調査のまとめ

・平成 27 年度の調査では、15 A、15 B区、およびトレンチ 16 箇所を設定した。3・13・14・16トレンチから多数の遺構が検出され、このうち 3トレンチは新たに 15 C区として拡張設定し、13・14・16トレンチに関しては平成 28 年度に継続し、本格調査を実施することとした。

・15 A区で検出した溝跡の覆土最下層から 10 世紀前半の降灰と考えられる灰白色火山灰が確認されたことから、同溝跡は古代まで遡ると考えられる。一方、同火山灰は同溝跡以外では確認されていないこと、同溝跡は自然流路の可能性があること、今年度調査区全域を通して古代に遡る遺構・遺物が確認されていないことから、古代における土地利用は極めて限定的であったと考えられる。

・調査では 15 C区を中心に8棟の掘立柱建物跡を確認しているが、ほかにも柱痕跡が確認できる柱穴跡が多くみられることからさらに調査区外にかけて複数の建物跡が存在しているものと思わる。

・15 C区で確認された主要な遺構のうち、最も重複関係が多いのはSD04→SX02→SD05である。また掘立柱建物跡についても重複関係や位置から3時期の変遷が考えられる。各時期の遺構は、Ⅰ期はSD04とSB04で構成される。Ⅱ期はSB03とSX02のほか、SB03と同様の主軸方位を有するSB06・SK03、そしてこの時期の建物と重複しないSE02によって構成されると考えられる。Ⅲ期はSD05と、これにほぼ直交するSB07、さらにSB07に直交するSB05、そしてこの時期の建物と重複しないSE03によって構成されると考えられる。これらの遺構はすべて中世段階のものであり、各期の年代観については平成 28 年度の調査成果を参照するとⅠ期が 12 世紀後半～ 13 世紀前半、Ⅱ期が 13 世紀後半～ 14 世紀前半、Ⅲ期が 14 世紀後半～後半と考えられる。

・下野郷館跡の遺跡範囲の中で、湿地が広がると想定されていた県道亘理塩釜線以西において、密に遺構が拡がっていることが確認された。特に 15 C区で検出された遺構・遺物は中世が主体となり、古代・近世の遺構・遺物が検出されていないことから、これまで五間堀川左岸で実施し、古代・中世・近世の遺構・遺物が検出された調査区の状況とは異なることが明らかとなった。

15 Ａ・15 Ｂ区（西側上空から）

15 Ｃ区全景（南側上空から）

SB01 掘立柱建物跡（南から）

SB02 掘立柱建物跡（西から）

SE01 井戸跡土層断面（西から）

SE01 井戸跡（西から）

SE02 井戸跡（東から）

SE02 井戸跡　柄杓出土状況（西から）

SE02 井戸跡　下駄出土状況（西から）

SE03 井戸跡（南から）

SX01 竪穴遺構土層断面（南東から）

SX01 竪穴遺構（南東から）

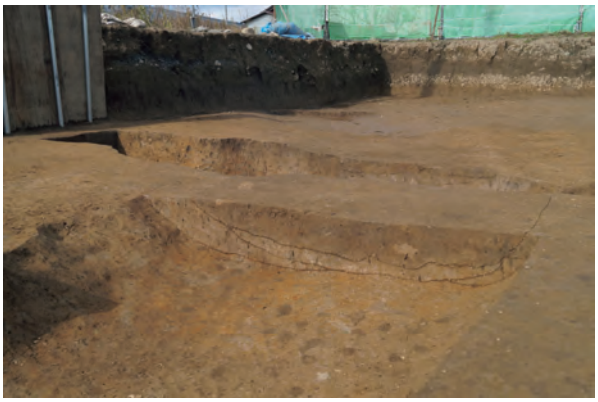
SX02 性格不明遺（南東から）

SK02 土坑（南から）

SK03 土坑（東から）

SD01 溝跡（南から）

SD02 溝跡（北から）



SD02 溝跡土層断面（南から）

SD03 溝跡　遺物出土状況（南から）

SD03 溝跡（北東から）

SD04 溝跡土層断面（西から）

SD04 溝跡（東から）

遺跡地西側のトレンチ調査全景①（西側上空から）

遺跡地西側のトレンチ調査全景②（東側上空から）

13 トレンチ全景（南西から）

16 トレンチ全景（南から）

14 トレンチ全景（南西から）

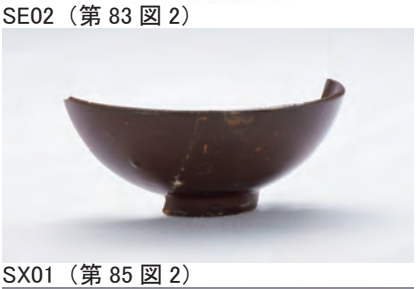
14 トレンチ　溝跡土層断面（南西から）

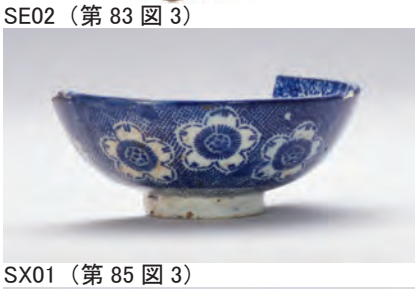
SDE02（第 83 図 1）

SE02（第 83 図 2）

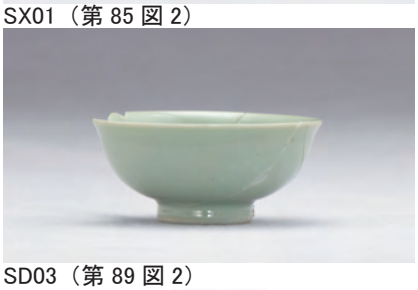
SE02（第 83 図 3）

SX01（第 85 図 1）


SX01（第 85 図 2）


SX01（第 85 図 3）

SD03（第 89 図 1）

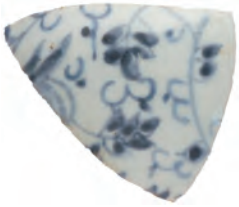

SD03（第 89 図 2）

SD03（第 89 図 2）

SD03（第 89 図 3）

SD03（第 89 図 3）

SD03（第 89 図 4）


SD03（第 89 図 6）

SD03（第 90 図 2）

SD03（第 90 図 1）

SD04（第 91 図 1）内面

SD03（第 90 図 3）

SD04（第 91 図 1）外面

SD04（第 92 図 1）

カクラン（第 98 図 3）

カクラン（第 98 図 1）

カクラン（第 98 図 1）

カクラン（第 98 図 2）

カクラン　鉄瓶

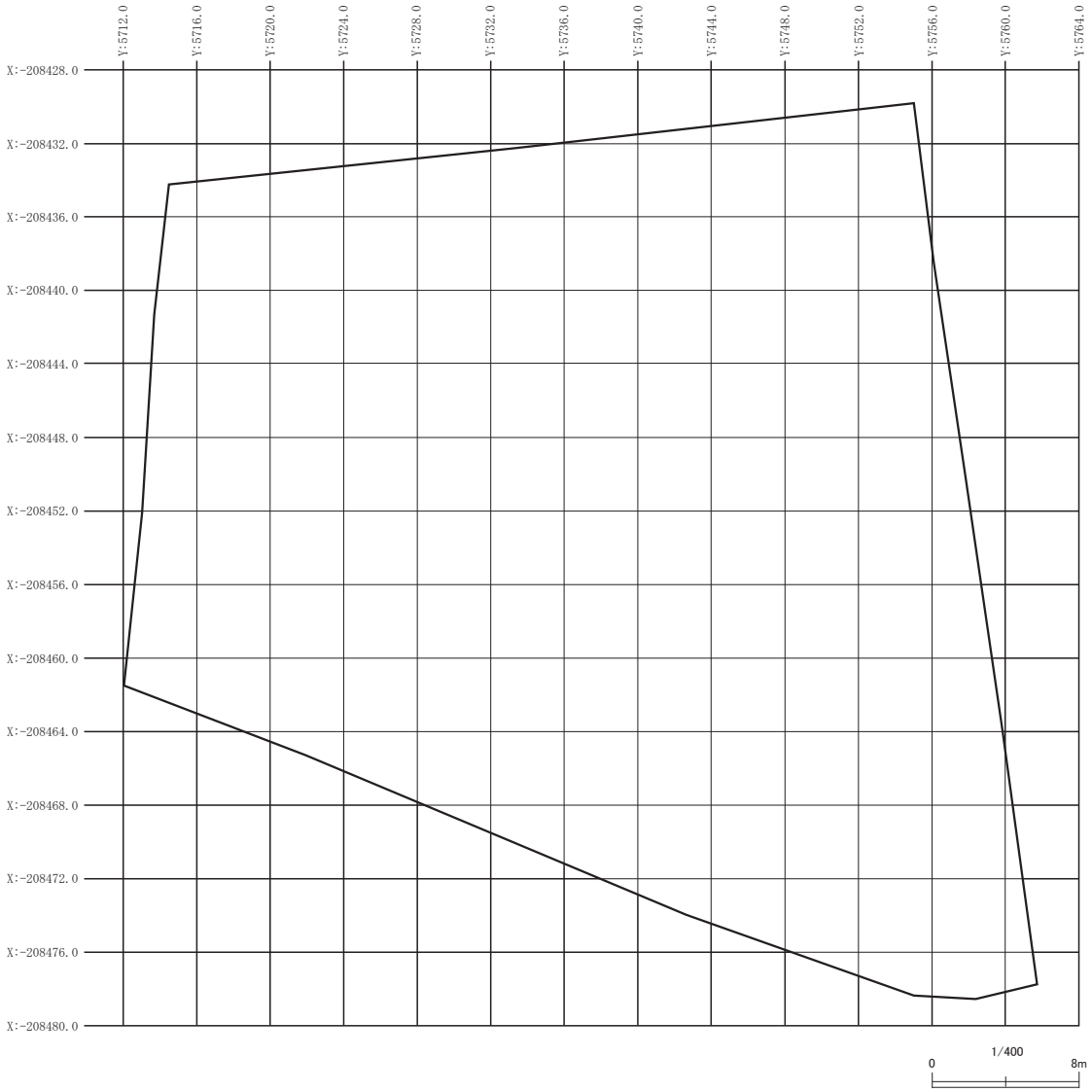
カクラン　鉄瓶　前耳

カクラン　鉄瓶　後耳

第Ⅶ章　平成 28 年度の調査成果

平成 28 年度の調査区は、平成 27 年度に実施したトレンチ調査の結果を受けて、志賀沢川と五間堀川が合流する地点に設定した。調査面積は 1,757 ㎡である。調査区は平成 12・15 年度に県道亘理塩釜線改良事業に際して設定したA区・E区の西側に位置する。

調査では掘立柱建物跡 13 棟、井戸跡 12 基、護岸施設1基、性格不明遺構1基、土坑 20 基、溝跡 20 条をはじめとする遺構を検出し、中世陶器、近世陶磁器、金属製品、石製品、木製品などの遺物が発見されている。以下に主要な調査成果について記す。

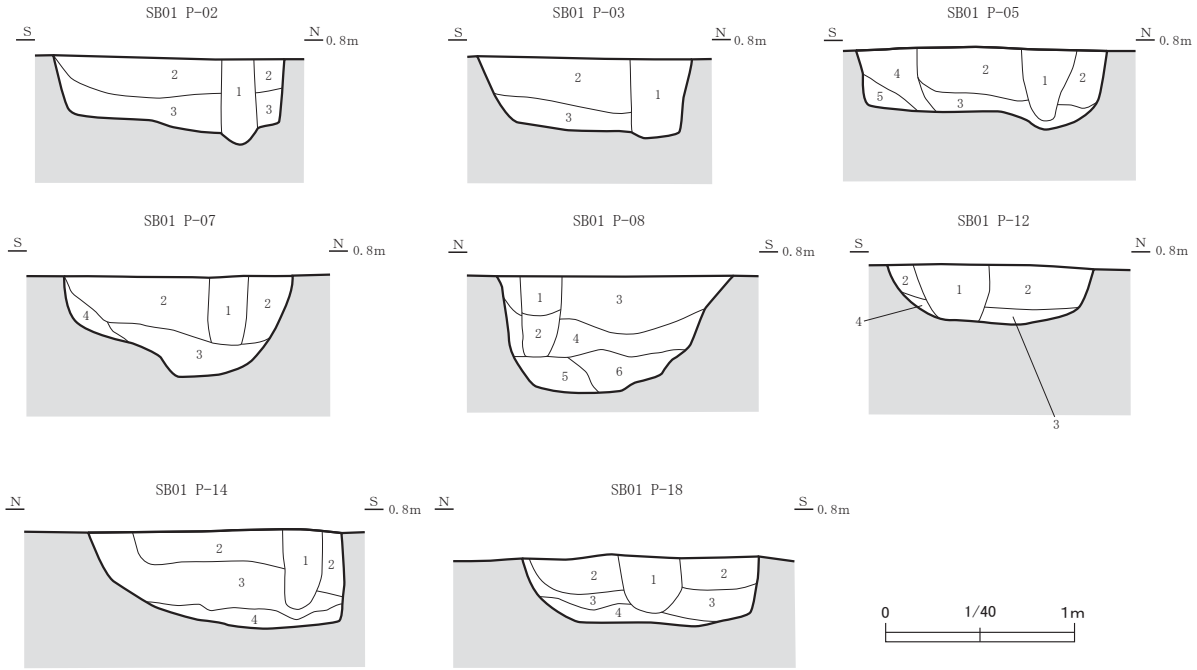


第 99 図　平成 28 年度グリッド配置図

1．掘立柱建物跡

SB01（第 100 ～ 102 図）

東西8間以上、南北3間の東西棟である。SD04･09と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は 20 口検出し、ほぼ全てで柱痕跡を確認した。平面規模は調査区東側へさらに展開すると考えられるが、確認できた範囲



SB01 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	黄橙色シルト大ブロックを多量含む。

SB01 P-03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト・暗褐色シルト中ブロックを多量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト大ブロックをやや多く含む。

SB01 P-05　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト粒を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト中ブロックを多量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト粒を極めて多量含む。
5	黄褐色	10YR5/6	砂質シルト	黒褐色シルト粒を少量含む。

SB01 P-07　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黄橙色シルト中ブロック・黒褐色シルト大ブロックをやや多く含む。
3	灰黄褐色	10YR6/2	粘質シルト	暗褐色シルト中ブロックを少量含む。
4	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	暗褐色シルト中ブロックをやや多く含む。

SB01 P-08　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
2	褐灰色	10YR4/1	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量、黄褐色粘質シルト小ブロックを微量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト中ブロックを多量含む。
5	オリーブ黒色	5Y3/2	粘質シルト	灰色粘土小ブロックを微量含む。
6	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く含む。

第 102 図　SB01 土層断面図

SB01 P-12 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	褐灰色シルト小ブロックを少量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックを少量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	暗褐色シルト小ブロックを微量含む。
4	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	褐灰色シルト小ブロック・マンガンをやや多く含む。

SB01 P-14 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト粒を微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト中ブロックを多量含む。
4	オリーブ黒色	5Y3/2	粘質シルト	黄橙色シルト小ブロックをやや多く含む。

SB01 P-18 土層注記

層No.	土色		土質	特徴
1	褐灰色	10YR4/1	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックをやや多く、マンガンを少量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	マンガンを少量含む。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト粒を少量含む。

では桁行が総長 17.5 m以上で、柱間は 2.0 ～ 2.4 m、梁行は総長 6.4 mで、柱間は 1.9 ～ 2.6 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-76° -E である。柱穴の掘方の形状は長方形が大勢を占めるほか、少量の方形、楕円形がみられる。柱痕跡の直径は 18 ㎝前後の円形である。なお、間仕切りや床束などの遺構はみとめられない。

SB02（第 100・103 図）

東西1間、南北2間の南北棟である。SD18・19と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は6口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.8 mで、柱間は 2.7 ～ 3.1 m、梁行は約 5.8 mである。建物の主軸は西列で計測するとN-10° -W である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 18 ㎝前後の円形である。

SB03（第 100・104・105 図）

東西1間、南北3間の南北棟である。柱穴は8口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.6 mで、柱間は 1.6 ～ 2.1 m、梁行は約 4.5 mである。建物の主軸は西列で計測するとN-14° -W である。柱穴の掘方の形状は長方形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 12 ㎝前後の円形である。

SB04（第 100・104・105 図）

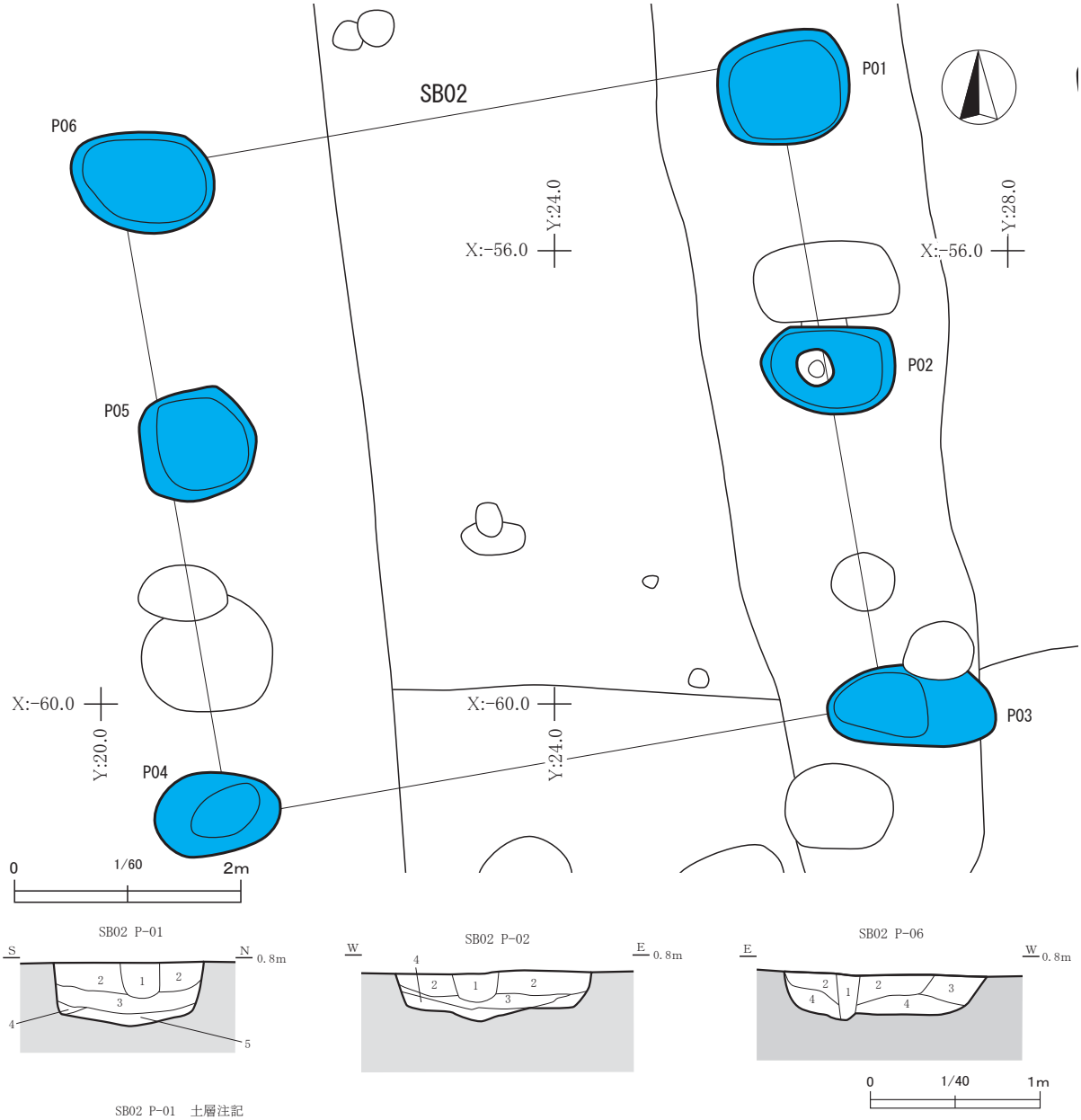
東西3間、南北1間以上の東西棟である。SB05、SD01・04と重複し、いずれよりも古い。柱穴は5口検出し、2口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 12.0 mで、柱間は 3.9 ～ 4.1 m、梁行は約 2.7 m以上である。建物の主軸は北列で計測するとN-87° -E である。柱穴の掘方の形状は方形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 12 ㎝前後の円形である。

SB05（第 100・104・106 図）

北東及び南西部の柱穴を欠くが、東西3間、南北1間の東西棟と考えられる。SB04、SK08、SD01と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は6口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 8.1 mと推定され、柱間は各 2.7 m、梁行は約 3.1 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-76° -E である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 12 ㎝前後の円形である。

SB06（第 100・107 図）

東西2間以上、南北2間の東西棟である。SB07、SD04・06と重複し、SB07・SD06より古く、SD04より新しい。柱穴は6口検出し、3口で柱痕跡を確認した。平面規模は調査区東側へさらに展開すると考え



SB02 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	灰白色シルト小ブロックを少量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	マンガンをやや多く、黒褐色シルト小ブロックを微量含む。
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	マンガンを微量含む。
5	オリーブ黒色	5Y3/2	粘質シルト	灰白色粘土粒を少量含む。

SB02 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト粒を微量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	灰白色シルト粒を微量含む。
4	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	マンガンをやや多く含む。

SB02 P-06　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	マンガンを微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	灰白色シルト小ブロックを少量含む。
3	褐灰色	10YR4/1	シルト	マンガンを少量含む。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く含む。

第 103 図　SB02、土層断面図

られるが、確認できた範囲では桁行が総長 3.6 m以上で、柱間は各 1.8 m、梁行は総長 3.0 mで、柱間は 1.4 ～ 1.6 mである。建物の主軸は北列で計測するとN-71° -E である。柱穴の掘方の形状は円形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝前後の円形である。

SB07（第 100・107 図）

東西3間以上、南北2間の東西棟である。SB06、SD06と重複し、いずれよりも新しい。柱穴は9口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は調査区東側へさらに展開すると考えられるが、確認できた範囲では桁行が総長 7.5 m以上で、柱間は各 2.5 m、梁行は総長 3.8 mで、柱間は各 1.9 mである。建物の主軸は北列で計測するとN-85° -E である。柱穴の掘方の形状は円形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝前後の円形である。

SB08（第 100・108・109 図）

東西2間、南北2間の南北棟である。SB07・12と重複し、SB07より古く、SB12より新しい。柱穴は8口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 5.0 m以上で、柱間は各 2.5 m、梁行は総長 4.8 mで、柱間は各 2.4 mである。建物の主軸は西列で計測するとN-13° -W である。柱穴の掘方の形状は楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝前後の円形である。

SB09（第 100・108・109 図）

南西部の柱穴を欠くが、東西5間、南北3間の東西棟と考えられる。SB10、SE05、SD02・07と重複し、SB10・SE05より古く、SD02・07より新しい。柱穴は 13 口検出し、7口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 11.8 mで、柱間は 2.2 ～ 2.6 m、梁行は総長 7.8 mで、柱間は 2.4 ～ 2.6 mである。建物の主軸は北列で計測するとN-73° -E である。柱穴の掘方の形状は円形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 12 ㎝前後の円形である。

SB10（第 100・109・110 図）

東西3間、南北1間の東西棟と考えられる。SB09と重複し、これより古い。柱穴は6口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 9.0 mで、柱間は 2.8 ～ 3.2 m、梁行は 3.0 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-70° -E である。柱穴の掘方の形状は楕円形及び隅丸方形で、柱痕跡の直径は 12 ㎝前後の円形である。

SB11（第 100・109・110 図）

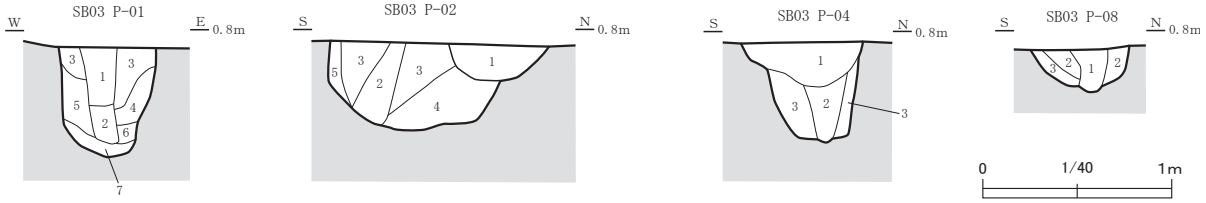
北東部の柱穴を欠くが、東西5間、南北2間の東西棟と考えられる。柱穴は 12 口検出し、5口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 10.2 mで、柱間は 2.0 ～ 2.2 m、梁行は総長 6.2 mで、柱間は 3.0 ～ 3.2 mである。建物の主軸は南列で計測するとN-75° -E である。柱穴の掘方の形状は円形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝前後の円形である。

SB12（第 100・111・112 図）

調査区外へ展開するため南西部の柱穴を欠くが、東西5間、南北3間の東西棟と考えられる。柱穴は 10 口検出し、6口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 13.0 mで、柱間は 2.4 ～ 3.0 m、梁行は総長 8.6 mで、柱間は 3.0 ～ 3.2 mである。建物の主軸は北列で計測するとN-79° -E である。柱穴の掘方の形状は円形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝前後の円形である。

SB13（第 100・111・112 図）

調査区外へ展開するため南西部の柱穴を欠くが、東西3間、南北1間の東西棟と考えられる。柱穴は6口検出し、4口で柱痕跡を確認した。平面規模は桁行が総長 6.4 mで、柱間は 2.0 ～ 2.2 m、梁行は 3.7 m



SB03 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	黄橙色シルト粒を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト粒を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックをやや多く含む。
4	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄橙色シルト小ブロックを多量含む。
5	黒褐色	10YR3/2	シルト	黒色粘土粒をやや多く、黄橙色シルト粒を少量含む。
6	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	黒褐色シルト粒を微量含む。
7	オリーブ黒色	5Y3/1	粘質シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。

SB03 P-02　土層注記

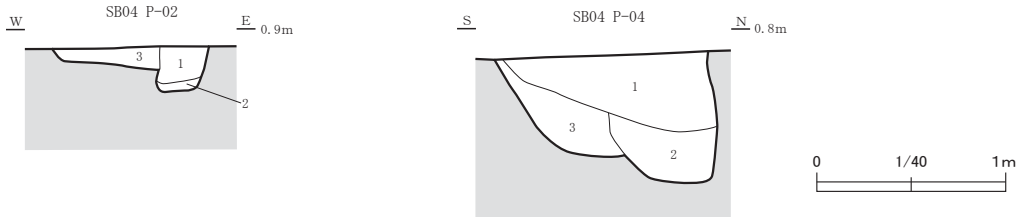
層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト粒を少量、黒褐色粘土小ブロックを微量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	暗褐色シルト粒をやや多く、黒褐色粘土中ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト粒をやや多く、炭化物を微量含む。
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黒褐色シルト大ブロックをやや多く含む。
5	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黒褐色シルト中ブロックを多量含む。

SB03 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄橙色シルト小ブロックを微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト粒をごく微量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄橙色シルト小ブロックを多量含む。

SB03 P-08　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト粒を微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	暗褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く含む。



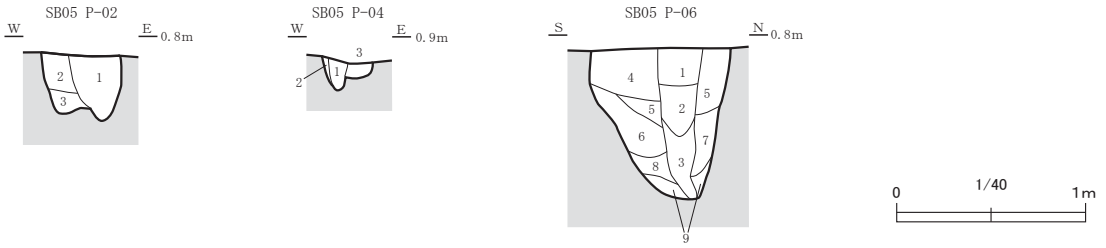
SB04 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト粒を少量、炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを多量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	黒褐色シルト小ブロックを少量含む。

SB04 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト大ブロックを少量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	黒褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	褐色	10YR4/4	砂質シルト	灰白色粘質シルト中ブロック・暗褐色シルト中ブロックをやや多く含む。

第 105 図　SB03・04 土層断面図



SB05 P-02　土層注記

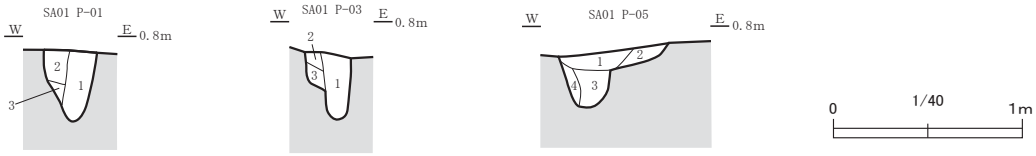
層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	褐色粘土小ブロックをやや多く含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	褐色砂質シルト中ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR5/3	粘質シルト	下位に微量の褐色砂を集積する。

SB05 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黒褐色シルト粒を微量含む。
3	にぶい黄橙色	10YR5/3	砂質シルト	黒褐色シルト小ブロックを多量含む。

SB05 P-06　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト	黒色粘土小ブロックを少量、黄橙色シルト粒をごく微量含む。
3	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト粒を微量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く含む。
5	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く含む。
6	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄橙色シルト中ブロックを多量、黒色粘土小ブロックを微量含む。
7	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄橙色シルト大ブロックをやや多く含む。
8	オリーブ黒色	5Y3/1	砂質シルト	灰色粘土知友ブロックをやや多く、黄橙色シルト中ブロックを微量含む。
9	オリーブ黒色	5Y3/1	粘質シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。



SA01 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
3	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト粒を微量含む。

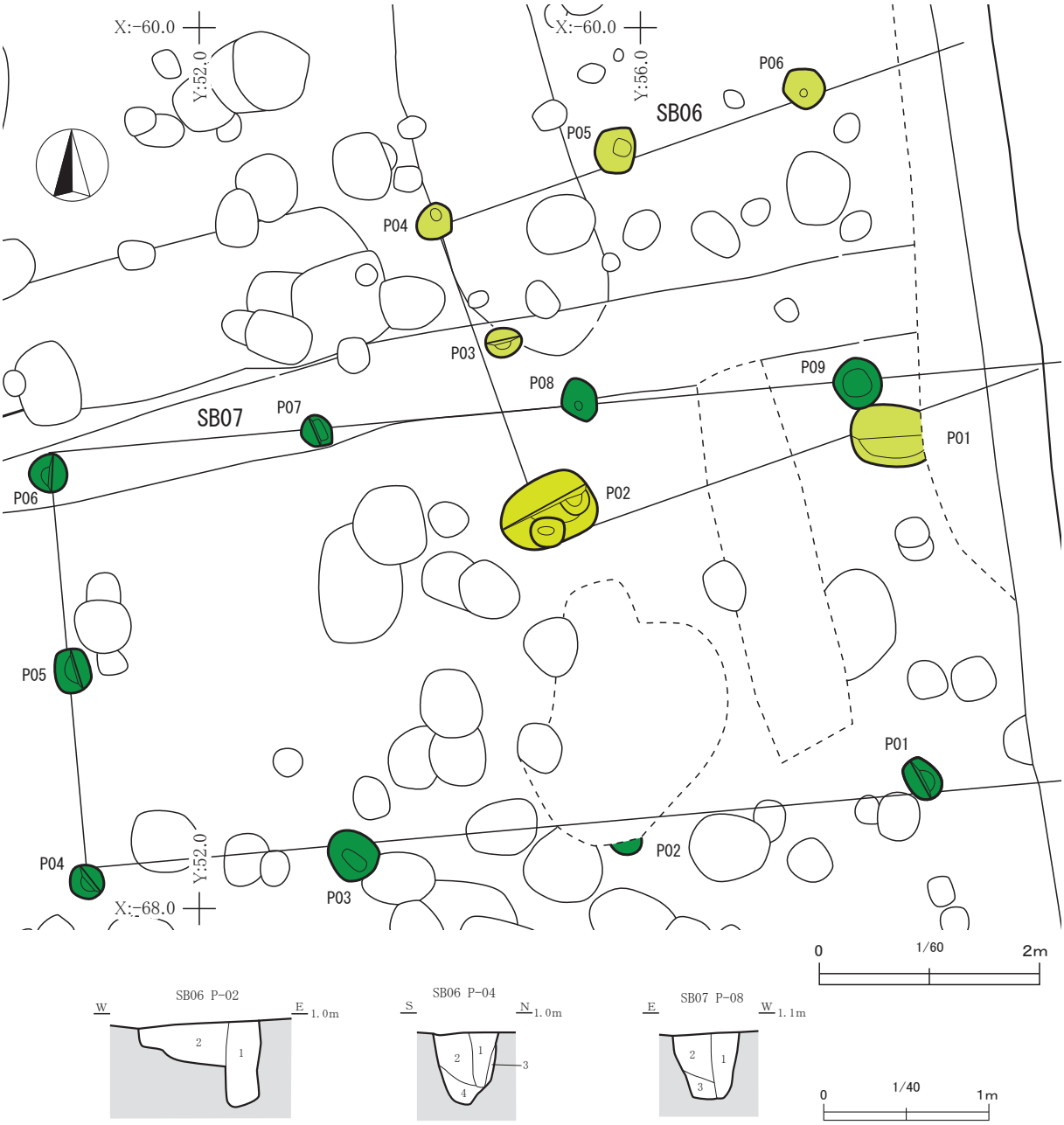
SA01 P-03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/1	シルト	マンガン粒を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト粒を微量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

SA01 P-05　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト粒を少量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	黒褐色シルト粒をやや多く含む。
3	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
4	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	黒褐色シルト中ブロックをやや多く含む。

第 106 図　SB05・SA01 土層断面図



SB06 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト粒をやや多く含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト粒・暗褐色シルト小ブロックを少量含む。

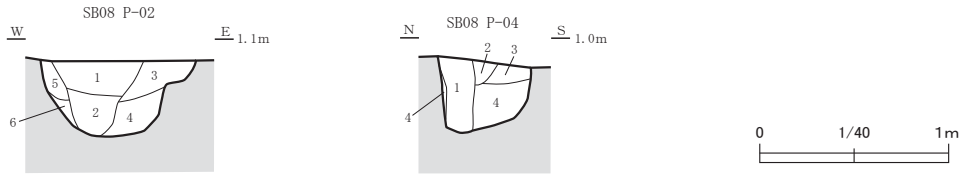
SB06 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黒色粘土粒を微量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黒褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
4	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。

SB07 P-08　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	暗褐色	10YR4/3	シルト	黄橙色シルト中ブロックを多量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。

第 107 図　SB06・07、土層断面図

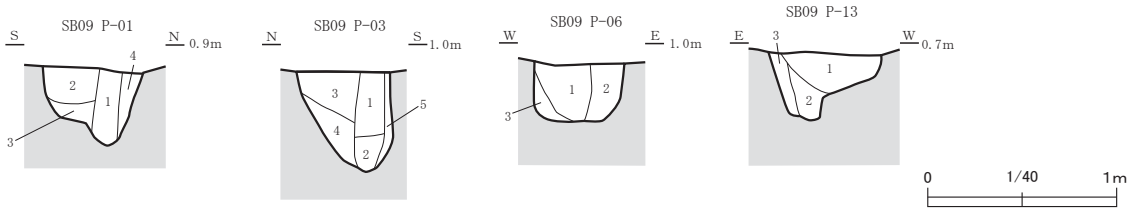


SB08 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	褐色砂を互層状にやや多く、炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	マンガンを微量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	褐色砂の中ブロックをやや多く含む。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト	褐色砂を粒状に少量含む。
5	黒褐色	10YR3/1	シルト	にぶい黄橙色砂質シルトの小ブロックを少量含む。
6	黒褐色	10YR2/2	シルト	にぶい黄橙色砂質シルトを粒状に少量、炭化物を微量含む。

SB08 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	上面に黒褐色中粒砂を多量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黒褐色中粒砂をやや多く含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	暗褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
4	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	暗褐色・黒褐色シルト小ブロックを少量含む。



SB09 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	にぶい黄褐色砂質シルトの小ブロック・焼土粒を少量、炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	褐灰色砂を下位に集積する。炭化物・焼土粒を少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	褐灰色砂を少量含む。
4	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	にぶい黄褐色砂質シルト粒をやや多く含む。

SB09 P-03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	炭化物・焼土粒をやや多く含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	マンガンを微量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	炭化物を少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	炭化物をやや多く含む。
5	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	黒褐色シルト小ブロックを少量含む。

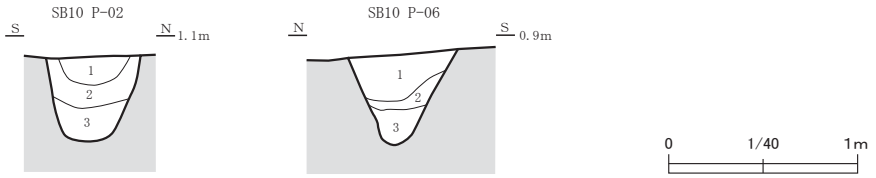
SB09 P-06　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く、炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄褐色シルト小ブロックを多量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	黒褐色シルト小ブロックを少量含む。

SB09 P-13　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	炭化物・焼土粒をやや多く、褐色砂質シルト粒を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	マンガンを少量、褐色砂質シルト粒を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	シルト	褐色砂を互層状に少量含む。

第 108 図　SB08・09 土層断面図

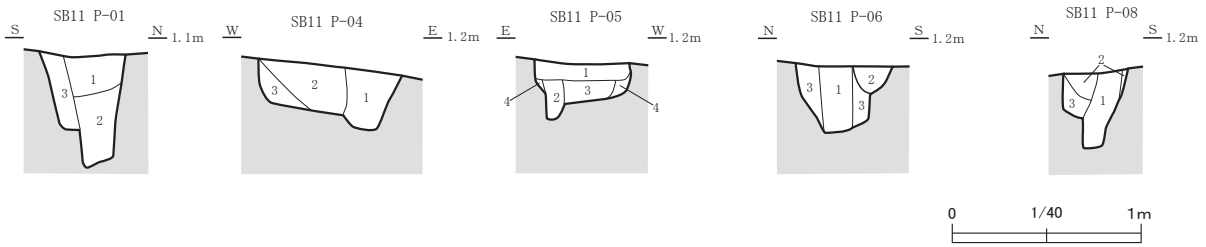


SB10 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	炭化物を少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	シルト	炭化物を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	褐色砂質シルト中ブロックを少量含む。

SB10 P-06　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	褐色シルト小ブロック・炭化物を少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	褐色シルト粒を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	褐色砂質シルト小ブロックを少量含む。



SB11 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
2	褐灰色	10YR4/1	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く、炭化物を少量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	暗褐色シルト中ブロックを多量、炭化物を微量含む。

SB11 P-04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	暗褐色シルト小ブロックを下位に集積する。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。

SB11 P-05　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	褐色シルト粒を少量含む。
2	黒色	10YR2/1	シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	黒褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
4	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト	黒褐色シルト粒を少量含む。

SB11 P-06　土層注記

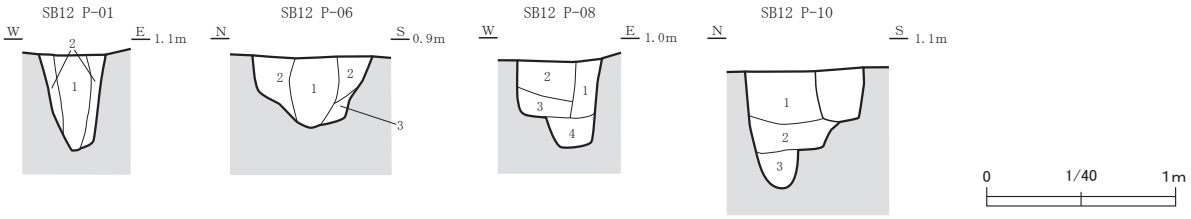
層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/1	シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	褐色シルト粒を微量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。

SB11 P-08　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト中ブロックを少量、炭化物を微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	暗褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	黒褐色シルト小ブロックを少量含む。

第 110 図　SB10・11 土層断面図

である。建物の主軸は北列で計測するとN-79°　-E である。柱穴の掘方の形状は円形及び楕円形で、柱痕跡の直径は 10 ㎝前後の円形である。



SB12 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黒色シルト中ブロックを少量含む。

SB12 P-06　土層注記

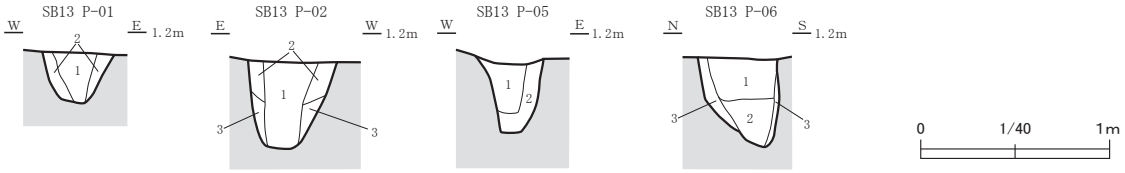
層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物を微量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	褐色シルト粒をごく微量含む。

SB12 P-08　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	黄褐色シルト中ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄褐色シルト中ブロックを少量含む。中位に黒褐色中粒砂の薄層を帯状に含む。
3	黒褐色	10YR2/3	シルト	褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
4	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く、黄橙色シルト小ブロックを少量含む。

SB12 P-10　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	褐色シルト粒・炭化物・焼土粒を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	褐灰色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	褐灰色シルト小ブロックを微量含む。



SB13 P-01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。

SB13 P-02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト	褐色シルト粒を少量含む。
3	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	褐色シルト粒を少量含む。

SB13 P-05　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	シルト	褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	褐色シルト粒を微量含む。

SB13 P-06　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト粒を少量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	褐色シルト粒を少量含む。

第 111 図　SB12・13 土層断面図

第 63 表　平成 28 年度調査　掘立柱建物跡属性表

建物名	間数	棟方向	桁行総長（m）	柱間寸法（m）	測定柱列	梁行総長（m）	柱間寸法（m）	測定柱列	方向	柱痕跡径（cm）	柱穴規模（cm）	平面形	備考
SB01	3×8以上	東西	17.5以上	2.0,2.0,2.3,2.4,2.2,2.3,2.2,2.1	南列	6.4	2.6,1.9,1.9	西列	N-76°-E	18	90～140	長方形，方形，楕円形	SD04・09より新
SB02	1×2	南北	5.8	2.7,3.1	東列	5.8	5.8	南列	N-10°-W	18	110～140	楕円形，隅丸方形	SD18・19より新
SB03	1×3	南北	5.6	1.9,2.1,1.6	西列	4.5	4.5	南列	N-14°-W	12	60～90	長方形，楕円形	
SB04	1以上×3	東西	12.0	4.0,3.9,4.1	北列	2.7以上	2.7	西列	N-87°-E	12	100～150	方形，楕円形	SB05・SD01・04より古
SB05	(1×3)	東西	(8.1)	(2.7),2.7,2.7	南列	3.1	(3.1)	東列	N-76°-E	12	40～70	楕円形，隅丸方形	SB04・SD01・SK08より新
SB06	2×2以上	東西	3.6以上	1.8,1.8	北列	3.0	1.4,1.6	西列	N-71°-E	10	30～90	円形，楕円形	SB07・SD06より古，SD04より新
SB07	2×3以上	東西	7.5以上	2.5,2.5,2.5	北列	3.8	1.9,1.9	西列	N-85°-E	10	30～50	円形，楕円形	SB06・SD06より新
SB08	2×2	南北	5.0	2.5,2.5	西列	4.8	2.4,2.4	南列	N-13°-W	10	60～100	楕円形	SB07より古，SB12より新
SB09	3×5	東西	11.8	2.2,2.4,2.6,2.3,2.3	北列	7.8	(5.5),2.3	東列	N-73°-E	12	40～70	円形，楕円形	SB10・SE05より古，SD02・07より新
SB10	1×3	東西	9.0	2.8,3.0,3.2	南列	3.0	3.0	西列	N-70°-E	12	50～70	楕円形，隅丸方形	SB09より新
SB11	2×5	東西	10.2	2.0,2.2,2.0,2.0,2.0	南列	6.2	3.0,3.2	西列	N-75°-E	10	30～90	円形，楕円形	
SB12	3×5	東西	13.0	2.4,2.6,2.4,2.6,3.0	北列	8.6	2.8,-	西列	N-79°-E	10	40～80	円形，楕円形，台形	SB08より古
SB13	1×3	東西	6.4	2.2,2.0,2.2	北列	3.7	3.7	東列	N-79°-E	10	40～50	円形，楕円形	SD14より古

2．井戸跡

SE01（第 113・114・115 ～ 120 図、第 64 ～ 69 表）

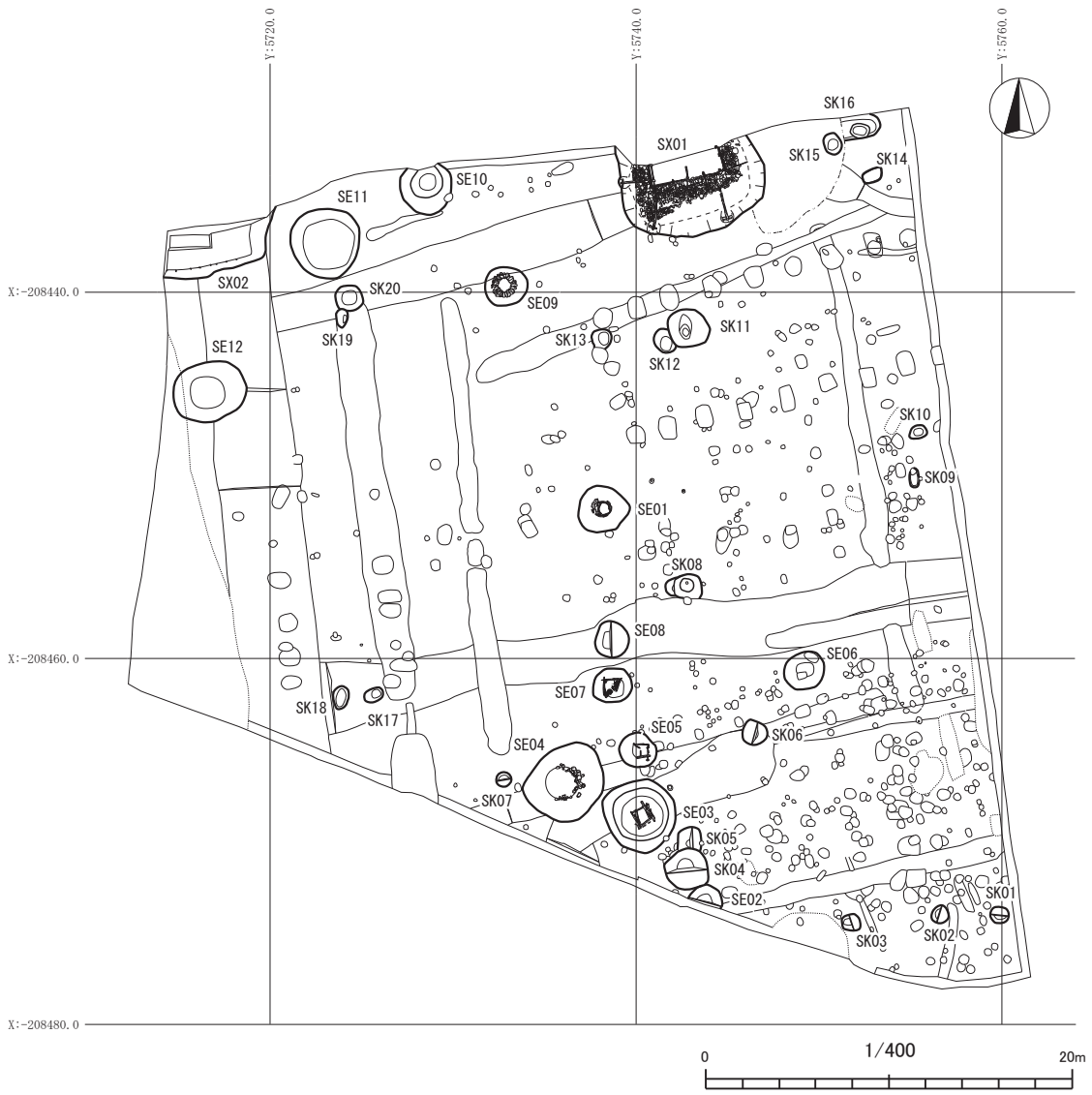
丸太を大きく3つに分割した後に内側を刳り貫いたものを再度組み合わせ、井戸枠として使用した井戸である。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸 2.7 m、短軸は 2.5m を測る。断面形状は下部が狭く、上部に向かって大きく開いている。確認面より 1.5 m 下で底面を検出している。井戸枠は底面に据え置いており、高さは 120 ㎝が遺存している。井戸枠より上位の堆積土は1層であり、人為的に埋め戻している。2～5層は井戸枠の裏込めである。

第 115 図～第 119 図は SE01 出土の白石産陶器で、第 116 図 5 のみ常滑産か。断面及び外面を研磨に使用するものが多数ある。特に片口鉢は研磨への転用率が高い。第 120 図は SE01 から出土した木製品である。曲物の底板が1点出土している。一部が欠損した後に2個の孔を加え、全部で5個の貫通孔が施されている。欠損後に再利用のために作り直されたものと考えられる。

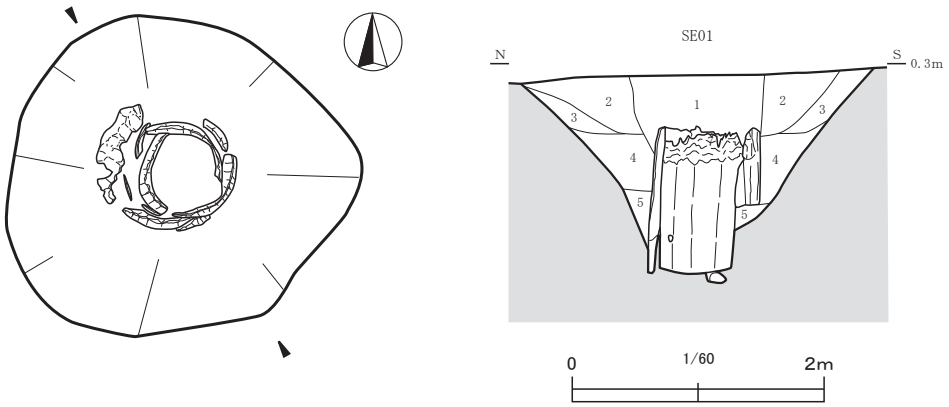
SE02（第 113・121・133 図、第 70 表）

素掘りの井戸で、調査区南側へさらに展開するが平面形状は円形を呈するものと考えられる。SD04・05と重複し、SD04より古く、SD05より新しい。規模は確認できた範囲では長軸 1.9 mを測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より 1.2 m 下で底面を検出している。堆積土は 10 層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第 121 図は SE02 出土の陶器皿である。軟質の黄橙色の胎土に貫入の入る灰白色の釉を厚く施し、内面に呉須絵を描く。また高台に砂が付着する。中国漳州窯産と考えられ、16 世紀後半～ 17 世紀中頃。



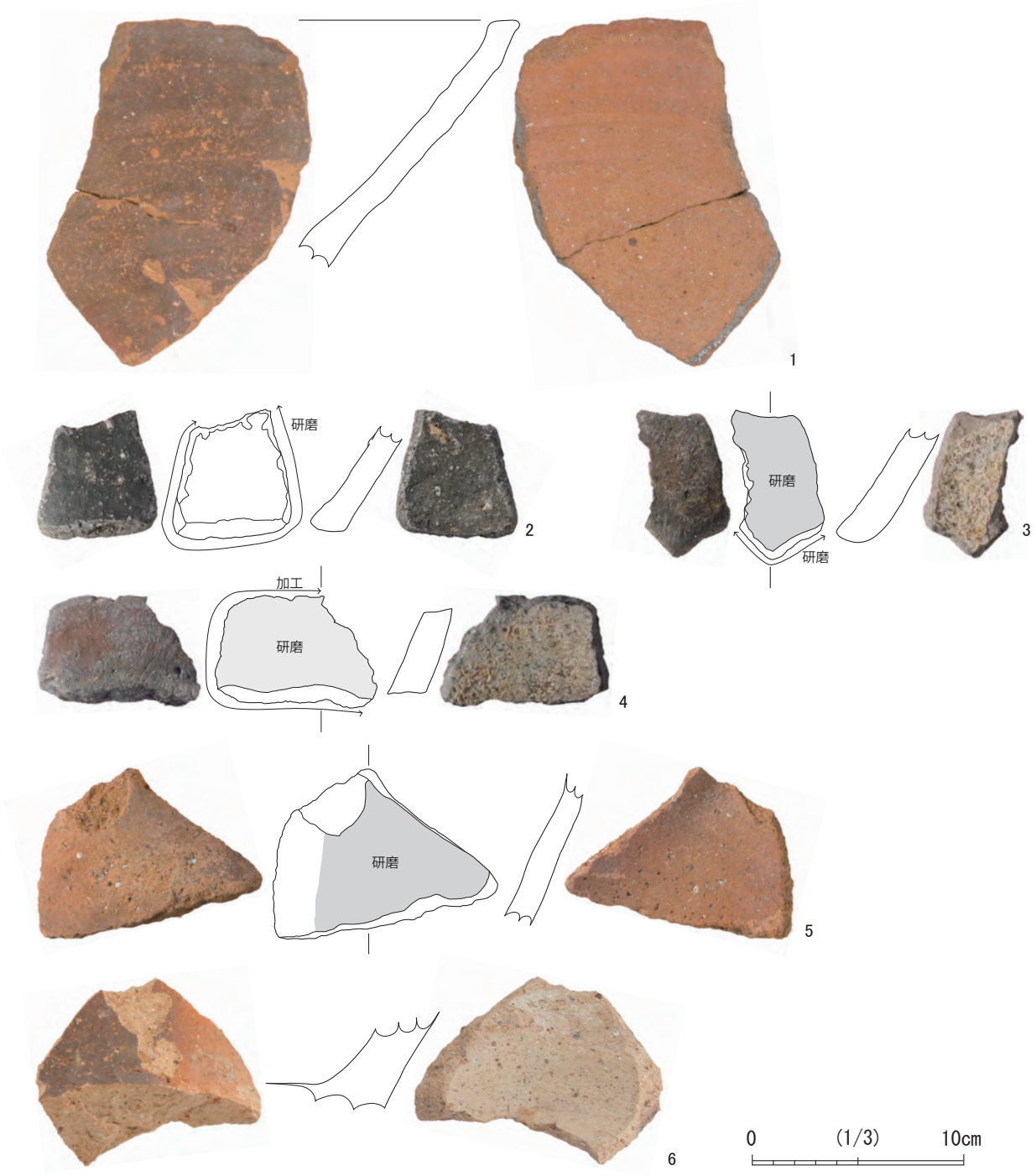
第 113 図 SE・SX・SK 配置図



SE01 土層注記

層No.	土 色		土 質	特 徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト粒をごく微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックを多量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト小ブロックを微量含む。
4	オリーブ黒色	5Y3/1	粘質シルト	黒褐色シルト小ブロックを少量、黒色粘土中ブロックを微量含む。
5	褐灰色	10YR4/1	砂	微粒砂主体。黒褐色・黄褐色粘土粒を少量含む。

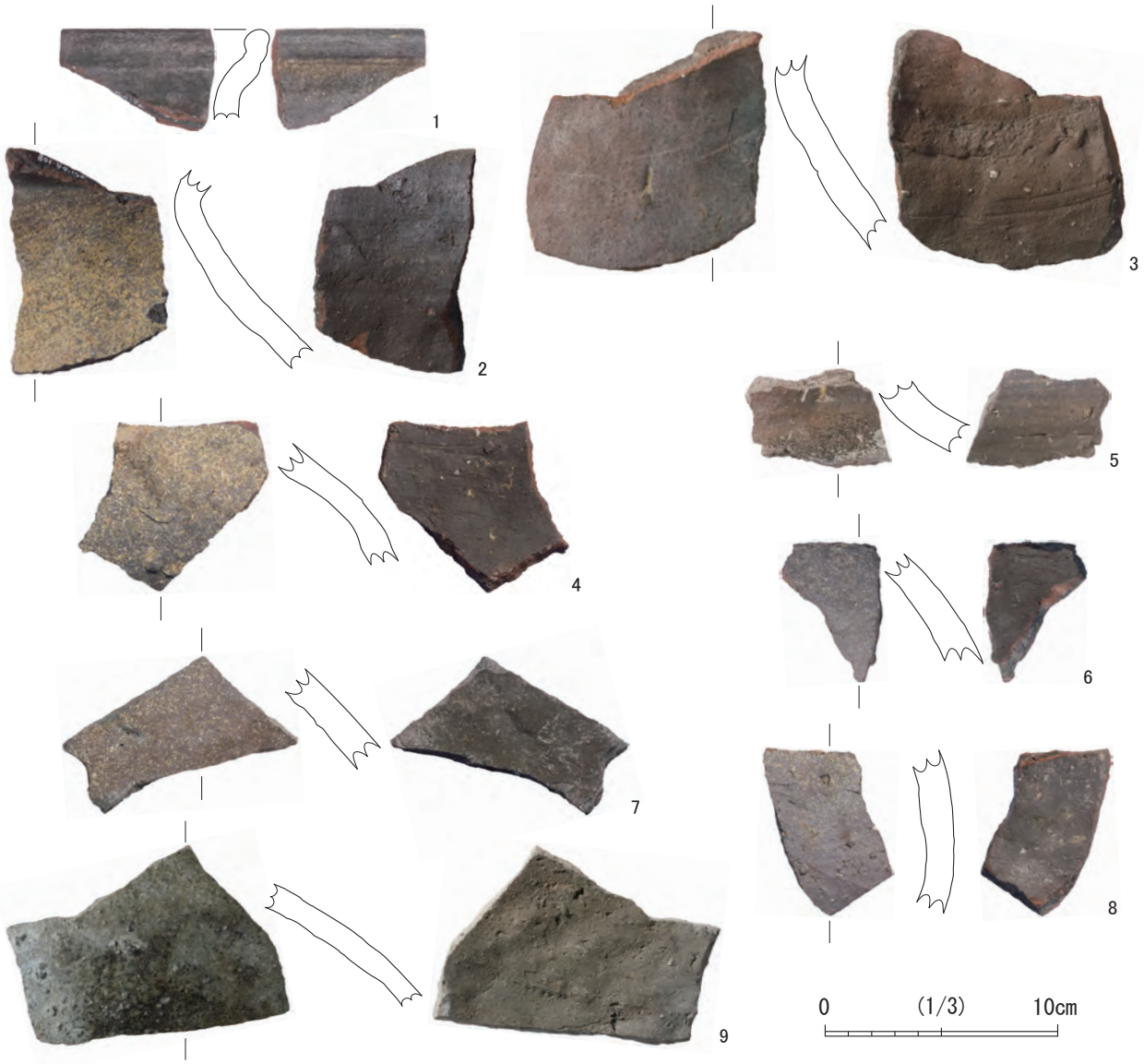
第 114 図 SE01、土層断面図



第 115 図　SE01 出土遺物1

第 64 表　SE01 出土遺物観察表1

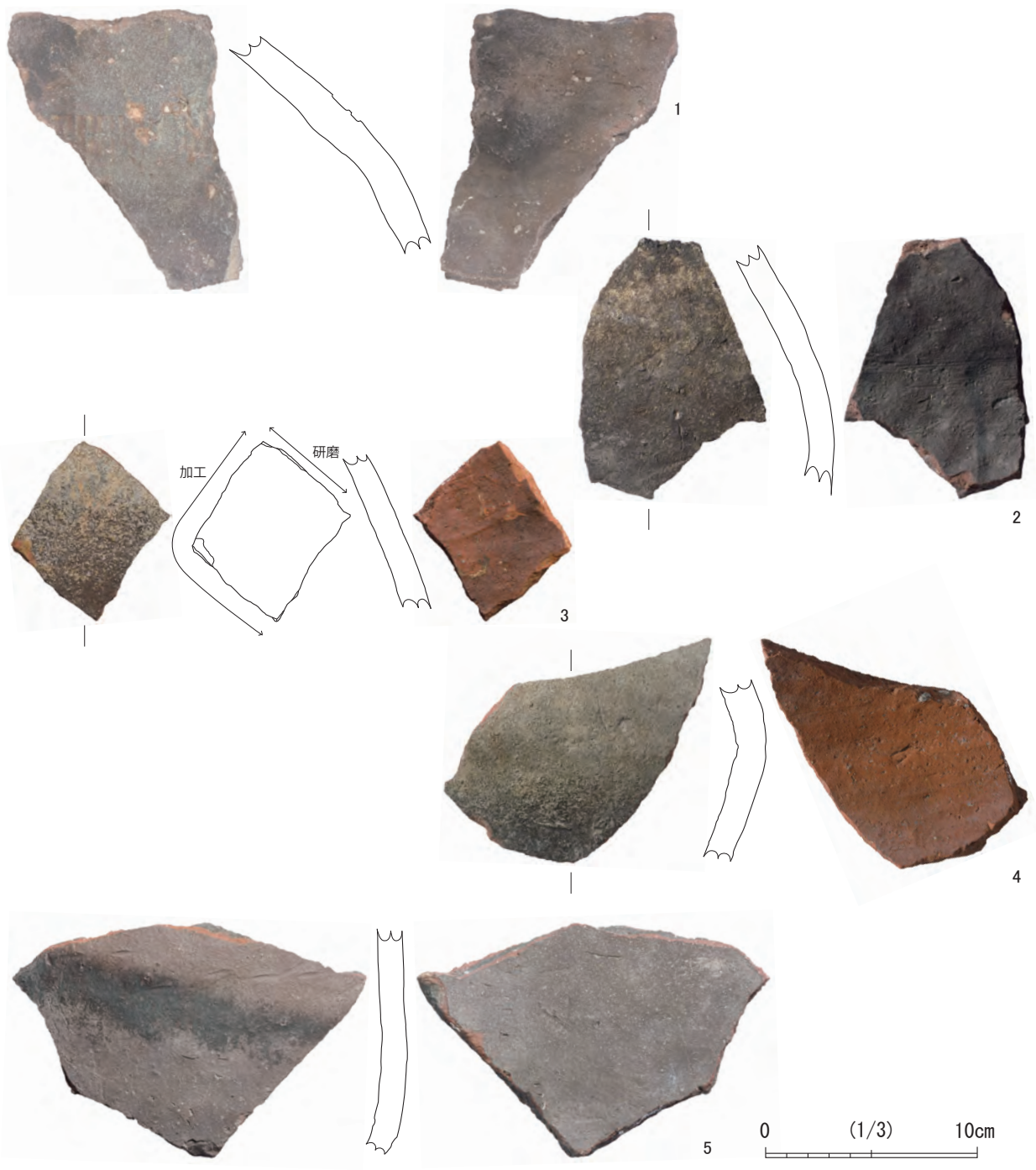
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高
1	SE01	陶器	片口鉢	白石	内面は明褐色。外面は褐灰色。胎土表面は明褐色で胎土内は灰色，砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			11.7
2	SE01	陶器	片口鉢	常滑か	内外面ともに灰色。胎土は灰色で白色大粒を含む。12 世紀～ 13 世紀。研磨土器に転用。	最大長 (5.75)	最大幅 (5.5)	最大厚 (1.6)
3	SE01	陶器	片口鉢	常滑か	外面は灰色。内面に自然釉付着。胎土は灰色で白色大粒を含む。外面全面研磨。研磨土器に転用。	最大長 (6.7)	最大幅 (3.9)	最大厚 (1.8)
4	SE01	陶器	片口鉢	白石か	外面は暗褐色。内面に自然釉付着。胎土は灰白色で粗く，砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(4.2)
5	SE01	陶器	片口鉢	白石	内外面ともににぶい褐色。胎土はにぶい橙色で砂粒を多く含む。内面磨滅。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (7.6)	最大幅 (10.7)	最大厚 (1.3)
6	SE01	陶器	片口鉢	白石か	内面はにぶい黄橙色。外面は灰褐色。胎土はにぶい黄橙色で白色粒，赤色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.7)



第 116 図 SE01 出土遺物2

第 65 表 SE01 出土遺物観察表2

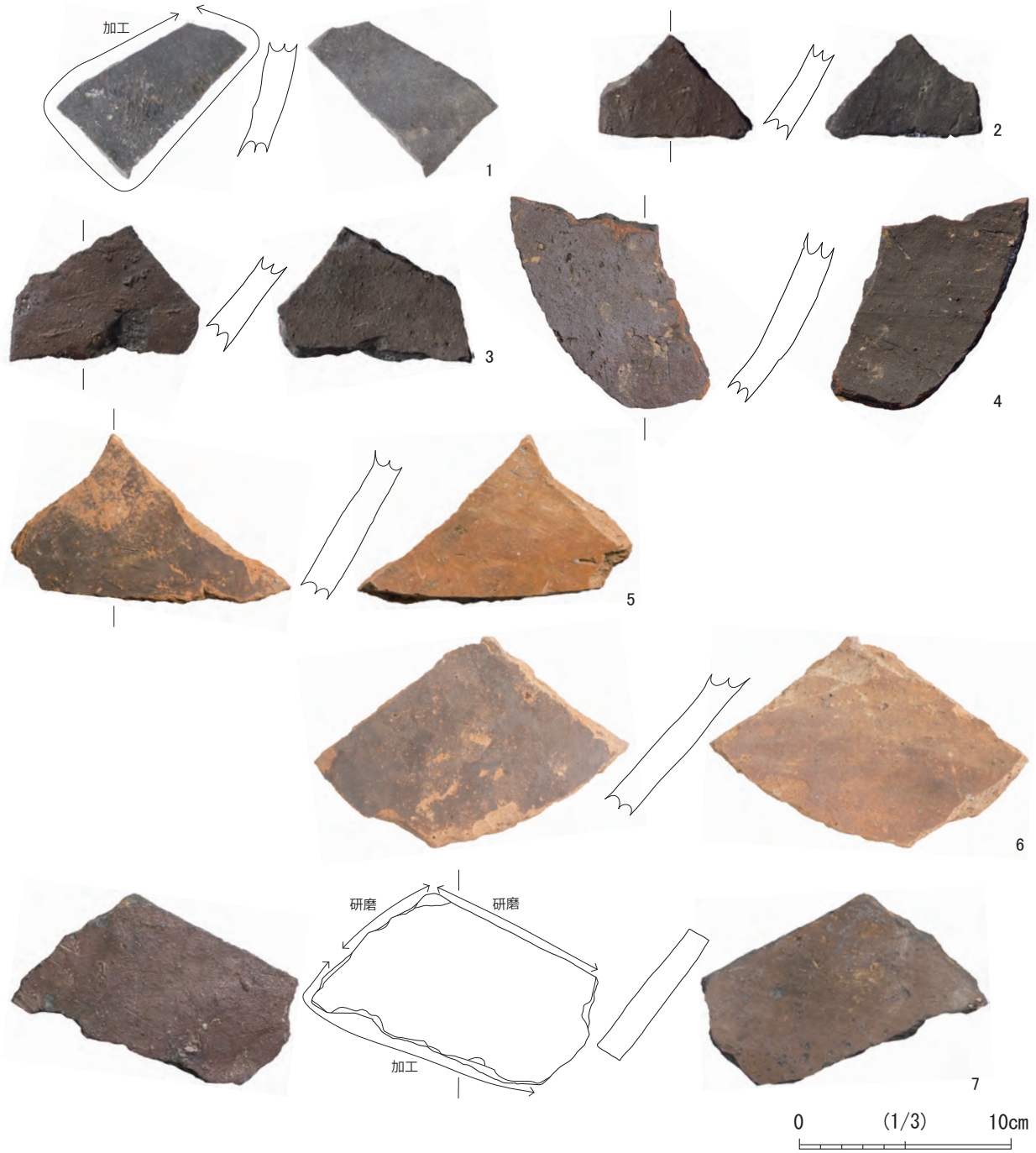
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに黒色。胎土は暗赤褐色で砂粒を少量含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(3.9)
2	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに赤灰色。外面に自然釉付着。胎土表面はにぶい赤褐色で胎土内は灰色。砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(8.6)
3	SE01	陶器	甕	白石	内面は灰赤色。外面は灰褐色。胎土表面は赤褐色で胎土内は褐灰色。白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(8.7)
4	SE01	陶器	甕	白石	内面は暗赤灰色。外面に自然釉付着。胎土は赤褐色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.2)
5	SE01	陶器	甕	常滑	内面は黄灰色。外面は灰褐色。胎土は黄灰色で白色大粒を含む。			(3.9)
6	SE01	陶器	甕	白石	内面は暗灰色。外面は灰色。胎土表面は灰赤色。胎土内は暗灰色。砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.7)
7	SE01	陶器	甕	白石	内外面は赤灰色。外面に自然釉付着。胎土は褐灰色で砂粒を含む。内外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.4)
8	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに赤灰色。胎土表面は灰赤色。胎土内は暗灰色。砂粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.0)
9	SE01	陶器	甕	白石	内面は黄灰色。外面に灰釉。胎土は黄灰色。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(8.1)



第 117 図　SE01 出土遺物3

第 66 表　SE01 出土遺物観察表3

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SE01 枠外	陶器	甕	白石	内外面ともに赤灰色。胎土は暗赤灰色で砂礫を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(11.7)
2	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに黒褐色。外面上半に自然釉付着。胎土表面はにぶい赤褐色。胎土内は暗灰色。砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(11.6)
3	SE01	陶器	甕	白石	内面はにぶい赤褐色。外面は暗赤灰色，自然釉付着。胎土は明赤褐色で白色大粒を含む。内外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(6.0)
4	SE01	陶器	甕	白石	内面は明赤褐色。外面は暗赤褐色，自然釉付着。胎土は赤色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(8.6)
5	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土表面はにぶい赤褐色。胎土内は灰色。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(8.5)



第 118 図 SE01 出土遺物4

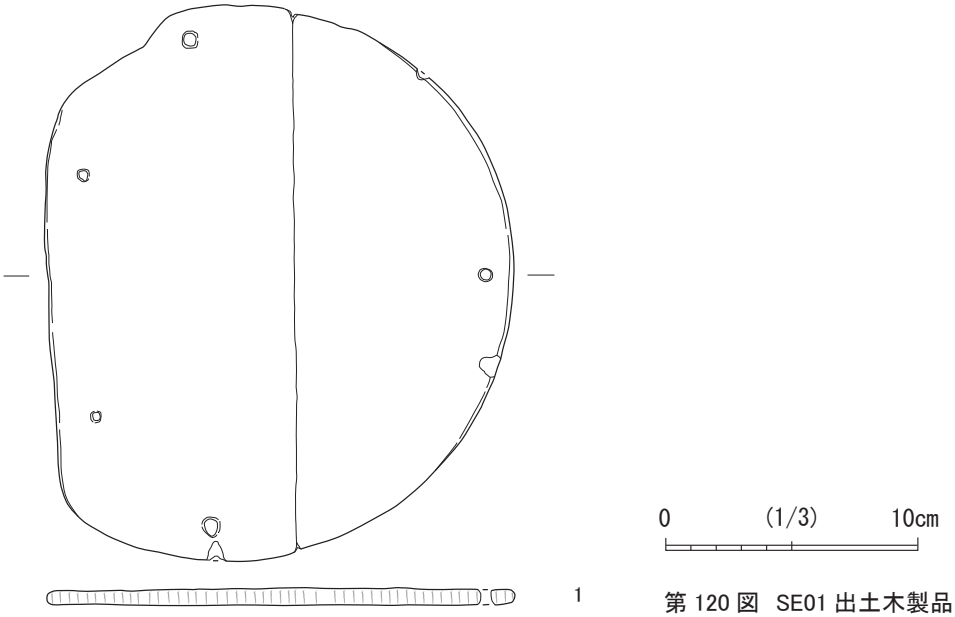
第 67 表 SE01 出土遺物観察表4

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰色。胎土は黄灰色。内面にロクロナデ。外面にタテ方向ナデ。周縁を加工している。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(5.4)
2	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土は黒褐色で砂粒を多く含む。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.5)
3	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土は褐灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.5)
4	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに黒褐色。胎土表面はにぶい赤褐色。胎土内は暗灰色。砂粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(8.0)
5	SE01	陶器	甕	白石	内面はにぶい橙色。外面は灰褐色。胎土はにぶい橙色で砂粒を含む。内面に斜方向ナデ。外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.0)
6	SE01	陶器	甕	白石	内面は灰褐色。外面は褐灰色。胎土はにぶい黄橙色で砂粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.7)
7	SE01	陶器	甕	白石	内面は灰褐色。外面は赤灰色。胎土は暗灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (7.4)	最大幅 (12.9)	最大厚 (1.3)

第 119 図　SE01 出土遺物5

第 68 表　SE01 出土遺物観察表5

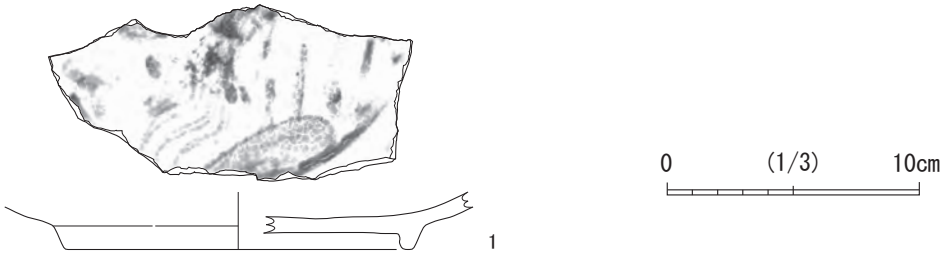
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土表面はにぶい橙色。胎土内はにぶい黄橙色。13 世紀後半～14 世紀前半。			(10.5)
2	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は褐灰色で砂粒(特に白色粒)を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(10.4)
3	SE01	陶器	甕	白石	内外面ともに黒褐色。内面下半に自然釉付着。胎土表面はにぶい赤褐色。胎土内は暗灰色。砂粒を多く含む。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(12.5)
4	SE01 掘方	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土表面は暗灰褐色。胎土内は赤褐色，砂粒を少量含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。	21.2		(11.0)



第 120 図 SE01 出土木製品

第 69 表 SE01 出土木製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	特 徴	残 存	法 量(cm)			樹 種
						長さ	幅	厚さ	
1	SE01	木製品	曲物底板	再利用品か。周囲に5個の貫通孔あり。柾目材。	底板 2/3	22.1	18.7	0.7	針葉樹



第 121 図 SE02 出土遺物

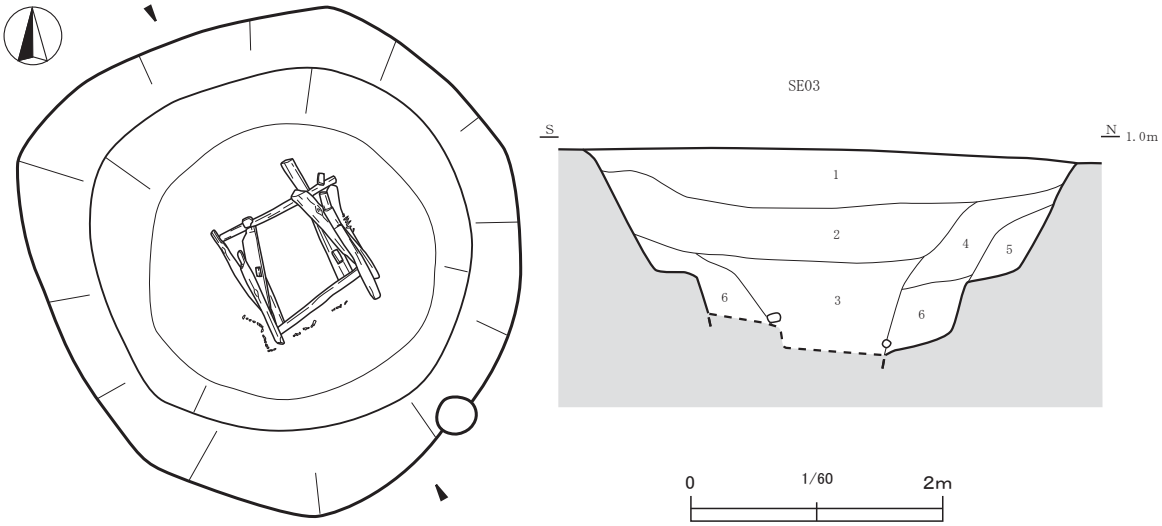
第 70 表 SE02 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SE02	陶器	皿	漳州窯	内外面ともに灰白色。胎土はにぶい黄橙色で軟質。内面に呉須絵。高台に砂目。16 世紀後半～ 17 世紀中頃。		13.8	(2.3)

SE03（第 113・122・123 図、第 71 表）

素掘りの井戸で、下部に廃材を転用したと考えられる水溜が存在する。SD02・07と重複し、いずれよりも新しい。平面形状は円形を呈し、規模は長軸 3.9 m、短軸は 3.8m を測る。断面形状は漏斗状を呈する。確認面より 1.6m 下で確認した水溜施設の上部までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。水溜施設はホゾ穴が穿たれた長さ 0.9 ～ 1.1 mに切りそろえた廃材を横位に積み上げ、その外側には湧水を濾過するためか葦を密に立て並べている。堆積土は6層に分層できるが、3～6層の堆積の状況から本来はより上位まで井戸枠が存在していた可能性も考えられる。井戸廃棄後に堆積した1・2層を含め、すべて人為的埋土である。

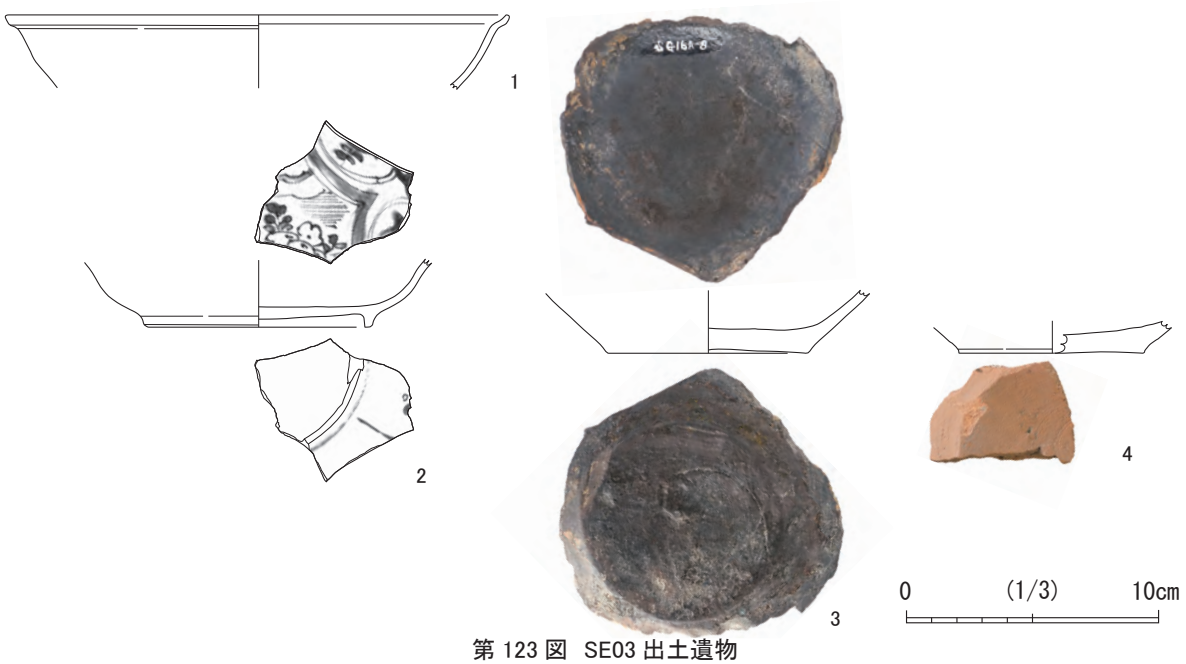
第 123 図は SE03 出土遺物である。1･2 は青花磁器である。8 分割した文様区画をもつ芙蓉手のなかでも、桃果形の文様区画をもつ明山手である。17 世紀前半。3・4 はロクロ成型のかわらけである。3 は特に口径の大きな皿で、内外面に厚く油煙痕と炭化物が付着している。



SE03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	灰白色粘土ブロックをやや多く、炭化物を少量含む。
2	オリーブ黒色	5Y3/1	粘質シルト	灰白色粘土大ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	灰白色粘土小ブロック・褐灰色粘土大ブロックを微量含む。
4	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	灰白色粘土粒を微量含む。
5	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	灰色粘土中ブロックを多量含む。
6	黒褐色	10YR3/1	粘土	灰色粘土大ブロックを極めて多量含む。

第 122 図　SE03、土層断面図



第 123 図　SE03 出土遺物

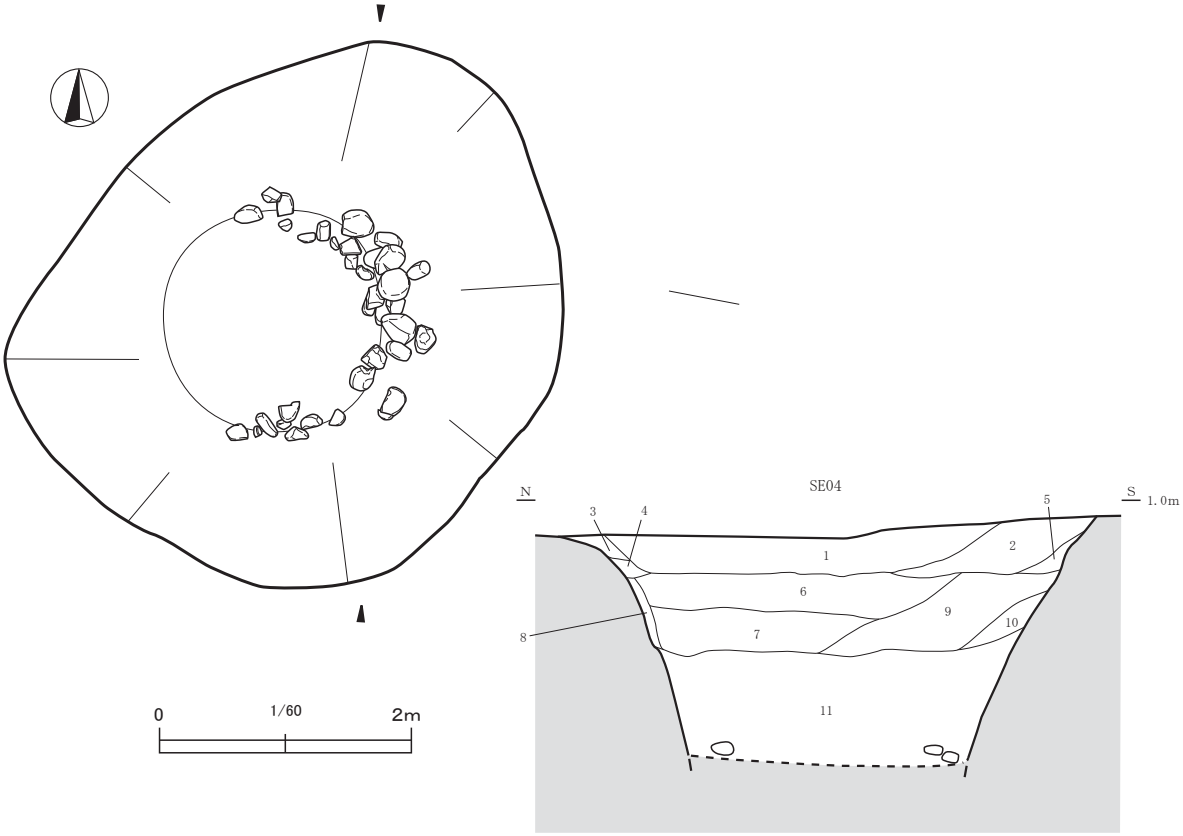
第 71 表　SE03 出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SE03	青花磁器	皿	中国	芙蓉手（明山手）。内面に草花文。17 世紀前半。	(20.0)	(8.9)	(2.9)
2	SE03	青花磁器	皿	中国	芙蓉手（明山手）。内面に草花文。17 世紀前半。		(8.6)	(2.7)
3	SE03	かわらけ		不明	ロクロ使用。底部外面回転糸切り。内外面全体に厚く油煙痕と炭化物が付着。		8.0	2.5
4	SE03	かわらけ		不明	ロクロ使用。底部外面は回転糸切り。底部内面はロクロナデ。内外面ともに明黄褐色。胎土はにぶい橙色。		7.2	(1.25)

SE04（第 113・124 ～ 126 図、第 72・73 表）

SD02・07と重複し、いずれよりも新しい。素掘りの井戸で、平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸 4.5 m、短軸は 3.7m を測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より 1.9 m 下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。掘り下げ中に東側を中心に人頭大の礫の集中が認められているが、明確な石の積み上げはみられない。堆積土は 11 層に分層でき、すべて人為的埋土である。

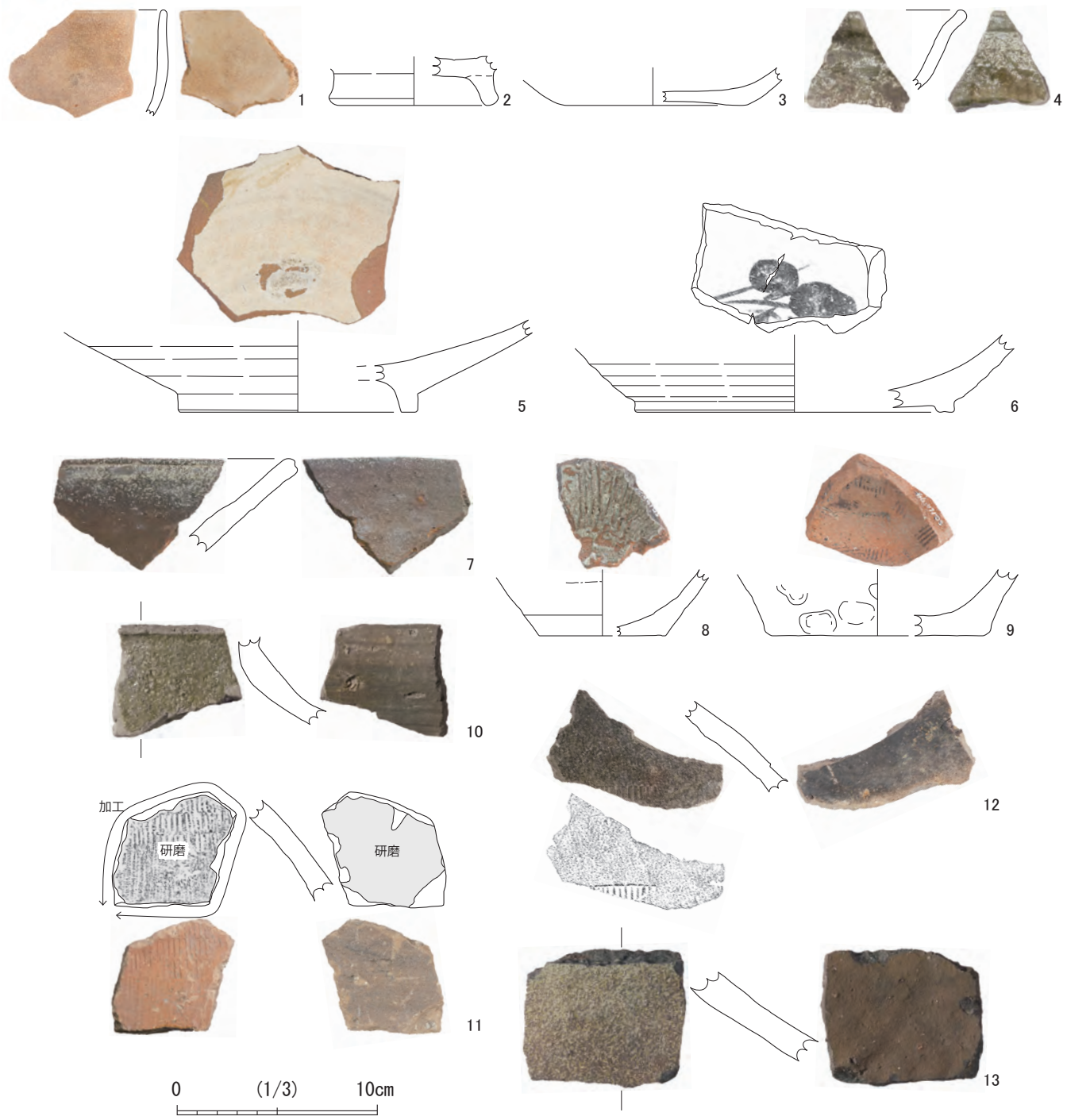
第 125・126 図は SE04 出土遺物である。第 125 図 1 は肥前陶器の呉器手碗で 17 世紀後半。2 は山茶碗で 12 世紀前半。3 はロクロ成型のかわらけ、4 は瀬戸美濃産折縁皿で 16 世紀後半。5 は肥前産の陶器鉄絵皿。6 は瀬戸美濃産鉄絵皿で 17 世紀末～ 18 世紀初頭。7・8・9・13 は白石産陶器で 13 世紀後半～ 14 世紀前半、10 ～ 12 は常滑産陶器で 12 世紀中頃から 14 世紀。第 126 図は 1 ～ 7 が白石産陶器で 13 世紀前半～ 14 世紀前半。8 は常滑産陶器で 12 世紀後半～ 13 世紀前半。



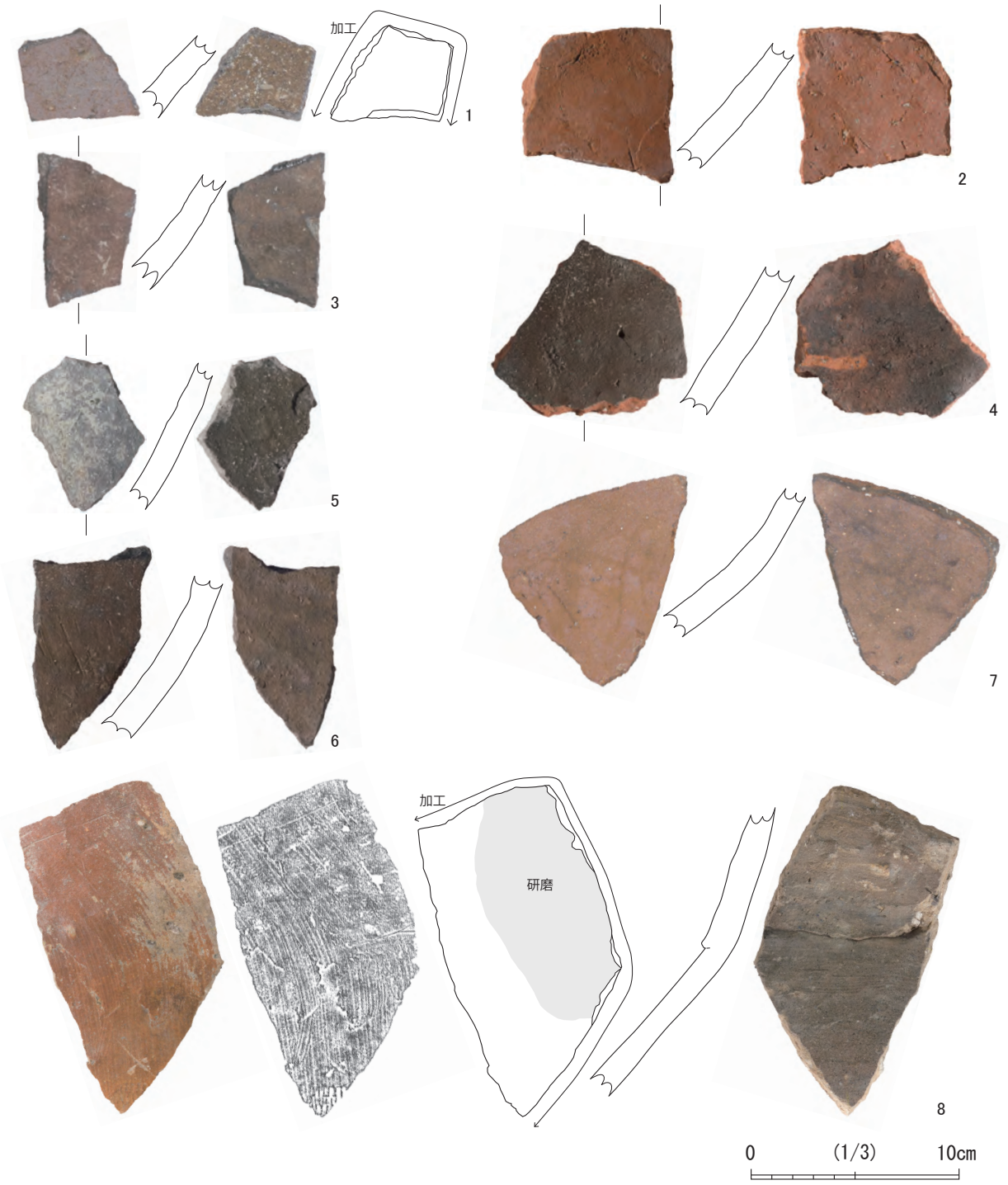
SE04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く含む。マンガンを下位に集積。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト小ブロックを多量、焼土粒を少量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	黄橙色シルト粒を少量含む。
4	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト粒をやや多く含む。
5	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	灰白色シルト小ブロックをやや多く、黄橙色シルト粒を少量含む。
6	黒褐色	10YR3/1	シルト	灰色粘土中ブロックをやや多く含む。
7	オリーブ黒色	5Y3/2	粘質シルト	灰色粘土大ブロックを少量含む。
8	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	灰色粘土粒を多量含む。
9	黄灰色	2.5Y4/1	粘質シルト	灰色粘土大ブロックを多量、暗褐色シルト粒を微量含む。
10	オリーブ黒色	5Y3/1	シルト	褐灰色中粒砂をやや多く含む。暗褐色シルト粒をごく微量含む。
11	黒色	10YR2/1	粘土	人頭大の礫をやや多く含む。黄灰色砂を中ブロック状に少量含む。

第 124 図　SE04、土層断面図



第 125 図　SE04 出土遺物1



第 126 図 SE04 出土遺物2

第 72 表　SE04 出土遺物観察表1

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量 (cm)			写真番号
						口径	底径	器高	
1	SE04	陶器	碗	肥前	呉器手碗か。内外面浅黄色。胎土は淡黄色，精良。17 世紀後半。			(5.2)	
2	SE04	陶器	碗	山茶碗	山茶碗 1a 型式。12 世紀前半。	8.4	(7.7)	2.45	
3	SE04	かわらけ		不明	ロクロ使用。底部外面回転糸切り。内面やや磨滅。内面と体部外面に油煙痕。13 世紀中葉～ 14 世紀後半。		(9.0)	(1.9)	
4	SE04	陶器	皿	瀬戸美濃	折縁皿。内外面に灰釉。胎土は灰白色,精良。大窯第 3 段階。16 世紀後半。			(4.9)	
5	SE04	陶器	皿	肥前	外面は灰釉。内面は長石釉に鉄絵。胎土はにぶい褐色，精良。		12.0	(4.6)	
6	SE04	陶器	皿	瀬戸美濃	鉄絵皿。内面に長石釉（淡黄色），鉄絵。外面に灰釉（淡黄色）。胎土は淡黄色，精良，軟質。登窯第 2 段階第 6 小期。17 世紀末～ 18 世紀初。		16.0	(3.9)	
7	SE04	陶器	片口鉢	白石か	内外面ともに褐灰色。胎土は灰色。			(4.6)	
8	SE04	陶器	擂鉢	白石か	外面はにぶい褐色。胎土は灰色で砂粒を多く含む。内面に灰釉（まだら）。		6.4	(3.3)	
9	SE04	陶器	擂鉢	白石	内外面ともににぶい赤褐色。胎土は明赤褐色で白色大粒を含む。内面は使用により磨滅。13 世紀後半～ 14 世紀前半。		(12.0)	(3.3)	
10	SE04	陶器	甕	常滑	内面は黄灰色。外面に灰釉。胎土は褐灰色で白色粒を含む。6b ～ 8 型式。13 世紀後半～ 14 世紀。			(5.5)	
11	SE04	陶器	甕	常滑	内面は褐灰色。外面は橙色。胎土はにぶい黄橙色で白色大粒含む。第 1 段階 1b ～ 4 型式。12 世紀後半～ 13 世紀初頭。研磨土器に転用。			(5.2)	
12	SE04	陶器	甕	常滑	内外面ともに灰黄色。外面に自然釉付着。胎土は暗灰黄色で白色大粒を含む。第 1 段階 1b ～ 4 型式。12 世紀中頃～ 13 世紀初頭。			(4.5)	
13	SE04	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は灰色で砂粒（特に白色粒）を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.4)	

第 73 表　SE04 出土遺物観察表2

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量 (cm)			写真番号
						口径	底径	器高	
1	SE04	陶器	甕	白石	内面は灰黄褐色。外面はにぶい赤褐色。胎土は黄灰色で砂粒を多量に含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(4.0)	
2	SE04	陶器	甕	白石	内外面ともににぶい赤褐色。胎土はにぶい赤褐色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.0)	
3	SE04	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は暗灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。			(5.5)	
4	SE04	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土は明赤褐色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.1)	
5	SE04	陶器	甕	白石	内面は黄灰色。外面は灰色。胎土は灰色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.0)	
6	SE04	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は灰黄色で砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.8)	
7	SE04	陶器	甕	白石	内面は灰赤色。外面はにぶい赤褐色。胎土は黒褐色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(9.35)	
8	SE04	陶器	甕	常滑か	内面は褐灰色。外面は橙色。胎土は灰黄褐色で砂礫を含む。第 1 段階 1b ～ 4。12 世紀後半～ 13 世紀前半。研磨土器に転用。			(15.9)	

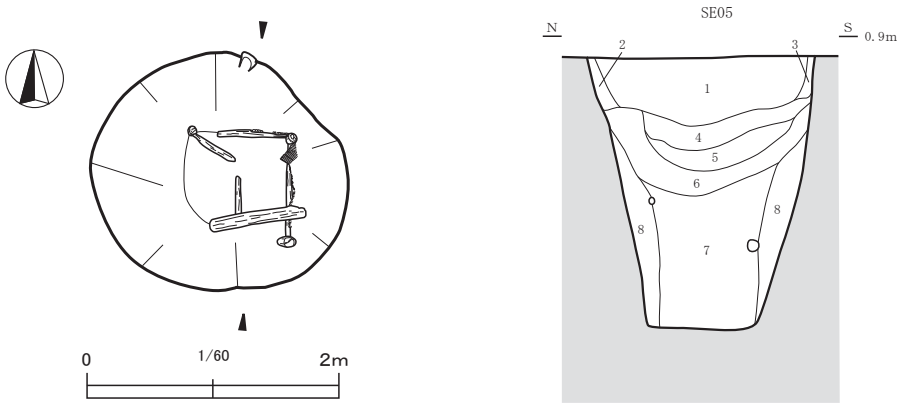
SE05（第 113・127 図）

SB09・SD02と重複し、いずれよりも新しい。井戸枠を伴う井戸跡である。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸 2.1 m、短軸は 1.8m を測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より 2.1 m 下で底面を検出した。井戸枠の構造は隅柱の上位にホゾ穴を穿ち、横桟を取付けるものであり、側板のかわりに葦を立て並べている。堆積土は8層に分層でき、1～6層は人為的埋土、7層は自然堆積である。また8層は井戸枠の裏込めである。

SE06（第 113・128・133 図、第 74 表）

素掘りの井戸で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長軸 2.2 m、短軸は 2.1m を測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より 1.8 m 下で底面を検出している。堆積土は4層に分層でき、1～3層は人為的埋土、4層は自然堆積である。

第 128 図は SE06 から出土した木製品である。連歯下駄が1点出土している。台部は隅丸長方形で、鼻緒穴は円形であり、大きさから子供用と考えられる。木取りは板目材である。



SE05　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	灰白色シルト小ブロック・黄橙色シルト粒を多量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト粒を少量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	黄橙色シルト大ブロックを微量含む。
4	黒褐色	10YR3/1	シルト	黒色粘土中ブロックをやや多く含む。
5	褐灰色	10YR4/1	シルト	灰色粘土小ブロックをやや多く含む。
6	オリーブ黒色	2.5Y3/1	粘質シルト	灰色粘土小ブロックを少量含む。木片混入。
7	オリーブ黒色	5Y2/1	粘質シルト	灰色粘土大ブロックをやや多く含む。木片をやや多く混入。
8	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	灰色粘土粒を微量含む。

第 127 図　SE05、土層断面図

SE07（第 113・129・130 図、第 75 表）

井戸枠を伴う井戸跡である。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸 2.1 m、短軸は 1.8m を測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より 1.5m 下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。井戸枠は南東部が調査時にはすでに崩落していたが、確認面から 1.2 m下に存在するごく小規模な段に設けられている。その構造は長さ 45 ㎝ほどの隅柱の下部にホゾ穴を穿ち、長さ 80 ㎝ほどの横桟を取付ける。その後、長さ 30 ㎝ほどに切りそろえた竹を横桟の背後に側板のかわり立て並べ、竹の上部に長さ 100 ㎝ほどで径 10 ㎝前後の木材を「井」の字状に載せる。なお、この井戸枠の内部は径 100 ㎝ほどの円形に掘り抜かれている。堆積土は8層に分層でき、1～4層は人為的埋土、6・7層は井戸枠の裏込め、5・8層は自然堆積である。

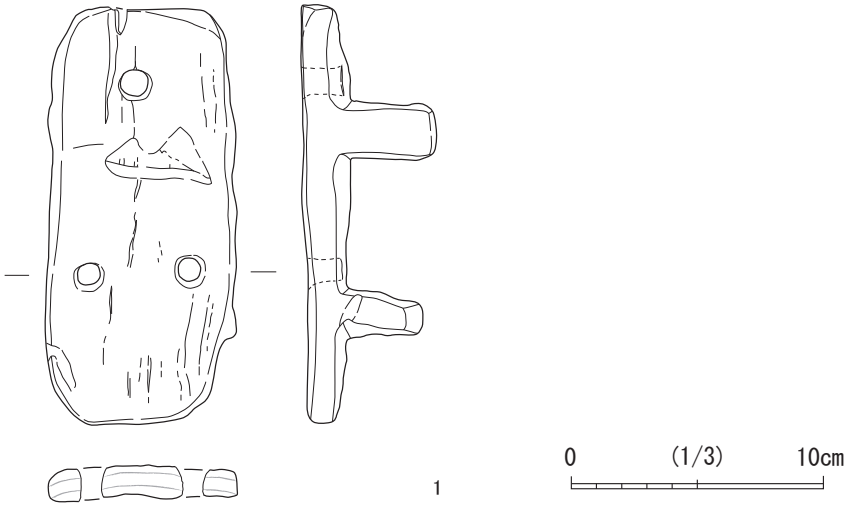
第 130 図は SE07 から出土した木製品である。漆器椀が 1 点、柄杓が1点出土している。漆器椀は全面が黒漆仕上げで、内外面と高台内面に赤漆文様が描かれている。柄杓は杓の部分のみで、側板の曲物は2枚のへぎ板を樹皮で縫い合わせている。底板の木取りは柾目材である。

SE08（第 113・133 図）

SD01と重複し、これより新しい。素掘りの井戸で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長軸 2.0 m、短軸は 1.8m を測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より 1.6 m 下で底面を検出している。堆積土は8層に分層でき、すべて人為的埋土である。

SE09（第 113・131・132 図、第 76 表）

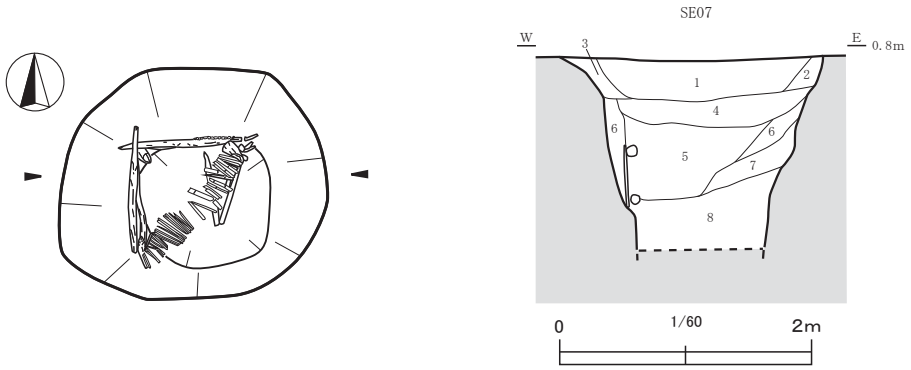
SD03と重複し、これより新しい。井戸枠を伴う井戸跡である。平面形状は楕円形を呈し、規模は長軸 2.3 m、短軸は 2.1m を測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より 2.4m 下で底面を検出している。井戸枠の構造は、最下部に直径 80 ㎝、高さ 70 ㎝ほどで底板を外した桶を設置し、その上部から高さ約 70 ㎝で、5～6段ほどの河原石を円形に積み上げている。堆積土は8層に分層でき、1～6層は人為的埋土、7・8層は井戸枠の裏込めである。



第 128 図　SE06 出土木製品

第 74 表　SE06 出土木製品観察表

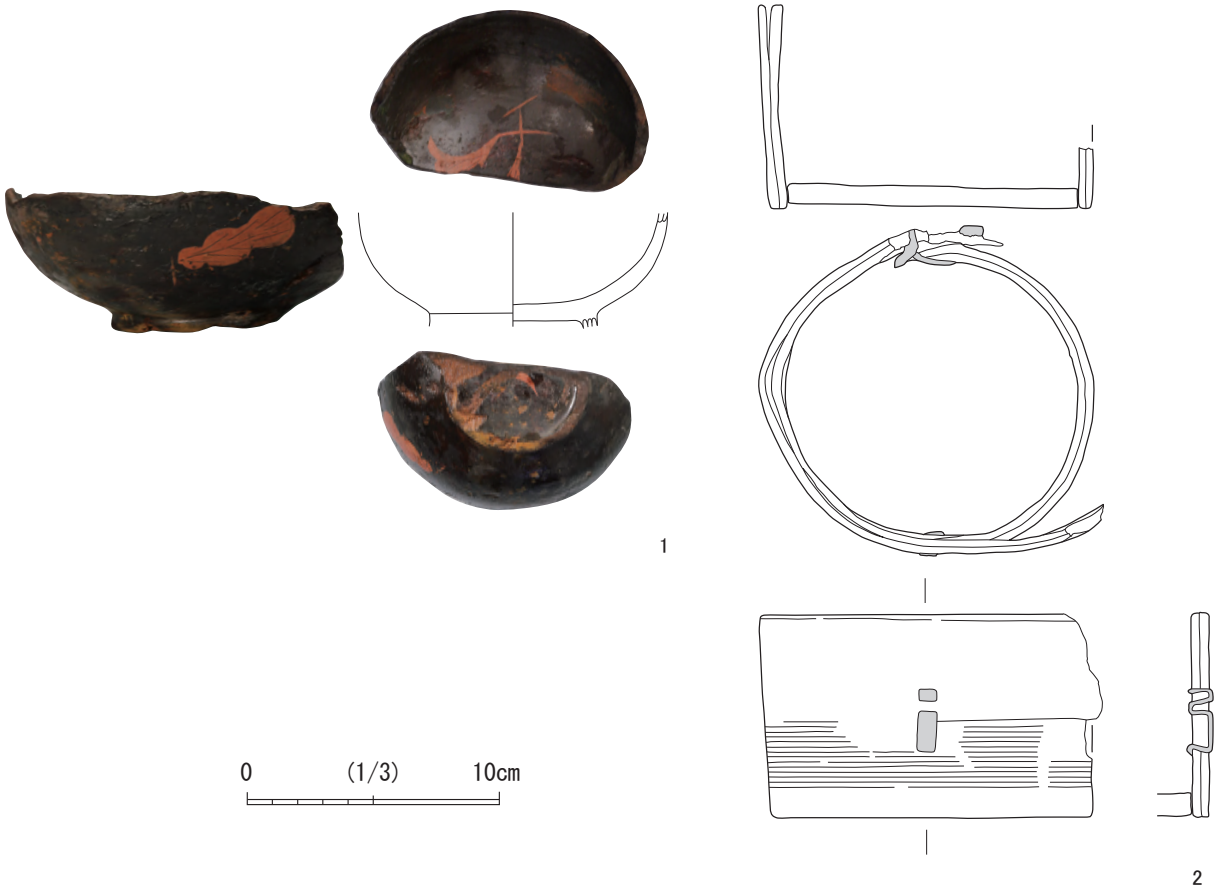
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	特　　徴	残　存	法　量(cm)			樹　種
						長さ	幅	厚さ	
1	SE06	木製品	連歯下駄	子供用か。板目材。	完存	16.6	7.5	5.3	クリ



SE07　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	褐灰色シルト小ブロックを微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	褐灰色シルト小ブロック・黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックを微量含む。
4	褐灰色	10YR4/1	シルト	灰白色シルト小ブロックを少量含む。
5	黒褐色	10YR3/1	シルト	灰白色シルト粒をごく微量含む。
6	褐灰色	10YR4/1	シルト	マンガンを中位に集積する。
7	褐灰色	10YR4/1	シルト	灰白色シルト中ブロックをやや多く含む。
8	黒褐色	10YR3/1	シルト	灰白色シルト粒をごく微量含む。

第 129 図　SE07、土層断面図



第 130 図 SE07 出土木製品

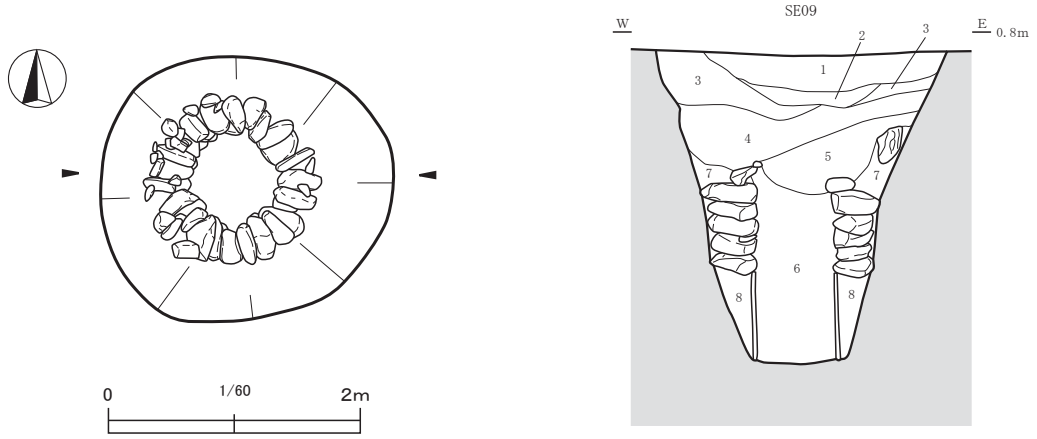
第 75 表 SE07 出土木製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	特 徴	残 存	法 量(cm)			樹 種
						口径	底径	器高	
1	SE07	木製品	漆器 椀	全面、黒漆(黒色)仕上げ。高台内面に赤漆文様。	体 部 1/2			(4.5)	ブナ属
2	SE07	木製品	柄杓	側板は曲物。2枚を樹皮で縫い合わせている。底板は柾目材。	杓 の 1/2	13.0	8.1	0.7	針葉樹

第 132 図は SE09 出土遺物である。1 は岸窯系陶器の擂鉢で 17 世紀末～ 18 世紀。2 は産地不明の瓦質土器の鉢である

SE10（第 113・133 図）

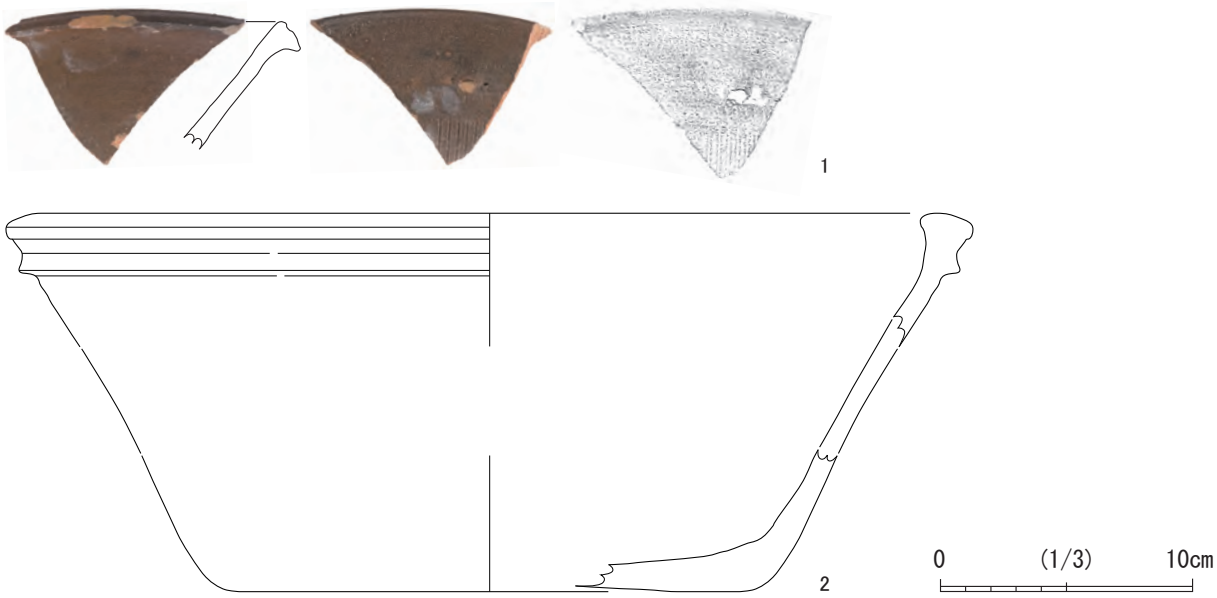
SD17と重複し、これより新しい。また北側の一部は調査区外へ展開する。素掘りの井戸で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長軸 2.8 m、短軸は 2.7m を測る。断面形状は漏斗状を呈し、確認面より 1.9 m 下で底面を検出している。堆積土は 14 層に分層でき、1～ 12 層は人為的埋土、13・14 層は自然堆積である。



SE09　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	灰白色シルト中ブロックを多量、黄橙色シルト粒をやや多く含む。
2	褐色	10YR4/4	砂	黒褐色粘土粒をやや多く、暗褐色シルト中ブロックを微量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	灰白色シルト中ブロックを少量含む。マンガンを下位に集積。
4	黒褐色	10YR3/1	シルト	灰色粘土小ブロックを少量、黒色粘土中ブロックを微量含む。
5	オリーブ黒色	5Y3/1	粘質シルト	黒色粘土中ブロックを少量含む。
6	黒色	10YR2/1	粘土	礫を少量、植物遺体を微量含む。
7	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
8	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	裏込めの人頭大～拳大の礫を多量含む。

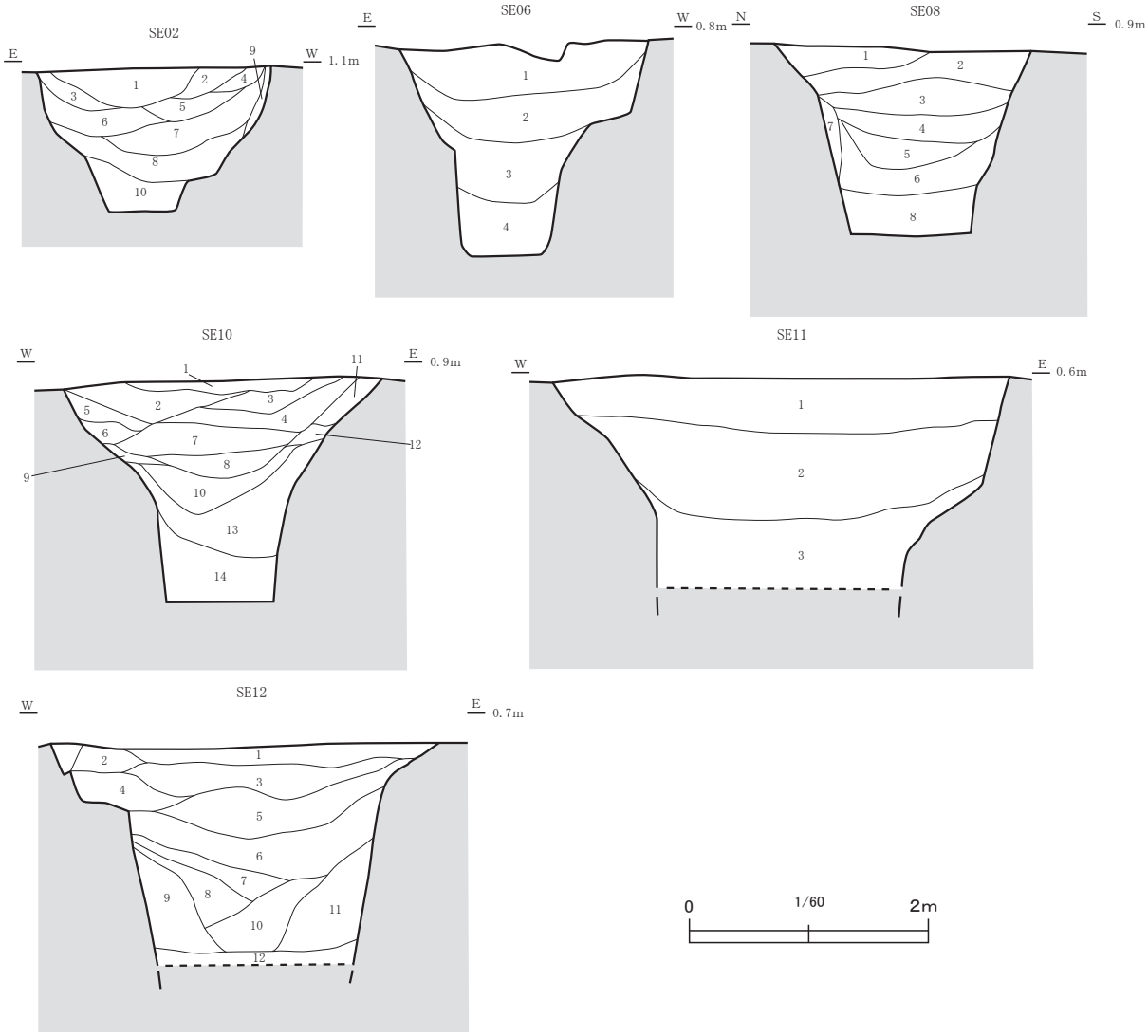
第 131 図　SE09、土層断面図



第 132 図　SE09 出土遺物

第 76 表 SE09 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SE09 中層	陶器	擂鉢	岸窯系	内外面に鉄釉。黒褐色。胎土は明褐色，精良。17 世紀末～ 18 世紀。			(5.05)
2	SE09 中層	瓦質土器	鉢	不明	内外面ともにオリーブ黒色。胎土は黄灰色で粗く，砂粒（特に白色粒）を多く含む。焼成不良。底部内面やや磨滅。	(38.4)	(21.2)	(15.0)



SE02 土層注記

層No.	土 色		土 質	特 徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト小ブロック・炭化物を少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト粒を多量、炭化物をやや多く含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを極めて多量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	シルト	炭化物を少量含む。
5	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト粒を極めて多量含む。
6	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを多量、炭化物を微量含む。
7	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	黄褐色シルト小ブロックを微量含む。
8	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	黄褐色シルト大ブロックを少量、炭化物を微量含む。
9	暗褐色	10YR3/3	シルト	黒褐色シルト粒を少量含む。
10	黒色	10YR2/1	粘土	黄褐色シルト大ブロックを少量含む。

SE06 土層注記

層No.	土 色		土 質	特 徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色砂質シルト・暗褐色粘質シルトを互層状にやや多く含む。
2	黒色	10YR2/1	粘質シルト	褐灰色砂質シルトの中ブロックを多量含む。
3	黒色	10YR2/1	粘質シルト	褐灰色砂質シルトの大ブロックを少量含む。
4	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	黒褐色粘質シルトを互層状に含む。

第 133 図 SE02・06・08・10・11・12 土層断面図

SE08　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く、炭化物・焼土粒をごく微量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックを微量含む。マンガンを下位に集積。
3	黒褐色	10YR3/1	シルト	灰白色シルト中ブロックをやや多く含む。
4	オリーブ黒色	5Y3/1	シルト	灰白色粘土小ブロックを少量含む。
5	オリーブ黒色	7.5Y3/2	粘質シルト	植物遺体をやや多く、灰白色粘土粒を微量含む。
6	黒褐色	2.5Y3/2	粘質シルト	灰白色粘土粒を微量含む。
7	オリーブ黒色	7.5Y3/1	粘土	灰白色粘土中ブロックをやや多く含む。
8	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	粘質シルト	黒褐色シルト中ブロックをやや多く含む。植物遺体の薄層を含む。

SE10　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	灰色粘土小ブロック・マンガンをやや多く含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト中ブロックを微量含む。
3	褐色	10YR4/4	シルト	灰色粘土小ブロック・黄褐色シルト中ブロックを少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	暗褐色粘土中ブロック・灰色粘土粒を少量含む。
5	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く含む。
6	にぶい黄橙色	10YR6/4	シルト	黒褐色シルト小ブロックを少量含む。
7	オリーブ黒色	7.5Y3/1	粘土	灰色粘土中ブロックを微量含む。上位にマンガンが集積。
8	オリーブ黒色	7.5Y3/1	粘土	下位に植物遺体の薄層を含む。
9	黒褐色	10YR3/2	粘土	褐色中粒砂を少量含む。
10	灰色	5Y4/1	粘土	黒褐色粘土大ブロックを少量含む。
11	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3	シルト	暗褐色シルト粒を少量含む。
12	にぶい黄橙色	10YR6/4	砂質シルト	黒褐色シルト中ブロックを微量含む。
13	灰色	7.55Y4/1	砂	灰オリーブ色粘土中ブロックをやや多く含む。
14	灰色	5Y4/1	粘土	植物遺体を微量含む。

SE11　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト	灰白色シルト大ブロックをやや多く、炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	植物遺体・褐灰色シルト中ブロックを多量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	褐灰色シルト大ブロックを多量、植物遺体を少量含む。

SE12　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	褐色	10YR4/4	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	黄褐色	10YR5/6	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く、黒褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	灰色粘土小ブロックを多量、褐灰色粘土小ブロックを少量含む。
4	褐灰色	10YR4/1	シルト	黒褐色シルト中ブロックを少量含む。
5	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黒褐色粘土小ブロックをやや多く、灰色粘土大ブロックを少量含む。
6	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	灰色粘土粒を多量、黒褐色粘土大ブロックを微量含む。
7	褐灰色	10YR4/1	粘質シルト	灰色粘土小ブロックを少量、黒褐色粘土大ブロックを微量含む。
8	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	灰色粘土中ブロックを少量含む。
9	黄灰色	2.5Y4/1	砂	細粒砂主体。灰黄褐色粘土中ブロックをやや多く含む。
10	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	黒褐色粘土大ブロックを少量含む。
11	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	植物遺体・褐灰色シルト中ブロックを多量含む。
12	灰色	7.5Y4/1	砂	灰オリーブ色粘土中ブロックをやや多く含む。

SE11（第 113・133・134 図、第 77 表）

素掘りの井戸で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長軸 3.8 m、短軸は 3.8m を測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より 1.8 m 下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第 134 図は SE11 出土遺物である。1 は青花磁器の皿で素描による草花文を描く。17 世紀後半か。2 は白石産陶器で 13 世紀後半～ 14 世紀前半。3 はロクロ成型のかわらけで口縁部に油煙痕と炭化物が付着している。

SE12（第 113・133・135 図、第 79 表）

SD18と重複し、これより新しい。素掘りの井戸で、平面形状は楕円形を呈する。規模は長軸 4.0 m、短軸は 3.1m を測る。断面形状は円筒形状を呈し、確認面より 1.9 m 下までの掘り下げを行ったが、湧水が激しいことから以下の調査は断念している。堆積土は 12 層に分層でき、1～ 11 層は人為的埋土、12 層は自然堆積である。

第 135 図は SE12 出土遺物である。1 はロクロ成型のかわらけで、内外面に厚く油煙痕が付着している。2 は白石産陶器で 13 世紀後半～ 14 世紀前半。

第 134 図 SE11 出土遺物

第 77 表 SE11 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SE11	青花磁器	皿	中国	見込に草花文。17 世紀後半か。		(7.2)	(0.95)
2	SE11	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに灰色。胎土は灰色で白色粒，黒色ガラス質粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(2.8)
3	SE11	かわらけ		不明	ロクロ使用。内外面，胎土いずれも橙色。全体的に磨滅。口縁部に油煙痕と炭化物付着。	(14.0)	8.4	2.9

第 78 表 平成 28 年度調査 井戸跡属性表

遺構名	構造	平面形	断面形	規模（m）	深さ（m）	堆積土	遺物	備 考	平面図	断面図
SE01	丸太刳り抜き	楕円形	漏斗	2.7 × 2.5	1.5	自然	常滑、白石、木製品		114	114
SE02	素掘	円形	漏斗	1.9 ×ー	1.2	自然→人為	貿易陶磁（漳州窯）	SD04 より古，SD05 より新	100	133
SE03	水溜	円形	漏斗	3.9 × 3.8	1.6 以上	人為	青花、肥前磁器、かわらけ	SD02・07 より新	122	122
SE04	石組？	楕円形	円筒	4.5 × 3.7	1.9 以上	人為	常滑、白石、山茶碗、肥前系磁器、肥前系陶器、瀬戸美濃、かわらけ	SD02・07 より新	124	124
SE05	隅柱＋横桟＋葦	楕円形	円筒	2.1 × 1.8	2.1	自然→人為		SB09・SD02 より新	127	127
SE06	素掘	楕円形	円筒	2.2 × 2.1	1.8	自然→人為	木製品		100	133
SE07	下位：素掘，上位：隅柱＋横桟＋竹		漏斗	2.1 × 1.8	1.5 以上	人為	漆器、木製品		129	129
SE08	素掘	楕円形	円筒	2.0 × 1.8	1.6 以上	自然→人為		SD01 より新	100	133
SE09	下位：桶，上位：石組	楕円形	漏斗	2.3 × 2.1	2.4	自然→人為	岸窯系陶器、瓦質土器	SD03 より新	131	131
SE10	素掘	楕円形	漏斗	2.8 以上× 2.7	1.9	自然→人為		SD17 より新	100	133
SE11	素掘	楕円形	円筒	3.8 × 3.8	1.8 以上	自然→人為	青花、瀬戸美濃、かわらけ		100	133
SE12	素掘	楕円形	円筒	4.0 × 3.1	1.9 以上	自然→人為	白石、肥前系陶器、かわらけ	SD18 より新	100	133

第 135 図　SE12 出土遺物

第 79 表　SE12 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SE12	かわらけ			ロクロ使用。底部外面は回転糸切り。底部内面はロクロナデのち一方向に一条ナデ。内外面全体に油煙痕が厚く付着する。13 世紀中葉～ 14 世紀後半。		8.4	(3.0)
2	SE12	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土表面は橙色。胎土内は褐灰色。4 辺を加工して四角に成形している。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (10.0)	最大幅 (8.5)	最大厚 (1.5)

3．護岸施設

SX01（第 113・136 ～ 144 図、第 80 ～ 87 表）

調査区北側に位置する。SD03と重複し、これより新しい。遺構は調査区北側へさらに展開するため部分的な検出に留まるが、確認できた範囲での最大幅は 7.7 m、最大長は 4.4 mである。確認面からの深さは 2.3 mを測る。この内部には礫・杭・桟木・竹・横板を用いて作られた東西 4.0 m、南北 1.2 m以上の区画がみられる。この施設の基本的な構築過程は以下の通りと考えられる。

①大きく掘削した内部に施設の前面を構成するための杭を打つ。

②打ち込んだ杭のうち、特定の杭の背後（70 ㎝前後）に控えのための杭を打つ。

③前列の杭のラインに平行して長さ 30 ～ 50 ㎝ほどの川原石を直立するように積み上げる。また石積みと並行して背後に拳大の礫による裏込めを行う。

④打ち込んだ前面の杭にホゾ穴を穿ち、幅 10 ㎝ほどの横板を上・中・下の3段に設置する。この横板の固定にはクリを主な材料とするクサビを使用する。

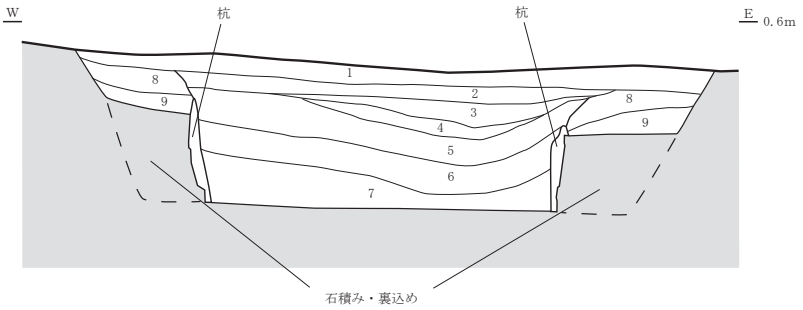
⑤杭と石積みの間に長さ 100 ㎝ほどに切りそろえた竹を密に立て縦位で並べる。

⑥前面の杭と控えの杭を連結するための部材を固定する。

⑦石積み・裏込めの部分に砂利混じりの土を敷き、搗き固める。

⑧使用時に前面の杭が内部に傾いた際、区画内部で補強のための杭を斜めに打ち込む。

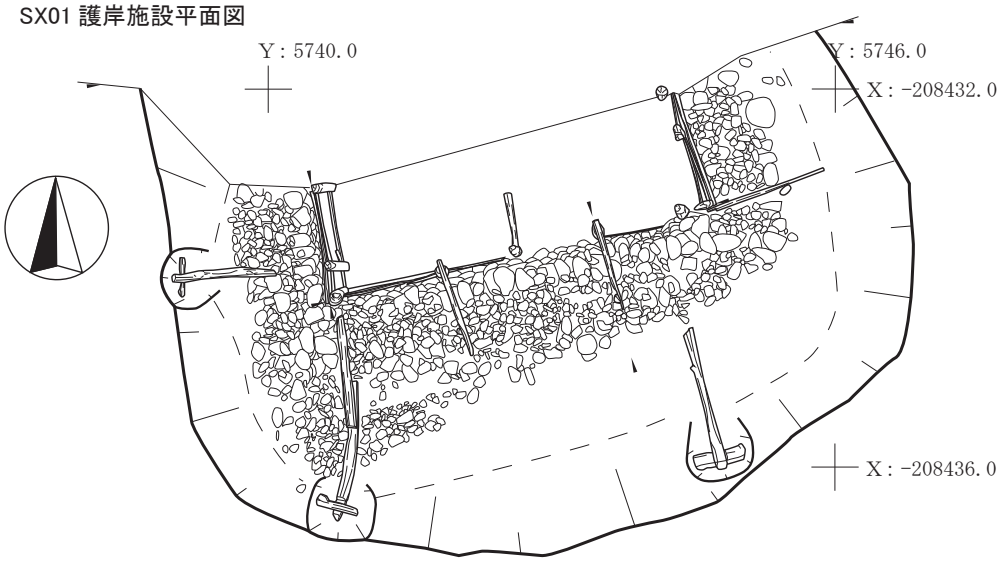
なお、⑥の部分では前面の杭の上部との固定には釘を用いるが、後方の控え杭には釘がみられないことから縄などを用いて固定したと考えられる。また⑦の作業前にさらに前面の杭が倒壊することを防ぐためと考



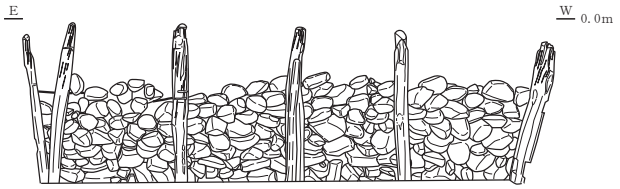
SX01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	黄褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	褐色シルト大ブロックを少量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
4	黒褐色	10YR3/1	シルト	灰オリーブ色シルト中ブロックをやや多く含む。
5	黒褐色	10YR3/1	シルト	灰オリーブ色シルト小ブロックをやや多く含む。
6				
7				
8	オリーブ黒色	5Y3/1	シルト	黒褐色シルト大ブロックを少量、植物遺体をやや多く含む。
9	オリーブ黒色	7Y3/1	シルト	黒褐色シルト中ブロックを少量含む。

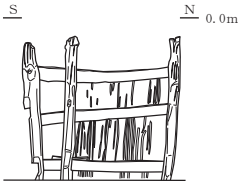
SX01 護岸施設平面図



0　1/80　5m



SX01 石積み立面図



SX01 竹・横桟検出状況立面図

SX01 石積み断面図

0　1/60　2m

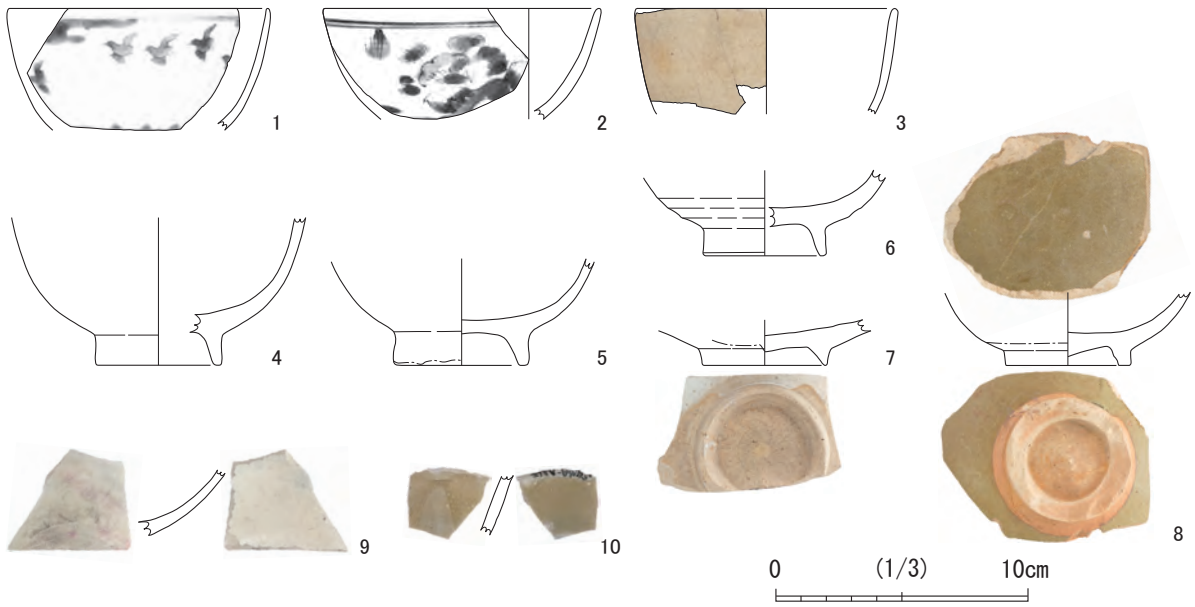
第 136 図　SX01

えられる控え材が3箇所で確認できたが、いずれも前面の杭までは達していなかった。

第 137 ～ 139 図は SX01 出土遺物である。第 137 図 1・2 は肥前産磁器碗で 17 世紀後半、3 ～ 8 は肥前産陶器碗で 17 世紀後半か。9 は陶器の碗で、灰白色の軟質の胎土に白色の釉を施す。京焼か。10 は龍泉窯系青磁碗で、太宰府編年では 13 世紀前後～ 13 世紀前半。138 図 1 は肥前産磁器皿で 17 世紀か。2 ～ 5 は瀬戸美濃産陶器皿で 16 世紀末～ 17 世紀前半。6 は京焼向付。7・8 は瀬戸美濃産鉄絵皿で 17 世紀。9 ～ 11 はロクロ成型のかわらけ。12 は肥前産の徳利で 17 世紀後半。第 139 図 1 は陶器の香炉口縁部。2 は岸窯系陶器擂鉢で 17 世紀末～ 18 世紀。断面の 3 辺を研磨に使用している。3 は産地不明の小型の擂鉢。4 は白石産陶器と考えられるが、外面に三つ巴文をヘラ書きする。5 は白石産陶器で断面の 3 辺と外面を研磨に使用する。13 世紀後半～ 14 世紀前半。6・7 は瓦質土器の甕。9 は岸窯系陶器の切立で 17 世紀後半～ 18 世紀。

第 140 ～ 144 図は SX01 から出土した木製品である。堆積土の上層、下層含めて、漆器 5 点、刀鞘1点、捏鉢1点、折敷1点、曲物底板 2 点、クサビ 11 点、部材や建築材6点、不明木製品3点が出土している。

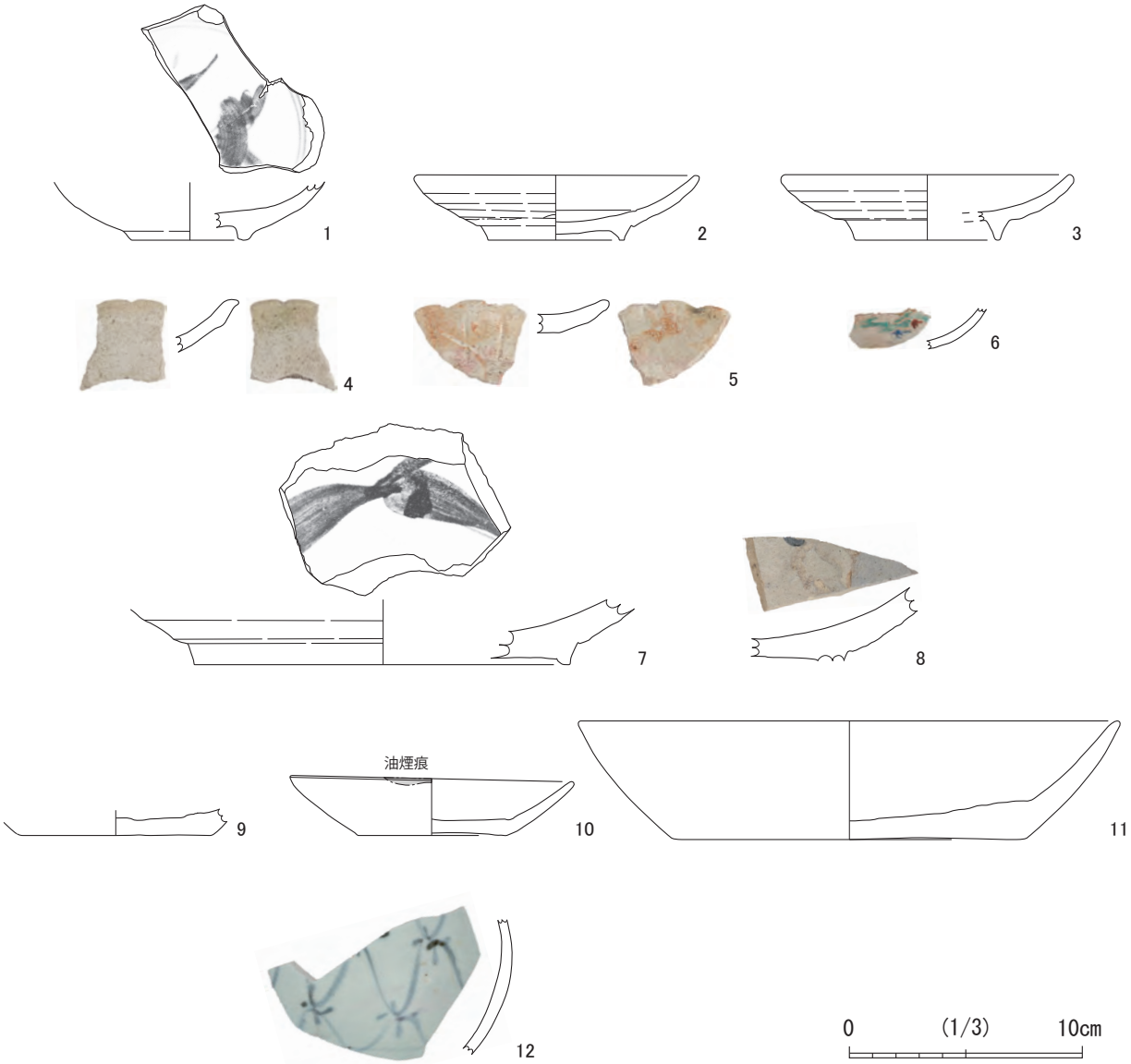
椀蓋で全体がわかる第 140 図 1 は全面が赤漆仕上げの極めて器厚が薄いものである。漆器椀の身では、全体が復元できる 3 は腰丸で口縁端部に軽い段をもつもので、底部は薄い。外面は黒漆、内面は褐色漆で文様はなく、高台底面に漆が塗られた後の「一」の線刻が認められる。4 は内外面赤漆仕上げで、高台内面は黒漆に赤漆文様が描かれている。5 は黒漆の高台底面に赤漆の壺の文様が描かれている。6 の折敷は縁部の一部で、全面暗赤褐色漆が塗られ、台部への接合部には接着用とみられる漆が付着している。



第 137 図　SX01 出土遺物 1

第 80 表　SX01 出土遺物観察表 1

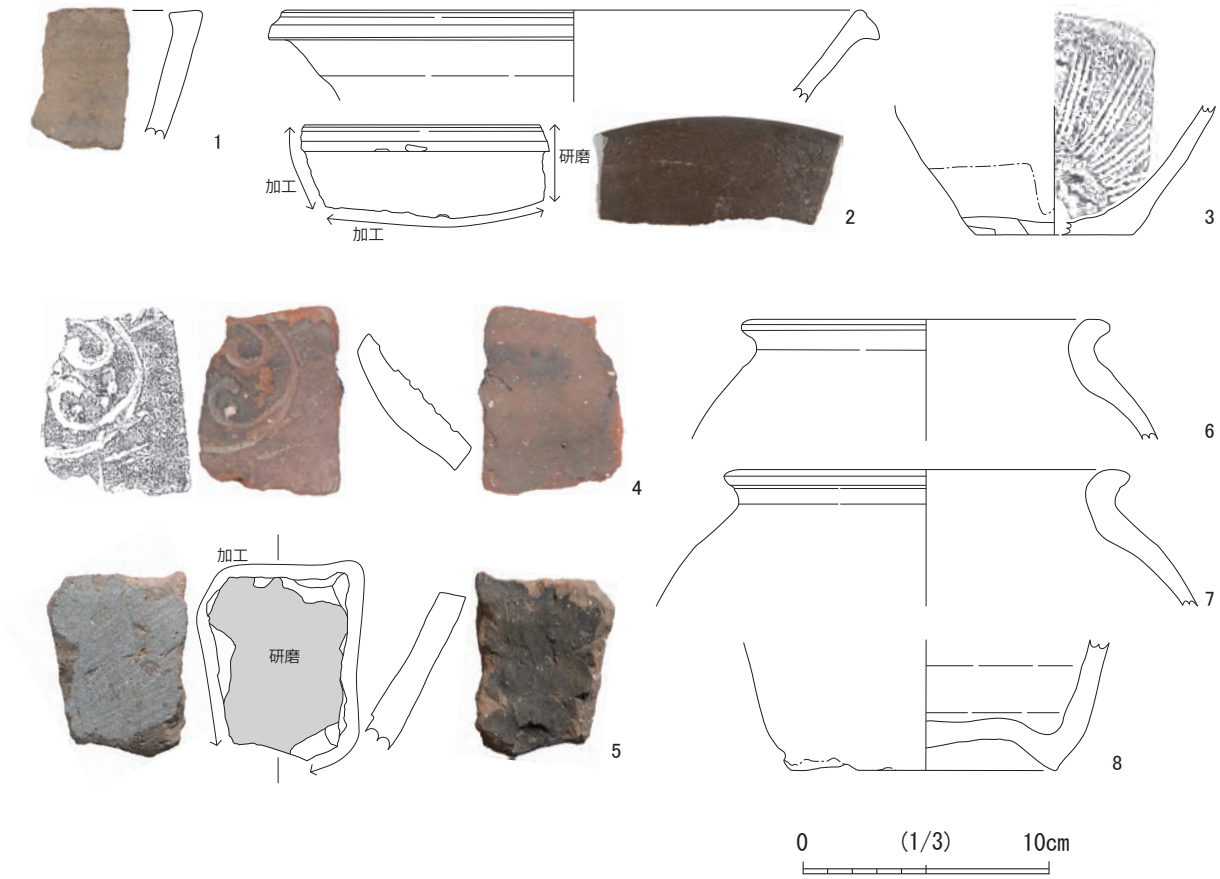
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SX01	染付磁器	碗	肥前	丸碗。17 世紀後半か。	(10.4)		(4.85)
2	SX01	染付磁器	碗	肥前	丸碗。17 世紀後半。	(11.0)		(4.4)
3	SX01	陶器	碗	肥前	呉器手碗。内外面に灰釉（淡黄色）。胎土は灰黄色，精良，軟質。17 世紀後半。	10.4		(4.2)
4	SX01	陶器	碗	肥前	呉器手碗？内外面に灰釉（浅黄色）。胎土は灰黄色，精良。17 世紀後半か。		5.0	(5.85)
5	SX01 上層	陶器	碗	肥前	呉器手碗。内外面に灰釉。胎土は灰白色。17 世紀後半。		5.2	(4.25)
6	SX01	陶器	碗	肥前	呉器手碗。内外面に灰釉。胎土は灰黄色。17 世紀後半。		4.8	(3.4)
7	SX01	陶器	碗	肥前か	見込は蛇目釉剥。内外面に白色釉（灰白色）。胎土はにぶい黄橙色，精良。		5.0	(1.8)
8	SX01	陶器	碗	肥前	丸碗。内外面に灰釉（灰オリーブ色）。胎土はにぶい黄橙色，精良。17 世紀。		(5.0)	(2.9)
9	SX01 上層	陶器	碗	京焼か	内外面に白色釉（灰白色）。胎土は灰白色，軟質，精良。			(2.65)
10	SX01	青磁	碗	龍泉窯系	片彫蓮弁文。太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。13 世紀前後～ 13 世紀前半。			(2.5)



第 138 図 SX01 出土遺物 2

第 81 表 SX01 出土遺物観察表 2

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SX01	染付磁器	皿	肥前	17 世紀。		(5.0)	(2.5)
2	SX01	陶器	皿	瀬戸美濃	志野丸皿。内外面に長石釉（浅黄色）。胎土は精良，灰白色。登窯第 1 段階第 2 小期。17 世紀前半。	12.3	5.9	2.8
3	SX01	陶器	皿	瀬戸美濃	灰釉丸皿。内外面に灰釉（オリーブ黄色）。胎土は灰色，精良。登窯第 1 段階第 2 小期。17 世紀前半。	(12.6)		2.8
4	SX01	陶器	皿	瀬戸美濃	志野菊皿。内外面に長石釉。胎土は灰白色，精良，軟質。大窯第 4 段階。16 世紀末～17 世紀初。			(1.7)
5	SX01	陶器	皿	瀬戸美濃	志野菊皿。内外面に長石釉。胎土は灰白色，精良，軟質。大窯第 4 段階。16 世紀末～17 世紀初。			(1.4)
6	SX01	陶器	向付	京焼	内外面は化粧土に透明釉（灰白色）。胎土は淡黄色，軟質，精良。			(1.7)
7	SX01 上層	陶器	鉢	瀬戸美濃	鉄絵鉢。内面に鉄絵。削り出し高台。登窯第 1 段階第 3 ～ 4 小期。17 世紀後半。		(16.2)	(2.8)
8	SX01	陶器	皿	瀬戸美濃	鉄絵皿。内外面に長石釉(灰白色)。胎土は浅黄色，精良。登窯第 1 ～ 2 小期。17 世紀前半。			(3.2)
9	SX01 下層	かわらけ			ロクロ使用。底部外面は回転糸切り。底部内面はロクロナデ，油煙痕あり。		(8.2)	(1.1)
10	SX01 下層	かわらけ			ロクロ使用。底部外面は回転糸切り。底部内面はロクロナデ。油煙痕あり。	12.1	6.4	2.6
11	SX01 下層	かわらけ			ロクロ使用。底部外面は回転糸切り。底部内面はロクロナデ。底部内面に油煙痕。	(23.0)	15.0	5.1
12	SX01	染付磁器	徳利か瓶	肥前	17 世紀後半。			(5.8)



第 139 図　SX01 出土遺物 3

第 82 表　SX01 出土遺物観察表 3

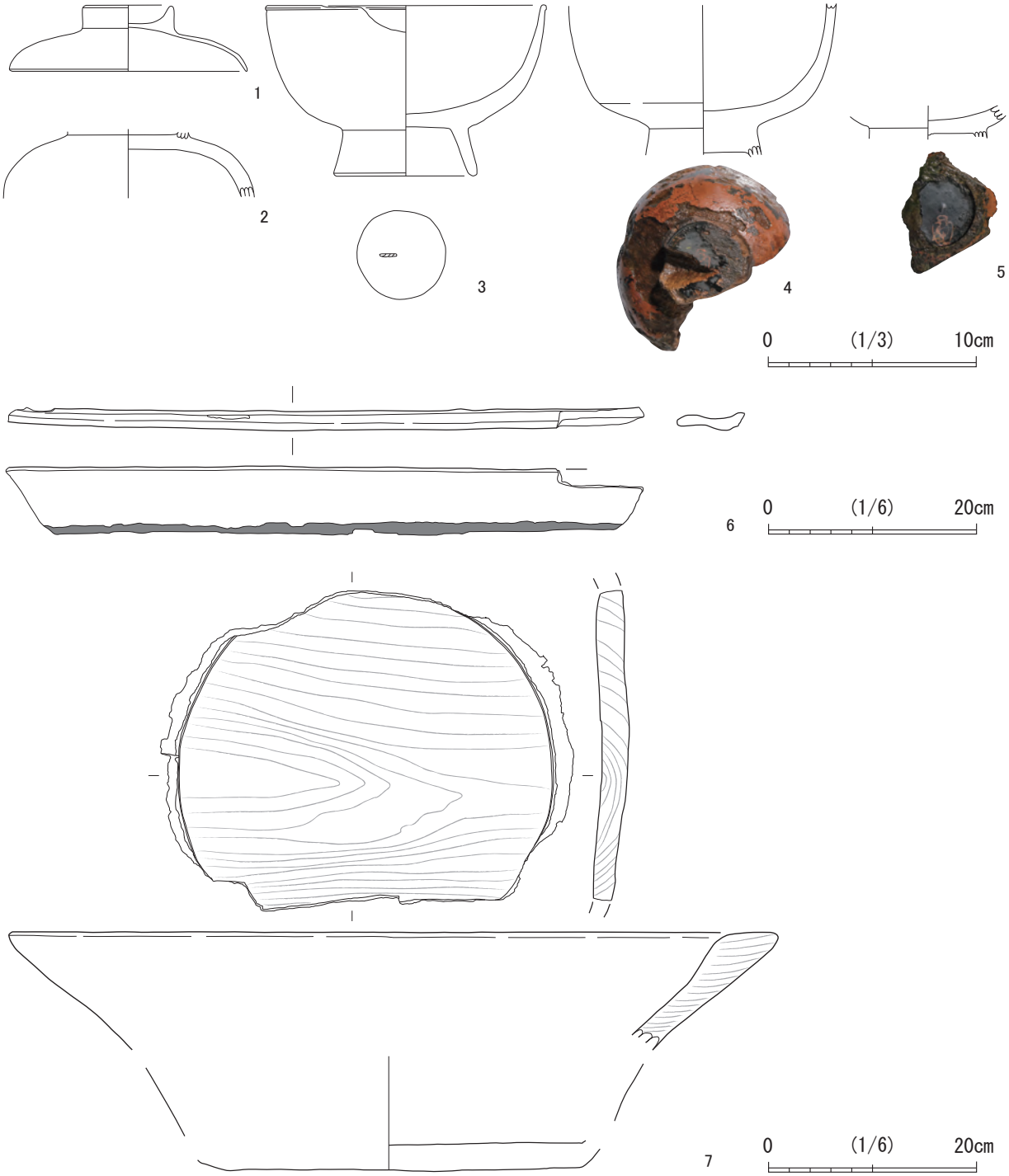
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SX01 下層	陶器	香炉	不明	内外面ともに褐灰色。胎土は黄灰色，砂粒含む。			(5.5)
2	SX01	陶器	擂鉢	岸窯系	内外面に鉄釉。胎土は黄灰色，精良，粘性強い。17 世紀末～ 18 世紀。研磨土器に転用。	(23.2)		(3.7)
3	SX01 上層	陶器	擂鉢	不明	内外面ともににぶい赤褐色。内面全体と口縁部外面にムラのある灰釉。胎土は褐灰色，砂粒を含む。		(6.4)	(5.3)
4	SX01 下層	陶器	甕	白石か	内外面に灰褐色。胎土表面は灰褐色。胎土内は赤褐色。内外面無釉。外面に三つ巴文のヘラ描き。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			7.6
5	SX01	陶器	甕	白石か	内面は黒褐色。外面は灰色。胎土は灰黄褐色で白色粒を多く含む。外面にハケ調整の痕跡。研磨土器に転用。			(6.3)
6	SX01	瓦質土器	甕	不明	胎土表面は灰黄色。胎土内は黄灰色。白色微粒少量含む。	(15.0)		(4.9)
7	SX01 下層	瓦質土器	甕	不明	内外面ともに黄灰色。胎土は灰黄色，微砂粒（特に白色粒）を多く含む。	(16.4)		(5.6)
8	SX01 下層	陶器	切立	岸窯系か	内外面ともに灰釉オリーブ黒色。胎土は灰白色，粘度強い。底部外面は回転糸切り。17 世紀後半～ 18 世紀。		10.8	(5.3)

7 の捏鉢は口縁部破片と底部から復元したもので、口径が 60cm 強、底径が 36cm にも及ぶ大型のものである。口縁端部は肥厚し、上面は平らに面取りされている。

第 141 図 1 の刀鞘は白鞘で、片方の板のみが残っている。2 の曲物底板の周囲には数箇所に側板を接合するための木釘が残る。また欠損部には樹脂（漆か）で補修した痕跡が認められる。木取りは柾目材である。3 の曲物底板は半分欠損している。周囲には数箇所に側板を接合するための木釘が残る。木取りは柾目材である。4 は桶の側板で、片面に焦痕が認められ、木取りは柾目材である。

第 141 図 5・6、第 142 図 1・2 は部材とした。角状の細木の両端などに、他の部材と結合するために鉄釘や木釘が使用されているものである。第 141 図 5 は2本の部材を直角に鉄釘で結合しており、その仕口は合欠である。

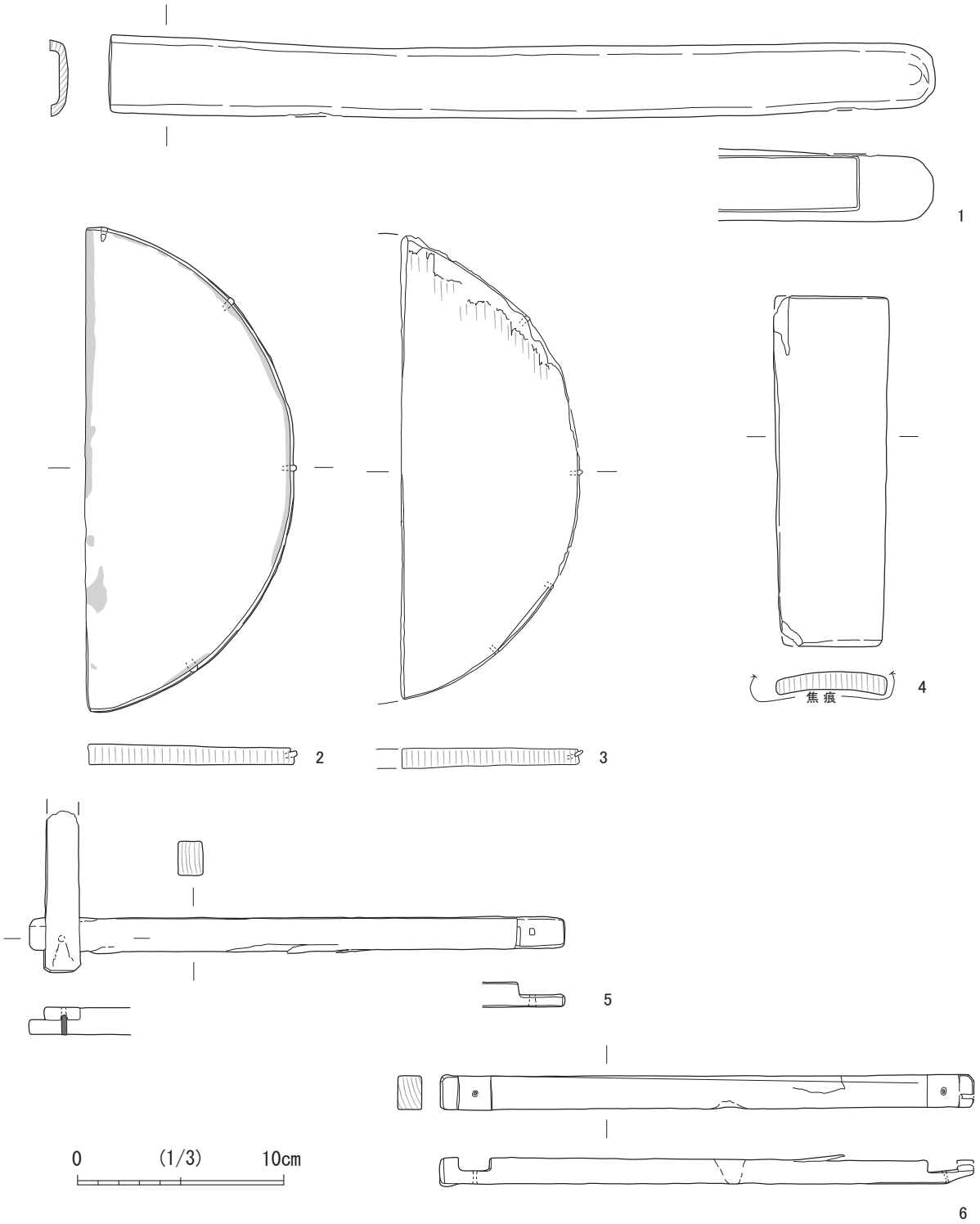
第 142 図 3・4 は建築材としたホゾ穴を持つもので、建築材の一部か製作途中の破損品と考えられる。



第 140 図 SX01 出土木製品1

第 83 表 SX01 出土木製品観察表1

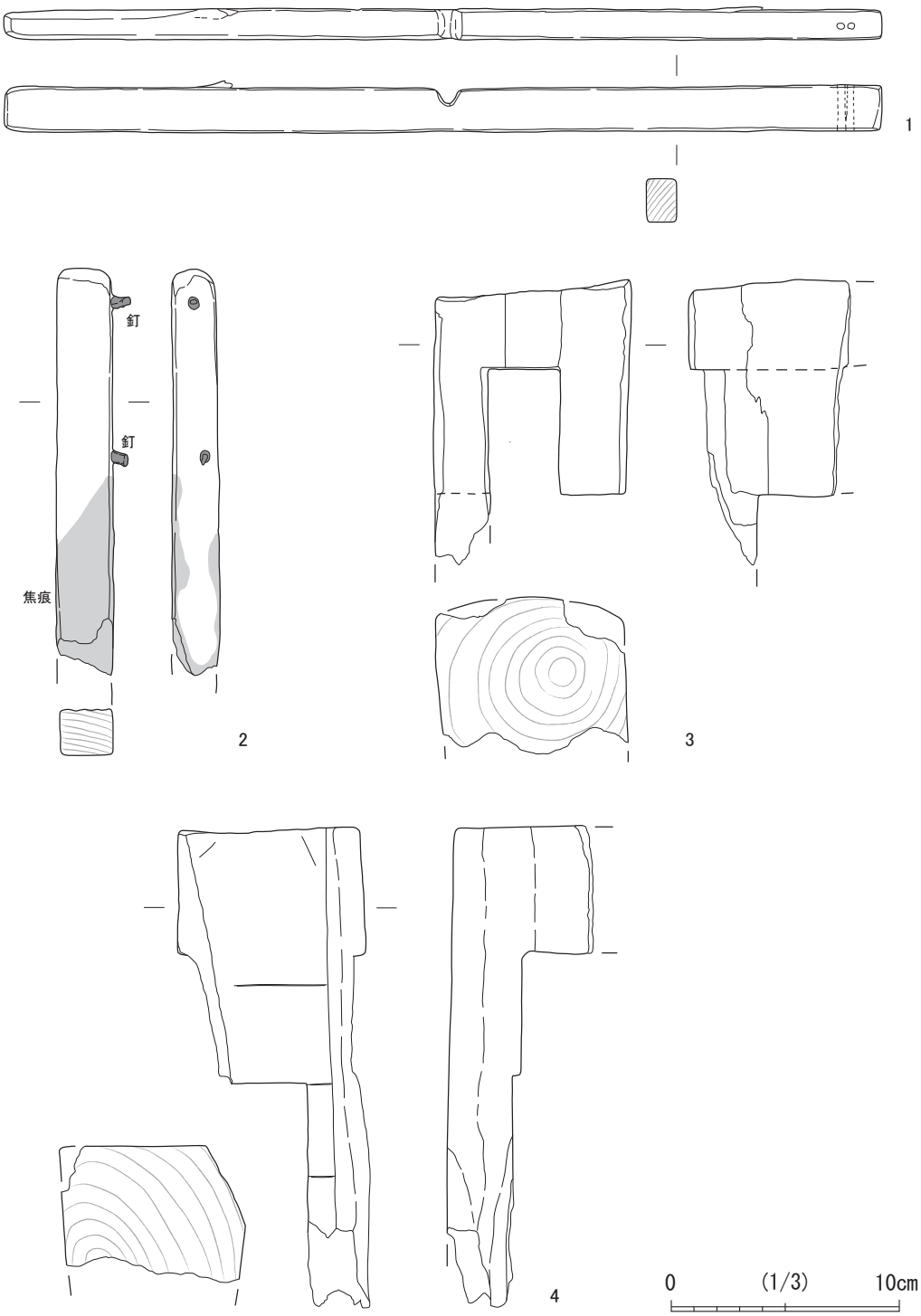
番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量(cm)			樹種
						口径	底径	器高	
1	SX01 下層	木製品	漆器 椀(蓋)	全面、赤漆(赤褐色)仕上げ。	全体の1/2	11.4	4.4	3.2	
2	SX01 下層	木製品	漆器 椀(蓋)	外面－暗赤褐色、内面－黒色。赤漆の文様。	体～底部1/1			(3.2)	ブナ属
3	SX01 下層	木製品	漆器 椀	外面－黒色、内面－黒褐色。高台底面に「一」の線刻あり。	ほ1/2残存	13.4	6.9	8.2	ケヤキ
4	SX01	木製品	漆器 椀	内外面、赤褐色。高台内面、黒色に赤漆文様。	体部1/2			(7.2)	ブナ属
5	SX01 下層	木製品	漆器 椀	内外面、暗赤褐色。黒色の高台内に赤漆の壺の文様あり。	底部破片			(1.6)	ブナ属
6	SX01 下層	木製品	折敷	全面、極暗赤褐色。部分的に暗赤褐色。割れ部に漆付着。	縁部一辺	(30.7)	(3.2)	(0.8)	ヒノキ
7	SX01 上層	木製品	捏鉢	口縁部肥厚、端部平坦。底部はほぼ平ら。板目材。	一部	口径(60.6)	底径(36.4)	(2.5)	ハリギリ



第 141 図　SX01 出土木製品2

第 84 表　SX01 出土木製品観察表2

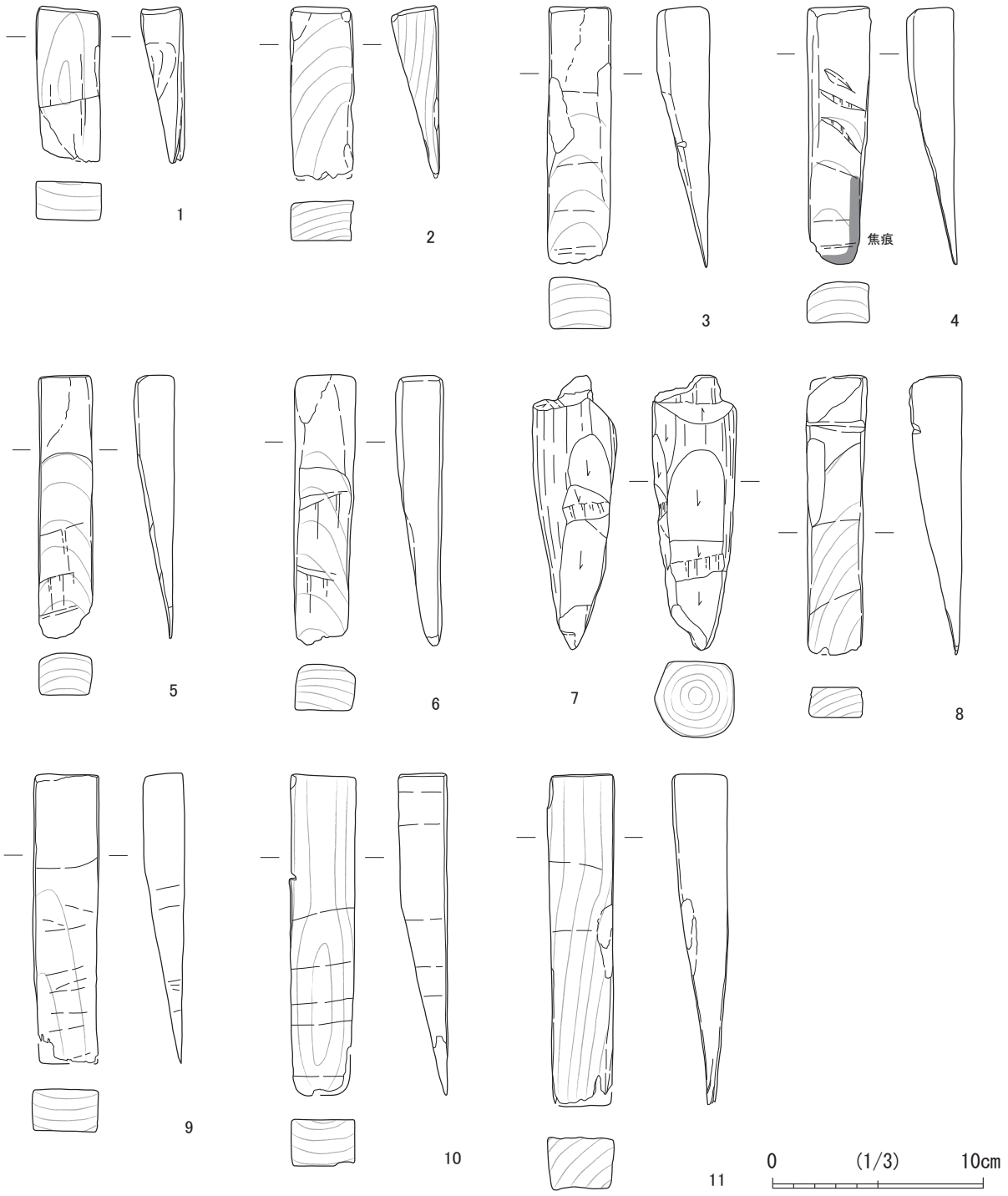
番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量(cm)			樹種
						口径	底径	器高	
1	SX01 上層	木製品	刀鞘	鋒は鞘の先端まで及んでいない。	片側 1/2	40.1	3.7	(0.8)	ヒノキ
2	SX01	木製品	曲物底板	周囲には木釘が残る。樹脂(漆か)で補修した痕跡がある。柾目材。	底板の 1/2	(23.5)	(10.0)	1.0	サワラ
3	SX01	木製品	曲物底板	周囲には木釘が残る。柾目材。	底板の 1/2	(22.5)	(8.7)	1.0	スギ
4	SX01	木製品	側板	桶の側板とみられる。柾目材。	一部	17.0	5.6	0.9	スギまたはヒノキ科
5	SX01	木製品	部材	角状の部材を鉄釘で結合。仕口は合欠。	一部	26.0	(7.8)	1.2	アスナロ属
6	SX01	木製品	部材	角状の部材を両端で釘で結合。	一部	25.8	1.6	1.2	アスナロ属



第 142 図 SX01 出土木製品3

第 85 表 SX01 出土木製品観察表3

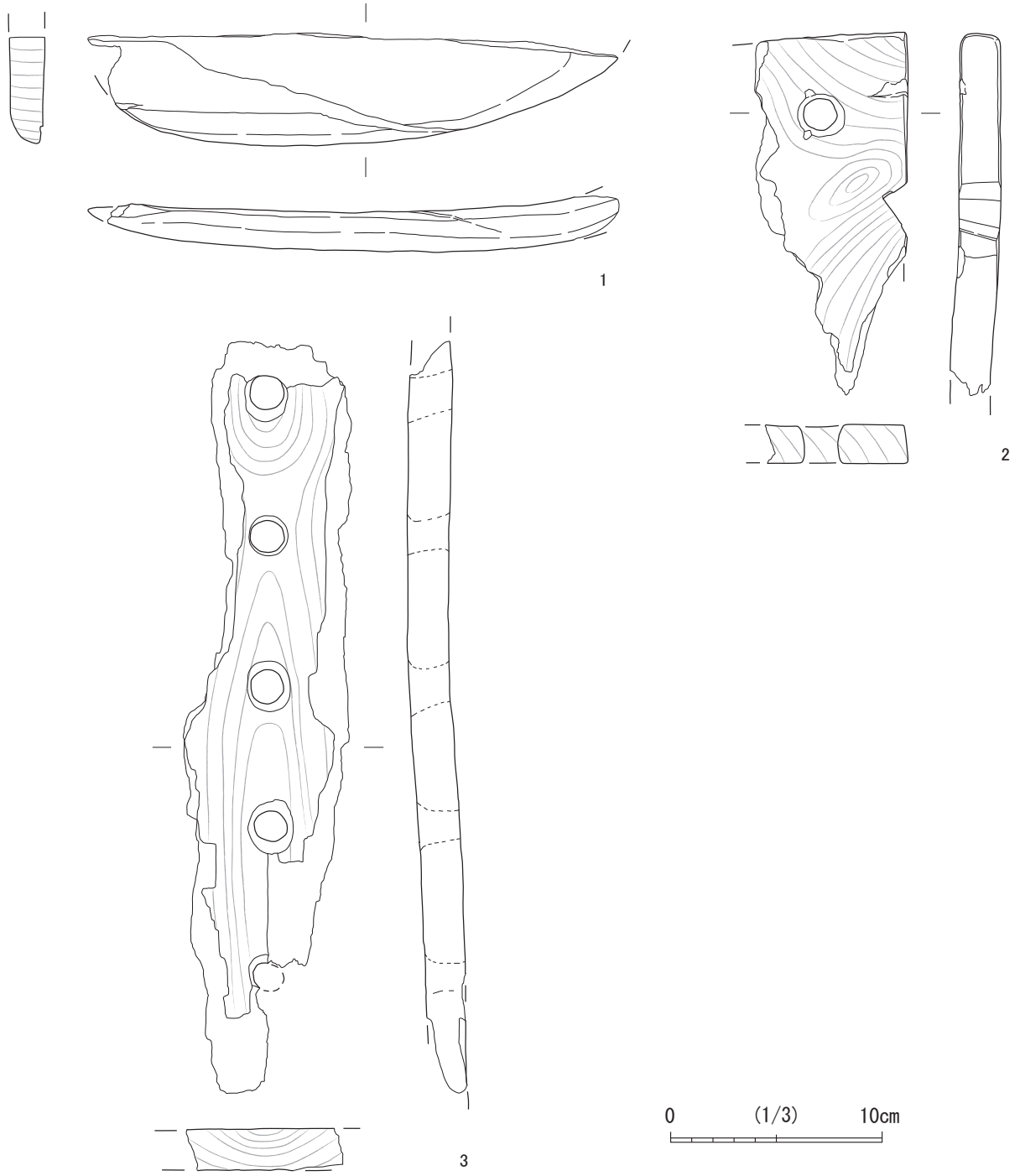
番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量(cm)			樹種
						口径	底径	器高	
1	SX01	木製品	部材	角状の部材の一端に木釘が2本あり。中央に抉りがみられる。	完存	38.5	1.9	1.3	針葉樹
2	SX01	木製品	部材	角状の部材の側面2箇所に鉄釘あり。焦痕も残る。	一部	(17.9)	2.5	2.0	サワラ
3	SX01	木製品	建築材	枘穴あり。芯持ち材。一部に樹肌残る。	一部	(11.6)	(8.5)	(6.9)	スギ
4	SX01	木製品	建築材	枘穴あり。一面に見込み線数本あり。柾目材。樹皮残る。	一部	(21.0)	(8.2)	(6.0)	スギ



第 143 図　SX01 出土木製品4

第 86 表　SX01 出土木製品観察表4

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量(cm)			樹種
						口径	底径	器高	
1	SX01	木製品	クサビ	柾目材。	ほぼ完存	7.4	3.1	2.0	クリ
2	SX01	木製品	クサビ	柾目材。	ほぼ完存	8.2	3.0	2.2	クリ
3	SX01	木製品	クサビ	柾目材。	ほぼ完存	12.2	3.0	2.5	クリ
4	SX01	木製品	クサビ	柾目材。樹肌が残る。焦痕あり。	ほぼ完存	12.2	3.0	2.3	クリ
5	SX01	木製品	クサビ	柾目材。樹肌が残る。	ほぼ完存	12.4	2.5	2.0	クリ
6	SX01	木製品	クサビ	柾目材。	ほぼ完存	12.8	2.9	2.3	クリ
7	SX01	木製品	クサビ	芯持ち材。杭の転用とみられる。	ほぼ完存	13.0	4.0	4.0	サクラ属
8	SX01 下層	木製品	クサビ	柾目材。	一部欠損	13.3	2.8	2.5	クリ
9	SX01	木製品	クサビ	柾目材。	ほぼ完存	13.7	3.1	2.0	クリ
10	SX01	木製品	クサビ	柾目材。	ほぼ完存	15.3	3.1	2.3	クリ
11	SX01	木製品	クサビ	柾目材。	ほぼ完存	15.7	3.0	2.5	クリ



第 144 図 SX01 出土木製品5

第 87 表 SX01 出土木製品観察表5

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量(cm)			樹種
						口径	底径	器高	
1	SX01	木製品	不明木製品	容器の一部か。柾目材。	一部	(25.0)	(5.0)	(1.6)	コナラ節
2	SX01	木製品	不明木製品	板の表面に1孔、側面に切り込みがみられる。柾目材。	一部	(17.1)	(7.2)	1.8	マツ属
3	SX01 下層	木製品	不明木製品	板の表面に5孔あり。板目材。	一部	(35.6)	(7.3)	2.0	マツ属

第 143 図は護岸施設の杭と横板を固定するために用いられたのがクサビである。打ち込まれた状態か抜けた状態で数十点のクサビが確認されているが、ここではその中の 11 点のクサビを取り上げ、図化した。
1本の杭の再利用を除き、他はすべてクサビとして製作されたもので、樹種が同じクリ材であることや年輪、加工の特徴などから同一の木材を元に作出された可能性が高い。これらのクサビは形状や長さがそれぞれわずかながら異なるものの、幅や厚さはほぼ共通している。

第 144 図は用途不明としたものである。1は側縁が曲線的に作出された板状のもので、容器の一部の可能性も考えられる。2は厚めの板に約 1.5cm の孔が穿たれている。3 は厚めの板に直径が 1.5cm 前後の孔を5個以上穿たれている。

4．性格不明遺構

SX02（第 113・145・146 図、第 88 表）

調査区北西隅部に位置する。SD18と重複し、これより新しい。調査区北側、及び西側へさらに展開するため、全体の形状・規模については不明な点が多いが、確認面からの深さは 1.1 mを測る。遺構の南側では、40 ㎝ほど掘り下げた箇所で下場の形状に沿って、長さ 150 ㎝前後で径5～ 10 ㎝ほどの杭が、30 ～ 100 ㎝の間隔で8本打ち込まれていることが確認されている。これらの杭では上部から下方 30 ㎝あたりまで蔓性の植物を用いた「しがらみ」によって複雑に編み込まれていることから、護岸あるいは土留めを目的として設置された可能性が考えられる。

第 146 図は SX02 出土遺物で、1 は瀬戸美濃産の鉄絵皿で 17 世紀前半。2 は白磁の端反の皿で 16 世紀後半か。3 は白石産陶器で 13 世紀後半～ 14 世紀前半である。

5．土坑

調査では 20 基の土坑を確認しているが、ここでは形状的な特徴ごとに述べる。なお、各土坑の詳細については第 92 表にまとめている。

平面形の規模が大きいもの

SK04・06・11・12・20が該当する。いずれも長軸・短軸が1m以上、確認面からの深さも後述するものより深い。断面形状は逆台形、あるいはU字状を呈するものが多い。堆積土はほぼ人為的埋土である。

断面形状が皿形を呈するもの

SK01・07・09・10・14・15が該当する。平面形状は様々であるが、規模は長軸 100 ㎝程度、短軸 80 ㎝程度である。確認面からの深さ 10 ～ 20 ㎝ほどと浅い。堆積土はすべて人為的埋土である。

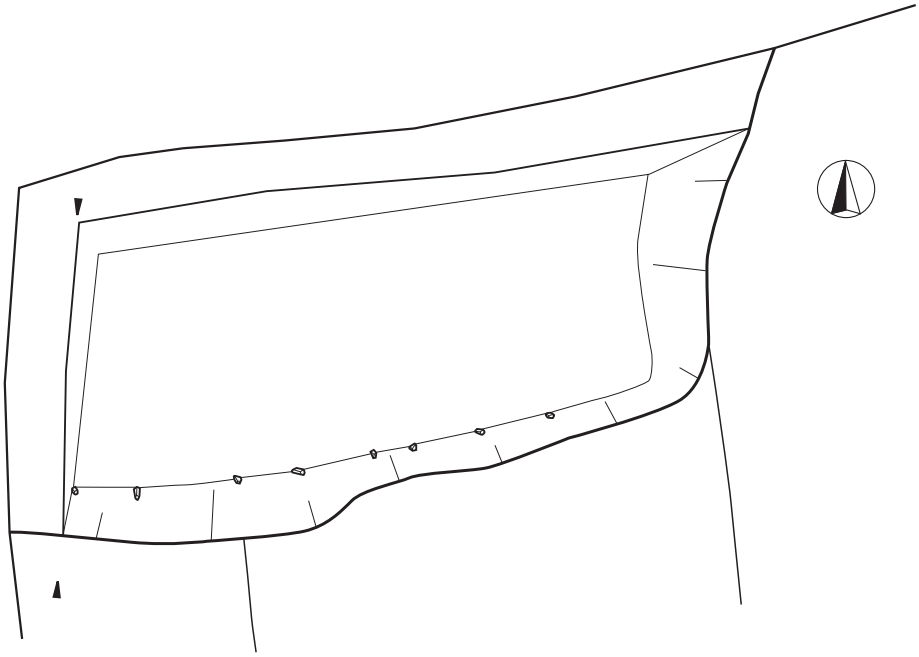
断面形状が箱形を呈するもの

SK13・16～19が該当する。平面形状は様々であるが、規模は長軸 90 ㎝程度、短軸 80 ㎝程度である。確認面からの深さ 20 ～ 30 ㎝。堆積土はすべて人為的埋土である。

第 150 図 1 は SK11 から出土した白石産陶器で 3 辺を加工して成型、1 辺を研磨に使用する。13 世紀後半～ 14 世紀前半。

第 151 図 1 は SK12 から出土した白石産かと思われる陶器である。

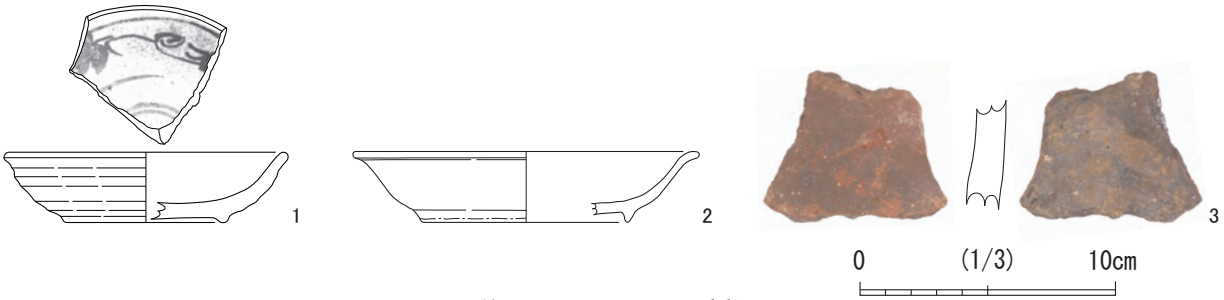
第 152 図 1 は SK19 から出土した白石産陶器で 1 辺を加工して成型、1 辺を研磨に使用する。13 世紀後半～ 14 世紀前半。



SX02　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	黄褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	褐色シルト大ブロックを少量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR5/3	シルト	黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
4	黒褐色	10YR3/1	シルト	灰オリーブ色シルト中ブロックをやや多く含む。
5	黒褐色	10YR3/1	シルト	灰オリーブ色シルト小ブロックをやや多く含む。
6	オリーブ黒色	5Y3/1	シルト	黒褐色シルト大ブロックを少量、植物遺体をやや多く含む。
7	オリーブ黒色	7Y3/1	シルト	黒褐色シルト中ブロックを少量含む。

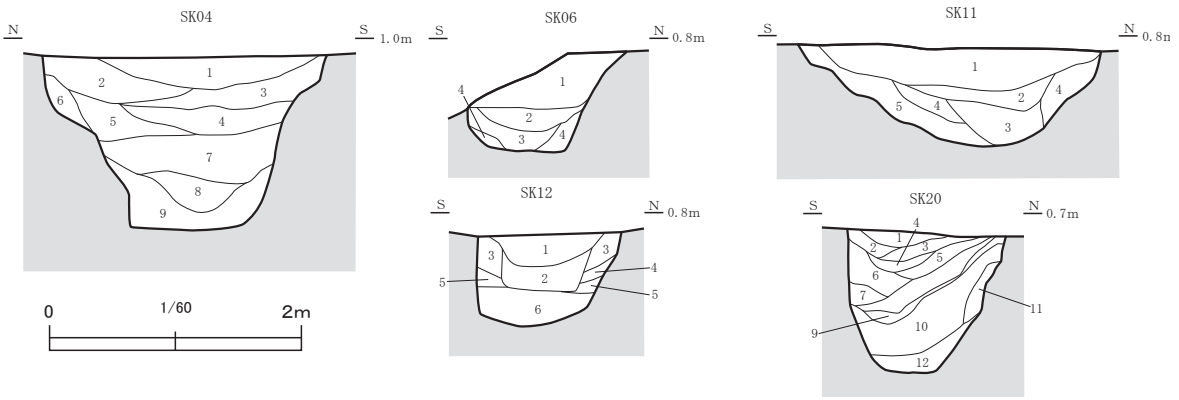
第 145 図　SX02、土層断面図



第 146 図　SX02 出土遺物

第 88 表　SX02 出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SX02	陶器	皿	瀬戸美濃	鉄絵皿。内外面に長石釉（灰白色）。内面に鉄絵草花文。胎土は灰色で精良，軟質。登窯第 1 段階第 1 ～ 2 小期。17 世紀前半。	11.2	6.4	2.8
2	SX02	白磁	皿	輸入磁器	内外面ともに灰白色。胎土は灰白色で黒色粒を含む。16 世紀後半か。	(13.8)	(8.2)	2.8
3	SX02	陶器	甕	白石	内面は褐灰色。外面は灰褐色。胎土は褐灰色で砂粒を含む。内面に指頭圧痕と指紋。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.65)



SK04　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く、拳大の灰白色粘土を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR2/2	シルト	拳大の灰白色粘土を少量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	シルト	暗褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
5	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
6	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
7	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土	灰色粘土大ブロックをやや多く含む。
8	灰色	10Y6/1	砂	黒褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
9	黄褐色	10YR5/6	砂	黒褐色シルト小ブロックを少量含む。

SK06　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	炭化物をやや多く、黄橙色シルト中ブロックを少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	炭化物を多量含む。下位に黒褐色細粒砂の薄層が堆積。
3	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	灰色粘土中ブロックを少量含む。
4	オリーブ黒色	5Y3/1	粘質シルト	灰色粘土大ブロックを少量含む。

SK11　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く含む。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR2/2	シルト	灰色粘土中ブロックを微量含む。
4	にぶい黄橙色	10YR5/3	シルト	黒褐色シルト中ブロックを微量含む。
5	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	灰色砂質シルト中ブロックを多量含む。

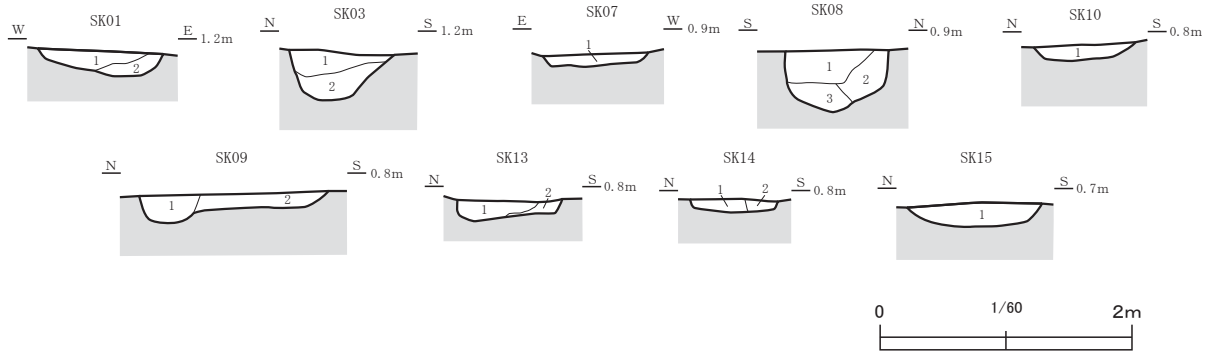
SK12　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックをやや多く含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックを少量含む。
3	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを多量含む。
4	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
5	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
6	黒褐色	10YR2/1	粘質シルト	灰色細粒砂を中ブロック状に極めて多量含む。

SK20　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	褐灰色	10YR4/1	シルト	炭化物・焼土粒を多量含む。
2	灰黄褐色	10YR5/2	シルト	炭化物をやや多く含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト粒をやや多く含む。
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	灰黄褐色シルト中ブロックを少量含む。
5	黒褐色	10YR3/1	シルト	下位に灰黄褐色シルト粒を少量含む。
6	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト粒をやや多く、炭化物を微量含む。
7	灰オリーブ色	5Y5/2	粘質シルト	黒褐色粘土小ブロックを少量含む。
8	オリーブ黒色	5Y3/1	粘質シルト	灰白色粘土粒を少量含む。
9	灰色	5Y5/1	粘質シルト	黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。
10	黒色	10YR2/1	粘質シルト	植物遺体を層中全体にやや多く含む。
11	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	黄橙色砂をブロック状に多量含む。
12	にぶい黄橙色	10YR6/4	粘土	植物遺体をやや多く含む。

第 147 図　SK04・06・11・12・20 土層断面図



SK01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒色	10YR2/1	粘質シルト	褐色シルト粒をやや多く含む。
2	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。

SK03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	炭化物の薄層を含む。褐色シルト粒を少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄褐色シルト粒を少量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	黒褐色シルト粒を少量、黄褐色シルト粒を微量含む。

SK07　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	黄褐色シルト大ブロックをやや多く含む。

SK08　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く、炭化物を少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	炭化物をやや多く、黄橙色シルト粒を微量含む。
3	黒褐色	10YR2/3	シルト	黄橙色シルト中ブロック・褐色中粒其砂を少量含む。

SK09　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト粒を多量、マンガンを少量含む。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄橙色シルト中ブロックを極めて多量、マンガンをやや多く含む。

SK10　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄褐色シルト中ブロックをやや多く含む。

SK13　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	マンガンを多量、植物遺体を少量含む。
2	黒褐色	10YR3/2	シルト	マンガンを少量、植物遺体を微量含む。

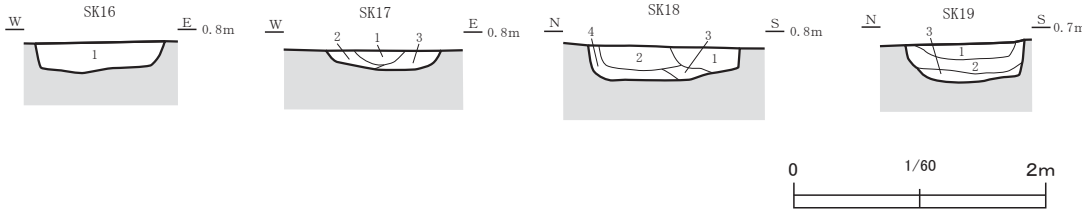
SK14　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量、炭化物を微量含む。
2	黒褐色	10YR2/3	シルト	黄橙色シルト粒をやや多く含む。

SK15　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	シルト	炭化物を多量、焼土粒を少量含む。

第 148 図　SK01・03・07 ～ 10・13 ～ 15 土層断面図



SK16　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/2	粘質シルト	褐色粘土小ブロックを多量、マンガンを少量含む。

SK17　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	褐灰色シルト小ブロックをやや多く、マンガンを少量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト粒をやや多く、礫をごく微量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックをごく微量含む。

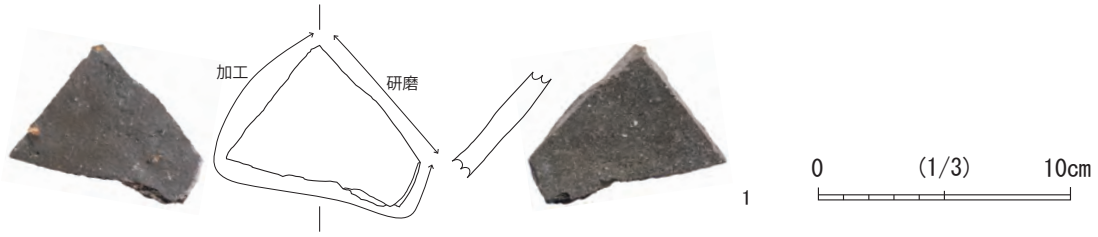
SK18　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く、灰白色粘土小ブロックを少量含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト大ブロックを少量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄橙色シルト小ブロックを微量含む。
4	黒褐色	10YR3/2	シルト	マンガンを少量含む。

SK19　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄褐色シルト粒を多量、炭化物・焼土粒を微量含む。
2	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
3	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト粒を少量、炭化物をごく微量含む。

第 149 図　SK16 ～ 19 土層断面図



第 150 図　SK11 出土遺物

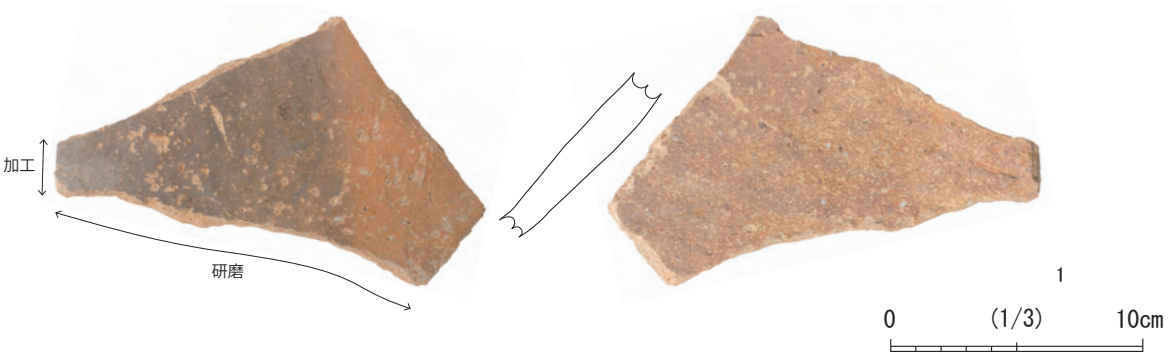
第 89 表　SK11 出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SK11	陶器	甕	白石か	内外面ともにオリーブ黒色。胎土は灰色で砂粒を含む。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。研磨土器に転用。			(4.6)

第 151 図　SK12 出土遺物

第 90 表　SK12 出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SK12	陶器	甕	白石か	内外面ともに黄灰色。胎土は灰色。			(6.3)



第 152 図 SK19 出土遺物

第 91 表 SK19 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SK19	陶器	甕	白石	内面はにぶい褐色。外面は灰褐色。胎土はにぶい黄橙色で白色粒，赤色粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(6.4)

第 92 表 平成 28 年度調査 護岸施設・性格不明遺構・土坑属性表

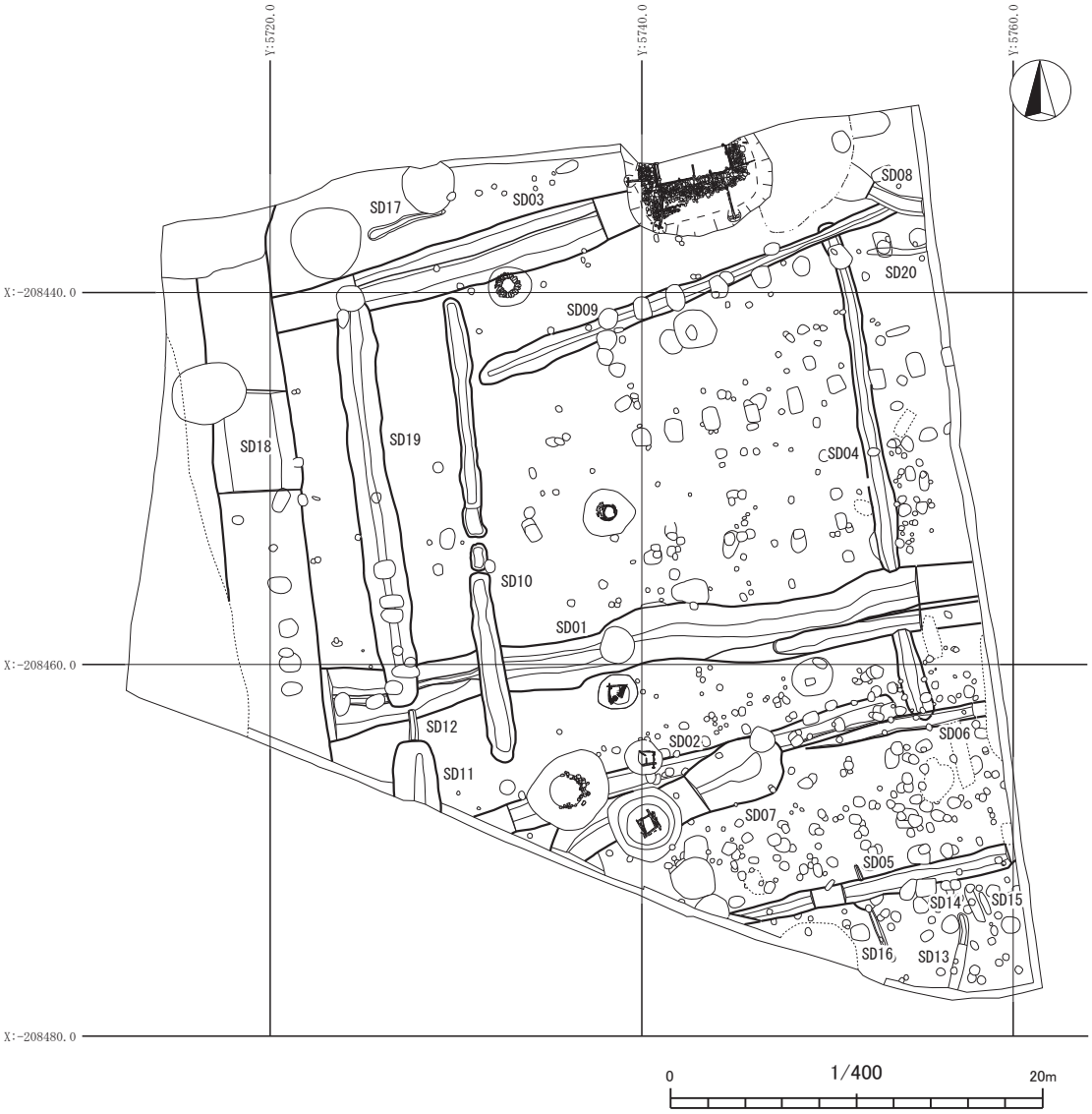
遺構名	平面形	断面形	規模（m）	深さ (m)	堆積土	出土遺物	備 考	平面図	断面図
SX01	―	箱形	－× 7.7	2.3	人為	青磁、白石、肥前系磁器、肥前系陶器、京焼、瀬戸美濃、岸窯系陶器、瓦質土器、かわらけ、漆器、木製品	SD03 より新	136	136
SX02	―	箱形	―	1.1	人為	白磁、白石、瀬戸美濃	SD18 より新	145	145
SK01	楕円形	皿形	1.0 × 0.9	0.2	人為			100	148
SK02	楕円形	皿形	1.0 × 0.9	0.2	人為			100	
SK03	隅丸方形	逆台形	0.9 × 0.9	0.4	人為			100	148
SK04	円形	箱形	2.4 × 2.3	1.4	人為		SK05 より新	100	147
SK05	長円形？		―× 1.3		人為		SK04 より古	100	
SK06	円形	箱形	1.3 × 1.3	0.8	人為		SD02・07 より新	100	147
SK07	円形	皿形	0.8 × 0.8	0.1	人為			100	148
SK08	楕円形	U字	1.5 × 1.3	0.8	自然→人為	中世陶器	SB05 より古 ,SD01 より新	100	148
SK09	長円形	皿形	1.0 × 0.5	0.1	人為			100	148
SK10	台形	皿形	0.9 × 0.7	0.1	人為			100	148
SK11	隅丸方形		2.2 × 2.0			白石か	SK12 より新	100	147
SK12	―	逆台形	1.3 ×―	0.4	人為	白石か、肥前系陶器	SK11 より古	100	147
SK13	―	皿形	―× 1.1	0.2	人為		SD09 より新	100	148
SK14	長方形	皿形	1.0 × 0.7	0.1	人為		SD08 より新	100	148
SK15	楕円形	皿形	1.2 × 0.9	0.2	人為			100	148
SK16	―	箱形	―×―	0.3	人為			100	149
SK17	楕円形	皿形	1.0 × 0.8	0.2	人為		SD01 より新	100	149
SK18	楕円形		1.3 × 0.8		人為		SD01 より新	100	149
SK19	楕円形	箱形	1.0 × 0.6	0.3	人為	白石	SD19 より新	100	149
SK20	隅丸方形	U字	1.5 × 1.5	1.1	自然→人為		SD03・19 より新	100	147

6. 溝跡

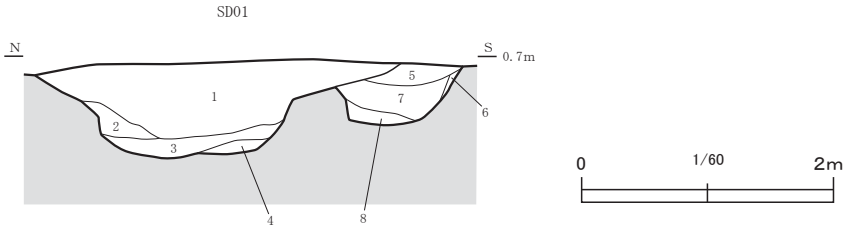
調査では 20 条の溝跡を確認している。溝跡の詳細は第 119 表にまとめているが、ここでは区画性が高いもの、及び遺物が出土した溝跡を中心に詳述する。

SD01（第 153 ～ 167 図、第 93 ～ 105 表）

調査区南部に位置し、調査区東壁から西側へほぼ直線的にのびる溝跡である。SB08・10・12・18・19の掘立柱建物跡、SD04・18と重複し、掘立柱建物群・SD18より古く、SD04より新しい。東側は調査区外へ展開し、西側もSD18及び攪乱によって失うため全長は不明であるが、総長約 35.8m にわたって検出している。主軸方位は N-80° -E。検出面での規模は上幅 2.2 ～ 3.5m、下幅 0.5 ～ 1.8m、確認面よりの深さは 70cm を測る。本遺構は新旧2時期が存在しており、東側では古い溝が南側を走るが、西側では新段階の溝跡の掘削によって失われ、わずかに底面のごく一部のみがみとめられる。新旧いずれの溝跡も断面形状は箱形を呈するが、古段階は底面から上場へとほぼ直線的に立ち上がっているのに対し、新段階



第 153 図　SD 配置図



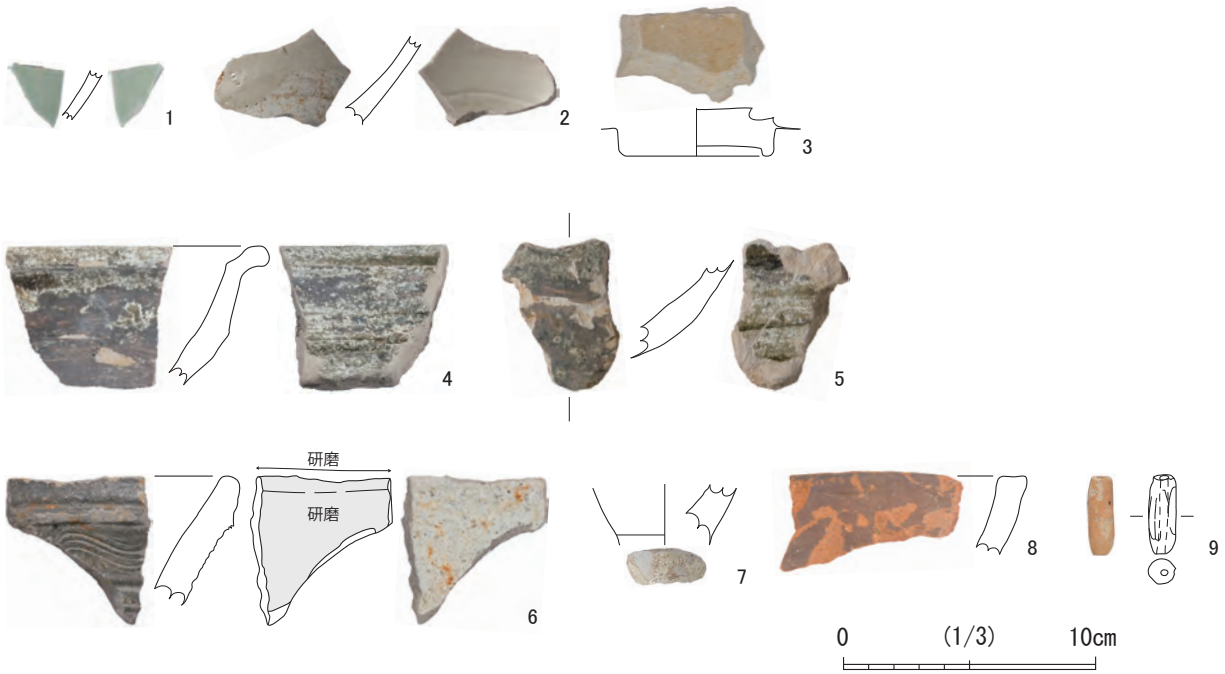
SD01　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黒褐色シルト小ブロックを少量、炭化部・焼土粒をごく微量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト大ブロックを微量含む。
3	黒色	10YR2/1	粘土	上位に灰白色粘土薄層を含む。下位には灰色細粒砂の薄層を含む。
4	褐灰色	10YR4/1	砂	中位に黄褐色シルトの薄層を含む。
5	黒褐色	10YR3/2	シルト	暗褐色シルト中ブロックを少量含む。
6	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	黒褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
7	黒褐色	10YR3/1	シルト	暗褐色シルト中ブロックをやや多く、灰白色粘土小ブロックをごく微量含む。
8	黒褐色	10YR2/3	粘質シルト	黄褐色シルト中ブロックを少量含む。下位に褐色細粒砂の薄層が堆積。

第 154 図　SD01 土層断面図

は中位から上場へかけて大きく開く形状となっている。底面では新旧それぞれ東側から西側へ緩やかに傾斜している。堆積土は新旧とも4層であり、新段階の1・2層、古段階の5～7層は人為的埋上であるが、3・4・8層は自然堆積である。

第 155 ～ 167 図はすべて SD01 の出土遺物である。第 155 図 1 は龍泉窯系青磁碗で、太宰府編年で 13 世紀前後～ 13 世紀前半。2 は白磁碗で、太宰府編年で 11 世紀後半～ 12 世紀後半。3 は龍泉窯系青磁碗で、太宰府編年で 12 世紀中頃～ 13 世紀前半。4・5 は古瀬戸折縁深皿で 13 世紀末～ 14 世紀中頃。6 は波状文のみられる須恵器甕の口縁部で 7 世紀後半のものか。口縁部と内面を研磨に使用しており、中世に採集した須恵器を研磨に転用したものと考えられる。7 は常滑の壺か。8 は土師質土器の鍋。9 は土製品で土錘である。第 156 図は白石産陶器で、片口鉢の口縁部である。5 は小型で卸目を有する。第 157 図は常滑産陶器および白石産陶器の片口鉢の体部から底部である。6 は常滑で 12 世紀前半～中頃か。そのほかは 13 世紀後半～ 14 世紀前半。第 158 図は陶器甕もしくは壺の口縁部である。1・2 は常滑産で 13 世紀前半。4 は常滑産で 12 世紀末～ 13 世紀初頭。8 は渥美産で 12 世紀末～ 13 世紀初頭。断面を 4 辺と内外面をすべて研磨に使用している。3・6・7 は白石産で 13 世紀後半～ 14 世紀前半。第 159 図は陶器



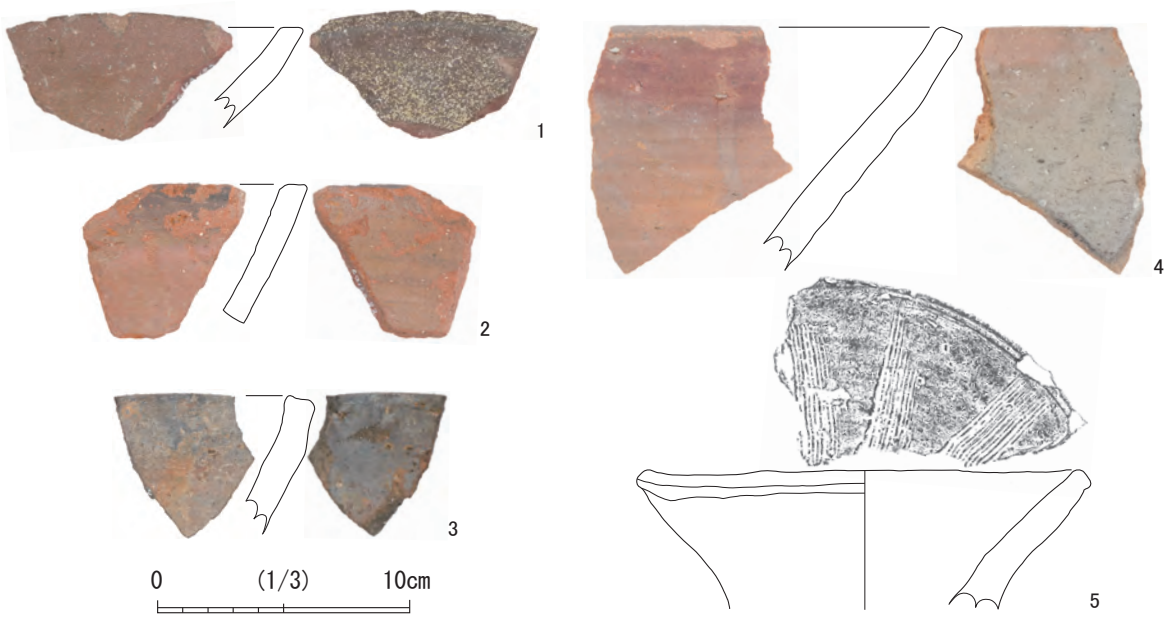
第 155 図 SD01 出土遺物1

第 93 表 SD01 出土遺物観察表1

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	青磁	碗	龍泉窯系	鎬蓮弁文。太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅱ類。13 世紀前後～ 13 世紀前半。			(1.9)
2	SD01-2	白磁	碗		太宰府編年碗Ⅳ類。11 世紀後半～ 12 世紀後半。			(3.5)
3	SD01-1	青磁	碗	龍泉窯系	太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ，Ⅱ。12 世紀中頃～ 13 世紀前半。		(6.0)	(1.9)
4	SD01	陶器	皿	古瀬戸	折縁深皿。内外面ともに褐灰色。内面に自然釉付着。胎土は灰白色で精良，軟質。古瀬戸中期様式Ⅰ～Ⅱ期。13 世紀末～ 14 世紀初頭。			(5.5)
5	SD01	陶器	皿	古瀬戸	折縁深皿。外面は褐灰色。内外面に灰釉。胎土は灰白色，軟質。古瀬戸中期様式。13 世紀末～ 14 世紀中頃。			(4.3)
6	SD01-2	須恵器	甕		須恵器大甕の口縁部破片。研磨土器に転用。。7 世紀後半か。			(5.7)
7	SD01	陶器	壺	常滑	三筋壺。内面は黄灰色，自然釉。外面は灰白色，灰釉。胎土は灰白色，精良。12 世紀～ 13 世紀。			(2.25)
8	SD01-2	土鍋			内面はにぶい黄褐色。外面は褐灰色。胎土は明褐色で砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。口縁部内面に炭化物付着。			(2.8)
9	SD01	土製品	土錘		胎土は黄褐色で透明粒を含む。	最大長 (3.1)	最大幅 (1.1)	最大厚 (1.0)

甕もしくは壺の頸部から肩部である。1・2・3・8は常滑産、4～7・9・10は白石産である。7・9で断面を研磨に使用する。第160図は陶器甕の肩部である。1・4は常滑産。4は3辺と内外面を研磨に使用する。2は渥美産かと思われ、2辺を加工して成型している。12世紀。3・6～8は白石産。6で2辺を加工2辺を研磨使用、7で2辺と加工1辺を研磨使用している。第161図は陶器甕もしくは壺の肩部である。4・6は常滑産か。1～3・5・7は白石産で13世紀後半～14世紀前半である。第162図は白石産陶器の胴部で、6で3辺と内外面を研磨に使用している。13世紀後半～14世紀前半。第163図は白石産陶器の胴部で、研磨に使用しているものである。13世紀後半～14世紀前半。第164図は陶器甕もしくは壺の胴部である。1は常滑産か。2～10は白石産で13世紀後半～14世紀前半である。第165図は陶器甕もしくは壺の胴部である。9は常滑産か。2辺を研磨使用している。1～8・10～12は白石産で、4・10を研磨使用している。第166図は陶器甕もしくは壺の胴部から底部である。3・5は常滑産か1・2・4・6・7は白石産で、1・4を研磨使用している。13世紀後半～14世紀前半。

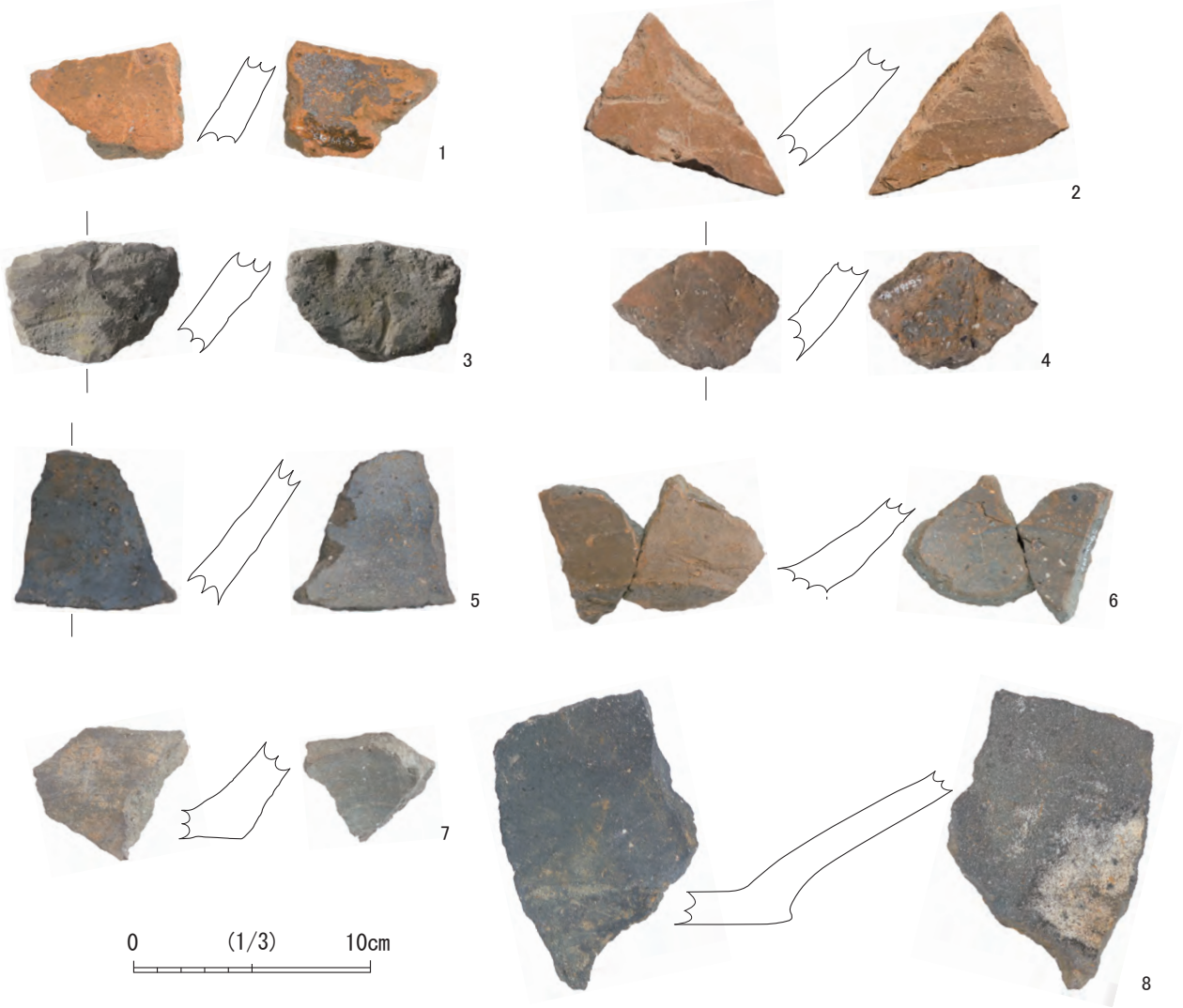
第167図はSD01から出土した石製品である。新旧2時期の溝跡から砥石が2点と石臼が1点出土している。砥石の1点は不定形状をし、1面の主な砥磨面の他にも多数の砥磨面を持つ。石材は細粒の凝灰岩であり、仕上げ砥として使用されたものと考えられる。もう1点の砥石は角柱状をなし、4面とも砥磨面であり、線条痕が認められる面もある。石臼は茶臼の下臼の半欠で、台部と受皿縁辺が意図的に打ち欠かれている。台部の目の溝が使用によりほとんど消失しており、別な目的に作り直された可能性が考えられる。



第156図　SD01出土遺物2

第94表　SD01出土遺物観察表2

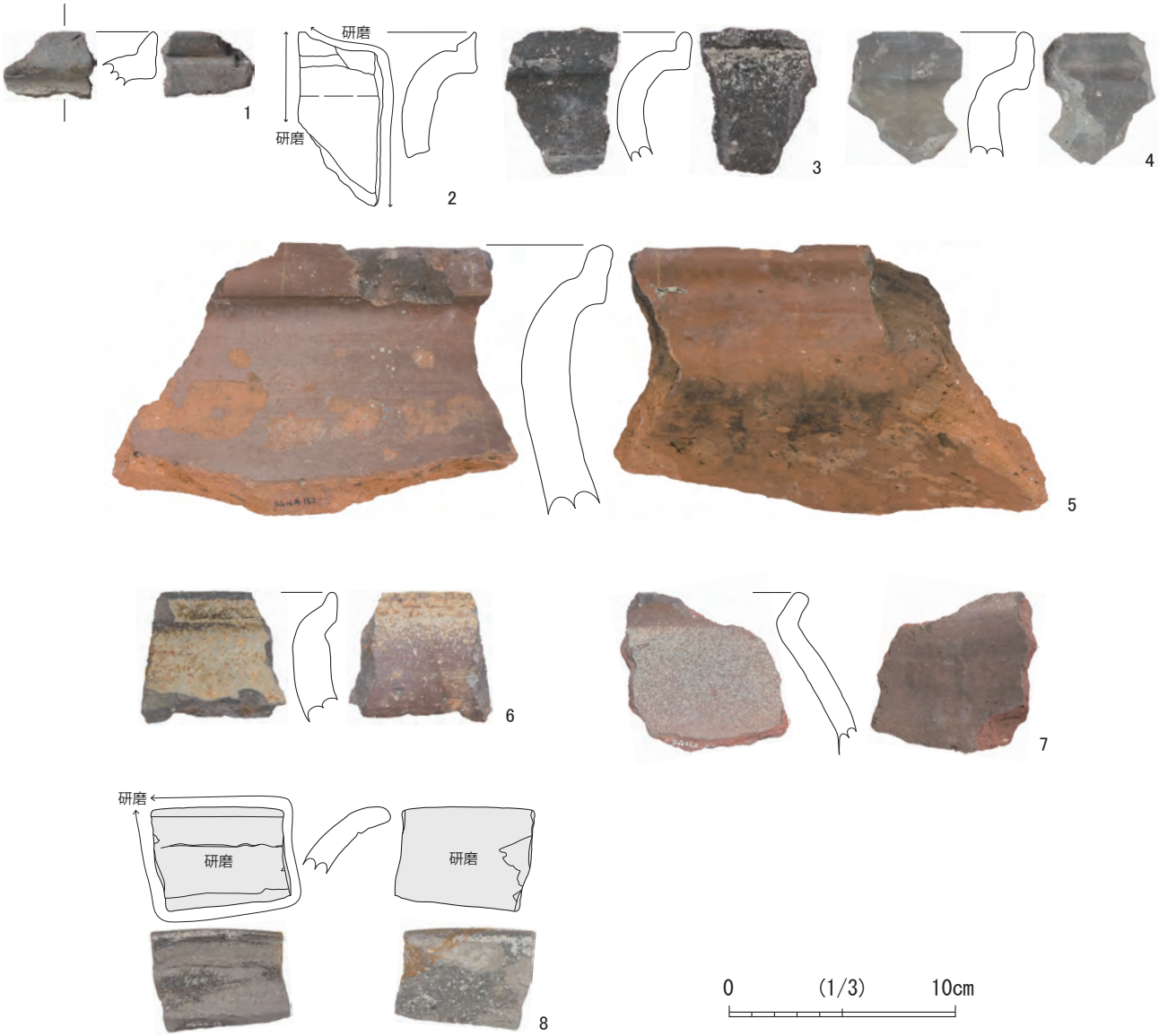
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	陶器	片口鉢	白石	内外面はにぶい赤褐色。内面に自然釉付着。胎土はにぶい赤褐色，砂粒を多量に含む。13世紀後半～14世紀前半。			(4.0)
2	SD01	陶器	片口鉢	白石	内面は灰褐色。外面は黄灰色。胎土はにぶい赤褐色で白色粒を多く含む。内外面にロクロナデ。外面は被熱により赤化。13世紀後半～14世紀前半。			(5.5)
3	SD01	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに灰色。胎土は灰色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(5.5)
4	SD01	陶器	片口鉢	白石	内面は黄灰色。外面はにぶい橙色。胎土はにぶい褐色，砂粒（特に白色大粒）を含む。13世紀後半～14世紀前半。			11.35
5	SD01	陶器	片口鉢	白石か	内外面ともに灰色。胎土は灰色，砂粒少量含む。13世紀後半～14世紀前半。	(17.4)		(5.5)



第 157 図 SD01 出土遺物3

第 95 表 SD01 出土遺物観察表3

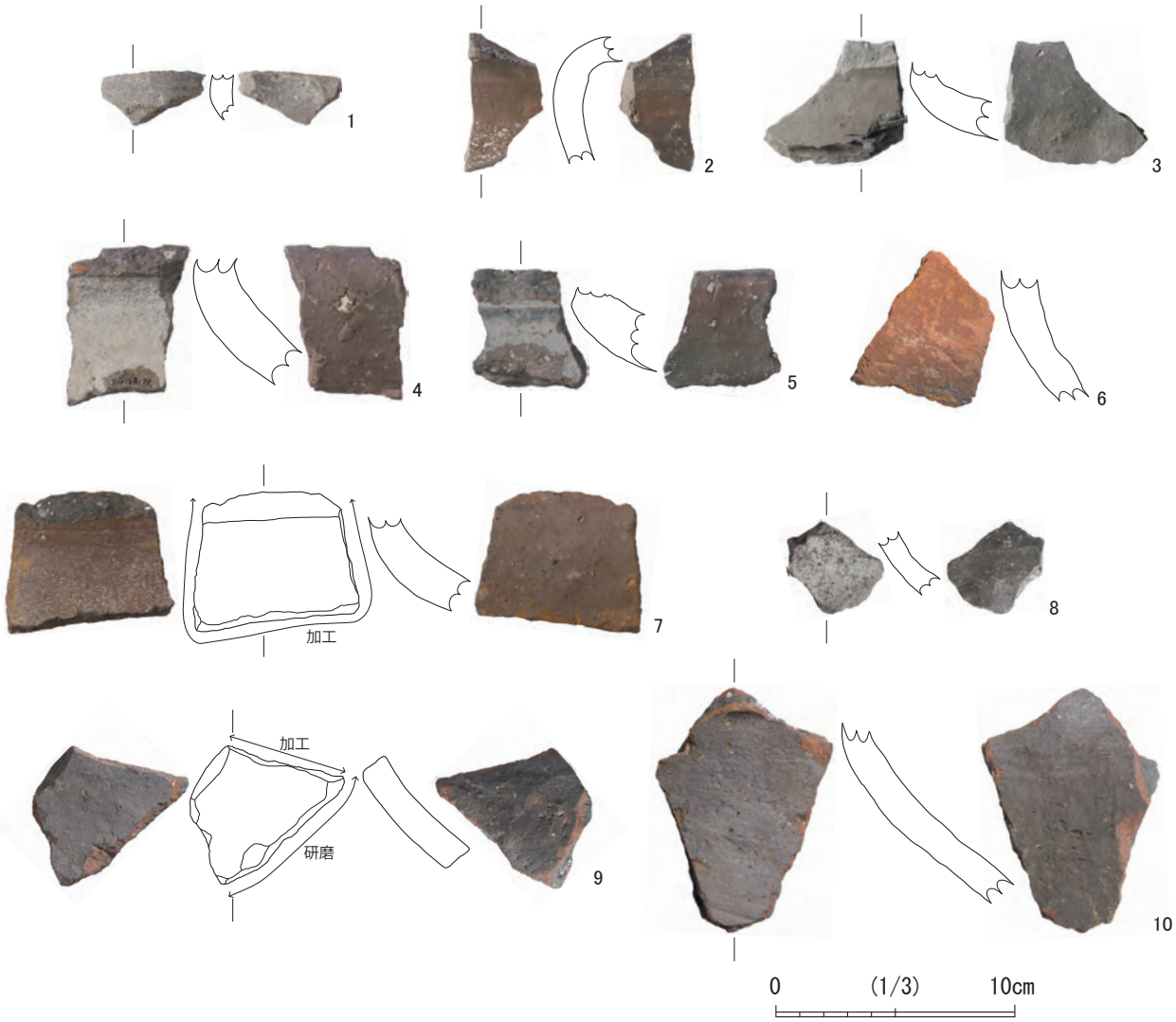
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	陶器	片口鉢	白石	内面は褐灰色。外面は橙色。胎土は黄灰色で白色大粒含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(3.6)
2	SD01	陶器	片口鉢	白石	内面はにぶい褐色。外面はにぶい橙色。胎土はにぶい黄橙色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.9)
3	SD01	陶器	片口鉢	常滑か	内外面ともに黄灰色。胎土は灰白色で白色粒を多く含む。			(4.2)
4	SD01	陶器	片口鉢	白石	内面は灰色。外面は灰黄褐色。胎土は褐灰色で白色粒を多量に含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.0)
5	SD01-2	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに灰色。胎土は灰色で砂粒（特に黒色ガラス質粒）を多く含む。内外面ロクロナデ。内面使用により磨滅。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.2)
6	SD01	陶器	片口鉢	常滑	内面は黄灰色。外面は灰黄褐色。胎土は灰色で白色粒，黒色ガラス質粒を含む。内面が使用により磨滅。第 1 段階 1a ～ 2。12 世紀前半～中頃。			(4.2)
7	SD01	陶器	片口鉢	常滑	内外面ともに灰色。胎土は灰色で白色粒，黒色ガラス質粒を含む。13 世紀。		(13.0)	(4.1)
8	SD01	陶器	片口鉢	白石か	内外面ともに灰色。胎土は灰色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。		(20.0)	(6.5)



第 158 図　SD01 出土遺物4

第 96 表　SD01 出土遺物観察表4

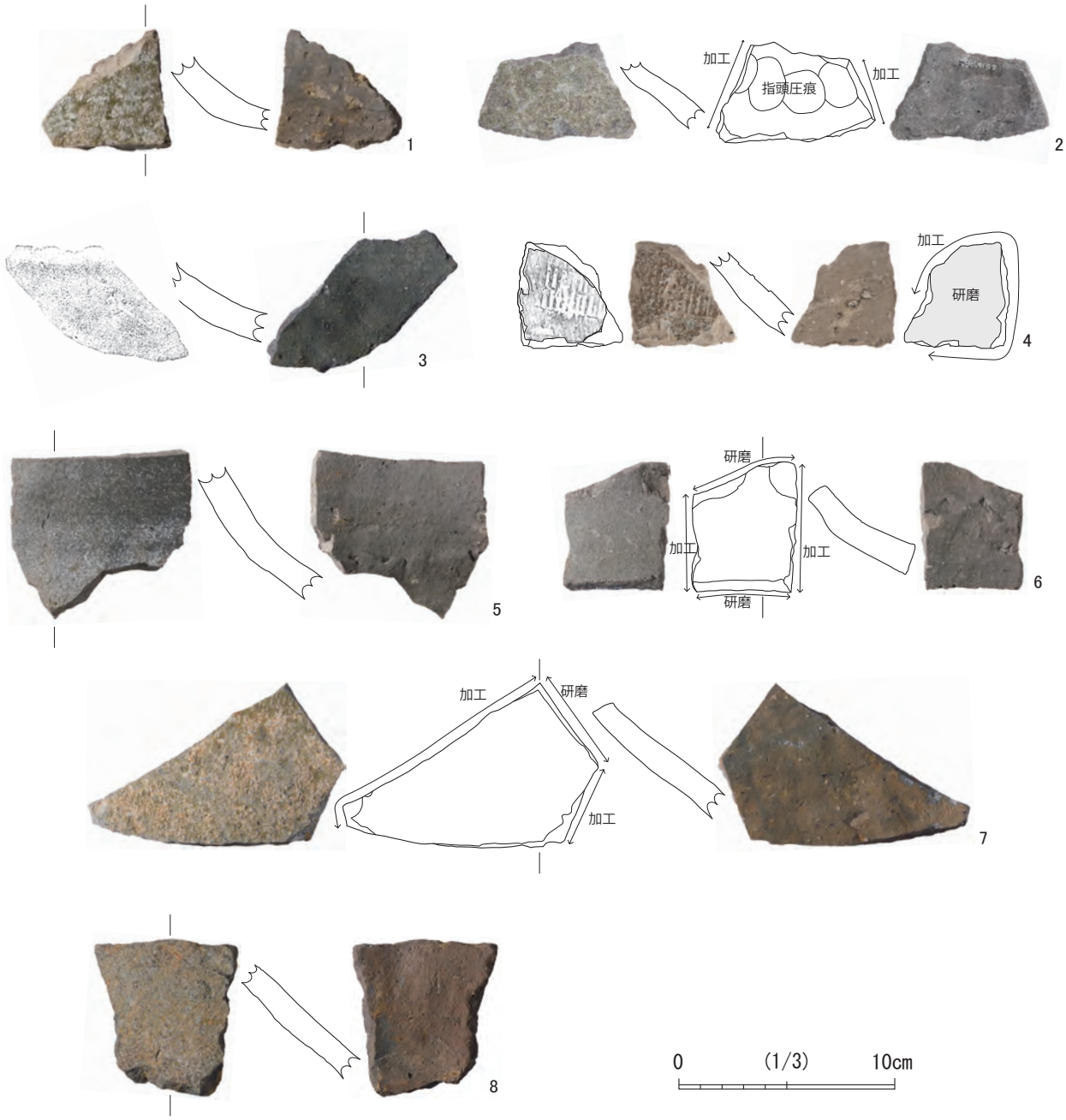
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	陶器	壺	常滑	内面は褐灰色。外面は灰色。内外面に自然釉付着。胎土は灰色で白色粒を多く含む。常滑5型式。13世紀前半。			(2.4)
2	SD01-2	陶器	甕	常滑	内面は灰褐色。外面は明褐色。胎土は灰黄色で白色粒を含む。常滑5型式。13世紀前半。			(4.8)
3	SD01	陶器	甕	白石か	内外面ともに黄灰色。胎土は黄灰色で粗く,砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(5.7)
4	SD01	陶器	甕	常滑	内外面ともに灰色。胎土は灰色で白色粒を多く含む。第1段階4型式。12世紀末～13世紀初頭。			(5.3)
5	SD01	陶器	甕	白石	内面は褐色。外面は灰褐色。胎土は橙色で砂粒（特に白色粒，赤色粒）を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。	(50.0)		(11.5)
6	SD01-2	陶器	短頸壺	白石	内面は灰褐色。外面に自然釉付着。胎土は褐灰色，砂粒を多く含む。13世紀後半～14世紀前半。			(5.3)
7	SD01	陶器	短頸壺	白石か	内外面ともに灰褐色。外面に自然釉付着。胎土は褐色で砂粒を含む。13世紀後半～14世紀前半。			(6.3)
8	SD01	陶器	甕	渥美	2 0型式。12世紀末～13世紀初。研磨土器に転用。			(3.6)



第 159 図 SD01 出土遺物5

第 97 表 SD01 出土遺物観察表5

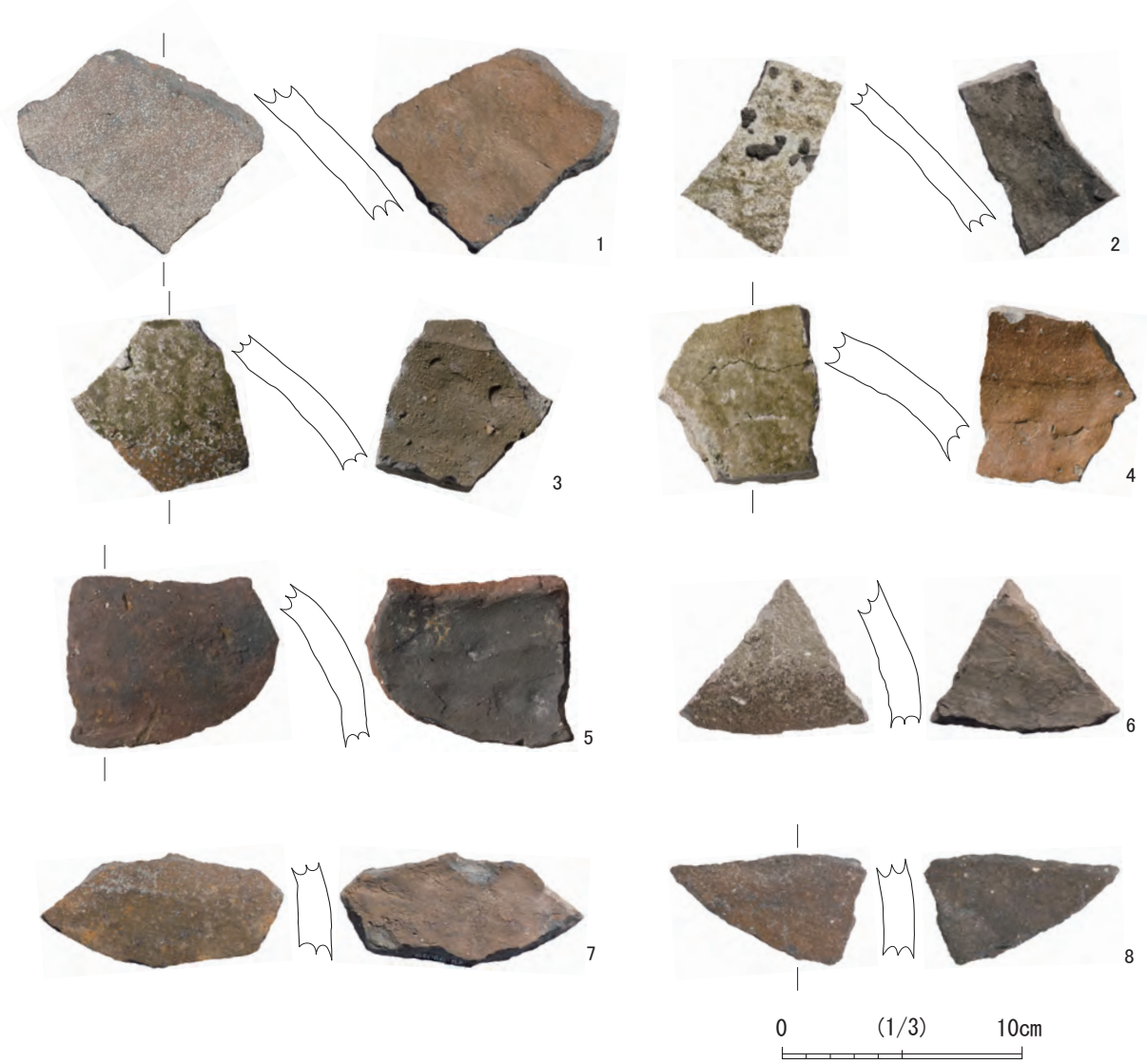
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01-1	陶器	壺	常滑か	内外面ともに黄灰色。内面に自然釉付着。胎土は黄灰色。			(1.9)
2	SD01-1	陶器	甕	常滑か	内外面ともに暗赤褐色。胎土は灰白色で白色粒を多く含む。常滑 4 ～ 5 型式。12 世紀末～ 13 世紀前半。			(5.5)
3	SD01	陶器	甕	常滑か	内外面ともに灰色。胎土は灰色で白色粒を含む。			(3.2)
4	SD01-2	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。外面に自然釉付着。胎土は黒褐色で白色大粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.4)
5	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。外面に自然釉付着。胎土は褐灰色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.6)
6	SD01	陶器	甕	白石	内面はにぶい赤褐色。外面は橙色。胎土は明赤褐色で砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.5)
7	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。外面に自然釉付着。胎土は黄灰色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.0)
8	SD01	陶器	甕	常滑か	内面は黄灰色。外面に自然釉付着。胎土は灰色で白色粒を多く含む。			(2.7)
9	SD01	陶器	甕	白石	研磨土器。内外面ともに褐灰色。胎土表面は褐色。胎土内は灰色。白色粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。	最大長 (5.8)	最大幅 (6.5)	最大厚 (1.3)
10	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに赤灰色。胎土表面はにぶい赤褐色。胎土内は暗灰色。砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.6)



第 160 図　SD01 出土遺物6

第 98 表　SD01 出土遺物観察表6

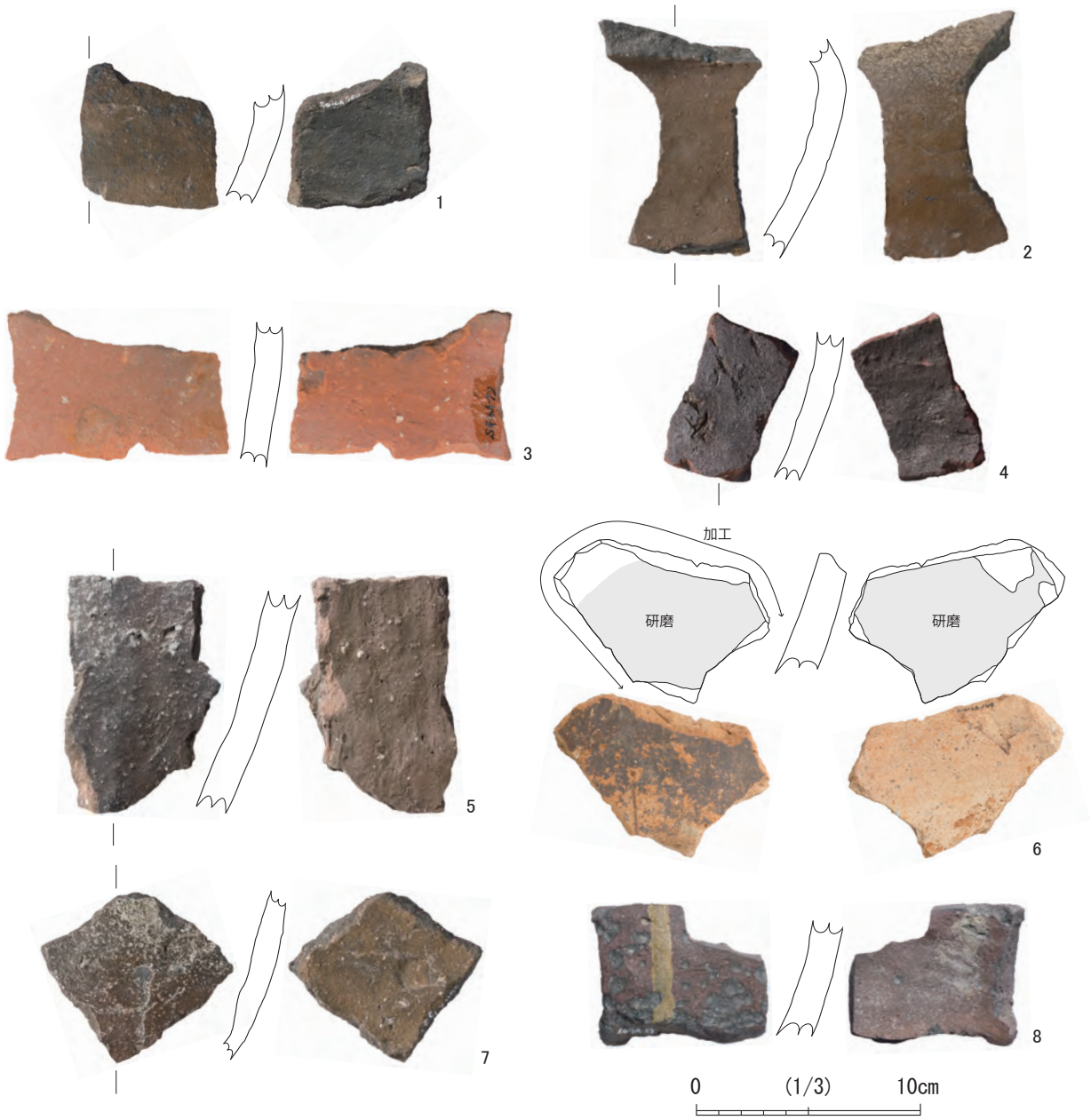
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	陶器	甕	常滑か	内面は黄灰色。外面に灰釉。胎土は灰色で白色粒を多く含む。			(3.4)
2	SD01	陶器	壺	渥美か	内面は灰色。外面に灰釉。胎土は灰色で黒色ガラス質粒を含む。12 世紀。研磨土器に転用。			(4.3)
3	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに暗灰色。胎土表面は暗灰色で胎土内は暗赤褐色。砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。			(3.7)
4	SD01-2	陶器	甕	常滑か	内面は黄灰色。外面は褐色で自然釉付着。胎土は灰白色で白色大粒含む。研磨土器に転用。			(3.8)
5	SD01-2	陶器	甕	白石か	内外面ともに灰釉。外面に自然釉付着。胎土は黄灰色で白色粒を多く含む。			(6.2)
6	SD01-1	陶器	甕	白石か	内面は黄灰色。外面は灰白色。胎土は黄灰色で白色粒を多く含む。12 世紀～ 14 世紀。研磨土器に転用。	最大長 (6.1)	最大幅 (4.8)	最大厚 (1.4)
7	SD01-2	陶器	甕	白石	内面はにぶい黄褐色。外面に自然釉。胎土表面は灰色で，胎土内は黄灰色。砂粒（特に白色粒）を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (7.6)	最大幅 (10.9)	最大厚 (1.3)
8	SD01	陶器	甕	白石	内面は灰褐色。外面に自然釉付着。胎土は黄灰色で粗く，砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.3)



第 161 図 SD01 出土遺物7

第 99 表 SD01 出土遺物観察表7

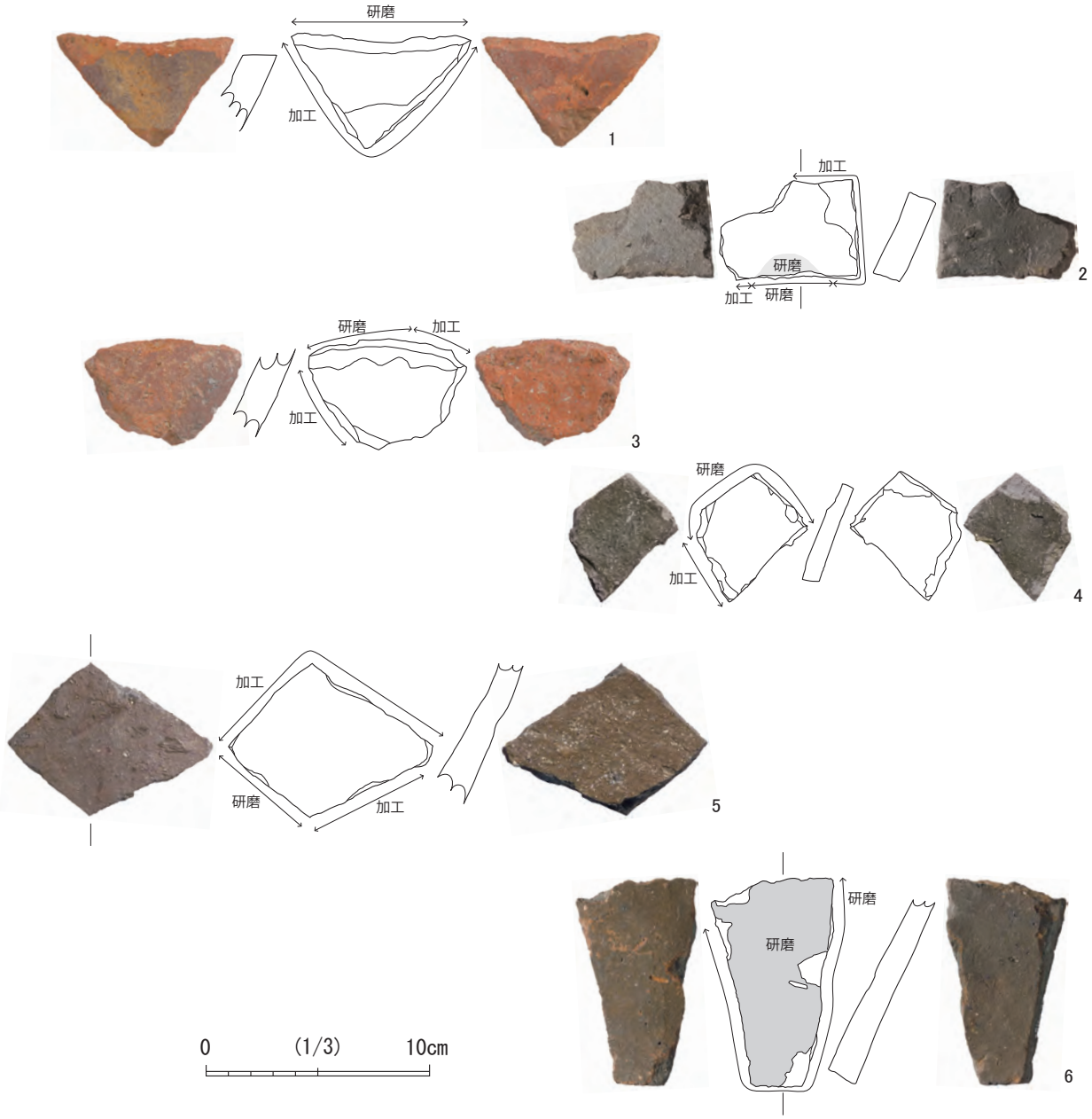
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともににぶい黄褐色。外面に自然釉付着。胎土は黄灰色で砂粒を多く含む。内面に斜方向ナデ。外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.6)
2	SD01	陶器	甕	白石	内面は灰色。外面に自然釉付着。胎土は灰白色。内面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.1)
3	SD01	陶器	甕	白石	内面は暗灰黄色。外面はにぶい黄褐色，自然釉付着。胎土は黄灰色。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.5)
4	SD01	陶器	甕	常滑か	内面は明褐色。外面に灰釉。胎土は灰白色。			(5.3)
5	SD01-2	陶器	壺	白石	内面は褐灰色。外面はにぶい赤褐色。胎土表面は赤褐色で胎土内は黒褐色。白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.8)
6	SD01-2	陶器	壺	常滑か	内面は褐灰色。外面は灰褐色，自然釉付着。胎土は褐灰色で白色大粒を含む。			(6.2)
7	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。外面に自然釉付着。胎土は灰色で白色粒，黒色ガラス質粒を多く含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.0)
8	SD01	陶器	甕	白石	内面は褐灰色。外面は灰褐色。胎土表面は褐灰色で胎土内は褐色。砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.1)



第 162 図　SD01 出土遺物8

第 100 表　SD01 出土遺物観察表8

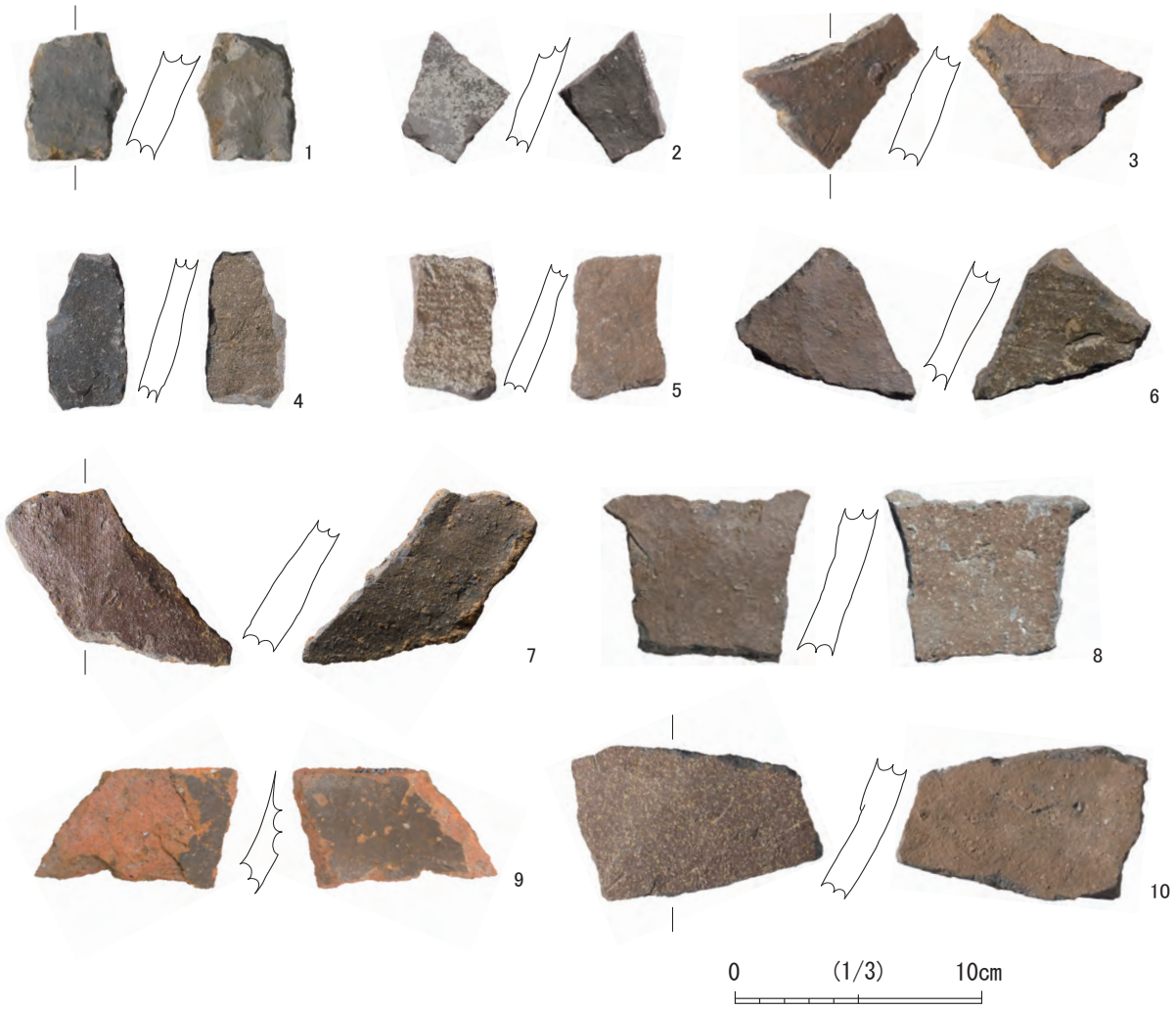
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	陶器	甕	白石	内面は黄灰色。外面は灰黄褐色。胎土表面は灰色。胎土内はにぶい橙色。砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.8)
2	SD01-2	陶器	壺	白石	内外面ともに褐色。外面に自然釉付着。胎土は褐灰色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(9.8)
3	SD01-1	陶器	甕	白石	内面は明赤褐色。外面はにぶい赤褐色。胎土は明赤褐色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.5)
4	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土表面はにぶい赤褐色。胎土内は暗灰色。砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.4)
5	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。外面上半に自然釉付着。胎土は黄灰色で砂粒を非常に多く含む。内外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(10.0)
6	SD01	陶器	甕	白石	内面はにぶい黄橙色。外面は黄灰色。胎土はにぶい黄橙色で白色粒，赤色粒を多く含む。周縁と内外面を研磨。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(5.4)
7	SD01	陶器	甕	白石	内面は灰黄褐色。外面は褐灰色，自然釉付着。胎土は黄灰色で白色粒を多量に含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.5)
8	SD01	陶器	壺	白石	内外面ともに暗赤褐色。外面に自然釉付着。胎土は褐灰色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.8)



第 163 図 SD01 出土遺物9

第 101 表 SD01 出土遺物観察表9

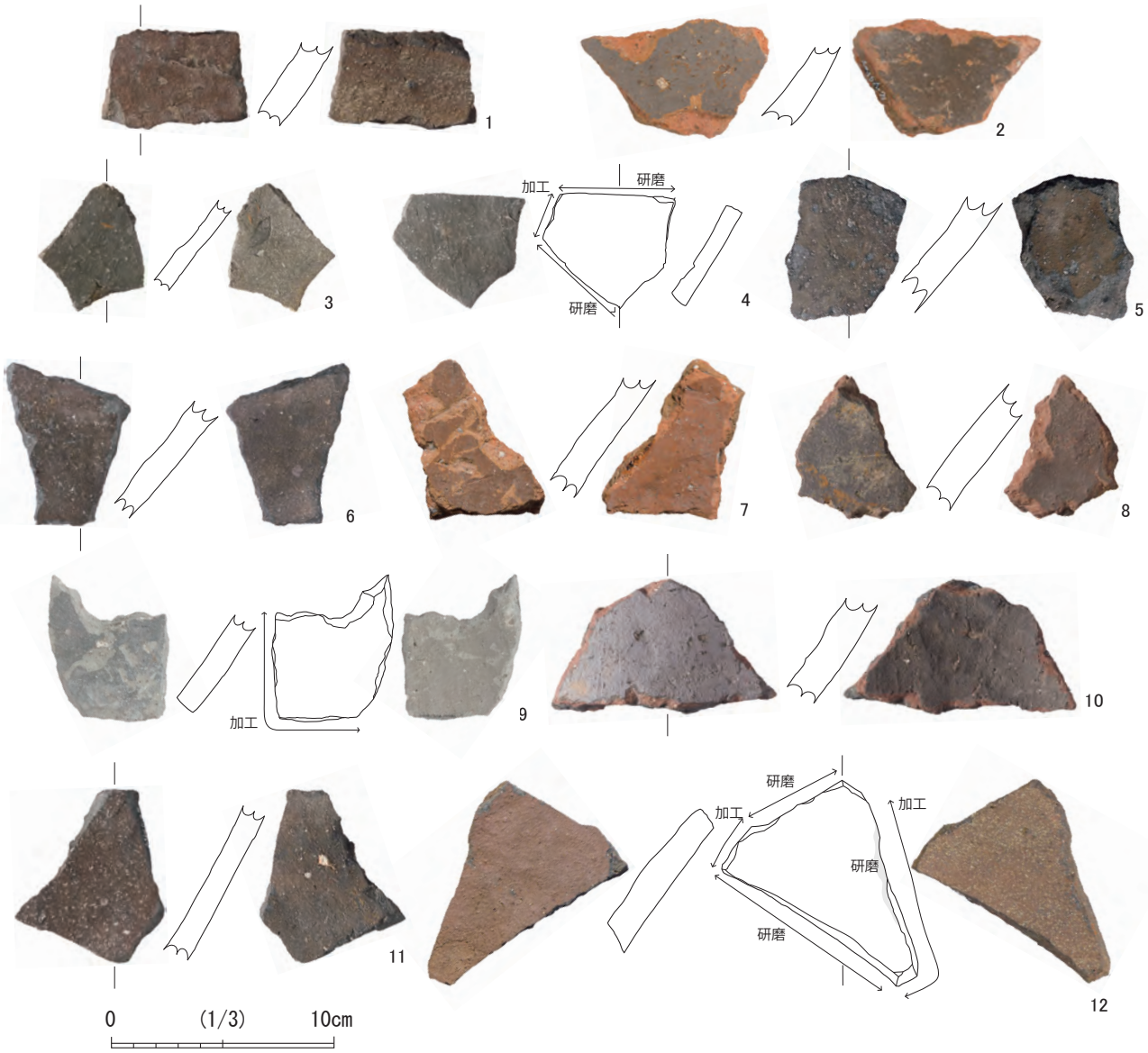
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	陶器	甕	白石	内面はにぶい赤褐色。外面は褐灰色。胎土は明褐色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(3.4)
2	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰色。胎土は暗灰黄色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(4.5)
3	SD01-2	陶器	甕	白石	内面は明赤褐色。外面はにぶい赤褐色。胎土は明赤褐色で白色粒を多量に含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(3.9)
4	SD01-2	陶器	甕	白石か	内外面ともに黄灰色。胎土は褐灰色で砂粒を含む。内外面に斜方向ナデ。研磨土器に転用。			(5.25)
5	SD01-1	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は褐灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(6.3)
6	SD01	陶器	甕	白石か	内面は褐灰色。外面は黄灰色。胎土は灰色で白色粒，黒色粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最 大 長 (9.35)	最 大 幅 (5.45)	最 大 厚 (1.3)



第 164 図　SD01 出土遺物 10

第 102 表　SD01 出土遺物観察表 10

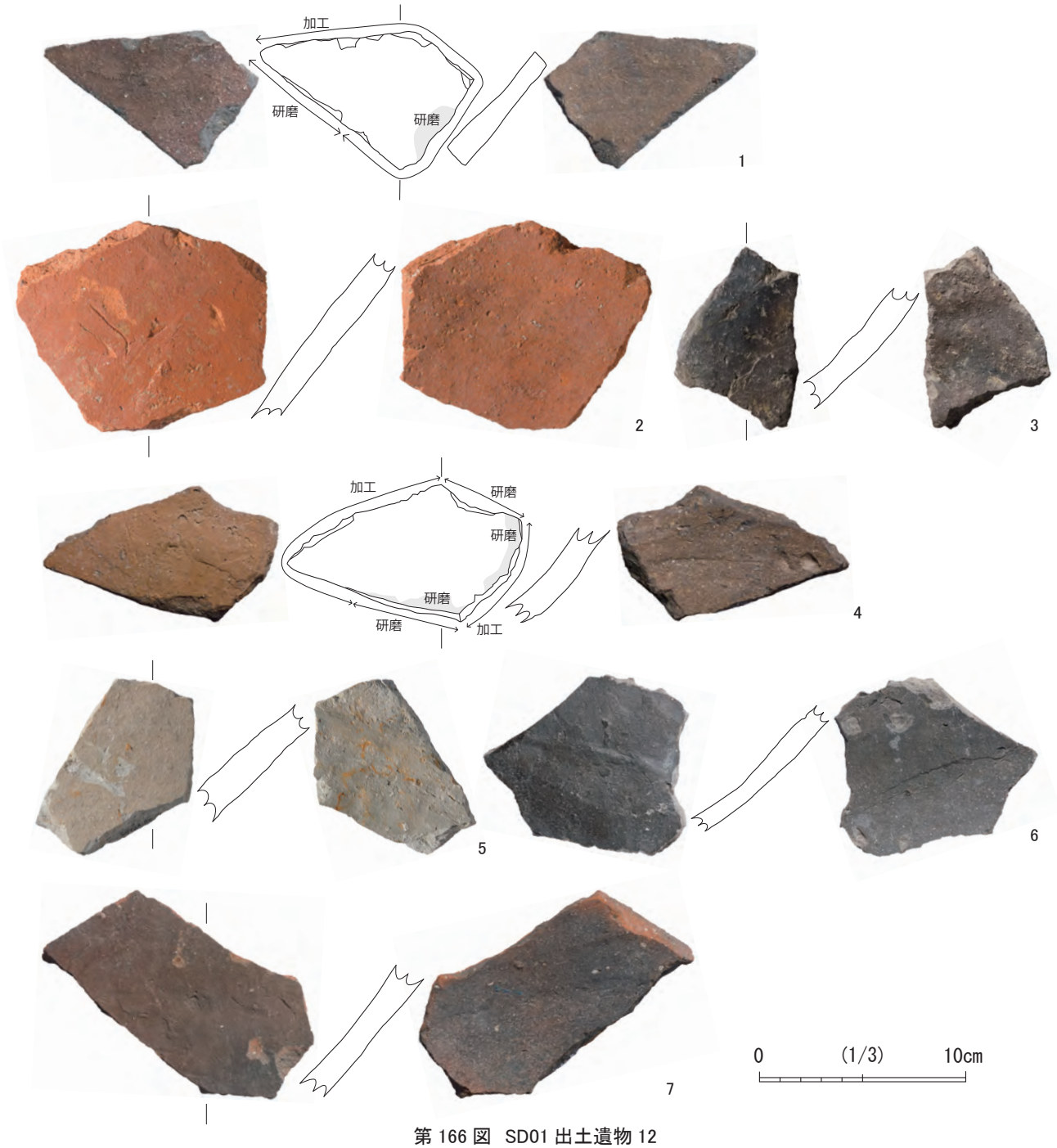
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	陶器	甕	常滑か	内外面ともに灰色。胎土は灰色で白色大粒を含む。			(4.4)
2	SD01	陶器	壺	白石か	内面は黄灰色。外面は灰色，自然釉付着。胎土は灰色で白色粒を含む。内面に斜方向ナデ。外面にヨコ方向ナデ。			(4.6)
3	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は黄灰色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.9)
4	SD01	陶器	甕	白石か	内面は暗灰黄色。外面と胎土は灰色。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。			(3.0)
5	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰黄褐色。外面に自然釉付着。胎土は黄灰色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.2)
6	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。内面に自然釉付着。胎土は褐灰色。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.2)
7	SD01-2	陶器	甕	白石	内面は黄褐色。外面はにぶい赤褐色。胎土は褐灰色。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.3)
8	SD01-1	陶器	甕	白石	内面は褐色，自然釉付着。外面は灰褐色。胎土は褐灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.9)
9	SD01-2	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土はにぶい橙色で白色粒，黒色ガラス質粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.0)
10	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は黄灰色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.7)



第 165 図 SD01 出土遺物 11

第 103 表 SD01 出土遺物観察表 11

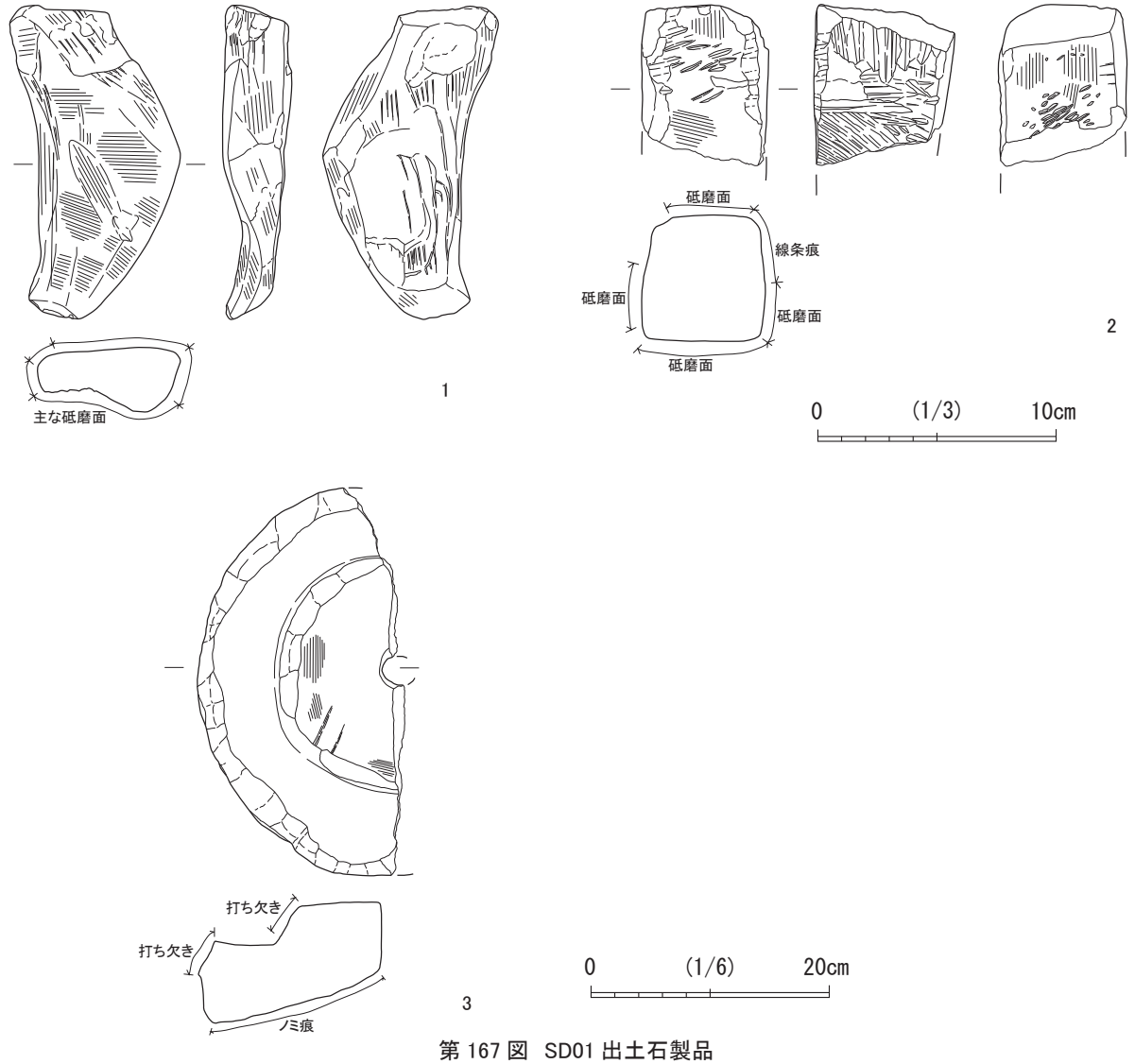
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は褐灰色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(3.6)
2	SD01-2	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土は明赤褐色で白色粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(3.5)
3	SD01	陶器	甕	白石か	内外面ともに灰色。胎土は灰色で砂粒（特に白色粒）を多く含む。			(6.0)
4	SD01-1	陶器	甕	白石か	内外面ともに灰色。胎土は灰色で白色粒を含む。研磨土器に転用。			(4.5)
5	SD01	陶器	甕	白石	内面は褐色。外面は褐灰色。胎土は暗灰色で砂粒を含む。内面にタテ方向ナデ。外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.2)
6	SD01	陶器	甕	白石か	内外面ともに褐灰色。胎土は暗灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。			(5.2)
7	SD01	陶器	甕	白石	内面はにぶい赤褐色。外面はにぶい褐色。胎土表面は橙色。胎土内は黄褐色。砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.4)
8	SD01	陶器	甕	白石	内面は黒褐色。外面は褐灰色。胎土表面は褐色。胎土内は黒褐色。白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.8)
9	SD01	陶器	甕	常滑か	内面は黄灰色。外面は灰色。胎土は灰色で白色粒を多く含む。研磨土器に転用。			(4.3)
10	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土表面は赤褐色。胎土内は灰色。砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.7)
11	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土は褐灰色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.95)
12	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土は暗灰色で砂粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (7.4)	最大幅 (7.4)	最大厚 (1.4)



第 166 図　SD01 出土遺物 12

第 104 表　SD01 出土遺物観察表 12

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高
1	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土は暗灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (6.7)	最大幅 (9.6)	最大厚 (1.3)
2	SD01	陶器	甕	白石	内外面ともに橙色。胎土は橙色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(8.0)
3	SD01-2	陶器	甕	常滑	内面は褐灰色。外面は黒褐色。胎土は褐灰色で白色粒を多く含む。			(5.9)
4	SD01-1	陶器	甕	白石	内面は灰褐色。外面はにぶい褐色。胎土は暗灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (6.65)	最大幅 (11.4)	最大厚 (1.3)
5	SD01	陶器	甕	常滑か	内外面ともに灰黄色。胎土は灰色で白色粒を含む。			(5.8)
6	SD01-2	陶器	甕	白石か	内外面ともに灰色。胎土は黄灰色。			(6.1)
7	SD01	陶器	甕	白石	内面は褐灰色。外面は灰褐色。胎土は灰色で白色粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.4)



第 167 図 SD01 出土石製品

第 105 表 SD01 出土石製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	特 徴	残 存	法 量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	SD01 新	石製品	砥石	不定形をなし、主な砥磨面は1面であるが、他の面にも研磨面あり。仕上げ砥とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	完存	13.2	6.0	2.7	241.0
2	SD01 古	石製品	砥石	角柱状の形態で、4面とも砥磨面である。その1面には線条痕も顕著に認められる。仕上げ砥か中砥とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	一部	(6.8)	(5.3)	(5.3)	(305.5)
3	SD01 古	石製品	石臼	茶臼の下臼。台部と受皿縁辺が意図的に打ち欠かれている。台部の目の溝はほとんど消失しており、部分的に擦痕のみが確認される。下面には全面ノミ痕が残る。石材は安山岩。	半欠	(32.5)	(17.4)	(10.1)	(5.3kg)

SD02（第 153 図）

調査区南部に位置し、調査区南壁から東側にかけて直線的にのびる溝跡である。SB04・05、SK06、SD07と重複し、いずれよりも古い。西側は調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 22.8m にわたって検出している。主軸方位は N-74° -E。検出面での規模は上幅 1.6m、下幅 0.7 m、確認面よりの深さは 50cm を測る。断面形状は箱形を呈し、西側から東側へ緩やかに傾斜している。堆積土は7層に分層でき、自然堆積である7層以外はすべて人為的埋土である。

SD03（第 153・168・169 図、第 106 表）

調査区北部に位置し、東西方向へ直線的にのびる溝跡である。SE09、SX01、SK19・20、SD18・19と重複し、いずれよりも古い。東側はSX01によって失い、西側ではSD18及び攪乱によって失うため全長は不明であるが、総長約 20.0m にわたって検出している。主軸方位は N-73°　-E。検出面での規模は上幅 1.9m、下幅 1.0m、確認面よりの深さは 60cm を測る。本遺構は掘方の形状、及び堆積土層の確認によって3回の掘削がされており、南側から北側へ移動している。いずれの時期の溝跡も断面形状は逆台形を呈する。底面では新旧それぞれ東側から西側へ緩やかに傾斜している。堆積土は最古段階の 14・15 層が自然堆積であるか、その他はすべて人為的埋土である。

第 169 図は SD03 出土遺物である。1 は常滑産陶器で 2 辺を加工 1 辺を研磨使用している。2 ～ 4 は白石産でいずれ研磨使用している。

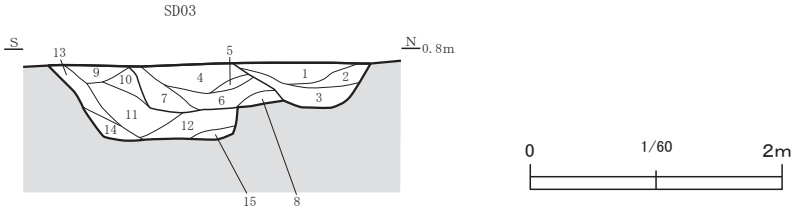
SD04（第 153・170 図、第 107 表）

調査区東部に位置し、南北方向へ直線的にのびる溝跡である。SB01・04、SD01・09と重複し、SB01・SD01・09よりも古く、SB04より新しい。総長約 27.2m にわたって検出している。主軸方位は N-11°　-W。検出面での規模は上幅 1.3m、下幅 0.6 m、確認面よりの深さは 50cm を測る。断面形状はU字状を呈し、南側から北側へ緩やかに傾斜している。堆積土は3層に分層でき、すべて自然堆積である。

第 170 図は SD04 出土の銭貨で、元祐通宝である。

SD05（第 153 図）

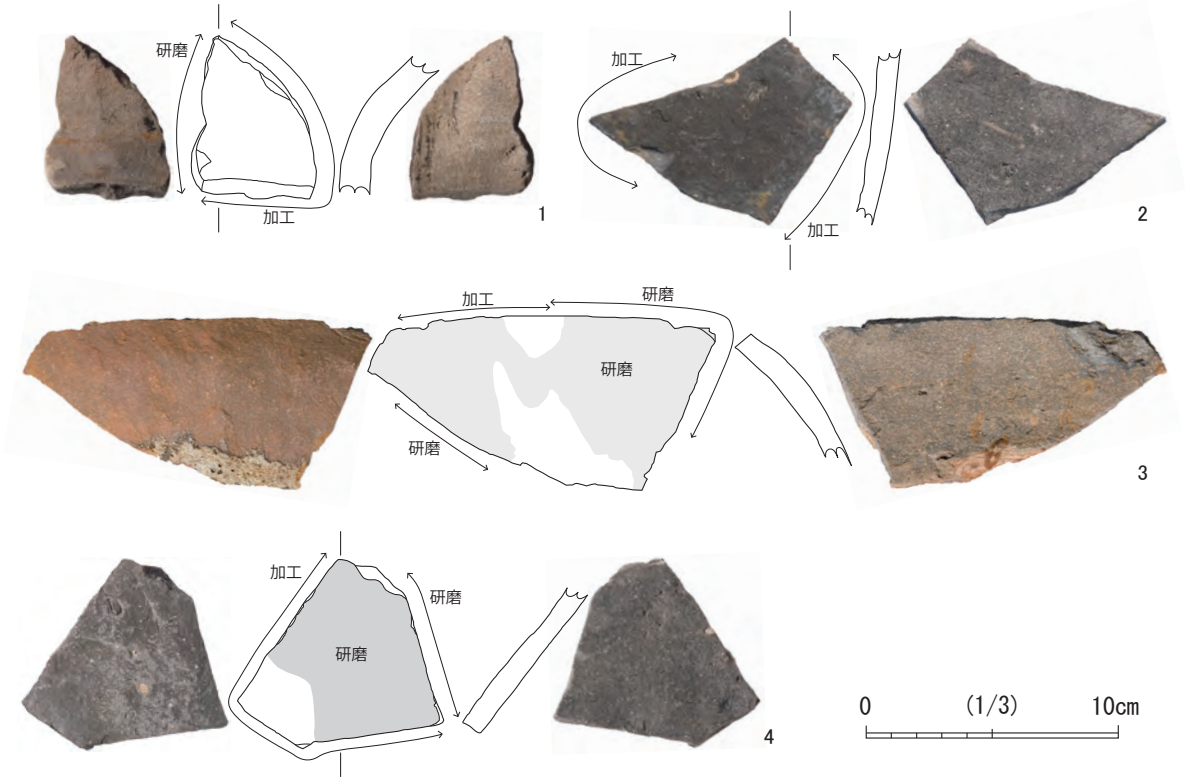
調査区南部に位置し、東西方向へ直線的にのびる溝跡である。SE02･SD16と重複し、SE02よりも古く、SD16より新しい。東・西とも調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 15.6m に渡って検出している。主軸方位は N-77°　-E。検出面での規模は上幅 1.2m、下幅 0.6 m、確認面よりの深さは 40cm を測る。断面形状はU字状を呈し、東側から西側へ緩やかに傾斜している。堆積土は4層に分層でき、すべて人為的埋土である。



SD03　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト粒を極めて多量、炭化物を少量含む。
2	黒褐色	10YR2/2	シルト	黒褐色シルト粒・黄褐色シルト粒をやや多く含む。
3	黒色	10YR2/1	シルト	黄褐色シルト粒を多量、黄橙色シルト中ブロックを少量、炭化物を微量含む。
4	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄橙色シルト中ブロックをやや多く、炭化物を少量含む。
5	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黒褐色シルト粒を少量含む。
6	黒褐色	10YR2/2	シルト	黄褐色シルト粒を多量、炭化物をやや多く含む。
7	黒褐色	10YR3/2	シルト	黄褐色シルト粒・炭化物を微量含む。
8	褐灰色	10YR4/1	シルト	黄橙色シルト小ブロックを少量含む。
9	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	暗褐色シルト中ブロックを少量含む。
10	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	マンガンを少量含む。
11	灰黄褐色	10YR4/2	粘質シルト	マンガン・暗褐色シルト中ブロックをやや多く含む。
12	黒褐色	10YR3/1	粘質シルト	灰白色粘質シルト小ブロックを少量含む。
13	褐色	10YR4/4	砂質シルト	暗褐色シルト小ブロックを多量含む。
14	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	黒褐色細粒砂の薄層を互層状に含む。
15	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト	黒褐色細粒砂を互層状に含む。

第 168 図　SD03 土層断面図



第 169 図 SD03 出土遺物

第 106 表 SD03 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD03-7	陶器	壺	常滑	内面は暗灰黄色。外面はにぶい褐色。胎土は褐灰色。研磨土器に転用。内外面と側縁に漆付着（側縁加工後に付着）。12 世紀～ 13 世紀。	最大長 (6.3)	最大幅 (4.9)	最大厚 (1.2)
2	SD03-ウ	陶器	甕	白石	内外面ともに黄灰色。内面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(6.95)
3	SD03	陶器	壺	白石	内面は褐灰色。外面はにぶい褐色，自然釉付着。胎土は灰白色。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(5.3)
4	SD03	陶器	甕	白石	内外面ともに灰色。胎土は灰色で白色大粒を含む。時期不明。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (7.1)	最大幅 (7.8)	最大厚 (0.9)

第 170 図 SD04 出土金属製品

第 107 表 SD04 出土金属製品観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	特 徴	法 量 径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
1	SD04	金属製品	銭貨	元祐通宝	24.06	1.05	2.16

SD06（第 153・171 図、第 108 表）

調査区南部に位置し、東西方向へ直線的にのびる溝跡である。SB06・07、SD02と重複し、SB07よりも古く、SB06、SD02より新しい。東側は調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 10.4m にわたって検出している。主軸方位は N-81° -E。検出面での規模は上幅 0.8m、下幅 0.6 m、確認面よりの深さは 20cm を測る。断面形状は皿形を呈し、西側から東側へ緩やかに傾斜している。堆積土は3層に分層でき、すべて人為的埋土である。

第 171 図は SD06 出土の白石産陶器である。13 世紀後半～ 14 世紀前半。

SD07（第 153・172 ～ 174 図、第 109 ～ 110 表）

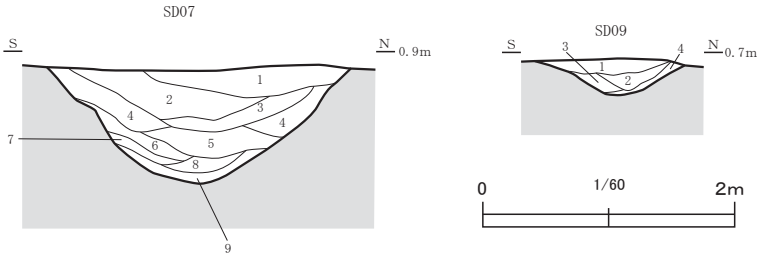
調査区南部に位置し、東西方向へやや弧状にのびる溝跡である。SE03・04、SK06、SD02と重複し、SE03・04よりも古く、SK06、SD02より新しい。西側は調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約 13.3m にわたって検出している。主軸方位は N-67°　-E。検出面での規模は上幅 2.4 ～ 3.5m、下幅 0.2 ～ 0.8 m、確認面よりの深さは 100cm を測る。断面形状は東側ではU字状、西側ではV字状を呈し、西側から東側へ緩やかに傾斜している。堆積土は9層に分層でき、すべて自然堆積である。

第 173・174 図は SD07 出土陶器と土製品である。陶器は第 173 図 3・8・9・10・12 は常滑産、そのほかは白石産である。第 173 図 3・12・第 174 図 1・7 で研磨に使用している。

第 171 図　SD06 出土遺物

第 108 表　SD06 出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD06	陶器	片口鉢	白石か	内外面ともに黄灰色。胎土は黄灰色で砂粒を含む。内外面ロクロナデ。内面は使用により磨滅。			(6.3)



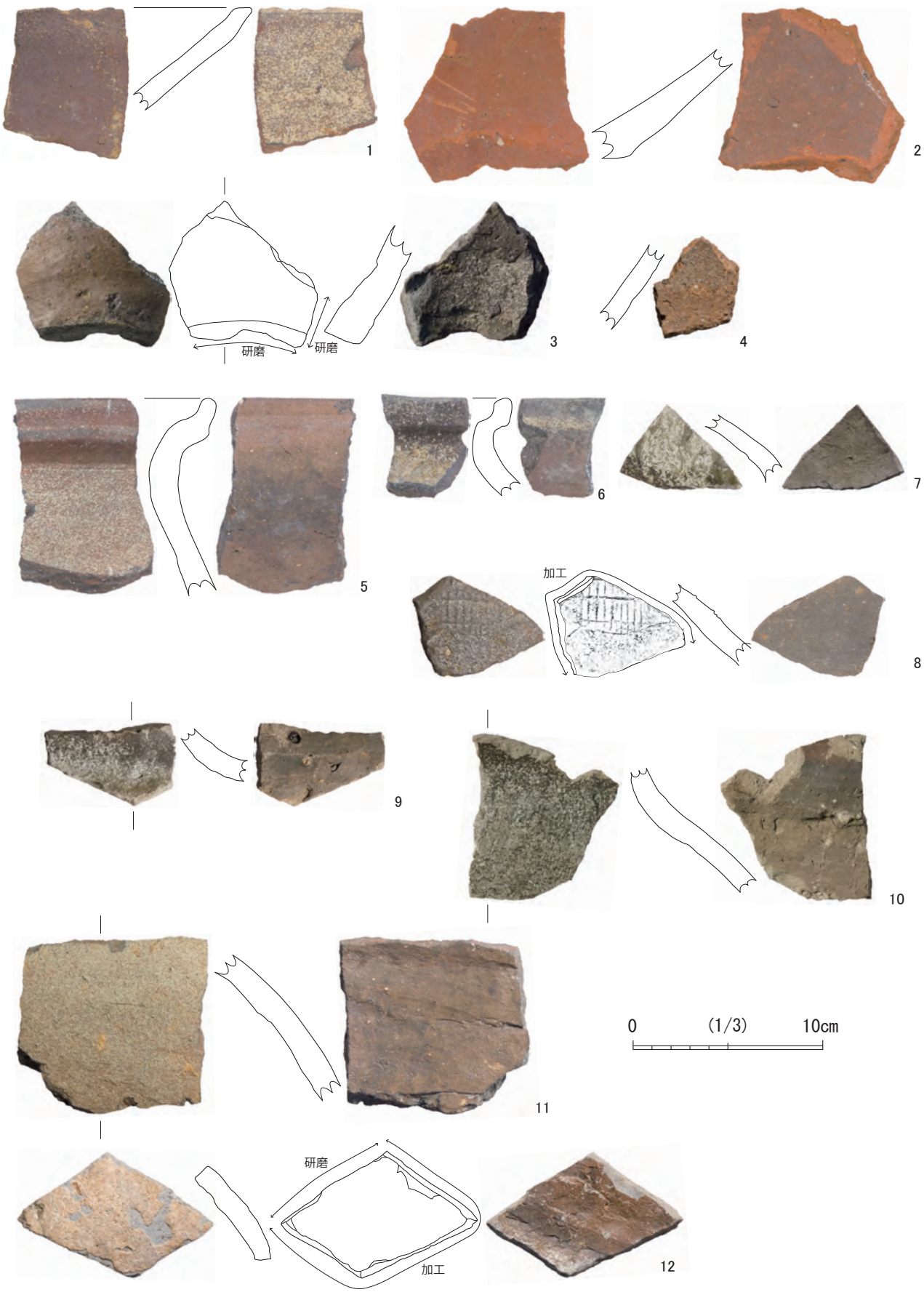
SD07　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト	褐色砂を微量含む。
2	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄褐色砂を微量含む。
3	黒褐色	10YR3/1	シルト	黄褐色砂を下位に集積する。
4	黒褐色	10YR3/1	砂質シルト	マンガンを多量含む。黄褐色砂を微量含む。
5	黒色	10YR2/1	粘土	灰色砂とオリーブ黒色粘土を互層状に含む。
6	灰色	10Y4/1	砂質シルト	マンガンをやや多く、黄褐色砂を少量含む。
7	黒色	10YR2/1	粘土	炭化物を少量含む。灰色砂を互層状に含む。
8	灰色	10Y4/1	砂質シルト	黒色粘土を互層状に含む。
9	灰色	10Y4/1	砂質シルト	灰色粘土を下位に集積する。

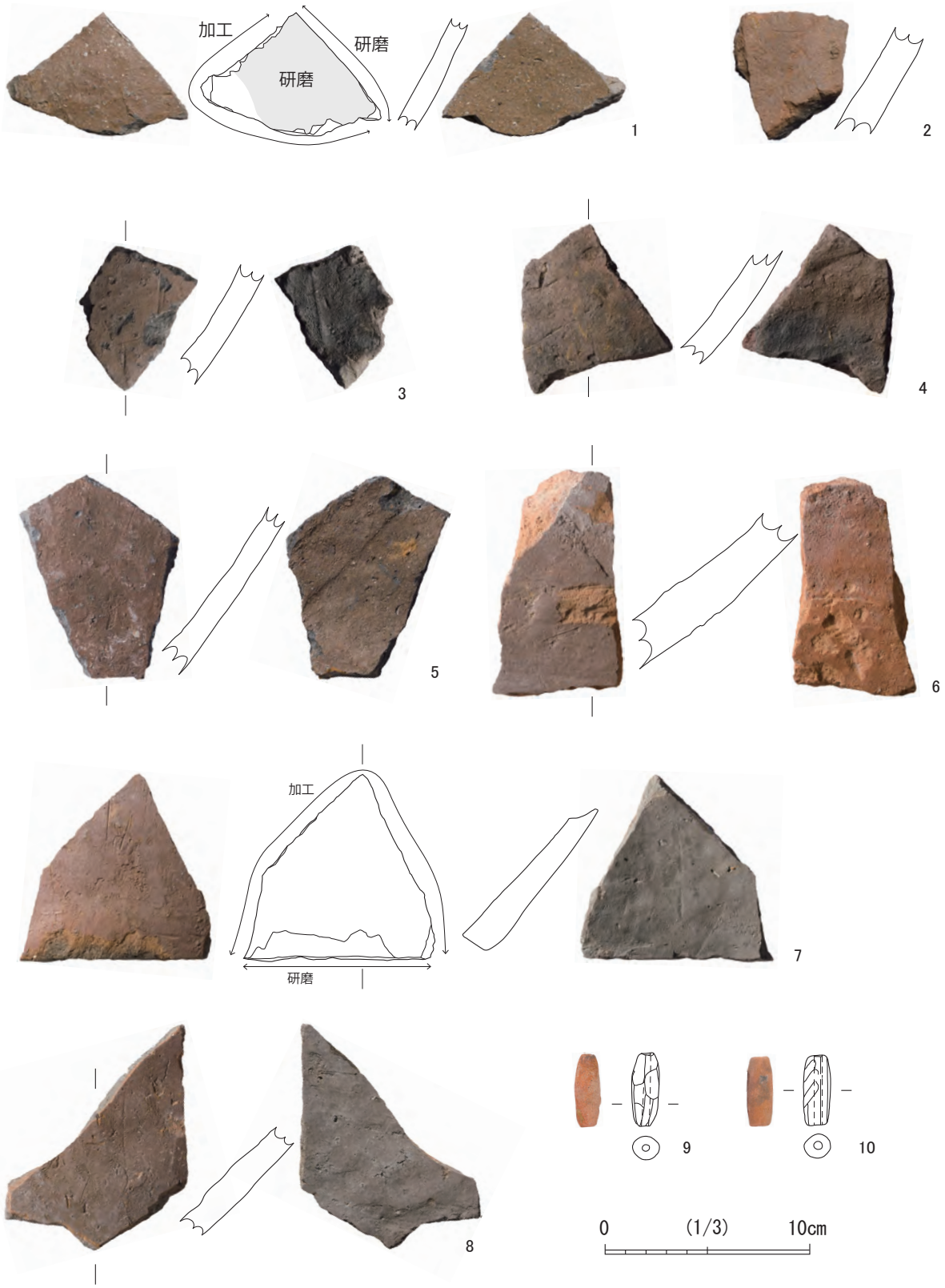
SD09　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	黒褐色	10YR2/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックを少量含む。
2	にぶい黄褐色	10YR5/3	砂質シルト	黒褐色シルト小ブロックを微量含む。
3	褐灰色	10YR4/1	シルト	褐灰色シルト中ブロックをやや多く含む。
4	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黒褐色シルト中ブロックを多量含む。

第 172 図　SD07・09 土層断面図



第 173 図 SD07 出土遺物 1



第 174 図　SD07 出土遺物 2

第 109 表 SD07 出土遺物観察表 1

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD07 上層	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに灰褐色。内面に自然釉付着。胎土はにぶい褐色で微砂粒多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.6)
2	SD07 下層	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに褐色。胎土表面は橙色。胎土内は灰黄褐色，砂粒を多く含む。内面磨滅。13 世紀後半～ 14 世紀前半。		(19.0)	(5.9)
3	SD07	陶器	片口鉢	常滑	内外面ともに灰褐色。胎土は褐灰色で白色粒，黒色ガラス質粒を多く含む。研磨土器に転用。	最 大 長 (7.5)	最大幅 (7.6)	最 大 厚 (2.0)
4	SD07	陶器	片口鉢	白石	内面はにぶい黄褐色，自然釉付着。外面はにぶい橙色。胎土はにぶい橙色で砂粒を含む。内外面にロクロナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.6)
5	SD07	陶器	甕	白石	内外面ともに黒褐色。胎土表面は灰色。胎土内はにぶい褐色。砂粒（特に白色粒）を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(10.8)
6	SD07	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。外面に自然釉付着。胎土は褐灰色，砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.3)
7	SD07	陶器	甕	不明	内面は暗灰黄色。外面は褐色，自然釉付着。胎土は灰色。内面にヨコ方向ナデ。			(4.6)
8	SD07 上層	陶器		常滑	内外面ともに黄灰色。外面に自然釉付着。胎土は黄灰色，砂粒を含む。第 1 段階 1b ～ 4。12 世紀後半～ 13 世紀初頭。			(4.5)
9	SD07	陶器	甕	常滑か	内面は黄灰色。外面は黒褐色，自然釉付着。胎土はにぶい黄色で白色粒を含む。			(4.2)
10	SD07	陶器	甕	常滑	内面はにぶい赤褐色。外面は暗赤褐色，自然釉付着。胎土は灰黄褐色で白色大粒を含む。3 ～ 6a 型式。12 世紀後半～ 13 世紀後半。			(6.7)
11	SD07	陶器	甕	白石	内外面ともに灰黄褐色。外面に自然釉付着。胎土は黒褐色で砂粒を多く含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.9)
12	SD07	陶器	壺	常滑か	内面はにぶい赤褐色。外面に自然釉付着。胎土は灰黄色。内面にヨコ方向ナデ。研磨土器に転用。			

第 110 表 SD07 出土遺物観察表 2

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD07	陶器	甕	白石	内外面ともににぶい赤褐色。胎土は褐灰色で白色粒を多く含む。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(5.5)
2	SD07	陶器	甕	白石	内面は褐灰色。外面はにぶい赤褐色。胎土は褐灰色で白色粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.2)
3	SD07	陶器	甕	白石	内面は黄灰色。外面は灰褐色。胎土は灰色で白色粒，黒色ガラス質粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.2)
4	SD07	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土表面は褐灰色。胎土内は灰褐色。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.8)
5	SD07	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。胎土表面は黄灰色。胎土内はにぶい赤褐色。砂粒を含む。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(8.2)
6	SD07	陶器	甕	白石	内面は橙色。外面は灰褐色。胎土は橙色。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(11.05)
7	SD07	陶器	甕	白石	内面は褐灰色。外面はにぶい褐色。胎土は灰色で白色粒，赤褐色粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最 大 長 (9.0)	最 大 幅 (9.1)	最 大 厚 (1.6)
8	SD07	陶器	甕	白石	内外面，胎土のいずれも褐灰色。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.4)
9	SD07 下層	土製品	土錘		胎土はにぶい赤褐色。	最 大 長 (3.6)	最 大 幅 (1.3)	孔 径 (0.35)
10	SD07 上層	土製品	土錘		胎土はにぶい赤褐色。	最 大 長 (3.4)	最 大 幅 (1.3)	最 大 厚 (1.3)

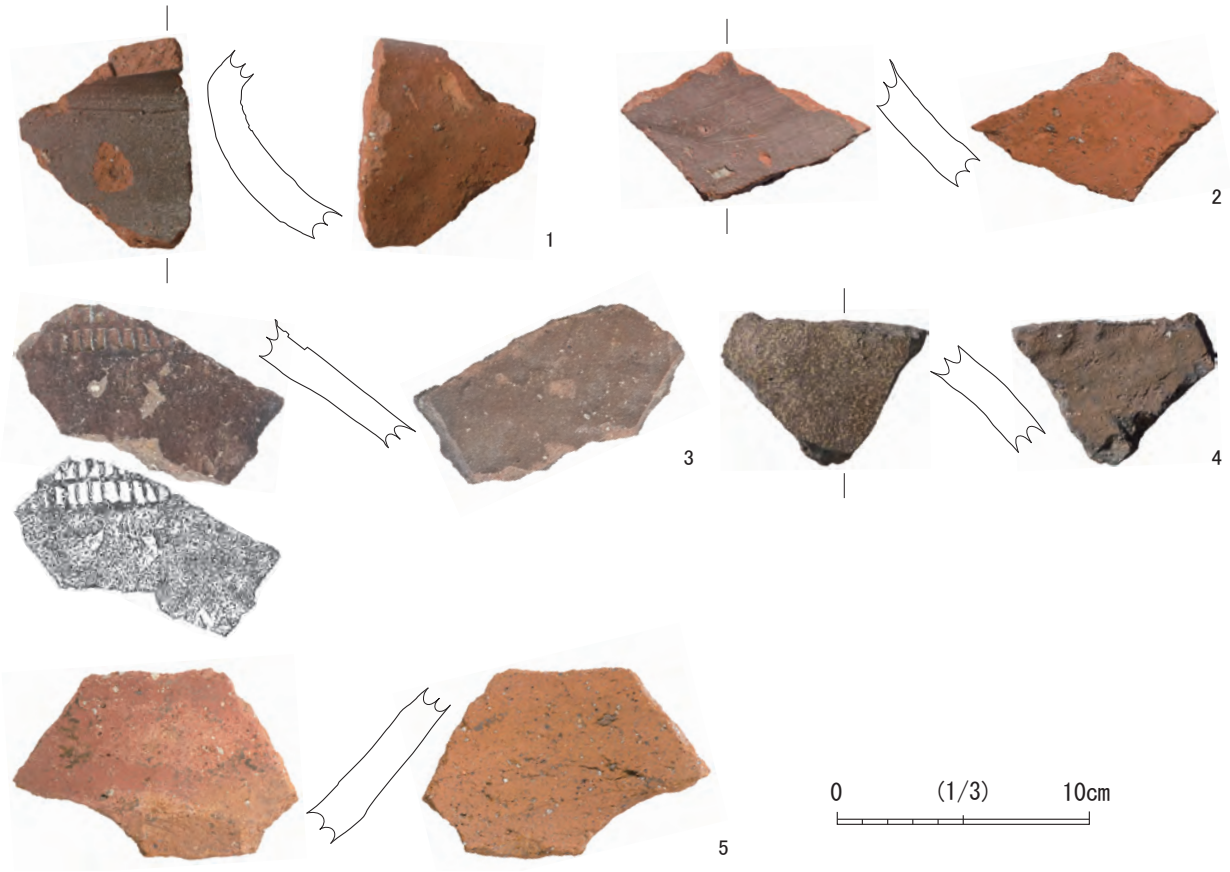
SD09（第 153・172・175 図、第 111 表）

調査区北部に位置し、東西方向へ直線的にのびる溝跡である。SB01、SD04・08と重複し、SB01、SD08よりも古く、SD04より新しい。東側でSD08と重複することから全長は不明であるが、総長約 24.0m にわたって検出している。主軸方位は N-67° -E。検出面での規模は上幅 0.5 ～ 1.4m、下幅 0.2 ～ 0.4 m、確認面よりの深さは 30cm を測る。断面形状は東側ではU字状を呈し、西側から東側へ緩やかに傾斜している。堆積土は4層に分層でき、1層が人為的埋土、2～4層が自然堆積である。

第 175 図は SD09 出土の白石産陶器である。3 は外面に長方形スタンプを押印する。13 世紀後半～ 14 世紀前半

SD10（第 153・176 図、第 112 表）

調査区中央西寄りに位置し、南北方向へ直線的にのびる溝跡である。SD01と重複し、これより新しい。全長は 25.0 mで主軸方位は N-7° -W。検出面での規模は上幅 0.9 ～ 1.5m、下幅 0.4 ～ 0.8 m、確認面



第 175 図　SD09 出土遺物

第 111 表　SD09 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD09	陶器	甕	白石	内面はにぶい赤褐色。外面は赤灰色，自然釉付着。胎土は明赤褐色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.5)
2	SD09	陶器	甕	白石	内面は明赤褐色。外面は灰褐色。胎土は明赤褐色で白色大粒を含む。内外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.1)
3	SD09	陶器	甕	白石	内面は灰褐色。外面は灰赤色。胎土は褐灰色，砂礫を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。外面に長方形スタンプ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.3)
4	SD09	陶器	甕	白石	内外面ともに灰褐色。外面に自然釉付着。胎土表面は褐灰色。胎土内は灰褐色。砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.2)
5	SD09	陶器	片口鉢	白石	内面は橙色。外面はにぶい橙色。胎土は橙色で砂粒を多く含む。外面は被熱による赤化，磨滅あり。内面にヨコ方向ナデ。外面はロクロナデ，下端にヘラケズリ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.2)

よりの深さは 20 ～ 50cm を測る。断面形状は浅いU字状を呈するが、底面は凹凸が著しい。堆積土は8層に分層でき、すべて人為的埋土である。

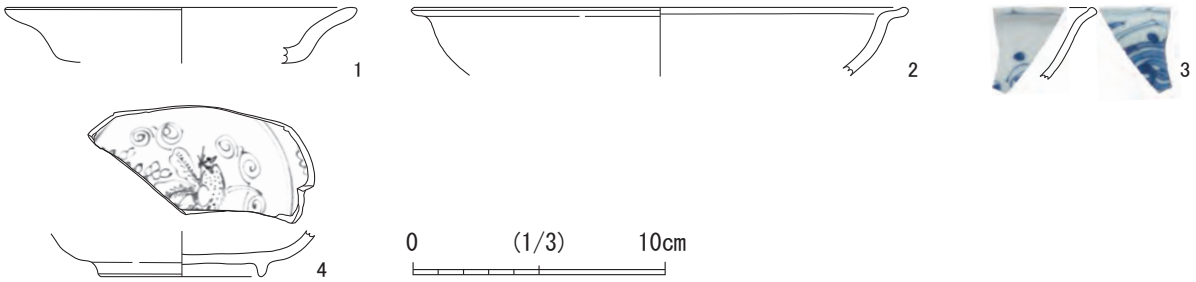
第 176 図は SD10 出土遺物である。1 は瀬戸美濃産反り皿で 17 世紀後半。2 は龍泉窯系青磁坏で太宰府編年で 13 世紀中頃～ 14 世紀初頭である。3・4 は青花磁器皿である。3 は芙蓉手の中でも桃果形の文様区画をもつ明山手で 17 世紀前半、4 は素描による草花文を描き 17 世紀後半か。

SD11（第 153・177 図、第 113 表）

調査区南部西寄りに位置し、南北方向へ直線的にのびる溝跡である。SD12と重複し、これより新しい。南側は調査区外へ展開することから全長は不明であるが、総長約 3.3m にわたって検出している。主軸方位は N-7°　-W。検出面での規模は上幅 2.4m、下幅 0.6 m、確認面よりの深さは 100cm を測る。断面形状はV字状を呈するが、西側の立ち上がりは中位から上位にかけては大きく開いている。堆積土は 12 層に分

層でき、1層が人為的埋土、そのほかはすべて自然堆積である。

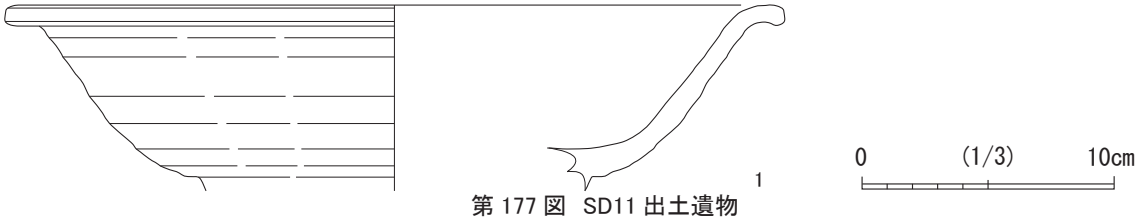
第 177 図は SD11 出土の瀬戸美濃産陶器大皿で、16 世紀末～ 17 世紀初頭である。



第 176 図 SD10 出土遺物

第 112 表 SD10 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD10-1	陶器	皿	瀬戸美濃	反り皿。内外面に灰釉（オリーブ黄色）。胎土は灰白色で精良，軟質。登窯第 1 段階第 3 ～ 4 小期。17 世紀後半。	(14.0)		(2.2)
2	SD10-2	青磁	坏	龍泉窯系	内外面灰オリーブ色。胎土は精良，にぶい黄橙色。太宰府編年Ⅲ -3-a。13 世紀中頃～ 14 世紀初頭。	(19.7)		(2.7)
3	SD10-1	青花磁器	皿	輸入磁器	芙蓉手（明山手）。17 世紀前半。			3.0
4	SD10-1	青花磁器	皿	輸入磁器	見込に素描による草花文。17 世紀後半か。		6.5	(1.8)



第 177 図 SD11 出土遺物

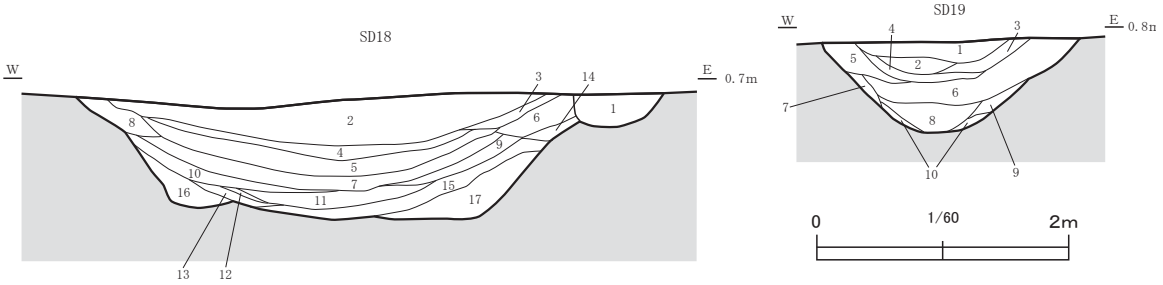
第 113 表 SD11 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD11	陶器	皿	瀬戸美濃	大皿。内外面に灰釉（オリーブ黄色）。胎土は灰白色，精良，軟質。大窯第 4 段階後半～末。16 世紀末～ 17 世紀初。	(31.0)		(7.4)

SD18（第 153・178 ～ 181 図、第 114 ～ 116 表）

調査区西部に位置し、南北方向へ直線的にのびる溝跡である。SB02、SE12、SX02、SD01・03と重複し、SB02、SE12、SX02より古く、SD01・03より新しい。また南西部付近は攪乱によって失われる。北側、及び南側は調査区外へ展開することから全長は不明であるが、総長約 25.6m にわたって検出している。主軸方位は N-8° -W。本遺構は調査時に発生する土の搬出や調査期間等の関係から部分的な調査に留まるが、検出面での規模は上幅 4.5m、下幅 2.8 m、確認面よりの深さは 110cm を測る。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は 16 層に分層でき、すべて自然堆積である。

第 179 ～ 181 図は SD18 出土遺物である。第 179 図 1 ～ 4 は白石産陶器で 13 世紀後半～ 14 世紀前半。5 は土師質鉢型土器の体部から底部で内面に油煙痕がみられる。第 180・181 図は木製品である。連歯下駄が1点と差歯下駄が1点、へら状木製品が出土している。連歯下駄は台部が小判型をなし、鼻緒穴は方形に近い。歯部は使用により甚だしく磨り減っている。木取りは板目材である。差歯下駄は露卯下駄で、台部の形状は方形に近い。歯部とも木取りは板目材である。へら状木製品は長さが 67.7cm あり、幅は欠損ために不明である。明確に柄と身に分けて加工されており、断面形はそれぞれ柄が楕円形に身が扁平に作られている。木取りは柾目材である。



SD18　土層注記

層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト	黄橙色シルト中ブロック・マンガンをやや多く含む。
2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	黄橙色シルト小ブロックをやや多く、灰白色シルト粒を微量含む。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土	粘性強い。マンガンを少量含む。
4	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土	褐灰色シルト小ブロックを多量含む。植物遺体の薄層が下位にみられる。
5	オリーブ黒色	5Y3/2	粘土	分解が進んだ植物遺体を粒状に少量含む。
6	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	マンガンを多量、黄橙色シルト粒を微量含む。
7	暗褐色	10YR3/3	泥炭	未分解の植物遺体を多量含む。灰色粘土中ブロックを少量含む。
8	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	褐灰色シルト小ブロックを少量含む。
9	黄灰色	2.5Y4/1	粘土	灰色砂を小ブロック状に少量含む。
10	黒褐色	10YR3/1	泥炭	褐灰色粘土中ブロックを少量、植物遺体を層全体に含む。
11	黒色	2.5Y2/1	泥炭	灰白色粘土の薄層を互層状に含む。
12	褐灰色	10YR5/1	砂	細粒砂主体。褐色砂を少量含む。
13	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土	褐灰色細粒砂を互層状に含む。植物遺体を少量含む。
14	黒色	2.5Y2/1	泥炭	灰オリーブ色シルト中ブロックをやや多く含む。
15	オリーブ黒色	5Y3/1	粘土	灰色細粒砂を互層状に含む。
16	褐灰色	10YR5/1	砂	微粒砂主体。灰黄褐色粘土大ブロックを多量、植物遺体をごく微量含む。
17	黒褐色	10YR3/2	シルト	灰白色粘土小ブロックを少量含む。

SD19　土層注記

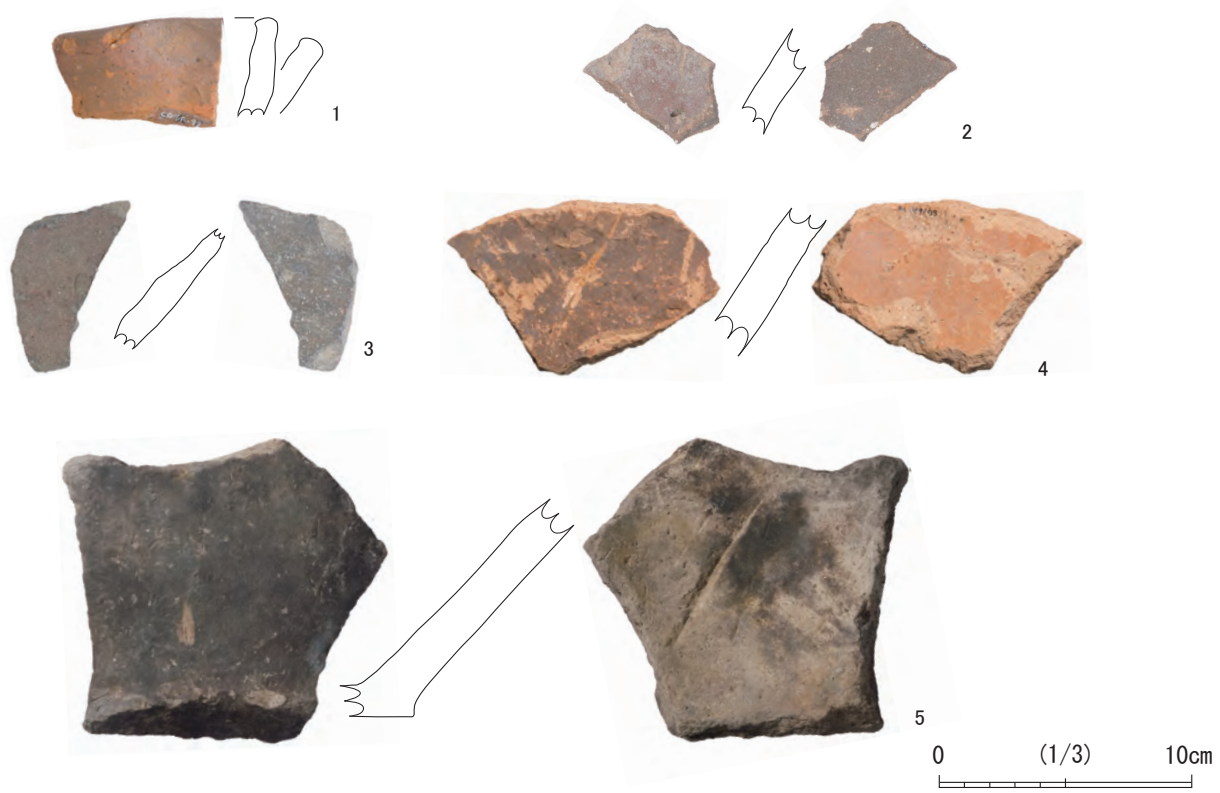
層No.	土　色		土　質	特　　徴
1	灰黄色	2.5Y5/2	粘質シルト	マンガンをやや多く含む。
2	黄褐色	10YR5/6	シルト	暗褐色シルト中ブロックを極めて多量含む。
3	暗褐色	10YR3/3	シルト	焼土粒をごく微量含む。
4	褐灰色	10YR4/1	シルト	上位にマンガンを集積。植物遺体を少量含む。
5	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト	暗褐色シルト大ブロックをやや多く含む。
6	暗褐色	10YR3/3	シルト	黄褐色シルト小ブロックをやや多く、黄橙色シルト中ブロックを微量含む。
7	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	暗褐色シルト小ブロックをやや多く含む。
8	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト	植物遺体を少量含む。灰白色粘土の薄層を含む。
9	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	褐色粗粒砂を多量含む。
10	灰オリーブ色	5Y5/2	粘土	黒褐色粘土の薄層を少量含む。

第 178 図　SD18・19 土層断面図

SD19（第 153・178・182・183 図、第 117・118 表）

調査区西部に位置し、南北方向へ直線的にのびる溝跡である。SB02、SK19･20、SD01･03と重複し、SB02、SK19・20より古く、SD01・03より新しい。総長約 3.3m にわたって検出している。全長は 21.4 mで主軸方位は N-7°　-W。検出面での規模は上幅 2.1m、下幅 0.4 m、確認面よりの深さは 80cm を測る。断面形状はU字状を呈する。堆積土は 10 層に分層でき、1～3層が人為的埋土、そのほかはすべて自然堆積である。

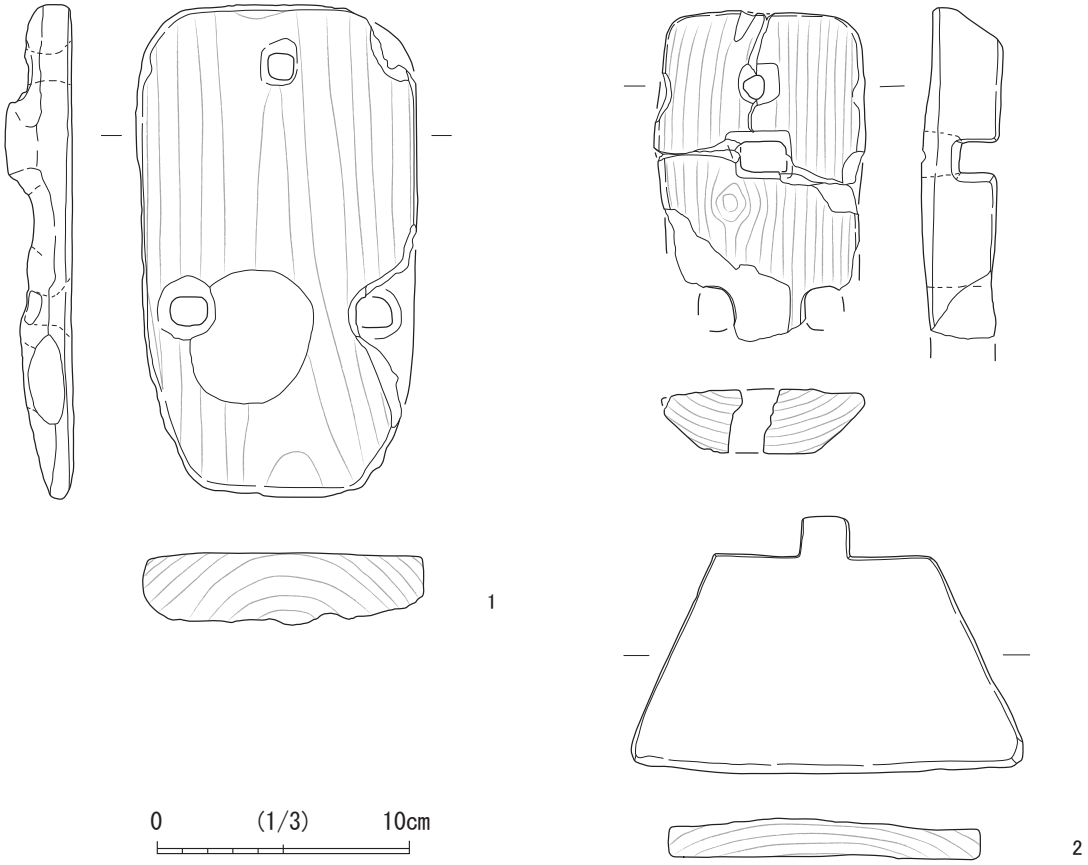
第 182・183 図は SD019 出土遺物である。第 182 図 2 は岸窯系陶器の擂鉢で 17 世紀後半から 18 世紀。1･3 ～ 5 は白石産陶器で 13 世紀後半～ 14 世紀前半である。第 183 図は SD019 から出土した砥石である。角柱状の形態で、4面とも砥磨面である。



第 179 図 SD18 出土遺物

第 114 表 SD18 出土遺物観察表

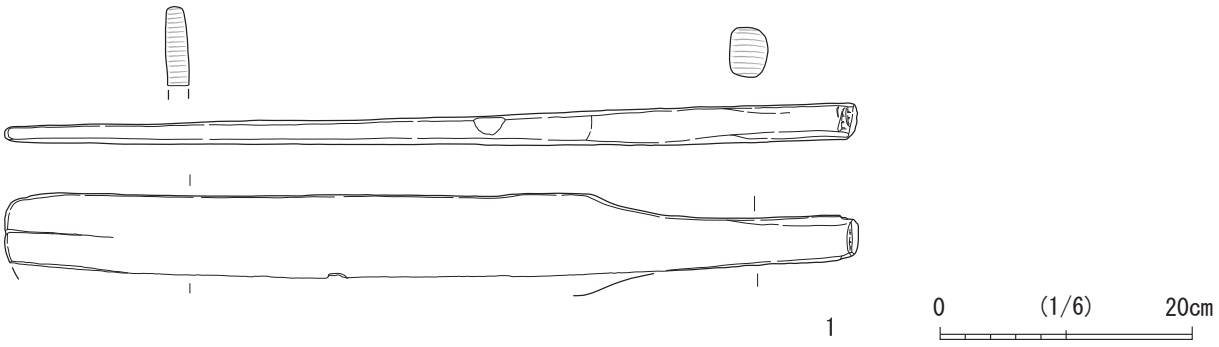
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD18	陶器	片口鉢	白石	内面は褐灰色。外面は明赤褐色。胎土は橙色で砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(3.9)
2	SD18	陶器	片口鉢	白石	内面は褐灰色。外面は灰褐色。胎土表面はにぶい褐色。胎土内は褐灰色。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.1)
3	SD18	陶器	甕	白石	内面は黄灰色。外面は褐灰色。胎土は黄灰色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.8)
4	SD18	陶器	甕	白石	内面はにぶい橙色。外面はにぶい赤褐色。胎土は浅黄橙色で白色粒，赤色粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.8)
5	SD18	陶器	片口鉢	不明	内面は灰白色。外面は灰色。胎土は浅黄色で砂粒を多く含む。内面に油煙痕。時期不明。		(19.0)	(7.6)



第 180 図　SD18 出土木製品1

第 115 表　SD18 出土木製品観察表1

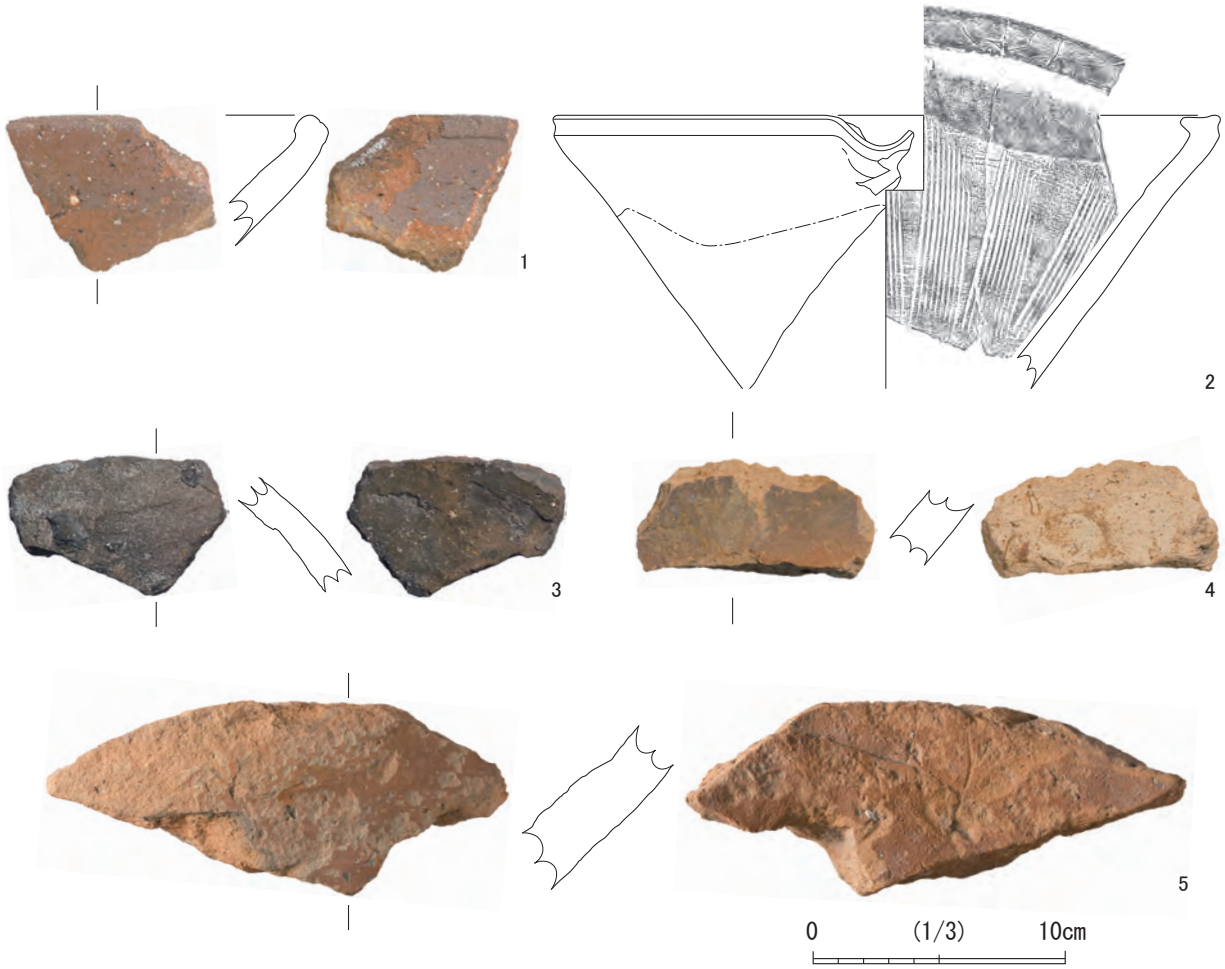
番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	樹種
1	SD18	木製品	連歯下駄	歯は使用により甚だしく磨り減っている。	一部欠損	19.6	11.2	2.7	マツ属
2	SD18	木製品	差歯下駄	露卯下駄。台部、差歯とも板目材。	台は一部欠損	(13.0)	(8.3)	(2.6)	ヤナギ属
					差歯1本のみ	15.5	10.2	1.5	サクラ属



第 181 図　SD18 出土木製品2

第 116 表　SD18 出土木製品観察表2

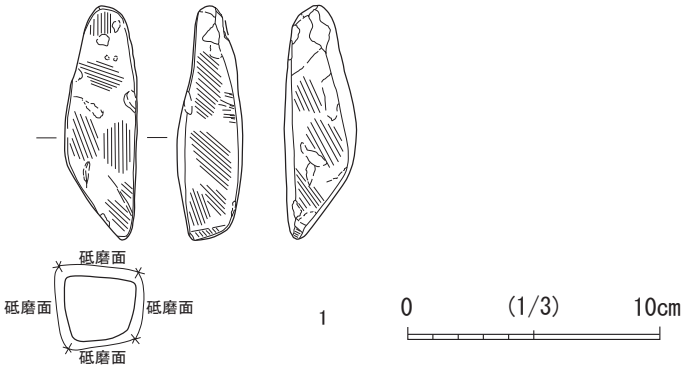
番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	樹種
1	SD18	木製品	へら状木製品	柄と身に分かれている。柾目材。	身部半欠	67.7	(6.3)	1.8	コナラ属



第 182 図 SD19 出土遺物

第 117 表 SD19 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量 (cm)		
						口径	底径	器高
1	SD19	陶器	鉢	白石	内外面ともに褐灰色。胎土表面は明赤褐色。胎土内は褐灰色。砂粒を非常に多く含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.1)
2	SD19	陶器	擂鉢	岸窯系	内外面ともににぶい橙色。口縁部に鉄釉。胎土はにぶい橙色で砂粒を微量含む。17 世紀後半～ 18 世紀。	26.4		10.9
3	SD19	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土は暗灰色で砂粒を多く含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.6)
4	SD19	陶器	片口鉢	白石	内面は浅黄色。外面はにぶい黄褐色。胎土はにぶい黄橙色で白色粒,赤色粒を多く含む。内面にロクロナデ。外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(3.0)
5	SD19	陶器	甕	白石	内外面ともににぶい赤褐色。胎土はにぶい橙色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.5)



第 183 図　SD19 出土石製品

第 118 表　SD19 出土石製品観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	SD19	石製品	砥石	角柱状の形態で、4面とも砥磨面である。中砥とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	完存	9.3	2.8	2.6	88.5

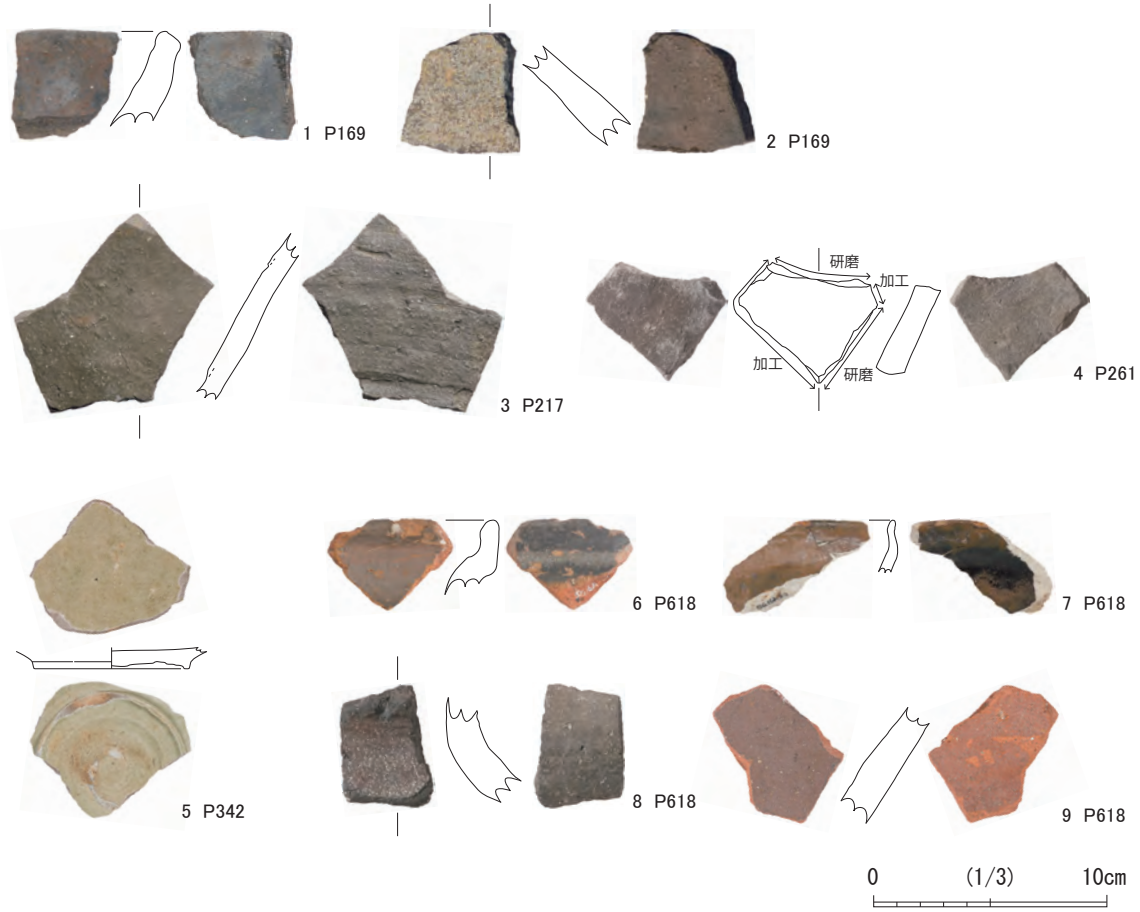
第 119 表　平成 28 年度調査　溝跡属性表

遺構名	検出長(m)	断面形	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	方向	堆積土	出土遺物	備考	平面図	断面図
SD01	35.8	逆台形	2.2 ～ 3.5	0.5 ～ 1.8	0.7	N-80°　-E	自然→人為	青磁、白磁、渥美、常滑、古瀬戸、白石、土製品、石製品	SE08・SD10・12・18・19 より古 ,SD04 より新	100	154
SD02	22.8	箱形	1.6	0.7	0.5	N-74°　-E	自然→人為		SE04・05・SK06・SD07 より古	100	
SD03	20.0	逆台形	1.9	1.0	0.6	N-73°　-E	自然→人為	常滑、白石	SX01・SE09・SK19・20・SD18・19 より古	100	168
SD04	27.2	U字	0.8 ～ 1.3	0.4 ～ 0.6	0.5	N-11°　-W	自然	銭貨	SB01・SD01・09 より古	100	
SD05	15.6	U字	1.2	0.4 ～ 0.6	0.4	N-77°　-E	自然→人為		SE02 より古 ,SD16 より新	100	
SD06	10.4	皿形	0.8	0.6	0.2	N-81°　-E	人為	白石か	SB07 より古 ,SB06 より新	100	
SD07	13.3	U字	2.4 ～ 3.5	0.2 ～ 0.8	1.0	N-67°　-E	自然	白石、常滑	SE03・04 より古 , SK06・SD02 より新	100	172
SD08	4.6	U字	1.6	0.5	0.5	N-65°　-W	自然		SD09 より新	100	
SD09	24.0	U字	0.5 ～ 1.4	0.2 ～ 0.4	0.3	N-67°　-E	自然→人為	白石	SB01・SD08 より古 , SD04 より新	100	172
SD10	25.0	U字	0.9 ～ 1.5	0.4 ～ 0.8	0.5	N-7°　-W	自然	青磁、青花、肥前系磁器、瀬戸美濃、かわらけ	SD01 より新	100	
SD11	3.3	V字	2.4	0.6	1.0	N-7°　-W	自然	中世陶器、瀬戸美濃	SD12 より新	100	
SD12	1.7	U字	0.6	0.3	0.3	N-7°　-W	自然		SD11 より古 ,SD01 より新	100	
SD13	4.0	U字	0.6	0.4	0.3	N-11°　-E	人為			100	
SD14	2.1	皿形	0.5	0.4	0.2	N-23°　-W	人為		SB13 より新	100	
SD15	1.4	逆台形	0.4	0.3	0.2	N-23°　-W	人為			100	
SD16	4.8	皿形	0.4	0.3	0.1	N-20°　-W	人為		SD05 より古	100	
SD17	4.4	皿形	0.4	0.2	0.1	N-72°　-E	自然		SE10 より古	100	
SD18	25.6	逆台形	4.5	2.8	1.1	N-8°　-W	自然	白石、瓦質土器、木製品	SB02・SE12・SX02 より古 , SD01 より新	100	178
SD19	21.4	U字	2.1	0.4	0.8	N-7°　-W	自然	白石、岸窯系陶器、石製品	SB02・SK19・20 より古 , SD01・03 より新	100	178
SD20	3.2	皿形	0.4	0.1	0.1	N-88°　-E	人為		SB01 より新	100	

7. ピット（第 184・185 図、120.121 表）

調査区の中央部から南東部では柱穴が多数確認されている。これらの中には柱痕跡をとどめているものも見受けられたが、建物などの復元には至っていない。大部分のピットは長軸 0.3 ～ 0.6 m、短軸は 0.2 ～ 0.4 mの範囲に収まるものであり、形状は楕円形が多く、ほかに隅丸方形、円形、長方形などがみられる。

第 184・185 図はピット出土遺物である。第 184 図 4 は常滑産かと思われる陶器片で、2 面を加工、2 面を研磨使用している。1 ～ 3･6･8･9 は白石産陶器で 13 世紀後半～ 14 世紀前半。5 は瀬戸美濃産灰釉皿。7 は瀬戸美濃産天目茶碗で 17 世紀後半である。第 185 図は P18 出土の銭貨で銭種は不明である。



第 184 図 ピット出土遺物

第 120 表 ピット出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量 (cm) 口径	底径	器高
1	P169 上層	陶器	擂鉢	白石	内面は灰色。外面はにぶい黄褐色。胎土は黒褐色で粗く，砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.05)
2	P169	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。外面に自然釉付着。胎土は赤灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.3)
3	P217	陶器	甕	白石か	内外面ともに褐灰色。胎土は灰色で白色粒を多量に含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。			(7.0)
4	P261	陶器	甕	常滑か	内面は黄灰色。外面は褐灰色。胎土は黄灰色で白色微粒を含む。時期不明。研磨土器に転用。	最大長 (5.15)	最大幅 (5.9)	最大厚 (1.1)
5	P342	陶器	皿	瀬戸美濃か	内外面に灰釉（浅黄色）。胎土は灰白色で精良，軟質。		6.6	(0.9)
6	P618	陶器	壺	白石	内面は灰褐色。外面は黒褐色。胎土は橙色で白色粒，黒色ガラス質粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(3.55)
7	P618	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	内外面鉄釉。胎土は灰白色，精良。登窯第 4 ～ 5 小期。17 世紀後半。	(15.6)		(3.0)
8	P618	陶器	甕	白石	内面は赤灰色。外面は灰褐色，自然釉付着。胎土は暗灰色で砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.5)
9	P618	陶器	甕	白石	内面はにぶい赤褐色。外面は灰褐色。胎土は赤褐色で砂粒（特に白色粒）を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.0)

1　原寸

第 185 図　ピット出土金属製品

第 121 表　ピット出土金属製品観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	法量		
					径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
1	P018	金属製品	銭貨		23.26	1.46	2.13

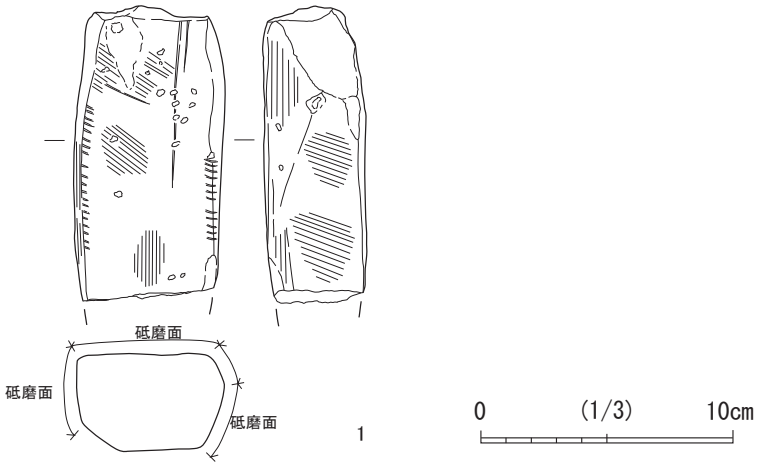
8．その他の出土遺物（第 186 ～ 191 図、第 122 ～ 127 表）

遺構精査、表土掘削時、及び攪乱内において、少量の遺物が出土している。

第 186・187 図は精査時の出土遺物である。第 186 図は砥石である。角柱状の形態で、主に3面が砥磨面である。第 187 図 4 は常滑産陶器か。断面の 2 辺と内面の一部を研磨に使用する。1 ～ 3・5 ～ 8 は白石産陶器である。5 は外面に円形のスタンプを持つ陶器片で、4 辺を加工成型し外面に叩打痕をもつ。6 は 2 辺を加工成型し 1 辺を研磨に使用する。7 は外面に長方形スタンプを押印する。9・10 はかわらけ。11 は瓦質土器の擂鉢。12 ～ 14 は土錘である。

第 188 ～ 190 図は表土出土遺物である。第 188 図 1 は肥前産磁器碗で 17 世紀後半か。2 は肥前産磁器碗で底部外面に「大明成化年製」の銘款がみられ、18 世紀後半である。3 は瀬戸美濃産天目茶碗で 17 世紀中頃～後半。4・5 は肥前産磁器皿で、17 世紀前半～中頃。8 は青花磁器皿で素描による草花文を描く。17 世紀後半か。7・8 はロクロ成型のかわらけ。9・10 は土錘、11 は鞴羽口である。第 189 図 3 は常滑産陶器で 3 辺を研磨に使用する。13 世紀後半～ 14 世紀。1・2・4 ～ 8 は白石産陶器で 7 は 4 辺を加工成型し内外面を研磨に使用する。13 世紀後半～ 14 世紀前半。第 190 図は銭貨である。1 は銭種不明、2 は寛永通宝である。

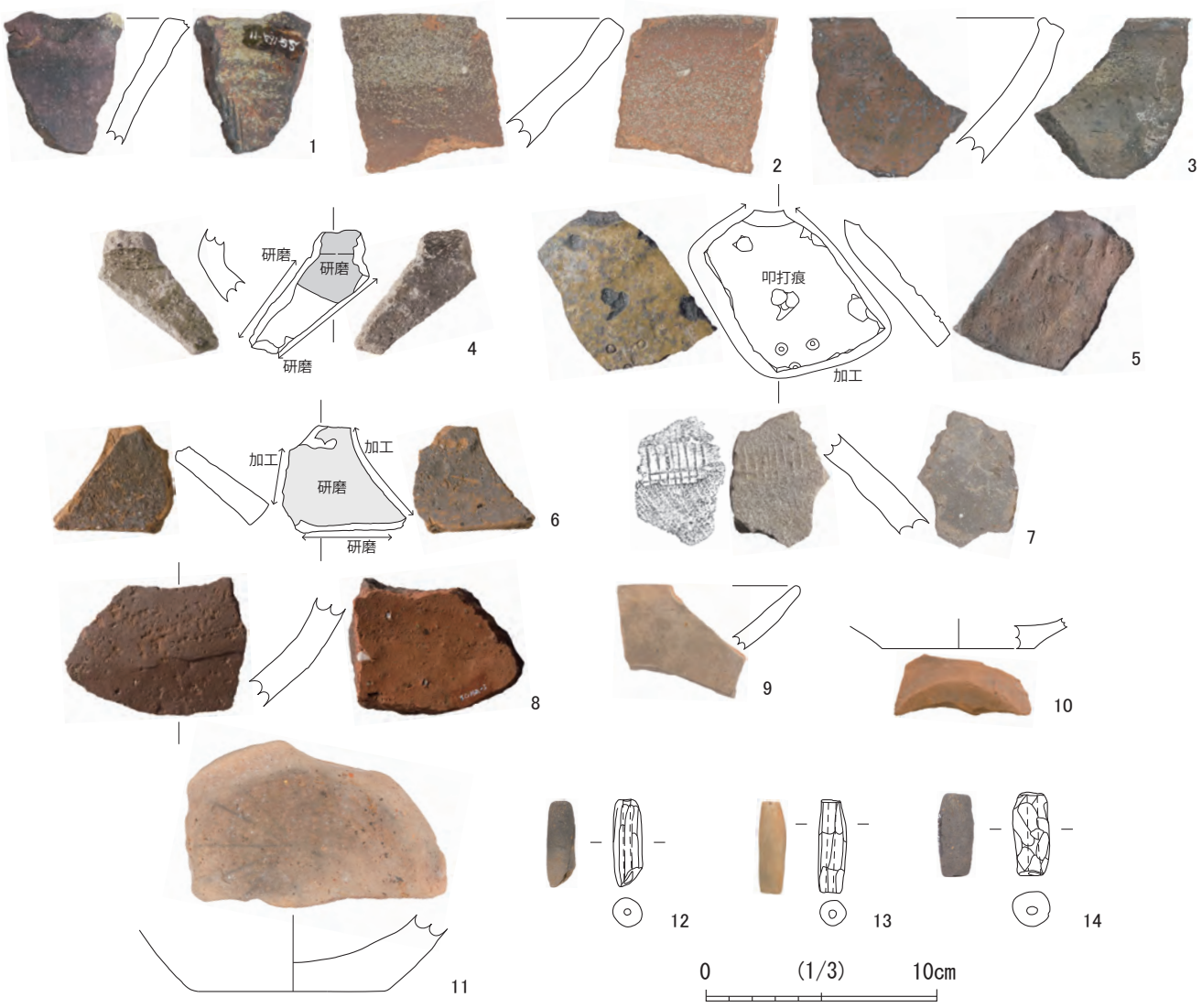
第 191 図はその他の出土遺物である。1 は古瀬戸瓶子の胴部片で、2 辺を加工 2 辺を研磨している。2 は白石産陶器で 1 辺を加工成型し 1 辺を研磨に使用している。3 は常滑産陶器片口鉢で 13 世紀後半である。



第 186 図　精査出土石製品

第 122 表　精査出土石製品観察表

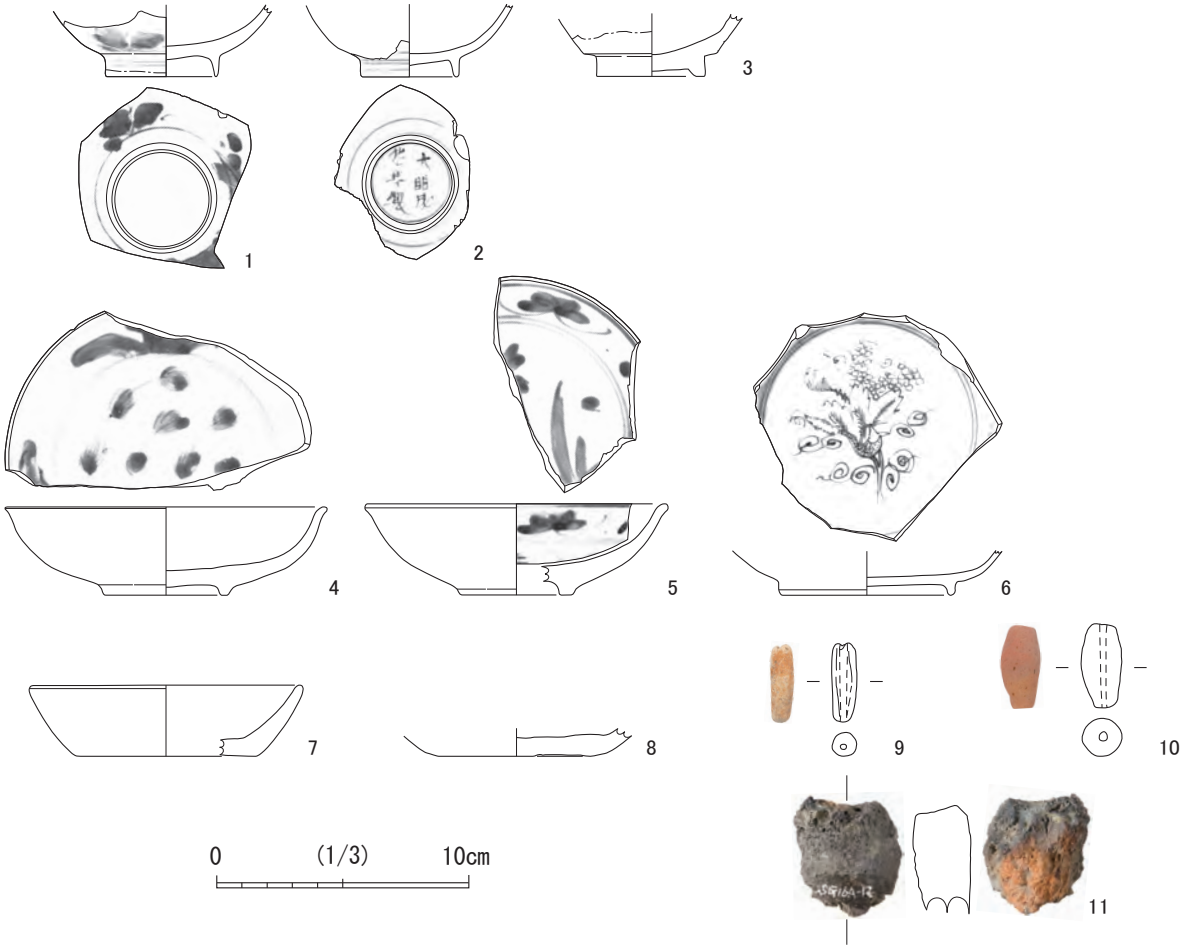
番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	精査	石製品	砥石	角柱状の形態で、主に3面が砥磨面である。仕上げ砥とみられる。石材はデイサイト質凝灰岩。	半欠	(11.6)	(5.9)	(3.9)	(484.5)



第 187 図 精査出土遺物

第 123 表 精査出土遺物観察表

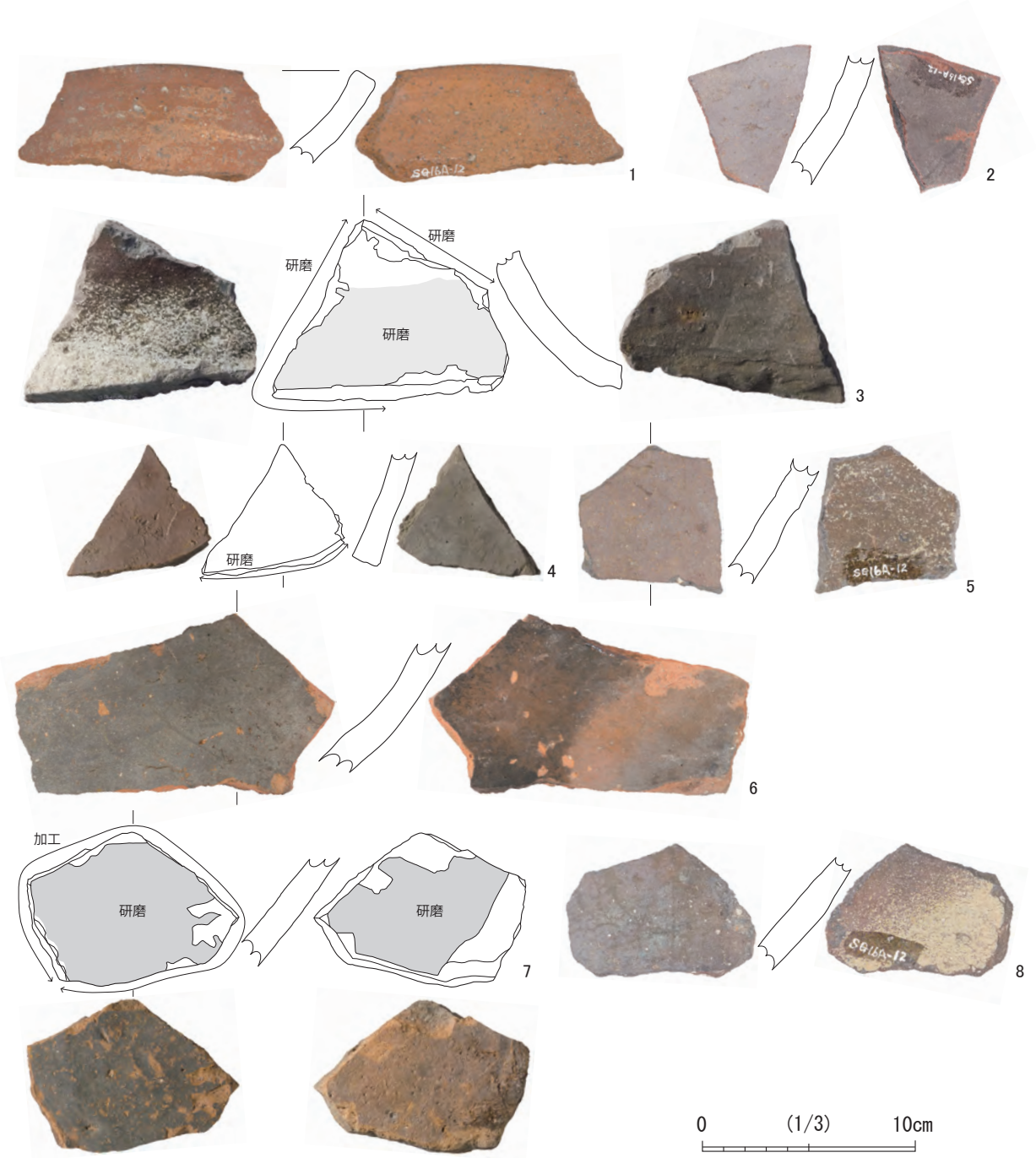
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	精査	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに褐灰色。胎土は赤灰色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.8)
2	精査	陶器	片口鉢	白石	内面は橙色。外面は灰褐色で自然釉付着。胎土は黄橙色で砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.6)
3	精査	陶器	片口鉢	白石	内面は灰色。外面はにぶい褐色。胎土は黄灰色で粗く，砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.4)
4	精査	陶器	甕	常滑か	内面は灰色。外面に自然釉付着。胎土は灰黄色で砂粒を多く含む。研磨土器に転用。	最大長 (3.6)	最大幅 (3.3)	最大厚 (1.1)
5	精査	陶器	甕	白石	内面は褐灰色。外面に灰釉。胎土は褐灰色。外面に円形のスタンプ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。外面に叩打痕。			(5.5)
6	精査	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土は黄褐色で砂粒を含む。下側縁と内面が研磨。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (4.5)	最大幅 (4.9)	最大厚 (1.2)
7	精	陶器	甕	白石	内外面ともに黄灰色。外面に自然釉付着。胎土は黄灰色で白色粒を多く含む。			(4.4)
8	精査	陶器	甕	白石	内面は明赤褐色。外面は灰褐色。胎土は褐灰色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.3)
9	精査	かわらけ			ロクロ使用。内外面ともにぶい黄橙色。胎土は橙色。			(2.8)
10	精査	かわらけ			ロクロ使用。底部外面は回転糸切り。内外面ともに橙色。胎土は浅黄橙色。		(6.6)	(1.3)
11	精査	瓦質土器	擂鉢	不明	胎土はにぶい黄褐色，赤色粒を多く含む。全体的に磨滅が激しい。		8.2	(3.3)
12	精査	土製品	土錘		胎土はにぶい黄橙色。	最大長 (3.8)	最大幅 (1.2)	最大厚 (1.2)
13	精査	土製品	土錘		胎土はにぶい黄橙色。	最大長 (4.05)	最大幅 (1.2)	孔径 (0.35)
14	精査	土製品	土錘		胎土は黄灰色。	最大長 (3.6)	最大幅 (1.6)	孔径 (0.5)



第 188 図　表土出土遺物1

第 124 表　表土出土遺物観察表1

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	表土	染付磁器	碗	肥前	丸碗。17 世紀後半。		4.5	(2.85)
2	表土	染付磁器	碗	肥前	丸碗。18 世紀後半。		3.95	(2.9)
3	表土	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	内外面鉄釉。内面磨滅。胎土は灰白色，精良，軟質。登窯第 2 ～ 5 小期。17 世紀中頃～後半。			2.5
4	表土	染付磁器	皿	肥前	高台畳付に砂目。17 世紀前半～中頃。	(12.8)	4.9	3.5
5	表土	染付磁器	皿	肥前	高台畳付部分に砂目。17 世紀前半～中頃。	(12.0)	(4.5)	3.6
6	表土	青花磁器	皿		見込に素描による草花文。17 世紀後半か。		6.8	(1.75)
7	表土	かわらけ			ロクロ使用。底部外面は回転糸切り。底部内面はロクロナデ。内外面ともに明黄褐色。胎土はにぶい橙色。	(10.7)	(7.0)	2.8
8	表土	かわらけ			ロクロ使用。内外面ともに明黄褐色。胎土はにぶい黄橙色。		7.0	(1.1)
9	表土	土製品	土錘		胎土は浅黄橙色。	最大長 (3.1)	最大幅 (1.0)	最大厚 (0.9)
10	表土	土製品	土錘		胎土はにぶい橙色。	最大長 (3.3)	最大幅 (1.3)	最大厚 (1.3)
11	表土	土製品	鞴羽口			最大長 (4.3)	最大幅 (4.2)	最大厚 (2.3)



第 189 図　表土出土遺物2

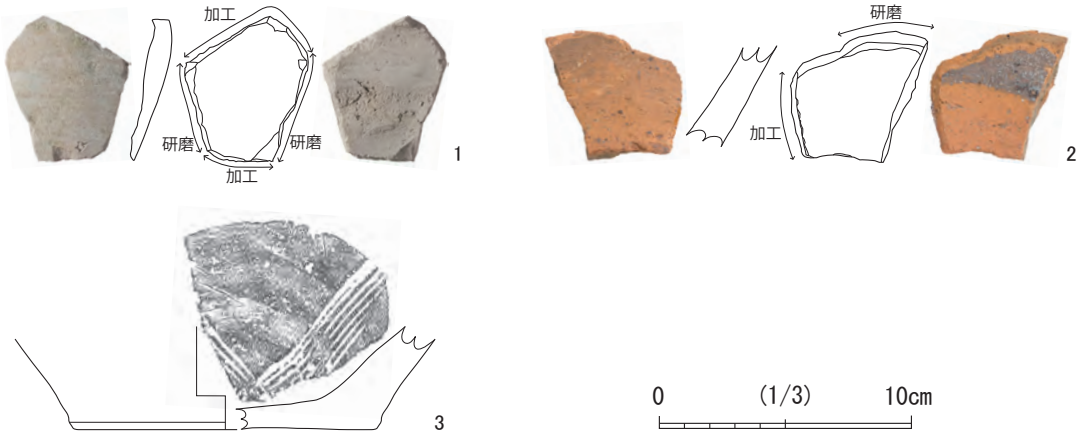
第 125 表　表土出土遺物観察表2

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	表土	陶器	片口鉢	白石	内外面ともににぶい橙色。胎土は橙色で粗く，砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。	(30.0)		(4.4)
2	表土	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土表面はにぶい赤褐色。胎土内は灰色。白色粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.1)
3	表土	陶器	甕	常滑	内面は赤灰色。外面は灰褐色，自然釉付着。胎土は黄灰色，精良。6b ～ 8 型式。13 世紀後半～ 14 世紀。研磨土器に転用。			(6.4)
4	表土	陶器	甕	白石か	内面は灰色。外面は灰褐色。胎土は灰色で白色粒を含む。研磨土器に転用。	最大長 (6.15)	最大幅 (6.65)	最大厚 (1.4)
5	表土	陶器	甕	白石	内面はにぶい黄褐色。外面は灰褐色。胎土は褐灰色で砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.9)
6	表土	陶器	甕	白石	内面は灰褐色。外面は褐灰色。胎土は明褐色で砂粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀後半。			(6.0)
7	表土	陶器	甕	白石	内面はにぶい黄橙色。外面は灰色。胎土は灰色で砂粒を少量含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (7.0)	最大幅 (9.1)	最大厚 (1.3)
8	表土	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに褐灰色。内面に自然釉付着。胎土表面は褐灰色，胎土内はにぶい赤褐色。白色大粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.3)

第 190 図　表土出土金属製品

第 126 表　表土出土金属製品観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	法量 径(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
1	表土	金属製品	銭貨		24.60	1.34	3.19
2	表土	金属製品	銭貨	寛永通宝	24.35	1.42	4.02



第 191 図　その他の出土遺物

第 127 表　その他の出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	残土	陶器	瓶子	古瀬戸	13 世紀～ 15 世紀。研磨土器に転用。	最大長 (6.4)	最大幅 (5.55)	最大厚 (1.0)
2	北側側溝	陶器	片口鉢	白石	内外面ともに橙色。内面に重ね焼きの痕跡あり。胎土は褐灰色で黒色粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(4.0)
3	掘り下げ	陶器	片口鉢	常滑	内面は灰褐色。外面はにぶい赤褐色。胎土は褐灰色，白色砂粒を多く含む。内面に卸目(磨滅)。第 2 段階 6a ～ 6b 小期。13 世紀後半。		12.2	(4.1)

9. 平成 28 年度調査のまとめ

平成 28 年度の調査は、平成 27 年度に実施したトレンチ調査で中世の遺構・遺物が発見された地点を中心として実施した。発見された遺構は、中世では掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、近世では掘立柱建物跡、井戸跡、護岸施設、溝跡のほか土坑・ピットが多数ある。

中世の遺構には掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡などがある。このうち調査区中央付近で発見されたSE01では、丸太を3つに分割し、その内側を削り取ったのちに改めて組み合わせたものを井戸枠として使用しており、井戸枠の内外からは常滑産の甕、白石市周辺で生産されたと考えられる中世陶器甕が出土している。また調査区の南北では東西方向に走る溝跡、東側では南北方向に走る溝跡が発見されている。特にSD01からは大量の中世陶器甕・鉢のほか、白磁碗、青磁碗、茶臼などが出土している。なお、SD01・03ではともに作り替えが行われており、強い区画性が考えられる。

近世の遺構には、掘立柱建物跡、井戸跡、護岸施設、性格不明遺構、溝跡などがある。調査区の北東部で発見された掘立柱建物跡は、東西8間以上（17m）、南北3間（6.5m）の規模を測り、建物面積は 110 ㎡以上となる非常に大きな建物跡である。この北側で発見された護岸施設は、地山を大きく掘り込んだのちに杭や板材で木枠を作り、水流から岸を保護するために木枠の中に川原石を積み上げていた。さらに石積みが施設内部に転落しないようにするため、100cm ほどに切りそろえた竹を横板と石積みの間に縦方向に並べていた。施設は北側へ開いた「コの字」状となっており、調査地点の北側にかけてさらに延びるものと考えられる。このほかに注目される遺構としては井戸跡がある。近世井戸跡は 11 基確認されているが、うち4基では井戸枠を有していることが確認されている。井戸枠の構造は多様であり、今後のさらなる検討が必要である。

調査では中世陶器、貿易陶磁（青磁・白磁・青花）、近世陶磁器、瓦質土器、金属製品（銭貨ほか）、石製品（石臼・砥石）、漆器（椀・折敷）、木製品（鉢・鞘など）が出土してる。このうち最も多いのが、13 世紀後半～ 14 世紀前半頃に白石市周辺で生産されたと考えられる中世陶器であるが、12 世紀後半頃の年代観が考えられる渥美焼甕や貿易陶磁である白磁碗・青磁碗は、遺跡の初現を示す可能性がある資料として注目される。また 16 世紀末葉～ 17 世紀前半頃の年代観が考えられる青花は、現時点で県内でも仙台城をはじめとし、武士階級に関係する遺跡でのみの出土が確認されるものであり、本遺跡地を拝領した人物の階層性が高いことを示唆する資料になるものと考えられる。なお、矢ノ目足軽が当地で活動した 18 ～ 19 世紀の年代観が考えられる遺物は、平成 28 年度調査地点ではほとんど認められていない。

今回の調査では、これまでの岩沼市内での調査では例が無いほどの、多数の中世遺物が出土した。中世の名取郡南方の様子を記した文献では、この地域のことについて記したものは見当たらないが、出土した遺物の年代観から鎌倉期を中心として、小河川の結節点の地に河川交通・物流を掌握する在地勢力が存在した可能性が考えられるようになった。また近世では、出土遺物の年代観は 17 世紀代でまとまることから、発見した遺構については矢ノ目足軽が成立する以前にこの地を拝領していた佐藤氏・奥山氏の時期と考えられる。なお、今回の調査地点は江戸時代中期以降に成立した矢ノ目足軽関連の遺構・遺物を多数発見した第 1 ～ 4 次調査地点に近接しているが、この時期の遺構・遺物がみられなかったことは領主が移転した後も土地を利用する上で何らかの制約が存在していた可能性を考慮できるようになった。

調査区全景（東側上空から）

調査区全景（西側上空から）

SB01 掘立柱建物跡　全景（西から）

SB01 掘立柱建物跡（東から）

SB02 掘立柱建物跡（北から）

SE01 井戸跡（西から）

SE01 井戸跡　井戸枠検出状況（西から）

SE02 井戸跡（北西から）

SE02 井戸跡　遺物出土状況（北から）

SE03 井戸跡（南から）

SE03 井戸跡　水溜施設（北から）

SE04 井戸跡（南から）

SE05 井戸跡（西から）

SE06 井戸跡　土層断面（北から）

SE06 井戸跡（南から）

SE07 井戸跡（東から）

SE07 井戸跡　遺物出土状況（南から）

SE07 井戸跡　井戸枠（南東から）

SE07 井戸跡　井戸枠材近景（南から）

SE08 井戸跡　土層断面（西から）

SE09 井戸跡（東から）

SE09 井戸跡　石積の状況（東から）

SE09 井戸跡　石積下部の状況（東から）

SE10 井戸跡（南から）

SE11 井戸跡　土層断面（東から）

SE11 井戸跡（北から）

SE12 井戸跡（南から）

SX01 護岸施設　調査風景（北から）

SX01 護岸施設　遺物出土状況①（北から）

SX01 護岸施設　遺物出土状況②（西から）

SX01 護岸施設　遺物出土状況③（東から）

SX01 護岸施設　全景①（北西から）

SX01 護岸施設　全景②（東から）

SX01 護岸施設　内部の状況（東から）

SX01 護岸施設　石積の状況（北東から）

SX01 護岸施設　石積の断面（西から）

SX02 性格不明遺構　土層断面（東から）

SX02 性格不明遺構の構造（北から）

SK04 土坑　土層断面（北から）

SK06 土坑　土層断面（東から）

SK20 土坑　土層断面（東から）

SK20 土坑（東から）

SD01 溝跡（東から）

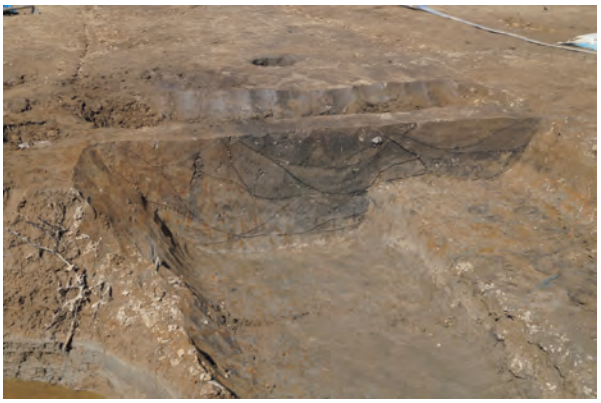
SD01 溝跡　土層断面（西から）

SD01 溝跡　遺物出土状況①（南から）

SD01 溝跡　遺物出土状況②．（南から）

SD02・07 溝跡（東から）

SD02 溝跡　土層断面（東から）



SD03 溝跡　土層断面（東から）

SD03 溝跡（南東から）

SD10 溝跡（南東から）

SD10 溝跡　遺物出土状況（南から）

SD11・19 溝跡（南から）

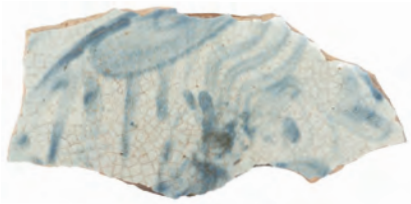
SD18 溝跡　遺物出土状況①（東から）

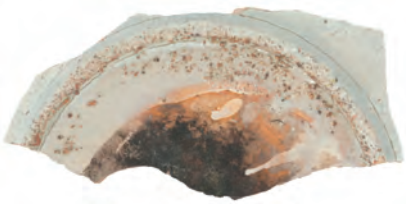
SD18 溝跡　遺物出土状況②（北から）

SD18 溝跡　土層断面（南東から）

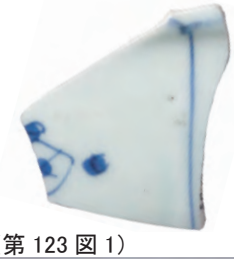
調査区全景（南側上空から）

SE01（第 120 図 1）


SE02（第 121 図 1）内面


SE02（第 121 図 1）外面

SE03（第 123 図 2）


SE03（第 123 図 1）

SE03（第 123 図 3）

SE04（第 125 図 6）

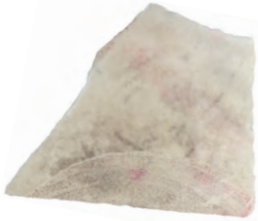
SE06（第 128 図 1）

SE11（第 134 図 1）

SE12（第 135 図 1）

SX01（第 137 図 1）

SX01（第 137 図 2）


SX01（第 137 図 9）

SX01（第 137 図 10）

SX01（第 138 図 1）

SX01（第 138 図 7）

SX01（第 138 図 12）

SX01（第 140 図 1）

SX01（第 140 図 3）

SX01（第 140 図 7）

SX01（第 141 図 1）

SX01（第 141 図 5）

SX01（第 142 図 2）

SX01（第 143 図 1）

SX01（第 143 図 6）

SX01（第 143 図 7）

SX01（第 143 図 5）

SX01（第 144 図 3）

SX02（第 146 図 1）

SD01（第 155 図 1）

SD01（第 155 図 2）内面

SD01（第 155 図 2）外面

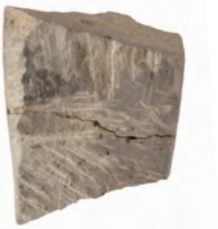
SD01（第 155 図 3）内面

SD01（第 155 図 3）外面

SD01（第 167 図 2）

SD01（第 167 図 1）

SD01（第 167 図 1）


SD01（第 167 図 2）

SD01（第 167 図 3）

SD01（第 167 図 3）

SD10（第 176 図 1）

SD10（第 176 図 2）

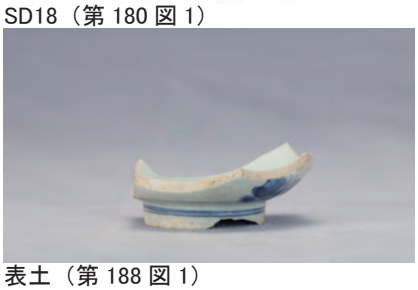
SD10（第 176 図 3）

SD10（第 176 図 4）

SD11（第 177 図 1）

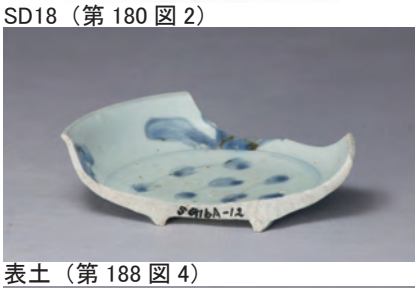
SD18（第 180 図 1）

SD18（第 180 図 2）



表土（第 188 図 1）

表土（第 188 図 2）



表土（第 188 図 4）

表土（第 188 図 5）

表土（第 188 図 6）

第Ⅷ章　平成 29 年度の調査成果

平成 29 年度の調査は、市道矢野目下野郷本線の西側に位置し、平成 25 年度調査区の北に接する部分を対象とした。隣接する宅地への進入路として一部を確保し、その北側をA区、南側をB区として調査を実施した。調査前の状況は、北半は宅地を解体撤去した後の造成地で、南半は休耕した水田である。田面の標高は 1.18m である。

1．A 区の調査

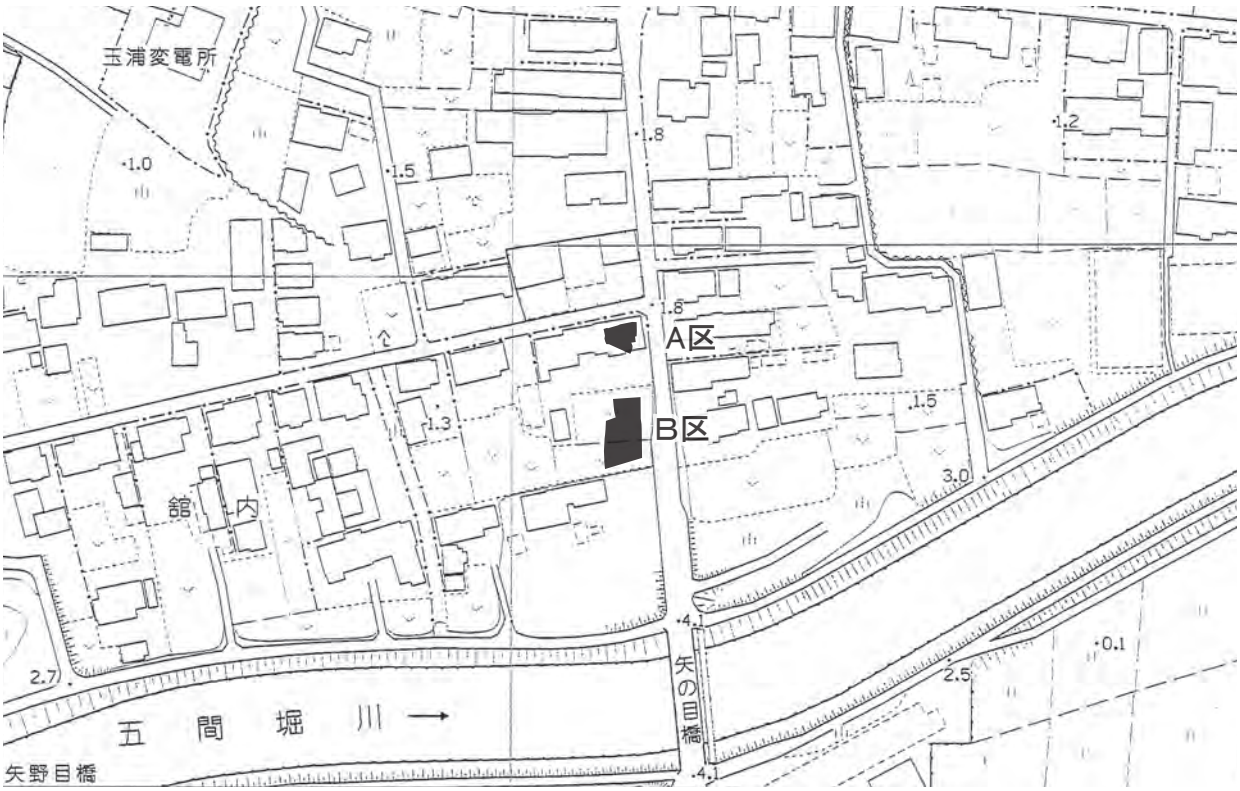
a．調査の概要

A 区は、北辺 11m、南辺 8.5m、東辺 10.5m、西辺 5m の不正台形の調査区で、調査面積は 76 ㎡である。重機により表土を除去したところ、旧水田面上に厚さ約 1.0 mの造成土が確認できた。造成土中には多量の礫等がみられ、水田面を掘り込むカクランも多数みられた。遺構は、造成土と水田耕作土を除去したのち、五間堀川の自然堤防を形成するにぶい黄褐色砂質シルト層上面で確認された。遺構確認面までの深さは現表土から約 1.3 m、旧水田面から約 0.3 m、遺構確認面の標高は 0.65 mである。自然堤防を形成しているにぶい黄褐色砂質シルト層は厚さ 0.25 mを測り、以下は第Ⅱ浜堤を形成する砂層となる。

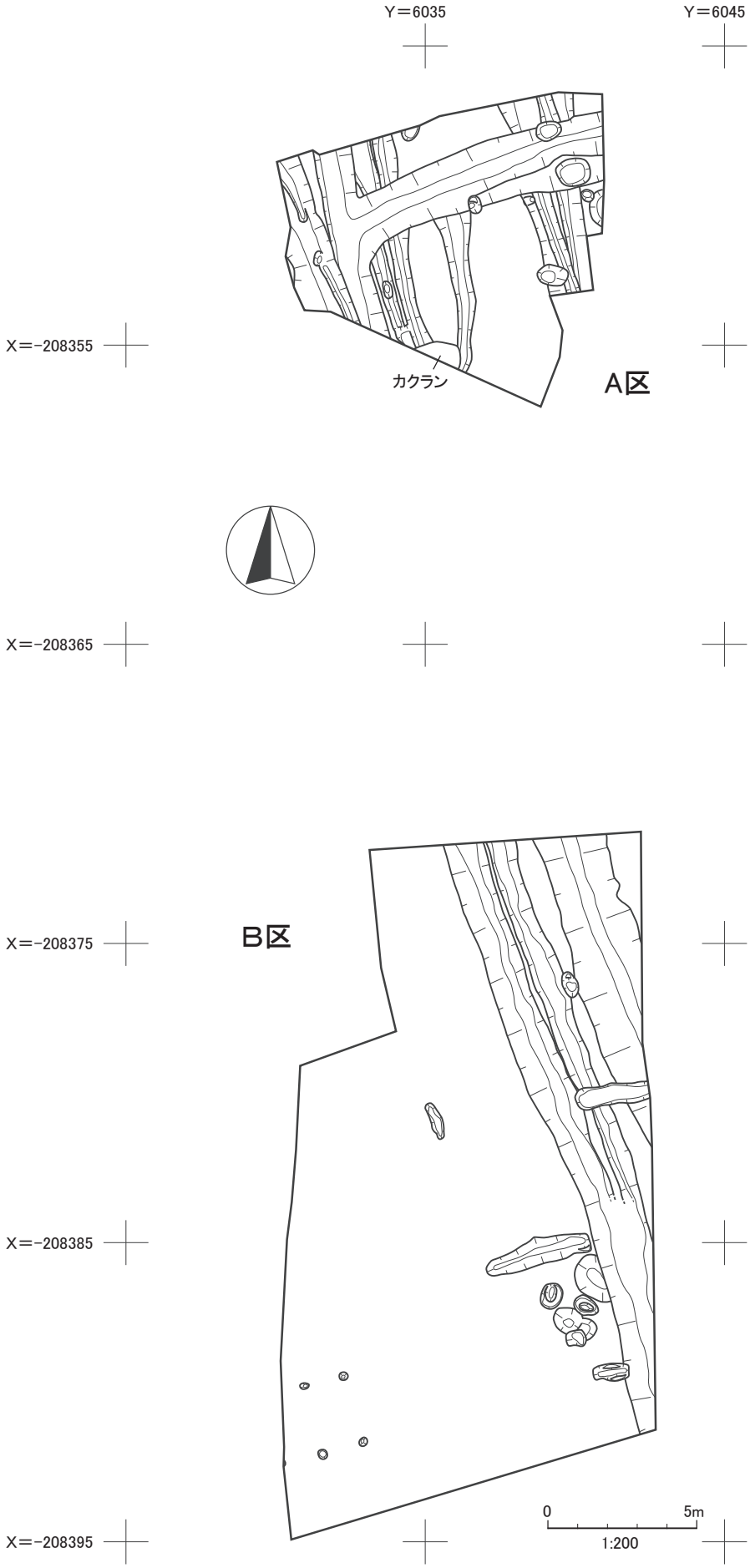
調査の結果A区で発見された遺構は、溝跡7条、土坑5基、掘立柱塀跡1列である。

b．掘立柱塀跡（第 195 図）

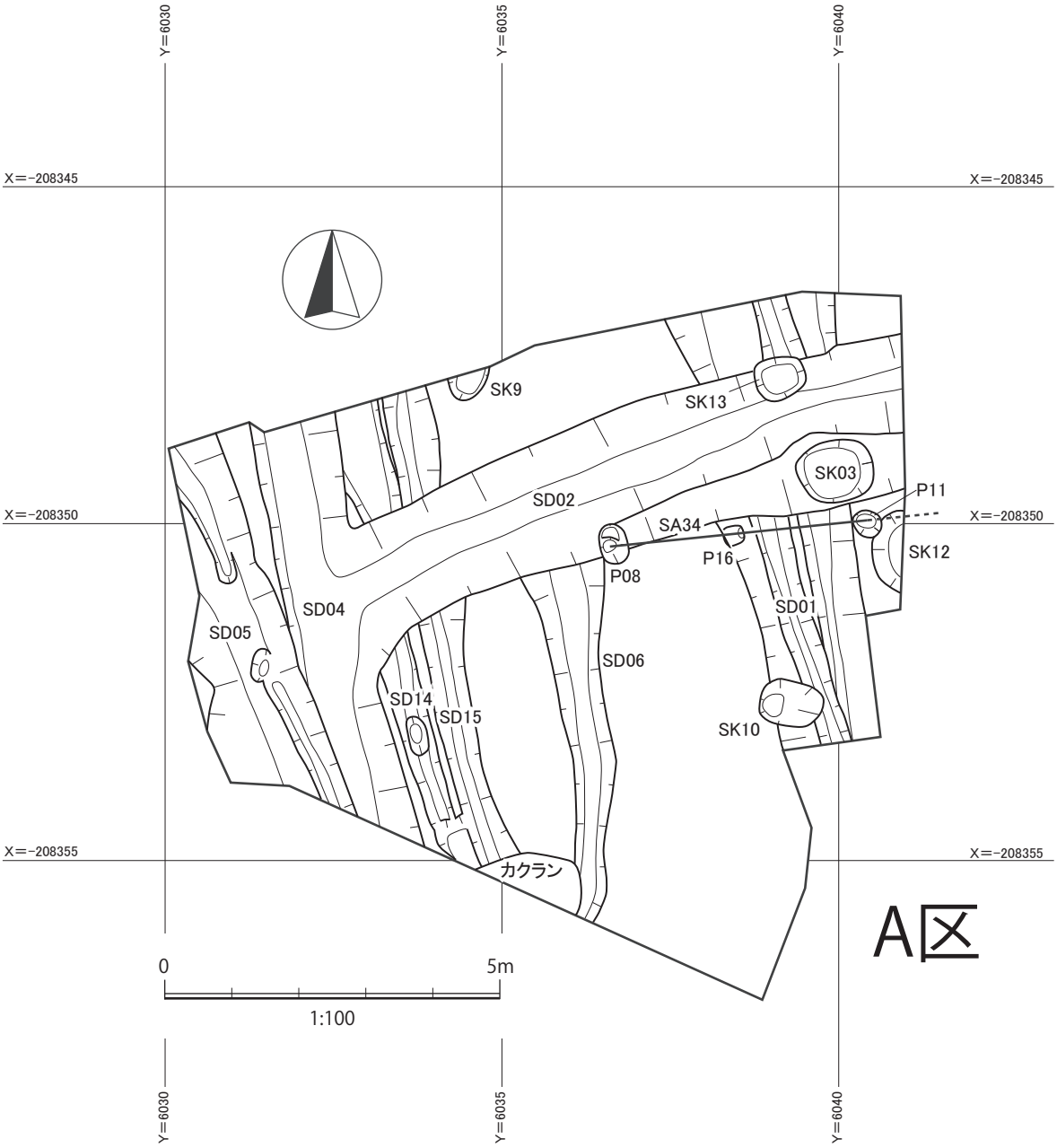
掘立柱塀跡 SA34 を調査区東より、SD02 の南側に確認した。柱穴跡3口（P08・11・16）がほぼ等間隔に一直線に並び、柱痕跡の認められるものが1口あることから、東西に並ぶ塀跡と考えられる。重複関係は、



第 192 図　平成 29 年度調査区配置図（1/2500）



第 193 図 調査区全体図



第 194 図　A 区全体図

P08 は SD02 より新しく、P11 は SK12 より新しい。P16 は遺構確認作業時に認識しておらず、SD01 の壁面で確認したため、新旧関係を把握できなかった。確認した塀跡は長さ 3.85m で、塀跡の示す軸方位は E-6°　-N である。調査区外東側に伸びる可能性がある。柱穴跡は、P08（径 0.6 × 0.42m、深さ 0.45m）、P11（径 0.43 × 0.4m、深さ 0.29m）、P16（0.3m 以上、深さ 0.4m）で、P08 で柱痕跡を確認した。

c．土坑（第 196 ～ 198 図、第 128・129 表）

土坑は SK03・SK09・SK10・SK12・SK13 の合計 5 基を確認した。

SK03 は調査区東より、SD02 の壁面のテラス面で確認された。新旧関係は SD02 より古い。平面形は不正長方形、規模は径 1.12 × 0.9m、深さ 0.44m で、底面は平坦だが若干の段差がある。壁は垂直に立ち上がる。第 197 図 1 は SK03 から出土した常滑産と考えられる陶器である。壺もしくは甕の方部分の破片で外面に釉

が付着している。また、断面を研磨に使用している。

SK09 は調査区北寄りで確認され、半分が調査区外となり部分的な調査である。重複する遺構はない。平面形は楕円形、規模は推定径 0.8 × 0.56、深さ 0.35m で、底面は平坦、壁は擂鉢状に立ち上がる。

SK10 は調査区東よりで確認され、新旧関係は SD01 より新しい。平面形は不正長方形、規模は 0.94 × 0.67m、深さ 0.26m で、底面は部分的に平坦で、壁は西側は垂直に、東側は斜めに立ち上がる。第 198 図 1 は SK10 から出土した温石である。板状の素材の側面を研磨により、全体をほぼ方形に整形しており、その上部には推定径が 0.7mm の孔が開けられている。片面は黒化しており、火鉢などで加熱した状況を示すものと考えられる。石材は黒雲母片岩である。

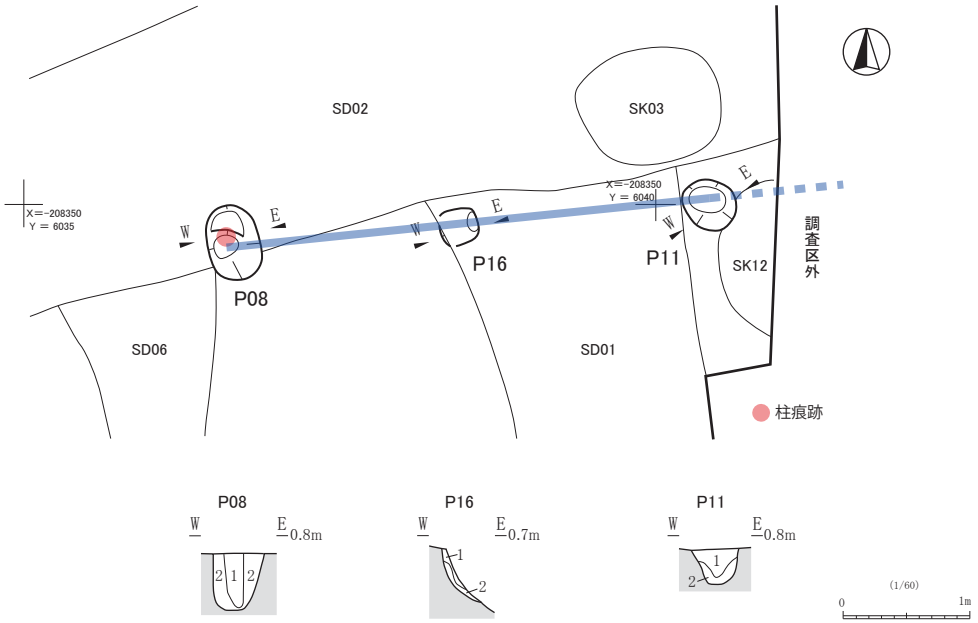
SK12 は調査区東端で確認され、重複関係はない。平面形は円形、規模は径 1.28m、深さ 0.22m、底面から壁は丸みをもって立ち上がる。

SK13 は調査区北東寄りで確認され、新旧関係は SD01 および SD02 より新しい。平面形は方形、規模は 0.75 × 0.65m、深さ 0.09m で、底面は平坦、壁は斜めに立ち上がる。

d . 溝跡（第 199 ～ 205 図、第 130 ～ 135 表）

溝跡は SD01・SD02・SD04・SD05・SD06・SD14・SD15 の7条を確認した。

SD01 は調査区東寄りに位置する南北溝で、4m 分を確認した。新旧関係は SD02・SK03・SK10・SK13 より古い。幅は最大で 1.55m を測る。断面の観察から、主軸方位を N- 6° -W に振る溝を、N-17° -W に振る溝に掘り直していることが推測される。1期目は、断面緩い V 字状だが、2 時期目は幅の広い浅い溝の底部からさらに細い溝を彫りこんでいる。確認面からのは深さ 0.55m である。第 200 図は SD01 から出土した常滑産・白石産陶器である。片口鉢・甕があり、断面及び内外面を研磨に用いたものがみられる。時



P08土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。柱痕跡。
2	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。粘土中ブロックやや多い。柱掘方。

P16土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。
2	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	しまり弱い。粘性弱い。

P11土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。
2	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまり強い。粘性やや強い。

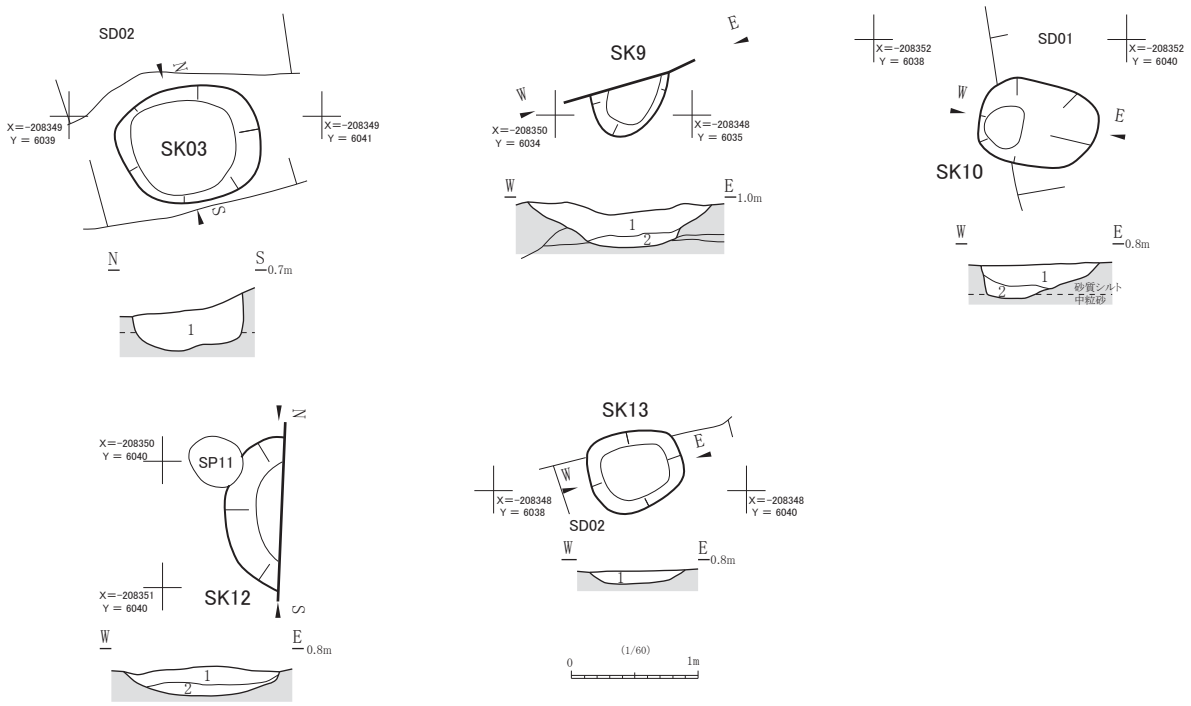
第 195 図 A 区 SA34、土層断面図

期は 13 世紀後半～ 14 世紀前半である。第 201 図 1 は SD01 から出土した不明石製品で、3辺を打ち欠いて整形しており、1面には擦痕が観察される。石材が黒雲母片岩であり、温石の可能性が高い。

SD02 は調査区中央に位置する東西溝で、5.25m 分を確認した。新旧関係は SD01・SD06・SD14・SD15 より新しく、SK03・SK13・P08 より古い。SD04 との新旧関係は平面および断面の観察からは判断できず、同時存在の可能性がある。軸方位は E-21°　-N を示し、幅は最大 1.38m を測る。断面形は南側にテラスを有し、確認面からの深さは 0.45m、底面は丸みを帯びるが平坦である。第 202 図 1 は SD02 から出土した白石産陶器で、断面を研磨に使用している。時期は 13 世紀後半～ 14 世紀前半である。

SD04 は調査区西よりに位置する南北溝で、3.95m 分を確認した。新旧関係は SD15 より新しく、SD05 より古い。SD02 との新旧関係は平面および断面の観察からは判断できず、同時存在の可能性がある。軸方位は全体では N-11°　-W を示し、南側でやや屈曲してからは N-16°　-W を示す。最大幅は 0.78m を測る。断面形は逆台形で、確認面からの深さは 0.52m、底面は平坦である。断面の観察から数度の堀直しが行われたものと考えられる。第 203 図 1 は SD02 と SD04 との合流点付近から出土した常滑産と考えられる陶器である。断面の 3 辺を加工成型し 1 辺を研磨に用いているほか、内面に叩打痕が多数見られ、研磨と同時に作業に用いた際についたものと考えられる。

SD05 は調査区西端に位置する南北溝で、3.65m 分を確認した。新旧関係は SD04 より新しい。軸方位は



SK03土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	酸化鉄中ブロックやや多い。しまりやや弱い。粘性やや強い。

SK09土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。
2	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。

SK10土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまり強い。粘性やや弱い。
2	黒褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。1層より砂質。

SK12土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまり強い。粘性やや強い。
2	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。

SK13土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまり強い。粘性弱い。

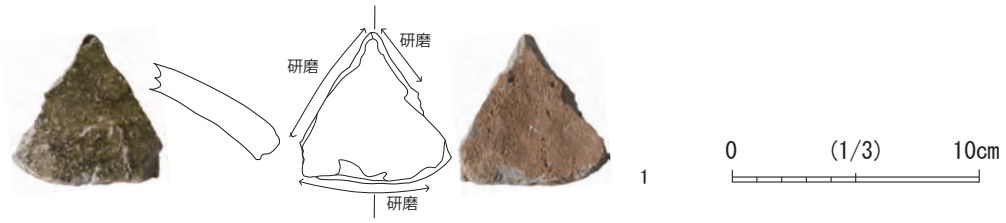
第 196 図　A 区　SK03・09・10・12・13、土層断面図

N-24° -Wを示し、最大幅は1.64mを測る。断面形はV字状で、確認面からの深さは0.93mである。第204図はSD05から出土した磁器皿・常滑産陶器・白石産陶器・土垂である。常滑産陶器・白石産陶器はいずれも断面を研磨に用いており、内面に叩打痕のみられるものも1点含まれる。溝跡の時期は磁器皿の存在から近世に下る可能性がある。

SD06は調査区中央に位置する南北溝で、10.5m分を確認した。新旧関係はSD02・P08よりも古い。南壁付近で湾曲しており、最大幅は0.75mを測る。断面形は逆台形で、確認面からの深さは0.2mである。

SD14は調査区西寄りに位置する南北溝で、4.3m分を確認した。新旧関係はSD15より新しく、SD02より古い。軸方位はN-12° -Wを示し、最大幅は0.4mを測る。断面形は開いたU字状で、確認面からの深さは0.48mである。

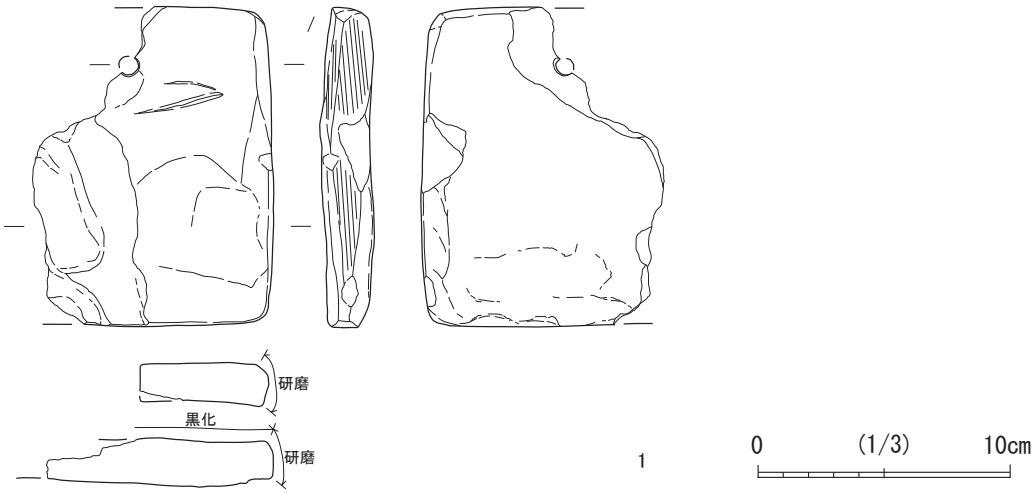
SD15は調査区西寄りに位置する南北溝で、4.1m分を確認した。新旧関係はSD05・SD15より古い。軸方位はN-25° -Wを示し、最大幅は0.48mを測る。断面形は開いたU字状で、確認面からの深さは0.47mである。第205図1はSD15から出土した産地不明の陶器である。外面に交互に施された斜方向のタタキがみられる。12世紀代の所産か。



第197図 A区SK03出土遺物

第128表 A区SK03出土遺物観察表

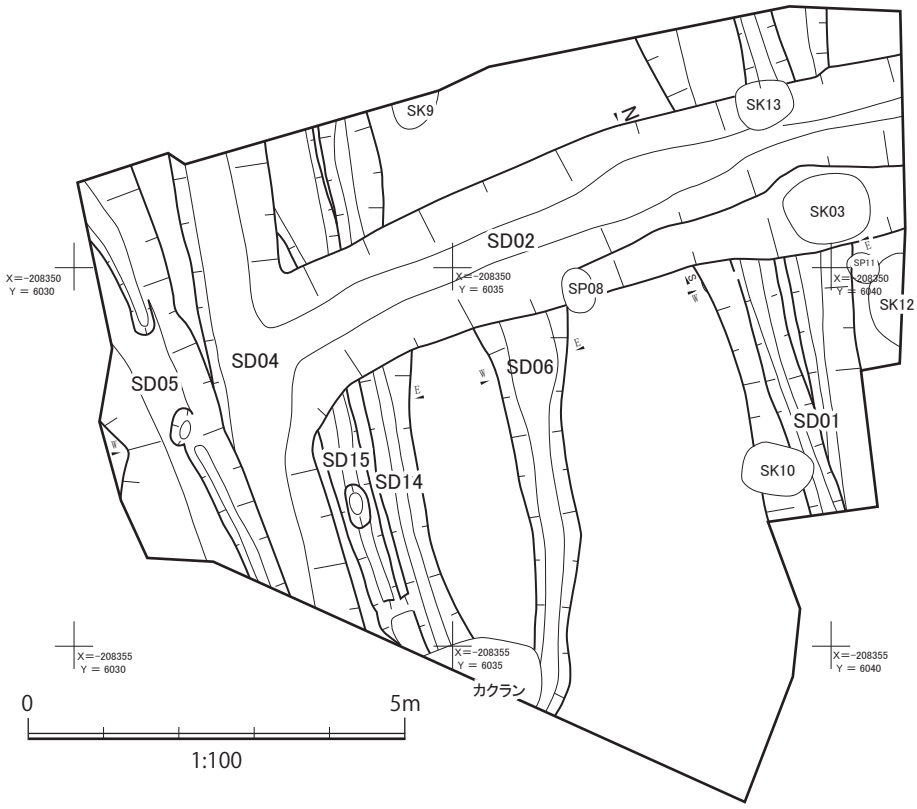
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SK03	陶器	壺	常滑か	内面はにぶい黄褐色。外面に釉付着。胎土は灰白色で白色粒を含む。内面に斜方向ナデ。研磨土器に転用。	最大長 (6.1)	最大幅 (6.1)	最大厚 (1.4)

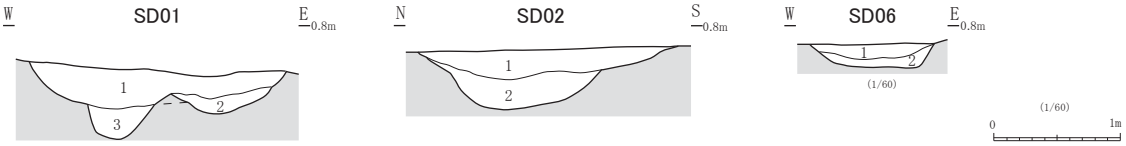


第198図 A区SK10出土石製品

第129表 A区SK10出土石製品観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	SK10	石製品	温石	側面は研磨により整形している。片面は被熱により黒化している。石材は黒雲母片岩（ホルンフェルスか熱変成を受けている）。	一部欠損	12.7	(9.5)	(1.8)	(347.0)





SD01土層注記

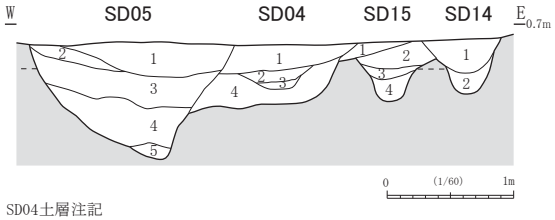
層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	褐灰色砂質シルト中ブロック下位に少量集積。しまりややよわい。粘性弱い。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	酸化鉄小ブロック少量。しまりやや強い。粘性やや強い。
3	褐灰色	(10YR4/1)	粘質シルト	にぶい黄褐色砂中ブロックやや多い。酸化鉄やや多い。しまりやや強い。粘性やや強い。

SD02土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性弱い
2	褐色	(10YR4/4)	砂質シルト	しまりやや強い。酸化鉄小ブロックやや多い。ややグライ化

SD06土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	しまり強い。粘性やや強い。酸化鉄小ブロックやや多い。ややグライ化。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。



SD05土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物ごく微量含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。黄褐色ブロック多量に含む。
3	暗褐色	(10YR3/4)	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。
4	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。砂質強い。
5	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	しまり弱い。粘性やや強い。酸化鉄中ブロック少量含む。ややグライ化。

SD04土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。
2	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。1層より砂質。
3	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。
4	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。酸化鉄中ブロックやや多く含む。ややグライ化。

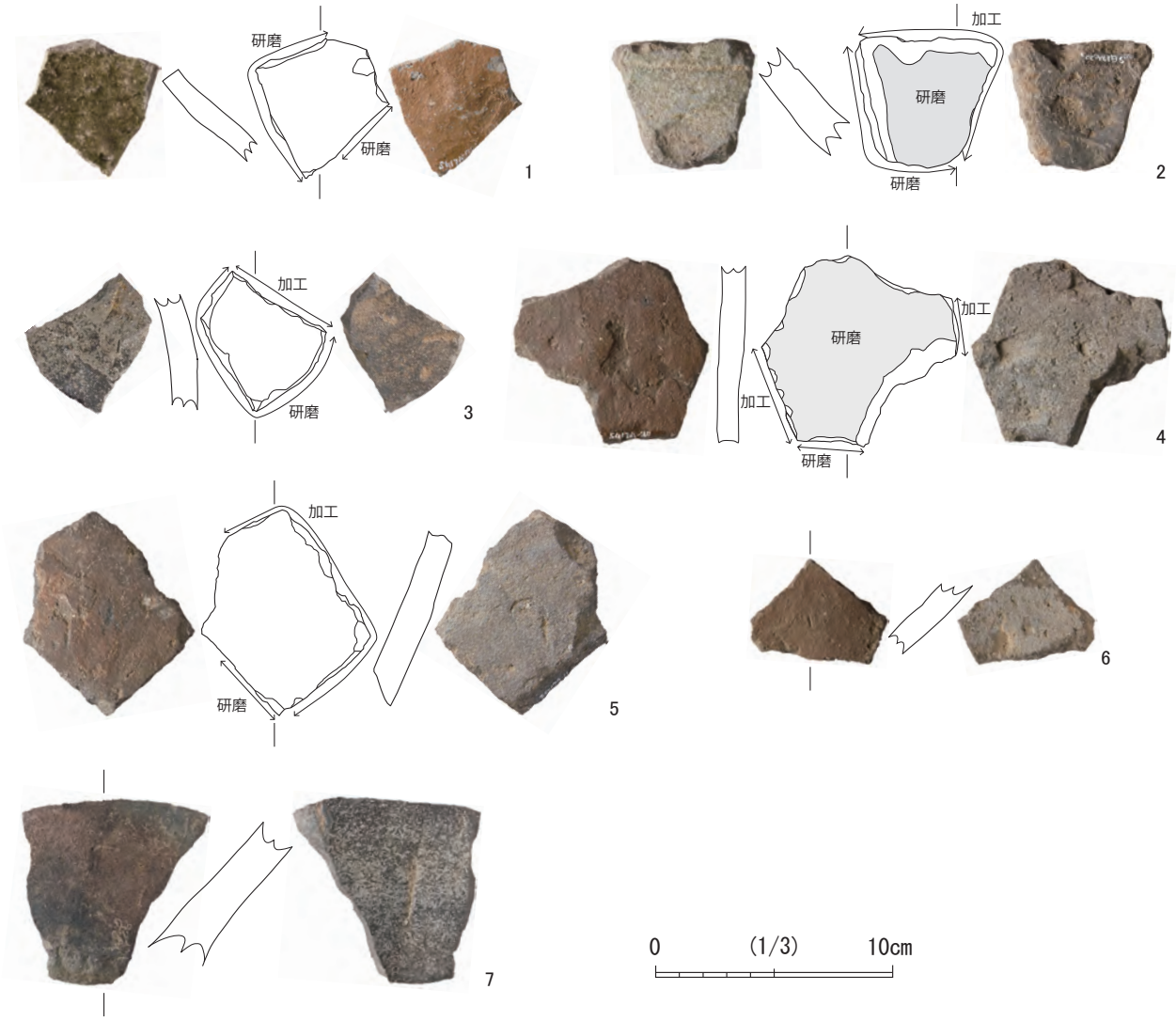
SD14土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。黄褐色小ブロック少量含む。
2	暗褐色	(10YR5/6)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性弱い。褐灰色小ブロック少量含む。酸化鉄含む。

SD15土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。
2	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。酸化鉄粒状に少量含む。ややグライ化。
3	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性弱い。酸化鉄粒状に少量含む。ややグライ化。
4	暗褐色	(10YR5/6)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性強い。褐灰色小ブロック少量含む。酸化鉄含む。

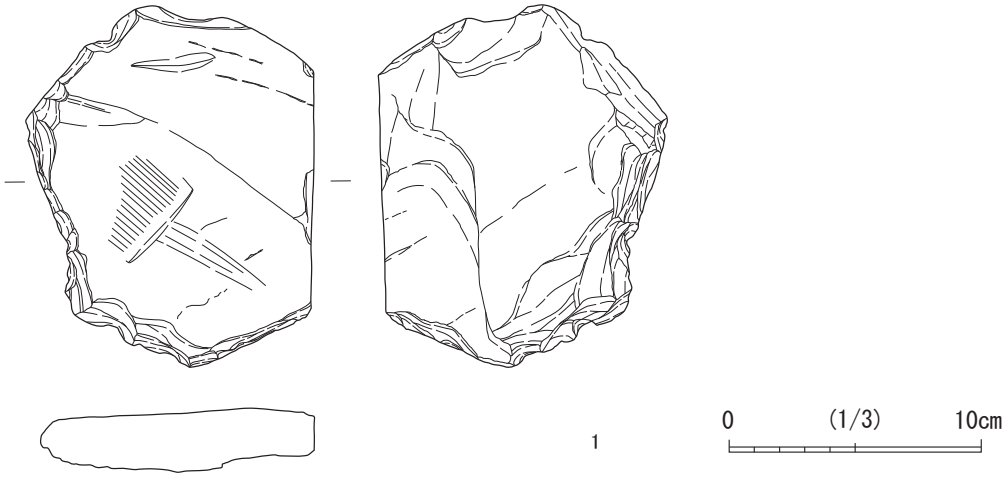
第 199 図　A 区　SD、土層断面図



第 200 図 A 区 SD01 出土遺物

第 130 表 A 区 SD01 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD01	陶器	甕	常滑	内面はにぶい黄褐色。外面に釉付着。胎土灰白色。研磨土器に転用。	最 大 長 (6.4)	最 大 幅 (5.6)	最 大 厚 (1.0)
2	SD01	陶器	甕	白石	内面は灰色。外面は灰白色，自然釉付着。胎土は灰色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最 大 長 (5.6)	最 大 幅 (6.1)	最 大 厚 (1.1)
3	SD01	陶器	甕	白石	内面は灰色。外面は黒色，自然釉付着。内外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(4.9)
4	SD01	陶器	甕	白石	内面は褐灰色。外面は灰褐色。胎土は褐灰色で砂粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用 .	最 大 長 (8.0)	最 大 幅 (8.4)	最 大 厚 (1.1)
5	SD01	陶器	甕	白石	内面は黄灰色，自然釉付着。外面は灰褐色。胎土は褐灰色で白色大粒を含む。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最 大 長 (8.7)	最 大 幅 (7.2)	最 大 厚 (1.3)
6	SD01	陶器	片口鉢	常滑か	内面は灰色，自然釉付着。外面は灰褐色。胎土は灰黄褐色で白色粒を含む。			(2.9)
7	SD01	陶器	甕	白石	内面は黒褐色，自然釉付着。外面は褐色。胎土は褐灰色。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(6.1)



第 201 図　A 区 SD01 出土石製品

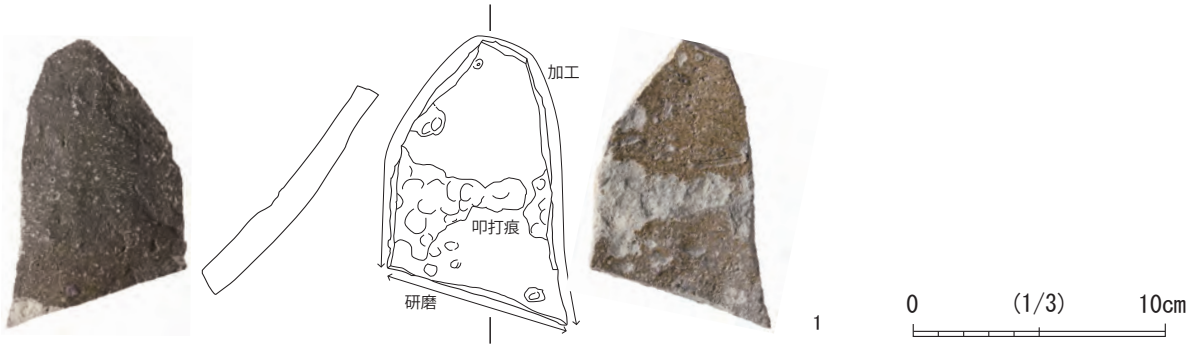
第 131 表　A 区 SD01 出土石製品観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	SD01-1 層	石製品	不明石製品	3辺を打ち欠いて整形している。1面にわずかに擦痕が観察される。石材は黒雲母片岩で、温石の可能性が高い。	完存	14.3	11.4	2.3	528.0

第 202 図　A 区 SD02 出土遺物

第 132 表　A 区 SD02 出土遺物観察表

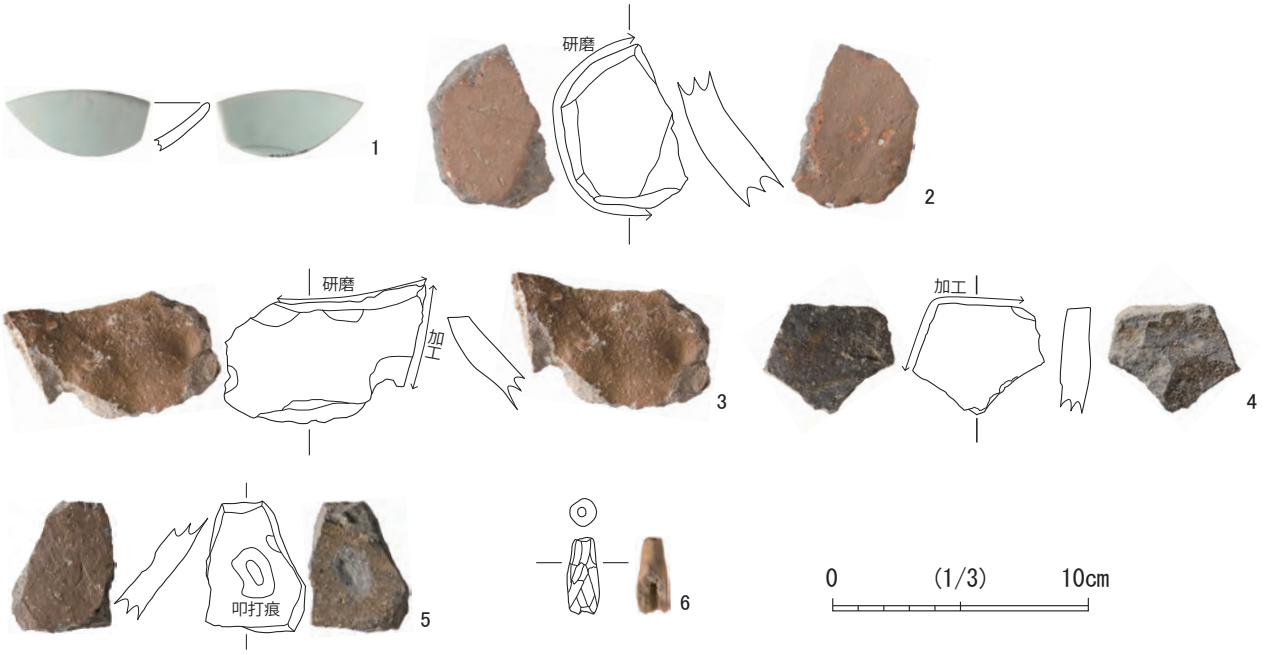
番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD02	陶器	甕	白石	内面は灰色。外面は灰褐色。胎土は灰褐色で砂粒を多く含む。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(5.3)



第 203 図　A 区 SD2 と SD04 の合流点出土遺物

第 133 表　A 区 SD02 と SD04 の合流点出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD2 と SD04 の合流点	陶器	甕	常滑か	内面は灰色，自然釉付着。外面は黒褐色。胎土は灰黄色で砂粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。研磨土器に転用。			



第 204 図 A 区 SD05 出土遺物

第 134 表 A 区 SD05 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD05	染付磁器	皿	肥前か		(13.0)		(1.9)
2	SD05	陶器	甕	白石	内外面はにぶい褐色。胎土は黄灰色で白色粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。			(5.3)
3	SD05	陶器	甕	常滑	内面は褐色。外面に自然釉付着。胎土はにぶい黄橙色で白色大粒を含む。研磨土器に転用。	最大長 (7.4)	最大幅 (5.3)	最大厚 (1.1)
4	SD05	陶器	甕	白石	研磨土器。内面は黄灰色。外面は褐灰色。胎土は灰白色。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (4.3)	最大幅 (5.2)	最大厚 (1.2)
5	SD05	陶器	甕	常滑か	内面は褐灰色。外面は灰褐色。胎土は黄灰色で砂粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。研磨土器に転用。内面に叩打痕跡。	最大長 (5.1)	最大幅 (3.9)	最大厚 (1.0)
6	SD05	土製品	土錘			最大長 (3.0)	最大幅 (1.25)	最大厚 (0.5)

第 205 図 A 区 SD15 出土遺物

第 135 表 A 区 SD15 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD15	陶器	甕	不明	内外面ともに灰黄色。胎土は灰白色で砂粒を多く含む。内面にタテ方向ナデ，指頭状圧痕。外面にタタキ（斜方向，交互）。12 世紀か。			(3.6)

2．B 区の調査

a．調査の概要

B 区は北辺 9.0m、南辺 12.6m、東辺 19.9m、西辺 15.8m の一部突出した不正長方形の調査区で、調査面積は 310 ㎡である。重機により水田耕作土を除去し、五間堀川の自然堤防を形成するにぶい黄褐色砂質シルト層上面で遺構を確認した。遺構確認面までの深さは現表土から約 1.2 m、確認面の標高は 0.54 mである。自然堤防を形成しているにぶい黄褐色砂質シルト層は厚さ 0.1 ～ 0.15 mを測り、以下は第Ⅱ浜堤を形成する砂層となる。調査の結果 B 区で確認した遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑9基、溝跡3条である。

b．掘立柱建物跡（第 207 図）

掘立柱建物跡 SB35 は調査区南西に位置する東西棟の掘立柱建物跡である。桁行 2 間、梁行1間を確認し、さらに西側へ延びる可能性がある。確認した桁行長は 2.75m、梁行長は 2.3m、桁行柱間寸法は 1.375m 梁行柱間寸法は 2.3m でる。SB35 の主軸方位は E-16°　-N を示す。柱穴跡は P17（径 0.22 × 0.16m、深さ 0.16m）、P18（径 0.33 × 0.3m、深さ 0.15m）、P19（径 0.24、深さ 0.2m）、P20（径 0.29 × 0.27m、深さ 0.23m）、P21（径 0.31 × 0.2m、深さ 0.05m）で、P17・P18・P20・P21 で柱痕跡を確認した。出土遺物はなく時期は不明である。

c．土坑（第 208・209 図、第 136 表）

土坑は SK25・SK26・SK27・SK28・SK29・SK32・SK33 の合計7基を確認した。

SK25 は調査区南東よりで確認され、新旧関係は SD23 より新しい。平面形は不正長方形、規模は 1.20 × 0.56m、深さ 0.14m で、北壁および南壁にテラスをもち、遺構中心部は一段下がる。第 209 図は SK205 から出土した土器である。白石産陶器の片口鉢が出土しており、13 世紀後半～ 14 世紀前半と考えられる。

SK26 は調査区南東寄りで確認され、新旧関係は SK32 より新しい。平面形は不正楕円形、規模は 0.83 × 0.60m、深さ 0.16m で、断面形はごく浅く底面は凹凸がある。

SK27 は調査区南東寄りで確認された。平面形は不正楕円形、規模は 0.86 × 0.69m、深さ 0.16m で、断面形はごく浅く底面は凹凸がある。

SK28 は調査区北東寄りで確認された。平面形は不正楕円形、規模は 0.86 × 0.46m、深さ 0.16m で、断面形は皿型である。埋土は焦土と炭化物とともに骨小辺を多量に含み、火葬骨の可能性が考えられる。

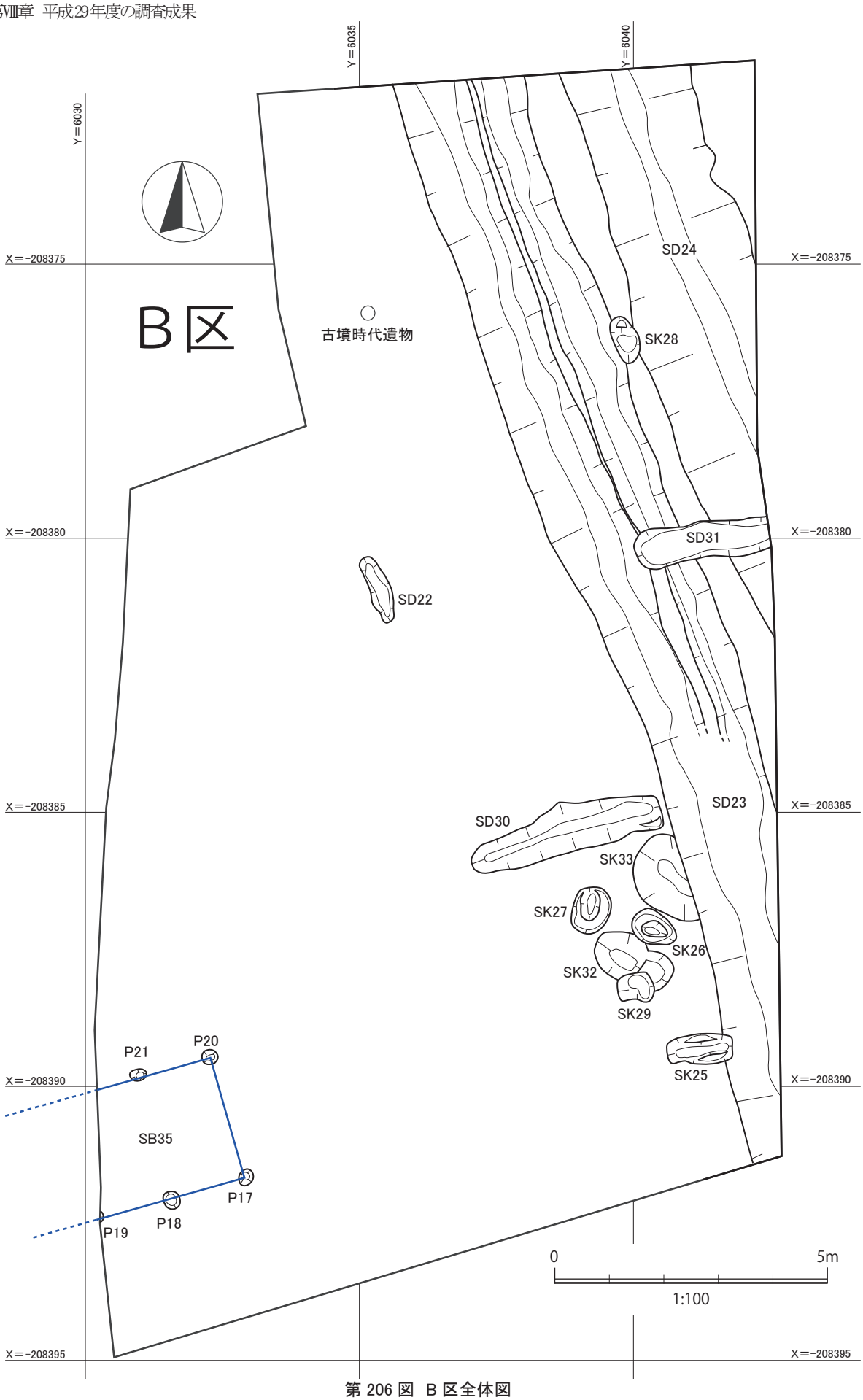
SK29 は調査区南東寄りで確認され、新旧関係は SK32 より新しい。平面形は不正方形、規模は 0.67 × 0.60m、深さ 0.43m で、壁はややオーバーハングして立ち上がる。

SK32 は調査区南東寄りで確認され、新旧関係は SK26・SK29 より古い。平面形は不正双円形、規模は 1.50 × 0.88m、深さ 0.24m で、底面は凹凸がある。

SK33 は調査区南東寄りで確認され、新旧関係は SD23 より古い。平面形は不正円形、規模は 1.64 × 1.25m、深さ 0.48m で、断面形は緩い V 字状を呈する。

d．溝跡（第 210 ～ 217 図、第 137 ～ 142 表）

溝跡は SD22・SD23・SD24・SD30・SD31 の合計5条を確認した。

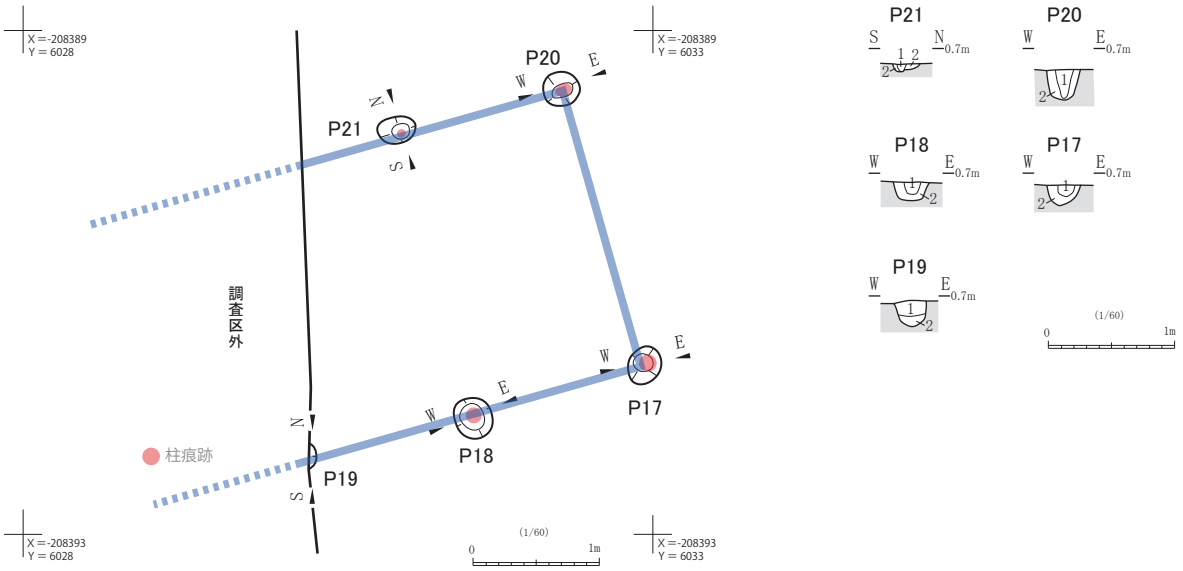

Y=6035
Y=6040
Y=6030
X=-208375
X=-208380
X=-208385
X=-208390
X=-208395
B区
古墳時代遺物
SD24
SK28
SD31
SD22
SD23
SD30
SK33
SK27
SK26
SK32
SK29
SK25
P21
P20
SB35
P17
P18
P19
0
5m
1:100

第 206 図 B 区全体図

SD22は調査区中央に位置する南北溝で、1.24m分を確認した。軸方位はN-20°　-Wを示し、最大幅は0.42mを測る。断面形は浅い皿状で、確認面からの深さは0.7mである。

SD23は調査区東寄りに位置する南北溝で、20.7m分を確認した。新旧関係はSK24・SK28・SD31より古い。軸方位はN-18°　-Wを示し、最大幅は2.42m、深さは0.42mを測る。南セクションの観察から、断面形逆台形を呈する1期目の溝を、埋没後に断面形が浅いV字状に近い2期目の溝に掘り直していることがわかる。溝底面の標高は北セクションで0.17m、南セクションで0.08mで南へ下っている。　第211図から第213図はSD23から出土した土器である。白石産陶器と常滑産陶器が多く出土している。陶器片の断面および内面を研磨に転用したものが多数みられる。第213図7は肥前産陶器碗で17世紀後半の所産であるが、溝の底面に近い高さから中世陶器片が出土しており、SD23の時期は中世陶器片の時期13世紀後半～14世紀前半と判断できる。第14図は石製品である。堆積土の上層と下層から石臼が1点、磨面をもつ礫が1点、不明石製品が3点出土している。石臼は茶臼下臼の受皿縁部の一部である。磨面をもつ礫はやや扁平な円礫の側面に数面の磨面が認められる。不明石製品は縁辺を打ち割ったり、打ち欠いて整形している。その中の4は板状の素材で、石材が黒雲母片岩であることから、温石の可能性が考えられる。

SD24は調査区東寄りに位置する南北溝で、11.0m分を確認した。新旧関係はSK24・SK28・SD31より古い。



P21土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト粒状に微量含む。
2	褐色	(10YR4/4)	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。黒褐色シルト小ブロックやや多く含む。

P20土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	しまり弱い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト粒状にごく微量含む。焼土粒状に微量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。褐色シルト小ブロック多量に含む。

P18土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色シルト粒状に微量含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。褐色シルト小ブロック多量に含む。

P17土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	にぶい黄褐色シルト小ブロックやや多く含む。しまりやや弱い。粘性弱い。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	褐色シルト小ブロックやや多く含む。しまりやや強い。粘性やや強い。

P19土層注記

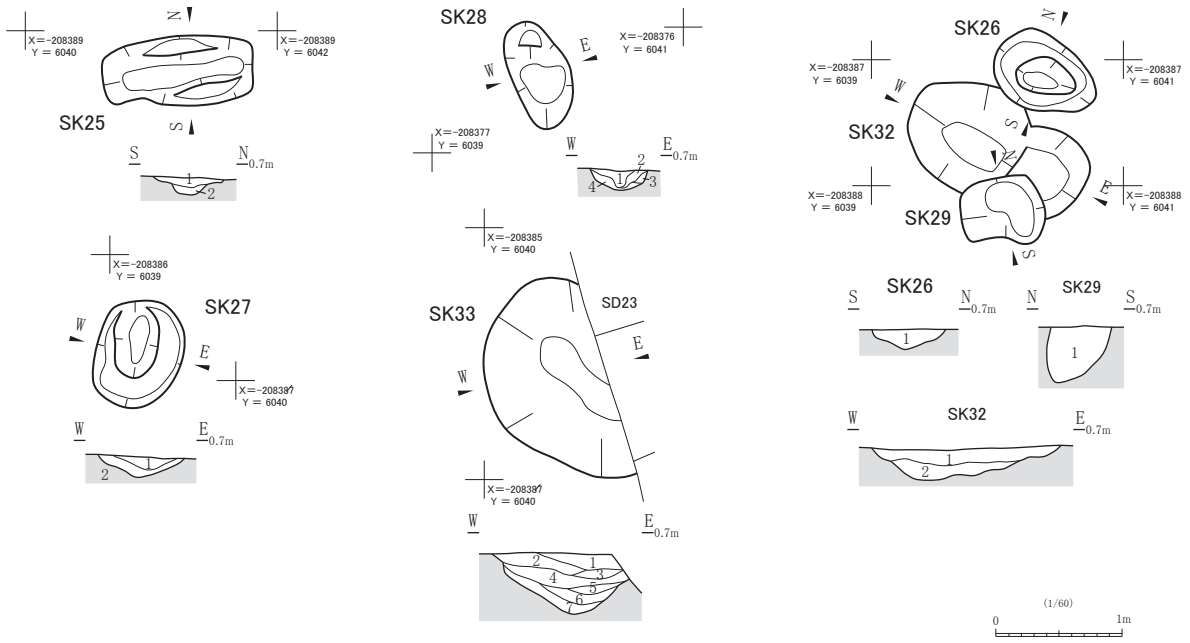
層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。炭化物ごく微量含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。黄褐色ブロック多量に含む。

第207図　B区　SB35、ピット土層断面図

軸方位はN-21° -Wを示し、最大幅は2.42m、断面形はV字状を呈し、深さは0.94mを測る。溝底面の標高は北セクションで-0.45m、南セクションで-0.26mを測る。第215図はSD24から出土した土器である。白石産陶器・常滑産陶器・産地不明陶器が出土している。溝の時期は白石産陶器の時期13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

SD30は調査南東よりに位置する東西溝で、3.60m分を確認した。軸方位はE-16° -Nを示し、最大幅は0.83m、断面形は浅いV字状を呈し、深さは0.24mを測る。第217図1はSD30から出土した白石産陶器の壺または甕の底部である。13世紀後半～14世紀前半である。

SD31は調査区東よりに位置する東西溝で、2.5m分を確認した。新旧関係は、SD23・SD24よりも新しい。軸方位はE-9° -Wを示し、最大幅は0.66m、断面形は浅い皿型で、深さは0.16mを測る。



SK25土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。黄褐色シルト中ブロック少量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。

SK27土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	灰黄褐色	(10YR4/2)	シルト	しまり強い。粘性やや強い。
2	暗褐色	(10YR3/3)	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。

SK28土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/3)	砂質シルト	しまり弱い。粘性やや弱い。酸化鉄・焼土小ブロック多量に含む。骨小片多量に含む。
2	黄褐色	(10YR5/6)	粘質シルト	しまり弱い。粘性やや強い。
3	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	しまり強い。粘性やや強い。炭化物・焼土粒状に少量含む。
4	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	しまり弱い。粘性やや強い。

SK26土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	灰黄褐色	(10YR4/2)	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。酸化鉄層全体に散見してやや多く含む。

SD29土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。褐色シルト小ブロック少量含む。

SK32土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	灰黄褐色	(10YR4/2)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト粒状に多量に含む。酸化鉄粒状に多量に含む。
2	黒褐色	(10YR3/1)	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。酸化鉄粒状に多量に含む。

SK33土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/4)	粘質シルト	しまり弱い。粘性やや強い。酸化鉄粒状にごく微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。にぶい黄褐色シルト小ブロックやや多量に含む。酸化鉄小ブロックやや多く含む。
3	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。酸化鉄小ブロックやや多く含む。
4	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。酸化鉄小ブロックやや多く含む。
5	黒褐色	(10YR3/2)	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。酸化鉄小ブロックやや多く含む。
6	灰黄褐色	(10YR4/2)	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。にぶい黄褐色粘質シルト中ブロック多量に含む。酸化鉄小ブロックやや多く含む。
7	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。酸化鉄小ブロックやや多く含む。

第208図 B区 SK、土層断面図

e. その他の出土遺物（第 218 図、第 143 表）

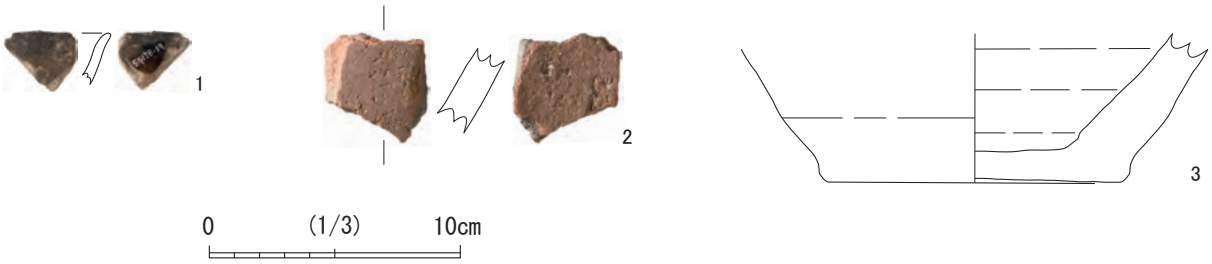
第 218 図は遺構外から出土した遺物である。1 は古墳時代中期の土師器坏である。遺構確認面となっている自然堤防上面で出土したもので、慎重に状況を確認したが、削平され、深さ残りわずかになった遺構内に入り込んだものか、砂質シルト中に包含されていたものか、判断できなかった。全体の3分の1が欠損しているが、保存状況は良好で、現地性の高いものである。器形は底部が丸底で、体部は内弯し口縁部で屈曲して短く外反する。製作にロクロは使用しておらず、成形後に外面はヘラケズリ、ヨコナデ、ヘラミガキ、内面はヘラミガキによりそれぞれ調整され、全面が焼成前に赤彩されている。2 は B 区の機械による表土除去時に出土した瀬戸美濃天目茶碗で 17 世紀中頃の所産である。

3. 平成 29 年度調査のまとめ

確認された溝跡はいずれも区画溝と考えられるが、これらの溝跡の主軸方位は南北軸で 12°　16°　17°　18°　21°　24°　25°で、12°　16-18°　21-25°のグルーピングが可能である。一方東西軸は 9°　16°　21°となる。また A 区で確認した掘立柱塀跡は東西軸 6°、B 区で確認した掘立柱建物跡は東西軸 16°である。以上のことから 6°　9°　12°は少数でばらつきが多いが、16-18°　21-25°は企画性の高い軸方位といえる。

区画溝のうち重複関係・出土遺物から最も古い溝は SD15 である。SD14 は軸方位はやや異なるが重複し同様な断面形を持つことから SD15 に後続する溝と考える。この 2 本の区画溝が立て続けに機能した時期を1期とする。2期は重複関係から SD01 である。3期は同時に存在した可能性がある SD02 と SD04 である。4期は A 区で最も新しい区画溝である SD05 と SD24 である。SD24 は軸方位が近く断面形が近似するため SD05 の延長の可能性が考えられる。5期は軸方位の近い SD23・SD30 と、さらに同様な軸方位を持つ掘立柱建物跡 SB35 である。6期はさらに軸方位を変えた SD31 と SA34 が該当する。

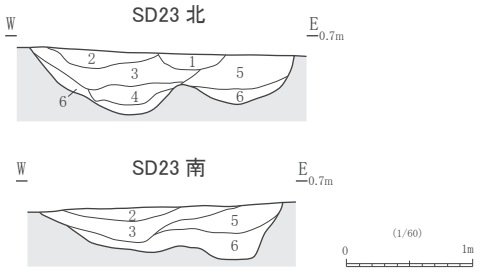
出土遺物は、もっとも古い1期の溝跡である SD15 からタタキのある陶器が出土しており 12 世紀代か。2～5期の溝跡からは白石産陶器・常滑産陶器の出土が多く、13 世紀後半～ 14 世紀前半を中心とした中世前半といえる。6期の遺構からは出土遺物がなく時期は不明である。また、白石産陶器・常滑産陶器に含まれる研磨使用への転用例が多いことが指摘できる。当調査区周辺地区の性格を表している可能性がある。



第 209 図　B 区 SK25 出土遺物

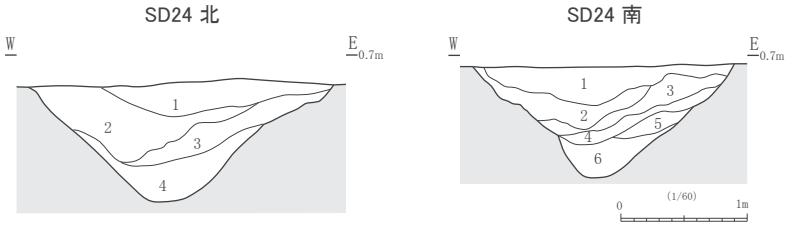
第 136 表　B 区 SK25 出土遺物観察

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SK25	土師器	坏		非ロクロ整形。内面はヘラミガキか。外面は斜方向ヘラケズリ。内外面に炭化物付着。			(2.0)
2	SK25	陶器	甕		内外面ともに灰褐色。胎土表面は明赤褐色。胎土内は褐灰色。内外面にタテ方向ナデ。			(3.4)
3	SK25	陶器	片口鉢	白石	内外面ともににぶい赤褐色。胎土は褐灰色で砂粒（特に黒色ガラス質粒）を多く含む。内外面にロクロナデ。使用により内面磨滅。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.9)



SD23土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。炭化物やや多く含む。
2	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性弱い。黄褐色小ブロックやや多く含む。
3	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。黄褐色小ブロックやや多く含む。
4	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。
5	灰黄褐色	(10YR4/2)	粘質シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。酸化鉄やや多く含む。
6	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。酸化鉄やや多く含む。

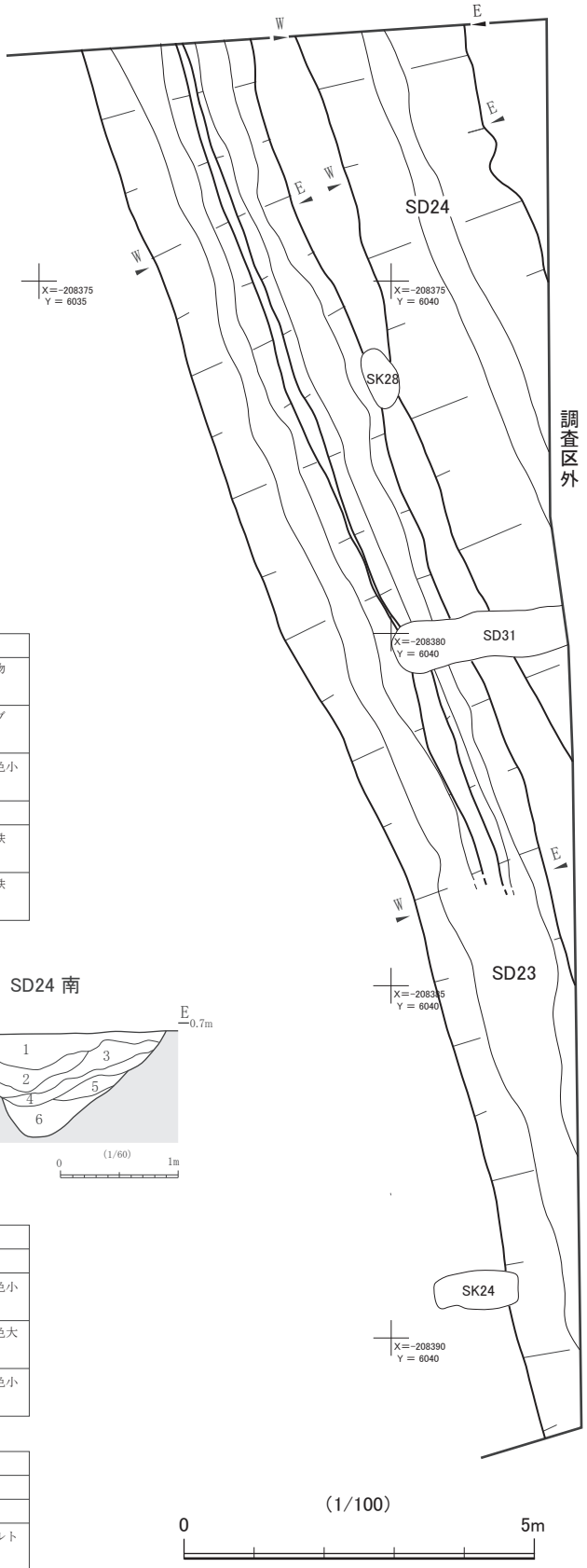


SD24土層注記

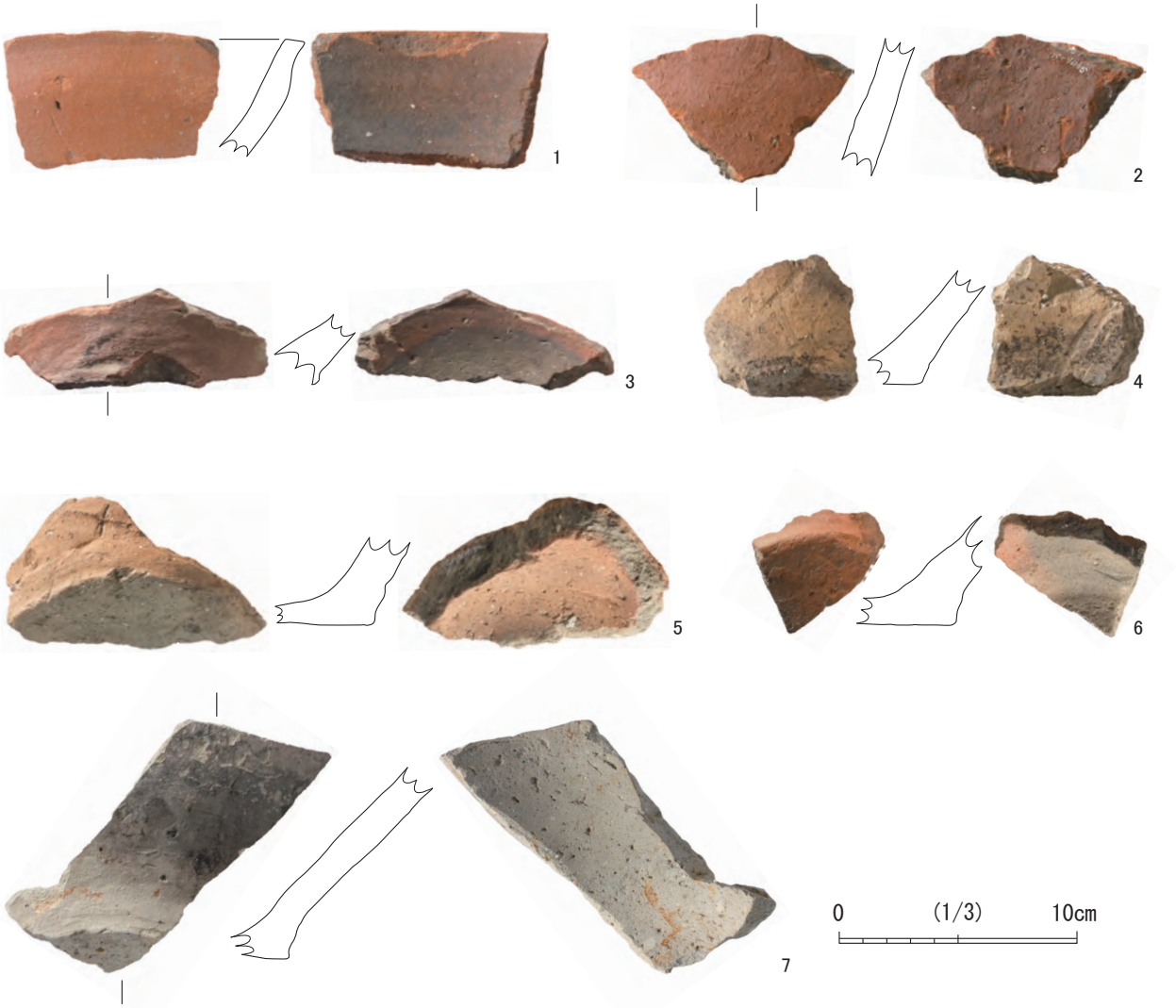
層No.	土色		土質	備考
1	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。
2	暗褐色	(10YR4/3)	粘質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。黄褐色小ブロック少量含む。
3	にぶい黄褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。黄褐色大ブロック多量に含む。
4	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。黄褐色小ブロック少量含む。

SD24土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	灰黄褐色	(10YR4/2)	シルト	しまりやや弱い。粘性やや。
2	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性弱い。
3	にぶい黄褐色	(10YR5/4)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性弱い。黄褐色シルト大ブロック多量に含む。
4	褐色	(10YR4/4)	シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。
5	褐色	(10YR4/6)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。黄褐色大ブロック多量に含む。
6	暗褐色	(10YR3/3)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや強い。酸化鉄層全体に散見する。



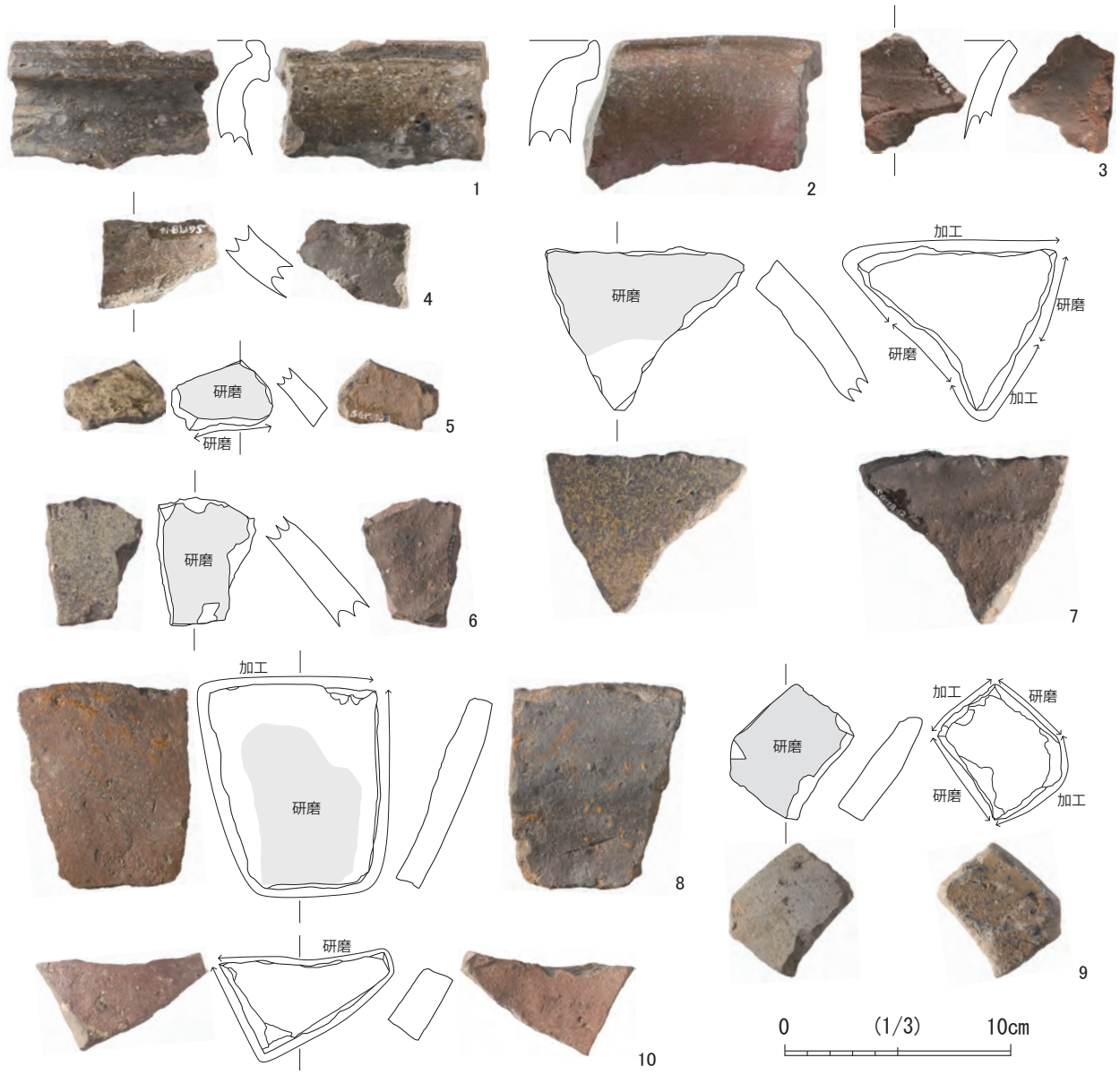
第 210 図 B 区 SD23・24、土層断面図



第 211 図　B 区 SD23 出土遺物1

第 137 表　B 区 SD23 出土遺物観察表1

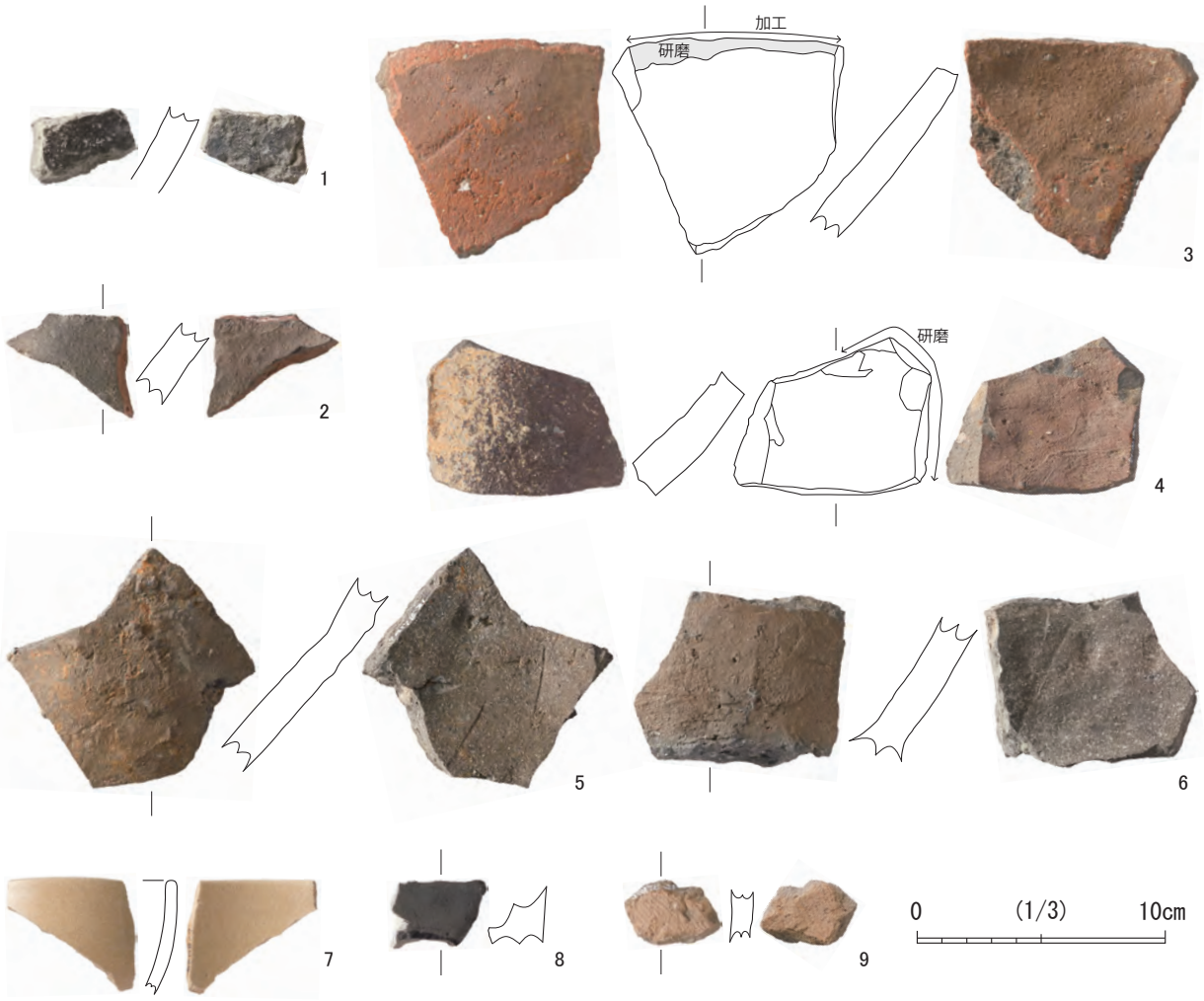
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD23	陶器	片口鉢	白石	内面は褐灰色。外面はにぶい赤褐色。胎土はにぶい赤褐色で砂粒を含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.9)
2	SD23	陶器	片口鉢	白石	内外面ともににぶい赤褐色。胎土表面はにぶい赤褐色。胎土内は黄灰色で砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.8)
3	SD23	陶器	片口鉢	白石	内外面ともににぶい赤褐色。胎土は褐灰色で白色粒を少量含む。外面にヨコ方向ナデ。使用により内面磨滅。			(2.9)
4	SD23	陶器	片口鉢	白石	内外面ともににぶい黄橙色。胎土は暗灰黄色で砂粒を多く含む。外面にロクロナデ。使用により内面磨滅。13 世紀後半～ 14 世紀前半。		(15.0)	(4.85)
5	SD23	陶器	片口鉢	白石	内外面ともににぶい橙色。胎土は灰色で砂粒(特に白色粒)を多く含む。外面にロクロナデ。使用により内面磨滅。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(3.7)
6	SD23	陶器	片口鉢	白石	内外面ともににぶい赤褐色。胎土は褐灰色で砂粒を多く含む。外面にヨコ方向ナデ。使用により内面磨滅。13 世紀後半～ 14 世紀前半。		(16.0)	(4.6)
7	SD23	陶器	片口鉢	不明	内外面ともに灰白色。胎土は灰白色で白色粒を含む。外面にロクロナデ。使用により内面磨滅。			(8.3)



第 212 図 B 区 SD23 出土遺物2

第 138 表 B 区 SD23 出土遺物観察表 2

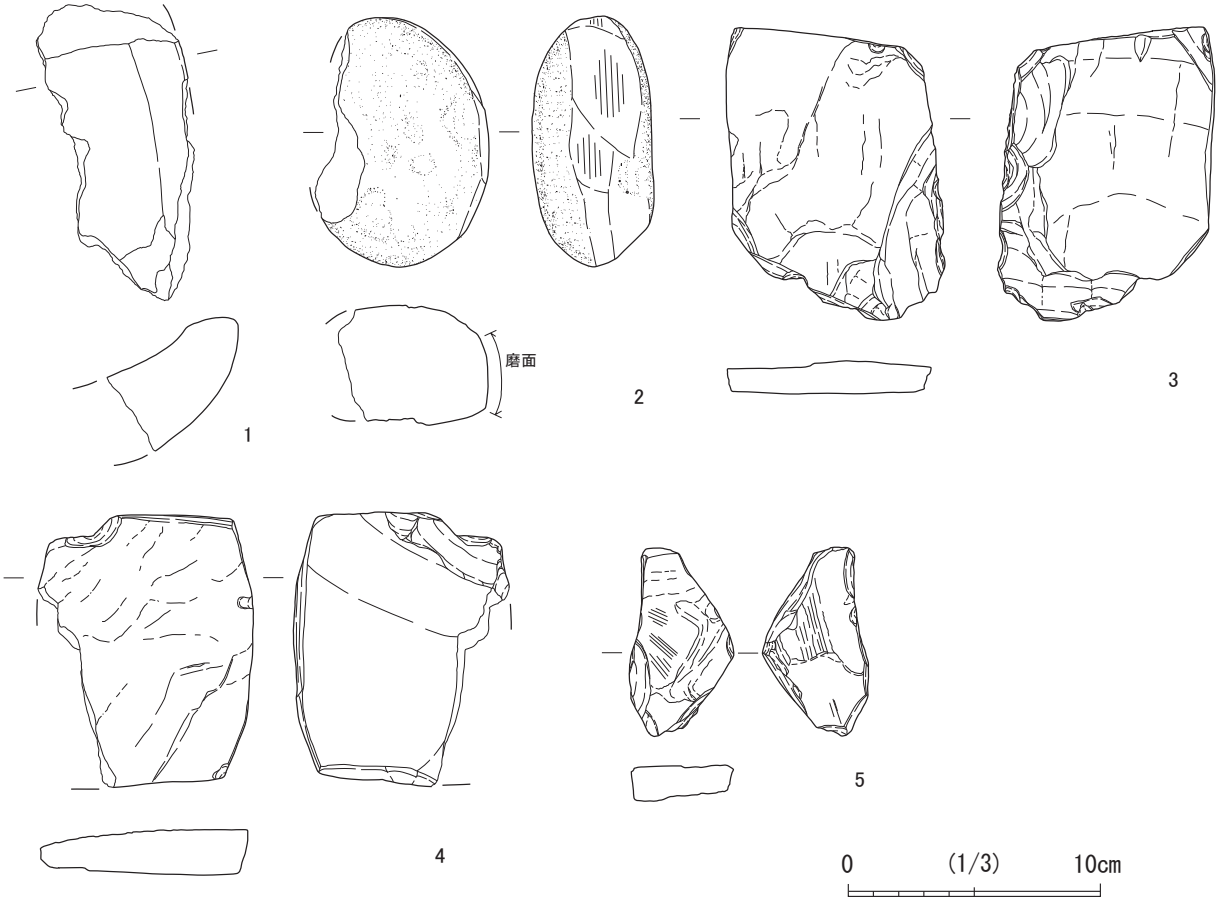
番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD23	陶器	甕	常滑	内外面は褐灰色。内面に自然釉付着。胎土は灰白色で白色粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。常滑 6a 型式。13 世紀第 3 四半期。			(10.2)
2	SD23	陶器	壺	白石	内外面ともににぶい赤褐色。胎土表面は灰白色。胎土内は灰色。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.7)
3	SD23	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土は褐灰色で砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(4.4)
4	SD23	陶器	甕	白石	内面は黄灰色。外面は灰褐色，自然釉付着。胎土は黄灰色。内外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(3.2)
5	SD23	陶器	甕	白石	内面はにぶい黄褐色。外面に釉付着。胎土は褐灰色で砂粒を含む。内面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (3.1)	最大幅 (4.5)	最大厚 (1.0)
6	SD23	陶器	甕	白石	内面褐灰色。外面に自然釉付着。胎土はにぶい赤褐色で白色粒，黒色ガラス質粒を含む。内面斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (5.6)	最大幅 (4.4)	最大厚 (1.5)
7	SD23	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。外面に自然釉付着。胎土は黄灰色で白色粒，黒色ガラス質粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (7.2)	最大幅 (8.9)	最大厚 (1.2)
8	SD23	陶器	甕	白石	内面は灰色。外面はにぶい赤褐色。胎土は褐灰色で白色粒を多く含む。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (9.0)	最大幅 (7.6)	最大厚 (1.5)
9	SD23	陶器	壺	常滑か	内面はにぶい黄橙色で外面は灰白色。胎土は灰白色。内面に斜方向ナデ。研磨土器に転用。	最大長 (6.0)	最大幅 (5.5)	最大厚 (1.4)
10	SD23	陶器	甕	白石	内面はにぶい褐色。外面は灰褐色。胎土は黄灰色で白色粒を多く含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (4.1)	最大幅 (7.5)	最大厚 (1.7)



第 213 図　B 区 SD23 出土遺物3

第 139 表　B 区 SD23 出土遺物観察表3

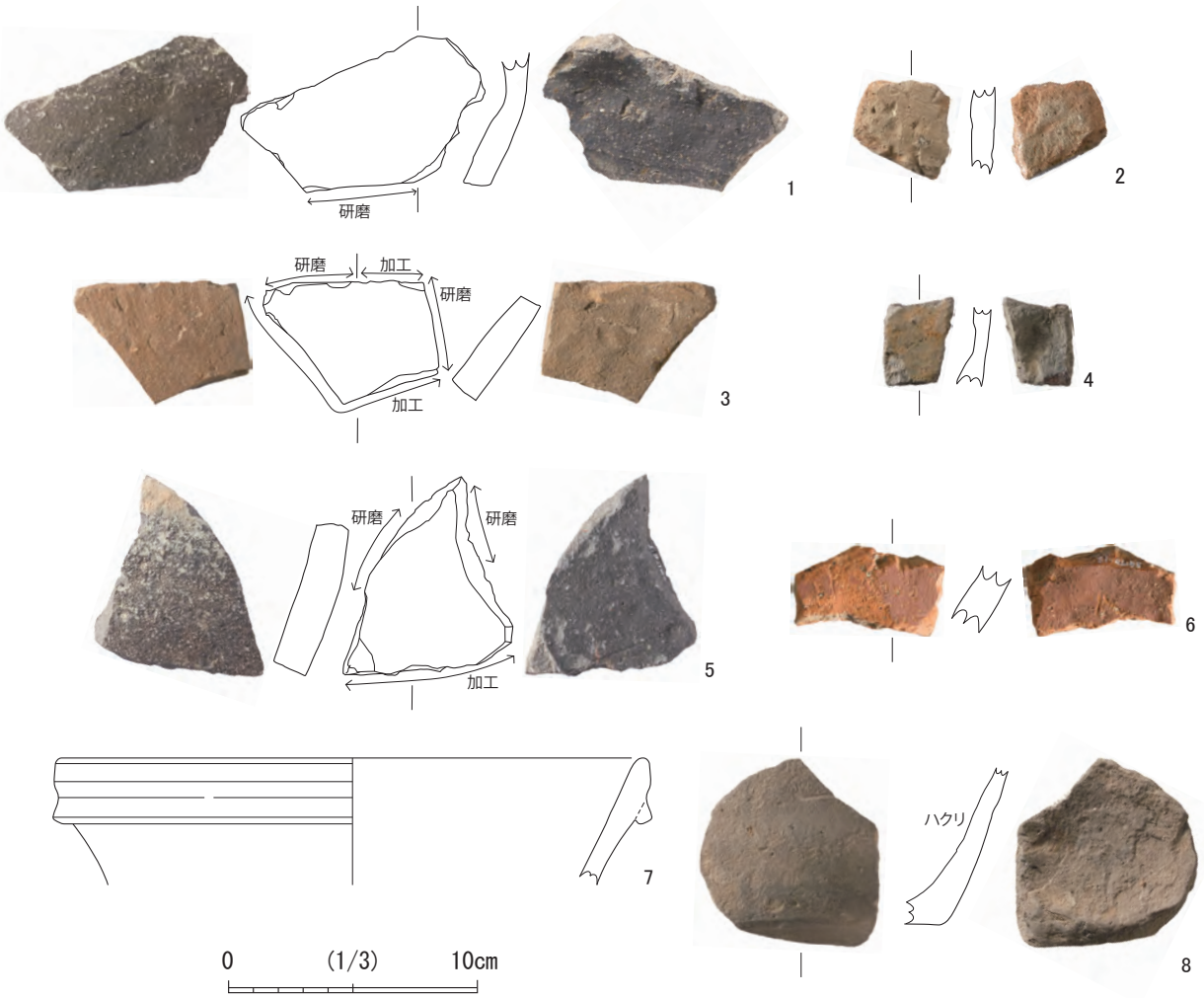
番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD23	陶器	甕	不明	内面は黄灰色。外面は黒褐色。胎土は灰色で砂粒を含む。			(3.5)
2	SD23	陶器	甕	白石	内外面ともに褐灰色。胎土はにぶい赤褐色で白色粒を含む。内面はヨコ方向ナデ。外面は斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(3.4)
3	SD23	陶器	甕	白石	内外面ともににぶい褐色。胎土は黄灰色で砂粒を含む。内面に斜方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (8.6)	最大幅 (9.2)	最大厚 (1.4)
4	SD23	陶器	甕	白石	内面はにぶい褐色。外面は灰褐色，自然釉付着。胎土は褐灰色で白色粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (6.3)	最大幅 (8.0)	最大厚 (1.3)
5	SD23	陶器	甕	白石	内面は褐灰色。外面は灰黄褐色。胎土は黄灰色で砂粒を多く含む。粘性強く，堅く締まる。内外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(7.9)
6	SD23	陶器	甕	白石	内面は黄灰色。外面は褐色。胎土は黄灰色で砂粒を多く含む。粘性強く，堅く締まる。内面はヨコ方向ナデ。外面はタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(5.8)
7	SD23	陶器	碗	肥前	呉器手碗。内外面浅黄橙色。胎土はにぶい黄橙色，精良，軟質。17 世紀後半。	(11.0)		(4.7)
8	SD23	瓦質土器		不明				(2.3)
9	SD23	土師器	甕		非ロクロ整形。内外面ハケ調整。			(2.2)



第 214 図 B 区 SD23 出土石製品

第 140 表 B 区 SD23 出土石製品観察表

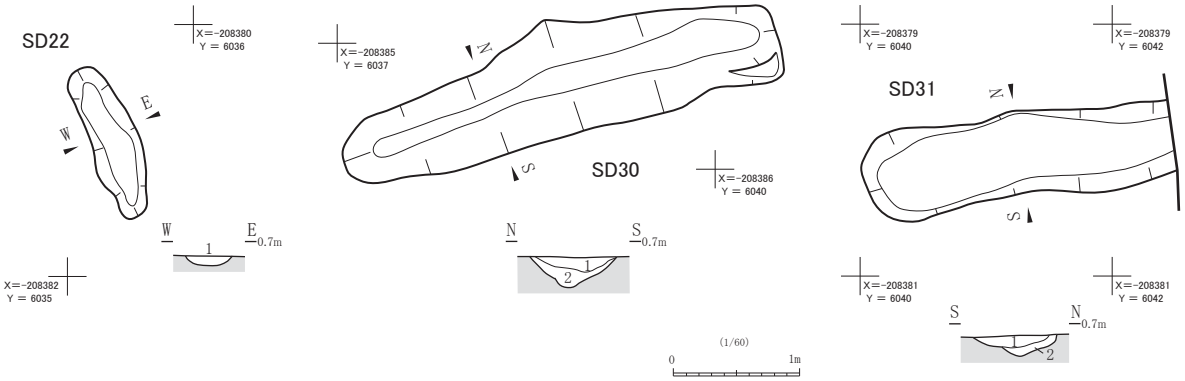
番号	遺構・層位	種別	器種	特徴	残存	法量			
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
1	SD23- 上層	石製品	石臼	茶臼下臼の受皿縁部。石材は安山岩。	一部	(11.7)	(5.6)	(3.5)	(222.0)
2	SD23- 下層	石製品	磨面をもつ礫	やや扁平な円礫の側面に磨面が認められる。石材はデイサイト。	一部欠損	9.9	(6.9)	4.7	(215.5)
3	SD23- 上層	石製品	不明石製品	打ち割ったり、打ち欠いて整形している。石材は粘板岩。	完存	11.6	8.7	1.3	206.5
4	SD23- 上層	石製品	不明石製品	板状の素材を打ち割ったり、打ち欠いて整形している。石材は黒雲母片岩で、温石の可能性が高い。	一部欠損	(10.8)	(8.5)	1.8	(283.5)
5	SD23	石製品	不明石製品	打ち割ったり、打ち欠いて整形している。両面の一部に擦痕が認められる。石材は粘板岩。	完存	7.5	4.2	1.4	56.0



第 215 図　B 区 SD24 出土遺物

第 141 表　B 区 SD24 出土遺物観察表

番号	遺構・層位	種別	器種	産地	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高
1	SD24	陶器	甕	常滑か	内外面ともに暗灰色。胎土は灰白色で白色粒を多く含む。内外面にヨコ方向ナデ。研磨土器に転用。	最大長 (6.3)	最大幅 (9.8)	最大厚 (1.1)
2	SD24	陶器		不明	内外面ともに灰黄色。胎土はにぶい橙色で白色粒を含む。内面は横方向にナデ。外面は斜方向にナデ。			(3.5)
3	SD24	陶器	甕	白石	内面はにぶい黄色。外面はにぶい黄橙色。胎土は黄灰色で砂粒を含む。内面にヨコ方向ナデ。外面にタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (4.9)	最大幅 (7.1)	最大厚 (1.3)
4	SD24	陶器	甕	白石	内面は黄灰色。外面に自然釉付着。胎土は黄灰色。			(3.2)
5	SD24	陶器	壺	不明	内外面ともに灰色。外面に自然釉付着。胎土は灰色で砂粒を含む。内外面にヨコ方向ナデ。研磨土器に転用。			
6	SD24	陶器	甕	白石	内外面ともににぶい赤褐色。胎土表面は明赤褐色。胎土内は黄褐色で砂粒を少量含む。内面はヨコ方向ナデ。外面はタテ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(2.7)
7	SD24 確認面	陶器	擂鉢	不明	内外面に鉄釉。胎土は灰色，粘性強く硬質。口縁部，内外面ともヨコ方向ナデ。17 世紀後半～ 18 世紀前半か。	(23.7)		(5.1)
8	SD24	瓦質土器	鍋	不明	外面は灰色。胎土は黄灰色で砂粒を含む。			(6.3)



SD22土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。褐色シルト粒状にやや多く含む。

SK30土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	褐色	(10YR4/4)	シルト	しまりやや強い。粘性やや強い。褐色シルト粒状に微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。

SD31土層注記

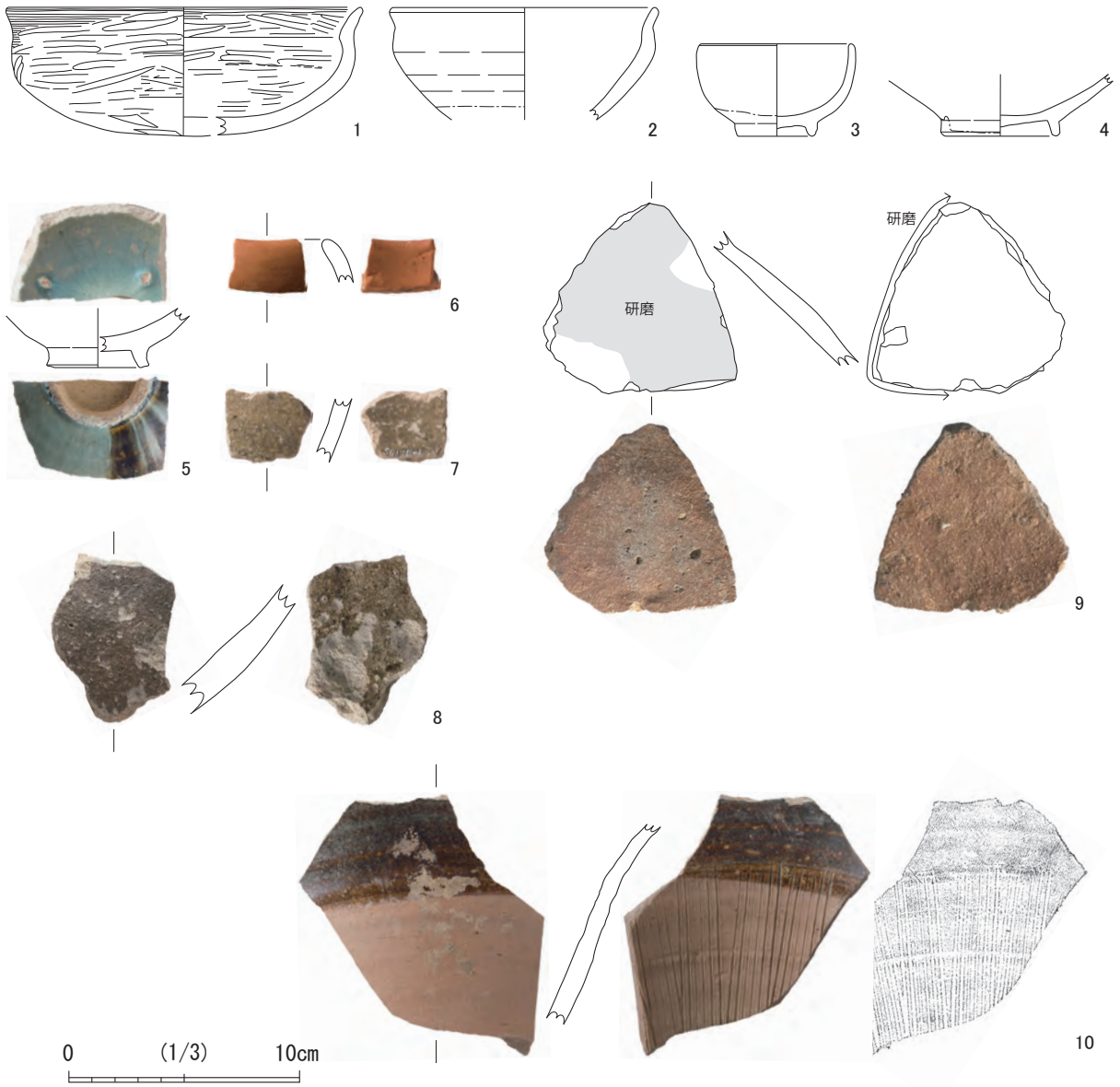
層No.	土色		土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2)	砂質シルト	しまりやや強い。粘性やや弱い。酸化鉄層全体に散見しやや多く含む。
2	暗褐色	(10YR3/4)	砂質シルト	しまりやや弱い。粘性やや弱い。酸化鉄層全体に散見しやや多く含む。

第 216 図 B 区 SD22・30・31、土層断面図

第 217 図 B 区 SD30 出土遺物

第 142 表 B 区 SD30 出土遺物観察表

番 号	遺構・層位	種 別	器 種	産 地	特 徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	SD30	陶器	壺	白石	内外面ともに灰黄褐色。胎土は褐灰色で白色粒，黒色ガラス質粒を含む。外面にヨコ方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。			(1.8)



第 218 図　B 区その他の出土遺物

第 143 表　B 区その他の出土遺物観察表

番　号	遺構・層位	種　別	器　種	産　地	特　　徴	法量(cm)		
						口径	底径	器高
1	基盤層	土師器	坏		全面赤彩。口縁部ヨコナデ。体～底部ヘラケズリ，ヘラナデのち全面ヘラミガキ。胎土は砂粒をほとんど含まない。焼成良好（外面 1/5 黒斑）。色調は赤褐色。古墳時代中期。	15.5		(5.6)
2	掘り下げ	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	内外面に鉄釉。胎土は淡黄色で軟質。登窯第 2 ～ 3 小期。17 世紀中頃。	(11.6)		(4.9)
3	表土	陶器	小碗	瀬戸美濃	内外面に灰釉。体部下端～高台ナデ。胎土は灰黄色，精良，軟質。底部内面磨滅。登窯第 8 小期か。18 世紀後半。	(6.7)	3.4	4.0
4	北壁	陶器	碗	不明	内外面に青灰色釉。胎土は灰白色，精良，軟質。ロクロ成形。高台ロクロ削り出し。		(5.3)	(2.7)
5	精査	陶器	碗	不明	内面は青白色釉。外面は青白色釉に鉄釉。胎土は灰白色で粘性強く硬質。		(5.0)	(2.6)
6	残土	土師質土器		不明	胎土表面は明赤褐色，胎土内は褐灰色。内外面ともに明赤褐色，横方向にヘラミガキあり。			(1.9)
7	掘り下げ	陶器	碗	瀬戸美濃か	内外面に灰釉。胎土はにぶい黄色で砂粒を含む。			(2.8)
8	掘り下げ	陶器	甕	常滑か	内面に自然釉付着。外面は黄灰色。胎土は灰黄褐色で白色粒を含む。外面斜方向ナデ。			(5.7)
9	精査	陶器	甕	白石	内外面ともににぶい褐色。胎土は褐灰色で砂粒を多く含む。内面にタテ方向ナデ。外面に斜方向ナデ。13 世紀後半～ 14 世紀前半。研磨土器に転用。	最大長 (8.2)	最大幅 (8.3)	最大厚 (0.9)
10	壁崩落土	陶器	擂鉢	岸窯系	内外面ともに灰褐色。口縁部内外面に鉄釉。胎土は灰黄褐色。17 世紀後半～ 18 世紀前半。			(9.5)

第 144 表 A 区・B 区遺構属性表

建物名	間数	棟方向	桁行総長（m）	柱間寸法（m）	測定柱列	梁行総長（m）	柱間寸法（m）	測定柱列	方向	柱痕跡径（cm）	柱穴規模（cm）	平面形	備　考
SA34	2 以上	東西	3.85	1.95,1.9					E-6°　-N	15	40 ～ 60	円 形、 楕円形	SK12、SD02 より新しい
SB35	1 × 2 以上	東西	2.75	1.38、1.37	南列	2.3	2.3	東列	E-16°　-N	9 ～ 19	20 ～ 33	円 形、 楕円形	

遺構名	平面形	断面形	規模（m）	深さ（m）	堆積土	出土遺物	備　考	平面図	断面図
SK03	不正長方形	箱型	1.12 × 0.9	0.44	人為	常滑か	SD02 より古い	196	196
SK09	楕円形	皿型	0.8 × 0.56	0.35	自然			196	196
SK10	不正長方形	皿型	0.94 × 0.67	0.26	自然	石製品（温石）	SD01 より新しい	196	196
SK12	円形	皿型	1.28	0.22	自然		SA34（P11）より古い	196	196
SK13	方形	皿型	0.75 × 0.65	0.09	自然		SD01・SD2 より新しい	196	196
SK25	不正長方形	箱型	1.20 × 0.56	0.14	自然			208	208
SK26	不正楕円形	皿型	0.83 × 0.60	0.16	自然		SK32 より新しい	208	208
SK27	不正楕円形	皿型	0.86 × 0.69	0.16	自然			208	208
SK28	不正楕円形	皿型	0.86 × 0.46	0.16	人為	骨片・炭化物・焼土	SD23、SD24 より新しい、火葬骨か	208	208
SK29	不正方形	U 字型、オーバーハング	0.67 × 0.60	0.43	自然		SK32 より新しい	208	208
SK32	不正双円形	皿型	1.50 × 0.88	0.24	自然		SK26、SK29 より新しい	208	208
SK33	不正円形	V 字状	1.64 × 1.25	0.48	自然		SD23 より新しい	208	208

遺構名	検出長（m）	断面形	上幅（m）	下幅（m）	深さ（m）	方向	堆積土	出土遺物	備　考	平面図	断面図
SD01	4.0	皿型	1.55	0.22	0.55	E-21°　-N	自然	常滑、白石	SD02・SK03・SK10・SK13 より古い	199	199
SD02	5.25	皿型	1.38	0.7	0.45	E-21°　-N	自然	白石	SD01・SD06・SD14・SD15 より新しく、SK03・SK13・P08 より古い。	199	199
SD04	3.95	箱形	0.78	0.46	0.52	N-16°　-W	人為→自然→人為	常滑か	SD15 より新しく、SD05 より古い	199	199
SD05	3.65	V字	1.64	0.8	0.93	N-24°　-W	自然	常滑、白石、磁器、土垂	SD04 より新しい	199	199
SD06	10.5	逆台形	0.75	0.68	0.2		自然		SD02・SA34(P08）よりも古い	199	199
SD14	4.3	U 字	0.4	0.10	0.48	N-12°　-W	人為		SD15 より新しく、SD02 より古い	199	199
SD15	4.1	U 字状	0.48	0.13	0.47	N-25°　-W	自然	不明陶器	SD05・SD15 より古い	199	199
SD22	1.24	皿型	0.42	0.2	0.7	N-20°　-W	自然			216	216
SD23	20.7	皿型、逆台形	2.42	1.3	0.42	2.42N-18°-W	自然	常滑、白石、磁器、肥前陶器、瓦質土器、不明石製品	SK24・SK28・SD31 より古い	210	210
SD24	11.0	V 字状	2.42	0.29	0.94	N-21°　-W	自然	常滑、白石、瓦質土器、不明陶器	SK24・SK28・SD31 より古い	210	210
SD30	3.60	V 字状	0.83	0.21	0.24	E-16°　-N	自然			216	216
SD31	2.5	皿型	0.66	0.45	0.16	E-9°　-W	自然		SD23・SD24 よりも新しい	216	216

17A・17B 区（西側上空から）

17A・17B 区（東側上空から）

17A 区完掘（北西から）

17A 区完掘（南西から）

17A 区　SD02（西北から）

17A 区　SD04・SD05（北から）

17A 区　SD05（南から）

17A 区　P08 断面（南から）

17B 区上空から

17B 区完掘（南から）

17B 区完掘（北東から）

17B 区　SD23・SD24（南東から）

17B 区　SB35・P20 土層断面（南から）

17B 区　SK28 土層断面（南から）

17B 区　古墳時代土師器出土状況（西から）

17B 区　古墳時代土師器出土状況（南から）

A 区 SK10（第 198 図 1 ）

A 区 SK10（第 198 図 1）

A区 SD 01（第 201 図 1）

A 区 SD 02・SD 04（第 203 図 1）

A区 SD 05（第 204 図 5）

A 区 SD 05（第 204 図 1）

B区 SK25（第 209 図 1）

A区 SD 15（第 205 図 1）

B区 SD 23（第 213 図 7）

B区 SD 23（第 212 図 9）

B区 SD 23（第 214 図 3）

B区 SD 23（第 214 図 1）

B区 SD 23（第 214 図 2）

B区　SD 24（第 215 図 4）

B区　掘り下げ（第 218 図 2）

B区　北壁（第 218 図 4）

B区　精査（第 218 図 5）

B区　精査（第 218 図 5）

B区　掘り下げ（第 218 図 7）

B区　残土（第 218 図 6）外面

B区　残土（第 218 図 6）内面

B区　精査（第 218 図 9）外面

Ⅸ章　自然科学分析－出土材の樹種

吉川純子（古代の森研究舎）

はじめに

下野郷館跡は岩沼市下野郷字館内、阿武隈川左岸の標高約 0.3 ～ 1.8m ほどの自然堤防及び仙台湾沿岸部の第Ⅱ浜提列上に立地している。中世には井戸跡や溝跡、近世では掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡や多数の土坑が検出されたほか、護岸施設も発見された。下野郷館跡は下流で貞山堀と合流する五間堀川に面しており、外洋と結ばれていたと考えられることから水運の要として立地していたと考えられている。

1．平成 27 年度の調査

平成 27 年度の調査では 15A 区の近世あるいは近代とみられる溝跡などが検出され下駄、容器、木錘などが確認された。また 15C 区では 13 世紀～ 14 世紀とみられる井戸跡から下駄や柄杓などの木製品を出土した。そこで当時の木材利用状況を調査するため樹種同定をおこなった。平成 27 年度の試料は 8 点で、同定に供した器種は下駄、柄杓、容器の蓋、木錘である。木製品からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の 3 方向の切片を採取し、封入剤でプレパラートを作成して生物顕微鏡で観察・同定した。2015 年度調査の木製品樹種同定結果を表 1 に示す。同定の結果 7 分類群を確認し、アスナロ属が 2 点で、スギまたはヒノキ科、ヤナギ属、クリ、ケヤキ、タカノツメ、針葉樹がそれぞれ 1 点ずつであった。

第 145 表　平成 27 年度下野郷館跡出土木製品の樹種

番号	遺構名	時期	種別	特記事項	樹種
1	SD03	近世・近代	連歯下駄	表面に文様が線刻されている	針葉樹
2	SD03	近世・近代	連歯下駄	子供用とみられる	スギまたはヒノキ科
3-①	SE02	13 世紀～ 14 世紀	差歯下駄本体	露卯下駄	ヤナギ属
3-②	SE02	13 世紀～ 14 世紀	差歯下駄歯	露卯下駄の歯	タカノツメ
4	SE02	13 世紀～ 14 世紀	柄杓	曲物を樹皮で縫ってあり柄孔あり	アスナロ属
5	SE02	13 世紀～ 14 世紀	蓋	樽の上蓋、栓孔残	アスナロ属
6	SD03	近世・近代	蓋	容器蓋あるいは曲物底板	クリ
7	SE02	13 世紀～ 14 世紀	木錘	芯持ち材	ケヤキ

下駄には 13 ～ 14 世紀の露卯下駄には広葉樹のヤナギ属とタカノツメが、近世の連歯下駄には針葉樹が使われていた。東北の中世頃の差歯下駄にはモクレン属やケヤキなどの広葉樹が比較的おおく使われる傾向にあり（伊東ほか　2012)、本遺跡の差歯下駄も広葉樹であった。一方連歯下駄は東北の中世以降ではクリが多いもののスギやアスナロ属といった針葉樹も多く用いられている。本遺跡の連歯下駄は保存状況が悪く属の特定には至らなかったがともに針葉樹を用いているという点でやや調和的である。13 ～ 14 世紀の曲物と蓋にはアスナロ属を使っており曲物に針葉樹を多用する宮城県の既存の出土傾向と一致する。東北の木錘はコナラ節、ヤマグワなどが多いが樹種にはばらつきが多く本遺跡で出土したケヤキは確認されていないようである。錘にはさまざまな樹種が用いられる傾向にあり、大径木を加工する段階で生じた端材を利用していたことも考えられる。

2．平成 28 年度の調査

平成 28 年度の調査では 13 世紀の井戸跡、中世後半の流路、17 世紀の井戸跡と護岸施設の各遺構から木製品を出土した。そこで当時の木材利用状況を調査するため樹種同定をおこなった。試料は 43 点で、

漆器、下駄、柄杓、曲物など木製品と井戸枠、護岸施設のクサビなどの建築部材である。木製品からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の 3 方向の切片を採取し、封入剤でプレパラートを作成して生物顕微鏡で観察・同定した。平成 28 年度調査の木製品樹種同定結果を表 2 に示す。樹種同定の結果 17 分類群を確認し、針葉樹はマツ属、モミ属、スギ、ヒノキ、サワラ、アスナロ属、スギまたはヒノキ科と風化が進んだ針葉樹で、広葉樹はヤナギ属、ハンノキ属、クリ、コナラ節、ブナ属、ケヤキ、サクラ属、ハリギリであった。

第 146 表　平成 28 年度下野郷館跡出土木製品の樹種

番号	遺構名	遺構の種類	時期	種別	特記事項	樹種
1	SX01 下層	護岸施設	17 世紀	漆器椀	黒、高台に線刻	ケヤキ
2	SX01 下層	護岸施設	17 世紀	漆器椀	赤、高台に壺文様	ブナ属
3	SX01 下層	護岸施設	17 世紀	漆器椀の蓋	外赤内黒、文様あり	ブナ属
5	SE07	井戸跡	17 世紀	漆器椀	黒、高台に文様	ブナ属
6	SE07	井戸跡	17 世紀	漆器椀	黒、高台に文様	ブナ属
7	SE06	井戸跡	17 世紀	連歯下駄	子供用か	クリ
8	SD18	溝跡	中世後半	連歯下駄	一部欠損	マツ属
9-①	SD18	溝跡	中世後半	差歯下駄本体	露卯下駄、差し歯 1 本	ヤナギ属
9-②	SD18	溝跡	中世後半	差歯下駄の歯	露卯下駄、差し歯 1 本	サクラ属
10	SX01 上層	護岸施設	17 世紀	刀鞘	鋒は鞘先端まで及ばず	ヒノキ
11	SX01 上層	護岸施設	17 世紀	捏鉢	口縁部肥厚、端部平坦、底部平ら	ハリギリ
12	SX01 下層	護岸施設	17 世紀	折敷	赤、割れ部に漆付着	ヒノキ
13	SE07	井戸跡	17 世紀	柄杓	曲物 2 枚を樹皮で縫ってある	針葉樹
14	SE07	井戸跡	17 世紀	曲物底板	木釘残る、補修痕あり	サワラ
15	SX01	護岸施設	17 世紀	曲物底板	木釘残る	スギ
16	SE01	井戸跡	13 世紀	曲物底板	周囲に 5 個孔あり、再利用品か	針葉樹
17	SD18	井戸跡	17 世紀	へら状木製品	柄と身がある	コナラ節
18	SD18	井戸跡	17 世紀	側板	桶の側板か	スギまたはヒノキ科
19	SX01	護岸施設	17 世紀	クサビ		クリ
20	SX01	護岸施設	17 世紀	クサビ		クリ
21	SX01	護岸施設	17 世紀	クサビ	杭の転用か	サクラ属
22	SX01	護岸施設	17 世紀	クサビ		クリ
23	SX01	護岸施設	17 世紀	クサビ	樹皮残	クリ
24	SX01	護岸施設	17 世紀	クサビ		クリ
25	SX01	護岸施設	17 世紀	クサビ	樹皮残、一部炭化	クリ
26	SX01	護岸施設	17 世紀	クサビ		クリ
27	SX01	護岸施設	17 世紀	クサビ		クリ
28	SX01	護岸施設	17 世紀	クサビ		クリ
29	SX01	護岸施設	17 世紀	クサビ		クリ
30	SX01	護岸施設	17 世紀	部材	角状材を鉄釘で結合	アスナロ属
31	SX01	護岸施設	17 世紀	部材	角状材を釘で結合	アスナロ属
32	SX01	護岸施設	17 世紀	部材	一端に木釘 2 本	針葉樹
33	SX01	護岸施設	17 世紀	部材	側面 2 か所に鉄釘、一部炭化	サワラ
34	SX01	護岸施設	17 世紀	建築材	枘穴あり	スギ
35	SX01	護岸施設	17 世紀	建築材	枘穴あり	スギ
36	SX01	護岸施設	17 世紀	不明木製品	5 孔あり	マツ属
37	SX01	護岸施設	17 世紀	不明木製品	容器の一部か	コナラ節
38	SX01	護岸施設	17 世紀	不明木製品	1 孔あり、側面に切り込み	マツ属
39	SE09	井戸跡	17 世紀	井戸枠（桶）		サワラ
40	SE01	井戸跡	13 世紀	井戸枠（丸木）		モミ属
41	SX01	護岸施設	17 世紀	杭	護岸施設構築材	ハンノキ亜属
42	SX01	護岸施設	17 世紀	桟木	護岸施設構築材	サワラ
43	SX01	護岸施設	17 世紀	横板	護岸施設構築材	針葉樹

表 3 に器種別樹種集計を示す。全 43 試料のうち最も多かったのはクリ 11 点で 25 パーセントを占め、次はサワラとブナ属が 4 点ずつ各 9 パーセントであった。東北では全時代を通して特に建築土木材にクリが多用され（伊東ほか　2012）、本遺跡の近世初頭も同様の傾向が見られた。また宮城と福島に特徴的とされるサワラの利用も本遺跡で高かった。本遺跡の椀材におけるブナ属の多用は中世以降の東北の用材選択におけるケヤキ材からブナ材への変化（伊東ほか　2012）と調和的であった。最も多かったクリは護岸施設の楔がほとんどで、1 点は下駄材である。クリは土木材として優れていることから水域の施設材として利用されたと考えられる。護岸施設の用材で注目されるのは、クサビはほぼクリを利用しているのに対し、部材や桟木などはサワラ、スギなどの針葉樹を多用し、施設材の細かい用途別に樹種選択が働いているとみられる。宮城県の近世では他の遺跡でもこうした傾向が見られ、仙台市の貞山堀 1 区で同定された杭材 4 点は、目印杭 2 点にクリ、押さえ杭 2 点にスギを利用しており（パリノサーヴェイ 2018）、仙台城の土木材でも杭材はスギ、割材と柱材はクリを用いている（吉川ほか 2012）など、土木材の中でも微妙な使い分けをしていた可能性もある。　なお、東北ではほとんど多用されないとされるヒノキは折敷と刀鞘として出土しており、いずれも製品として流通してきた可能性がある。

第 147 表　器種別樹種集計表（平成 28 年度）

樹種＼器種	服飾具	容器	調理加工具	武具	建築部材	施設材	不明	樹種計
マツ属	1	−	−	−	−	−	2	3
モミ属	−	−	−	−	−	1	−	1
スギ	−	1	−	−	2	−	−	3
ヒノキ	−	1	−	1	−	−	−	2
サワラ	−	1	−	−	−	3	−	4
アスナロ属	−	−	−	−	−	2	−	2
スギまたはヒノキ科	−	1	−	−	−	−	−	1
針葉樹	−	1	1	−	−	2	−	4
ヤナギ属	1	−	−	−	−	−	−	1
ハンノキ亜属	−	−	−	−	−	1	−	1
クリ	1	−	−	−	−	10	−	11
コナラ節	−	−	1	−	−	−	1	2
ブナ属	−	4	−	−	−	−	−	4
ケヤキ	−	1	−	−	−	−	−	1
サクラ属	1	−	−	−	−	1	−	2
ハリギリ	−	1	−	−	−	−	−	1
器種計	4	11	2	1	2	20	3	43

3．平成 27 年度及び平成 28 年度で同定された樹種の細胞構造学的記載

モミ属（*Abies*）：晩材部の幅は狭く早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。放射細胞はすべて放射柔細胞からなるが上下縁辺部に不規則に突出した形の細胞が見られ放射柔細胞の壁が厚くじゅず状末端壁である。分野壁孔はスギ型で 1 分野に 2 ～ 4 個存在する。

マツ属（*Pinus*）：晩材部が厚く大型の垂直・水平樹脂道がある。放射柔細胞の上下にある放射仮道管の内壁が鋸歯状に突出し、放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。

スギ（*Cryptomeria japonica* D. Don）：晩材部が厚く年輪界が明瞭で早材部から晩材部への移行は緩やかである。放射細胞はすべて放射柔細胞からなり、分野壁孔は典型的なスギ型で 1 分野に 2 個存在する。

ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc.）：晩材部の幅が薄く早材部から晩材部への移行は緩やかである。放射細胞はすべて放射柔細胞からなり、分野壁孔はヒノキ型で孔口が縦に開き 1 分野に 2 個存在する。

サワラ（*Chamaecyparis pisifera*（Sieb. et Zucc.）Endl.）：晩材部の幅が薄く早材部から晩材部への移行は

緩やかでヒノキに似る。放射細胞はすべて放射柔細胞からなり、分野壁孔はやや大きく孔口が斜めに開くヒノキ～スギ型で 1 分野に 2 ～ 3 個存在する。

アスナロ属（*Thujopsis*）：早材部から晩材部への移行はやや急で年輪界は明瞭、樹脂細胞は少ないが晩材部に散在する。分野壁孔はヒノキ～トウヒ型で開口部が比較的立った斜めで 1 分野に 3 ～ 4 個ある。放射細胞は単列で比較的短い。

ヤナギ属（*Salix*）：中程度の管孔が単独ないし数個複合して年輪内にほぼ均一に分布する散孔材で、晩材部で道管径が急減し年輪界は比較的明瞭。道管の穿孔板は単一で放射組織は単列異性で道管放射組織間壁孔が大きいふるい状である。

ハンノキ属ハンノキ亜属（*Alnus subgen Alnus*）：年輪界はやや不明瞭な散孔材で管孔は数個が放射方向に連なって年輪内にほぼ均等に分布する。集合放射組織の部分で年輪界が樹芯方向に大きくへこむ。道管の穿孔板は階段状で階段数は 20 ～ 30 段ある。放射組織は平伏細胞からなる同性で、単列と幅の広い集合放射組織がある。

クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）：年輪最初に大道管が数列配列しその後徐々に径を減じて小管孔が火炎状に配列する環孔材。道管は単穿孔でチロースが多く放射細胞は単列同性である。

ブナ属（*Fagus*）：中程度の管孔が均等に分布する散孔材で道管の密度が高く、晩材部では道管径が次第に小さくなる。放射組織は異性で単列と数列と広放射組織があり、広放射組織の部分で年輪界が外側に突出する。

コナラ属コナラ節（*Quercus sect. Prinus*）：クリに似て大道管が数列配列したのち薄壁のやや角張った小管孔が火炎状に配列する環孔材。放射細胞は同性で単列と複合状の大きいものがある。

ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）：年輪はじめに大きい道管が 1 列並び小さい道管が接線状、花づな状に多数集合して連なる環孔材で道管は単穿孔があり、小道管の内壁にらせん肥厚がある。放射組織は同性時々異性で 1 ～ 7 列幅程度で周囲がややごつごつしており上下縁辺に時々結晶がみられる。

サクラ属（*Prunus*）：中程度の管孔が単独ないし数個複合してややまばらに均一に分布する散孔材で、道管径は徐々に小さくなる。道管の穿孔板は単一でらせん肥厚があり内腔に着色物質が見られる。放射組織は異性で 1 ～ 3 細胞幅の材と 10 細胞幅くらいの材がある。

タカノツメ（*Evodiopanax innovans* Nakai）：年輪初めに大きい道管がまばらに 1 列あり、中～小管孔が単独および 2-4 個複合してややまばらに分布する半環孔材。道管は単穿孔で放射組織は異性で 1-3 細胞幅である。コシアブラに似るが大きい道管径が小さい。

ハリギリ（*Kalopanax pictus* Nakai）：年輪初めに大きい道管が 1 列配列し小道管が数個帯状に集合し接線方向や花づな状に配列する環孔材。道管は単穿孔で放射組織は異性で 1-7 列である。ニレ属やケヤキに似るが放射細胞が小さめでなめらかで大きさが揃っている。

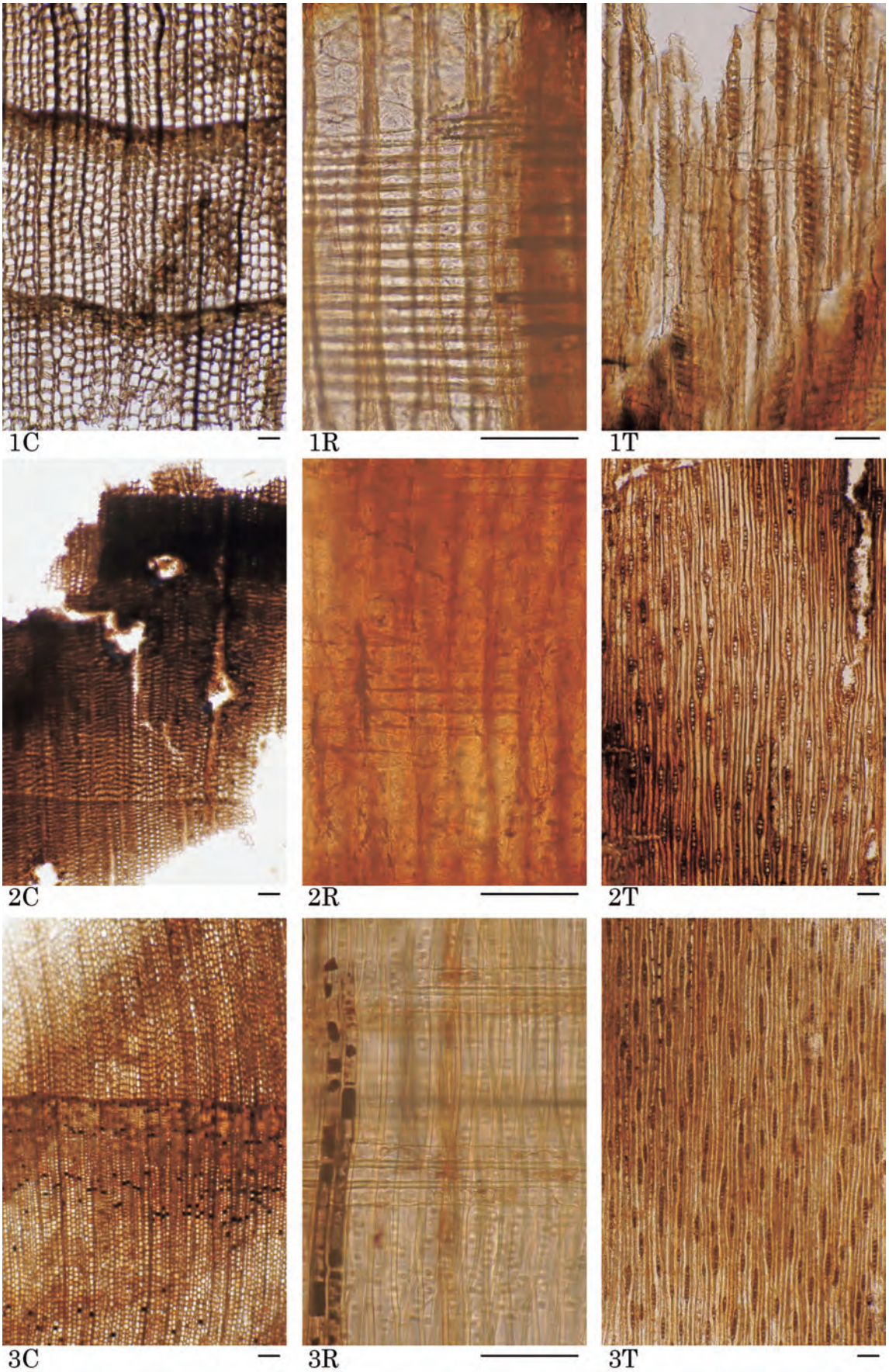
引用文献

伊東隆夫・山田昌久．2012．木の考古学　出土木製品用材データベース．海青社．449p.

パリノサーヴェイ株式会社．2018．第 2 節　貞山堀 1 区出土杭の樹種同定と年代測定．仙台市文化財調査報告書第 464 集　貞山堀・蒲生御蔵跡ほかー平成 27・28 年度蒲生北部被災市街地復興土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書ー．仙台市教育委員会．98-102.

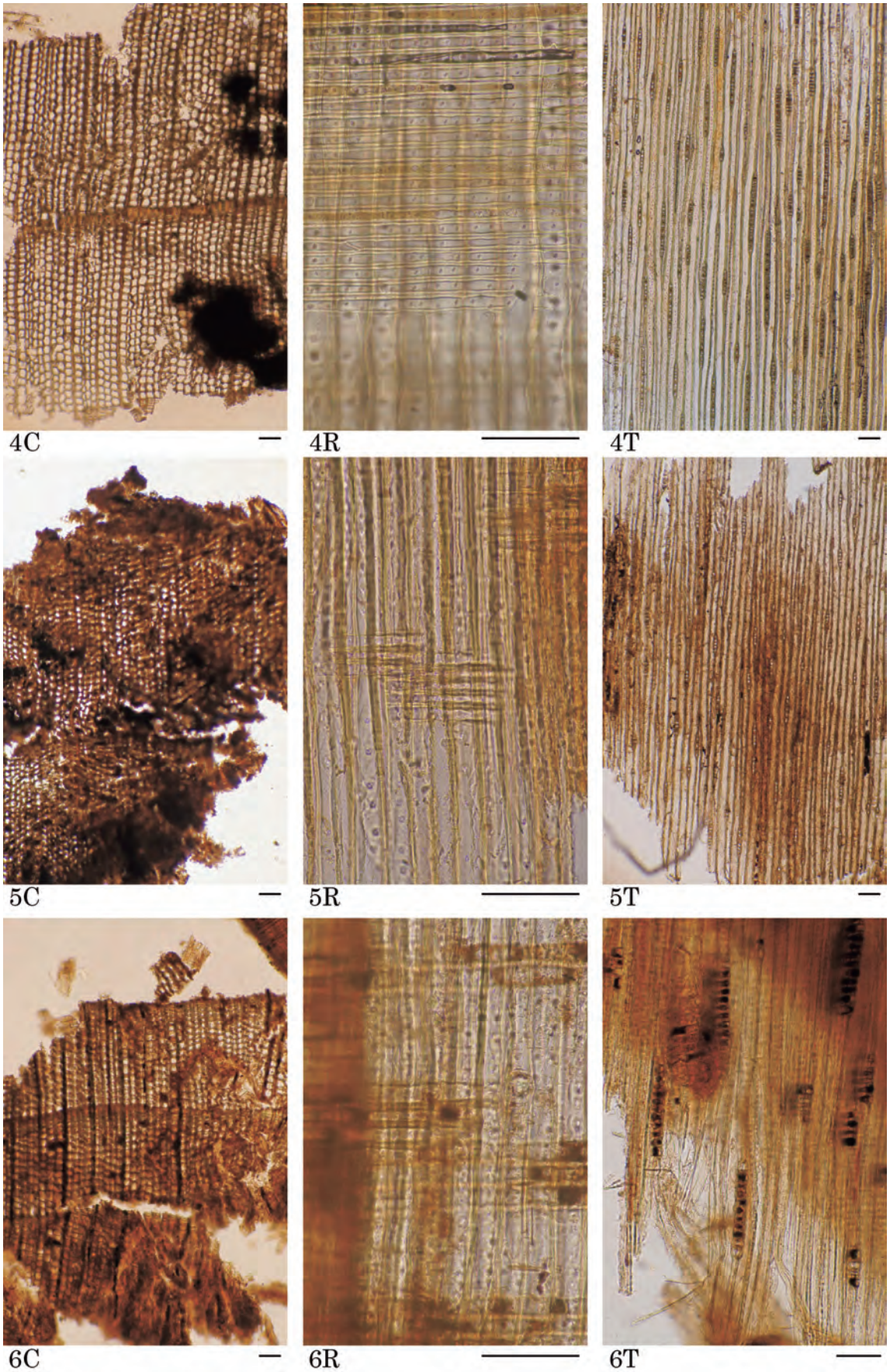
吉川昌伸・吉川純子．2012．第 2 節　平成 21 年度自然科学分析　扇坂トンネル上段部と亀岡トンネル進

入路部の植物化石．仙台市文化財調査報告書第 402 集　仙台城跡ほかー仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅷー．仙台市教育委員会．202-216.



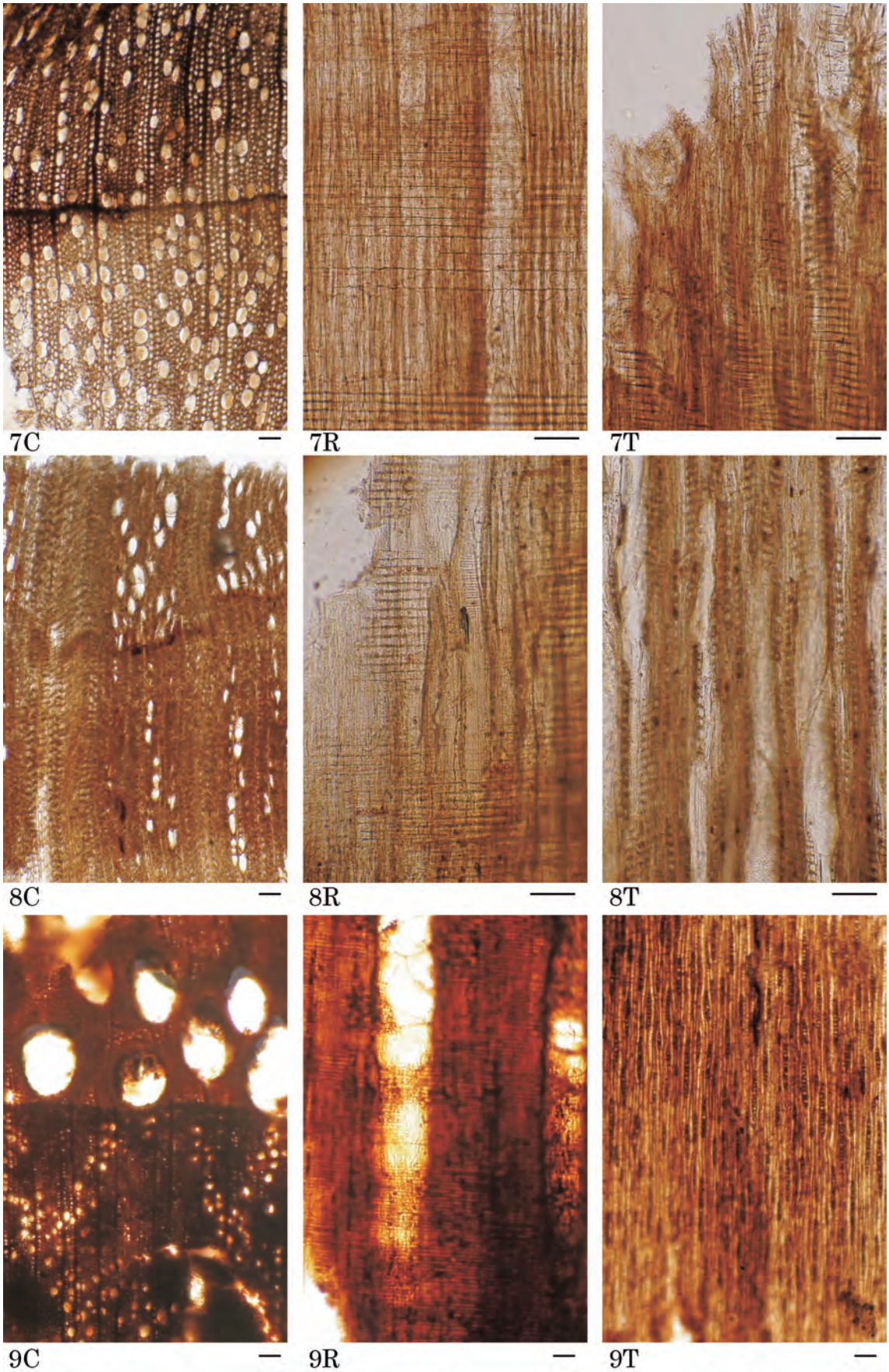
図版 1　下野郷館跡出土木材の顕微鏡写真 (1)

1. モミ属 (28 年度 -No.40 井戸枠) 2. マツ属 (28 年度 -No.36 不明木製品) 3. スギ (28 年度 -No.35 建築材)　　C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm



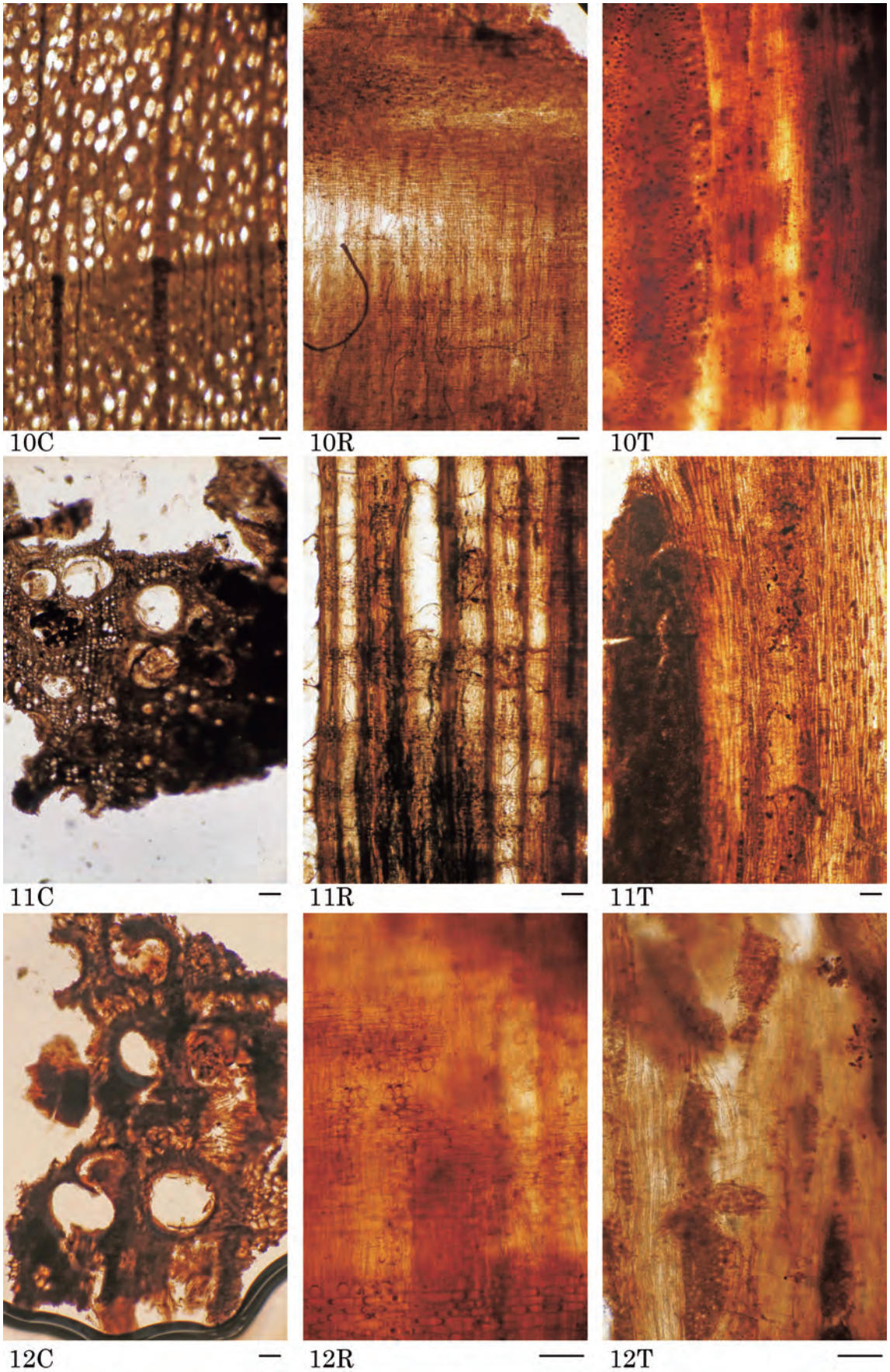
図版 2　下野郷館跡出土木材の顕微鏡写真 (2)

4. ヒノキ (28 年度 -No.12 折敷) 5. サワラ (28 年度 -No.39 井戸枠) 6. アスナロ属 (28 年度 -No.30 部材)　　C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm



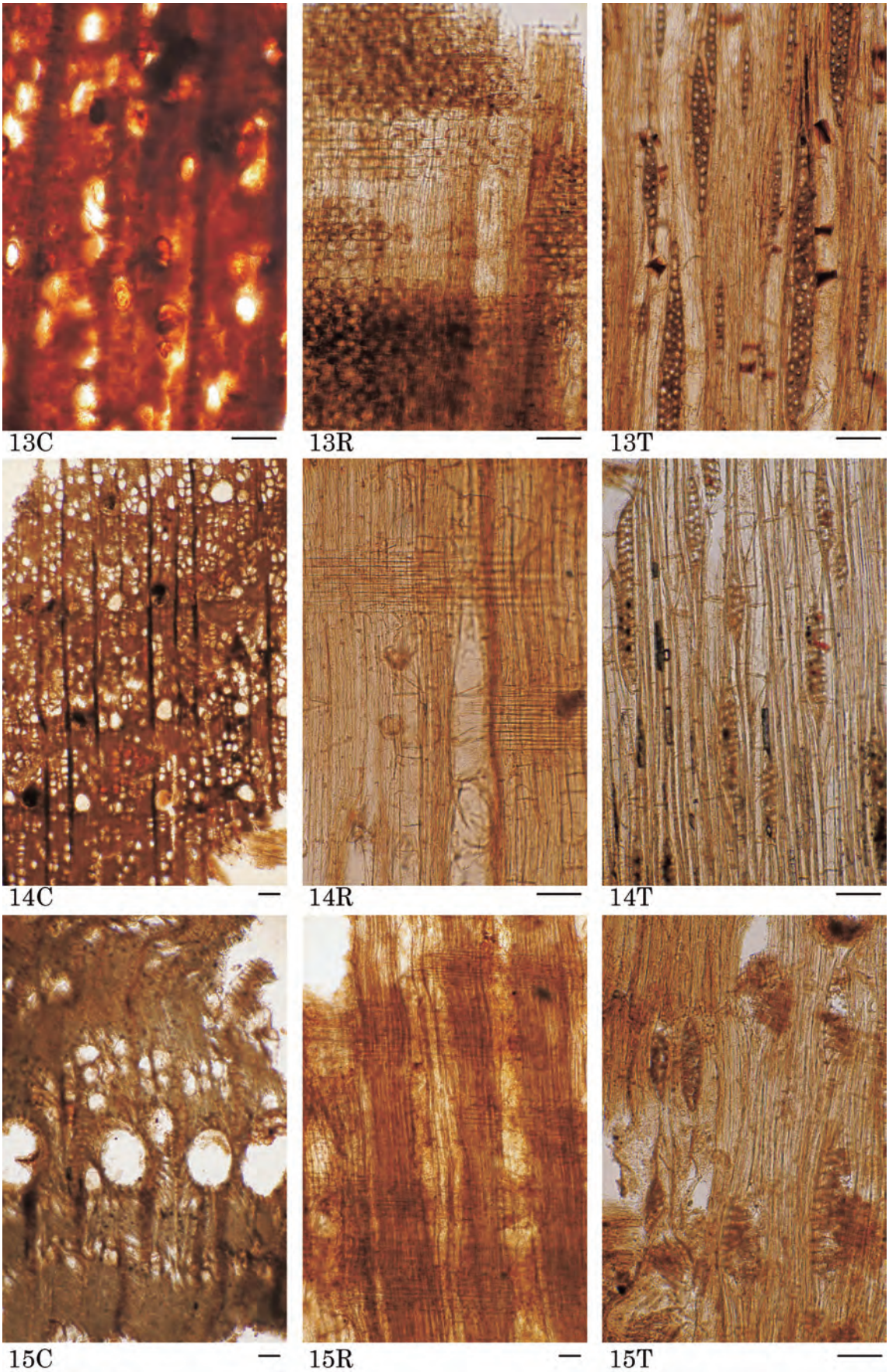
図版 3　下野郷館跡出土木材の顕微鏡写真 (3)

7. ヤナギ属 (28 年度 -No.9- ①下駄) 8. ハンノキ亜属 (28 年度 -No.41 杭) 9. クリ (28 年度 -No.25 楔)　　C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm



図版 4　下野郷館跡出土木材の顕微鏡写真 (4)

10. ブナ属 (28 年度 -No.3 椀蓋) 11. コナラ節 (28 年度 -No.37 不明木製品) 12. ケヤキ (27 年度 -No.7 木錘)　　C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm



図版 5　下野郷館跡出土木材の顕微鏡写真 (5)

13. サクラ属 (28 年度 -No.9- ②下駄歯) 14. タカノツメ (27 年度 -No.3- ②下駄歯) 15. ハリギリ (28 年度 -No.11 捏鉢)　C: 横断面、R: 放射断面、T: 接線断面、スケールは 0.1mm

第X章 総 括

平成 24 年度から 29 年度までの5年に及ぶ調査では、岩沼及び宮城県南部域の地域史をみる上での様々な知見が得られている。ここでは発見された遺構・遺物の中でも特徴的ないくつかの点に絞ってみていきたい。

1. 遺跡の概要

今回の調査では大別すると、中世と近世の遺構・遺物が多くみられる。遺跡内では平成 12 ～ 15 年度にかけて県道亘理塩釜線改良事業に伴う調査、または個人住宅建築に伴う調査が実施されている。さらに遺跡が所在する一帯では江戸時代中期に成立する「矢ノ目足軽」と呼称される、仙台藩によって組織された足軽集団が成立・展開しているが、今回の調査成果を検討する上では足軽集落成立前夜の状況についてもみていくことが必要であり、ここでは矢ノ目足軽を含めた地域の歴史的背景を史料上からまず俯瞰したい。

a. 佐藤家・奥山家と矢ノ目足軽

矢ノ目足軽とは、仙台藩によって元禄 16 年（1703）に新規に召抱えられた足軽であり、本遺跡地内の下野郷字舘内・舘外に居住した。矢ノ目足軽については、文政 12 年（1829）に書かれた『矢ノ目状』と、昭和 44 年（1969）に市教育委員会に提供された『佐藤三郎家文書』によって、実像がかなり解明されつつある。これらを参考に、矢ノ目足軽成立以前から廃絶までを概観する。

【「矢ノ目」地区の領拝領者の変遷】

伊具郡小斉（現・丸森町）領主の佐藤紀伊勝信が、慶長 10 年（1615）の大坂の陣の後に隠居し、隠居分として名取郡矢ノ目邑の荒田を拝領して開墾し、300 石を得て本禄に加えられた。佐藤氏の本拠地である小斉領は勝信の実子である実信が継いだため、隠居分である矢ノ目邑は娘婿として迎えた村田領主奥山隼人兼義の弟である藤三郎が相続する。寛永 13 年（1636）に、藤三郎の生家の当主である兼義の死去に伴い、藤三郎は生家へ戻り家督を相続する。この後、藤三郎は奥山与市左衛門重信と改名し、あわせて矢ノ目邑も奥山領となる。重信は国番頭、小姓頭を歴任し、明暦3年（1657）に死去する。奥山氏の家督は、実子の奥山与市左衛門常信が相続し、元禄4年（1691）に死去するまでに脇番頭、小姓頭を勤めた。常信の実子の奥山与市左衛門常尚が家督を相続して間も無い元禄9～ 13 年（1696 ～ 1700）にかけて、矢ノ目領主の奥山氏は磐井郡東山藤沢本郷（現岩手県磐井郡藤沢町）へ所替えとなり、空領となった矢ノ目に元禄 16 年（1703）、仙台藩によって矢ノ目足軽が新規に召抱えられた。矢ノ目足軽は成立当初 230 人で構成されたが、享保7年（1722）に 50 人が川崎、中津川に移され、以後は 180 人となる。慶応4年（1868）に戊辰戦争の際には矢ノ目足軽も出陣し、『仙台受難史小史』では2名の戦死が記載されている。明治2年（1869）に矢ノ目足軽は「永の暇」を賜り、足軽組織は解体する。その後の明治5年（1872）には、156 軒に減少したことが記され（岩沼市史所収『佐藤三郎家文書』）、他所を求めて移転した人々の姿を垣間見ることができる。

【矢ノ目足軽の任務】

矢ノ目足軽は大番頭の支配下にある。大番士は平士 3,600 人で 10 隊（各 360 人）あり、仙台城の番役を勤める。矢ノ目足軽 180 人は、これらの 10 隊に各 18 人ずつが属し、その任務は大番大旗の護衛であった。矢ノ目足軽同様の旗本足軽は桃生郡成田の成田足軽、同郡小舟越の小舟越足軽があり、矢ノ目足軽はこの中では最大規模を誇る。矢ノ目足軽は鉄砲足軽でもあるため、平時においては藩より賜った 150 挺の鉄

砲を用いて旧暦4月1日から8月1日まで稽古を仰せつかり、また稽古用の費用も藩から授かっている。

【矢ノ目足軽の組織と統制】

矢ノ目足軽は、一組 18 人ずつの 10 組に分かれ、それぞれを〇番方（ばんほう）と呼んだ。一つの番方は組頭1人、床頭2人、並足軽5人組4つより成立していた。組頭・床頭は同姓が歴任するケースが多いことから、大方世襲制であったと考えられる。苗字が使用できるのも、これら組頭・床頭のみであり、他の者は使用できなかった。なお、苗字を使用できた役付のある者も、基本的には在職中のみの許可であり、例外を除くと苗字の使用は許されていない。居住区域も番方毎に分かれているが、順列通りではなく、不規則な配置となっている。

b. 県道部分の調査成果

今回の調査地点の周辺では、これまで第1～3地点で発掘調査が行われている。以下にこの3地点の調査によって得られた成果の概略を記す。

【下野郷館跡第1地点】

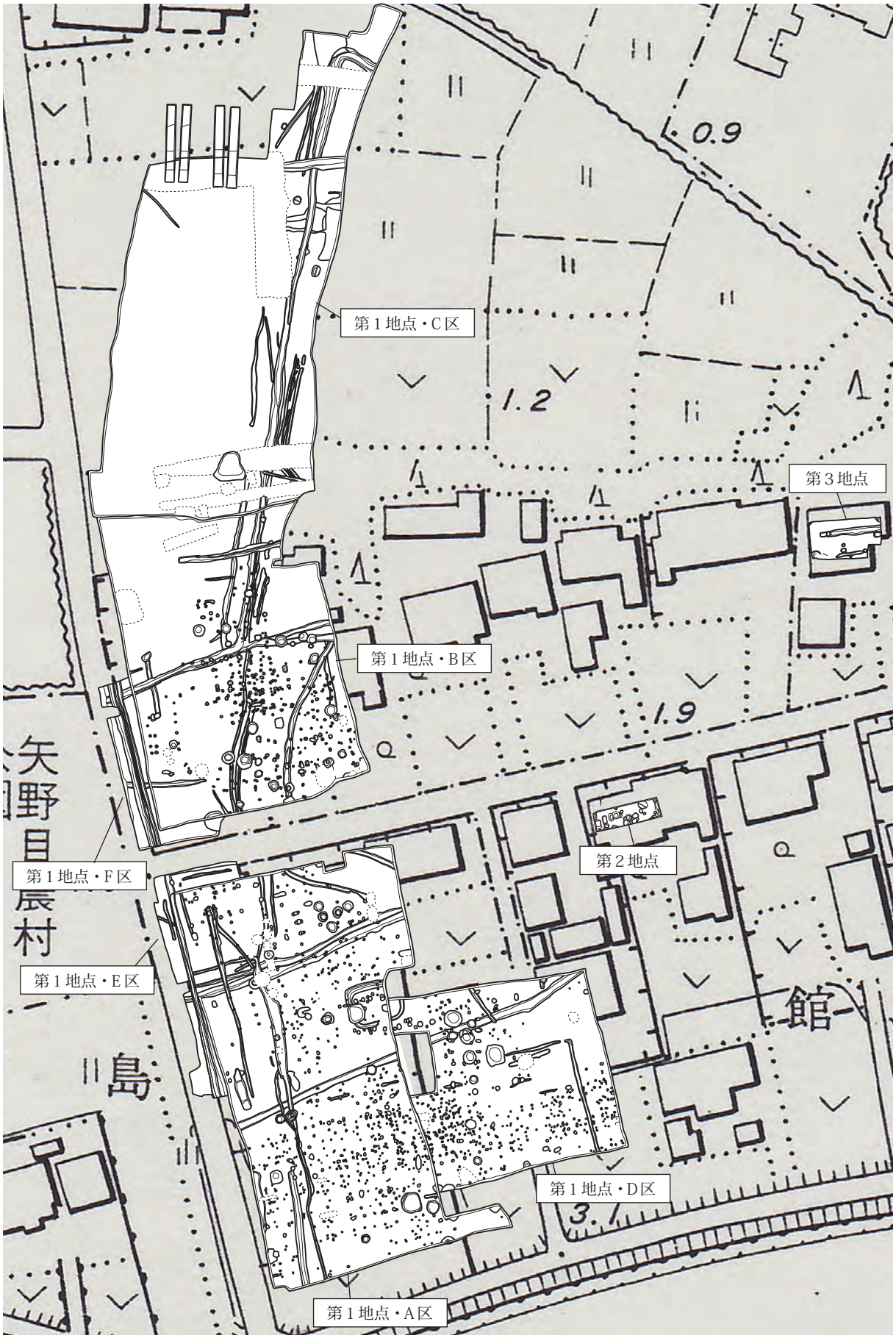
第1地点は県道亘理塩釜線の改良工事に伴い、平成 12 ～ 15 年まで4次にわたる調査が行われている。検出遺構は掘立柱建物跡 61 棟、塀・柱列2条、井戸跡 58 基、溝跡 53 条、土坑 31 基などであり、主に五間堀川に近い調査区南半部に集中して分布していた。出土遺物の年代観から古代、中世、近世にかけて土地利用が断続的になされていたと考えられるが、中世の遺構・遺物は限定的であり、主体となる時期は近世段階である。掘立柱建物跡の多くは重複関係にあるが、主軸方位などから3～4期にわたる画期が想定される。しかしながら、柱穴内よりの出土遺物量は僅少であることから明確な変遷は提示できていない。井戸跡は大多数が素掘りであるが、中でも上部が漏斗状を呈するものが最も多い。また木製の井戸枠を有する井戸跡も3基存在しているが、隅柱として杭を用いて横桟を渡し、外側に葦あるいは半載した竹を密に立て並べるという構造を呈している。溝跡は調査区全域で確認されているが、これらは規模や走方向から区画溝、取水・排水溝などの機能が考えられている。このうち区画溝では SD10・407 は建物の周囲にL字状に巡ることから屋敷地内での区画を目的に掘られた可能性が考えられる。これに対し調査区西側で直線的に南北方向に延びる SD60・506 は、大局的にはこの地区の居住区域の境界を示し、併せて排水を目的に掘られたものと考えられている。なお南側の一部を開口する SD31 は極めて小規模な区画であることから、内部に屋敷神などを配していた可能性が考慮されている。土坑で特筆されるのは SK401 である。この土坑は略長方形を呈しており、内部からは白石市周辺で生産された中世陶器甕片のみが出土していることから中世段階の遺構である可能性が高く、また規模も長軸・短軸とも他の土坑と較べて大きいことから倉庫的な機能を有していた可能性も考慮できる（岩沼市教育委員会 2004）。

【下野郷館跡第2地点】

第2地点は東日本大震災により被災した個人住宅建築工事に伴い、平成 23 年に調査が行われている。検出遺構は井戸跡2基、溝跡2条、土坑9基、焼土・炭化物を上面に有する性格不明土坑4基、ピット 15 口である。出土遺物の年代観から大半が近世以降の遺構であると考えられている。中でも焼土層を有する不明土坑が4基確認できたが、これらの覆土中からは鍛冶関連遺構の可能性を示す遺物の出土が無く、第1地点でも同様の遺構は未検出であり、これらの性格については遺跡地内での分布も含め今後の検討課題である（岩沼市教育委員会 2013a）。

【下野郷館跡第3地点】

第3地点は東日本大震災により被災した個人住宅建築工事に伴い、平成 24 年に調査が行われている。



第 219 図　下野郷館跡第1～3地点合成図

検出遺構は溝跡2条、土坑4基などであり、出土遺物の年代観から大半が近世以降の遺構であると考えられている。このうち調査区のほぼ中央から東側にかけて東西方向に走方向を有しているSD01は、第1地点B区で確認されたSD245の延長線上に相当することから、近世段階での区画溝である可能性が考慮される（岩沼市教育委員会2013b）。

以上のように、史料上での矢野目地区の初見は江戸時代初頭頃から見られるが、発見された考古資料からは中世期にも人々の生活の営みが行われていたことが明らかとなっている。

2. 出土遺物について

下野郷館跡の調査では、土師器・須恵器・中世陶器・輸入磁器・近世陶器・近世磁器・近現代陶器・近現代磁器・石製品・木製品・金属製品等が出土している。出土量は遺物用コンテナで土器等74箱、石製品3箱、木製品8箱、金属製品3箱、合計88箱分である。以下に種別ごとに概要を示す。

a. 土師器

土師器は平成29年度の調査で遺構確認面となる自然堤防のシルト層上面から坏が1点出土している。これは底部が丸底で口縁部が屈曲して外反するもので、東北地方における土師器編年の南小泉式の坏に共通する器形である。南小泉式は以前は当初に設定された南小泉式に後続する引田式を包括していたが、その後に細分案が出され、現在ではカマド出現の5世紀中頃を境に前を南小泉式、後を引田式に分離する考えが広まっている。それによると本資料は特徴的に引田式に近く、5世紀後半を中心とした年代のものと考えられる。下野郷館跡ではこれまで古代以前の遺物の出土は皆無に等しかった。今回、古墳時代中期の5世紀後半の土器が出土したことにより、下野郷館跡が立地する第Ⅱ浜堤列や自然堤防がこの時代から生活領域に含まれていたことが明らかとなった。今後さらに、竪穴住居跡などの居住域を示す遺構の発見が期待される。

b. 須恵器

平成28年度SD01から7世紀後半のものかと考えられる波状文の須恵器甕口縁部片が出土している（第155図6）。SD01は中世陶器が出土しており、13世紀後半～14世紀前半を中心とする時期の区画溝で、周辺から混入したものと考えられる。第Ⅱ浜提上ではにら塚遺跡で古代の土師器と製塩土器、高大瀬遺跡で古代の土師器・須恵器が出土している。またこの須恵器は断面1辺と内面を研磨に使用しており、研磨に適した材として中世陶器と同様に用いられたものと考えられる。

c. 中世陶器

ほとんどが白石産で、渥美産が1点、常滑産が52点（可能性ありのもの含む）出土している。白石産陶器を生産した代表的な窯跡は宮城県白石市白川犬卒塔婆に位置した一本杉窯跡群で、赤褐色～橙色を呈する胎土と色調を有するが、異なる胎土・色調を示す窯跡が存在することも知られている。下野郷館跡からも様々な胎土・色調を示すものが出土しているが、本報告では一括して白石産と表記した。また白石に先行して陶器を生産する窯跡として福島県伊達市に所在する八郎窯跡がある。遺物を実見したが、胎土・色調・形態いずれも過去に報告されているものよりバラエティーに富んでおり、八郎窯跡産の製品が下野郷館跡出土遺物に含まれている可能性は十分に高いと感じたが同定には至らなかった。渥美は12世紀末～13世紀初、常滑は12世紀後半～13世紀後半、白石は13世紀後半～14世紀前半である。古瀬戸は瓶子と折縁深皿が平成28年度の調査で出土している。また12世紀後半の山茶碗が1点平成28年度の調査で出土している。

d . 輸入磁器

輸入磁器は龍泉窯系青磁の碗が3点、皿が1点、瓶が1点、白磁の碗が1点、皿が1点、青花磁器が6点出土している。このうち SD01 から出土した白磁碗と青磁碗は、遺跡の開始時期に係わる資料となりうるもので重要である。平成 28 年度 SD10 出土の折縁の白磁皿（第 176 図 2）は 16 世紀後半か。青花は芙蓉手の中でも桃果形の文様区画をもつ明山手（第 123 図1・2、第 176 図 3）と、素描のみで草花文を描く皿（第 134 図1・第 176 図 1・第 188 図6）がある。後者は類例に乏しく不詳であるが、17 世紀後半頃と考えられる。

e. 近世陶器

16 世紀末～ 17 世紀初頭の瀬戸美濃産皿、肥前産の碗が出土しているほか、平成 28 年度 SE02 から中国漳州窯産の皿（第 121 図）が1点出土している。大堀相馬は皿・土瓶・徳利が多く出土している。19 世紀中葉であろう。平成 25 年度 SD01 から大堀相馬に似た軟質薄手の施釉陶器の皿・鉢が出土している。口縁端部をナデて三角形にしたり、水平に長く引き伸ばすなどの特徴を持つ。産地は不明である。擂鉢は丹波産（第 15 図 13）、岸窯系、堤焼が出土している。京焼と考えられる色絵の軟質施釉陶器片がわずかに出土している。

f . 近世磁器

肥前産磁器碗・皿は 17 世紀後半～ 18 世紀前半のもが出土している。瀬戸美濃産磁器は碗・皿・徳利・段重などが出土している。碗は端反碗・丸碗・平碗があり 18 世紀末～ 19 世紀末である。切込は碗・手塩皿・徳利等が出している。山形平清水や会津本郷産と考えられる碗や小坏も複数出土している。

g. 近現代陶器

堤焼の擂鉢・甕・捏鉢・焙烙等が出土している。

h . 近現代磁器

型紙摺り・銅板転写・酸化クロム青磁・ゴム印等の装飾技法を用いる 19 世紀末～ 20 世紀前半と考えらえる磁器が多く出土している。およそ瀬戸美濃産が大部分を占めると考えられ、碗・皿・鉢・徳利等が出土している。碗は幕末から続く丸碗と、1920 年代頃までに定着するとされる平碗がある。体部がハの字に開きゴム印装飾のみられる平成 26 年度出土の平碗（第 67 図 1）は 1910 ～ 1950 年頃に比定される。また底部外面に太平洋戦争中の統制経済下で用いられた生産者標示記号を有することから 1941 ～ 1945 年の生産と限定できる。体部がハの字に開き高台が高くなる平碗（第 67 図 2）は 1960 ～ 1980 年頃である。20 世紀前半の兵隊盃が 4 点出土している。「支那事変記念」「眞臺」などが見える。「塩釜鈴木商店」などは宣伝杯・印物と呼ばれる販促品であろう。

i . 石製品

石硯、石臼、温石、砥石など 23 点が出土している。これらの中で時期がおおよそ確定できる石臼や温石、砥石の一部について詳述する。

石臼は平成 28 年度と 29 年度の調査で、それぞれ1点ずつ出土している。両者とも茶臼の一部で、前者（第 167 図 3）は下臼の台部と受皿縁辺が意図的に打ち欠かれたものである。これは SD01 から鎌倉時代後半の陶器や磁器とともに出土しており、時期については鎌倉時代後半に位置づけられる。後者（第 214 図 1）は下臼の受皿縁部で、出土した SD23 からは鎌倉時代後半の陶器や磁器が出土しており、本資料もこの時期のものと考えられる。いずれも石材は安山岩である。

茶臼は鎌倉時代頃から普及した喫茶に伴う粉末の抹茶にする道具である。宮城県内では中～近世の出土

例が各地で認められるが、中世では 15 世紀以降の後半期の資料が多く、鎌倉時代を中心とした前半期の資料は極めて少ない。これらの出土した遺跡は武士や在地有力者などの領主階層に関わる性格が考えられている。こうした階層などに中世後半期には喫茶の風習が広く普及しており、今回の下野郷館跡から発見された石臼は鎌倉時代後半に位置づけられることから、その開始が 13 ～ 14 世紀ごろまで遡ることが考えられる。石材の安山岩は岩沼市西方を南北に連なる岩沼西部丘陵（高舘丘陵の一部）から豊富に産出される岩石である。

温石は「懐炉と同様、懐に入れるなどして、暖を取ったり空腹を押さえたり、あるいは患部に当てて痛みを和らげるなどの治療を行う採暖具および治療具の一つ」（江戸遺跡研究会 2001）と考えられている。内部に熱源をもつ懐炉と違い、温石は火鉢などの中で熱し、その余熱を利用するもので、懐炉が普及する近世前期以前は広く利用されていた。中世には滑石製の石鍋の破片を再利用したり、専用の方形の石製品があり、加熱後に火ばしなどで移動するために孔をもつことが多い。

この温石が平成 29 年度の調査で、土坑から1点（第 198 図）出土している。板状の方形状の形態であり、その一端には孔が開けられており、火鉢などで加熱したように片面が黒化している。時期については伴出する資料はないが、鎌倉時代後半の溝跡を切っており、鎌倉時代後半以降とみられる。石材は黒雲母片岩である。これと石材が共通する SD1 と SD23 から出土した各1点の不明石製品も、板状で方形に近い形状から温石の可能性を考えた。ともに鎌倉時代後半期の溝跡であり、不明石製品もこの時期のものと考えられる。

温石は宮城県内では 10 数点の出土例がある。形態は板状の方形状のもので、多くが一端に1孔をもっている。石材は黒雲母片岩などの片岩系か滑石、粘板岩などである。仙台市王ノ壇遺跡の温石は黒雲母片岩を多く石材としており、その産地は阿武隈山地南部とされ、そこから阿武隈川水系の水運によりもたらされた製品である可能性が指摘されている（仙台市教育委員会 2000）。またこのほかに県内の数少ない例としては多賀城市新田遺跡や多賀城跡から出土した滑石製の石鍋を一部転用した温石がある（千葉 1992、多賀城跡調査研究所 1983）。温石の時期は登米市佐沼城跡から出土した近世の時期の温石1点を除いてはすべて中世の時期で、その多くが中世前半の鎌倉時代後半のものである。出土した遺跡は武士層の政治的な拠点、在地領主層の屋敷などの性格が考えられており、前述の茶臼と同様、主に地域の有力層が所有していた生活用具の一つと推定される。

下野郷館跡から出土した温石は黒雲母片岩を石材としており、王ノ壇遺跡例と同じく阿武隈山地南部から製品として持ち込まれた可能性が考えられる。その場合、王ノ壇遺跡でも推定されているような阿武隈川水運による流通品と考えると、阿武隈川に近く、五間堀川や志賀沢川沿いに位置する当館跡が水運に関わる要衝地だったこともこうした製品が持ち込まれやすい理由だったのではないかと考えられる。

中～近世の遺跡からは普遍的に主に刃物を研ぐのに用いる砥石が出土する。砥石は大きく石質や石目から荒砥、中砥、仕上げ砥に分類される。荒土は「研ぐ」よりも「削る」に近い用途に使用され、石材は砂岩質が多く、調整などに使用される中砥は、石材は流紋岩質凝灰岩が、最終段階の鋭利な刃先にする仕上げ砥は粒子の細かい細粒凝灰岩か頁岩などが石材として用いられている。

下野郷館跡から出土した砥石は 12 点あるが、近代以降、撹乱、掘削時出土の砥石が多く、中世の時期のものは平成 26 年度の SD01 と SD15 出土の各1点、28 年度の SD01 出土の2点、SD19 出土の1点の5点である。その中で荒土の置砥が1点の他は、携帯可能な提砥であり、後者の内訳は火山岩の荒砥1点とディサイト質凝灰岩の中砥、および仕上げ砥が3点である。仕上げ砥は角柱状と不定形状のもので、いずれも複数の砥磨面をもっている。これらの砥石は形状や砥磨面の状況など多様で、主な石材のディサイト質凝灰

岩も周辺から入手が可能であることから、広域的な流通をもつ製品としての砥石というよりは、在地から供給される石材やその加工品を使用している可能性が高いと考えられる。

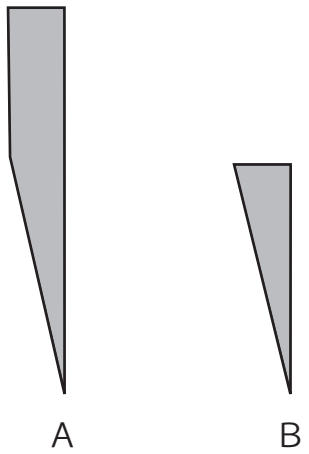
j . 木製品

平成 27 年度には下駄が 3 点、柄杓が 1 点、蓋が 2 点、木錘が1点の計 7 点、28 年度には漆器が 6 点、下駄が 3 点、刀鞘が 1 点、捏鉢が 1 点、折敷が 1 点、柄杓が 1 点、曲物 1 が3点、へら状木製品が1点、桶の側板が1点、クサビが 11 点、部材・建築材が6点、不明木製品が3点の計 38 点の木製品がそれぞれ出土している。

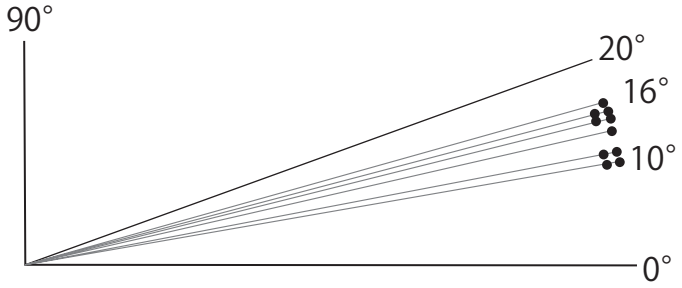
平成 27 年度に木製品が出土した SD03 は近世～近代の時期の遺構で、2 点の連歯下駄、1 点の容器の蓋もその時期の遺物（第 90 図）と考えられる。大人用の連歯下駄では表面に山や川などの写実的な線刻が施されているのが特徴である。同じく木製品が出土した SE02 は 13 ～ 14 世紀の鎌倉時代の遺構で、各1点ずつの差歯下駄、柄杓、樽の上蓋、木錘（第 83 図）もその時期のものと考えられる。差歯下駄は露卯下駄である。平成 28 年度の木製品は井戸跡や護岸施設、溝跡から出土している。13 世紀の鎌倉時代の SE01 から出土した曲物底板（第 120 図）はこの時期のものと考えられる。SE06、SE07 は 17 世紀の江戸時代前期の井戸跡であり、SE06 から出土した連歯下駄（第 128 図）、SE07 から出土した2点の漆器と柄杓、曲物底板（第 130 図）もこの時期のものと考えられる。

SX01 は 17 世紀の江戸時代前期の護岸施設であり、28 点の木製品が出土しているがすべてその時期のものと考えられる。漆器は椀身と蓋が4点（第 140 図 1 ～ 4）あり、赤漆や黒漆で仕上げられている。捏鉢（第 140 図 7）は口径が 60cm を超す大型のもので、ハリギリが利用されている。部材とした4点（第 141 図 5･6、第 142 図 1・2）は細い角状の材の両端などに、別部材を結合するように釘が打ち込まれている。ほかの刀鞘（第 141 図 1）と折敷については、東北地方では材として少ないヒノキが利用されており、製品として流通品してきた可能性が考えられている（Ⅸ章　自然科学分析）。

ここではこのほかの 11 点のクサビについて詳述する。これらのクサビ（第 143 図）は護岸施設の杭と横板を固定するために用いられたもので、打ち込まれた状態か抜けた状態で確認された数十点クサビの一部である。1本の杭の再利用を除き、他の 10 本はすべてクサビとして製作されたもので、樹種はクリ材である。この 10 本のクサビには形状の異なる台形状のAと三角形状のBがある。量的にはAが多く、またAの先端部（差し込み部）の長さがBの長さとほぼ等しいことから、通常のクサビの形状はAで、Bは臨時的な形状と推測さ

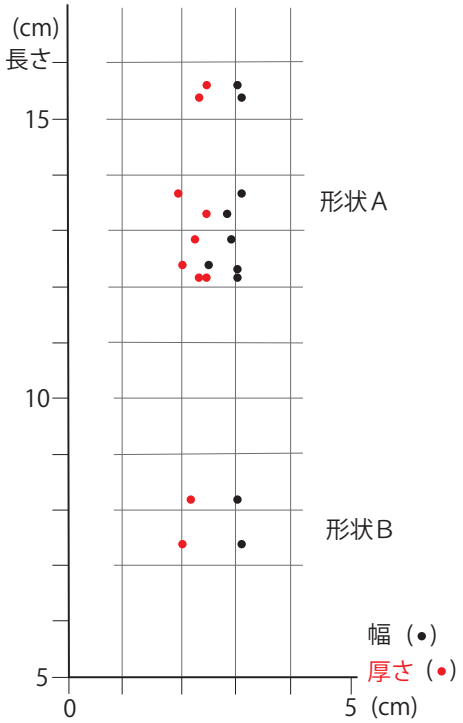


第 220 図　クサビの形状



第 221 図　クサビの先端部角度

れる。しかしBでもクサビとして最低限の機能は果たしたものと考えられる。クサビの先端部角度の分布を示したのが第 221 図である。10 点のクサビは形状A・Bとも 10°から 16°の範囲に集中しており、極めて規格性が高い。次にクサビの長さと幅、および厚さの関係を見たのが第 222 図である。形状Aについては、長さが 12 ～ 16cm とやや分布が広がるのに対し、幅や厚さは2から3cm の約 1cm の範囲に集中している。このことは形状Bでも同様であり、幅や厚さなどが同規格にする意図のもとに製作されていることがわかる。規格的な先端部（差し込み部）を作り出す前提条件だったのだろう。これらのことから、護岸施設を構築する部材の一つ、クサビについても高い規格の元に計画的に製作された可能性が考えられる。前述したように 10 点のクサビはクリ材を用いて製作されており、その木取りなどを見ると、1本のクリ材を元に分割して製作されたことも想定できる。



第 222 図　クサビの長さと幅、厚さの分布状況

SD18 は中世後半の溝跡であり、伴出した下駄2点とへら状木製品、桶の側板もその時期のものと考えられる。下駄の1点（第 180 図 2）の差歯下駄は露卯下駄である。へら状木製品（181 図）は柄と身に分けて加工されており、形状や大きさから食物の調理などに関わる道具の可能性が考えられる。

k. 金属製品

平成 27 年度攪乱から近代磁器とともに完形の鉄瓶（写真図版）が出土した。体部に鶴？の文様が見える。前後に形態の違う宝珠型の耳がつくが後ろのものは補修した痕跡がみられる。破損したのち別部品で補修したものであろう。銭貨が 10 枚出土している。遺構出土のものでは 27 年度 SD04、28 年度 SD04、P18 から天禧通宝、大観通宝、元豊通宝、元祐通宝が出土したほか、表土から寛永通宝が出土している。

l. その他

土製の指人形（第 68 図 4）、人形（第 30 図 6）、人形もしくは機材形（第 30 図 7･8）、土錘が出土している。

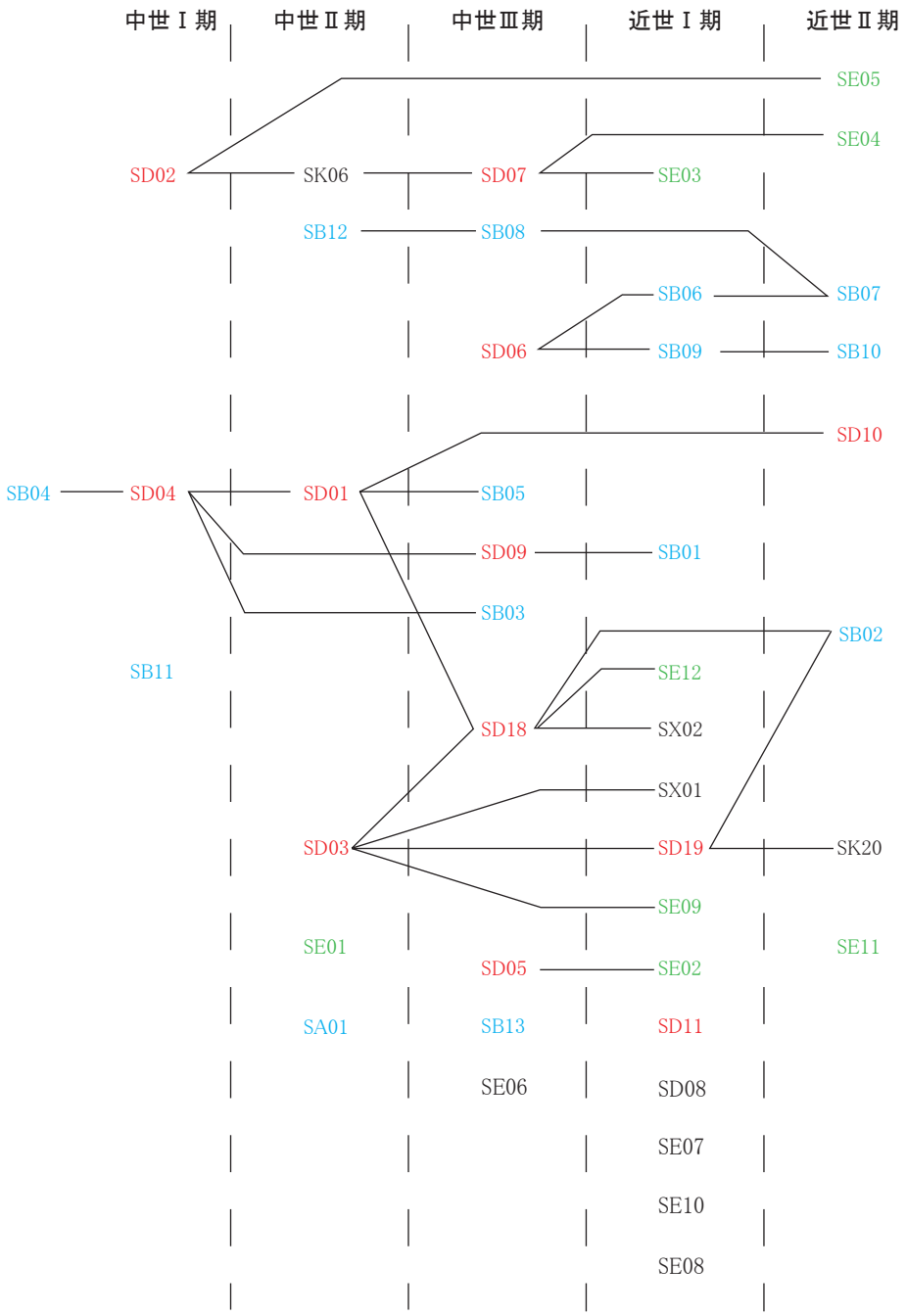
3. 遺構の変遷と年代

各調査年度の遺構変遷及び年代観についてはそれぞれで記載している。ここでは多数の遺構・遺物を検出した平成 28 年度の調査の中で、特に主要な遺構の時期別変遷についてみていく（第 223 図）。

a. 中世

中世については遺構ごとの重複関係、出土遺物から3期の変遷が考えられる。

中世Ⅰ期は調査区南部で確認された東西溝であるSD02と、調査区東部で確認されたSD04を中心とする。またSD04に先行するSB04についても時間幅の範囲内としてここに含める。さらにSD02と同様の主軸を有するSB11が含まれている。各遺構内からは年代を明確に示す遺物は出土していないが、調査区内での最古の遺物の年代観をもとに 12 世紀後半～ 13 世紀前半と考えられる。

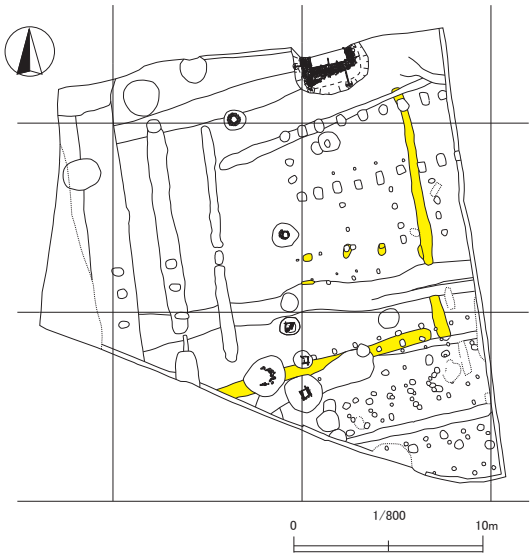


第 223 図　平成 28 年度調査区遺構相関図

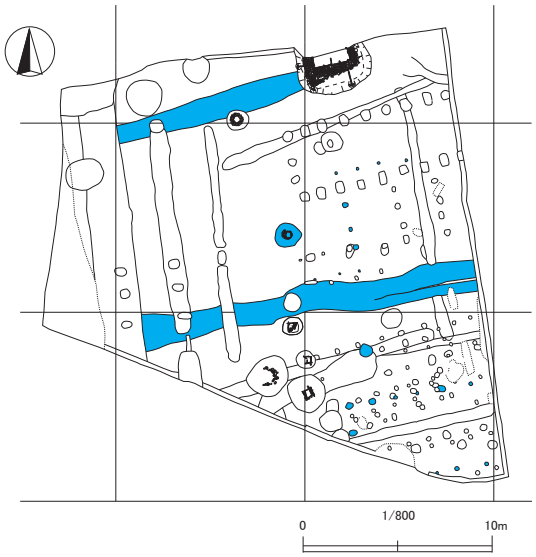
中世Ⅱ期は調査区中央部南寄りで確認された東西溝であるSD01と、調査区北部で確認された東西溝であるSD03を中心とする。また調査区中央部で確認された井戸枠に丸太を刳り貫いたものを使用しているSE01、そして調査区南東部のSB12、SK06によって構成される。SD01・03はほぼ並行して存在し、さらにともに2～3時期の作り替えがなされていることから強い区画性を有するものと考えられるが、調査区内では主屋等の存在は確認できない。むしろSD01の南側に位置するSB12は規模が大きいことから主屋であるとみられ、南北に連なって複数の区画が並立していた可能性が考えられる。中世Ⅱ期の時期についてはSD01・03、SE01の出土遺物の年代観から 13 世紀後半～ 14 世紀前半と考えられる。

中世Ⅲ期は調査区北部で確認されたSD09、調査区西部で確認された南北溝であるSD18と、規模の点からこれに接続する可能性があるSD07を中心とする。また調査区中央部で確認されたSB05、その東側で

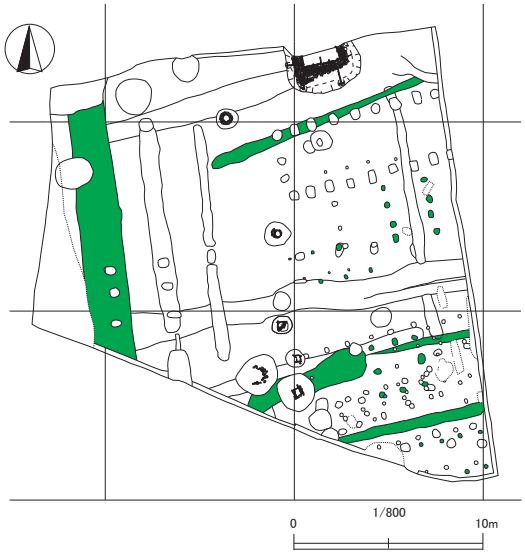
中世Ⅰ期



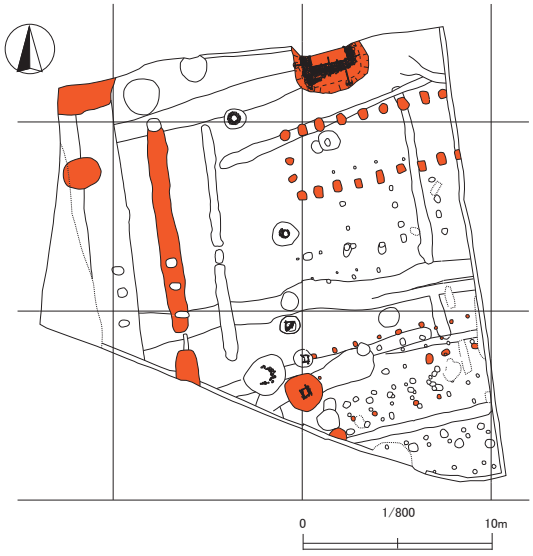
中世Ⅱ期



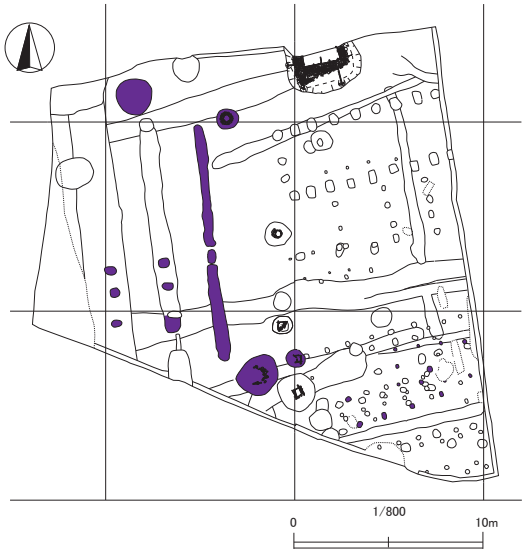
中世Ⅲ期



近世Ⅰ期



近世Ⅱ期



第 224 図　平成 28 年度調査区遺構変遷図

確認されたSB04、調査区南東部で確認されたSB08によって構成される。なお、調査区南東部で確認されたSD05・06は同じ主軸方位を有するものであり、道路側溝の可能性も考えられる。年代を明確に示す遺物は出土していないが、重複関係から中世Ⅱ期の遺構群より新しく、後述する近世遺構よりは先行することを考慮すると14世紀前半～後半と考えられる。

b. 近世

近世についても遺構ごとの重複関係、出土遺物から2期の変遷が考えられる。

近世Ⅰ期は調査区北部で確認されたSB01、調査区南東部で確認されたSB06・09、そして調査区北部で確認されたSX01、SE09を中心とする。SB01は非常に規模の大きな建物であり、当初は主屋として捉えていたが、詳細は後述するSX01に面して存在していることから倉庫的な機能も想定できる。近世Ⅰ期の時期については、SX01下層の遺物の年代観から17世紀前半頃と考えられる。なお、SX01、SE09、SD19からは17世紀後半頃の遺物が出土しているが、すべて最上層からの出土であり、機能時の年代を示すものではない。

近世Ⅱ期は調査区南西部で確認されたSB02、調査区南部で確認されたSE04・06、調査区北西部で確認されたSE11、そして中央部で確認された南北溝であるSD10を中心とする。このうちSD10は底面が凹凸し、また上場も直線的には伸びないことから垣根のような植栽の痕跡とも考えられる。近世Ⅱ期の時期については、SD10出土遺物の年代観、SB02とSD19との重複関係から17世紀前半～17世紀後半と考えられる。

4. SX01護岸施設について

平成28年度の調査では宮城県内だけではなく、全国的にも類例が少ない遺構としてSX01護岸施設が検出されている。ここでは改めて遺構の概要を述べ、さらに遺構の性格、構造的な特徴をみていきたい。

a. 遺構の概要

SX01は調査区の北側中央に位置する。確認できた遺構はまず自然堤防形成土である砂質シルト層を大きく掘削し、その後内部に礫・杭・桟木・竹を用いて東西幅4mの空間を確保している。遺構の北側は調査区外へさらに展開するために全体像は明らかではないが、これらの材を用いた区画の東西列は南北1.2m以上にわたって検出されている。遺構の時期は出土遺物から16世紀末葉～18世紀と幅があるが、17世紀後半～18世紀にかけての遺物はすべて上層からの出土であり、下層出土遺物の年代観は17世紀前半頃で占められることから、17世紀前半に機能していたと考えられる。これは254頁で詳述した地域史に照らし合わせれば、矢ノ目足軽成立以前にこの地を拝領していた佐藤氏・奥山氏の遺構と想定できる。

以下にこの遺構の構築過程について改めて述べる。なお、本稿で使用する各部位の名称は第225図の復元図に示している。

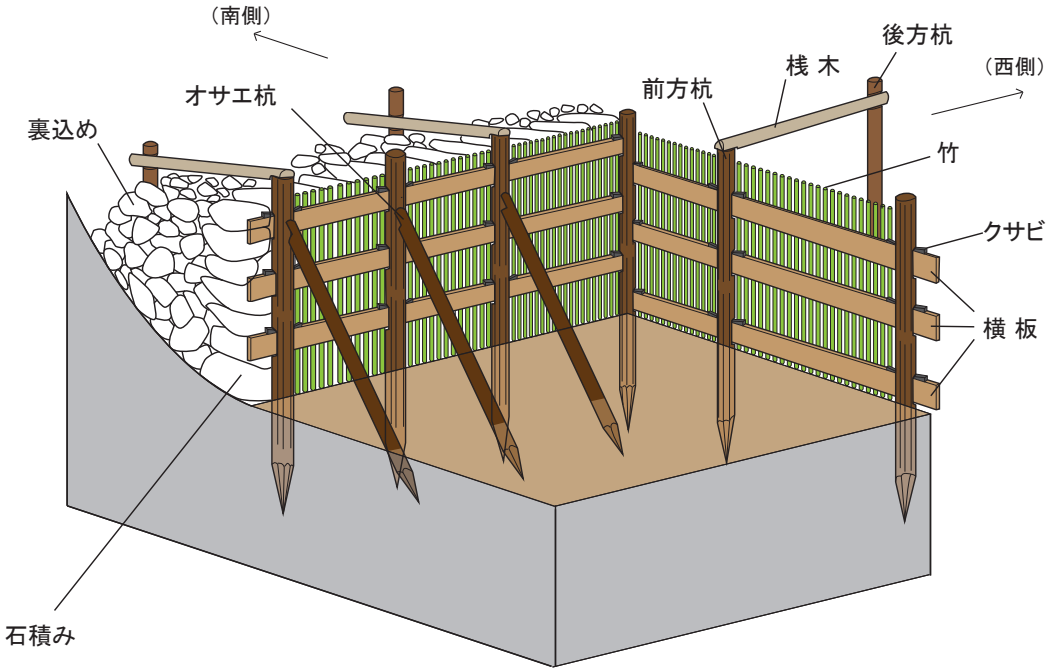
①大きく掘削した内部に施設の前面を構成するための前方杭を打つ。

②打ち込んだ前方杭のうち、特定の杭の背後（70㎝前後）に後方杭を打つ。

③前方杭のラインに長さ30～50㎝ほどの川原石をほぼ直立するように積み上げる。また石積み作業と並行して背後に裏込めを行う。

④打ち込んだ前方杭にホゾ穴を穿ち、幅12㎝ほどの横板を上・中・下の3段に設置する。この横板の固定にはクリを主な材料とするクサビを使用する。

⑤前方杭と石積みの間に長さ100㎝ほどに切りそろえた竹を縦位で密に立て並べる。



第 225 図　SX01護岸施設模式図

⑥前方杭と後方杭を連結するための部材（桟木）を固定する。この桟木の固定にあたっては、前方杭との固定にあたっては釘を用いるが、後方杭との固定には釘やホゾ穴に差し込むなどの連結は行われておらず、縄などで縛り付けていた可能性がある。なお、後方杭同士の連結は行われない。

⑦石積み・裏込めの部分に砂利混じりの土を敷き、搗き固める。

以上が完成当初の姿であったと思われる。なお、使用時に前方杭が内部に傾いた際、区画内部で補強のためのオサエ杭を斜めに打ち込むことが行われている。

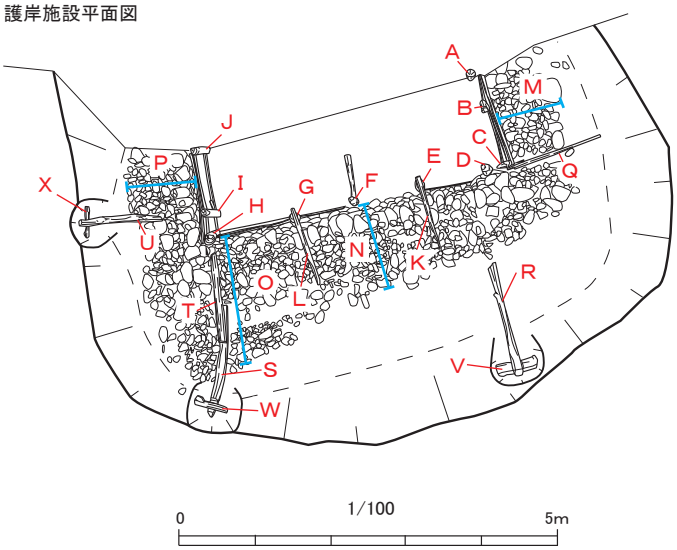
本遺構は南側の一辺が完全に姿を現しており、そこでの各部位間の規模等については第 226 図に記した。

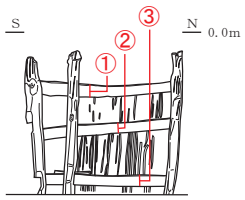
b．遺構の性格

本遺構は自然堤防形成土である砂質シルト層を大きく掘り込み、その内部に種々の構築材を用いて作られている。調査時には施設内部は恒常的に湧水が激しく、調査区の壁面がたびたび崩壊したが、遺構壁面はこれらの構築部材によって保護されており、浸食等は一切確認されていない。この事実はこれらの構築材が水流からの浸食を防ぐことを目的として作られたことを如実に裏付けるものであり、今回の報告に関しては本遺構を「護岸施設」として呼称してきた。

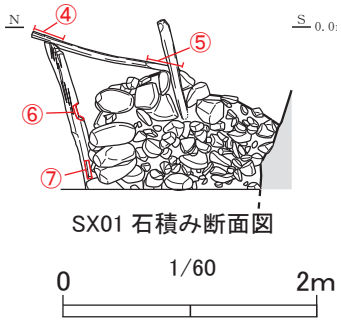
では、本遺構は何を目的として作られたのだろうか。一般的に護岸施設は河川の堤防や溜池などでみられるものである。溜池としての構築と考えると、これまで岩沼市内では西須賀原遺跡で溜池の可能性がある遺構が発見されているが、そこでは底面から壁面の立ち上がりの勾配は比較的緩やかであり、構築材を用いて護岸を行った痕跡はみられない。一方、河川の堤防という点については調査区内で南辺を検出していることから完結しているために考えられない。そこで手がかりとなるのは、平成 27 年度に実施したトレンチ調査で確認された、志賀沢川の旧河道と考えられる堆積土の存在である。この堆積土の分布から、旧流路は

SX01 護岸施設平面図





SX01 竹・横桟検出状況立面図



SX01 石積み断面図

SX01護岸施設の各寸法表(単位:cm)

区間名	長さ	区間名	長さ	部材名	長さ×幅	部材部位	長さ×幅
A-B	45	E-K	90	Q	132×6	①	15
B-C	85	G-L	80	R	152×9	②	12
D-E	40	M	80	S	148×12	③	12
E-F	90	N	125	T	118×9	④	29
F-G	90	O	174	U	110×9	⑤	38
G-H	80	P	95	V	55×12	⑥	17
H-I	45			W	46×10	⑦	21×5
I-J	85			X	42×7		

第 226 図 SX01 各部位の計測値

後方杭と桟木の状況

前方杭と桟木の固定状況

クサビによる横板の固定状況

縦位で並べられた竹材

現在の流路の北側を通り、平成 28 年度調査区の西側あたりで南に折れ曲がることが想定でき、この屈曲部分を直線的に延長すると、SX01の北側あたりに達することとなる（第 227 図）。詳細な調査は今後の課題となるが、河川の合流地点の付近に位置するという遺跡の立地条件を鑑み、現段階では河川交通を介して物資を集積するための船着き場として機能していた可能性を考慮しておきたい。

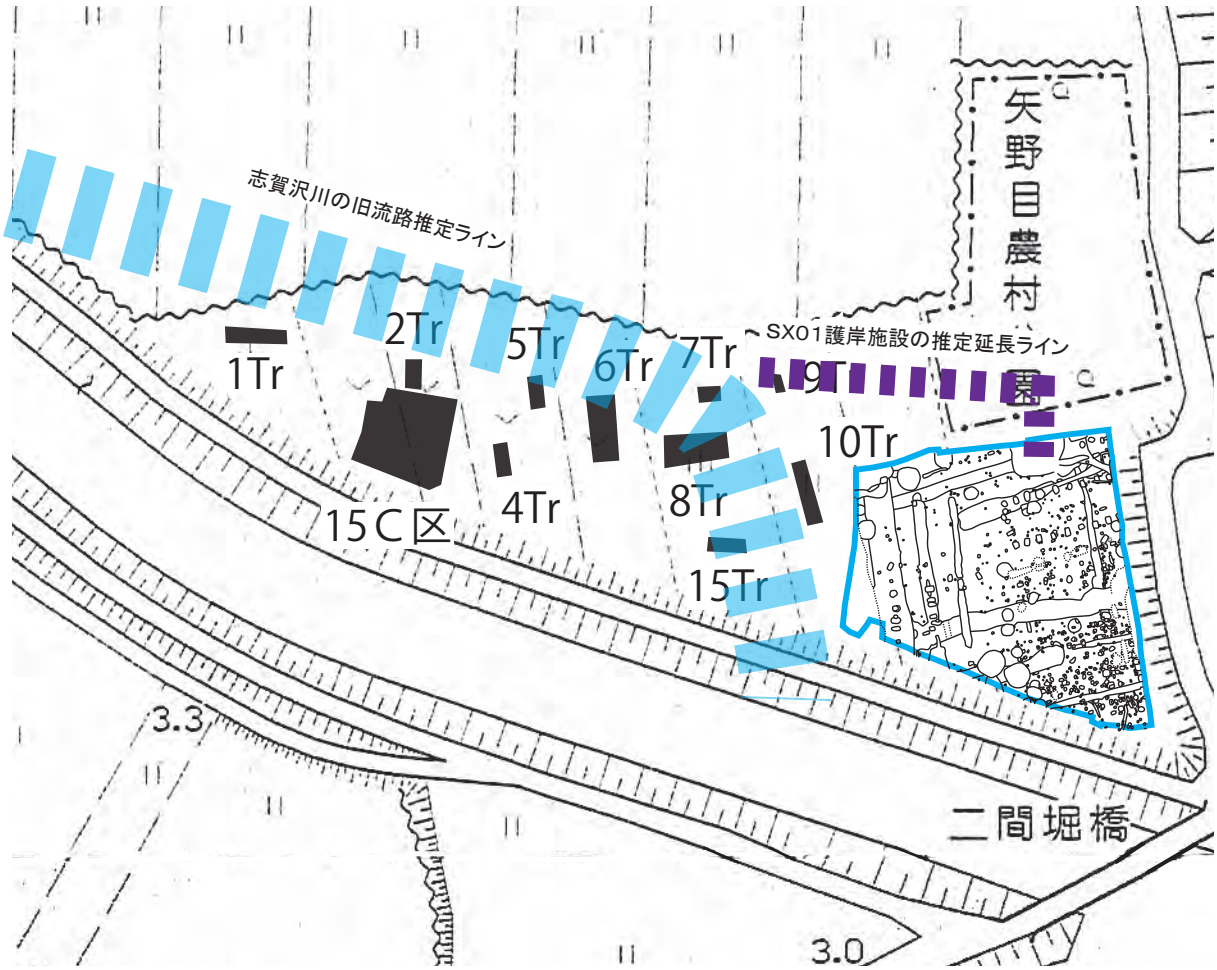
c. 構造面の特徴

SX01のような構造を有する護岸施設は、宮城県内では初めての確認事例であり、また東北地方においても管見に触れた限りでは類例は見当たらない。

SX01の構造で最も特徴的な部分は、前方杭から後方杭へかけて控えのために桟木を渡すことである。このような構造を有する護岸施設については様々な先行研究（森田 2014、畑 2010・2013、北垣 2010・2014）があり、ここではこれまで述べられている各遺跡の護岸施設の構造的な特徴を俯瞰していく。なお、これまでの先行研究や土木史料では施設の各部位名称が若干異なる。筆者は土木史料にも疎く、さらには土木工学的な知識も持ち合わせておらず、いずれの名称が妥当であるか判断できないため、ここでは基本的には前項で使用した模式図の名称を用い、この模式図に含まれていない名称については便宜的に森田氏が提唱している部位名称を用いる。

この後方へ「引っ張る」護岸工法は、鎌倉市若宮大路周辺遺跡をはじめとした中世の鎌倉市内遺跡で側溝の護岸としてみられるものが国内での初源と考えられている。

その後、17 世紀前半頃になると、このような「引っ張る」構造を持つ護岸施設は大阪城や高槻城、狭山



第 227 図　SX01 と志賀沢川旧流路推定図

池など畿内を中心に確認事例がみられる。これらの事例はいずれも本遺跡での前方杭・後方杭を桟木で連結するものであるが、後部枷杭の有無、控えのための桟木（縦貫）の本数など種々の点で相違がみられる。一方で共通する部分としては、Ⓐ前方杭（枠杭）と後方杭（控杭）と桟木（縦貫）を組み合わせて「枠」を作る、Ⓑ竹を横位に用いた「しがらみ」を施す、Ⓒ前方杭の列に枷杭を打ち込む、Ⓓ前方杭を陸側に傾けて打ち込む、といった点が挙げられる。

本遺跡地で発見されたSX01との共通点としてはⒶが該当する。また部分的な確認であるがⒸの存在も否定できない。一方で異なる点としてはⒷ・Ⓓ、及び後部枷杭がみられないことである。特にここに挙げた事例、さらにはこれらより後出となる東京都汐留遺跡の事例では、いずれも長い竹材を横位に並べる、あるいは前列の枷杭と編み込むという状況であるのに対し、SX01での竹材の用い方は「1mほどの長さに切りそろえ、縦位に並べる」というものである。そして最も大きな相違点として挙げられるのは、前方杭と後方杭、そして桟木によって構成される枠内に充填したものである。大阪城・狭山池では土砂や礫が用いられ、高槻城では俵土のうが用いられているが、本遺跡のSX01では単体でも十分な強度がある石積みが行われている。この十分な強度を必要とした背景は、単に水流から岸辺を保護するためというよりは、この箇所である種の作業を行うことを目的としていたと考えられ、前述のように河川交通の要衝に位置するという遺跡の立地条件を加味すると、物資の運搬にかかる施設としての利用が想定できる。そのためにⒹ、及び石積みを含めた前面の施設についてもほぼ直立気味に設置されたと考えられる。

以上の点を踏まえると、本遺跡で発見されたSX01は当時畿内で用いられた護岸方法を基にしながらも、使用する目的に即して独自に発展を遂げたと理解することが可能であろう。そして想像をたくましくすれば、畿内で用いられた護岸施設が大坂の陣の頃に出現していることから、本遺跡地での導入を主導したのは大坂の陣に参陣し、現地で最新の土木技術を目の当たりにした伊達家中の人物、すなわち佐藤紀伊勝信本人もしくはその近親者であったと考えられるのではないだろうか。

5. 井戸跡について

今回の調査で発見された井戸跡は、平成 26 年度調査区で3基、平成 27 年度調査区で3基、平成 28 年度調査区で 12 基の計 18 基を検出している。

位置をみると掘立柱建物跡に近接、または重複しているものが多く、ある程度のまとまりをもって分布する傾向にある。また数基が隣接しているものもあることから、屋敷地の内部で井戸を中心とした水場の位置が限定されていたことが推定できる。

規模は径3m 以上のもの、2mに満たないものの2者があり、形状は楕円形と円形を基調としている。断面形状は上部が開く漏斗状、円筒状があり、漏斗状が最も多い。

井戸枠をもつものと素掘りのものがあり、後者が多数を占める。井戸枠をもつものはすべて平成 28 年度調査区での検出である。確認できた井戸枠は湧水が激しいことから底面までの掘り下げが行えなかったものもあるが、①丸太を割り、内部を刳り貫いたのちに組み合わせて井戸枠とするもの（SE01）、②底面の四隅に隅柱を立て、横桟を渡し、その外側に葦を立て並べるもの（SE05）、③下位は円筒形状の素掘りであるが、上位にのみ隅柱・横桟を用いて井戸枠を1段作り、横桟の外縁に竹を立て並べるもの（SE07）、④底面に底板を外したやや大型の桶を設置し、その上部に石を円筒形状に積み上げるもの（SE09）、そして⑤底面付近に建築部材と思われる廃材を方形状に横位に積み上げ、その外縁に葦を立て並べるもの（SE03）など、

様々な構造のものがみられる。なお、今回確認された木枠を有する井戸跡では、隅柱と横桟の結合部分に釘は用いられておらず、隅柱に穿ったホゾ穴に横桟を通している。これらの構築された時期をみると、①については中世の時期の遺構であるが、そのほかはすべて近世段階と考えられ、17 世紀前半から後半にかけての時期とみられる。

今回確認された井戸枠を有する井戸跡のうち、市内での調査事例と照らすと②に近似するものが平成 28 年度調査区と隣接する県道亘理塩釜線改良事業に伴う調査の際に3基ほど確認されている。また石積みの井戸跡については、近世後期の段階のものが岩沼要害拝領者である古内氏家臣の屋敷跡である丸山遺跡の調査で1基確認されているが、今回のようなやや大型の桶と石積みの組み合わせは現時点では管見に触れていない。井戸枠を有する井戸と素掘りの井戸の相違、大型の掘方を有する井戸跡の構築時期など井戸跡に関する種々の課題については改めて別稿で述べたいが、井戸枠を有する井戸跡が集中して確認された箇所が矢ノ目足軽成立以前にこの地を拝領していた佐藤氏・奥山氏の時期の遺構・遺物のみが確認されている地点であることを踏まえると、近世初頭の段階ではある程度の土木技術が不可欠となる井戸枠の設置に関しては限定的な身分にある者のみが可能となるような階層性が介在していることも予想される。

6．まとめ

・下野郷館跡は、中世～近世の城館・屋敷地跡である。岩沼市下野郷字舘外・舘内に所在する。五間堀川左岸に形成された自然堤防、及び仙台平野沿岸部で顕著に発達する浜堤上に立地し、東西約 1.2 ㎞、南北 0.6 ㎞の範囲である。平成 24・25・29 年度調査区は下野郷字舘外、平成 26 ～ 28 年度調査区は字舘内所在する。

・平成 24・25 年度の調査では遺構が極めて少ないことから畑地あるいは荒蕪地的な状況であったと考えられる。また 25 年度調査のSD01より出土した近世・近代陶磁器は焼土塊や炭化材とともに出土しており、火事後の処理で一括して投棄された可能性が考えられる。

・平成 26 年度の調査では調査区の南北で遺構密度に大きな差異を生じている。この地点では複数期にわたる東西溝跡が確認されているが、この溝を境として南側は過去の洪水によって運搬されたやや軟質の土壌で形成されていたことから、地盤の軟弱な範囲を避けて生活を営んでいたことが判明した。

・平成 27 年度の調査で設定したA区は、県道亘理・塩釜線改良事業に関連して調査を実施したD区に東隣している。過去の調査では東側で遺構が希薄となることが判明していたが、A区の調査においてはさらにその傾向が強まることが明らかとなった。また志賀沢川沿いに設定したC区は、従来湿地と考えられてきた箇所においても部分的には多数の中世遺構が存在していることを確認した。なお、このC区では元禄 16 年にこの地に成立した矢ノ目足軽に係わる遺構・遺物は一切確認されておらず、中世と近世では土地利用のあり方が大きく異なることが判明した。

・平成 28 年度の調査では、最も多くの遺構・遺物が発見された。特に中世では、これまで文献史学上で当地は空白地となっていたものの、鎌倉期を中心として、小河川の結節点の地に河川交通・物流を掌握する在地勢力が存在した可能性が考えられるようになった。また近世では、出土遺物の年代観は 17 世紀代でまとまることから、矢ノ目足軽が成立する以前にこの地を拝領していた佐藤氏・奥山氏の時期の遺構と考えられ、一方で矢ノ目足軽成立以降の遺構・遺物が見られなかった背景には、旧領主が移転後も土地を利用する上で何らかの制約が存在していた可能性が伺えた。

・平成 29 年度の調査では、中世の区画溝と考えられる溝跡が発見された。出土した中世陶器には、断面や内外面を研磨に使用するものが多数みられる。この陶器の研磨使用は砥石等への転用が考えられるが、平成 29 年度調査区での出土中世陶器に占める研磨使用の割合が高く、周辺地区の性格を示す可能性がある。

引用・参考文献

愛知県史編さん委員会　2007『愛知県史　別編　窯業 2　中世・近世　瀬戸系』

愛知県史編さん委員会　2012『愛知県史　別編　窯業 3　中世・近世　常滑系』

岩沼市　1992『岩沼市土地分類調査（細部調査）報告書・現況調査編』

岩沼市教育委員会　2004『下野郷館跡』岩沼市文化財調査報告書第2集

岩沼市教育委員会　2005『鵜ヶ崎城跡－第4地点－』岩沼市文化財調査報告書第6集

岩沼市教育委員会　2009『竹駒神社境内遺跡』岩沼市文化財調査報告書第8集

岩沼市教育委員会　2010『丸山遺跡』岩沼市文化財調査報告書第9集

岩沼市教育委員会　2011『西須賀遺跡』岩沼市文化財調査報告書第 10 集

岩沼市教育委員会　2013 a『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』岩沼市文化財調査報告書第 12 集

岩沼市教育委員会　2013 b『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』岩沼市文化財調査報告書第 13 集

岩沼市教育委員会　2013 c「熊野遺跡（第2次調査）の概要」
『平成 27 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』

岩沼市教育委員会　2016 a『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
岩沼市文化財調査報告書第 14 集

岩沼市教育委員会　2016 b『高大瀬遺跡・にら塚遺跡』岩沼市文化財調査報告書第 16 集

岩沼市教育委員会　2017 a『貞山堀発掘調査報告書』岩沼市文化財調査報告書第 17 集

岩沼市教育委員会　2017 b『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
岩沼市文化財調査報告書第 18 集

岩沼市教育委員会　2017 c「岩沼市・原遺跡の調査概要」『第 43 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

岩沼市教育委員会　2018『原遺跡第2次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書第 19 集

岩沼市史編纂委員会　1984『岩沼市史』

岩沼市史編纂委員会　2015『岩沼市史　第4巻　資料編Ⅰ　考古』

岩沼市史編纂委員会　2018 a『岩沼市史　第1巻　通史編Ⅰ　原始・古代・中世』

岩沼市史編纂委員会　2018 b『岩沼市史　第9巻　特別編Ⅰ　自然編』

江戸遺跡研究会　2001『図説江戸考古学研究辞典』柏書房

大橋　康二　2004『世界をリードした磁器窯　肥前窯』シリーズ遺跡を学ぶ 005　新泉社

北垣　聰一郎 2010「近世河川の護岸堤防における付属構造物の「水制」－とくに枠木（木枠）について－」
『帝京山梨文化財研究所研究報告第 14 集』

北垣　聰一郎　2014「近世における石積み技術」『江戸の開府と土木技術』吉川弘文館

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』

佐賀県立九州陶磁文化館　1995『柴田コレクションⅣ－古伊万里様式の成立と展開－』

佐藤　洋　2002「仙台市内出土の陶磁器集成－近世－」『仙台市博物館調査研究報告第』22 号

篠田　恒男　2006『盃物語』光芸出版

関根　達人　1998「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報』10

瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　2007『窯跡出土の近代陶磁－瀬戸・美濃窯の近代 1－』

瀬戸市歴史民俗資料館　1993『明治時代の瀬戸窯業－時代を彩ったやきもの－』

芹沢　長介編　1978『切込』

芹沢　長介　1976「切込焼の碗と皿」『東北考古学の諸問題』寧楽社
仙台市教育委員会　2000『王ノ壇遺跡』仙台市文化財調査報告書第 249 集
仙台市史編さん委員会　2004『仙台市史　通史編 5　近世 3』
多賀城跡調査研究所　1983『多賀城跡』多賀城跡調査研究所年報 1983　43 次調査
太宰府市教育委員会　2000『太宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』
千葉　孝弥　1992「留守氏の館と市のにぎわい　屋敷のくらし」『よみがえる中世　7』平凡社
中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
東北中世考古学会　2003『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
東北陶磁文化館　1987『東北の近世陶磁』
東北歴史史料館　1995『仙台・堤のやきもの』
長佐古　真也　2007「続・お茶碗考－近代・現代の中形碗に飯碗を探る－」
『考古学が語る日本の近現代』ものが語る歴史 14　同成社
西田　宏子・大橋　康二　監修『別冊太陽　古伊万里』
西田　宏子・出川　哲郎 編　1997『中国の陶磁　第 10 巻　明末清初の民窯』平凡社
畑　大介　2010「引っ張り構造をもつ護岸施設の展開」『帝京山梨文化財研究所研究報告第 14 集』
畑　大介　2013「治水・利水の技術と系譜」『水の中世　治水・環境・支配』高志書院
原町市　1999『相馬のやきもの－収蔵資料を中心として－』
原町市教育委員会　1995『相馬地方の古陶』
宮城県教育委員会　1996『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書第 172 集
宮城県多賀城跡調査研究所　1985『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』
森田　克行　2014「近世をきりひらいた土木技術－胴木枠と枠工法護岸施設－」
『江戸の開府と土木技術』吉川弘文館
山野　英雄　2012『切込焼』無明社

報告書抄録

ふりがな	しものごうたてあと
書　名	下野郷館跡　−五間堀川河川改修事業に伴う発掘調査報告書−
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 20集
編集者名	川又隆央・永井三郎・武田裕光・太田昭夫
編集機関	岩沼市教育委員会
所在地	〒 989-2480　宮城県岩沼市桜 1 丁目 6-20　　TEL0223-22-1111
発行年月日	西暦 2018 年 1 0 月 26日

所収遺跡	所在地	市町村コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しものごうたてあと 下野郷館跡	いわぬまし 岩沼市 しものごう 下野郷 あざたてうち 字舘内ほか	042111	15040	38° 12′ 21″	140° 89′ 86″	20130108 〜 20170519	3,986㎡	河川改修

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
しものごうたてあと 下野郷館跡	集落跡 城館跡	鎌倉時代 江戸時代 近現代	掘立柱建物跡 掘立柱塀跡 井戸跡 護岸施設 溝跡 土坑	土師器 須恵器 陶磁器 輸入磁器 石製品 木製品 金属製品	船着き場と考えられる護岸施設を発見した。

要約

下野郷館跡は、五間堀川と志賀沢川の合流点に位置する中世から近世の城館・屋敷跡である。遺跡は、五間堀川左岸に形成された自然堤防および仙台平野沿岸部に顕著に発達する浜提上に位置する。当地の中世期は文献史学的に空白地となっていたが、本調査で多数の中世遺構と遺物が発見され、特に区画溝から中世陶器が多く出土した。鎌倉時代を中心として、小河川の結節点の地に河川交通と物流を掌握する在地勢力が存在したことが考えられるようになった。

近世は、17世紀前半〜17世紀後半の掘立柱建物跡、井戸、区画溝と護岸施設が発見された。護岸施設は石積みと杭、横板等を組み合わせて構築したもので、志賀沢川旧流路から水路を引き込み船着き場として使用したものと考えられる。17世紀に名取郡矢野目300石を領有した佐藤氏・奥山氏の時期の遺構と考えられる。

岩沼市文化財調査報告書第 20 集

下野郷館跡

－五間堀川河川改修所業に伴う発掘調査報告書－

平成 30 年 10 月 26 日
発行岩沼市教育委員会
岩沼市桜 1 丁目 6 番 20 号
生涯学習課　TEL0223-23-1111　内線 573
印刷　今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町 2-10　TEL022-288-6123